佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡

(むかいやまやつ　みしろだい　きどば　ふるうち)

— 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

1987. 3

千葉県土地開発公社
財団法人千葉県文化財センター

佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡

(むかいやまやつ　みしろだい　きどば　ふるうち)

— 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

1987.3

千葉県土地開発公社
財団法人千葉県文化財センター

木戸場遺跡A地点No.1ユニット出土石器

木戸場遺跡A地点No.2ユニット出土石器

序　　文

千葉県は、東京湾岸の臨海工業地帯に加えて、県内の内陸部においても工業の育成を図るという施策を進め、県内各地で内陸工業団地を建設してきました。佐倉市は、県内でも、東京・京葉臨海工業地帯・新東京国際空港のいずれにも近く、道路網も整備されていることから、工業団地建設にとって有利な条件を備えています。このような好条件をいかして、既にある２つの工業団地につづいて、佐倉第三工業団地の建設が、千葉県土地開発公社によって計画されました。

佐倉市は、印旛沼をはじめとする自然に恵まれ、約３万年前の旧石器時代から現代に至るまで、優れた文化を育みつづけ、市内には数多くの歴史的文化遺産が残されています。

佐倉第三工業団地の建設に当り、千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社並びに関係の諸機関は、度重なる協議を持ち、埋蔵文化財の取扱いについて慎重を期しましたが、その結果、古墳をはじめとする埋蔵文化財の一部を工業団地内に設けられる公園内に現状で保存することとし、そのほかの埋蔵文化財については、発掘調査を実施して記録として残すことになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会から財団法人千葉県文化財センターが指名を受け、昭和50年度に、そして一時中断して昭和54年度から昭和60年度まで実施しました。このたび、佐倉第三工業団地の発掘調査報告書の第４冊目として、昭和56年度から昭和60年度にわたって調査を実施した向山谷津・明代台・木戸場・古内の４遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。４つの遺跡ともそれぞれに特徴があり、興味深いところがありますが、中でも、木戸場遺跡出土の旧石器時代の石器群は、当時の東北地方との交流を物語るものとして大変注目されます。

この発掘調査報告書が、佐倉市の歴史に対する理解を深めるため、また、文化財保護思想の一層の涵養のために役立つことを願う次第です。

おわりに、発掘調査から今回の報告書刊行まで、御指導、御協力いただいた千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社をはじめとする関係諸機関並びに、調査補助員の皆様に対しまして、心から感謝の意を表します。

昭和62年３月

財団法人千葉県文化財センター

理事長　山　本　孝　也

例　　言

1．本書は、千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の第4冊目の報告書である。

2．本書に収めるのは、向山谷津・明代台・木戸場・古内の4遺跡の発掘調査報告である。各遺跡の所在地は、下記の通りである。

向山谷津遺跡　　佐倉市神門字向山谷津644
明代台遺跡A地点　佐倉市神門字向山谷津642－1
同　　上B地点　佐倉市岩富字明代台621他
同　　上C地点　佐倉市岩富字明代台2212他
木戸場遺跡A地点　佐倉市岩富字木戸場627－1他
同　　上B地点　佐倉市岩富字古内2017他
古内遺跡　　佐倉市岩富字古内2029－5他

3．発掘調査および整理作業は、千葉県土地開発公社の依頼により、千葉県教育庁文化課の要請と指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが、昭和56～61年度にわたりおこなった。

4．発掘調査は、調査部長白石竹雄（昭和56～58年度）・鈴木道之助（昭和60年度）、部長補佐中山吉秀（昭和56年度）・岡川宏道（昭和57・58・60年度）、班長阪田正一（昭和56年度）・根本弘（昭和57年度）・矢戸三男（昭和58・60年度）の指導のもとに、下記の調査研究員がおこなった。

向山谷津遺跡（遺跡コード212－021）
　昭和58年4月5日～6月30日　調査研究員　蔀淳一
明代台遺跡A地点（212－027）
　昭和58年11月17日～昭和59年1月13日　調査研究員　蔀淳一
明代台遺跡B地点（212－011II）
　昭和57年10月1日～昭和58年1月13日　主任調査研究員　矢戸三男
明代台遺跡C地点（212－028）
　昭和58年11月2日～11月29日　調査研究員　蔀淳一
　昭和60年4月2日～4月12日　調査研究員　蔀淳一
木戸場遺跡A地点（212－011）
　昭和56年6月1日～8月31日、10月5日～12月11日　主任調査研究員　矢戸三男
　昭和57年4月1日～6月10日　主任調査研究員　矢戸三男
木戸場遺跡B地点（212－012）
　昭和57年10月1日～昭和58年1月17日　調査研究員　石倉亮治・蔀淳一・服部哲則
古内遺跡（212－029）

昭和58年１月24日～２月22日　調査研究員　石倉亮治

5．整理作業は、調査部長白石竹雄（昭和57・58年度）・鈴木道之助（昭和59～61年度）、部長補佐岡川宏道（昭和57・60・61年度）・根本弘（昭和58・59年度）、班長根本弘（昭和57年度）・矢戸三男（昭和58～61年度）の指導のもとに、下記の調査研究員が中心となっておこない、それを佐倉第三工業団地事務所に在籍した調査研究員が助力した。

昭和57年度　主任調査研究員　矢戸三男

昭和58年度　調査研究員　藤崎芳樹

昭和59年度　調査研究員　田村隆

昭和60年度　調査研究員　蔀淳一

昭和61年度　調査研究員　蔀淳一

6．本書の執筆は、矢戸三男・鈴木定明・田村隆・石倉亮治・蔀淳一がおこなった。

7．本書の編集は、鈴木道之助・岡川宏道の助言のもとに、矢戸三男を中心に、執筆者が協力してあたった。

8．第１図の地図は、国土地理院著作・発行の25000分の１地図の佐倉（千葉14号－２）、酒々井（千葉10号－４）、八街（千葉11号－３）、千葉東部（千葉15号－１）を貼り合わせて縮小し作成したものである。

9．図版１の写真は、森昭氏の撮影によるものである。

10．発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁文化課をはじめとする諸機関および個人の方々ならびに調査補助員の方々の御助力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

11．本書では、同じ遺構に対して、発掘調査時につけ、記録類と遺物への注記に用いられている番号とは別に、あらたに番号をつけて報告している。本書中では、第１号土坑（001）のように、先に後者を記し、括弧内に前者を記してある（第37表参照）。

12．本書の挿図中に示す北は、公共座標北であり、高さは標高である。

13．本書の挿図の縮尺は、挿図の標題の右端の括弧内に、（２/３）のように、示した。

挿図の縮尺は、原則として、つぎの通りである。遺跡全測図（１/500・１/1000）、先土器時代遺物出土状況（１/80・１/160）、住居跡実測図（１/60）、円形周溝実測図（１/80）、土坑実測図（１/40）、石器・土製品（２/３）、縄文土器（１/３）、古銭（２/３）。古墳と方形周溝は、縮尺が揃っていない。

14．本書の遺物の挿図中で、各遺物毎に記す番号は、大きいものは本書中での番号であり、観察表中の番号と対応し、小さいものは、その遺物に注記されているものである。ただし、一部の遺物では、実際の注記小グリッド名を省略して挿図中に記している。

15．本書および本書所収の４遺跡の記録類・遺物に記すグリッド名のうち、「オ」とあるのは誤まりで、正しくは「ヲ」である。

目　　次

序　文
例　言
目　次
第1章　序　説……1
　第1節　発掘調査に至る経緯と経過……1
　第2節　4遺跡の周辺環境……2
　第3節　調査の方法と記録の方法……5
第2章　向山谷津遺跡……7
　第1節　立地と環境……7
　第2節　先土器時代……7
　第3節　縄文時代……17
　第4節　古墳時代……27
　第5節　歴史時代……27
　第6節　まとめ……40
第3章　明代台遺跡A地点……43
　第1節　立地と環境……43
　第2節　先土器時代……43
　第3節　縄文時代……46
　第4節　歴史時代……51
　第5節　まとめ……58
第4章　明代台遺跡B地点……59
　第1節　立地と環境……59
　第2節　先土器時代……59
　第3節　縄文時代……61
　第4節　古墳時代……72
　第5節　歴史時代……75
　第6節　まとめ……93
第5章　明代台遺跡C地点……97
　第1節　立地と環境……97
　第2節　先土器時代……97
　第3節　縄文時代……101
　第4節　まとめ……103

第６章　木戸場遺跡（Ａ地点・Ｂ地点）……105
第１節　立地と環境……105
第２節　先土器時代……105
第３節　縄文時代……154
第４節　歴史時代……192
第５節　まとめ……207
第７章　古内遺跡……211
第１節　立地と環境……211
第２節　先土器時代……211
第３節　縄文時代……211
第４節　歴史時代……214
第５節　まとめ……215

挿　図　目　次

第 1 図　本報告書所収の遺跡と周辺の遺跡（1/50000）……3
第 2 図　各遺跡位置図（1/8000）……4
第 3 図　グリッド分割図……6
第 4 図　向山谷津遺跡全測図（1/500）……8
第 5 図　先土器時代炉跡・遺物出土状況（1/80）……9
第 6 図　先土器石質別出土状況（1/160）……12
第 7 図　先土器時代炉跡実測図（1/10）……12
第 8 図　先土器時代出土石器(1)（2/3）……14
第 9 図　先土器時代出土石器(2)（2/3）……15
第 10 図　先土器時代出土石器(3)（2/3）……16
第 11 図　縄文土器(1)（1/3）……20
第 12 図　縄文土器(2)（1/3）……21
第 13 図　縄文時代出土石器（2/3）……23
第 14 図　古墳墳丘実測図（1/100）……24
第 15 図　古墳周溝実測図及び土層断面図（1/100・1/80）……25
第 16 図　住居跡実測図及び遺物出土状況図（1/60）……29
第 17 図　住居跡カマド実測図（1/20）……30
第 18 図　住居跡出土土器(1)（1/4）……31

第19図　住居跡出土土器(2)（1/4）……32
第20図　第1号土坑実測図（1/40）……33
第21図　第1号土坑出土土器（1/4）……34
第22図　第2・3・4号土坑実測図（1/40）……35
第23図　溝実測図（1/100）……36
第24図　古墳周辺出土土器(1)（1/4）……37
第25図　古墳周辺出土土器(2)（1/4）……38
第26図　グリッド出土土器（1/4）……39
第27図　明代台遺跡A地点全測図（1/500）……44
第28図　先土器時代石器出土状況（1/200）……45
第29図　先土器時代出土石器（2/3）……46
第30図　第1号土坑実測図（1/40）……47
第31図　第2・3号土坑実測図（1/40）……48
第32図　第4号土坑実測図（1/40）……49
第33図　縄文土器（1/3）……50
第34図　縄文時代出土石器（2/3）……51
第35図　住居跡（旧）実測図（1/60）……52
第36図　住居跡（旧）カマド実測図（1/40）……53
第37図　住居跡（旧）出土土器（1/4）……53
第38図　住居跡（新）実測図（1/60）……54
第39図　住居跡（新）カマド実測図（1/40）……55
第40図　住居跡（新）出土遺物（1/4）……55
第41図　方形周溝実測図（1/80）……57
第42図　明代遺跡B地点全測図（1/1000）……60
第43図　先土器時代出土石器（2/3）……61
第44図　第1・2号土坑実測図（1/40）……62
第45図　第3号土坑実測図（1/40）……63
第46図　縄文土器(1)（1/3）……66
第47図　縄文土器(2)（1/3）……67
第48図　縄文土器(3)（1/3）……68
第49図　縄文土器(4)（1/3）……69
第50図　縄文時代出土石器（2/3・1/2）……71
第51図　縄文時代出土土製品（2/3）……72
第52図　古墳墳丘実測図（1/120）……73

第53図　古墳実測図（1/120）……74
第54図　古墳出土須恵長頸壺（1/4）……75
第55図　第1号方形周溝実測図（1/120・1/60）……76
第56図　第1号方形周溝出土須恵長頸壺（1/4）……77
第57図　第2号方形周溝実測図（1/100・1/50）……78
第58図　第2号方形周溝出土土器（1/4）……79
第59図　円形周溝実測図（1/40）……81
第60図　第1号土坑実測図（1/80）……82
第61図　第1・3号土坑出土土器（1/4）……83
第62図　第2・3号土坑実測図（1/40）……84
第63図　第4・5号土坑実測図（1/40）……86
第64図　第6・7号土坑実測図（1/40）……88
第65図　その他遺構・グリッド出土の土器（1/4）……92
第66図　古　銭（2/3）……92
第67図　明代台遺跡C地点昭和58年度調査区域全測図（1/500）……98
第68図　明代台遺跡C地点昭和60年度確認調査区域全測図（1/500）……99
第69図　先土器時代石器出土状況（1/40）……100
第70図　先土器時代出土石器（2/3）……101
第71図　縄文土器（1/3）……102
第72図　縄文時代出土石器（2/3）……103
木戸場遺跡A地点・B地点の全測図は別図1・2である。
第73図　A地点No.1・2ユニット石器出土状況（1/80）……109
第74図　A地点No.1・2ユニット石器石質別出土状況・接合状況（1/80）……111
第75図　A地点No.1ユニット出土石器(1)（2/3）……114
第76図　A地点No.1ユニット出土石器(2)（2/3）……115
第77図　A地点No.1ユニット出土石器(3)（2/3）……116
第78図　A地点No.1ユニット出土石器(4)（2/3・1/2）……117
第79図　A地点No.2ユニット出土石器(1)（2/3）……121
第80図　A地点No.2ユニット出土石器(2)（2/3）……122
第81図　A地点No.2ユニット出土石器(3)（2/3）……123
第82図　A地点No.2ユニット出土石器(4)（2/3）……124
第83図　A地点No.2ユニット出土石器(5)（2/3）……125
第84図　A地点No.3ユニット石器出土状況（1/80）……127
第85図　A地点No.3・4・5ユニット石器石質別出土状況・接合状況（1/160）……128

第86図　A地点No.3ユニット出土石器（2/3）……130
第87図　A地点No.4ユニット石器出土状況（1/80）……133
第88図　A地点No.4ユニット出土石器（2/3）……135
第89図　A地点No.5ユニット石器出土状況（1/80）……139
第90図　A地点No.5ユニット出土石器（2/3）……140
第91図　A地点No.6ユニット石器出土状況（1/80）……143
第92図　A地点No.6・7ユニット石器石質別出土状況（1/160）……144
第93図　A地点No.6ユニット出土石器（2/3）……145
第94図　A地点No.7ユニット石器出土状況（1/80）……147
第95図　A地点No.7ユニット出土石器（2/3）……148
第96図　B地点第1ユニット石器出土状況（1/80）……150
第97図　B地点第2ユニット石器出土状況（1/80）……152
第98図　B地点先土器時代出土石器（2/3）……153
第99図　縄文土器(1)（1/3）……160
第100図　縄文土器(2)（1/3）……161
第101図　縄文土器(3)（1/3）……162
第102図　縄文土器(4)（1/3）……163
第103図　縄文土器(5)（1/3）……164
第104図　縄文土器(6)（1/3）……165
第105図　縄文土器(7)（1/3）……166
第106図　縄文土器(8)（1/3）……167
第107図　縄文土器(9)（1/3）……168
第108図　縄文土器(10)（1/3）……169
第109図　縄文土器(11)（1/3）……170
第110図　縄文土器(12)（1/3）……171
第111図　縄文土器(13)（1/3）……172
第112図　縄文土器(14)（1/3）……173
第113図　縄文土器(15)（1/3）……174
第114図　縄文土器(16)（1/3）……175
第115図　縄文時代出土石器(1)（2/3）……187
第116図　縄文時代出土石器(2)（2/3）……188
第117図　縄文時代出土石器(3)（1/2）……189
第118図　縄文時代出土石器(4)（1/2）……190
第119図　縄文時代出土土製品（2/3）……191

第120図　方形周溝実測図（1/80）……193
第121図　方形周溝周溝覆土断面図（1/40）……194
第122図　A地点出土古銭（2/3）……195
第123図　第1号住居跡実測図（1/60）……197
第124図　第1号住居跡カマド実測図（1/40）……198
第125図　第1号住居跡出土土器（1/4）……198
第126図　第2号住居跡実測図（1/60）……200
第127図　第2号住居跡カマド実測図（1/40）……201
第128図　第2号住居跡出土土器（1/4）……201
第129図　第1号円形周溝実測図（1/80）……202
第130図　第2号円形周溝実測図（1/80）……203
第131図　塚実測図（1/100）……204
第132図　グリッド出土土器及びその他の土器（1/4）……205
第133図　B地点出土古銭（2/3）……207
第134図　古内遺跡全測図（1/1000）……212
第135図　先土器時代出土石器（2/3）……213
第136図　縄文土器（1/3）……213
第137図　縄文時代出土石器（2/3）……214
第138図　古　銭（2/3）……215

別　図　目　次

別図1　木戸場遺跡A地点全測図（1/1000）
別図2　木戸場遺跡B地点全測図（1/1000）

表　目　次

第1表　先土器時代石器観察表（以下向山谷津遺跡）……13
第2表　縄文土器観察表……21
第3表　縄文時代石器観察表……24
第4表　住居跡出土土器観察表……28
第5表　第1号土坑出土土器観察表……34

第6表　古墳周辺出土土器観察表……38
第7表　グリッド出土土器観察表……40
第8表　先土器時代石器観察表（以下明代台遺跡A地点）……45
第9表　縄文土器観察表……50
第10表　住居跡（旧）出土土器観察表……52
第11表　住居跡（新）出土土器観察表……56
第12表　縄文土器観察表（以下明代台遺跡B地点）……69
第13表　第2号方形周溝出土土器観察表……80
第14表　炭焼穴一覧表……91
第15表　古銭観察表……93
第16表　先土器時代石器観察表（以下明代台遺跡C地点）……101
第17表　縄文土器観察表……102
第18表　A地点No.1ユニット石器観察表（以下木戸場遺跡）……113
第19表　A地点No.2ユニット石器観察表……120
第20表　A地点No.3ユニット石器観察表……129
第21表　A地点No.4ユニット石器観察表……134
第22表　A地点No.5ユニット石器観察表……141
第23表　A地点No.6ユニット石器観察表……142
第24表　A地点No.7ユニット石器観察表……146
第25表　B地点第1ユニット石器観察表……150
第26表　B地点第2ユニット石器観察表……151
第27表　B地点ユニット外出土先土器時代石器観察表……154
第28表　縄文土器観察表……159
第29表　縄文時代石器観察表……186
第30表　A地点出土古銭観察表……196
第31表　第1号住居跡出土土器観察表……198
第32表　第2号住居跡出土土器観察表……199
第33表　グリッド出土土器及びその他の土器観察表……206
第34表　B地点出土古銭観察表……206
第35表　縄文土器観察表（以下古内遺跡）……213
第36表　古銭観察表……214
第37表　4遺跡遺構番号対照表……216

図　版　目　次

巻頭図版　木戸場遺跡Ａ地点出土先土器時代石器
図版１　遺跡遠景
図版２　向山谷津遺跡　全　景・近　景
図版３　向山谷津遺跡　先土器時代遺構
図版４　向山谷津遺跡　古　墳
図版５　向山谷津遺跡　住居跡
図版６　向山谷津遺跡　土　坑（第１・２号）
図版７　向山谷津遺跡　土　坑（第３・４号）
図版８　向山谷津遺跡　先土器時代石器・縄文土器
図版９　向山谷津遺跡　縄文土器・縄文時代石器・住居跡出土土器
図版10　向山谷津遺跡　住居跡出土土器
図版11　明代台遺跡Ａ地点　全　景
図版12　明代台遺跡Ａ地点　縄文時代土坑（第１・２号）
図版13　明代台遺跡Ａ地点　縄文時代土坑（第３・４号）
図版14　明代台遺跡Ａ地点　住居跡・方形周溝
図版15　明代台遺跡Ａ地点　各時代出土遺物
図版16　明代台遺跡Ｂ地点　遠　景・近　景
図版17　明代台遺跡Ｂ地点　縄文時代土坑（第１・２号）
図版18　明代台遺跡Ｂ地点　縄文時代土坑（第３号）・包含層
図版19　明代台遺跡Ｂ地点　古　墳
図版20　明代台遺跡Ｂ地点　方形周溝（第１号）
図版21　明代台遺跡Ｂ地点　方形周溝（第２号）
図版22　明代台遺跡Ｂ地点　円形周溝・土　坑（第１号）
図版23　明代台遺跡Ｂ地点　土　坑（第２・３号）
図版24　明代台遺跡Ｂ地点　土　坑（第４・５号）
図版25　明代台遺跡Ｂ地点　土　坑（第６・７号）
図版26　明代台遺跡Ｂ地点　溝（Ｍ１・４）
図版27　明代台遺跡Ｂ地点　溝（Ｍ６～９）
図版28　明代台遺跡Ｂ地点　先土器時代石器・縄文土器
図版29　明代台遺跡Ｂ地点　縄文土器
図版30　明代台遺跡Ｂ地点　縄文時代石器・古墳出土土器・方形周溝出土土器
図版31　明代台遺跡Ｂ地点　方形周溝出土土器・炭焼穴出土磁器

図版32　明代台遺跡Ｃ地点　昭和58年度分全景・先土器時代遺物出土状況
図版33　明代台遺跡Ｃ地点　溝・昭和60年度分全景
図版34　明代台遺跡Ｃ地点　先土器・縄文時代遺物
図版35　木戸場遺跡Ａ地点　全　景
図版36　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代（No.１ユニット石器出土状況）
図版37　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代（No.２ユニット石器出土状況）
図版38　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代（No.３・４ユニット石器出土状況）
図版39　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代（No.５・６ユニット石器出土状況）
図版40　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代（No.７ユニット石器出土状況）、縄文時代（包含層遺物出土状況）
図版41　木戸場遺跡Ａ地点　方形周溝・溝（Ｍ１・３・４）
図版42　木戸場遺跡Ｂ地点　先土器時代（第１・２ユニット遺物出土状況）
図版43　木戸場遺跡Ｂ地点　住居跡（第１・２号）
図版44　木戸場遺跡Ｂ地点　円形周溝（第１・２号）
図版45　木戸場遺跡Ｂ地点　塚
図版46　木戸場遺跡Ｂ地点　溝
図版47　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代石器（No.１ユニット）
図版48　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代石器（No.２ユニット）
図版49　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代石器（No.３・４ユニット）
図版50　木戸場遺跡Ａ地点　先土器時代石器（No.５～７ユニット）
図版51　木戸場遺跡Ｂ地点　先土器時代石器
図版52　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(1)
図版53　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(2)
図版54　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(3)
図版55　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(4)
図版56　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(5)
図版57　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(6)
図版58　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(7)
図版59　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(8)
図版60　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(9)
図版61　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(10)
図版62　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(11)
図版63　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文土器(12)・縄文時代石器(1)
図版64　木戸場遺跡Ａ・Ｂ地点　縄文時代石器(2)

図版65　木戸場遺跡Ｂ地点　住居跡・グリッド出土土器
図版66　古内遺跡　溝
図版67　古内遺跡　先土器・縄文時代遺物

第1章　序　　説

第1節　発掘調査に至る経緯と経過

本書で報告する4遺跡の発掘調査に至る経緯と経過を、まとめてここに述べる。ここまで述べてこなかったが、本書で報告する4遺跡の呼称には、発掘調査時のものと異なるものが、いくつかある。異なるものについては、遺跡の名称のあとの括弧内に旧称を示した。

1．向山谷津遺跡（212—021）

昭和58年度の事業計画の三者協議段階において、千葉県土地開発公社より工業団地内の支線道路の建設の必要が生じ、その工事を優先しなければならないとして、支線道路にかかる本遺跡の調査が要請された。協議をおこなった結果、千葉県土地開発公社の要請を受け入れ、昭和58年度当初に発掘調査を実施することとなった。

こうした経緯により、昭和58年4月1日から6月28日の期間で、古墳1基と包蔵地2000m²の発掘調査を実施した。なお、検出した住居跡の一部が工業団地区域外へのびていたが、千葉県土地開発公社と地主である小出濱造氏の御協力と御理解を得て完全に調査することができた。ここに記して感謝の意を表する。

2．明代台遺跡

(a)A地点（旧称向山谷津遺跡または向山谷津II遺跡…212—027）

昭和58年度下半期の事業計画見直し段階において、千葉県土地開発公社より、工業団地造成計画の一部設計変更により本遺跡に対し造成の必要性が生じたとして、調査の要請が出された。協議をおこなった結果、千葉県土地開発公社の要請を受け入れ、下半期事業として組み込まれた。発掘調査は、昭和58年11月30日から昭和59年1月17日の期間で1200m²について実施した。

(b)B地点（旧称木戸場II遺跡…212—011II）

昭和57年度下半期事業計画見直しの段階において、千葉県土地開発公社より造成工事の関係から本遺跡の調査の要請がなされた。協議をおこなった結果、千葉県土地開発公社の要請を受け入れ、発掘調査を実施することとした。発掘調査は、昭和57年10月1日から昭和58年1月13日の期間で、古墳1基と包蔵地4200m²について実施した。

(c)C地点（212—028）

昭和58年度の下半期事業計画見直しの段階において、千葉県土地開発公社より、工業団地内の準幹線道路が県道佐倉一八街線に取付く交差点部分において、県道を拡幅する必要性が生じたため、この部分にかかる本遺跡の調査要請があり、協議をおこなった結果、千葉県土地開発公社の

要請を受け入れ、下半期事業として組み込まれた。発掘調査は、昭和58年11月２日から11月29日の期間に、540㎡に対して実施した。また昭和60年度事業計画策定で工業団地に供給する電気の変電所の建設のための調査が要請され、協議をおこなった結果をうけて、昭和60年４月１日から４月12日の期間で1450㎡の確認調査を実施した。

３．木戸場遺跡

(a)A地点（旧称木戸場遺跡または木戸場Ⅰ遺跡…212—011）

昭和56年度事業において、上層について確認調査が計画され、昭和56年６月１日から８月31日の期間で実施した。この後、千葉県土地開発公社から、造成工事に必要な山砂採取のため遺跡中の台地東側部分の掘削が計画された。確認調査では、この付近には縄文時代早期の包含層が存在したことから、発掘調査を実施することとなり、昭和56年10月５日から12月11日の期間に4500㎡について実施した。

昭和57年度事業の計画において、紆余曲折の結果、昭和56年度の確認調査の結果に基き、３地点1050㎡の発掘調査実施の指示がなされた。これにより昭和57年４月１日から６月10日の期間で発掘調査を実施した。

(b)B地点（旧称古内遺跡…212—012）

A地点に隣接する南側を指す。用地買収等の関係から昭和57年度事業として計画された。昭和57年度から上層・下層の確認調査を実施し、その結果に基き、発掘調査の指示が出されることとなり、本地点については、上層５％（このうち下層４％）の確認実施指示がなされた。これにより、昭和57年10月１日から昭和58年１月17日の期間で確認調査、発掘調査を実施した。

４．古内遺跡（212—029）

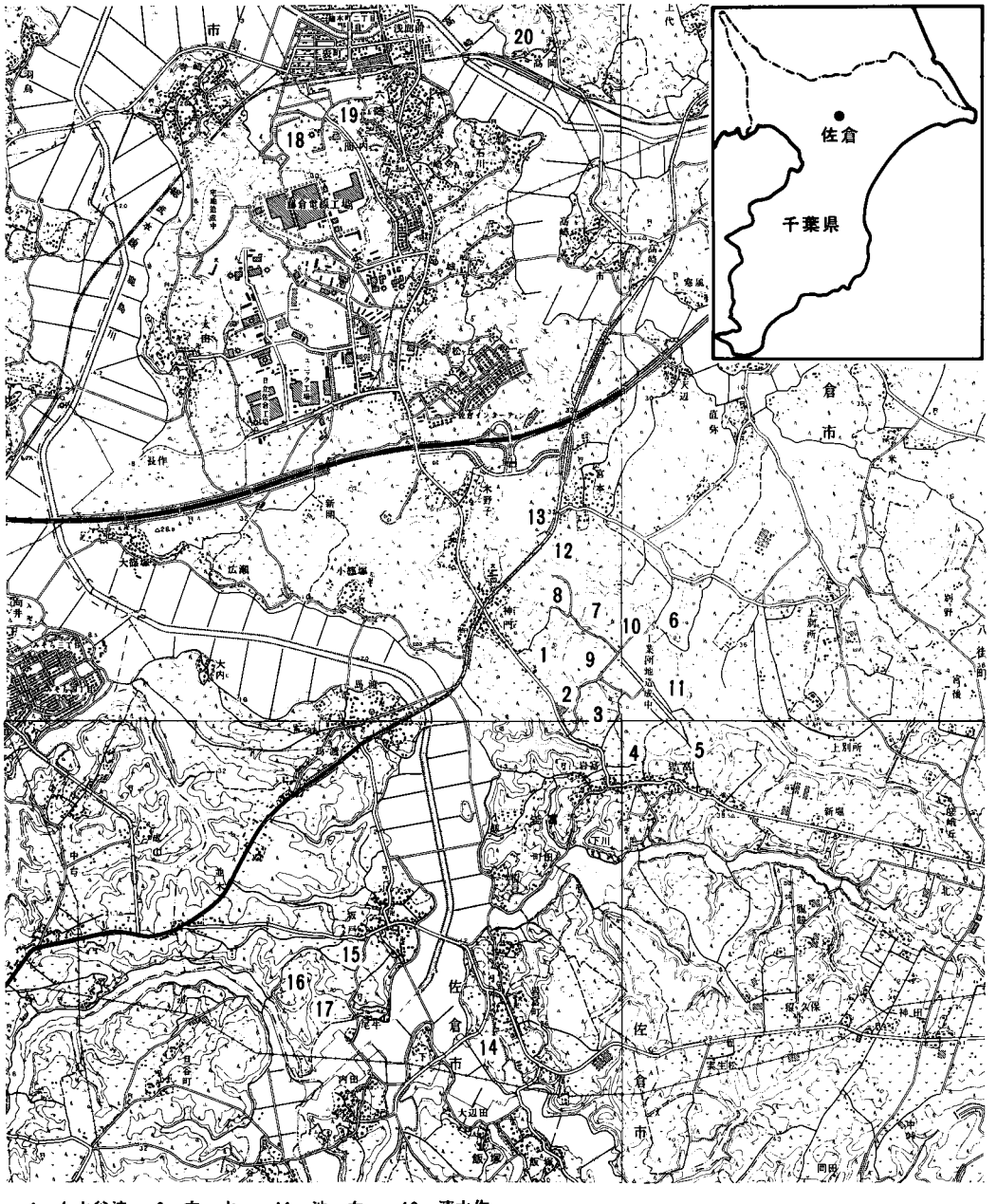
昭和58年度の下半期事業の見直し段階において、千葉県土地開発公社から、工業団地の一部設計変更により造成の必要が生じたとして、本遺跡の発掘調査の要請がなされた。協議をおこなった結果、千葉県土地開発公社の要請を受け入れ、昭和59年１月24日から２月23日の期間で、1800㎡について発掘調査を実施した。

第２節　４遺跡の周辺環境

佐倉第三工業団地の自然環境及び歴史的環境については、すでに刊行された星谷津・立山・タルカ作の３遺跡の報告書に述べられているところであり、簡単に触れることにしたい。

佐倉市は、千葉県の北部に位置し、下総台地上に展開する。市の北端には印旛沼があり、大小の河川が、台地を開析して流れて込んでいる。

佐倉第三工業団地は、佐倉市の南東部にあって、印旛沼に注ぐ北の高崎川と西の鹿島川のそれ



第1図　本報告書所収の遺跡と周辺の遺跡

1. 向山谷津(021)　2. 明代台A(027)　3.明代台B(011II)　4. 明代台C(028)
5. 木戸場A(011I)　6.木戸場B(012)　7.古内(029)　8. 向原　9. 池向

第2図　各遺跡位置図

ぞれの支流がつくった谷に囲まれた台地につくられている（第1図の「工業団地造成中」のところ)。台地は、浅い谷津によって、開析され、細分されている。

本報告書の4遺跡は、佐倉第三工業団地の南の縁に位置し、県道佐倉一八街線に沿っている(第1・2図)。発掘調査をおこなった範囲は、工業団地の外縁及び、外周緑地帯の内側までであるが、遺跡は、工業団地の外へ広がっていることが、後述する発掘調査の成果からみて、確実と思われる。

4遺跡の北側には、東から西へ下っていく比較的大きな谷津があり、その谷津に注ぐ浅い谷によって区切られたほぼ北向きの4つの舌状台地の上に、それぞれ4つの遺跡がある。西から東へ向山谷津・明代台・木戸場・古内の順である。

4遺跡それぞれの詳しい立地と環境については、遺跡毎に節を立てて後述しているので、それを参照されたい。ここでは、これ以上述べない。

さて、視点をかえて、4遺跡の周辺の遺跡をみてみよう。

第1図の5・6・7は、すでに報告書の刊行された、工業団地内の星谷津・立山・タルカ作の3遺跡である。本報告書の4遺跡と大きな谷津をはさんで北側に位置する遺跡としては、9の向原、11の池向の大きな遺跡がある。8は、本報告書につづく佐倉第三工業団地の第5冊目の報告書で報告される腰巻遺跡である。

本報告書の4遺跡及び上述の遺跡と10の大作遺跡は、ともに、弥生時代を除く先土器時代から歴史時代までの遺跡である。佐倉第三工業団地には、この他に、松向作・栗野・南広・六拾部と、同じような時期の遺跡が北側の縁にある。

12の六拾部遺跡のうち、工業団地外の部分は、佐倉市により調査され、報告書が刊行されている。歴史時代の集落である。13の高崎新山遺跡も、一部が、財団法人印旛郡市文化財センターにより調査され、報告書が刊行の予定と聞く。

14～20の遺跡は、本報告書の4遺跡の遺構の重要な部分を占める古墳時代と歴史時代のものがみられる周辺の主な遺跡をあげたものである。

上述の遺跡についての文献を最後に掲げておくので、参考にされたい。

・千葉県土地開発公社・財団法人千葉県文化財センター（1978年）『星谷津遺跡』

・同　　上（1983年）『佐倉市立山遺跡』

・同　　上（1985年）『佐倉市タルカ作遺跡』

・佐倉市教育委員会（1986年）『六拾部遺跡発掘調査報告書』

・同　　上（1983年）『岩富漆谷津・太田宿』

・佐倉市坂戸遺跡調査会（1986年）『坂戸遺跡』

・佐倉市大崎台B地区遺跡調査会（1985年）『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』

・佐倉市棒作遺跡調査会（1985年）『棒作遺跡発掘調査報告』

第3節　調査の方法と記録の方法

調査にあたって、先土器時代の遺構については、100㎡に1つの2m×2m＝4㎡の試掘坑を設ける形で確認調査を行い、石器の出土した試掘坑について、周囲へ拡張して石器集中の存否と広がりを本調査していくという方法をとっている。

縄文時代以降の遺構については、100㎡に5㎡ないし10㎡の試掘トレンチを入れて確認調査をおこなうか、最初から表土を重機によって除去するかのどちらかの方法で、その存在をつかまえた上で、本調査していくという方法をとっている。

遺構の番号は、縄文時代以降の遺構は、年代・性格のちがいに関係なく、調査した順序に従って、001から番号をふっている。したがって、年代の前後と遺構番号の前後は合っていない。また、遺構番号の欠番もある。

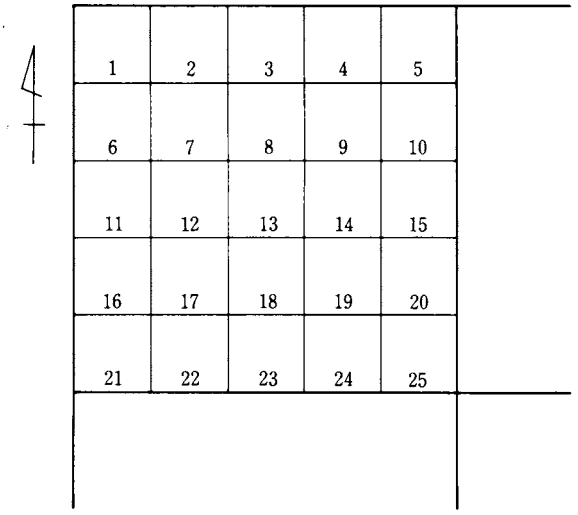
遺構の所在位置、遺物の出土位置の記録にあたっては、佐倉第三工業団地全域を覆うグリッド網にのっとっておこなった。縦を公共座標の南北に、横を公共座標の東西に合わせて、公共座標の50mの刻みに合わせて、50m×50mの大グリッドを設定し、西から東へイ・ロ・ハ・ニ……とし、北から南へ1・2・3・4……として列を設定して、イロハと数字の組み合せで、大グリッドの名称を決めている。

こうしてつくった大グリッドの中は、第3図のように10m×10mの25個の中グリッドに分けている。数字は、大グリッド内での中グリッドの名称である。グリッド単位で遺物をあげている場合、多くは、この中グリッド単位である。

場合により、中グリッドの中をさらに2m×2mの25個の小グリッドに分けている場合もあるが、その際の小グリッドの名称のつけ方は、中グリッドと同じく、第3図の通りである。

遺物番号の表示で、レ28－1－6とあるのは、大グリッド名－中グリッド名－中グリッド単位での番号である。カ26－8－11－20－1とあるのは、大グリッド名－中グリッド名－中グリッド中の小グリッド11から20にかかるトレンチ－トレンチ単位での番号である。

必要と思われる挿図中には公共座標値、中グリッド名を記してあるので、参照されたい。



第3図　グリット分割図　他

第2章　向山谷津遺跡

第1節　立地と環境

向山谷津遺跡は、佐倉市神門字向山谷津644に所在した。佐倉第三工業団地の南西の端にあたる。

遺跡の立地する台地は、東へ向って突き出した小さな舌形のもので、北側と南側に東へ向ってひらく小さいが比較的深い谷がある。突き出したところの先端は、北へ向って下る幅50m前後の幅の広い谷津に面する。この広い谷津は、印旛沼へ通じている（第1図）。

今回、調査をおこなったのは、遺跡のうち南のはずれである。台地の平坦部の南のはずれから南斜面にかけてである。2,000㎡の広さである。向山谷津遺跡は、第4図で明らかなように今回の調査範囲の北の端で遺構がみつかっていることから、今回の調査区域の北側へも広がっている可能性が高い（図版2上）。

今回の調査区域のうち最も高い台地平坦部の標高は35.00mである。これに対して台地の下の水田面の標高は19.00～19.50mである。両者の比高差は15.50～16.00mである。

調査区域の原状は山林であった（図版2）。

第2節　先土器時代

先土器時代の遺構は、石器集中、炉跡と思われる焼土遺構、炭化物片の集中の3つがみつかった。3つの遺構とも関東ロームのⅧa層とⅧb層の境目付近の時期のものと思われる。互いに重複しており、今回の調査区域の西端にあたる台地の平坦面上に集まる。

石器集中は、27点からなるが、尖頭石器や彫器、削器といった製品のほかに、石核・剝片が含まれることから、石器集中の中で石器の製作がおこなわれたことがわかる。石器集中は、石器の分布が集中の東北側に片寄っていることから、調査の及んでいない工業団地の敷地の外にあたる今回の調査区域の北側の山林の中にまで広がっている可能性が高い（第4図）。

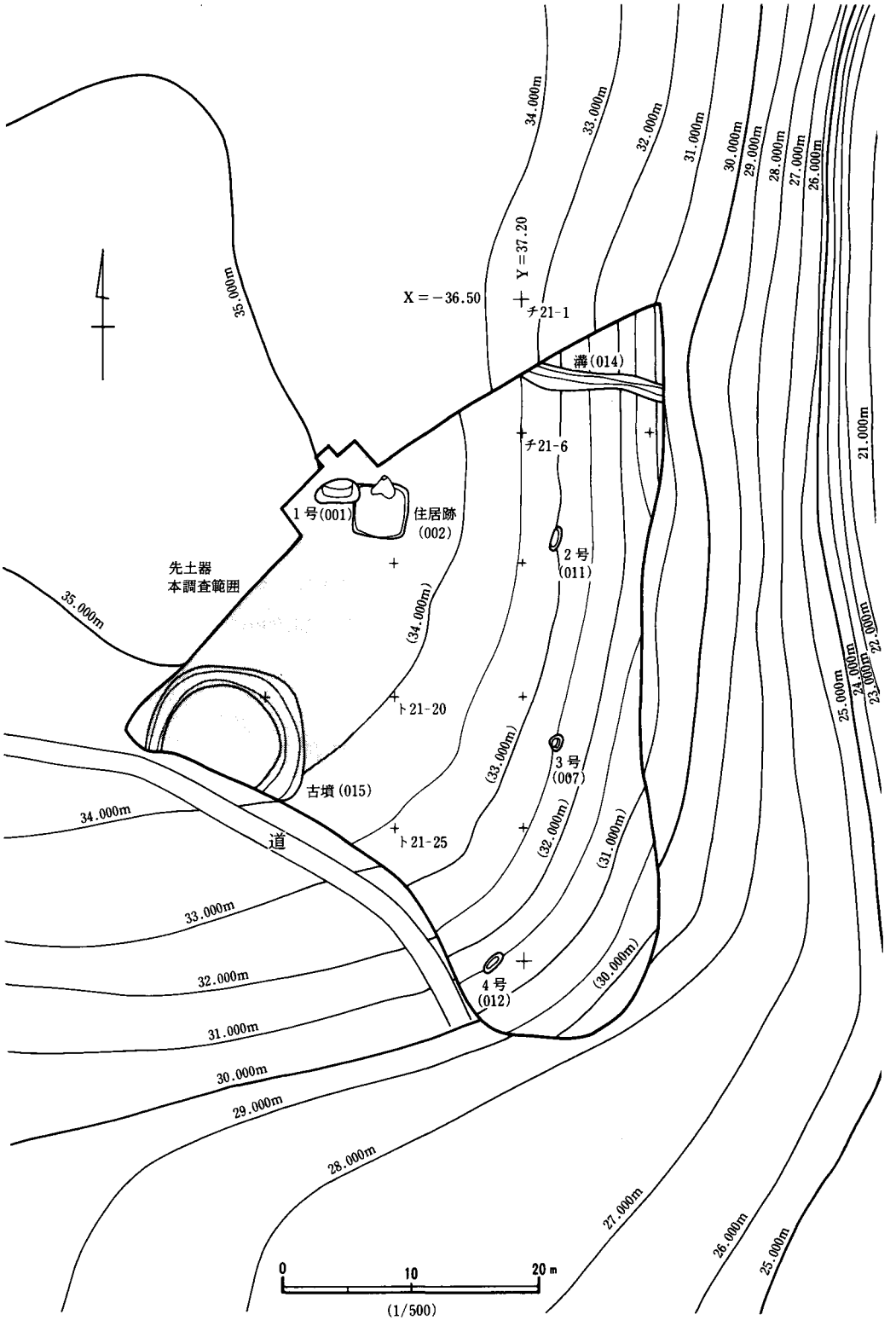
炉跡と思われる焼土遺構は、石器集中の南のはずれにみつかった。囲むようにして石器が出土している。ただし、焼土遺構の南側では石器は出土していない。

焼土遺構の周辺から、東側を中心に、炭化物片が集中して多数みつかった。

i 石器集中と石器（第5～10図、第1表、図版3・8）

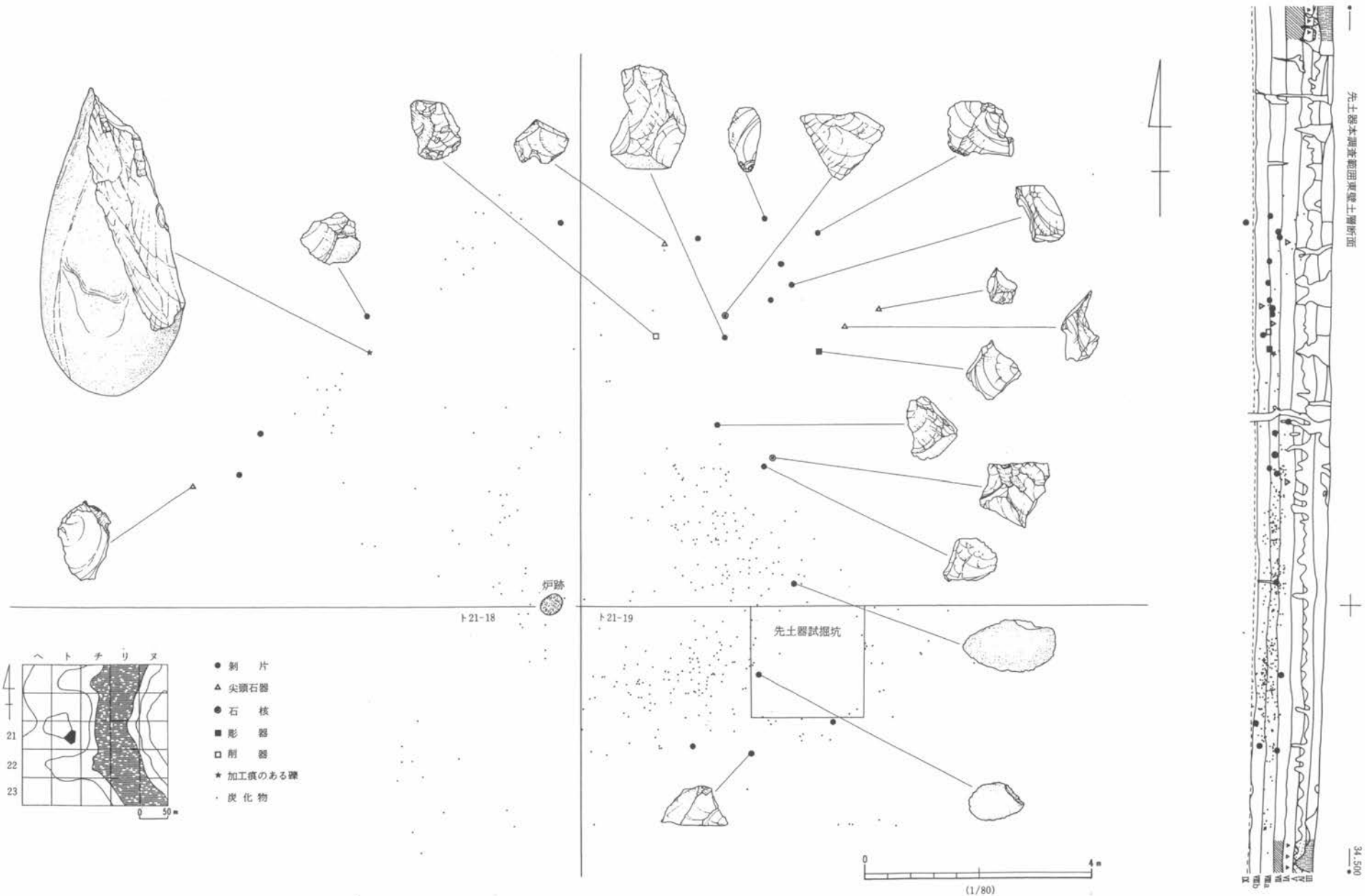
範囲は直径10m～12mである。27点からなる。上述のように、北側へ広がっている可能性が高い。南西側では全く石器は出土しなかった。

集中を構成する石器の器種別の点数はつぎの通りである。



( ) 内は、ソフトローム層面の高さ

第4図　向山谷津遺跡全測図（021）



第5図　先土器時代炉跡・遺物出土状況

尖頭石器　4（メノウａ２、メノウｂ２）

彫　　器　1（メノウａ）

削　　器　1（チャートｂ）

礫　　器　1（砂　岩）

石　　核　2（玄武岩ｂ、メノウａ）

剝　　片　18（玄武岩ａ９、玄武岩ｂ４、玄武岩ｃ１、メノウａ３、チャートａ１）

器種別の石器の分布をみると、製品、石核は、石器集中の中でも石器の集まっている北東部分に多い。

石器の石質別の点数はつぎの通りである。

玄武岩　15（ａ９、ｂ５、ｃ１）

メノウ　９（ａ７、ｂ２）

チャート２（ａ１、ｂ１）

砂　岩　１

石質別の石器の分布は、第６図の通りである。玄武岩ｂの石器がかなり集まって出土しているが、玄武岩ａ、メノウａの石器は散らばった様子で出土している。

ここで細かく分けた石質のそれぞれの特徴はつぎの通りである。

玄武岩ａ　表面は灰色をしている。割れ口を見ると光沢のある漆黒色を呈し、貝殻状の断口が明瞭に認められる。

玄武岩ｂ　黒味が強い暗灰色をしている。ａにくらべてやや粒子の粗い感じがする。割り口は漆黒色。

玄武岩ｃ　ｂにくらべてさらに粒子が粗い。色も暗い。

メノウａ　透明感のある白色を呈し、少量の夾雑物が混じる。チャートに近い。

メノウｂ　美しいアメ色の濃淡が層状に認められる典型的なメノウである。

チャートａ　濃い緑色を呈し、白色の縞目が入いる。

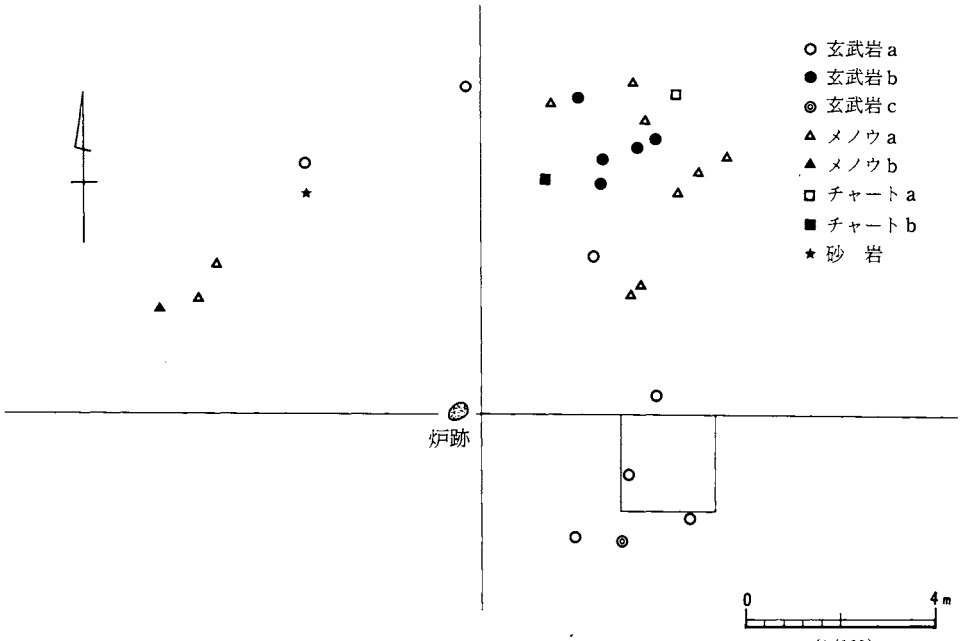
チャートｂ　茶褐色の節理面が平行して何枚もはしる。色調は暗灰色で、節理面に沿う不規則な剝離痕が認められる。

砂　　岩　緑色で硬質である。熱変成を受け、片岩状の断口を示す。

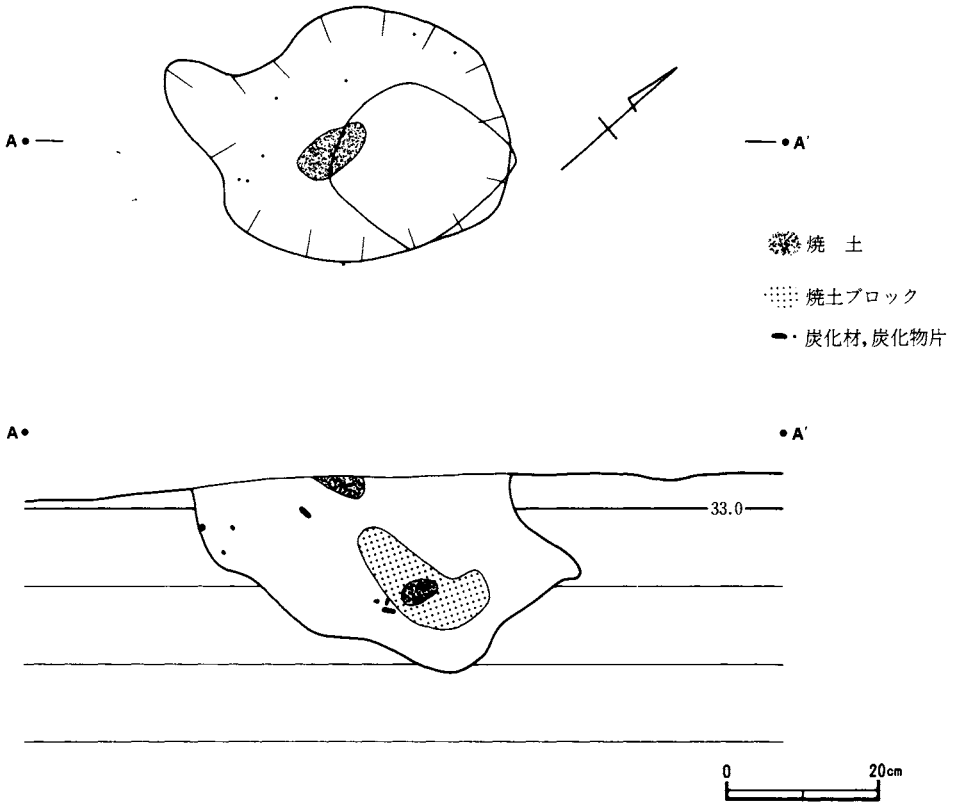
個々の石器はつぎのようである。

尖頭石器（第８図１～４、図版８）

１は、爪形の剝片を素材としている。素材とした剝片の打面部は、はじけて残っていない。二次加工は、はじけた打面部に集中しておこなわれていて、腹面では左右両方の側縁から、背面では左側縁から、極めて細かい剝離が加えられ、鋭い尖頭部がつくり出されている。２は、断面三角形の不整形の剝片を素材としている。尖頭部への二次加工は、はっきりとしないが、尖頭部の先端に微細な剝離痕がみられる、３は、縦長五角形の剝片の一端に、やはり微細な剝離を加えて



第6図　先土器石質別出土状況



第7図　先土器時代炉跡実測図

尖頭部をつくり出している。4は、不整形の剝片の、打面と旧剝離面との接点の打面側に、大変せまい範囲、細かい剝離が加えられている。

彫　器（第8図5、図版8）

刻打面に類する剝離痕が認められるので彫器とする。機能的には、尖頭石器と大差がないようである。素材は、稜上加撃によって得られた菱形の剝片である。4つの辺のうち背面左下の辺をのぞく3つの辺は、旧剝離面がのこる。刻打は、打面から平坦な側縁に対して垂直に加えられ、ノミ状の刃部がつくり出されている。

削　器（第8図6、図版8）

比較的大きく自然打面をのこした厚みのある剝片の端に刃部をつくっている。刃部をつくり出すにあたって、剝離が腹面と背面の両方からおこなわれている。珍しい。

楔状石器とかたちは似るが、剝離痕が、楔状石器に通常にみられる潰痕様のものとは異なる。

剝　片（第8図7～10、第9図11～16、図版8）

7・8は微細な剝離痕が著しいが、ほかの剝片にはみられない。7・9・10をのぞくとあとは横長である。腹面と背面の剝離方向が揃っているものが多い。背稜は、全く無いものと1条のものが多い。17・18の石核と接合した剝片は無かった。

石　核（第9図17・18、図版8）

17は、自然面を一部のこす。剝片をつくり出すにあたって打面をかえていたことが、うかがえる。

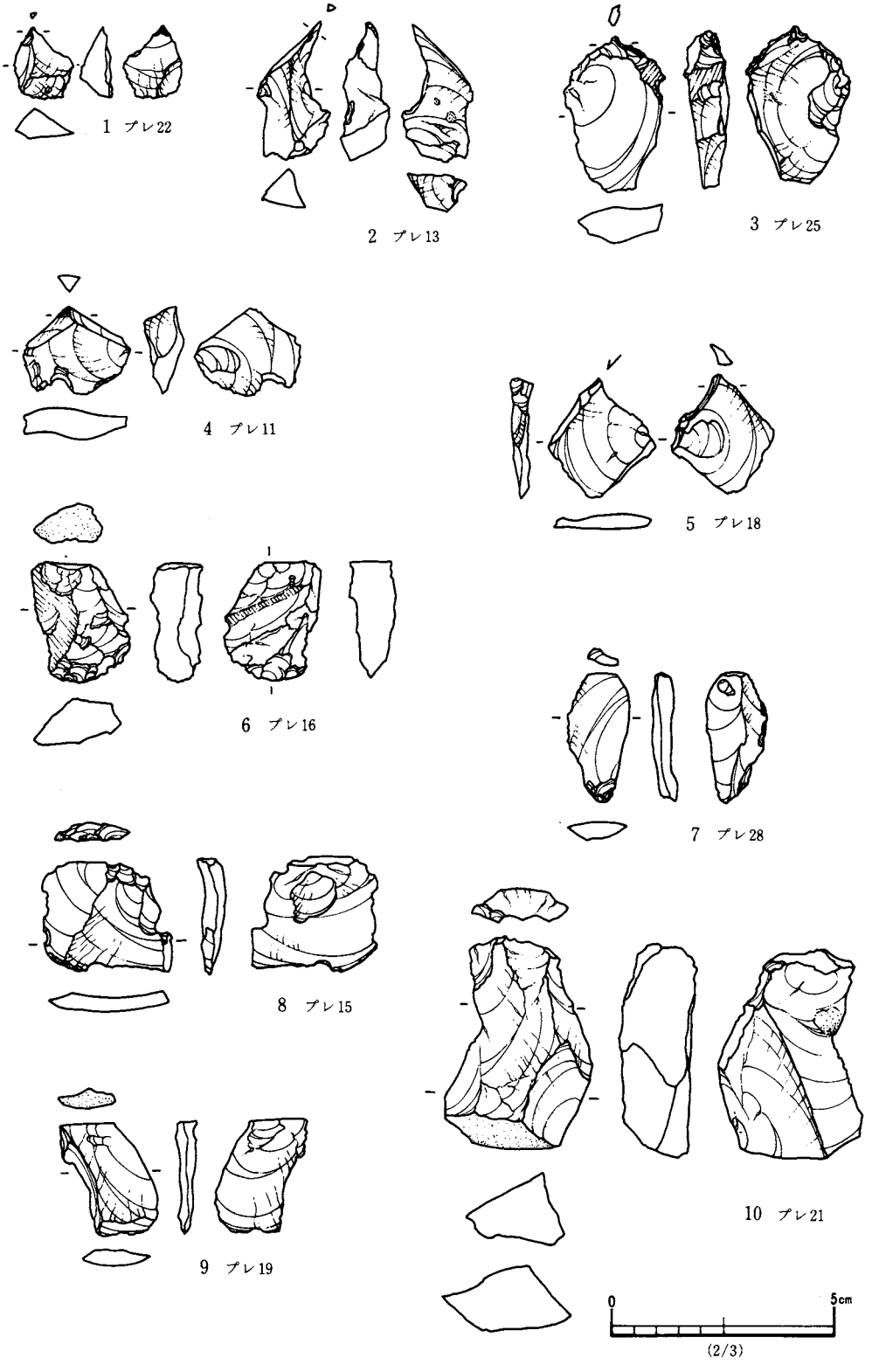
18は、多方面からの剝離もおこなわれているが、相対する方向からの剝離もおこなわれたことがうかがえる。

礫　器（第10図19、図版8）

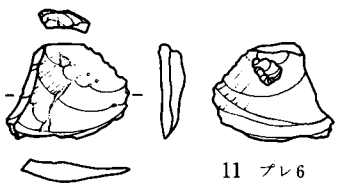
打割器とは言えないが、加工された痕がある。長軸と直交するように礫の側面に加撃し、礫の節理面に沿って剝片が割り取られている。加えてさらに数回の粗い剝離がおこなわれているようにもみえるが、はっきりしない。大きくのこる自然面上には、全く加撃痕も、被加撃痕もみられない。

第1表　先土器時代石器観察表

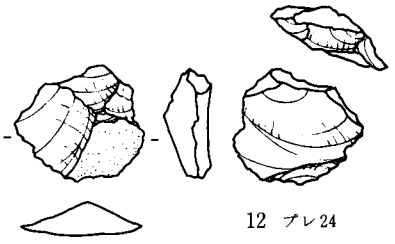
遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
プレ 1	剝片	玄武岩 a	28.2	21.7	12.0	5.8	13	完形
2	剝片	玄武岩 a	16.2	24.0	4.0	2.0	16	完形
3	剝片	玄武岩 c	17.8	29.8	12.1	6.7	14	頭部
4	剝片	玄武岩 a	24.1	41.3	8.3	8.8	15	完形
5	石核	メノウ a	29.3	31.4	14.7	10.3	18	
6	剝片	メノウ a	20.6	25.0	4.4	2.0	11	完形



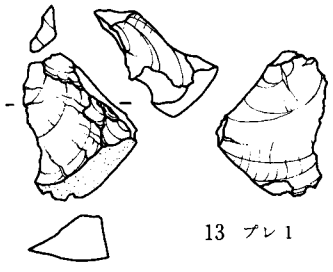
第8図　先土器時代出土石器 (1)



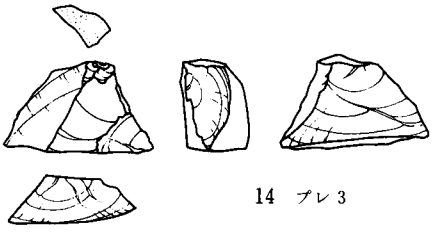
11 プレ6



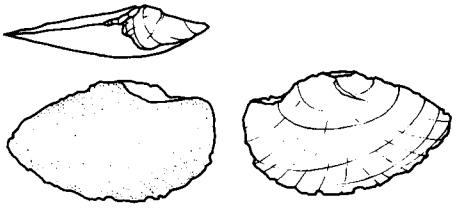
12 プレ24



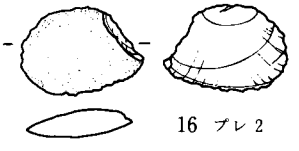
13 プレ1



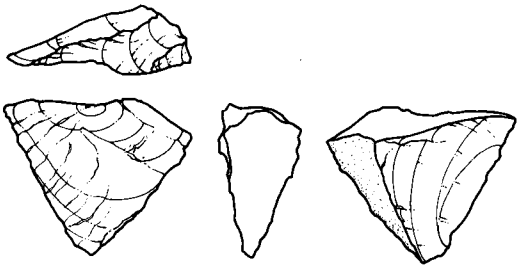
14 プレ3



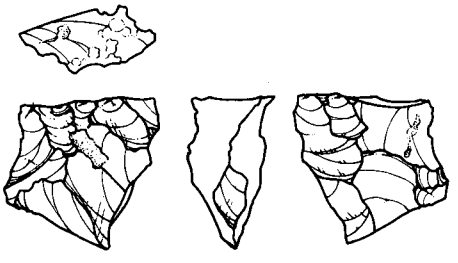
15 プレ4



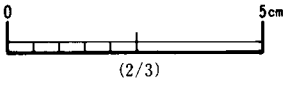
16 プレ2



17 プレ17

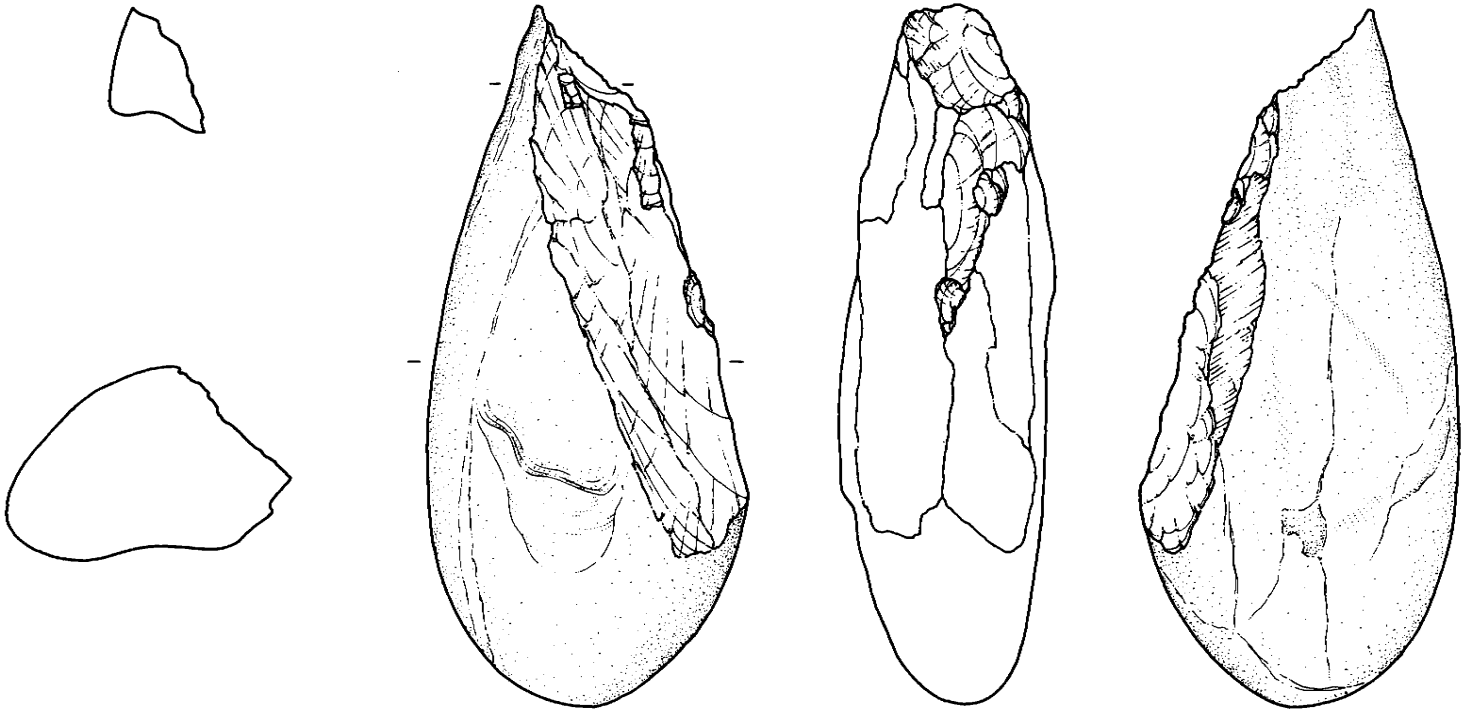


18 プレ5



(2/3)

第9図　先土器時代出土石器 (2)



19　プレ23

0　10cm
(2/3)

第10図　先土器時代出土石器 (3)

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
7	剝片	玄武岩a	8.7	6.8	2.0	0.1		破片
8	剝片	玄武岩a	7.2	15.7	2.2	0.3		完形
9	欠番	—	—	—	—	—	—	
10	剝片	玄武岩a	27.1	29.4	3.1	2.8		頭部欠損
11	尖頭石器	メノウa	20.0	24.0	7.1	2.4	4	完形
12	剝片	玄武岩b	10.0	11.2	4.0	0.5		尾部
13	尖頭石器	メノウb	32.4	16.8	11.3	3.1	2	完形
14	剝片	玄武岩b	8.9	5.6	3.0	0.1		破片
15	剝片	チャートa	26.2	29.7	5.0	3.6	8	完形、使用痕
16	削器	チャートb	26.3	21.4	11.0	6.0	6	完形
17	石核	玄武岩b	29.4	37.3	12.9	10.4	17	
18	彫器	メノウa	26.3	24.8	5.4	2.0	5	完形
19	剝片	玄武岩b	25.2	20.1	4.5	2.1	9	完形
20	剝片	メノウa	10.2	8.3	3.8	0.3		完形
21	剝片	玄武岩b	45.2	23.7	15.2	22.8	10	石核に転用か
22	尖頭石器	メノウa	17.1	14.0	6.6	1.1	1	完形
23	加工痕ある礫	硬質砂岩	141.0	63.6	41.1	455.0	19	
24	剝片	玄武岩a	24.0	25.2	8.4	4.1	12	完形
25	尖頭石器	メノウb	35.3	23.2	8.4	7.3	3	完形
26	剝片	玄武岩a	13.9	15.8	3.3	0.7		完形
27	剝片	玄武岩a	11.0	12.9	2.6	0.4		頭部欠損
28	剝片	メノウa	28.8	14.6	4.7	1.8	7	完形、使用痕

ii 炉　跡（第5～7図、図版3）

長径46cm、短径34cm、深さ25cmのスリ鉢形の土坑に焼土がたまっていた。土坑の覆土は、Ⅷa層に近いが、全体に、より軟かく、多量の炭化物片と焼土粒、いくつかの焼土塊が混じっていた。また、土坑の側面および底面のそれぞれ一部に火熱により硬化したところがみられた。

iii 炭化物片集中（第5図）

炉跡と思われる焼土遺構の東側を中心に、炭化物片が集中しているのがみつかった。先土器試掘坑のところで炭化物片が少ないのは、試掘の際に掘りとってしまったからである。粒状の炭化物片ばかりで、炭化材といえるのはどの大きさのものは、みつからなかった。何点かサンプリングしてあるが、分析はおこなっていない。

第3節　縄文時代

縄文時代については、遺構はみつからなかった。遺物は、土器片のほか何点かの石器が出土し

た。そこで、土器を中心に遺物について述べる。

土　器（第11・12図、第2表、図版8・9）

出土した縄文土器片の総数は604点である。前期前半のものと中期前半のものが大半を占める。そのほかの時期の土器は、わずかしか出土していない。以下のように分類した。

第Ⅰ群……前期前半の土器　76点

第Ⅱ群……前期後半の土器　6点

第Ⅲ群……中期初頭の土器　27点

第Ⅳ群……中期前半の土器　260点

第Ⅴ群……後期の土器　53点

その他、底部、時期不詳　184点

各群は、成形、施文の具合などから、さらに細別できる。

第Ⅰ群（第11図1～7、図版8）

胎土に多量の繊維を含む。黒浜式の前半期の土器であろう。施文の有無、方法のちがいをもとに6類に分けることができる。

1類　縄文のみのもの　40点（3・4・5）

2類　縄文＋叉状竹管の刺突　2点（1）

3類　縄文＋半截竹管による平行線文　1点（2）

4類　半截竹管による波状線文　10点（6・7）

5類　円形竹管の刺突　1点（図ナシ）

6類　無　文　22点（図ナシ）

1類は単節縄文のもの（特にRL）が多く、撚糸文（付加条縄文）のものは1例も無い。2類・3類・5類が1個体分、4類が2個体分の破片しか出土せず、6類の大半も1～5類の胴部下半の無文節の破片と思われるので、撚糸文土器の欠落は、偶然であろう。本群土器の詳しい編年上の位置づけについては、『タルカ作遺跡』（千葉県土地開発公社・財団法人千葉県文化財センター1985年）を参照されたい。

第Ⅱ群（第11図8～10、図版8）

浮島Ⅱ式にあたる。8は複合口縁を持つ。9・10は波状貝殻文がつく。

第Ⅲ群（第11図11～17、図版8）

五領ヶ台式直後、阿玉台式直前の土器である。施文内容のちがいをもとに3類に分けることができる。

1類　縄文のつくもの　(11～14)

2類　縄文がつかず、角押文の施されたもの　(15)

3類　無文のもの　(16・17)

1類

細片のみで全体の文様構成を知り得ない。細い隆帯の貼付がみられるが、口縁下に曲線的に配して口縁部文様帯を構成するもの（14）と、胴部にまで垂下するもの（11・12）の二様の使い分けが認められる。14では隆帯上に縄文があり、11・12では隆帯に沿って沈線がめぐり、沈線で画した中に縄文を充塡している。この類の細かい砂礫や金雲母を含む特徴ある胎土は、明代台遺跡B地点の五領ヶ台II式およびその直後型式の土器の胎土に近い。

2類

軽く外反する口縁部の内外面に稜が認められる。口唇上には、1類の14と同様の浅い刻目が密につき、角押文が2列にわたってつく。

3類

16・17は、内面を横方向に入念にナデ成形している。内面にくらべて外面の成形、調整はひどく粗い。

第Ⅳ群（第11図18～28、第12図29～32、図版8・9）

阿玉台式の土器である。西村正衛氏の細分案（「阿玉台式土器編年的研究の概要」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』18・1972年）に拠って分類する。

阿玉台Ⅰa式（18～23）

特徴の明らかなものは全て図示した。23も口縁部の破片である。図示したものは全て波状口縁のものになった。18・20・22は粘土紐を貼りつけて波状口縁を飾っている。

阿玉台Ⅰb式（24～31）

この型式の破片が第IV群の土器の中で最も多い。単列角押文とx字状区画文の発達した典型例を図示した。

阿玉台II式（32）

太目の断面カマボコ型の隆帯に沿って3列の角押文を走らせたもので、地文が縄文となっている。32aの胴部破片の隆帯による区画文は三角形状を呈するかとみえ、新道式（勝坂）系統の波及がうかがえる。

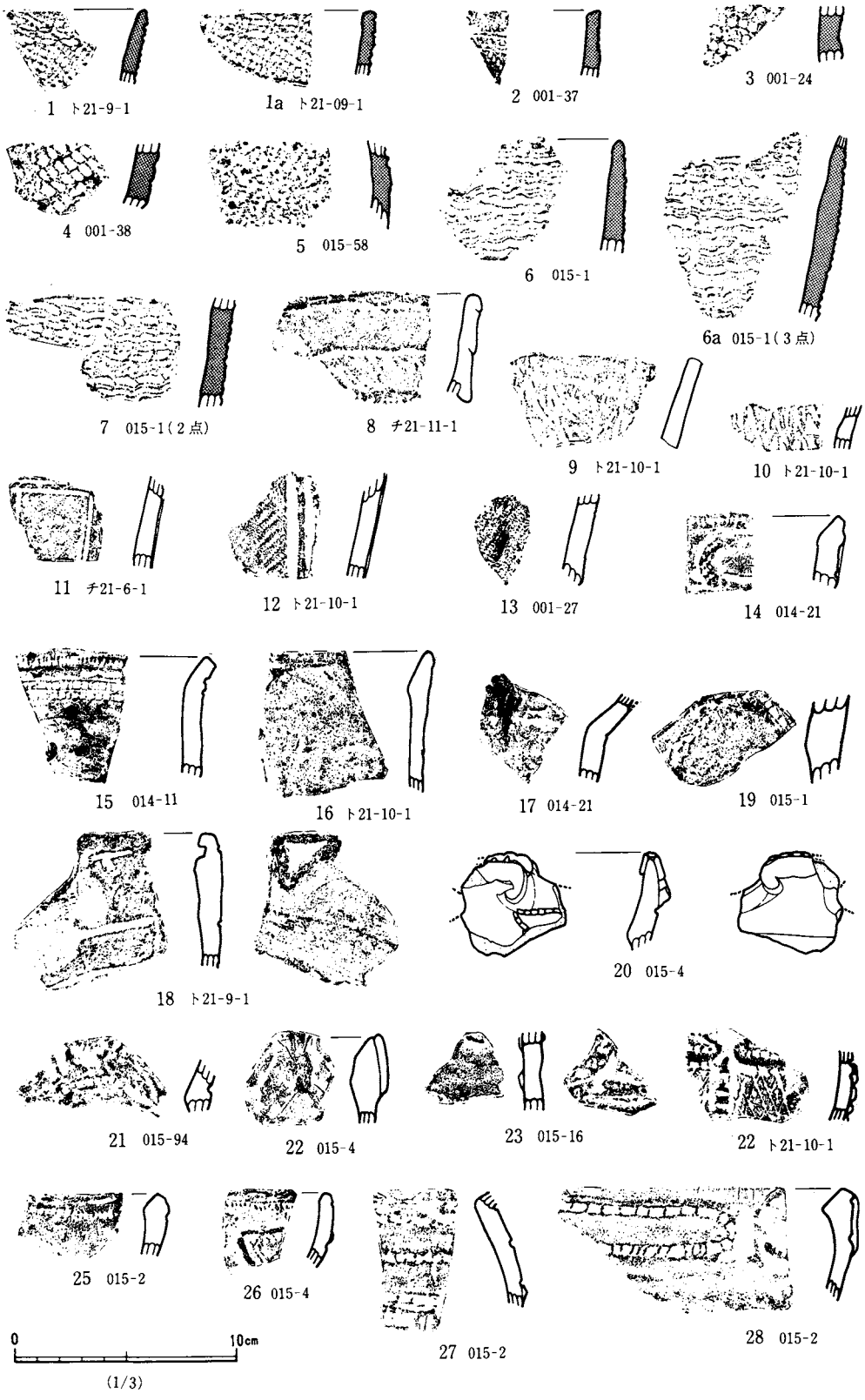
なお、24は、多截竹管外側による押し曳きの沿う横位の区画帯から刻目隆帯が垂下し、さらに細沈線による斜格子文が加えられており、阿玉台式本来の文様のあり方と言えない。新崎式系統からの間接的影響かと疑われる。

第Ⅴ群（第12図33～39、図版9）

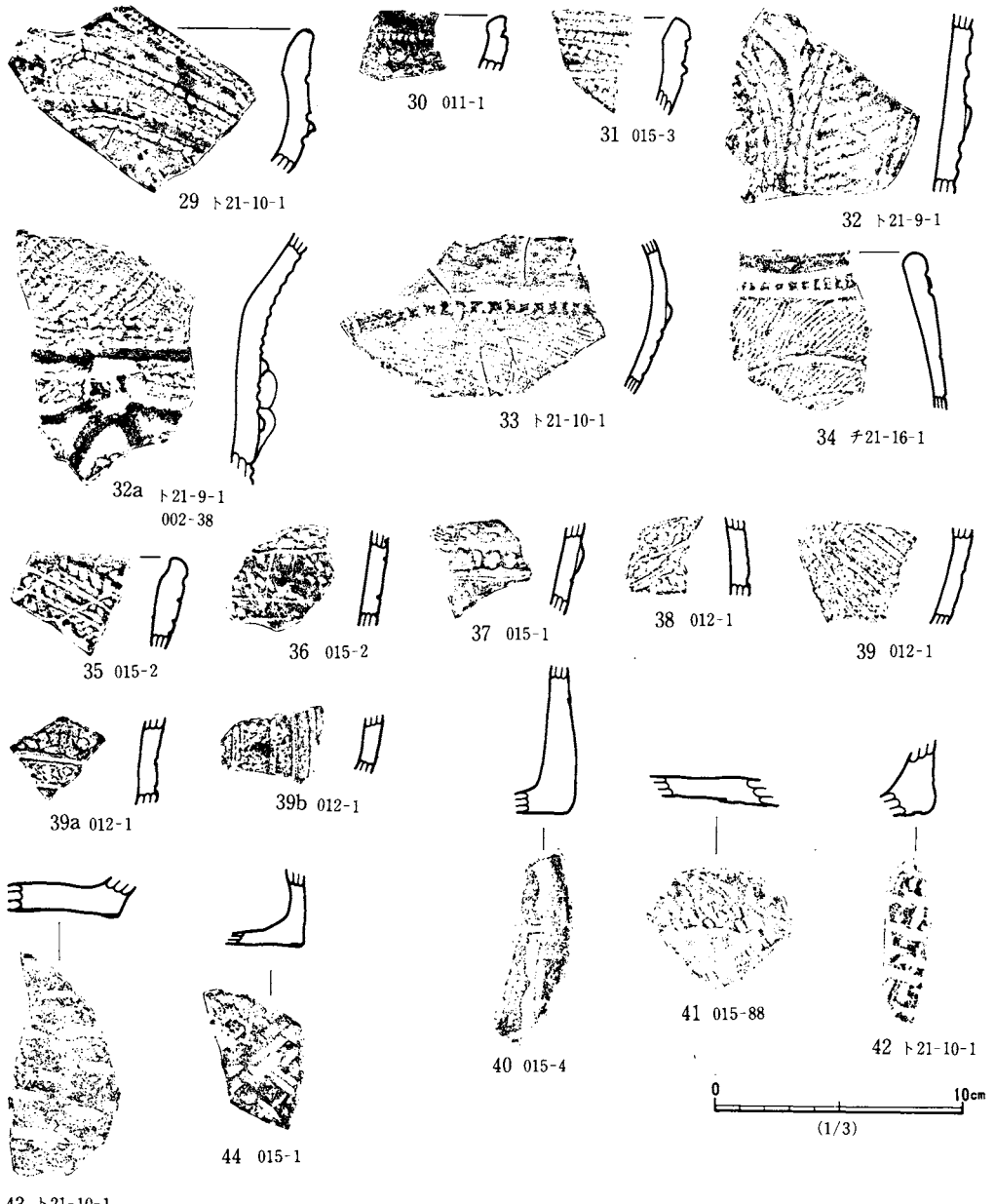
精製土器は33・34のみであり、のこりは粗製深鉢の小破片ばかりである。33の無文の上半部は、良く研磨されて、微光沢を帯びる。33・34ともに加曽利BIII式である。35～39も同じ型式であろう。

底　部（第12図40～44、図版9）

網代痕のある底部破片を示した。40～43は第IV群、44は第Ⅴ群であろう。


1 ト21-9-1
1a ト21-09-1
2 001-37
3 001-24
4 001-38
5 015-58
6 015-1
6a 015-1(3点)
7 015-1(2点)
8 チ21-11-1
9 ト21-10-1
10 ト21-10-1
11 チ21-6-1
12 ト21-10-1
13 001-27
14 014-21
15 014-11
16 ト21-10-1
17 014-21
19 015-1
18 ト21-9-1
20 015-4
21 015-94
22 015-4
23 015-16
22 ト21-10-1
25 015-2
26 015-4
27 015-2
28 015-2
0
10cm
(1/3)

第11図　縄文土器 (1)



第12図　縄文土器 (2)

第 2 表　縄文土器観察表

胎土の 0、+、−は普通、多、少を焼成の 0、+、−は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎　土	焼成	色　調	せ い け い	施　文	備　考
1	微細砂− 繊維+	0	黒　色	内面ヨコナデ	RL→叉状工具による刺突	
2	微細砂 0 繊維 0	0	明 褐 色	口唇部〜内面ナデ	RL→半截竹管による平行線文	
3	微細砂 0 繊維+	+	明茶褐色	内面ナデ	RL	
4	細砂粒+ 繊維−	+	赤 褐 色	内面ナデ	RL	
5	微細砂− 繊維+	0	黄 褐 色	内面ナデ	LR	
6	微細砂 0 繊維+	0	黒　色	内面ナデ	半截竹管による波状文	

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
7	細砂粒0　繊維＋	＋	赤褐色	内面弱いナデ	半截竹管による波状文	
8	細砂粒＋	＋	明褐色	内面ヨコナデ、輪積痕	なし	
9	細砂粒0	＋	明茶褐色	内面入念なナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
10	細砂粒0	＋	明褐色	内面入念なナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
11	細砂礫＋	＋	赤褐色	内面ナデ	隆帯、ＲＬ画線内充填	
12	細砂礫＋（長石）	＋	暗赤褐色	？	隆帯、ＲＬ	
13	細砂礫＋	＋	暗赤褐色	？	ＲＬ	
14	細砂粒0	＋	明褐色	内面ナデ	口唇上刻目、隆帯上ＲＬ、隆帯に沿う沈線	
15	細砂粒0	＋	茶褐色	内面ナデ、外面部分的にミガキ痕	口唇上刻目、２列の角押文	
16	細砂礫0	＋	明茶褐色	内面ナデ、輪積痕	なし	
17	細砂礫0	＋	明茶褐色	内面ナデ、外面ミガキ痕	なし	
18	細砂礫＋	0	暗褐色	外面スス付着	沈線	
19	細砂粒＋	0	赤褐色	内面ナデ	角押文	
20	細砂粒0	＋	赤褐色	？	貼付文、角押文	
21	細砂粒0	＋	明褐色	？	角押文	
22	細砂粒＋	0	明褐色	？	貼付文	
23	細砂粒0	＋	赤褐色	？	内面三角文	
24	細砂粒0	＋	黄褐色	？	隆帯、角押文、沈線	
25	細砂粒0	＋	赤褐色	内面ナデ	角押文	
26	細砂粒＋	＋	明～赤褐色	？	隆帯、刺突列（押し曳き）	
27	細砂礫0（石英）	＋	赤褐色	外面ナデ→施文	角押文、隆帯	
28	細砂粒＋	0	黄褐色	内面一部ナデ痕	隆帯に沿う角押文	
29	細砂粒0（金雲母）	＋	赤褐色	内外面軽いナデ	隆帯に沿う角押文	
30	細砂粒0	0	赤褐色	？	角押文	
31	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤～暗褐色	内面ナデ	隆帯に沿う角押文	
32	細砂礫＋（金雲母）	＋	明褐色	？	ＲＬ、隆帯に沿う複列角押文	
33	細砂粒0	＋	黄～暗褐色	内面ナデ痕、外面上部ナデ	刻目、沈線	
34	細砂粒0	0	赤褐色	内面ヨコナデ	ＬＲ、沈線	
35	微細砂0	0	黄～赤褐色	？	ＲＬ→沈線、内面凹線	
36	微細砂0	＋	灰褐色	内面ナデ	ＲＬ→沈線	
37	細砂粒0	＋	赤褐色	内面ナデ	刻目隆帯、沈線	
38	細砂粒0	＋	赤褐色	内面ナデ	ＬＲ→沈線	
39	細砂粒0	＋	赤褐色	内面入念なナデ	ＲＬ→沈線	
40	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤褐色	輪積痕	網代痕	
41	細砂粒＋	＋	暗赤褐色	？	網代痕	
42	細砂礫＋（石英）	＋	暗赤褐色	？	網代痕	
43	細砂粒0	0	赤褐色	？	網代痕	
44	細砂粒0	＋	明～暗褐色	外面弱いヨコナデ	網代痕	

石　器（第13図、第３表、図版９）

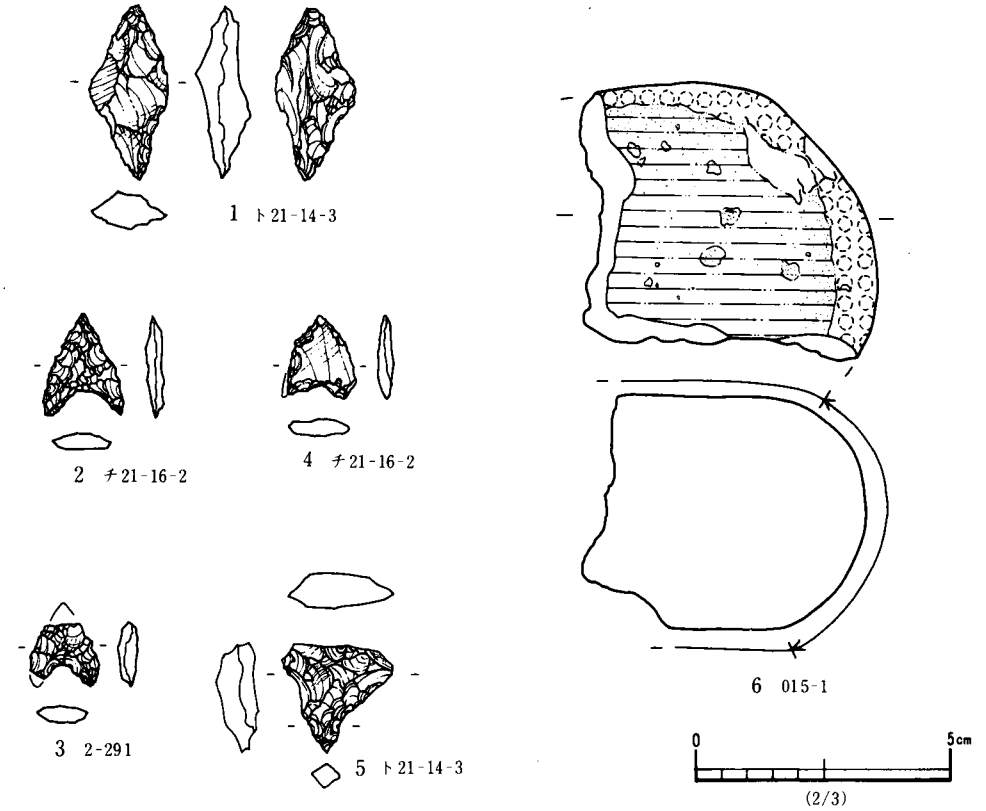
出土した石器は総数23点である。内訳は、尖頭器１点（１）、石鏃３点（２～４）、石錐１点（５）、磨石１点（６）、剝片８点、礫９点である。

尖頭器は、暗褐色ないし暗灰色で、黒色の細い縞が暗灰色の部分に走るチャートでつくられた部厚い両面打製の粗製のものである。ほぼ菱形であるが、図の下端は上端にくらべて細く鋭く加工されており、茎部としようとしたものかと思われる。先土器時代のものである可能性もある。

石鏃は、２と３が黒曜石製、４が白色ないし淡灰色のチャート製である。２は、基部のえぐりがやや深く、側縁は鋸歯状になっている。３は、尖端部と片脚端が欠けているが、本来、２と同じ形であろう。４は、図示しなかった面に大きく原礫面がのこる。図示した面には、この鏃の素材となった剝片の主要剝離面がのこる。周縁を腹面、背面の両方から細かく剝離して加工している。側縁部はゆるく外弯し、基部のえぐりは浅い。

石錐は、黒曜石の厚味のある剝片をもとにつくられている。素材剝片のつくられ方を示唆するものとしては、基部に蝶番剝離が認められる。尖頭部は、腹・背両面から剝離をおこなってつくり出されている。

磨石は、安山岩製である。破片である。腹・背両面とも微光沢を帯るほどに研磨されている。周縁と側面には敲打痕が著しい。



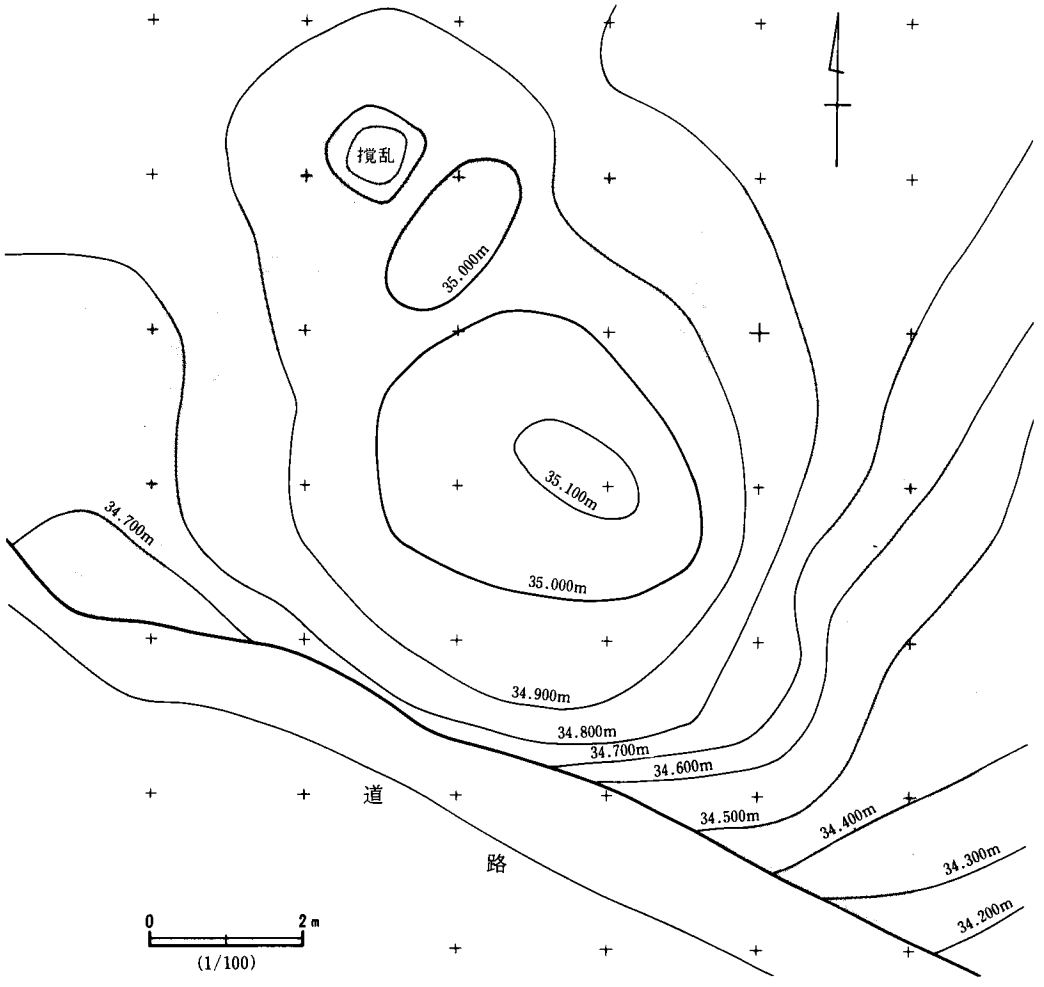
第13図　縄文時代出土石器

剝片は、いずれも微小で、黒曜石が6点と多く、チャートと砂岩が1点ずつである。

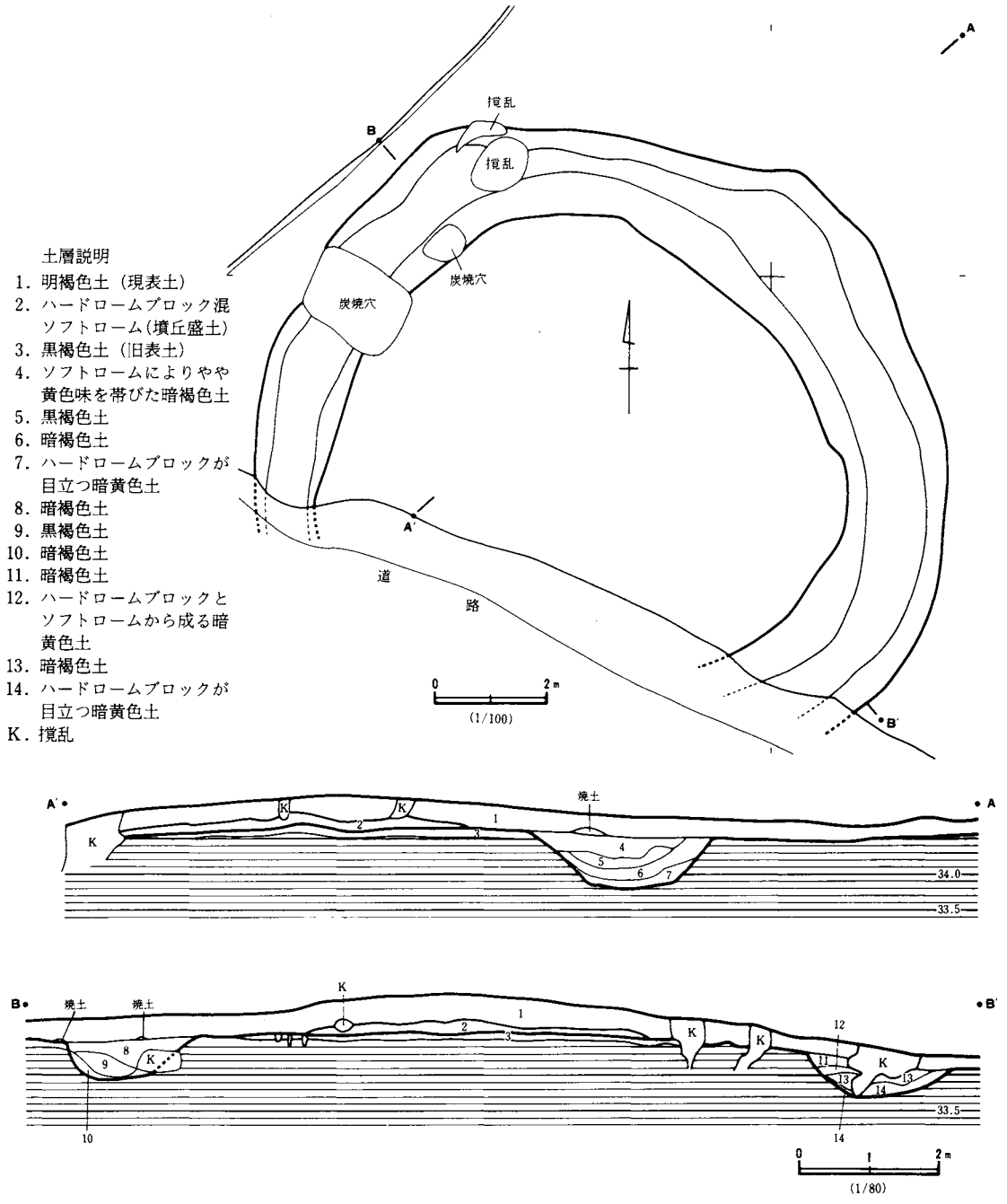
礫は、完形のもの4点、破砕されたもの5点である。完形のものは全て小型の円礫で、中には成田層の産出かと思われるものがある。破砕礫のうち2点は、赤変部分があり、火熱を受けていると思われる。

第3表　縄文時代石器観察表

挿図番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺存状況	備考
1	尖頭器	チャート	34.0	16.0	8.1	3.6	完形	先土器時代のものの可能性がある。
2	石鏃	黒曜石	20.9	15.9	4.1	0.9	完形	
3	石鏃	黒曜石	−	−	4.6	0.6	尖端・片脚端欠	
4	石鏃	チャート	15.7	13.5	2.7	0.6	完形	
5	石錐	黒曜石	21.3	22.4	7.1	2.5	完形	
6	磨石	安山岩	−	−	−	200.5		



第14図　古墳墳丘実測図（021-015）



第15図　古墳周溝実測図及び土層断面図（021-015）

第4節　古墳時代

古墳時代の遺構としては、円墳が1つみつかった。今回の調査範囲の西のはずれに位置する。

古　墳（015）（第14・15図、図版2・4）

本来は、周溝を丸くめぐらせ、その中に盛り土をして墳丘を築いていたものと思われる。しかし、周溝、墳丘とも原状をかなり失なっていた。周溝とその中の墳丘部分の4分の1強は、古墳の南側を走る道の切り通しによって、失われていた。墳丘の盛土は、ほとんど削られてしまったためであろう。表土の下にわずか10～20cm前後の厚みしかなかった。

以上のように原状を失っていたが、その上で、古墳の規模、周溝の規模を推定すると、つぎのようになる。

古墳の直径は、周溝の外周までで12.5m、内周までで8.5mである。周溝の幅は1.5～2.5m、同じく深さは0.4～0.7mである。

埋葬施設は、周溝の内側、周溝内、周溝外周についてローム面を出して探したが、みつからなかった。墳丘中か墳丘上につくられていたのであろう。

周溝の掘り方は、きれいとは言えず、丸くめぐるといっても整った円形ではなく、少し歪んでいる。幅も、北側が他よりもせまくなっていた。

出土遺物は、ほとんど周溝の覆土中のもので、しかも、細かい土師器片、須恵器片ばかりであった。大部分は、国分期のものであるが、中に赤彩の施された鬼高期の坏片がいくつかみられ、これが古墳の時期を示すものと思われる。数多くこの古墳の周溝内および周辺からみつかった国分期の土師器片、須恵器片は第24・25図に示したが、古墳を目印にして捨てられたものであろう。

第5節　歴史時代

遺構の数からみると、向山谷津遺跡で最も多くみつかったのは、歴史時代（奈良時代以降）のものである。内訳は、住居跡1、土坑3、溝1である。

(1)遺　溝

住居跡（002）（第16～19図、第4表、図版5・9・10）

今回の調査区域の北のはずれに位置する。台地の平坦面上である。第1号土坑に切られていて、壁の一部が壊されている。

平面形態は、ほぼ正方形である。東西方向が南北方向にくらべてやや長い。東西方向の2辺が4mと3.7mであるのに対して、南北方向の2辺は3.4mと3.2mである。主軸の方向は、N－5°－Eである。

壁は、高さが床面から51～61cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、中央はハードローム層を平らに削り出して床としているが、壁に沿った外縁は中央の部分よりも一段掘りくぼめて、そこに貼り床をおこなっている。貼り床に用いられた土は、ハードロームブロックが目立ち、そのあいだにソフトロームと黒褐色土が混じったものである。ハードロームをそのまま床とした床面の中央部分は、堅くしまっていて、住居跡の覆土がきれいにその面で剝がれるほどであった。

柱穴その他のピットはみつからなかった。

カマドは、北側の壁の中央に位置し、黄色砂を主として構築されていた。ロームの壁を幅70cm、奥行き50cmの山形に掘り込んで、煙道がつくられていた。煙道の下側には、ロームとのあいだに砂が一枚貼られていた。火床の部分は、ゆるくへこんでおり、その表面は、焼けていて、赤くあるいは硬くなっていた。カマドの中から出土し、カマドの平面図と断面図に入れた土師広口壺の底部（9）は、火をうけておらず、中に赤色焼土がつまっていた。同じ土師広口壺の破片は、住居跡の覆土中にみつかっている。

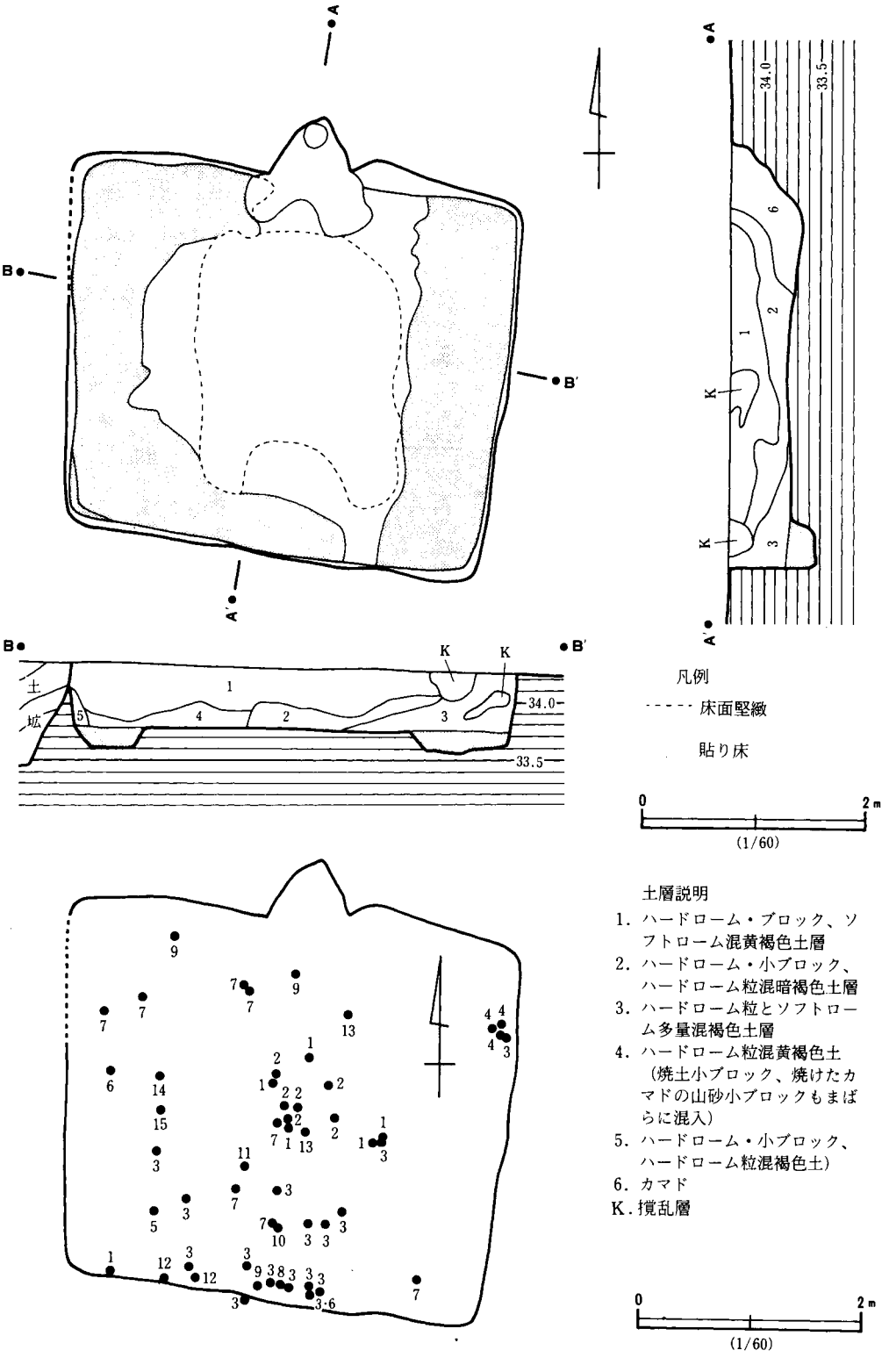
完形あるいはそれに近い土器は、ほとんど出土しなかった。南側の壁に近い床面上から出土した12の須恵坏も、2つに割れて、その破片が30cm前後離れた状態で出土した。その他の比較的形を復原できた土器も、遺物出土状況図で明らかなように、破片はかなり散らばって出土している。

覆土には、土層説明に明らかなように、ハードロームとソフトロームの混入が目立った。堆積の状況は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

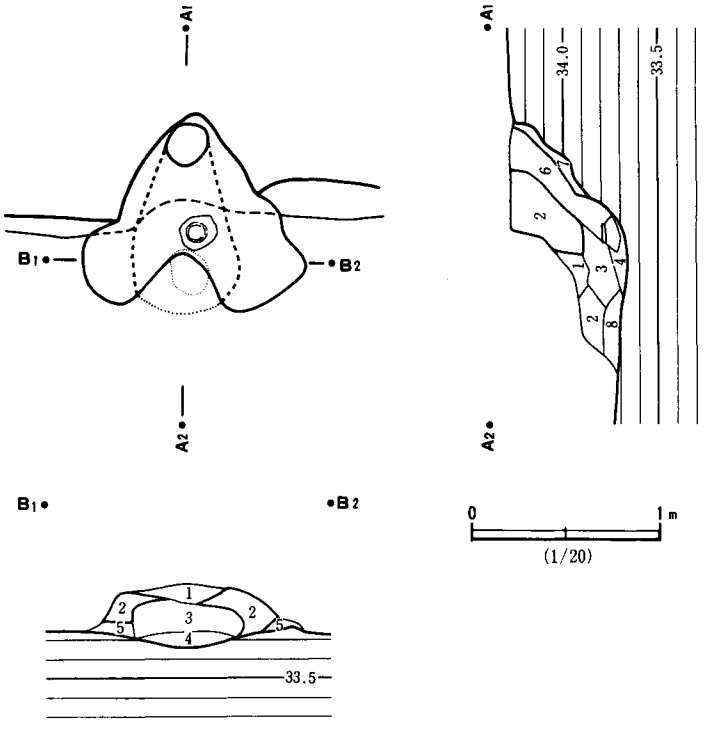
第4表　住居跡出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	甕	－	223	－	245	上半部 1/2	良	淡黄褐色	密 微粒石 雲母	外	口	ヨコナデ	胴	頸部ナデ以下ミガキ	底	－		+2.7 ～+53.6	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	－			
2	甕	－	197	－	240	上半部 1/4	良	淡黄褐色	密 微粒石 雲母	外	口	ヨコナデ	胴	上半ナデ下半ミガキ	底	－		+2.7 ～+19.8	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	－			
3	小型甕	133	134	55	135	1/2	良	赤褐色	密	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリナデ	底	ヘラケズリ		+1.2 ～+28.8	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	ナデ			
4	小型甕	－	－	62	130	口頸部下 2/3	良	外面暗赤褐色ないし黒色 内面暗黄色ないし黒色	密	外	口	－	胴	ヘラケズリナデ	底	ヘラケズリ		+2.1 ～+8.3	
										内	口	－	胴	ヘラナデ	底	ナデ			
5	小型甕	－	147	－	－	口頸部 1/2	良	口縁外面赤褐色。ほか黒色	密	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	－		+2.1	内面は細かくヒビ割れる。
										内	口	ヨコナデ	胴	不明	底	－			
6	須恵甕	－	216	－	202	上半部 1/4	良	青灰色	密 微粒石	外	口	ロクロ	胴	タタキ	底	－		+4.5 ～+9.3	
										内	口	ロクロ	胴	ナデ	底	－			
7	須恵甕	－	280	－	278	上半部 1/2	良	黒色	密	外	口	ロクロ	胴	タタキ	底	－		－0.1 ～+56.0 住居跡外	8と同一個体の可能性がある。
										内	口	ロクロ	胴	ナデ	底	－			



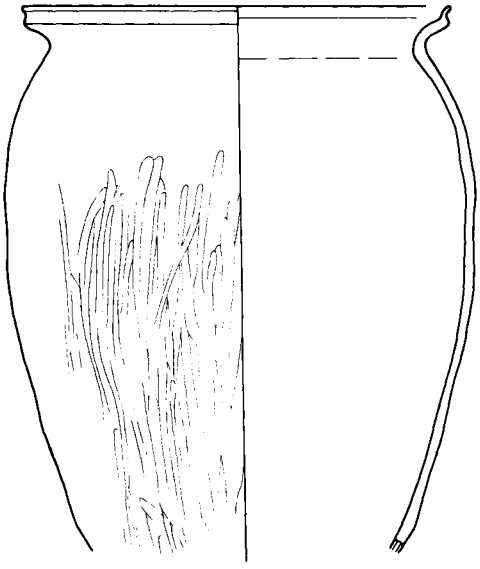
第16図　住居跡実測図及び遺物出土状況図（021-002）



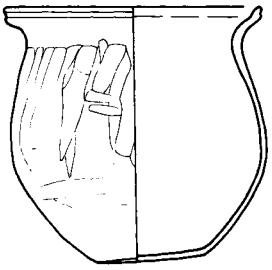
土層説明
1. ハードロームブロック、砂、黒褐色土混暗褐色土
2. ハードロームブロック混黄色砂層
3. 焼けた赤色の砂、同砂ブロックが多量混じって赤味をおびた暗褐色土
4. 焼けた淡い朱色の砂層
5. ハードロームブロック、砂混黒褐色土（堅緻）
6. 焼けた赤色の砂層
7. 黄色砂層
8. ハードローム小ブロック混暗褐色土

第17図　住居跡カマド実測図

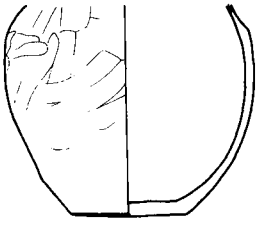
挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整							出土状況(床面からcm)	備考
8	須恵甕	−	−	170	−	胴下半部 1/4 底部 1/2	良	胴部黒色 底部淡黄褐色	密	外	口	−	胴	タタキ	底	ヘラケズリ？	+2.5	
										内	口	−	胴	ナデ	底	ナデ		
9	広口壺	−	−	120	214	1/2	良	淡黄褐色	密 微粒石	外	口	−	胴	上部ナデ 下部回ヘラ	底	ナデつけ 回ヘラ	+1.9 〜+4.4 カマド内	外面は荒れる。火を受けた痕はない。回ヘラは回転ヘラケズリ。以下同じ。
										内	口	−	胴	ナデ	底	ナデ		
10	坏	40	135	81	−	4/5	良	黒色	密 微粒石	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ	+5.6	手ヘラは手持ちヘラケズリ。以下同じ。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ		
11	坏	−	−	72	−	底部 1/2	良	外面淡黄褐色、内面赤褐色	密	外	口	−	胴	下部回ヘラ	底	糸切り 回ヘラ	+4.5	
										内	口	−	胴	ていねいな ミガキ	底	ていねいな ミガキ		
12	須恵坏	61	135	79	−	ほぼ完	良	青灰色	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ	+5.5 〜+9.0	
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ		
13	須恵広口壺	−	−	94	−	底部 1/4	良	外面黒色 内面灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ	+9.7 〜+40.0	125と162の破片をもとに器形を推定。
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ		
14	須恵広口壺	−	70	−	−	口縁部 1/8	良	灰色	密	外	口	ロクロ	胴	−	底	−	+54.7	
										内	口	ロクロ	胴	−	底	−		
15	台	−	−	72	−	上部完 下部 1/2	良	赤褐色	密	外	口	−	胴	−	底	手コネ ヘラケズリ	+42.0	
										内	口	−	胴	−	底	手コネ		



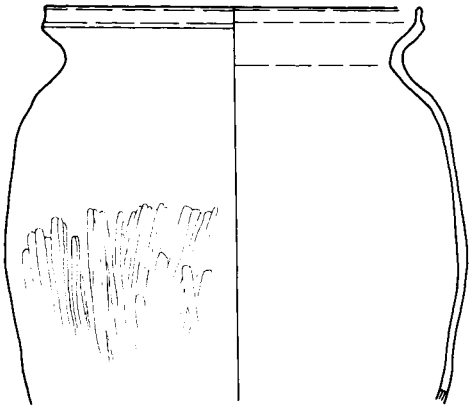
1　26,143,144,260,265,267



3　30,72,96,104,127,129
131,171,176,177,182
216,238,248,276,280

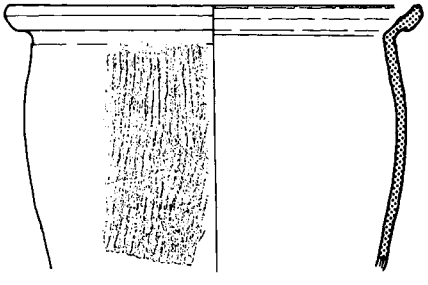


4　71,247,282

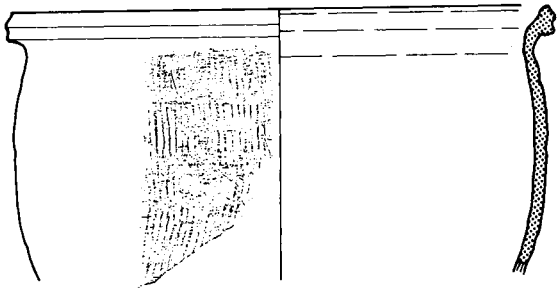


2　40, 261,263,264,265,268

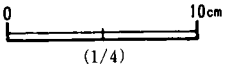
5　274



6　271,280

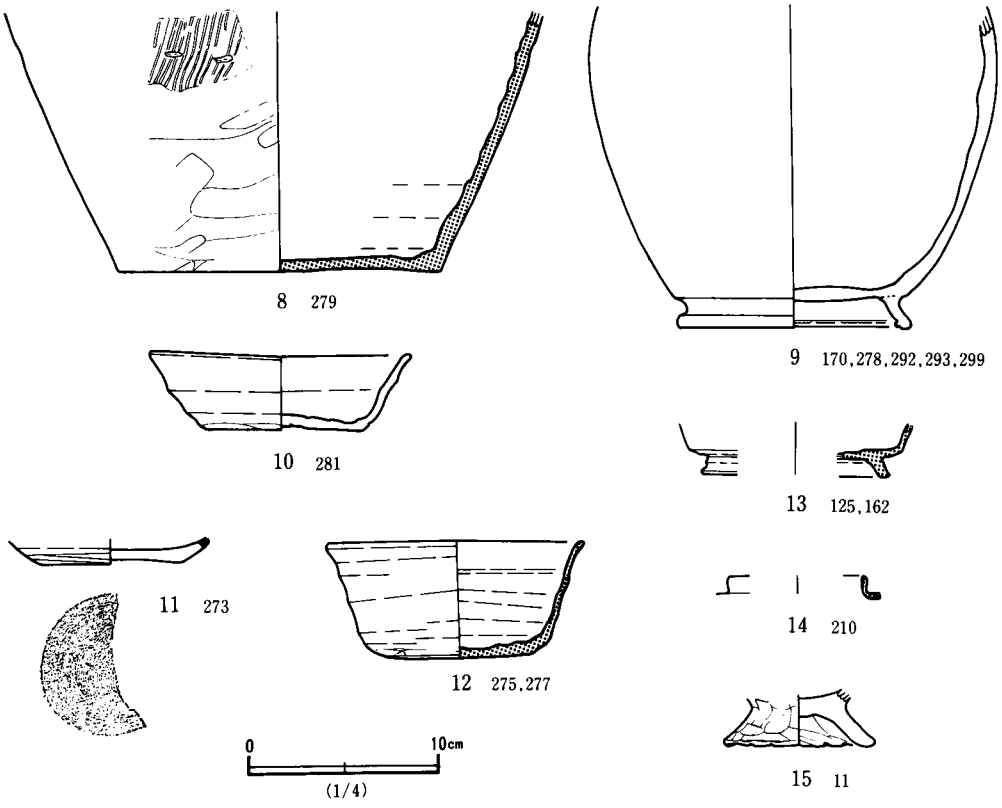


7　2,33,39,190,217,243,269,270,279
015-1,4　卜21-19-1



(1/4)

第18図　住居跡出土土器 (1)



第19図　住居跡出土土器 (2)

第１号土坑（001）（第20・21図、第５表、図版６）

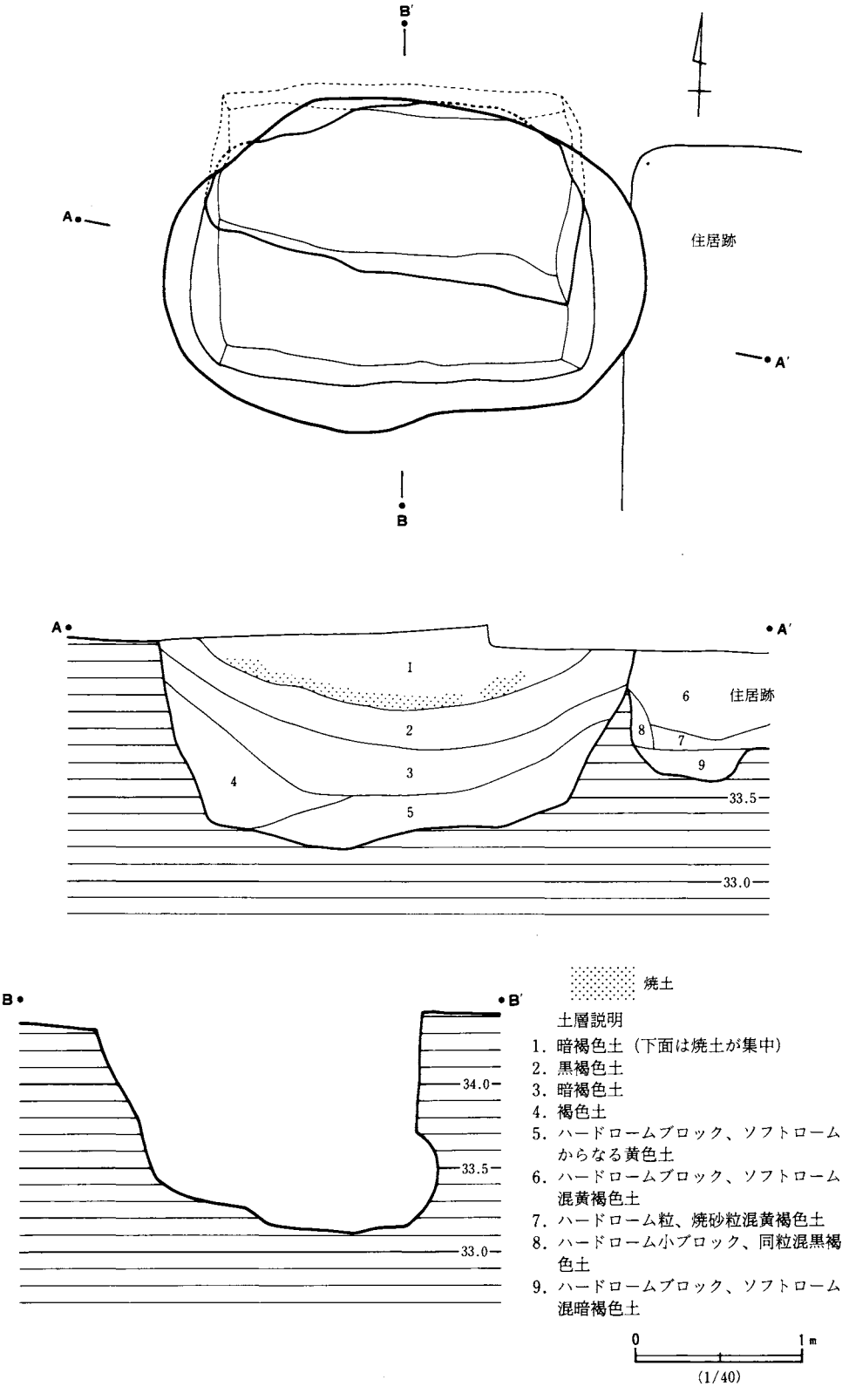
調査区域の北のはずれに位置する。台地の平坦面上である。上記の住居跡を切って掘られている。

口は、長楕円ないし小判形をしていて、2.9m×2.0mの大きさである。底までの途中から長方形に近く角張った掘り方に変わっていて、底は長方形である。２m×1.4mの大きさである。深さは1.3mである。

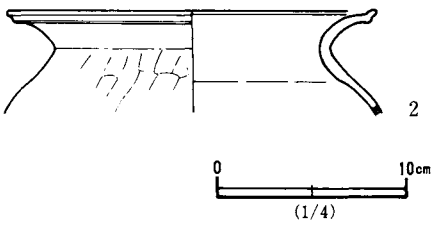
底は、北側が一段低く掘り下げられている。また、底に近い壁も、北側が、わずかであるが、外へ向って一段掘り込まれている。この底と壁が一段大きく掘られた部分に遺体が安置された可能性がある。底の一段低まった北側の部分の大きさをみると、２m×0.8m前後である。おとな１人を横たえても十分な広さである。肩の幅を考えて東側を両側にくらべて幅広とした可能性もある。

残念ながら、遺体や副葬品はみつからなかった。覆土の中には土器の細片ばかりが混じっていた。その中で多少大きめの破片が第21図の土師甕の口頸部破片である。

覆土の様子をみると、１～５の各層いずれもレンズ状の堆積をしていた。１層は現表土がくぼんだところにたまったものと思われる。佐倉第三工業団地内の各所において現表土の下部に焼土



第20図　第１号土坑実測図（021-001）



第21図　第１号土坑出土土器

が目立つ現象が確認されている。５層は、明らかに人為による埋め土である。

第５表　第１号土坑出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	甕	－	192	－	－	口頸部 1/4	良	赤褐色	密 砂粒多	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	－		+69.2	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	－			

第２号土坑（007）（第22図、図版６）

調査区域の東端近くに位置する。台地の斜面である。つぎに述べる第３号土坑よりも0.5m低いところにある。

口は、隅丸五角形といったかたちをしていて、底の方が横へ掘り広げられている土坑の北西部分が出張っている。大きさは、1.2m×１mである。底は２段になっている。北東側にくらべて北西側が一段低く、さらに、壁を掘り込んで広げている。北東側の底は、0.85m×0.35mの広さである。北西側の一段低くなった方の底は、0.8m×0.3mの広さである。土坑の深さは、深い方の底までで0.65mである。

以上のような構造からみて、この土坑は土坑墓の可能性が高い。残念ながら、遺体や副葬品はみつからなかった。覆土中からも遺物は全く出土しなかった。

第３号土坑（011）（第22図、図版７）

調査区域の北東隅近くに位置する。台地の斜面である。第２号土坑の北15mにある。

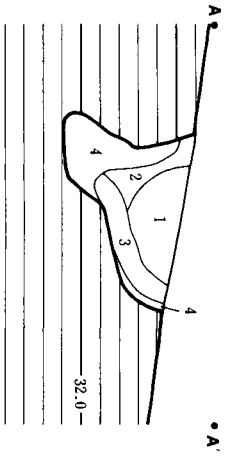
口は、長方形で、かなり細長い。大きさは、２m×0.55mである。口から西側へ斜めに掘り込まれている。東側の壁の途中に小さな段がある。底の形も口と同じく長方形であるが、かなり歪んでいる。大きさは、1.55m×0.3mである。土坑の深さは、0.65mである。

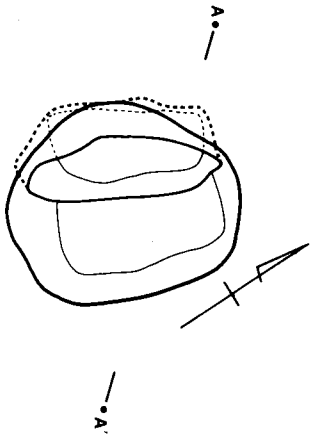
こうした掘り方がされていることからみて、この土坑も土坑墓の可能性が高い。しかし、この土坑でも、遺体や副葬品はみつからなかった。覆土中からも土師器の細片しか出土しなかった。

第４号土坑（012）（第22図、図版７）

調査区域の南端に近いところに位置する。台地の斜面である。斜面の傾斜は結構きつい。第２号土坑の南17mにある。南側はほぼ半分は木の根により撹乱されて原状をとどめていなかった。

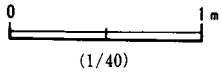
推定される形と大きさは、つぎの通りである。口は長方形であったと思われる。1.5m以上×0.9mの大きさが少なくともあったであろう。底も長方形であったと思われる。1.2m以上×0.45mの





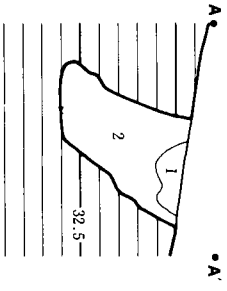
土層説明

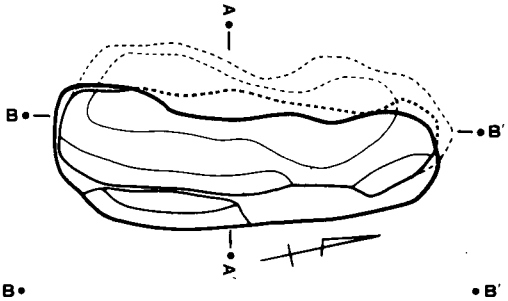
1. ハードローム細粒混黒褐色土
2. 黄褐色土
3. ハードローム細粒混暗褐色土
4. 新期テフラにハードロームブロックが混じる暗黄褐色土

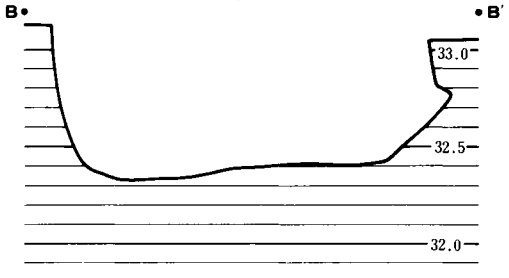


(1/40)

第2号土坑(007)

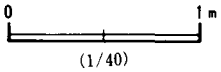






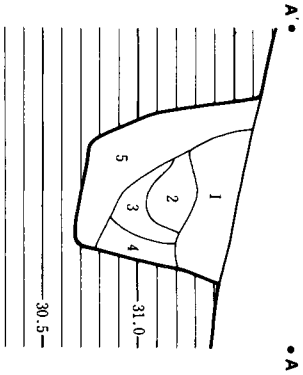
土層説明

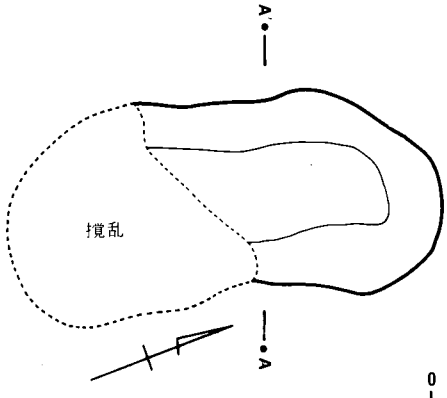
1. ハードロームブロック混黒褐色土
2. ハードロームブロック粒多混黄褐色土



(1/40)

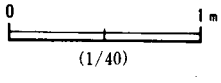
第3号土坑(011)





土層説明

1. ソフトローム多量混焼土粒混黄褐色土
2. 黒褐色土
3. 新期テフラと黒褐色土から成る褐色土
4. 新期テフラの暗黄褐色土
5. ハードロームブロック主体で、間にソフトロームが混じる暗黄色土



(1/40)

第4号土坑(012)

第22図　第2・3・4号土坑実測図 (021-007・011・012)

大きさが少なくともあったであろう。土坑の深さは、0.8mである。

第1～3号の土坑と異なって、底の方が横に掘り込まれているという様子はみられない。土坑墓とは違うのではないかと思われる。性格はつかめない。覆土中からは土器の細片が出土しただけである。

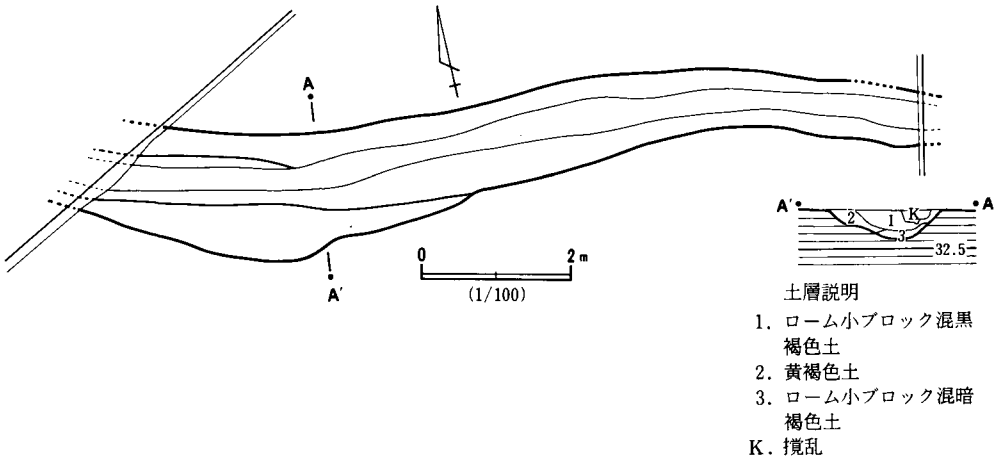
溝（014）（第23図、図版2）

調査区域の北隅に位置する。台地の斜面である。西から東へ斜面の傾斜に沿って走っている。調査区域の西側にも東側にも伸びていよう。

大きさは、幅0.7～1.6m、深さ0.2～0.5mである。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。

古い道のあとと思われる。覆土中からは、国分期の土師器片、須恵器片と灰釉陶器片が出土した。

この他に、図示せず、詳細な報告はしないが、炭焼穴が5つ、ヒョウタン形の炭窯跡が1つみつかった。炭焼穴は2m×1m前後の長方形のもの4つ、2m×2m前後の正方形のもの1つで、炭窯跡は、長軸5.5m前後である。炭焼穴は台地の斜面部と平坦部に、炭窯跡は平坦部につくられていた。



第23図　溝実測図（021-014）

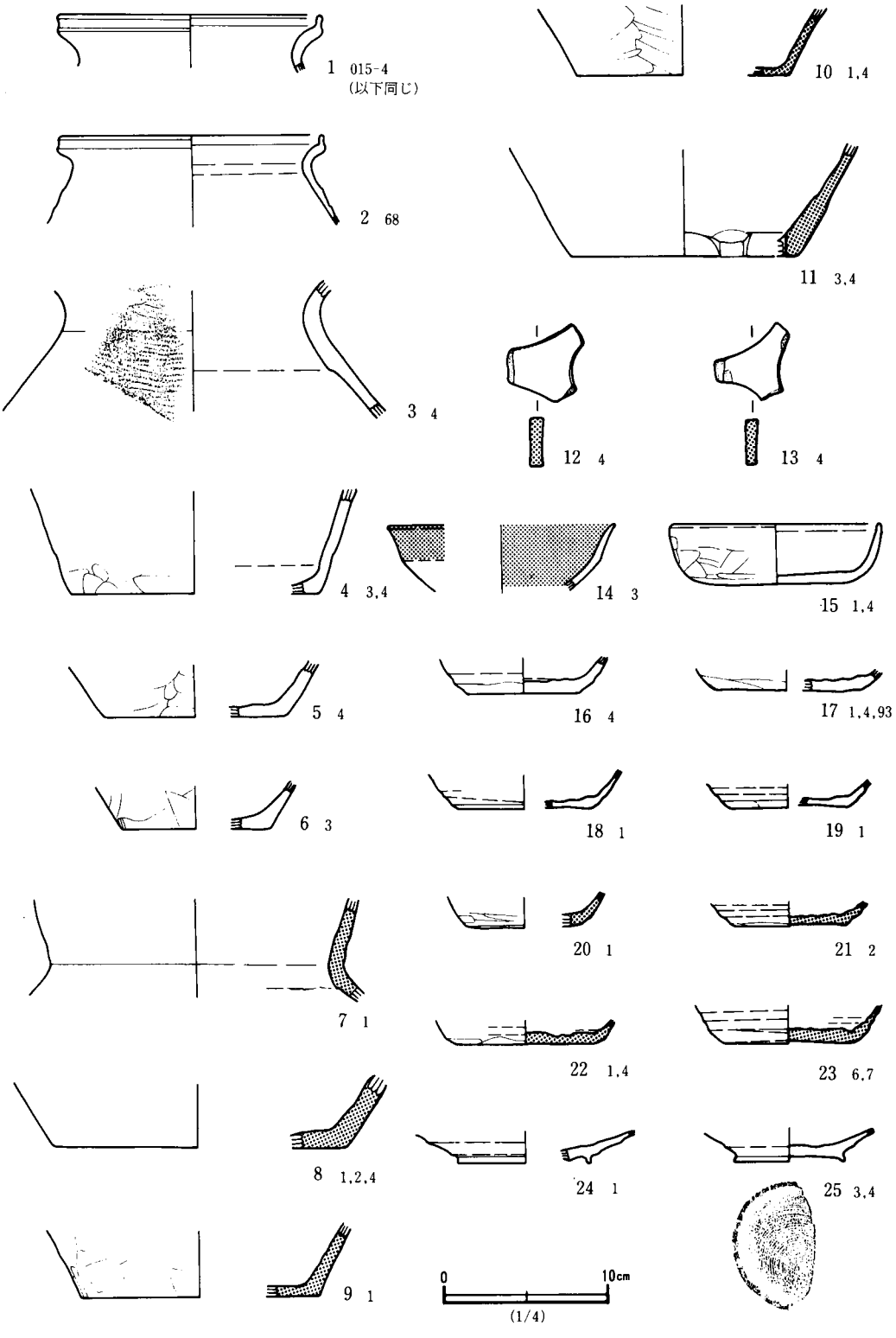
(1)遺　物

今回の調査区域では、歴史時代（国分期）の土師器と須恵器の破片が比較的目立った。そのうちの主なものを第24～26図、第6・7表で紹介する。

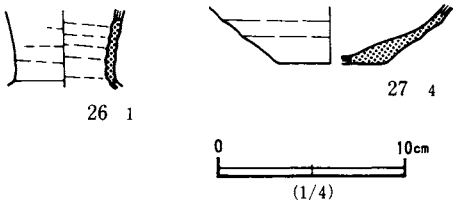
本調査の前に古墳の周辺はバックホウで表土剝ぎをおこなってしまったのに対し古墳の部分は人手で表土の除去をおこなったというちがいはあるが、古墳の周辺で国分期の土師器片、須恵器片が目立った（第24・25図）。住居跡の住人が棄てたものであろうか。

復原を試みたが、あまり形になるものはなかった。

また、ト21－9グリッドで、6cm×4cm×2cmほどの大きさの鉄滓片がみつかっている。



第24図　古墳周辺出土土器 (1)



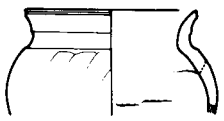
第25図　古墳周辺出土土器 (2)

第 6 表　古墳周辺出土土器観察表

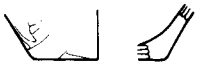
須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	甕	–	158	–	–	口 頸 部 1/6	良	淡黄褐色	やや粗長石粒多雲母多	外	口	ヨコナデ	胴	–	底	–		–	遺物番号の1～4は表土、旧表土中一括。
										内	口	ヨコナデ	胴	–	底	–			
2	甕	–	155	–	–	[ ] 頸 部 1/4	良	灰色	密長石粒多雲母	外	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	–		–	周溝覆土上層出土。
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	–			
3	甕	–	–	–	–	頸 部 1/3	良	淡黄褐色	密微粒石	外	口	ヨコナデ	胴	タタキ	底	–		–	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	–			
4	甕	–	–	150	–	底 部 1/4	良	外面黒色ないし褐色内面褐色	密	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	ナデ		–	内面は細かくヒビ割れる。
										内	口	–	胴	ナデ？	底	ナデ？			
5	小型甕	–	–	110	–	底 部 1/8	良	赤褐色	密	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ		–	内面は細かくヒビ割れる。
										内	口	–	胴	ナデ？	底	ナデ			
6	小型甕	–	–	90	–	底 部 1/8	良	赤褐色	密	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	ヘラケズリナデ		–	内面は一部が細かくヒビ割れる。
										内	口	–	胴	ナデ	底	ナデ？			
7	須恵甕	–	–	–	–	頸 部 1/4	良	灰色	密	外	口	ロクロ	胴	タタキ	底	–		–	
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	–			
8	須恵甕	–	–	175	–	底 部 1/3	良	青灰色	やや粗長石粒多	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	ナデ		–	
										内	口	–	胴	ナデ	底	ナデ			
9	須恵甕	–	–	146	–	底 部 1/4	良	灰色	密	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	不明		–	
										内	口	–	胴	ナデ	底	ナデ			
10	須恵甕	–	–	130	–	底 部 1/3	良	灰色	密砂粒	外	口	–	胴	ヘラケズリ	底	不明		–	
										内	口	–	胴	ナデ	底	ナデ			
11	須恵甑	–	–	137	–	底 部 1/4	良	淡黄灰色	密砂粒多微粒石雲母	外	口	–	胴	不明	底	不明		–	外面は磨耗。
										内	口	–	胴	ナデ	底	ナデ			
12	須恵甑底	–	–	–	–	–	良	褐色ないし灰色	密砂粒多雲母	外	口	–	胴	–	底	–		–	13と同じ甑のものだろう。
										内	口	–	胴	–	底	–			
13	須恵甑底	–	–	–	–	–	良	褐色ないし灰色	密砂粒多雲母	外	口	–	胴	–	底	–		–	
										内	口	–	胴	–	底	–			
14	坏	–	138	–	–	上 半 部 1/6	良	黄褐色	密	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	–		–	内、外面とも赤彩されている。
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	–			

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
15	坏	35	127	80	−	1/4	良	淡黄褐色	密	外	口	ヘラケズリ ナデ	胴	ヘラケズリ ナデ	底	ヘラケズリ ナデ		−	
										内	口	ナデ	胴	ナデ	底	ナデ			
16	坏	−	−	68	−	底部 1/2	良	淡黄褐色	密	外	口	−	胴	ナデ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		−	回ヘラは回転ヘラケズリ。以下同じ。
										内	口	−	胴	ロクロ ナデ	底	ロクロ			
17	坏	−	−	90	−	底部 4/5	良	赤褐色	密 微粒石	外	口	−	胴	下部手ヘラ	底	手ヘラ		93は周溝内一括	手ヘラは手持ちヘラケズリ。以下同じ。
										内	口	−	胴	不明	底	ロクロ			
18	坏	−	−	80	−	底部 1/4	良	黒色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	手ヘラ ナデ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
19	坏	−	−	70	−	底部 1/4	良	黒色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
20	須恵坏	−	−	72	−	底部 1/3	良	淡黄灰色	やや粗	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	手ヘラ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
21	須恵坏	−	−	66	−	底部 1/4	良	青灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
22	須恵坏	−	−	84	−	底部 1/2	良	灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
23	須恵坏	−	−	75	−	底部 4/5	良	灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		6、7とも攪乱中出土	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
24	皿	−	−	81	−	底部 1/2	良	淡黄褐色	密	外	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ		−	内面は細かくヒビ割れる。
										内	口	−	胴	不明	底	不明			
25	皿	−	−	66	−	底部 1/4	良	赤褐色	密	外	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ		−	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
26	須恵長頸壺	−	−	−	−	頸部 全周	優	灰色	緻密	外	口	ロクロ	胴	−	底	−		−	斑状に細かく緑色の釉がかかる。
										内	口	ロクロ	胴	−	底	−			
27	須恵長頸壺	−	−	55	−	底部 1/4	優	灰色	緻密	外	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ?		−	内面全体に緑色の釉がかかる。
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			

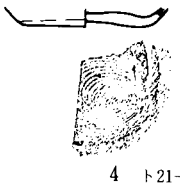


1 ト21-9-1

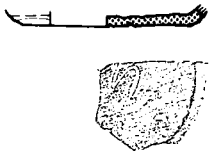


2 ト21-9-1

3 ト21-9-1

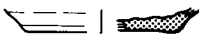


4 ト21-14-1

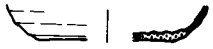


5 ト21-15-1

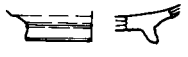
6 ト21-9-1



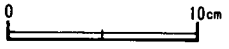
7 ト21-15-1



8 ト21-14-1



9 ト21-15-1



(1/4)

第26図　グリッド出土土器

第7表　グリッド出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	小型甕	−	89	−	111	口頸部 1/4	良	外面黄褐色 内面赤褐色	密 砂粒多	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ ナデ	底	−		表採	
										内	口	ナデ	胴	ナデ	底	−			
2	小型甕	−	−	69	−	底部 1/4	良	赤褐色	密 砂粒多 微粒石	外	口	−	胴	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ		表採	
										内	口	−	胴	ナデ	底	ナデ			
3	小型甕	−	−	82	−	底部 1/4	良	黄褐色	やや粗 長石粒多	外	口	−	胴	ヘラケズリ ミガキ	底	ナデ		表採	
										内	口	−	胴	ナデ	底	ナデ			
4	坏	−	−	65	−	底部 1/4	良	黒色	密	外	口	−	胴	ロクロ	底	糸切り		表採	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
5	須恵坏	−	−	89	−	底部 1/4	良	灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ ヘラケズリ	底	手ヘラ		表採	外底面に窯印がある。
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
6	須恵坏	−	−	65	−	底部 1/2	良	灰色	やや粗	外	口	−	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		表採	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
7	須恵坏	−	−	80	−	底部 1/4	良	灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		表採	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
8	須恵坏	−	−	72	−	底部 1/4	良	灰色	密	外	口	−	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		表採	
										内	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ			
9	皿	−	−	68	−	底部 1/3	良	外面淡黄褐色 内面黒色	密	外	口	−	胴	ロクロ	底	ロクロ ナデつけ		表採	
										内	口	−	胴	ていねいな ミガキ	底	ていねいな ミガキ			

第6節　ま　と　め

第2節から第5節までで記したところをまとめると、今回調査した向山谷津遺跡の概要はつぎの通りである。

先土器時代

関東ロームのⅧ層中から、石器集中、炉跡と思われる焼土遺構、炭化物片の集中の3つが接近した状態でみつかった。先土器時代の遺構としては佐倉第三工業団地内でも古いものである。

縄文時代

遺構はみつからなかった。遺物は、前期・中期・後期の土器片と、石器が出土した。

古墳時代

古墳（円墳）が1つみつかった。南西側の4分の1強が失なわれた上、墳丘もほとんどなかった。埋葬施設もなかった。

立地とすれば、台地の突端にあるので、目立ったことであろう。

佐倉第三工業団地内の古墳の分布をみると、腰巻遺跡を含めて団地内の西側と南側の縁辺の台

地上では、あまりみつかっていない。古墳のみつかったのは、この向山谷津遺跡と、一緒に本書で報告する明代台遺跡B地点だけである。明代台遺跡B地点の古墳は方墳である（第4章第4節）。

歴史時代

住居跡1、土坑4、溝1がみつかった。土坑のうち3は土坑墓と思われる。

住居跡は、単独とも思われるが、住居跡群のはずれの可能性がある。後述するように、南側に谷をはさんである明代台遺跡A地点にも同じ国分期の住居跡がある（第3章第4節）。また、やや離れるが、木戸場遺跡のB地点でも、2つの国分期の住居跡がみつかっている（第6章第4節）。

土坑墓だと思われる第1～3号の土坑と同じ構造の底の方が横へ掘り込まれた土坑は、明代台遺跡B地点でもみつかっている（第4章第5節）。このタイプの土坑墓の佐倉第三工業団地内の他の遺跡での検出例については、明代台遺跡B地点の第6節小結で触れる。

第３章　明代台遺跡Ａ地点

第１節　立地と環境

明代台遺跡Ａ地点は、佐倉市神門字向山谷津642－１に所在した。第２章の向山谷津遺跡の谷をはさんだ南側の台地上である。小字でいうと向山谷津であるが、地形の上からみると、明代台遺跡と同じ台地の上にあって、向山谷津遺跡とのあいだには小さいとはいえ深い谷が入るので、遺跡名を明代台遺跡とした。

明代台遺跡Ａ地点の立地する台地は、北東へ向って突き出した小さな三角形のもので、東側と西側に谷がある。西側のものは深い。東側のものは浅い。東側の浅い谷のさらに東に明代台遺跡Ｂ地点がある。Ｂ地点の東にＣ地点がある（第２図）。

Ａ地点の調査区域は、所在する小さな台地の東側および北側の、平坦面から肩口にかけてである。広さは1,200㎡である（第27図、図版11）。

Ａ地点の所在する小さな台地の平坦面の標高は35.00m前後で、これに対して、台地の下の水田面の標高は20.00m弱であり、両者の比高差は15.00m前後である。

Ａ地点の原状は、山林及び畑であった。

第２節　先土器時代

先土器時代の遺構としては、関東ロームのIII層中で、彫器と側削器が、１点ずつであるが、近接した状態で出土した（第28図）。

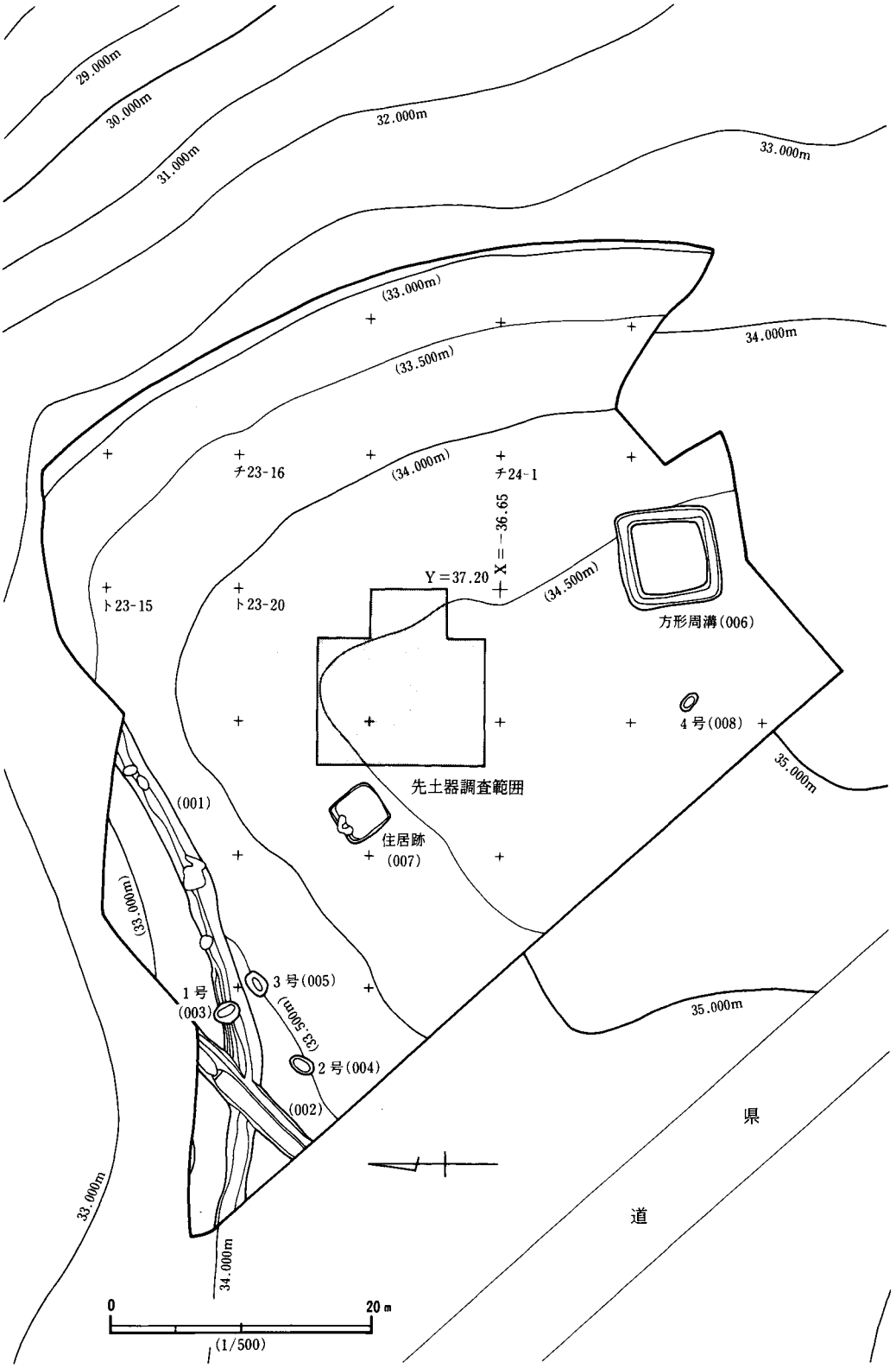
この他に、先土器時代の遺物として、端削器１点が採集できた。

以上の石器と剝片は、つぎのようである（第29図、第８表、図版11・15）。

１は、白色の良質な珪質頁岩製の彫器。素材は多面体石核からとられた縦長の剝片である。背面の剝離面を打面とした２条の細い刻打痕がみてとれる。この刻打面に近い側稜には、長さ11㎜にわたって微細剝離痕がつづいている。なお、刻打痕のある剝離は、背面を打面とする大きな剝離面から構成される。

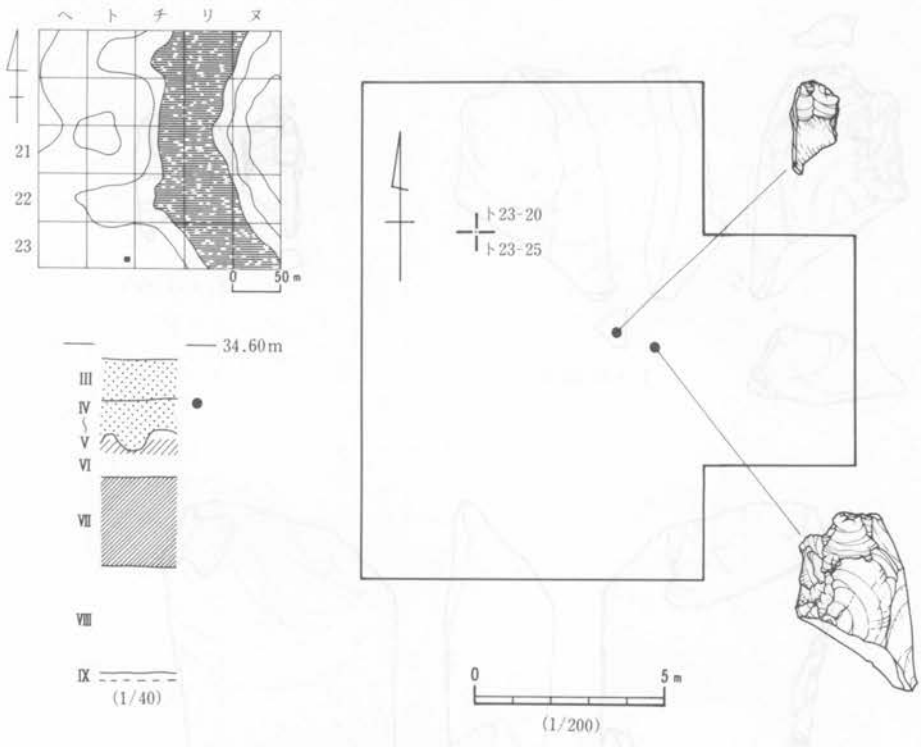
２は、背面に節理面をのこす縦長の剝片の、背面右側縁に付刃した側削器であろう。

３は、凝灰質の細粒砂岩礫を素材とした大型の端削器である。円礫からとった、原礫面をよくのこす部厚い剝片を素材にしている。原礫面は、背面によくのこる。刃部は、背面の右側縁上半を除く全周にわたってつくり出されているが、図の下端部分に特に入念な剝離が加えられていて、急傾斜する典型的な端削縁がつくり出されている。



第27図　明代台遺跡A地点全測図（027）

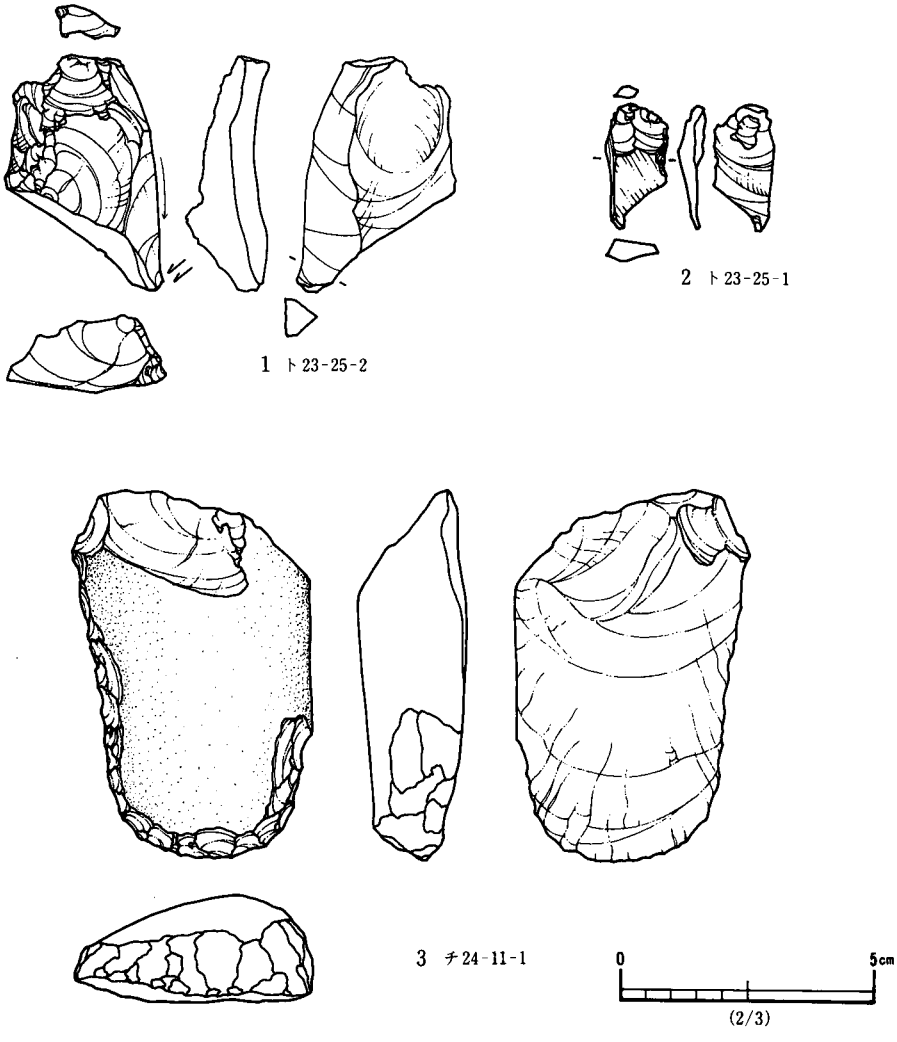
（　）内は、ソフトローム層面の高さ



第28図　先土器時代石器出土状況

第 8 表　先土器時代石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
ト23−25−1	側削器	チャート	24.2	11.8	4.0	0.9	2	完形
ト23−25−2	彫器	頁岩	45.2	32.3	14.9	14.3	1	完形
チ24−11−1	端削器	細粒砂岩	73.7	45.0	20.1	81.0	3	刃部と反対の縁が少し欠



第29図　先土器時代出土石器

第3節　縄文時代

縄文時代については、遺構として土坑が4つみつかったほか、10点の土器片と1点の石器が得られた。

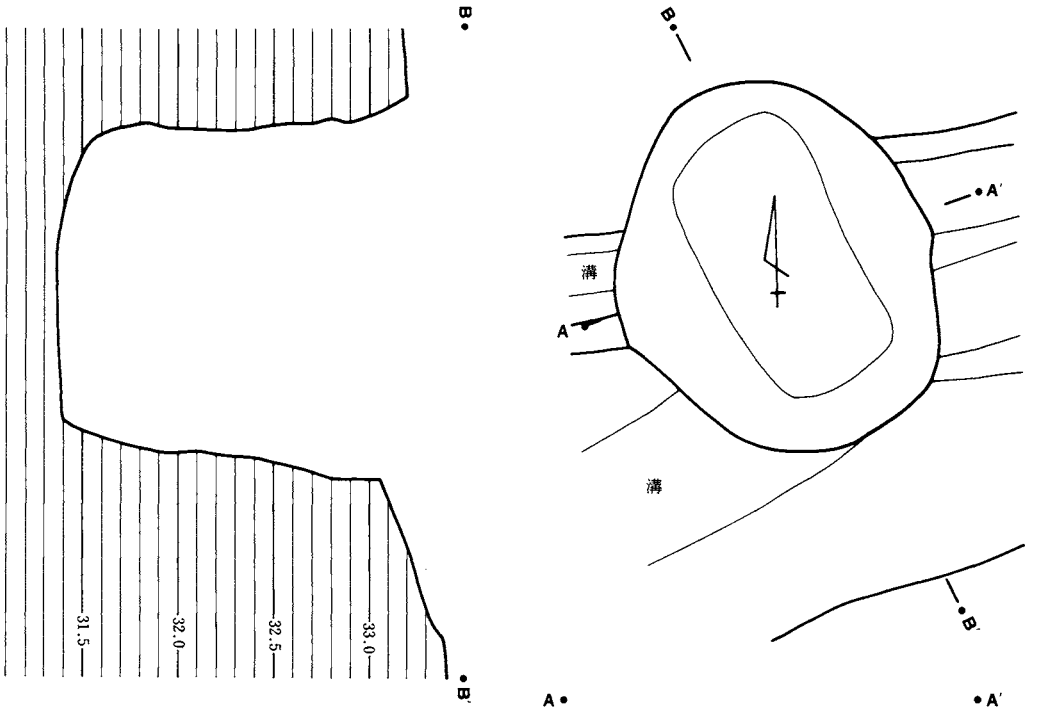
(1)遺　構

第1号土坑（003）（第30図、図版12）

調査区域の北西隅近くに位置する。台地の肩口である。北西の方向へゆるく傾斜する。土坑の長軸の方向も北西を向いている。

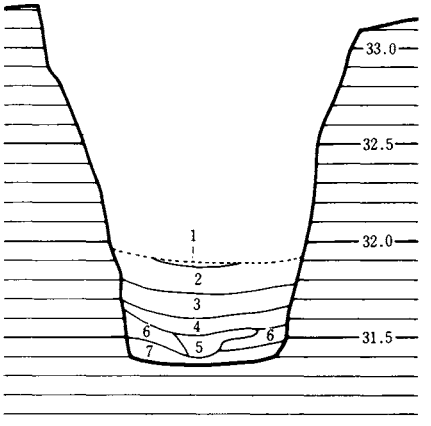
口の部分のうち南側4分の3程度は、比較的最近の溝によって削られてしまっていた。

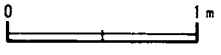
大きさは、口が2m×1.6m、底が1.45m×0.75mである。深さは1.8mである。



土層説明

1. 黄色ハードローム小ブロック（しまっている）
2. 黄色ハードロームブロックが少し混入する褐色ローム層(堅緻)
3. 黄色ハードローム小ブロック層(軟質)
4. 黄色ハードローム小ブロックが多く混入する暗褐色土層(しまっている)
5. 黄色ハードローム小ブロックが多く混入する黒褐色土層(軟弱)
6. 黄褐色ハードローム小ブロック層(しまっている)
7. 黄色ハードローム小ブロックが多く混入する暗褐色土層





(1/40)

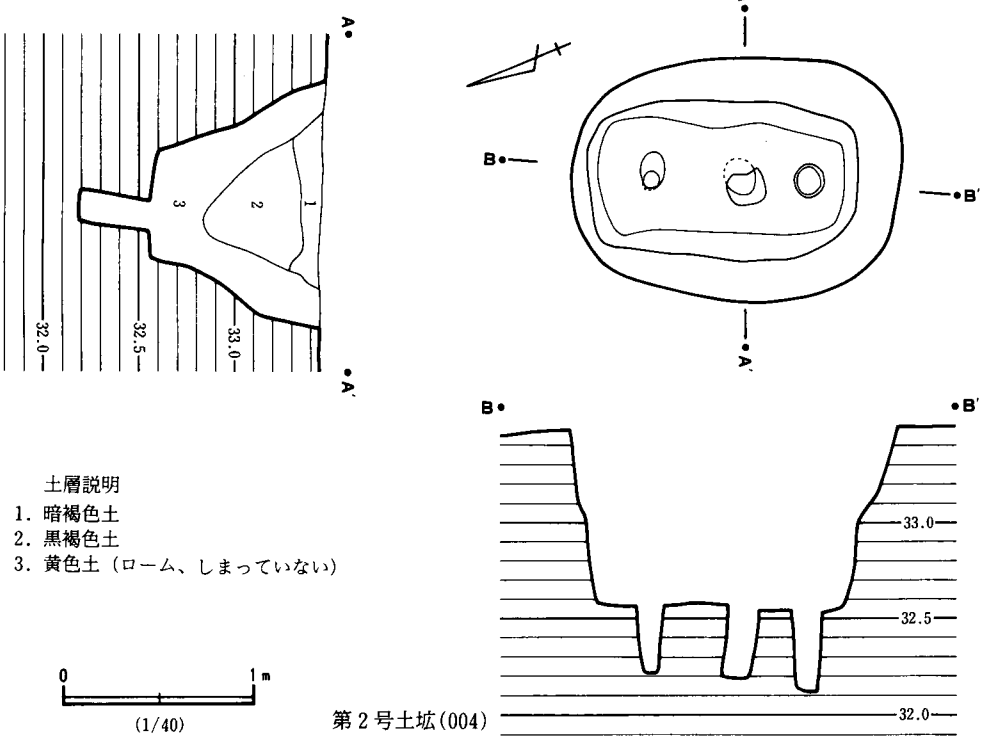
第30図　第１号土坑実測図（027-003）

口のかたちは楕円形であって大きく、底の方へ向ってすぼまっており、底は長方形である。この構造と大きさからみて、この土坑は落し穴であろう。

覆土は、セクションを底の方しか観察できなかったが、ハードローム小ブロックが目立った。遺物は出土しなかった。

第２号土坑（004）（第31図、図版12）

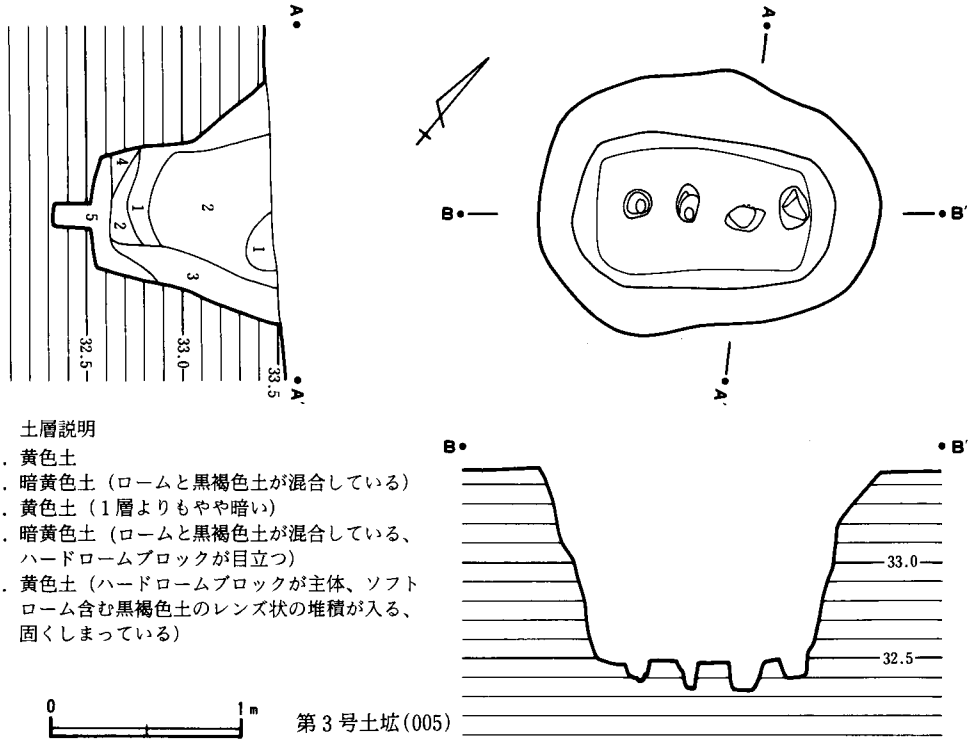
第１号土坑と同じく、調査区域の北西隅近くに位置する。台地の肩口である。北西の方向へゆるく傾斜する。土坑の長軸は、傾斜の方向に直交気味である。第１号土坑よりも少し高いところ



土層説明
1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 黄色土（ローム、しまっていない）

0 1m
(1/40)

第2号土坑(004)



土層説明
1. 黄色土
2. 暗黄色土（ロームと黒褐色土が混合している）
3. 黄色土（1層よりもやや暗い）
4. 暗黄色土（ロームと黒褐色土が混合している、ハードロームブロックが目立つ）
5. 黄色土（ハードロームブロックが主体、ソフトローム含む黒褐色土のレンズ状の堆積が入る、固くしまっている）

0 1m
(1/40)

第3号土坑(005)

第31図　第2・3号土坑実測図（027-004,005）

にある。

大きさは、口が1.7m×1.3m、底が1.3m×0.55mである。深さは0.9mである。

口はかたちが隅丸長方形で大きく、底の方へ向ってすぼまっており、途中で壁の傾斜が急になって底は長方形である。底には、杭をすえたと思われる穴が3つみつかった。この構造と大きさからみて、この土坑は落し穴であろう。

覆土は、ロームが底の方に厚く堆積していた。遺物は出土しなかった。

第3号土坑（005）（第31図、図版13）

第1号、第2号の土坑と同じく、調査区域の北西隅近くに位置する。第1号土坑の南東3m、第2号土坑の北東7mである。台地の肩口である。北西の方向へゆるく傾斜する。土坑の長軸は、傾斜の方向に直交する。第2号土坑と同じ標高のところにある。

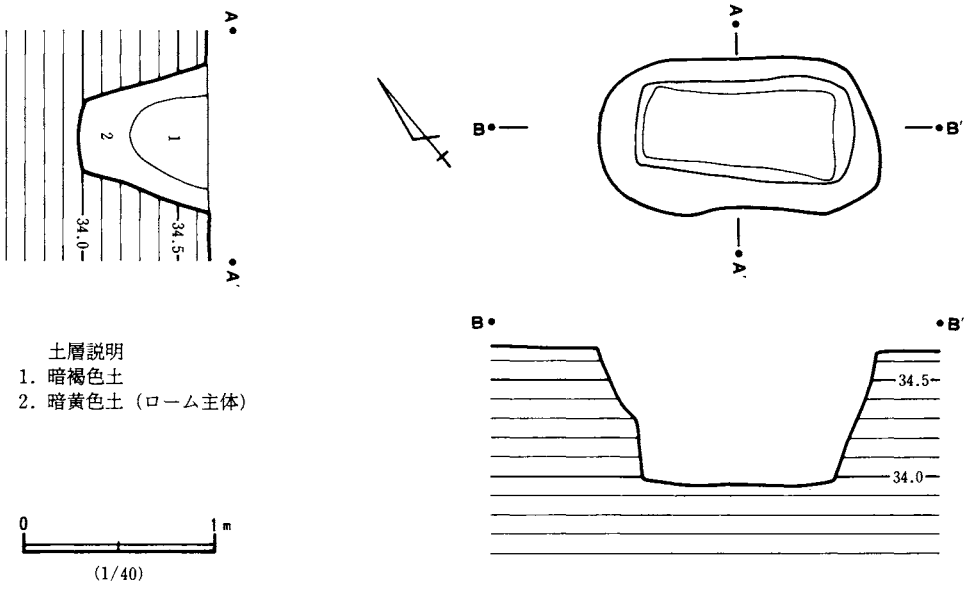
大きさは、口が1.8m×1.3m、底が1.1m×0.6mである。深さは0.95mである。

口はかたちがやや歪んだ小判形で大きく、底の方へ向ってすぼまっており、途中で壁の傾斜が急になって底は長方形である。底には、杭をすえたと思われる穴が4つみつかった。この構造と大きさからみて、この土坑は落し穴であろう。

覆土にはロームが目立った。注目されるのは第5層で、底の杭をすえる穴が浅いので、すえた杭がグラグラしないように底に第5層を1枚敷いて支えたものかもしれない。遺物は出土しなかった。

第4号土坑（008）（第32図、図版13）

調査区域の南隅近くに位置する。第1号～第3号の土坑からは40m近く離れる。また、第1号～第3号の土坑が台地の肩口にあるのに対して、この土坑は台地の平坦面にある。



第32図　第4号土坑実測図（027-008）

大きさは、口が1.4m×0.75m、底が1.0m×0.4mである。深さは0.7mである。

口はかたちがやや歪んだ小判形で大きく、底の方へ向ってすぼまっており、底は長方形である。この構造と大きさからみて、この土坑は落し穴であろう。

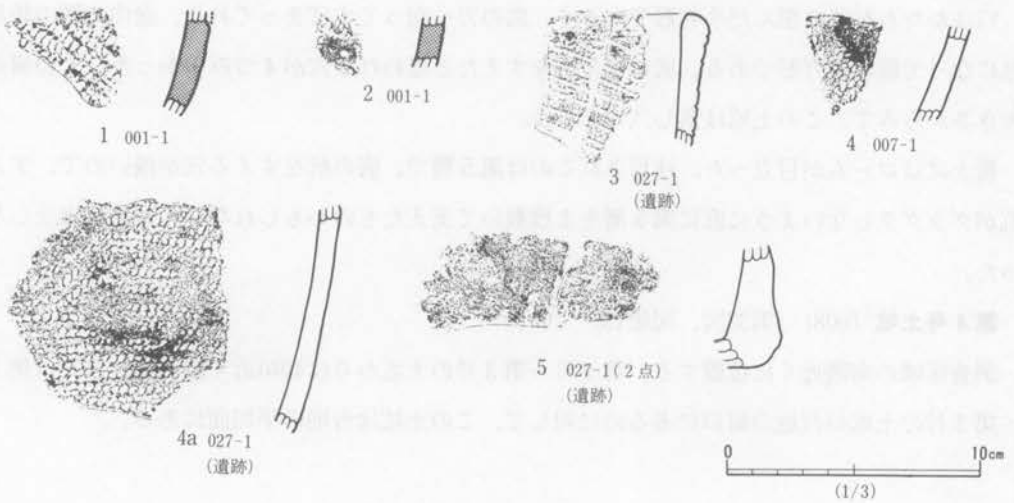
覆土は、ロームが底の方に厚く堆積していた。遺物は出土しなかった。

調査によって得られた遺物は、この節の冒頭に記したように、10点の土器片と1点の石器である。

(2)遺　物

土　器（第33図、第9表、図版15）

斜行縄文の黒浜式が2個体各1点（1・2）、加曽利B式の粗製深鉢が4個体5点（3・4・4a）、他に底部1点（5）を含む型式不明のものが4点である。



第33図　縄文土器

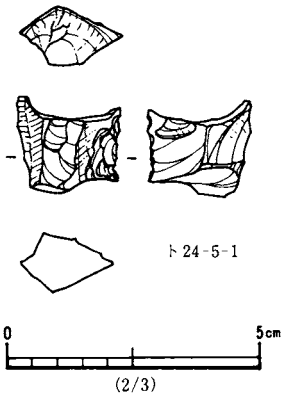
第9表　縄文土器観察表

胎土の0、+、−は普通、多、少を焼成の0、+、−は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎　土	焼成	色　調	せ い け い	施　文	備　考
1	微細砂0　繊維+	−	明　褐　色	?	RL	
2	微細砂0　繊維+	0	赤　褐　色	?	RL	
3	細砂粒0	+	明　褐　色	内面弱いナデ	沈線	
4	細砂粒0	+	明　褐　色	?	LR	
5	細砂粒+	0	赤　褐　色	?	なし	

石　器（第34図、表ナシ、図版15）

チャート製で、剝片の破片らしい。縁辺に細かい剝離の痕があり、削器の可能性がある。重量3.9gである。



第34図　縄文時代出土石器

第4節　歴史時代

歴史時代の遺構は、住居跡2（新、旧重なる）、方形周溝1、溝2がみつかった。

住居跡（旧）（007）（第35～37図、第10表、図版15）

調査区域の中央よりやや西寄りに位置する。台地の平坦面であるが、北西方向へゆるく傾斜している。

平面形態は、正方形に近い。主軸に沿って縦長である。北西と南東の辺が2.9mと3.2mで、北東と南西の辺が3.4mと3.3mであるのにくらべて少し短かめである。主軸の方向は、N—40°—Wである。

壁は、高さが40cm前後であり、立ち上がりの角度は、ゆるく外ひろがりであったと思われるが、壁の上の方は、住居跡（新）によって壊されている可能性がある。

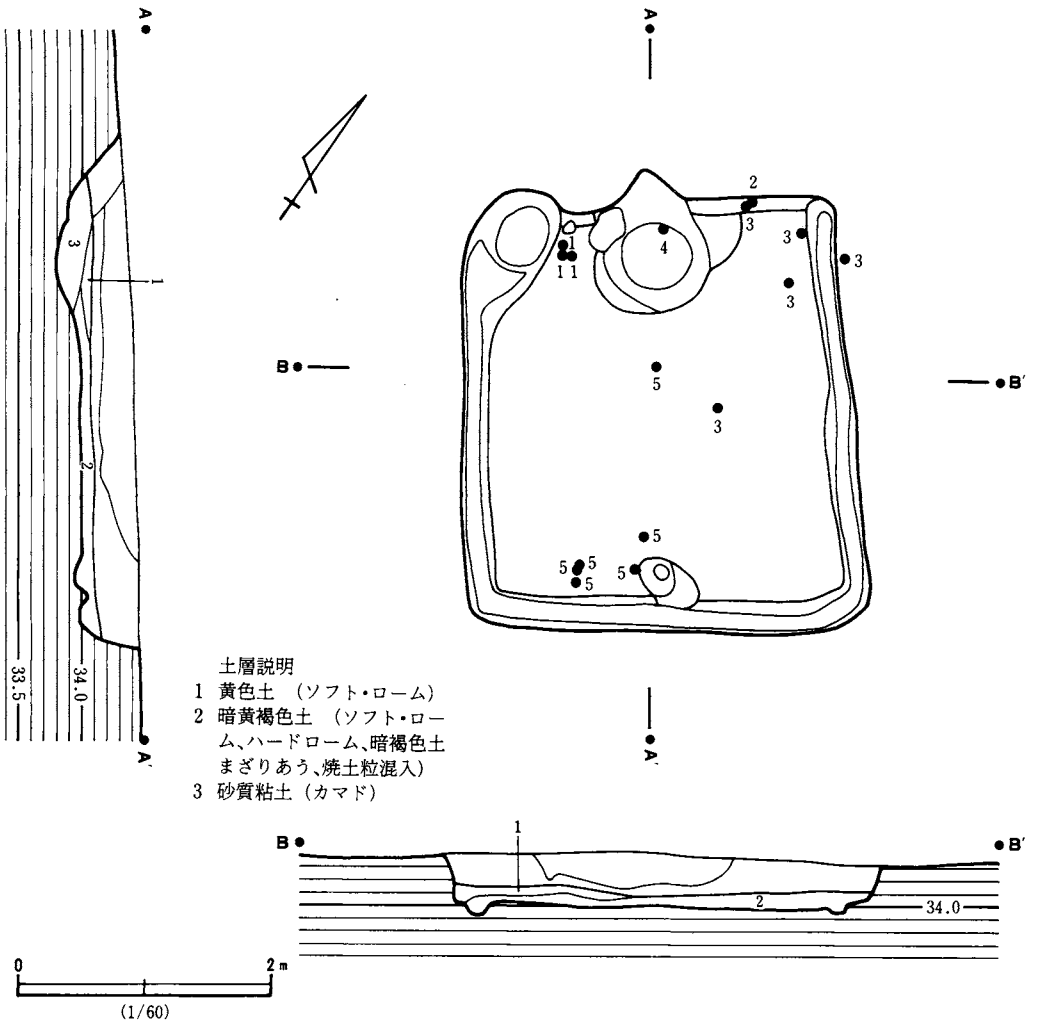
床面は、ハードロームをほぼ平らに削り出して床としている。壁溝が、カマドの設けられた北西辺をのぞいて、ぐるりとコの字形にめぐっている。壁溝は、カマドの左脇にあたる住居跡の西隅で、広がり、円形の一段深いピットになっている。壁溝の深さは5cm～10cmであるのに対して、このピットの深さは20cmある。

柱穴はみつからなかった。カマドと向い合う南東辺の中央にピットが1つみつかった。

カマドは、北西壁の中央に位置していたが、ほとんど原状をとどめていなかった。火床の部分は、まわりよりも一段へこんでいたようである。煙道のための山形の掘り込みもみつかった。

完形あるいはそれに近い土器は出土しなかった。

土層断面図にみえる1層と2層は、覆土ではなく、住居跡（新）の貼り床とみるべきであろう。ただし、特にしまった様子もなかった。

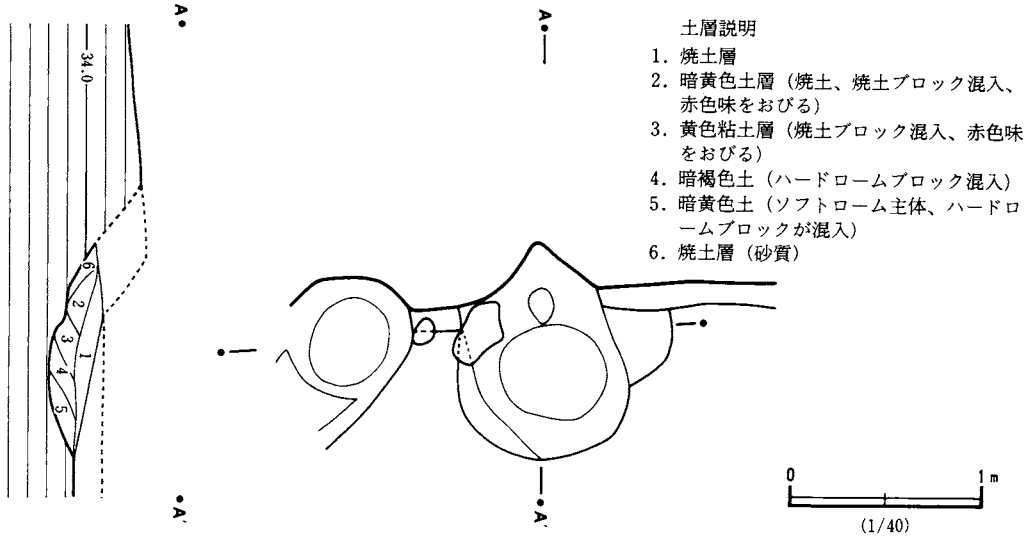


第35図　住居跡(旧)実測図 (027-007)

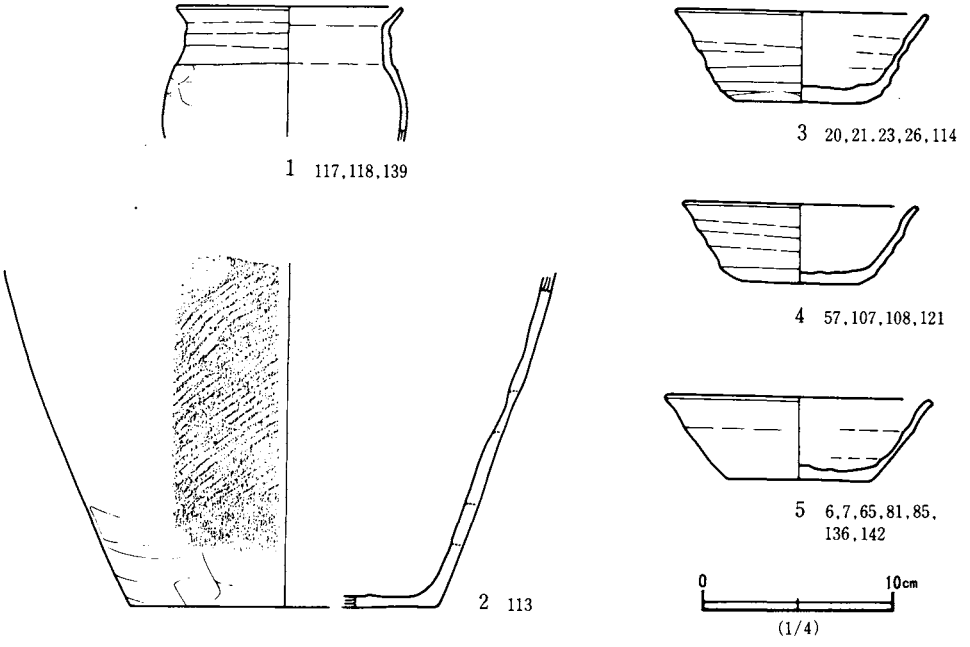
第10表　住居跡 (旧) 出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	小型甕	−	116	−	124	口頸部 1/4	良	赤褐色	密	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	−		−0.5 〜+4.0	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	−			
2	甕	−	−	160	−	胴下部 1/5	良	黄褐色ないし黒色	やや粗	外	口	−	胴	タタキ ヘラケズリ	底	ヘラケズリ?		−1.6	
										内	口	−	胴	ナデ	底	ナデ			
3	坏	47	130	67	−	底部全周 胴部 1/4	良	黒色	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		+2.2 〜+35.0	手ヘラは手持ちヘラケズリ。以下同じ
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			



第36図　住居跡(旧)カマド実測図（027-007）



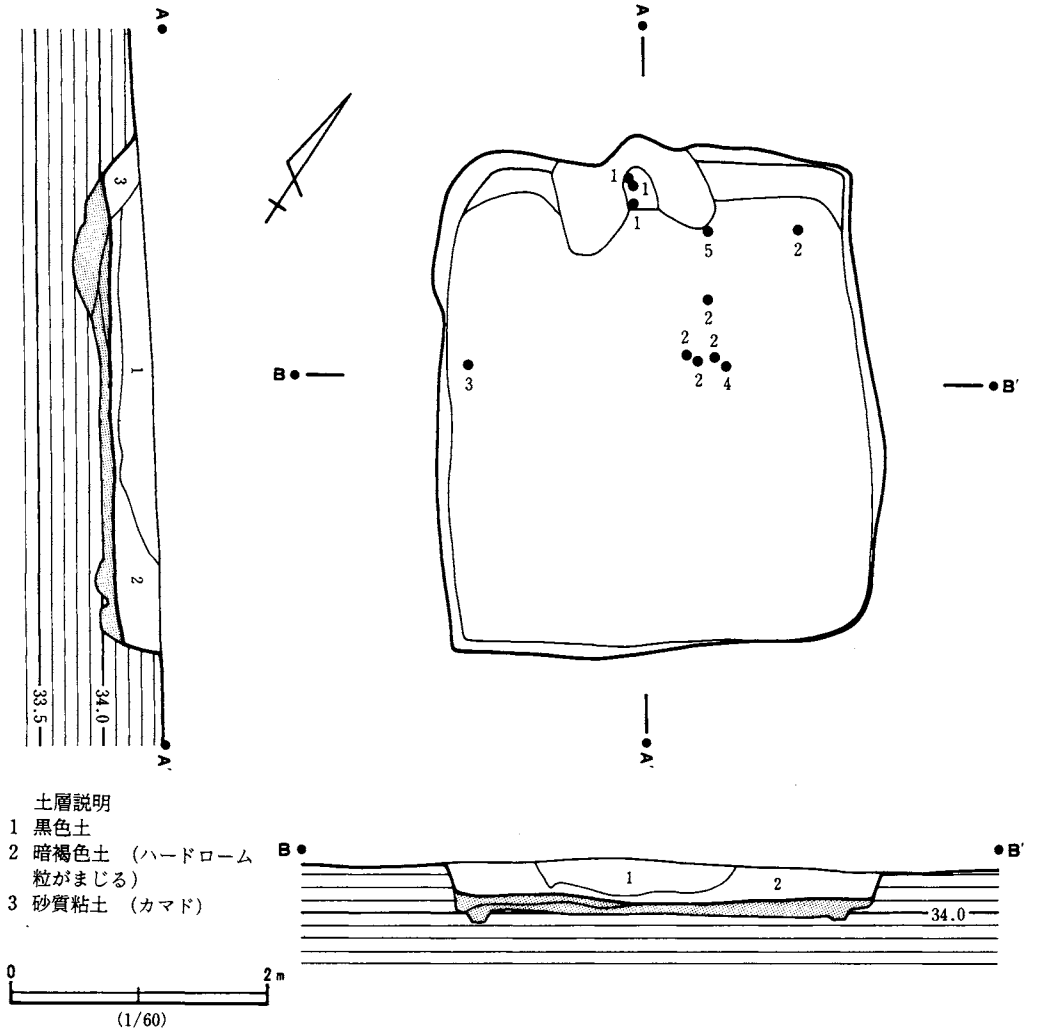
第37図　住居跡(旧)出土土器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
4	坏	41	122	60	−	⅔	良	赤褐色	密 微粒石	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部回ヘラ	底	回ヘラ		+3.7 カマド内	回ヘラは回転ヘラケズリ。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			
5	坏	42	138	74	−	½	良	黒色	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		床中 +4.1 ～+21.6	1点をのぞいてほかの破片は貼り床中出土。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			

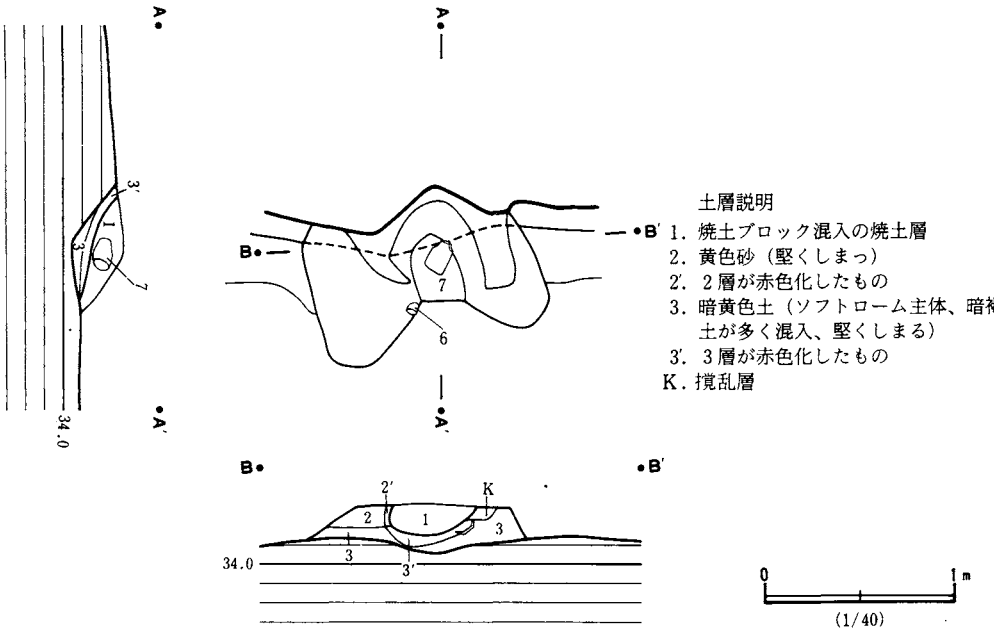
住居跡（新）（007）（第38～40図、第11表、図版14・15）

住居跡（旧）の上に、住居跡（新）が少し掘り広げて大きくしてつくられている。掘り広げられているのは、カマドのある北西の辺で、幅20cm～30cmである。この掘り広げられた部分の深さは、住居跡（旧）の床面の深さよりも一段浅くなっている。その深さにあわせて住居跡（旧）を埋めて貼り床をおこなっているようである。貼り床と見ずに、住居跡（旧）の覆土を途中まで掘ってやめ、住居跡（新）の床としたにしては、あまりにも（旧）と（新）がピッタリ重なり合いすぎていよう。

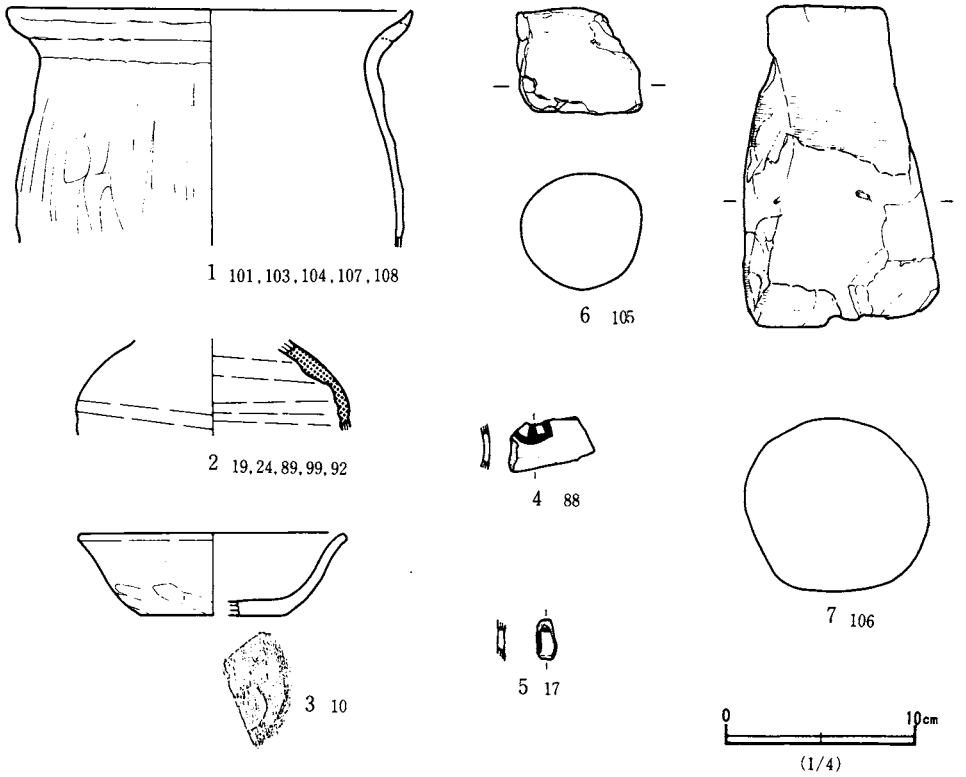
平面形態は、長方形である。主軸に沿って縦長である。北西と南東の辺が3.2mと3.4mで、北東と南西の辺が3.6mと3.8mであるのにくらべて短かめである。主軸の方向は、N—40°—Wである。



第38図　住居跡(新)実測図（027-007）



第39図　住居跡(新)カマド実測図（027-007）



第40図　住居跡(新)出土遺物

壁は、高さが30cm前後であるが、立ち上がり角度は、ゆるい外広がりである。

床面は、カマドのある北西辺の、住居跡（旧）を拡張した部分では、地山のソフトロームを平らに削り出して床としていたが、そのほかのところでは、床の全面にわたって貼り床をおこなっていた。土層断面図に示した灰色のところが貼り床である。

カマドは、北西壁の中央につくられていた。住居跡（旧）カマドの上にのっかった格好で、つくられていた。ロームの壁を幅60cm、奥行き20cmの山形に掘り込んで煙道がつくられていた。煙道の下側には土が１枚貼られており、その表面は、熱をうけて赤くなっていた。また、カマドの中からは支脚もみつかった。

出土した土器は破片ばかりであった。中に墨書土器の破片が２点含まれていた。

覆土は、レンズ状の堆積をしていた。

第11表　住居跡（新）出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	甕	－	210	－	202	口頸部全周	良	赤褐色	密	外 口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	－			カマド内土 カマド本体	口縁部に輪重痕
										内 口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	－				
2	須恵長頸壺	－	－	－	144	肩部 2/3	優	内面灰色	密 黒色鉱物	外 口	－	胴	ロクロ	底	－			+12.4～+24.5	外面全体に緑色の釉がかかる。
										内 口	－	胴	ロクロ	底	－				
3	坏	42	138	75	－	1/4	良	赤褐色	密	外 口	ロクロ	胴	ロクロ ヘラナデ	底	糸切り ナデ			+10.5	
										内 口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ				
4	墨書土器	－	－	－	－	－	優	外面褐色 内面黒色 研磨	密	外 口	－	胴	ロクロ ヘラケズリ？	底	－			+1.5	坏の胴部破片。 上下は図の通り。 墨書は外面。
										内 口	－	胴	ミガキ	底	－				
5	墨書土器	－	－	－	－	－	優	外面褐色 内面黒色 研磨	密	外 口	－	胴	ロクロ	底	－			+17.7	坏の胴部破片。 上下は不明。 墨書は外面。
										内 口	－	胴	ミガキ	底	－				
6	土製支脚	54	50	60	－	ほぼ完	－	褐色ないし赤褐色	やや粗砂粒多	外 口	－	胴	－	底	－			カマド内	
										内 口	－	胴	－	底	－				
7	土製支脚	164	64	80～105	－	1/5	－	赤褐色	やや粗砂粒多	外 口	－	胴	－	底	－			カマド内	
										内 口	－	胴	－	底	－				

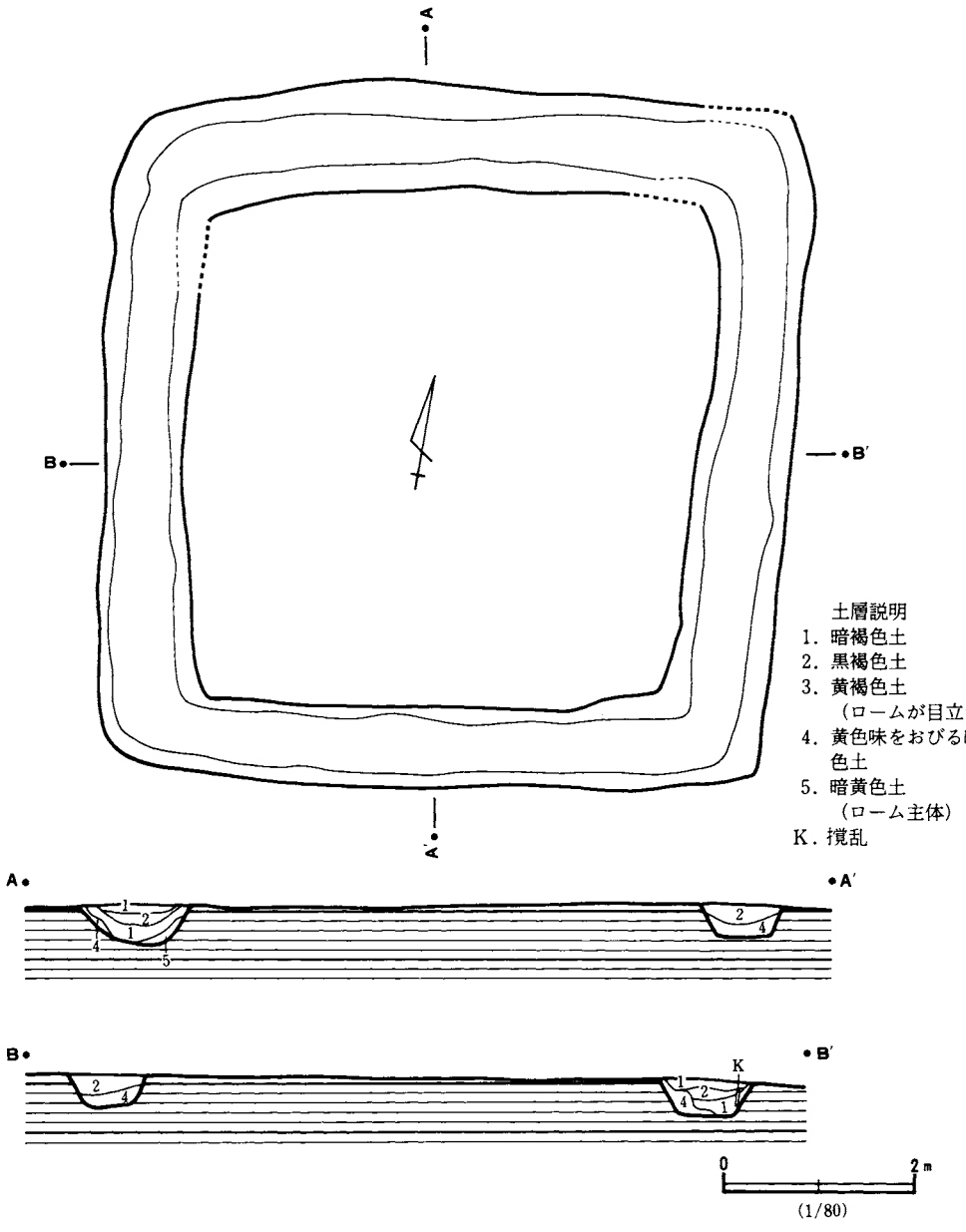
方形周溝（006）（第41図、図版14）

調査区域の南端に位置する。住居跡の南東30mにある。立地は、台地の平坦面上である。

平面形態は、正方形に近い。外周で測ると、４つの辺とも７m前後ある。西側の辺がほかの３つの辺にくらべてやや短い。周溝の掘られた向きをみると、４辺をほぼ東西南北にあわせて掘られている。周溝は、幅0.8～1.2m、深さ0.4m前後で、断面逆台形に掘られている。

周溝のほかには、盛り土の痕跡も土坑もみられなかった。

遺物は、周溝の覆土中から、縄文前期と思われる半截竹管による平行沈線のつけられた薄手の



第41図　方形周溝実測図（027-006）

胴部小破片と、国分期の小形土師甕の角ばった底部小破片の2点が出土したが、どちらも覆土の上層中のものである。

溝（001・002）（第27図）

調査区域の北側の縁辺および北西の隅において溝が2本みつかった。ともにかなり新しい年代のものと思われる。東西方向に走る長い方の溝（001）が新しい。旧い方の北東一南西方向に走る短い溝（002）は、断面が逆台形で、かなりきちんとした掘り方である。ところどころ底面がカリカリと硬くなっていた。道の跡であろう。これに対して、新しい東西方向に走る長い方の溝は、

掘り方がいいかげんである。あちらこちらに穴が掘られていた。おそらく、畑の地境溝あるいは根切溝であろう。

この他に、歴史時代の遺構として、図示せず、詳細な報告もしないが、炭焼穴9つがみつかった。2m×1～1.5m前後の長方形タイプが4つ、1.5m×1.5m前後の正方形タイプが4つ、直径1.5m前後のやや歪んだ円形タイプが1つである。台地の平坦部と肩口に散在していた。

第5節　ま　と　め

第2節から第4節までで記したところをまとめると、明代台遺跡A地点の概要はつぎの通りである。

先土器時代

関東ロームのIII層中から、彫器と側削器が1点ずつ出土した。表採の端削器もIII層中に含まれていたものであろう。谷をはさんで向い合う向山谷津遺跡で、VIII層中から石器集中などがかたまってみつかったが、それに相当する時期の遺構・遺物はみつからなかった。

縄文時代

4つの落し穴と思われる土坑がみつかった。第1号・第2号・第3号は近接しており、台地の肩口の、北西へ向ってゆるく傾斜する斜面にあった。第4号はこの3つから40m近く離れており、台地の平坦面にあった。第1号と第2号・第3号と第4号の3つのタイプに構造から分けることができる。第1号は、比較的大きめで深い。第2号・第3号は、底に杭を据えたピットがみられる。第4号はそのようなピットがみられない。4つとも、口は楕円形ないし小判形で、底は長方形である。落し穴と思われる同じような構造・規模の土坑は、明代台遺跡B地点でも3つみつかっている（第4章第3節）。遺物は土器片・石器が少々であった。

歴史時代

住居跡2、方形周溝1、溝2がみつかった。

住居跡は、旧い住居を拡張し、貼り床をすることで、新しい住居につくりかえている。谷をはさんで北側に位置する向山谷津遺跡でも、先述のように、同じ国分期の住居跡がみつかっている（第2章第5節）。

方形周溝は、同じ台地上を南東へ100m強離れたところに位置する明代台遺跡B地点で、後述するように、2つみつかっている。この方形周溝は、それらと一体になって群を形成していたものかもしれない。

溝は、新しいものである。

第４章　明代台遺跡Ｂ地点

第１節　立地と環境

本遺跡は、佐倉市神門字木戸場621番地他及び字明代台2219番地他に所在した。調査当時は、木戸場II遺跡と称していたが、今回報告するにあたり、字区分より台地区分を優先させ、便宜上明代台遺跡Ｂ地点とした（第42図、図版16)。

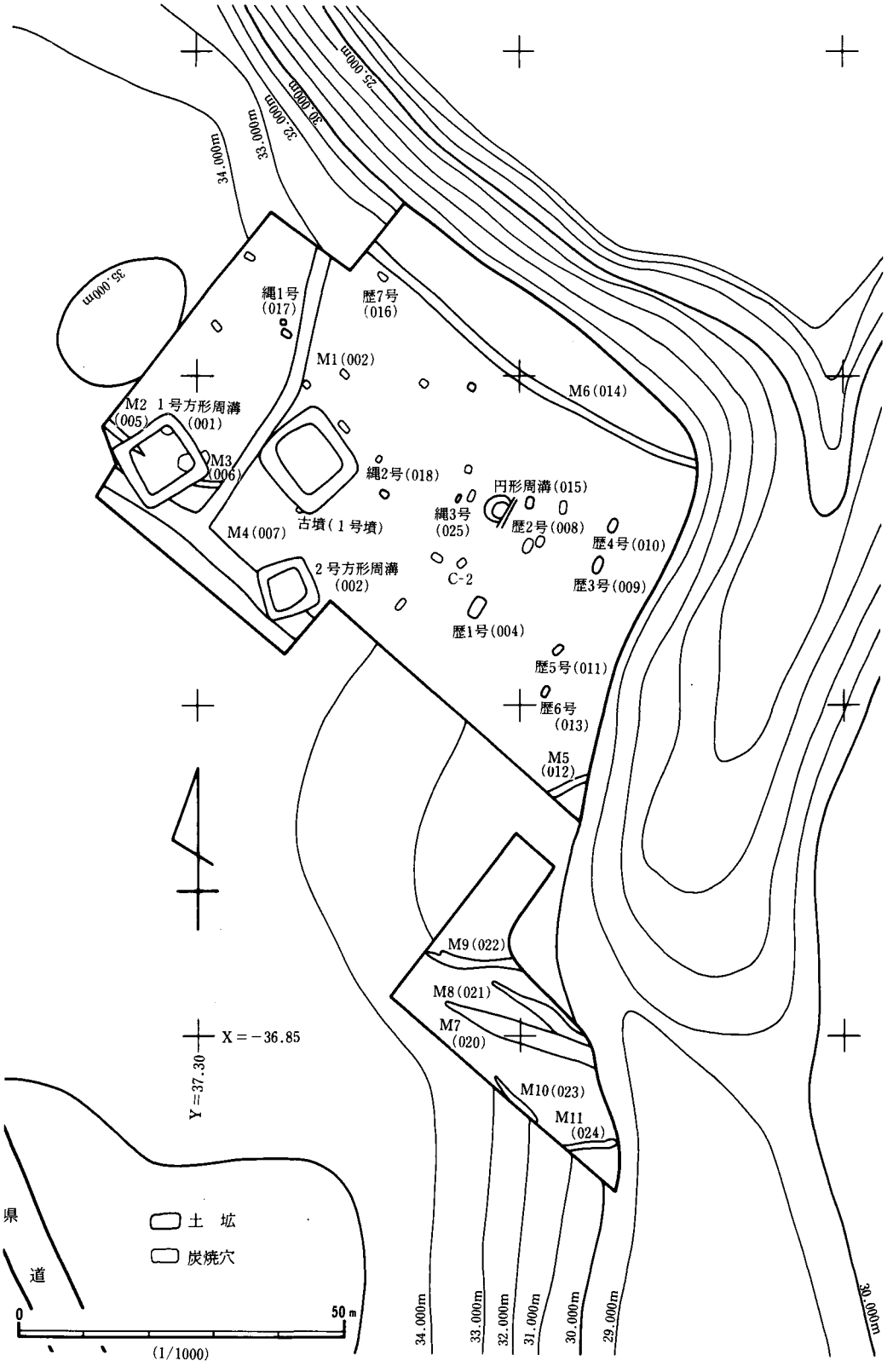
明代台遺跡の所在する台地は、南を鹿島川水系の支流に、北側を高崎川水系の支流によって画されているが(第１図)、さらに西側と東側を高崎川水系の支流によって画され、あたかも北方向にのびる台地となっている。明代台遺跡のＡ地点は台地西側に、Ｂ地点は台地東側に、Ｃ地点は東側の台地基部に位置する。これら３地点は、微視的にみれば、それぞれの地点間に台地平坦面との比高差約１～２ｍ前後の浅い谷が入り込んでおり、各々独立した地形を呈すると言える（第２図)。台地の標高は約34ｍ前後を測り、北側の水田面との比高差は約14ｍを測る。台地の北側は、急斜面となって水田に落ち込む。

Ｂ地点の調査前の状況は、調査区東側は山林となっており、西側は畑地として耕作されていたものである。遺跡踏査の時点で、畑地部分のほぼ中央に１個所わずかながら高まりが認められたため、古墳の存在を予想した。明代台遺跡では、他に古墳と考えられるような高まりは認められない。近接する遺跡には、向山谷津遺跡、向原遺跡、池向遺跡等があるが、本遺跡と向山谷津遺跡は規模も小さく、群としても小さなもののようである。

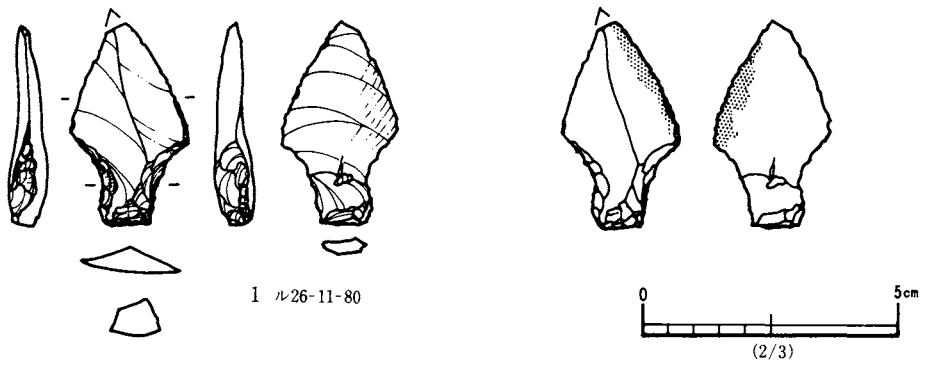
第２節　先土器時代

ナイフ形石器と思われるものがII層中から１点みつかったにとどまる（第43図、図版28)。

平坦な打面が基部にのこる縦長剝片の、基部の両側に大きく刃潰しがされている。この形のナイフ形石器は九州地方で多くみつかっているが、この一帯ではみつかっていないようである。注目されるのは、スクリーントーンで示したように、この石器の背面の右側縁と腹面の左側縁にスリガラス状に表面が変化した部分があって、使用痕と思われることである。使用痕で良いとすると、文字通り、この石器はナイフのように使われたことになろう。ただ、この石器を上下逆にみてみると、石匙の一種に近い形であり、類例が近くにみられないこととあいまって、縄文時代の石器である可能性がある。珪質頁岩製で、長さ40.0㎜、幅24.1㎜、厚さ6.1㎜、重量4.5ｇである。



第42図　明代台遺跡B地点全測図（011II）（ ）は調査時の遺構番号）



第43図　先土器時代出土石器

第3節　縄文時代

縄文時代の遺構は土坑3である。遺物としては、土器・石器・土製品がみつかった。

(1)遺　構

第1号土坑（017）（第44図、図版17）

調査区域内の北西寄りに位置している。暗褐色土層面では確認できず、先土器時代確認試掘坑内において、試掘途中で判明したものである。したがって、西側の約1/3ほどは、中位以上を削り取ってしまった。

上述のように西側の約1/3ほどを失っており、全体の形状に不明な点があるが、遺存している部分からみれば隅丸長方形であると思われる。遺構の掘り込みは比較的深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、全体に緩やかな凹凸があるが、ほぼ平坦と言える。底面の平面形も長方形である。

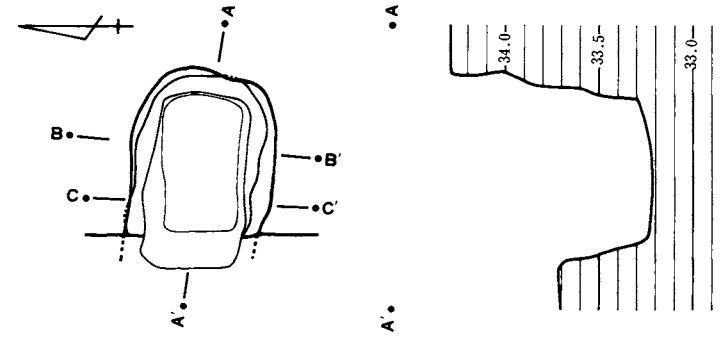
規模は、長辺は、西側部分削平のため不明ではあるが、推定で1.30m前後であるものと思われる。遺存した部分では、1.06mであり、短辺は、0.76mである。長軸方位は、N－95°－Sである。底面は、長辺0.70m、短辺0.37～0.42mであり、掘り込み面からの深さは約1.30mである。

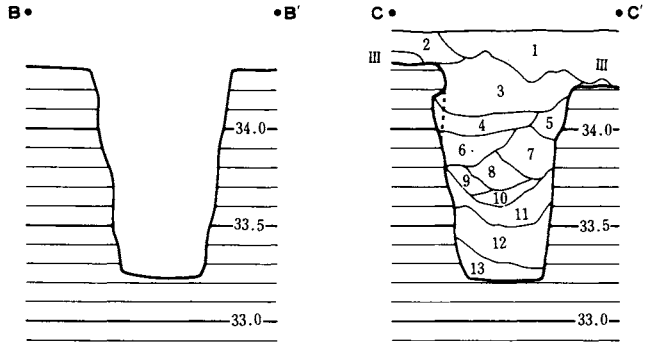
覆土は、暗褐色土を主体とするが、第1・2層などは周辺の自然層に近いものの、上層部ではローム土、焼土粒、ロームブロック等が混入し、中層部では第8・10層の黒褐色土、下層部のローム土、ロームブロックの混入等自然的な流入、堆積によるものとは考えられない土質や堆積状況を示す。覆土中からの出土遺物はなかった。

第2号土坑（018）（第44図、図版17）

調査区域のほぼ中央部に位置する。軟質ローム面までの掘り下げ途中で、土層面において周囲とは異なるやや色調の暗い暗褐色土が堆積する落込みを検出したことにより判明した。

検出面上での平面形は、やや不整形な楕円形を呈する。遺構の掘り込みは深いが、周壁は全体





土層説明

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 ローム土若干混入
3. 暗褐色土 ローム土混入色調淡い
4. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒子若干混入
5. 暗褐色土 ロームブロック若干混入色調淡い
6. 暗褐色土 ローム土、炭化物粒子混入
7. 暗褐色土 黒色土が斑に混入
8. 黒褐色土 焼土粒子若干混入
9. 暗褐色土
10. 黒褐色土 ローム粒若干混入
11. 暗褐色土 ローム土混入、色調淡い
12. 暗褐色土 ロームブロック、ローム土やや多く混入、色調淡い
13. 暗褐色土 ローム粒、ローム土混入

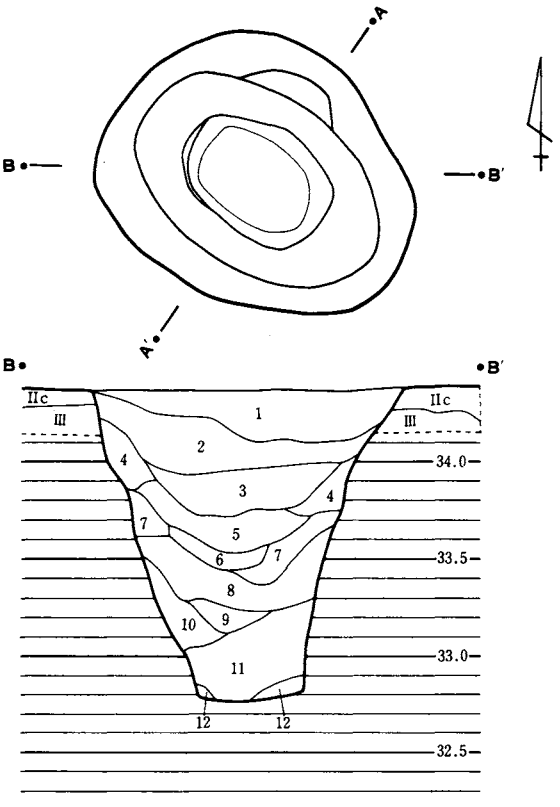
III. ソフトローム

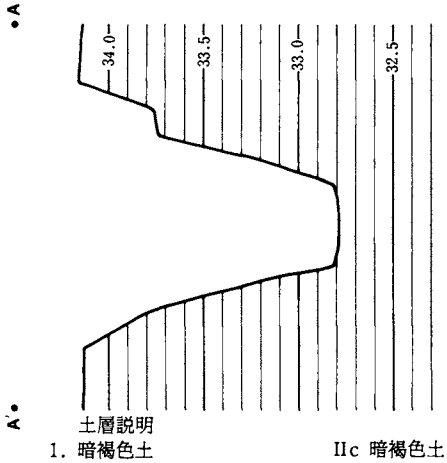
0 1m

(1/40)

(上) 第1土坑(017)

(下) 第2土坑(018)





土層説明

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 黒色土若干混入
3. 暗褐色土 ローム粒若干混入
4. 暗褐色土 ローム土、ロームブロック混入色調淡い
5. 暗褐色土 黒色土若干混入
6. 黒褐色土
7. 暗褐色土 ローム土やや多く混入色調淡い
8. 暗褐色土 ローム土、ロームブロック若干混入
9. 黒褐色土 ローム粒若干混入
10. 暗褐色土 ローム土混入
11. 暗褐色土 ローム土、ローム・ブロック混入色調淡い
12. 暗褐色土 ローム粒若干混入

IIc 暗褐色土

III ソフトローム

0 1m

(1/40)

第44図　第1・2号土坑実測図 (011II-017、018)

に斜めに掘られている。北東側では、途中に1段の小さなテラス状の面がある。底面は、全体に、中央部がわずかに低くなるものの、おおむね平坦と言える。

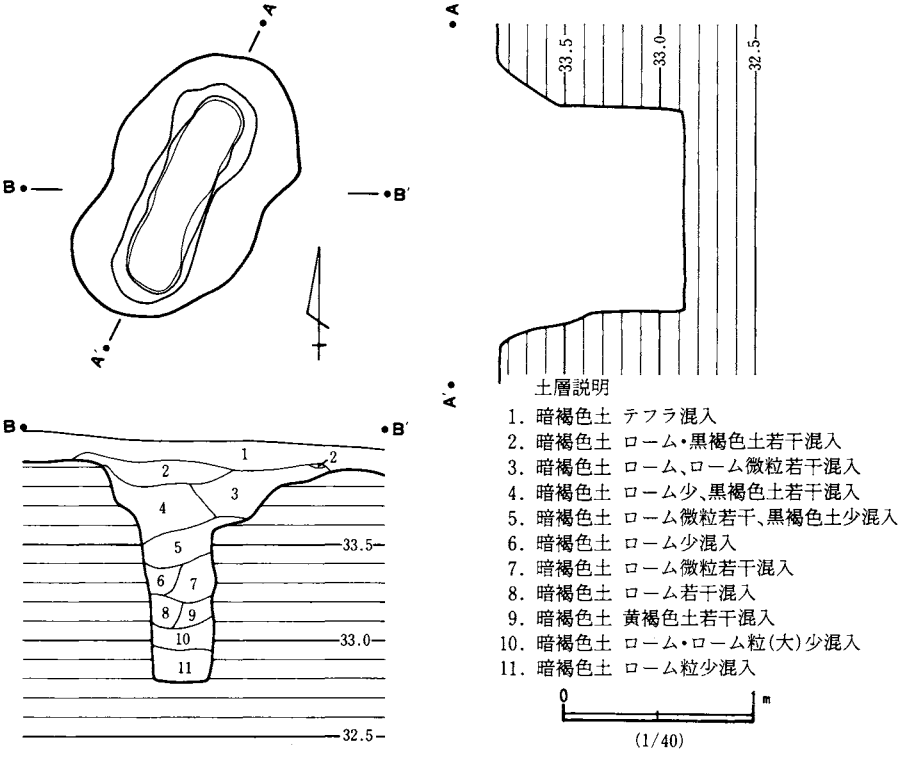
検出面での規模は、長径1.67m、短径1.37mであり、長軸方位はN—50°—Wである。検出面から底面までの深さは、1.36mであり、上部から深さ約0.4mのところに小さなテラス状の面がある。底面は楕円形であり、長径0.63m、短径0.42mである。

覆土は、暗褐色土が主体となっているが、第6・9層のように中央部にレンズ状に黒褐色土の堆積が認められ、その前後にローム土あるいはロームブロックが混入する層が堆積している点が特徴的である。底面あるいは覆土中からの出土遺物はなかった。

第3号土坑（025）（第45図、図版18）

調査区域のほぼ中央にあって、第2号土坑の東約11mに位置する。軟質ローム層上面において検出した。

検出面での平面形は、やや不整形な長円形を呈する。遺構の掘り込みは、検出面から約0.3～0.5mまでは斜めに掘り込み、それ以下は底面までほぼ垂直に掘り込む。中位部分での平面形や底部の平面形は、幅の狭い隅丸長方形である。底面は、若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。なお、底面は特に踏み固められた様子はなく、軟質である。



第45図　第3号土坑実測図（011II-025）

検出面での大きさは、長径1.51m、短径0.93mであるが、前述したように途中で幅が狭くなり、0.35～0.47mとなる。長軸方位は、N－25°30′－Eである。遺構検出面から底部までの深さは、0.97mである。横位断面は薬研状を呈し、縦位断面は箱形を呈する。底部の大きさは、長径1.55m、短径0.21～0.26mである。

遺構直上には、淡い暗褐色土を含む土層が堆積しており、遺構検出を困難にしていた。覆土は、暗褐色土が主体であるが、上位及び中位には黒褐色土が混入する層がみられる。特に上部のそれは、本遺構検出のきっかけとなったものである。また、各土層には、多少の差はあるものの、ロームが含まれている。覆土中からの出土遺物はなかった。

(2)遺　物

土　器（第46～49図、第12表、図版28・29）

少量の出土である。草創期後半から後・晩期までのものがみられるが、草創期後半の撚糸文系、早期の条痕文系の土器はわずかな細片だけなので、出土の事実を記すにとどめ、前期後半以後の土器について図示、説明する。分類の大枠はつぎの通りである。

第Ⅰ群……前期後半の土器　　約100点

第Ⅱ群……中期初頭の土器　　約100点

第Ⅲ群……阿玉台式土器　　少　量

第Ⅳ群……後・晩期の土器　　少　量

各群は、成形、施文の具合などから、さらに細別できる。

第Ⅰ群（第46図１～３、図版28）

１は縄文を地文とする。胴部上半で大きく外反するが、外反部で上位の文様帯の下限を画する半截竹管による沈線が２条ひかれ、文様帯内は同じ工具を使った木葉文が充填されている。諸磯ａ式である。２は非常に大形の深鉢で、口唇下に竹管状工具による刻目があり、胴部は櫛歯条線による波状文がめぐる。興津式であろう。３は型式不明。

第Ⅱ群（第46図４～13、第47図14～31、第48図32、図版28・29）

文様のちがいによって、５類に分けられる。

１類　結節縄文のもの　（４～13）

２類　沈線のもの　（14～24）

３類　角押文のもの　（25・26）

４類　隆帯のあるもの　（28～32）

５類　無文のもの（27）

１類

単節縄文の回転によるもの（４～７・９・10・12）、無節の原体を使うもの（８）、結束２種の原体開端部の自縄自縛による結節回転の見られるもの（11・13）の３種がある。４～７・９は横位の回転、10～13は縦位の回転である。11・13の縦位の回転は、間隔をおいて繰り返され、無文

帯を間にはさんで、縦位の帯状の特徴ある縄文帯を形づくっている。

2類

細沈線で施文し、地文のないもの（14・17）と、口縁部に縄文帯があり、半截竹管の外側による太めの沈線がつくもの（15・16・18～24）に分かれる。

14・17ともに口縁部に段があり、そこに細線の刻目がつく。これは15・16・18～24にはみられない特徴である。14は曲線文、刺突文、粗雑な三角刻文がみられるが、文様の構成は不明である。17は、破片から器形と文様構成を推定できる。器形は、4単位の波状口縁で、口縁部は外反する。波頂部は肥厚する2山で、そこにも細線の短沈線がつく。波頂部の下には橋状の把手がつき、口縁部文様帯を縦に分ける。口縁部文様帯は、低く平らな隆帯によって下側を画して、右下りの斜行沈線と上下交互の三角印刻文を充填する。隆帯の下には14にみられる蕨手状の曲線文と左下りの深い短沈線が沿うが、波底部のところでは隆帯の下から2条の沈線をおろし、胴部の文様帯を縦に分ける。この2条の沈線の間には、口縁部文様帯の短沈線と上下交互の三角印刻文を充填している。波頂部の下の橋状把手の下には三角形の区画がある。

一方、口縁部に縄文帯があり、半截竹管の外側による太めの沈線がつく類は、器形は平縁のキャリパー形の深鉢形土器ばかりである。縄文を地文とするが、繊細な撚りのものが多く、縄自体の結節の回転圧痕はみられるが（20・23）、1類のような2種や開端部の自縄自縛は認められない。

3類

出土例の全てをあげた。25は、内面に三叉文の陰刻のある波頂部および波状部の破片である。口縁に沿って2条、また波頂部から2つに分かれている低い隆帯に沿って1条の細かい角押文がつく。26は山形の波頂部破片である。波頂下の三叉文を中心に、角押文によって文様をつくっている。25・26ともに金雲母の混入が特徴的である。

4類

胴部破片だけであり、文様構成は不明である。隆帯はいずれも細い。無文のもの（28）と隆帯貼付後に縄文を回転するもの（30・31）に分かれ、29・32は後者であろう。

5類

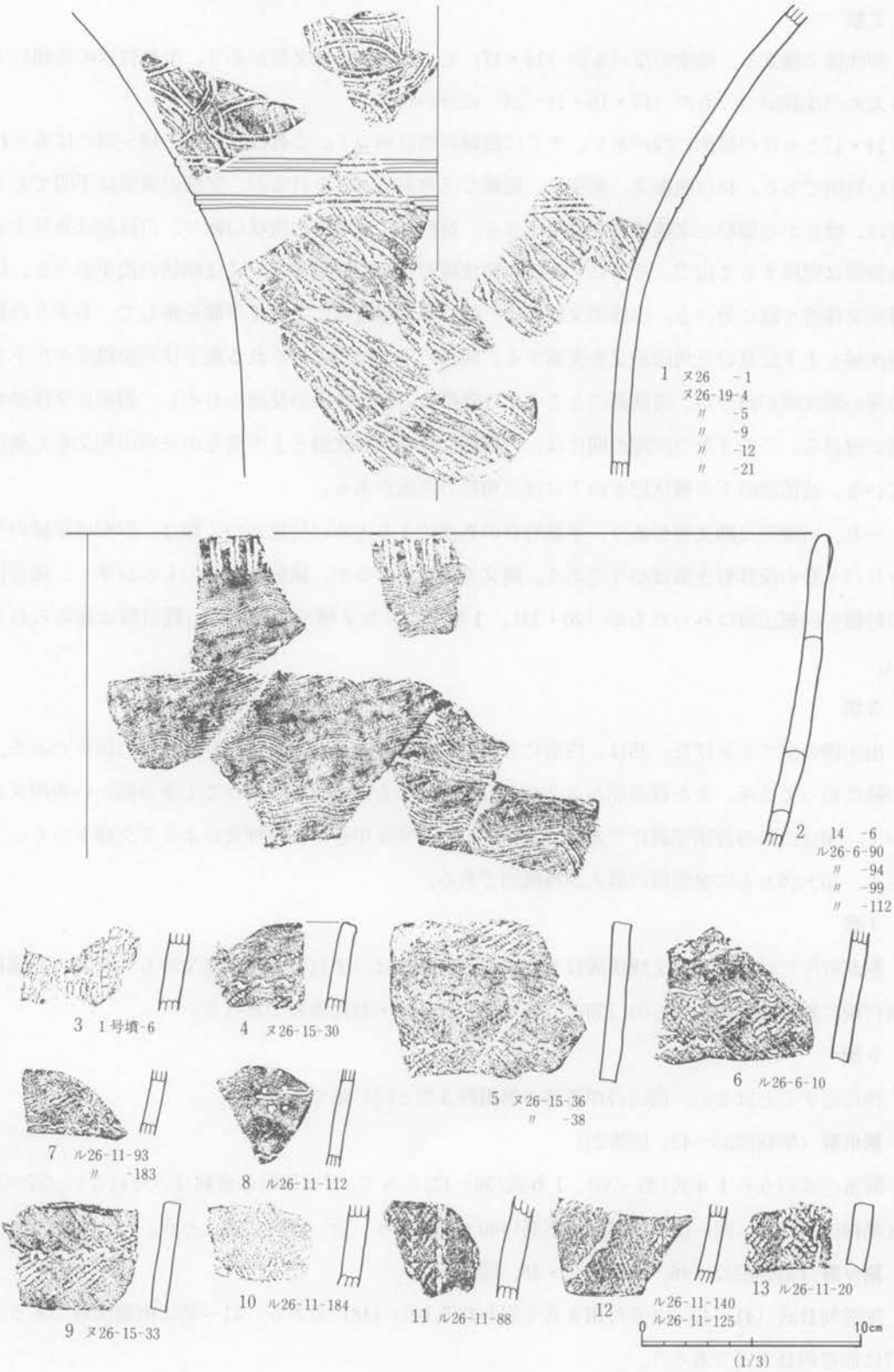
特に記すことはない。向山谷津遺跡の第III群3類と同じ類である。

第III群（第48図33～42、図版29）

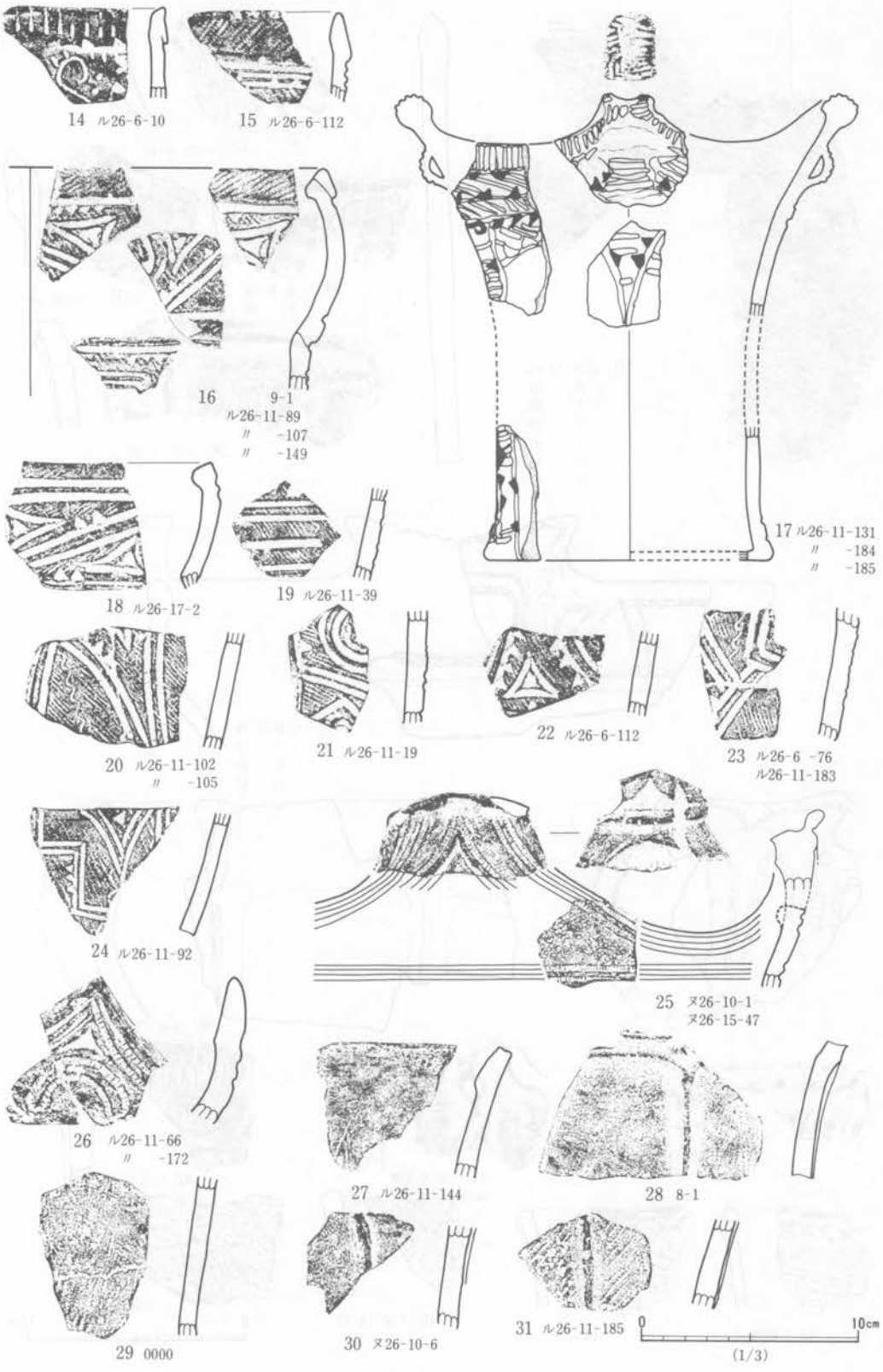
阿玉台式のうちⅠa式(33～35)、Ⅰb式(36～42)のみで、II式以降の資料はみられない。37～39は鳴神山段階に、同一個体の可能性が高い40～42はⅠb（新）段階にあたろう。

第IV群（第48図43～46、第49図47・48、図版29）

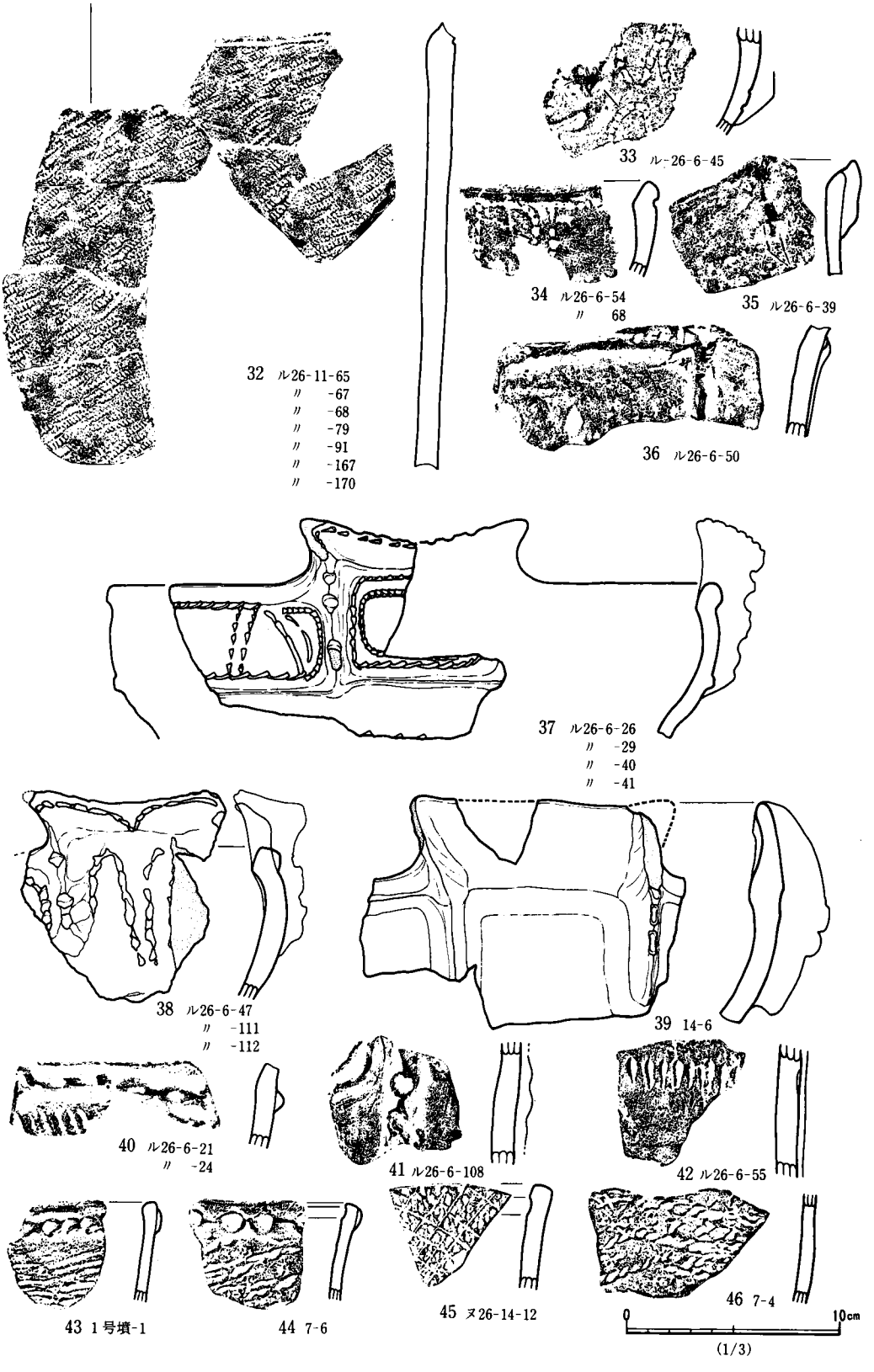
加曽利B式（41～47）と安行IIIa式と思われるもの（48）である。41～46は粗製深鉢である。47は加曽利B3式であろう。


1 ヌ26 -1
ヌ26-19-4
〃 -5
〃 -9
〃 -12
〃 -21
2 14 -6
ル26-6-90
〃 -94
〃 -99
〃 -112
3 1号墳-6
4 ヌ26-15-30
5 ヌ26-15-36
〃 -38
6 ル26-6-10
7 ル26-11-93
〃 -183
8 ル26-11-112
9 ヌ26-15-33
10 ル26-11-184
11 ル26-11-88
12 ル26-11-140
ル26-11-125
13 ル26-11-20
0
10cm
(1/3)

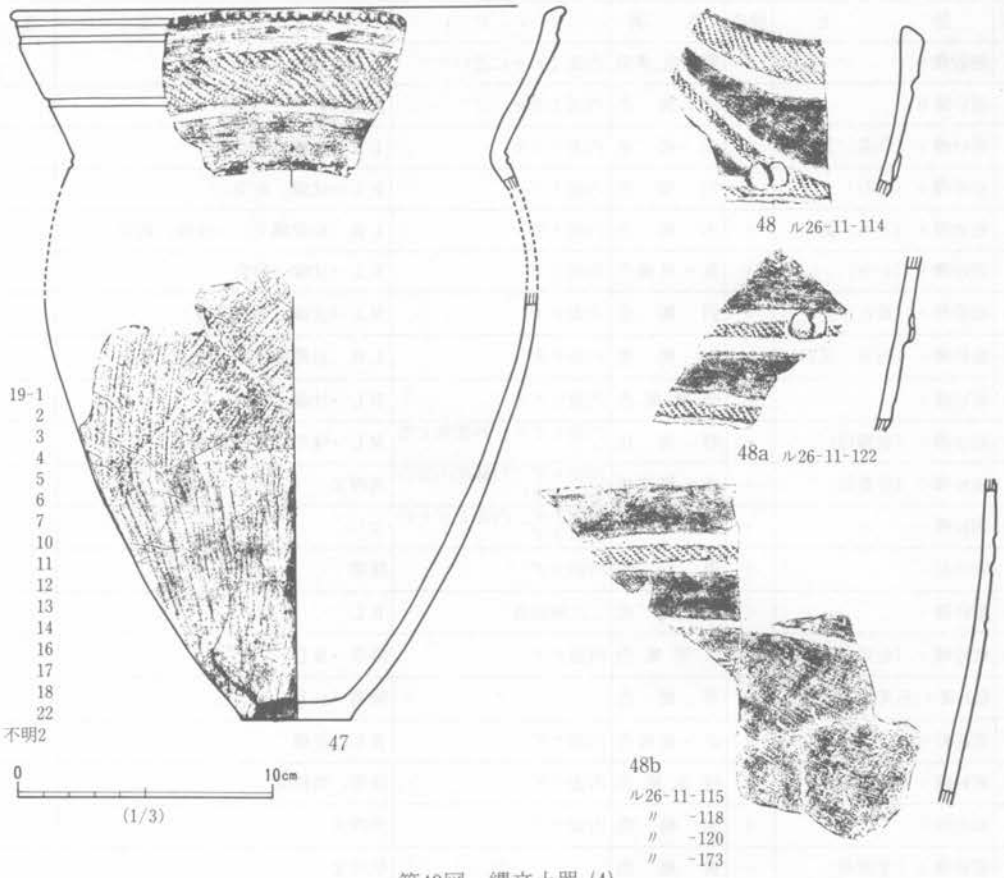
第46図　縄文土器 (1)


14 ル26-6-10
15 ル26-6-112
16 9-1
ル26-11-89
〃 -107
〃 -149
17 ル26-11-131
〃 -184
〃 -185
18 ル26-17-2
19 ル26-11-39
20 ル26-11-102
〃 -105
21 ル26-11-19
22 ル26-6-112
23 ル26-6 -76
ル26-11-183
24 ル26-11-92
25 ヌ26-10-1
ヌ26-15-47
26 ル26-11-66
〃 -172
27 ル26-11-144
28 8-1
29 0000
30 ヌ26-10-6
31 ル26-11-185
0
10cm
(1/3)

第47図　縄文土器 (2)


32 ル26-11-65
〃 -67
〃 -68
〃 -79
〃 -91
〃 -167
〃 -170
33 ル-26-6-45
34 ル26-6-54
〃 68
35 ル26-6-39
36 ル26-6-50
37 ル26-6-26
〃 -29
〃 -40
〃 -41
38 ル26-6-47
〃 -111
〃 -112
39 14-6
40 ル26-6-21
〃 -24
41 ル26-6-108
42 ル26-6-55
43 1号墳-1
44 7-6
45 ヌ26-14-12
46 7-4
0
10cm
(1/3)

第48図　縄文土器 (3)



第49図　縄文土器 (4)

第12表　縄文土器観察表

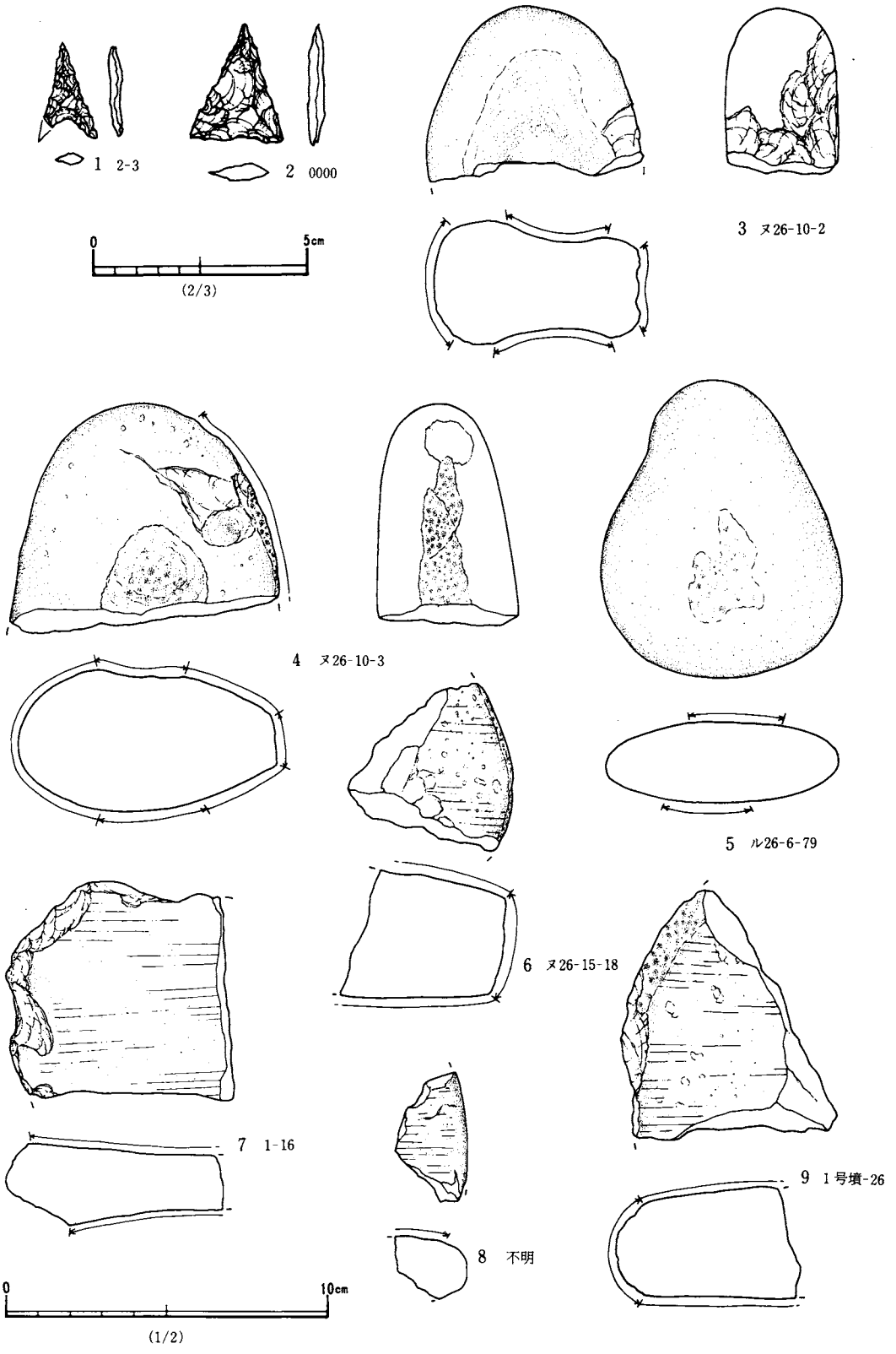
胎土の0、+、−は普通、多、少を焼成の0、+、−は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
1	細砂粒0	+	茶〜赤褐色、黒斑	内面ミガキ	RR→半截竹管文	
2	細砂粒0	+	黄〜黒褐色	内面ナデ	10本櫛歯の条線	
3	細砂粒−繊維	−	赤〜黒褐色	内面ナデ	貝殻腹縁波状刺突	
4	細砂粒+	+	明黄色	内面ナデ	LR、開端自縄自縛結節回転	
5	細砂粒+	+	明褐色	内面ナデ	LR、開端自縄自縛結節回転	
6	細砂粒+	+	明褐色、黒斑	内面ナデ	LR、開端自縄自縛結節回転	
7	細砂粒+	0	赤褐色	?	LR、開端自縄自縛結節回転	
8	微細砂+	−	明黄色	?	L、開端の結節のみ横位回転（自縄自縛）	
9	細砂粒+	+	赤褐色	内面ナデ	LR、開端自縄自縛結節回転	
10	細砂粒0　細砂礫0	0	明黄色	?	LR、開端自縄自縛結節回転	
11	細砂礫+（石英）	+	茶褐色	内面ヨコ方向ナデ	結束2 { RL→開端自縄自縛結節回転 / LR→不明 }	
12	細砂礫+（石英）	+	明褐色	内面ナデ	LR、開端自縄自縛結節回転	
13	細砂礫+（長石）	+	黒色	?	結束2 { RL→開端自縄自縛結節回転 / LR→開端自縄自縛結節回転 }	
14	微細砂+	−	明赤褐色	?	沈線、刺突	
15	微細砂+　細砂礫−	0	明黄色	口唇、内面ナデ	LR、沈線、刺突	

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
16	細砂礫＋	＋	明黄色、黒斑	内面ミガキに近いナデ	ＬＲ、沈線、刺突	
17	細砂礫０	＋	灰黄色	内面ミガキ	沈線、刺突、外底ナデ	
18	細砂礫＋（石英、長石）	＋	赤褐色	内面ミガキ	ＬＲ→沈線、刺突	
19	細砂礫＋（長石）	＋	明褐色	内面ナデ	ＲＬ→沈線、刺突	
20	細砂礫＋（石英、長石）	＋	赤褐色	内面ナデ	ＬＲ（結節縄文）→沈線、刺突	
21	細砂礫＋（石英）	＋	黄～黒褐色	内面ナデ	ＲＬ→沈線、刺突	
22	細砂礫＋（長石）	＋	明褐色	内面ナデ	ＲＬ→沈線、刺突	
23	細砂礫＋（石英、長石）	＋	赤褐色	内面ナデ	ＬＲ（結節縄文）→沈線、刺突	
24	細砂礫＋	＋	明黄褐色	内面ミガキ	ＲＬ→沈線、刺突	
25	細砂礫＋（金雲母）	＋	暗褐色	内面ミガキ、外面無文部ナデ	ＲＬ→隆帯、角押文	
26	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤～黒褐色	内面ナデ（口縁部内面のみミガキ）	角押文	
27	細砂礫＋	＋	茶褐色	外面ナデ、内面ミガキに近いナデ	なし	
28	細砂粒＋	０	黒色	内面ナデ	隆帯	
29	細砂礫＋	＋	茶褐色	二次焼成痕	ＲＬ	
30	細砂礫＋（金雲母）	＋	灰茶褐色	内面ナデ	隆帯→ＲＬ	
31	細砂礫＋（石英、長石、雲母）	＋	茶褐色	？	隆帯→ＲＬ	
32	細砂粒＋	０	赤～黄褐色	内面ナデ	ＲＬ、沈線	
33	細砂礫＋（金雲母）	０	暗赤褐色	内面ナデ	隆帯、角押文	
34	微細砂＋	０	明褐色	内面ナデ	角押文	
35	細砂礫０（金雲母）	－	黄褐色	？	貼付文	
36	細砂粒＋	０	赤褐色	？	隆帯、角押文	
37	細砂粒＋（金雲母）	＋	暗褐色	内面ナデ	隆帯、角押文	
38	細砂粒＋（金雲母）	＋	赤～暗褐色	内面ナデ	隆帯、結節沈線	
39	細砂粒＋	０	赤褐色	内・外面ナデ	隆帯	
40	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤褐色	外面ナデ、内面器面の荒れ顕著	隆帯、沈線	
41	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤褐色	外面ナデ、内面器面の荒れ顕著	隆帯	
42	細砂礫＋（金雲母）	＋	赤～黒褐色	外面ナデ、内面器面の荒れ顕著	刺突列	
43	細砂粒＋	＋	赤褐色	内面、口唇部ミガキ	刻目隆帯、斜行条線	
44	細砂粒０	＋	赤褐色	内面ミガキ	刻目隆帯、ＬＲ、内面凹線	
45	微細砂＋	＋	明黄色	内面・口唇部ミガキ	ＲＬ→格子状沈線、内面凹線	
46	細砂粒＋	＋	赤～暗褐色	？	ＬＲ	
47	細砂粒０	＋	明褐色、黒斑	内面ミガキ、外面上部無文部ナデ、下部タテ方向のヘラナデ、底部近くミガキ	ＲＬ（画線内充填）、刻目帯、斜行条線	
48	細砂粒０	＋	明褐色、黒斑	内面ミガキ、外面上部無文部ナデ、下部横方向ヘラナデ	ＲＬ（画線内充填）、ＲＬ帯縄文、粘土瘤	

石　器（第50図、図版30）

出土した石器は総数73点である。そのうち57点は礫片である。のこる何らかの加工痕あるいは使用痕のみられる16点の石器の内訳は、石鏃２点（１・２）、楔状石器２点、円礫を素材とした大



第50図　縄文時代出土石器

型石器８点（３～９）である。

石鏃は、１・２とも玄武岩製である。１は凹基三角鏃で、尖端と片脚を欠き、長さ14㎜、厚さ３㎜、重量0.4ｇ、２は平基三角鏃で、長さ27.7㎜、幅21.7㎜、厚さ5.1㎜、重量2.1ｇである。

円礫を素材とした大型石器は、敲打痕、被敲打痕、磨痕などのある石器類を一括したものである。使用痕のあり方からつぎのように分かれる。

礫の両面に敲打痕のあるもの（３～５）

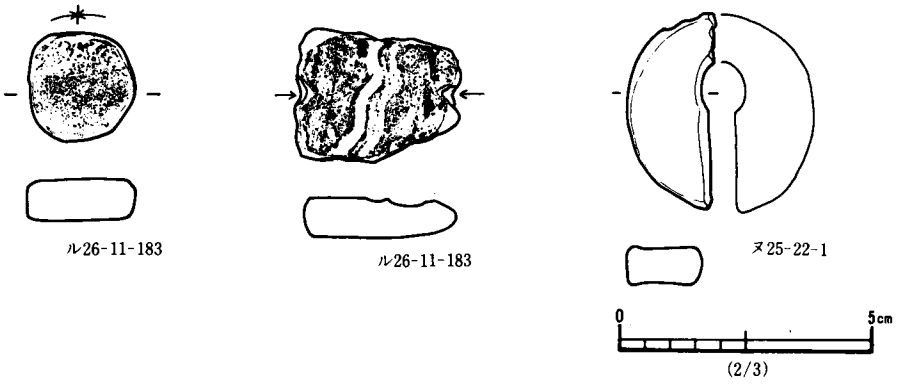
礫の両面に磨痕のあるもの（６～９）

前者は、さらに、側面に敲打痕のあるもの（３・４）とないもの（５）に分かれ、後者も、同じように、側面に敲打痕のあるもの（６・９）とないもの（８）に分かれる。７の側面部の剝離は、整形のための剝離と思われ、７は石皿に似た石器である可能性が高い。重量は、３が183ｇ、４が324ｇ、５が245ｇ、６が112ｇ、７が185ｇ、９が204ｇである。

礫片は、図示しないが、ヌ26—14、15の２つのグリッドにまたがって、直径約８ｍの範囲に集中して出土した。33点である。礫群かと思われる。集中の中には石皿片１点があり、その近くから縄文前期後葉の土器片のみが出土したので、その時期の集中と思われる。ただ、ピットや焼土などは、みつからなかった。礫片は、小型のものばかりで、半数以上に火熱による赤変が認められた。

土製品（第51図）

土器の破片を再利用した土製円板（１）と土器片錘（２）、玦状耳飾（３）の３点である。



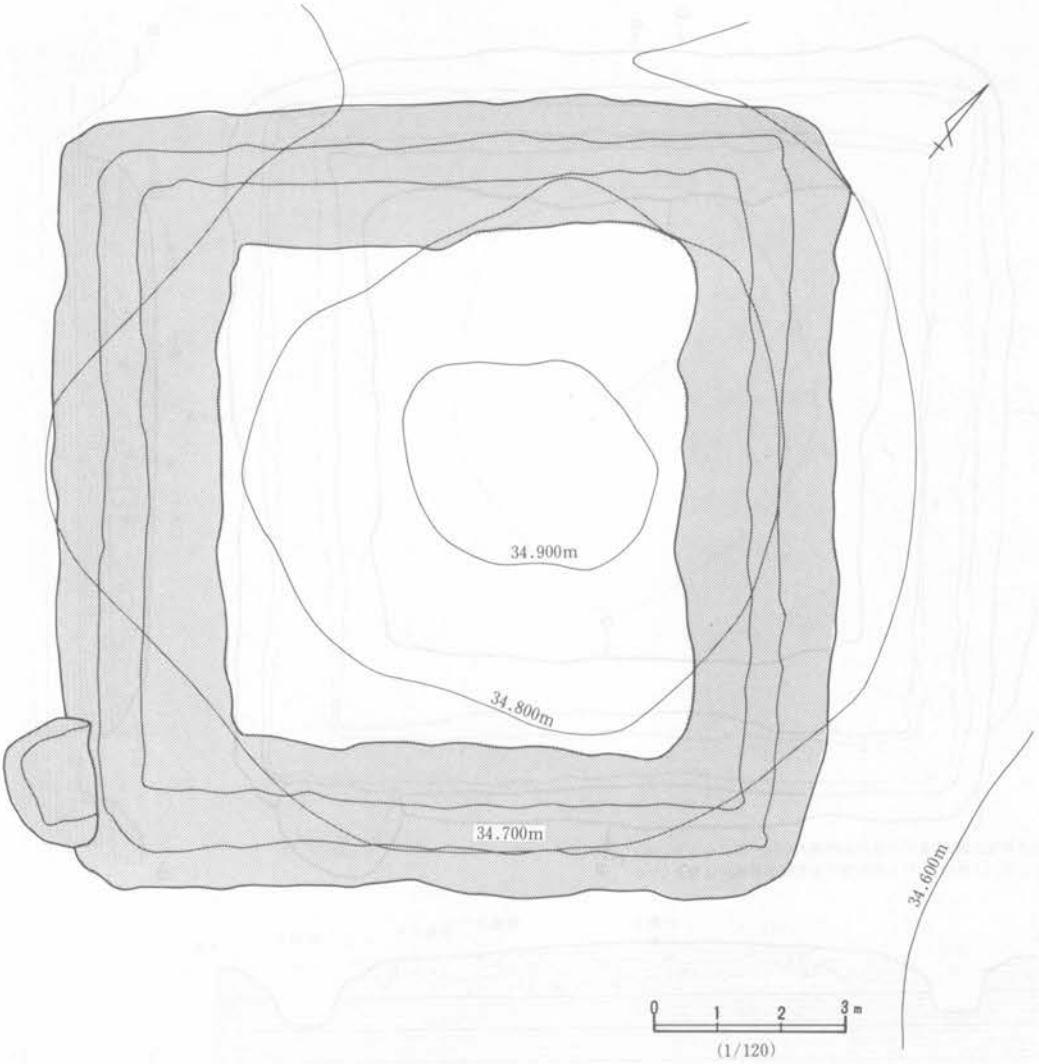
第51図　縄文時代出土土製品

第４節　古墳時代

古墳時代の遺構としては、方墳が１つみつかった。後述する方形周溝と近接していた。

古　墳（１号墳）（第52～54図、図版19・30）

調査区域の中央よりもやや北西寄りに位置する。調査前の踏査時に、畑地内でわずかながら高



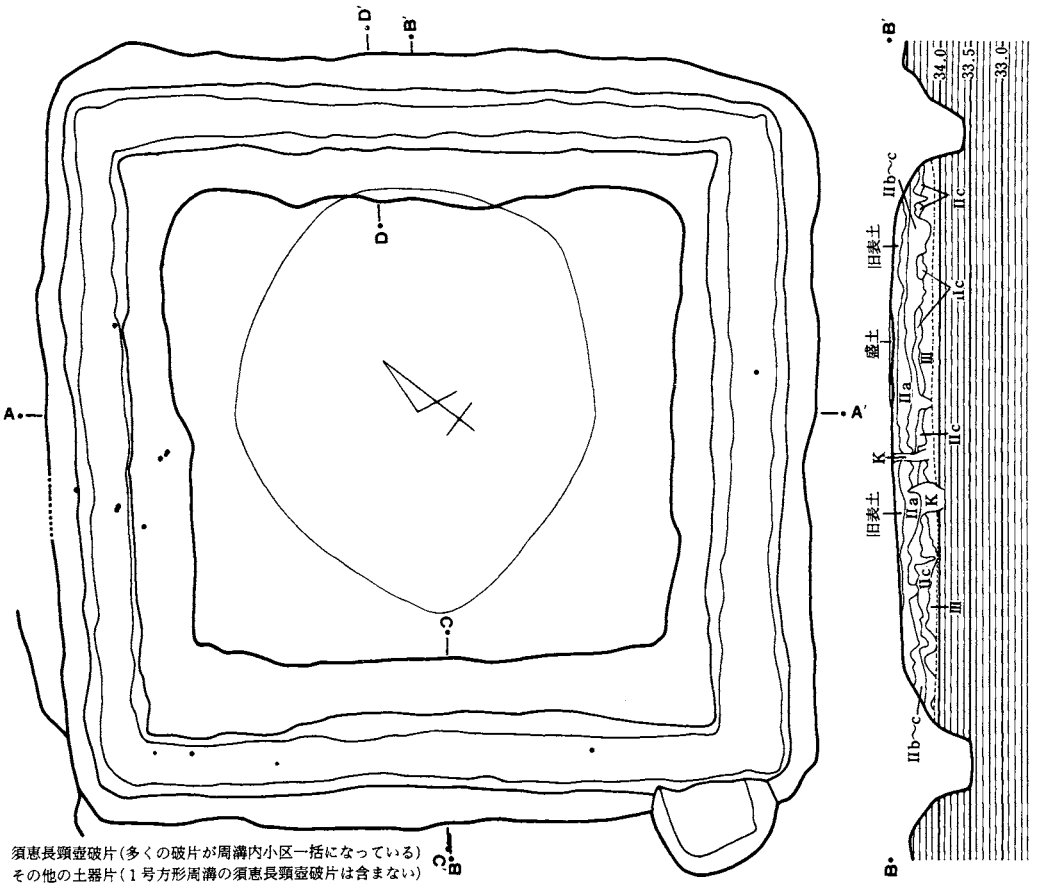
第52図　古墳墳丘実測図（011-1号墳）

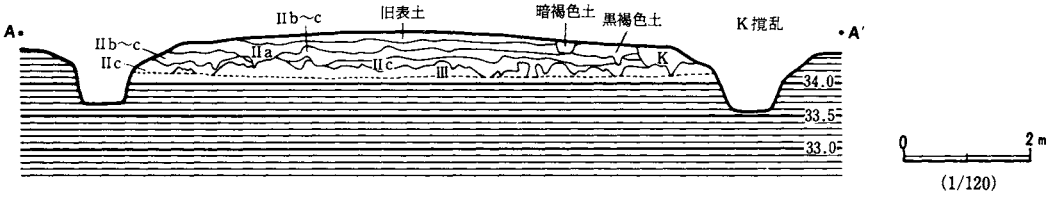
まりがみられ、古墳の存在がうかがえたものである。

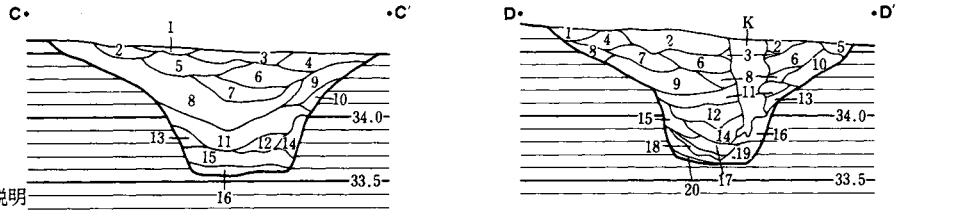
発掘前の墳丘測量では、墳丘は平坦部より約30cm高い程度で、視覚的には墳形を判断できるものではなかったが、標高34.7mの等高線が西側と南側で直線的に走り、北東側では円形に走るものの、全体として直線的に走ったため、一応方形墳を想定し、調査した（第52図）。

盛土は、墳丘中央よりやや北寄りのところに径1.6m×1.2mの範囲でのこっていたが、厚さは2～5cm前後にすぎなかった。土の質はローム土に暗褐色土や黒色土が混入するもので、堅くない。

墳丘の下のいわゆる旧表土層は、西側は削平され、東側に片寄った状態で遺っていた。これは、後世の耕作等による削平のせいと考えられる。旧表土層は、黒色で、厚さ8～20cmである。旧表土層上面には、焼土層あるいは灰層はなかった。







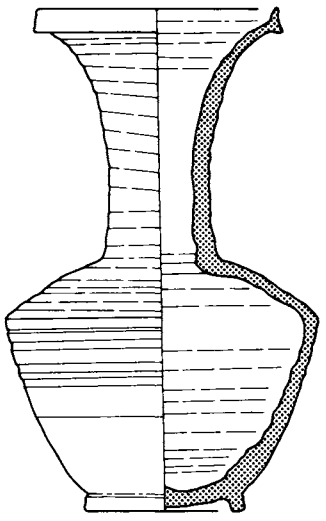
土層説明

1. 暗褐色土層　黒色土若干しみ込む
2. 暗褐色土　淡暗褐色土少、ローム微粒若干混入
3. 黒色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒若干混入
4. 暗褐色土　黒色土若干、淡暗褐色土若干混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土少、黒色土若干、ローム微粒若干混入
6. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土若干混入
7. 暗褐色土　淡暗褐色土やや多、ローム微粒少混入
8. 黒褐色土　黄褐色土若干、ローム粒若干、ローム微粒多混入
9. 黒褐色土　淡暗褐色土少混入
10. 淡暗褐色土　ローム若干、暗褐色土若干混入
11. 黒色土　淡暗褐色土少混入
12. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土若干混入
13. 淡暗褐色土　ローム粒(大)若干、ローム若干混入
14. 暗褐色土　ローム粒(大)若干、ローム若干、ローム微粒少混入
15. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム若干混入
16. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム微粒少、炭化物粉若干混入

1. 暗褐色土　黒色土若干混入
2. 黒色土　暗褐色土若干、ローム微粒若干混入
3. 黒褐色土　淡褐色土若干混入
4. 暗褐色土　黒色土若干混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
6. 暗褐色土　淡暗褐色土少、炭化粒・焼土粒・ローム微粒若干、黒色土若干混入
7. 暗褐色土　黄褐色土若干、ローム微粒少混入
8. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
9. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒少、黒色土若干混入
10. 暗褐色土　淡暗褐色土やや多混入
11. 暗褐色土　淡暗褐色土少、黒色土少混入
12. 黒褐色土　淡暗褐色土若干混入
13. 暗褐色土　淡暗褐色土少、ローム若干混入
14. 暗褐色土　黄褐色土若干、ローム微粒若干混入
15. 暗褐色土　ローム若干、淡暗褐色土少混入
16. 暗褐色土　ローム若干、ローム粒若干混入
17. 暗褐色土　ローム微粒若干、炭化粒若干混入
18. 暗褐色土　ローム微粒帯状に、ローム若干混入
19. 暗褐色土　ローム少混
20. 暗褐色土　ローム若干、炭化物粉少混入

K. 撹乱

第53図　古墳実測図（1号墳）



第54図　古墳出土須恵長頸壺

埋葬施設は、周溝に囲まれた方台部内からも周溝内からもみつからなかった。佐倉第三工業団地内での方形墳は数が少ないが、その一般的な埋葬施設が半地下式タイプのものであることからすれば、この方墳はやや異なっていると言えよう。

周溝は、四角くめぐる。断面形は、箱形であるが、中位より上方は方台部および外側に向って大きく開く。特に方台部側の傾斜がきつい。周溝の底面は、緩やかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。西角付近をＭ１（溝）に切られている。

遺溝の規模は、ＮＷ－ＳＥ12.20m、ＮＥ－ＳＷ11.98mと、わずかながらＮＷ—ＳＥラインが長いが、方形である。周溝は、幅1.94～2.63m、深さは周溝外側から0.78～0.93mである。周溝外側と旧表土層上面との比高差は0.24～0.34m前後である。

周溝の覆土は、大きく分けると、上部に黒色～黒褐色土が、中位に暗褐色土、中位よりやや下に黒褐色土、下位に暗褐色土が堆積していた。この中で中位付近にはやや硬質の暗褐色～黒褐色土層がみられた。

遺物は、須恵長頸壺が１点だけ出土したが、完形ではなく、破片の状態で周溝中から出土したものである。高さ263㎜、口径123㎜、底径66㎜、胴部径163㎜で、遺存度は口が1/3、頸が完、胴部1/2。焼成良、色調は明灰色、胎土は密で長石粒混。ロクロ成形で頸と高台はナデツケである。胴部下半は回転ヘラズリで、外底は回転ヘラ切りである（第54図、図版30）。

破片は、北西側から南西側周溝にかけて若干まとまって出土したものの、量としては少ない。出土レベルをみると、底面近くで出土しているものもあるが、全体としては中位より上部で出土している(第53図)。なお、破片の一部は第１号方形周溝の東側コーナーの覆土中位より、他の須恵長頸壺破片とともに出土している(第55図)。また、第１号方形周溝出土の須恵長頸壺の破片が本墳周溝覆土の上部で１点出土している。

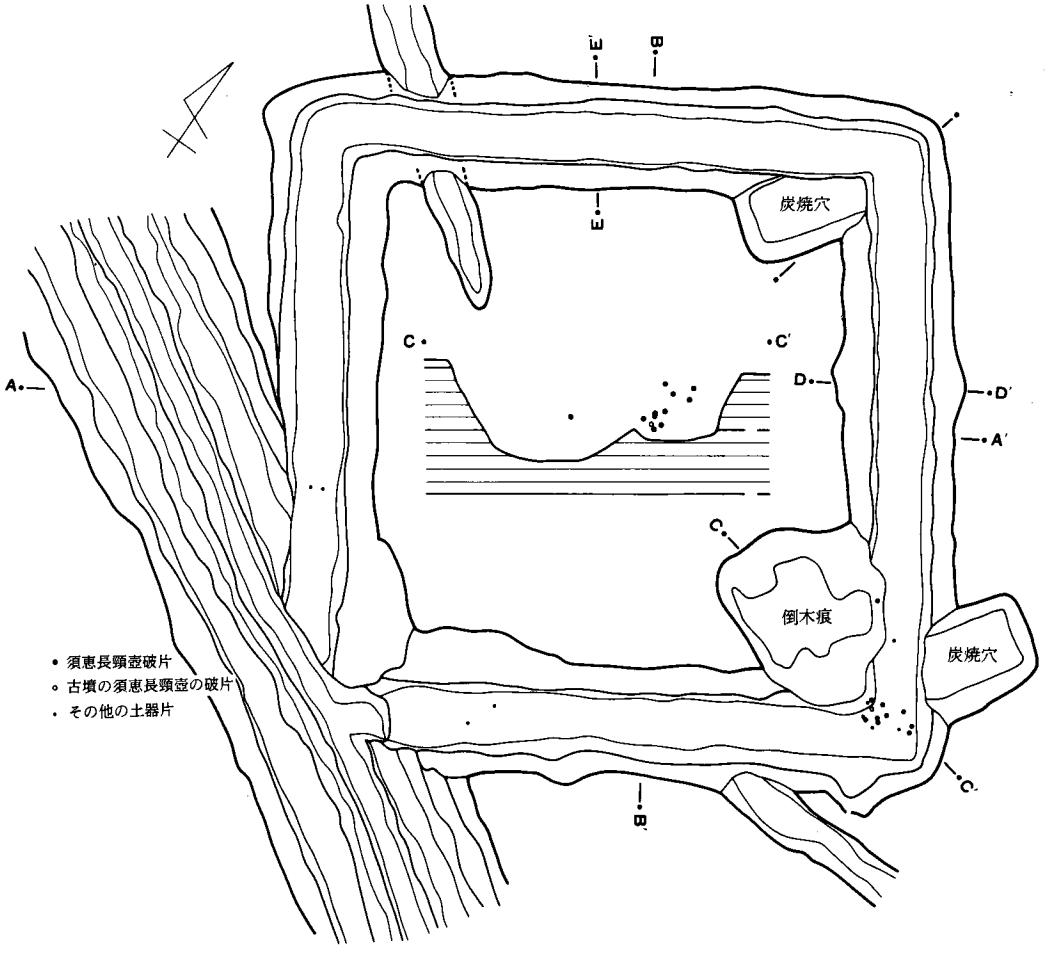
第５節　歴史時代

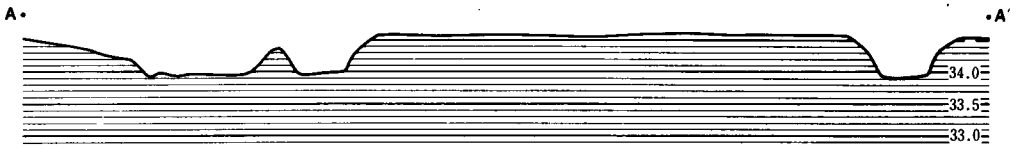
歴史時代の遺構としては、方形周溝２、円形周溝１、土坑墓７、溝11、炭焼穴23がみつかった。このうち、方形周溝２は、前節で述べた方墳の近くにあり、関係が注目される。

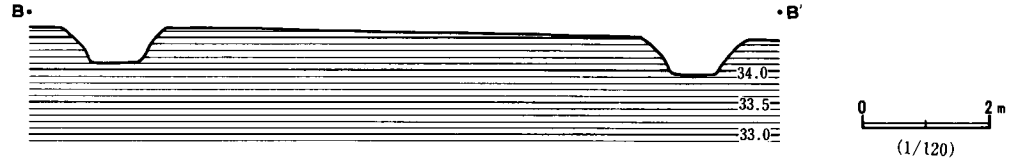
第１号方形周溝（001）（第55・56図、図版20・30）

調査区域西端に位置し、古墳の西側約10m、第２号方形周溝の北西側約20mにある。

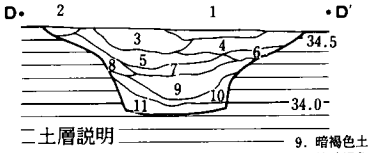
本遺構は、西側と東側をそれぞれＭ２(溝)、Ｍ３(溝)によって、南側コーナー付近をＭ４(溝)

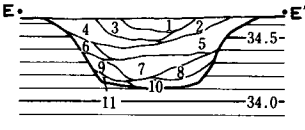


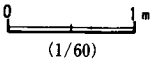




(1/120)







(1/60)

二土層説明

1. 暗褐色土　ローム微粒若干混入
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干混入
4. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒褐色土若干混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒若干、黒色土若干混入
6. 暗褐色土　ローム多、黒褐色土若干混入
7. 暗褐色土　黒褐色土多、ローム若干、ローム微粒若干混入
8. 暗褐色土　ローム少混入
9. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干、淡暗褐色土若干、黒色土微粒若干混入
10. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干、炭化粒若干混入
11. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干、黒色土若干、黒色土微粒若干混入

1. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒若干混入
2. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
3. 暗褐色土　淡暗褐色土多、ローム少、ローム粒若干混入
4. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土少混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土若干、ローム若干混入
6. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干混入
7. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒若干混入
8. 暗褐色土　淡暗褐色土少、ローム若干混入
9. 暗褐色土　ローム少、ローム微粒若干混入
10. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干混入
11. 暗褐色土　ローム若干、黒色土少混入

第55図　第1号方形周溝実測図（011II-001）

によって切られるが、特にM4による破壊はひどく、コーナー部が消失している。また、北側内コーナーを炭焼穴によって、東側内コーナーを倒木痕と思われる土坑によって切断されている。

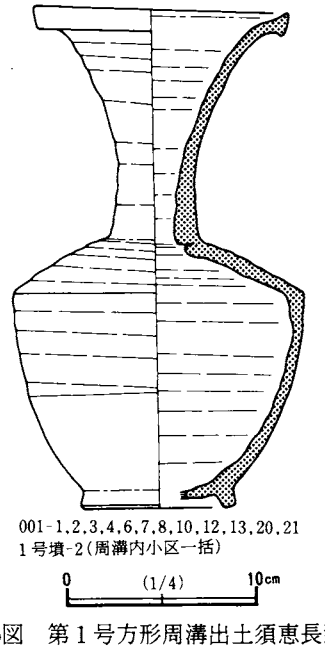
存在は、表土層除去後、暗褐色土の堆積する溝状の落込みにより明らかとなったが、北西辺から北東辺にかけては周溝が細く2条に分かれて検出される部分が認められた。調査前の遺溝一帯は畑地であり、何ら高まりは認められなかった。

周溝は、4辺とも、多少の出入りはあるものの、ほぼ直線に掘り込まれている。断面形は、上部は傾斜があるが中位から底に向ってほぼ垂直に落ち込む薬研状である。上部の傾斜は、周溝外側より内側の方が緩やかである。周溝の底面は、多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。

規模は、NE—SW 10.93m、SE—NW 10.87mの方形である。わずかに長い NE—SW 方向を長軸とみなすと、N—59°30′—Eである。周溝の幅は、1.60～1.86mである。深さは0.47～0.70mであり、北側コーナーから北西辺中央部付近が浅く、南側へ向って深くなる。

周溝覆土は、北西辺中央付近から北東辺中央にかけて、覆土上部中央にローム土やローム粒子を多く含む層が堆積しており、このため、検出時において周溝が上述のように2条にみえたのである。他のところの覆土も、周溝の中央部にまわりの堆積土層よりも明るく黄褐色～黄色味を帯る層が認められている。この層は、盛土の一部が何らかの原因で流入堆積したものと考えられ、本遺構に盛土が存在したことがうかがえる。しかし、周溝に囲まれた方台部には、いわゆる旧表土層や埋葬施設は認められなかった。

本遺構の出土遺物は、須恵長頸壺がある(第56図)。高さ258㎜、口径130㎜、底径72㎜、胴部径152㎜である。遺存度は1/3で、焼成は良、色調は明灰色、胎土は密であり、肩に灰をかぶる。成形はロクロによるが、頸と高台はナデツケであり、胴部下半は回転ヘラケズリ、底は回転ヘラ切りである。

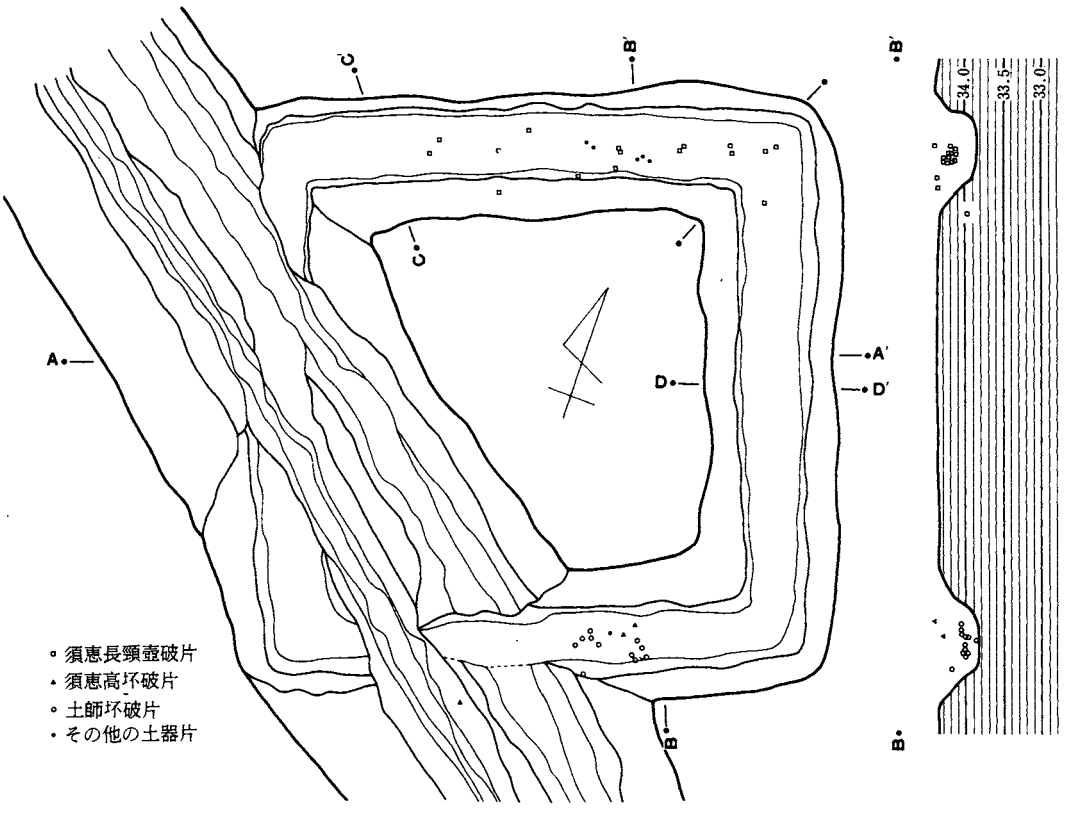


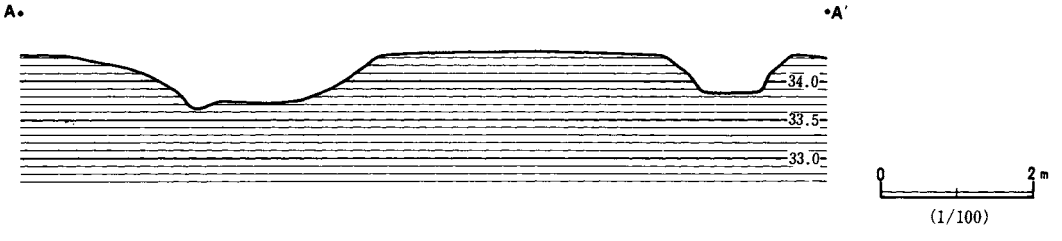
第56図　第1号方形周溝出土須恵長頸壺

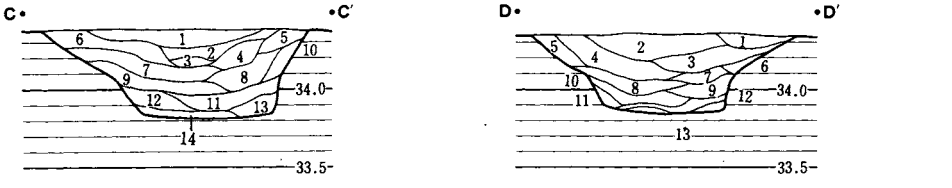
破片は、東側コーナー付近に集中していたが、南東辺南側でも若干出土した。なお、東コーナーにおいて出土した須恵器破片の中に古墳出土の須恵長頸壺と同一個体の破片が1点混っていた。この破片は、他の破片と混在して覆土中位から出土したものである(第55図)。また、逆に本遺構出土の須恵長頸壺破片と同一個体の破片が、第1号墳の周溝覆土上部で出土していたことが整理の過程でわかった。

第2号方形周溝(003)(第57・58図、第13表、図版21・30・31)

調査区の南西側にあって、古墳の南約7mの位置である。北西コーナーから南西コーナー及び南辺中央部までの部分をM4(溝)によって切断されているが、南西コ







土層説明

1. 黒褐色土　暗褐色土少混入
2. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、炭化粒若干混入
3. 黒褐色土　暗褐色土若干、炭化粒若干混入
4. 暗褐色土　淡暗褐色土少混入
5. 暗褐色土　ローム微粒若干混入
6. 暗褐色土　淡暗褐色土少混入
7. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土若干混入
8. 黒褐色土　暗褐色土若干、ローム微粒若干混入
9. 黒褐色土　暗褐色土若干、ローム微粒若干、黒色土若干混入
10. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒若干、黒色土微粒若干、淡暗褐色土若干混入
11. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土少、ローム微粒若干混入
12. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム若干、ローム微粒若干、黒色土微粒若干混入
13. 暗褐色土　ローム微粒多、ローム粒若干、ローム若干、黒色土微粒若干混入
14. 暗褐色土　ローム若干、ローム微粒少、黒色土微粒若干混入

1. 暗褐色土　淡暗褐色土混入
2. 暗褐色土　淡暗褐色土やや多、炭化粒若干混入
3. 暗褐色土　淡暗褐色土少、黒褐色土混入
4. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒褐色土少混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土少混入
6. 淡暗褐色土
7. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
8. 暗褐色土　ローム微粒若干混入
9. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土微粒若干混入
10. 暗褐色土　ローム微粒多、黒色土微粒少混入、やや砂質
11. 暗褐色土　淡暗褐色土少混入
12. 暗褐色土　ローム微粒少、黒色土微粒若干、ローム若干混入
13. 暗褐色土　ローム微粒若干、ローム若干混入

第57図　第2号方形周溝実測図（011II-003）

ーナーの下部がかろうじて遺っていて、ほぼその全容をうかがうことができた。

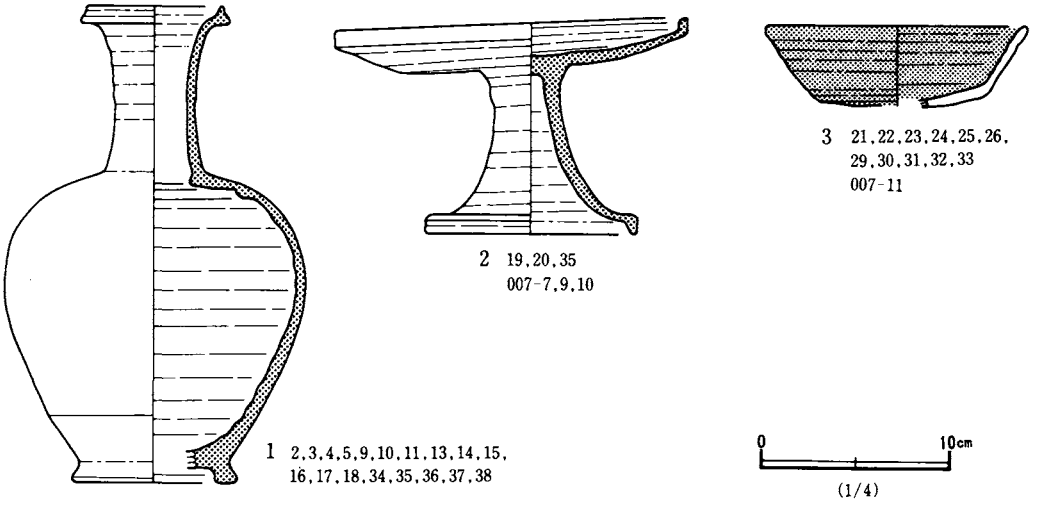
本遺構は、表土層除去後、溝と重複する「コ」字形にめぐる暗褐色土～黒褐色土の堆積する落込みによって明らかになった。調査前には一帯は畑地であったが、上述の古墳を除き、何らの高まりも認められなかった。

周溝は、4辺とも、多少の出入りがあるものの、ほぼ直線に掘り込まれている。断面形は、内側、外側とも上部が緩やかな傾斜をもち、中位から底部に向ってほぼ垂直に掘り込まれていて、幅広の薬研掘りの形である。上部の傾きは、周溝外側部よりも内側の方が緩やかである。周溝の底面は、多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。

規模は、南西辺及び南辺中央部までを溝によって削り取られているため推定にとどまる。NW－SE8.06m、NE－SW推定8.36mであり、北東－南西方向にやや長い方形である。長軸方位は、N－70°－Eである。周溝は、幅1.57～1.90mであり、深さは、0.50～0.58m前後とおおむね一定である。

周溝覆土は、暗褐色土層が主体であるが、上部では黒色土や黒褐色土の混入が多く、中位や下位でも斑状に混入する。また周溝底面から約20cm前後上層の位置にある層が、踏み固められたように比較的硬質であり、この硬質面は、硬軟に多少の差はあるものの、周溝の各所で認められ、おそらく周溝内を全周していたと思われる。また、周溝底面近くに堆積する層の中にはザラ目質あるいは砂質の層があり、他の土層とは土質が大きく異なった。周溝の覆土からは、盛土の存在はうかがえない。周溝に囲まれた方台部には、いわゆる旧表土層及び埋葬施設は認められなかった。

本遺構の出土遺物には、須恵長頸壺・須恵高坏・土師坏があり、いずれも周溝内の出土である。詳しくは、第13表を参照されたいが、須恵長頸壺は、ロクロ成形で、頸と高台はナデツケである。須恵高坏の坏部は、内・外面とも脚に近いところは回転ヘラ削りであり、脚の内側の坏部との接



第58図　第2号方形周溝出土土器（011II-003）

合部は、ナデられている。土師坏の外底は、外側が回転、内側が手持ちのヘラ削りである（第58図、図版30・31）。

須恵長頸壺の破片は、北側辺の西側から北東コーナーにかけて、やや広い範囲に散らばって出土した。破片の出土レベルは、口頸部破片が覆土下位、その他の破片は覆土中位から上部にかけてである。須恵高坏は覆土上部の出土である。土師坏は、南側周溝の中央よりやや東側で、須恵高坏とともに破片の状態で、比較的集中して出土したが、破片の出土レベルは覆土の下部から上部にまでわたる（第57図）。

第13表　第２号方形周溝出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	須恵長頸壺	247	68	82	148	口～頸完 胴～底½	良	明灰色 濃緑色釉	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ回転ヘラ削？	底	ロクロ		本文参照	口頸部から肩にかけて自然釉がかかる。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			
2	須恵高坏	109	180	108	－	坏部½ 脚部完 脚縁½	良	明灰色	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ回転ヘラ削	底	ロクロ		本文参照	坏部外面と脚裾部に灰がかかる。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ回転ヘラ削	底	ロクロ			
3	坏	42	132	84	－	⅓	良	明褐色 全面赤彩	密	外	口	ヨコナデ	胴	ロクロ回転ヘラ削	底	回転ヘラ削手持ヘラ削		本文参照	
										内	口	ヨコナデ	胴	ロクロ	底	ロクロ			

円形周溝（015）（第59図、図版22）

台地東側に位置し、東側を現代の耕作に伴う溝に切られている。この溝の東では周溝はみつからなかった。調査前には、高まり等は認められなかった。

本遺構は、上述の２つの方形周溝とは、離れている上に、台地の中でも平坦部の縁辺にあるなど、やや異なり、むしろ後述する土坑群と近い。

平面形は、南東側がややとがった、卵形に近い円形である。周溝の幅も一定ではなく、掘り込みも浅い。

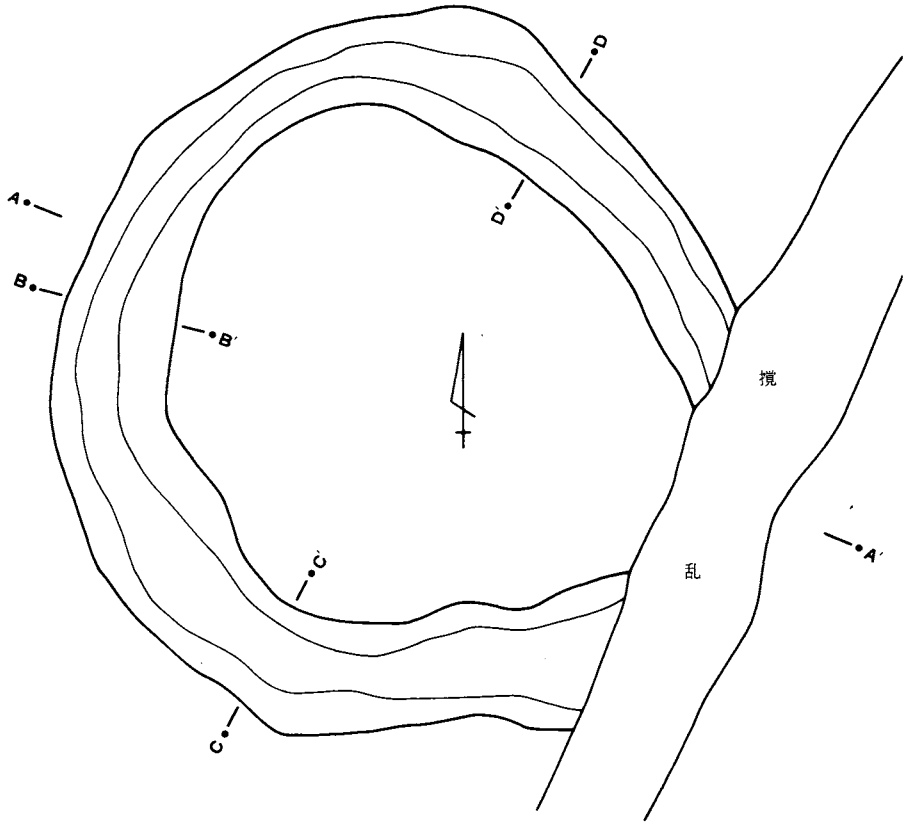
規模は、南東側が切断されているが、現状での長径は、ほぼ南北方向で3.93m（周溝内側計測値2.58m、以下同じ）、短径は現状では3.29m（2.80m）である。周溝の幅は、0.43～0.75mであり、西～南及び南東が広い。深さは、９～13cmときわめて浅く、耕作による削平で浅くなったとしても、本来それほど深くなかったと思われる。

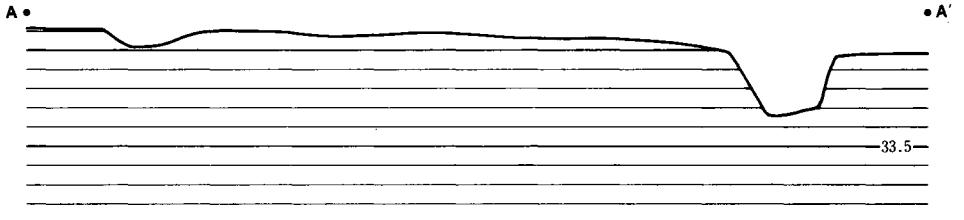
周溝覆土は、上部に黒色土、下部に暗褐色土が堆積していたが、覆土からは、盛土があったか否かを判断することはできない。周溝内あるいは周溝内側からの出土遺物はなかった。

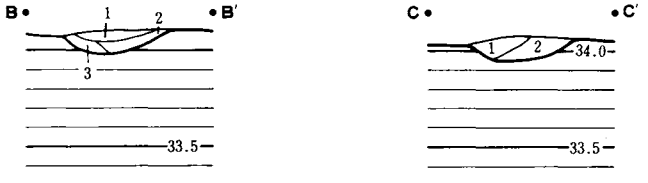
第１号土坑（004）（第60図、図版22）

台地東側のやや南寄りの平坦部に位置する。表土層除去後、黒色土の堆積する落込みの検出によって明らかになった。

検出面での平面形は、北東側が丸味をもち、北西側辺が凹凸するが、全体としては隅丸長方形

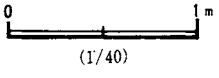






土層説明

1. 暗褐色土 黒色土若干混入、色調暗い
2. 暗褐色土 ローム微粒子若干混入、黒色土粒子若干混入
3. 暗褐色土 ローム土若干混入



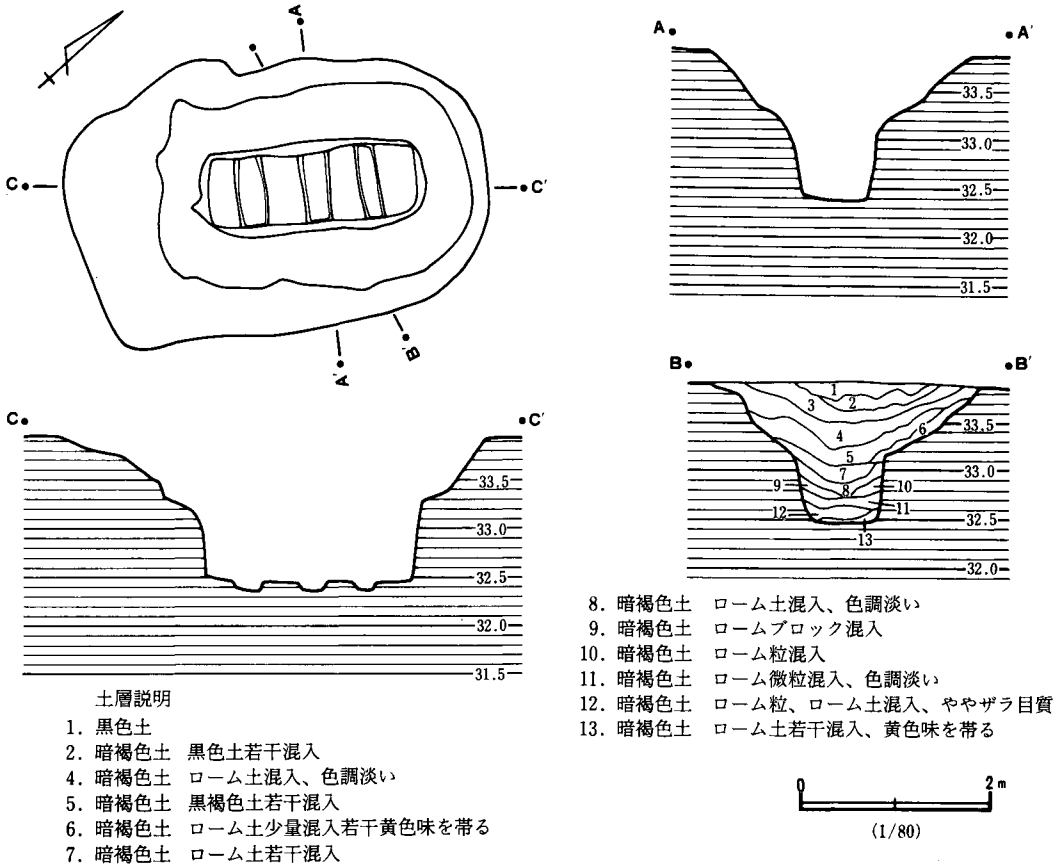
第59図　円形周溝実測図（011II-015）

である。検出面からまず斜めに掘り込まれ、中位付近に段差があって、そこから下はほぼ垂直に掘り込まれている。底面には、３条の掘り込みがある。

検出面での規模は、長辺4.44m、短辺2.80mであり、長軸方位はN－38°30′－Eである。中位の段差部分までの深さは、0.69～0.78mである。この面での平面形も隅丸長方形で、長辺2.36m、短辺0.92mである。底面は、長さ2.18m、幅0.78mで検出面からの深さは1.46～1.53mである。底面に掘り込まれた溝は、幅20～33cm（下端での計測値は17～27cm）、深さ８～11cmである。

覆土は、上部は黒色土、以下は暗褐色土系の土が堆積していたが、中位付近での第４・６層にローム土の混入が目立ち、第７～13層には、ローム土・ロームブロック等ローム系の土の混入がみられ、自然の流入堆積とは思われない。また、底面に掘り込まれた溝の埋土は、軟質のローム質土で、若干のロームブロックが混っていた。

遺物は、覆土の上部から中位にかけて土師坏の細片が出土したが、遺構に伴うものとは思われない。他に当該時期の住居跡等はなく、本遺構のおよその年代をうかがい知る手がかりにはなろう。

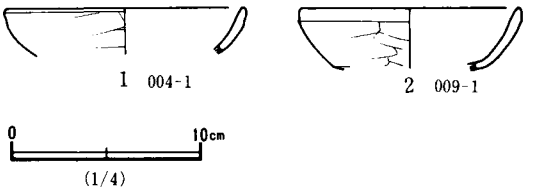


土層説明

1. 黒色土
2. 暗褐色土　黒色土若干混入
4. 暗褐色土　ローム土混入、色調淡い
5. 暗褐色土　黒褐色土若干混入
6. 暗褐色土　ローム土少量混入若干黄色味を帯る
7. 暗褐色土　ローム土若干混入
8. 暗褐色土　ローム土混入、色調淡い
9. 暗褐色土　ロームブロック混入
10. 暗褐色土　ローム粒混入
11. 暗褐色土　ローム微粒混入、色調淡い
12. 暗褐色土　ローム粒、ローム土混入、ややザラ目質
13. 暗褐色土　ローム土若干混入、黄色味を帯る

第60図　第１号土坑実測図（011II-004）

土師坏（第61図１）は、現存高25㎜、口径126㎜で、遺存度は1/20足らず、焼成良、色調は黄褐色、胎土は密であり、成形・調整は、外面は、口唇がヨコナデ、胴部はヘラ削り後に粗いヘラ磨きで、内面は、口唇から胴部にかけて横位のヘラ磨きである。



第61図　第１・３号土坑出土土器

第２号土坑（008）（第62図、図版23）

台地東側の斜面部上方で、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出されて明らかになった。

検出面での平面形は、やや不整形な楕円形で、長軸は等高線とほぼ平行する。掘り込みは、谷側をやや斜めに掘り込んだ後、緩い傾斜でテラス状の面を造り出し、台地平坦部側は一段深く、しかも一部が袋状になるように掘り込んでいる。奥部底面は、多少の凹凸はあるものの、此　比較的平坦である。テラス部分・奥部底面とも踏み固められた様子はなく、軟質である。なお、本遺構は付近の同種の遺構からやや離れている（第42図）。

検出面での規模は、1.58m×1.18mで、主軸方位はN－90°15′－Wである。緩斜面に位置するため、西側（台地平坦部側）と東側（谷側）の掘り込み面の比高差は約0.13mしかない。

内部のテラス部分は、東側掘り込み面から0.34mほどの深さのところにあって、西側に向って緩く傾斜する。テラス部分と西側の部分の間には明瞭な段がなく、緩い傾斜面でつながる。奥部底面の深さは、西側掘り込み面からで0.58～0.65mである。奥部の平面形は、不整形な長方形で1.31m×0.78mである。袋状の部分の現状での奥行きは最大0.18mで、高さは約0.25mである。

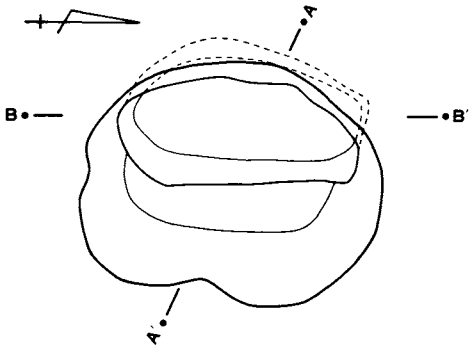
覆土は、暗褐色土が主体であるが、黒色土ないし黒褐色土が混入する層が多い。また、ローム微粒が多く混じるザラ目質状の土層が、南東側から北西側に向って流入したように堆積していた。このような性状の土層は、他の同種の遺構ではみられなかった。下位に堆積した土層には、若干ながらローム土の混入が目立つ。

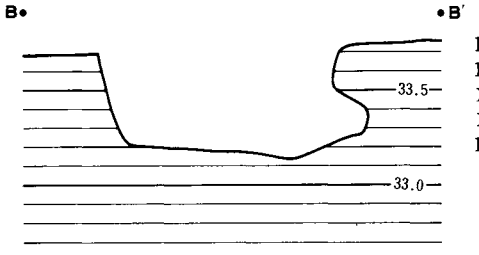
遺構内あるいは覆土中からの出土遺物はなかった。

第３号土坑（009）（第62図、図版23）

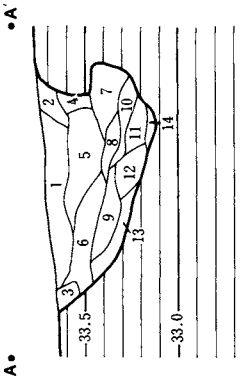
台地東側の斜面のやや上部で、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出され、存在が明らかとなった。第２号土坑よりも斜面の下方にあり、第４・５・６号土坑と同じ高さで並ぶようにあった。

検出面での平面形は、北西側が直線的である不整形な円形であり、長軸はほぼ等高線と平行する。掘り込みは、谷側を浅く掘り込んでテラス状につくり、さらに台地平坦部側へ一段深く掘り



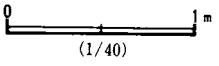


（下）第３号土坑(009)

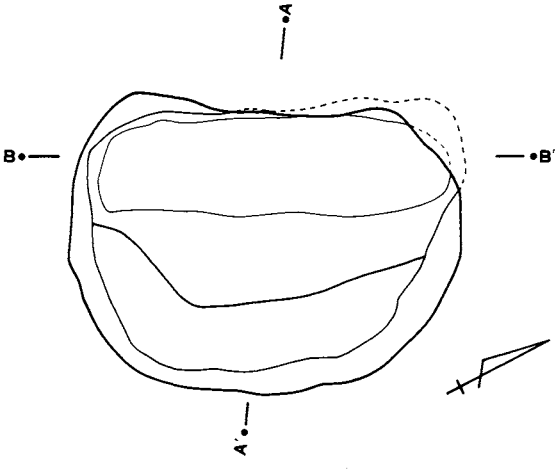


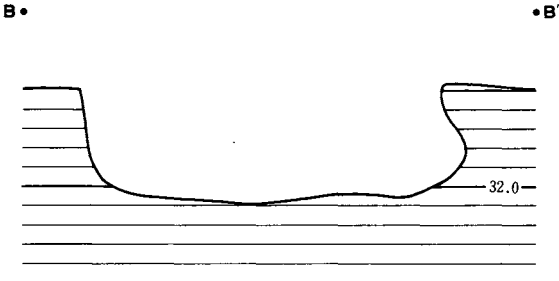
土層説明

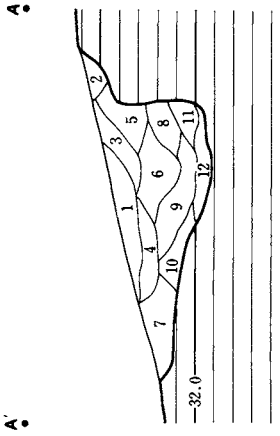
1. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土少混入
2. 淡暗褐色土　暗褐色土若干混入
3. 暗褐色土　ローム粒若干混入
4. ローム　淡暗褐色土若干混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土少、黒褐色土若干、炭化粒若干、ローム微粒若干混入
6. 暗褐色土　ローム微粒やや多、炭化粒若干、黒色土若干混入
7. 暗褐色土　ローム若干、黒褐色土若干、淡暗褐色土少、ローム粒若干混入
8. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒色土若干混入
9. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、ローム微粒少、ローム粒若干、黒色土粒若干混入
10. 淡暗褐色土　ローム少、暗褐色土若干混入
11. 暗褐色土　ローム若干、黒褐色土若干、淡暗褐色土少混入
12. 暗褐色土　ローム粒若干、淡暗褐色土若干混入
13. 淡暗褐色土　ローム粒若干、ローム若干、黒褐色土若干混入
14. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム若干混入



（上）第２号土坑(008)

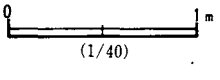






土層説明

1. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
2. 淡暗褐色土　暗褐色土若干混入
3. 黒褐色土　淡暗褐色土若干、暗褐色土少混入
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土　ローム微粒若干、ローム粒若干、淡暗褐色土若干、黒褐色土若干混入
6. 黒色土　ローム粒若干、淡暗褐色土若干混入
7. 暗褐色土　ローム粒若干、黒色土粒若干、淡暗褐色土若干混入
8. 暗褐色土　淡暗褐色土少混入
9. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム若干、黒褐色土若干混入
10. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム若干、黒色土粒若干混入
11. ローム
12. 暗褐色土　ローム粒若干、ローム混入



第62図　第２・３号土坑実測図（011-008、009）

込んで、一部は袋状とする。この奥部は、若干の凹凸はあるものの、ほぼ平坦で、テラス部分とともに軟質である。

検出面での規模は、2.06m×1.45mで、主軸方位はN－61°30′－Wである。斜面に位置するため、北西側（台地平坦部側）と南東側（谷側）との掘り込み面の比高差は0.44mある。

テラス部分は、南東側から深さ0.07～0.11m、幅0.34～0.47mで、ほぼ平坦である。奥部は、テラス面より約0.13～0.14m深く、底面は、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。奥部の平面形は、不整形な長方形で1.98m×0.99mである。袋状部は現状での奥行きの最大は約0.2m、高さは約0.29mである。

覆土は、暗褐色土が主体であるが、中位に黒色土が、下位北西壁際にはローム土が堆積するほか、各層には、ローム層の混入は少ないが、黒色土や黒褐色土、淡暗褐色土等の混入が目立つ。遺構内あるいは覆土中からの出土遺物はなかった。

土師坏（第62図２）は、現存高32㎜、口径115㎜、底径81㎜で、遺存度1/15、焼成良、色調淡褐色、胎土は比較的密で、赤褐色粒子が多く、成形・調整は、外面は、口唇がヨコナデ、胴部がヘラ削り、底部が手持ヘラ削りで、内面は、口唇から底部までヨコナデである。

第４号土坑（010）（第63図、図版24）

台地東側の斜面のやや上部で、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出されて存在が明らかとなった。第３号土坑の、北側約５mの近距離に位置し、この２基は１つのグループをつくる。

検出面での平面形は、やや不整形な長方形で、長辺は等高線とほぼ平行する。掘り込みは比較的整ったもので、谷側にテラスを造り出し、台地平坦部側をさらに一段深く、一部が袋状になるように掘り込む。テラス部分と奥部の底面は、多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦であり、軟質である。

検出面での規模は、2.21m×1.20mで、主軸方位はN－55°－Wである。斜面に位置するため、谷側と台地平坦部側の掘り込み面の比高差は約0.26mある。

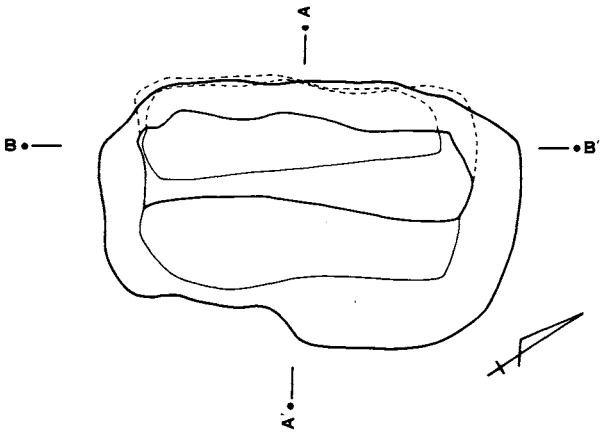
谷側掘り込み面からテラスまでの深さは、0.27～0.32mで、テラスの幅は0.21～0.48mである。奥部はテラス面より約0.3m深い。奥部の平面形は長方形で、1.74m×0.64mである。奥部の袋状部は、奥行きが最大で約0.2m、高さ約0.4mで、断面は丸味のある「U」字形である。奥部底面は、緩やかに北東側へ傾斜する。

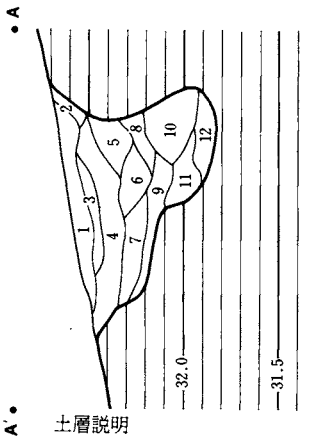
覆土は、上部は暗褐色土あるいは黒色土が堆積し、中位は暗褐色土が主体で黒色土や黒褐色土が混入する土層が堆積し、下位には、淡暗褐色土が主体でローム土の混入が目立つ土層が堆積していた。

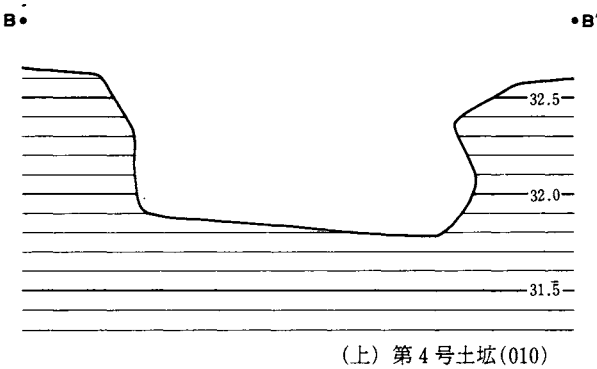
遺構内あるいは覆土中からの出土遺物は、なかった。

第５号土坑（011）（第63図、図版24）

台地東側の斜面のやや上部で、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出されて存在が



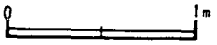




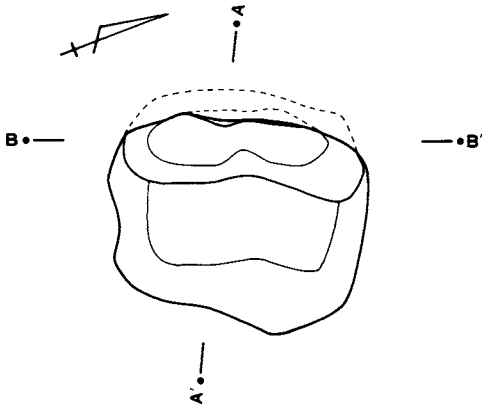
（上）第4号土坑(010)
（下）第5号土坑(011)

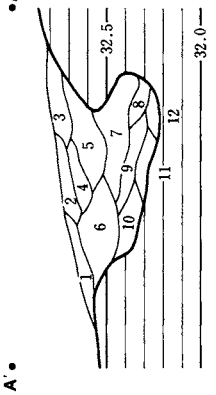
土層説明

1. 暗褐色土 ローム微粒若干、淡暗褐色土若干混入
2. 淡暗褐色土 ローム若干、暗褐色土若干混入
3. 暗褐色土 ローム粒若干、ローム少、淡暗褐色土若干混入
4. 暗褐色土 淡暗褐色土若干、黒色土若干、ローム粒若干混入
5. 暗褐色土 ローム粒若干、淡暗褐色土少混入
6. 暗褐色土 ローム微粒若干、淡暗褐色土若干、黒褐色土若干混入
7. 暗褐色土 ローム微粒少、淡暗褐色土若干混入
8. 淡暗褐色土 ローム少、暗褐色土若干混入
9. 暗褐色土 ローム微粒やや多、淡暗褐色土少、黒褐色土若干混入
10. 淡暗褐色土 ロームやや多、ローム粒若干、暗褐色土若干混入
11. 淡暗褐色土 ローム粒若干、ローム微粒若干、暗褐色土若干混入
12. 淡暗褐色土 ローム少、ローム粒少、ロームブロック若干混入



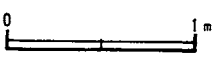
(1/40)



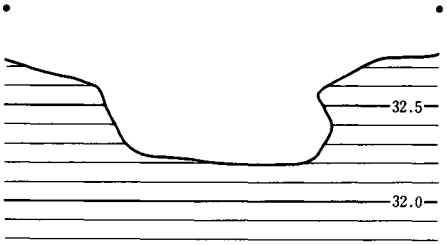


土層説明

1. 淡暗褐色土　暗褐色土少混入
2. 暗褐色土　黒褐色土若干混入
3. 暗褐色土　淡暗褐色土若干混入
4. 暗褐色土　黒褐色土若干混入
5. 暗褐色土　淡暗褐色土少、ローム微粒若干混入
6. 暗褐色土　淡暗褐色土若干、黒褐色土若干混入
7. 暗褐色土　ローム微粒若干、ローム粒若干、ローム混入
8. 淡暗褐色土　ローム微粒若干、ローム若干混入
9. 暗褐色土　淡暗褐色土少、ローム微粒若干混入
10. 淡暗褐色土　ローム若干、暗褐色土若干混入
11. 暗褐色土　ローム粒若干、淡暗褐色土若干混入
12. 淡暗褐色土　暗褐色土若干混入



(1/40)



第63図　第4・5号土坑実測図（011-010、011）

明らかになった。第3・4・6号土坑と斜面のほぼ同一線上に並ぶが、第3・4号土坑とはやや離れ、第6号土坑に近い。

検出面での平面形は、方形に近い長方形で、長辺は等高線にほぼ平行する。掘り込みは、比較的整ったもので、谷側にテラスを造り出し、台地平坦部側をさらに一段深く掘り込んでいて、台地平坦部側が一部袋状である。テラス部分は奥部に向って緩やかに傾斜する。テラス部や奥部底面は、軟質である。

検出面での規模は、1.46m×0.97mと小形である。主軸方位は、N—61°—Wである。斜面に位置するため、谷側と台地平坦部側の掘り込み面の比高差は約0.26mある。

谷側掘り込み面からテラスまでの深さは、0.21～0.28mで、テラスの幅は0.40～0.42mである。奥部は、テラス面より約0.08m深い。奥部の平面形は長円形に近く、1.26m×0.48mである。底面は北東側へ緩やかに傾斜する。奥部の袋状部は奥行きが最大約0.2m、高さ約0.3mで、断面形は丸味をもつ「U」字形である。

覆土は、最上部に黒褐色土が多く混じる土層がレンズ状に堆積していて、自然堆積によるものと思われる。それより下には、黒褐色土が斑状に混入した層あるいはローム土が混入した層が堆積していて、自然の堆積とはやや異なるように思われる。

遺構内あるいは覆土中からの出土遺物は、なかった。

第6号土坑（013）（第64図、図版25）

台地東側の斜面のやや上方で、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出されて存在が明らかとなった。第5号土坑の南約5mにあり、この2基で1つのグループをつくるようである。

検出面での平面形は、不整形な円形で、長軸は等高線とほぼ平行する。掘り込みはやや浅く、それほど整っていない。谷側に幅の広いテラスを造り出し、台地平坦部側はさらに一段深く掘り込み、一部が袋状である。テラス部分や奥部底面は、多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦であり、軟質である。

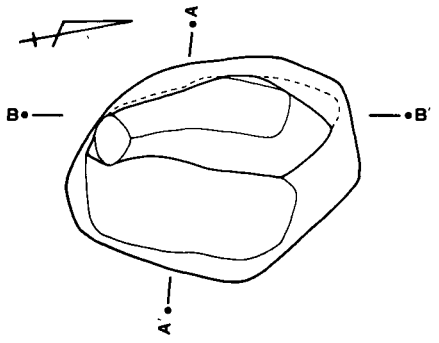
検出面での規模は、1.53m×1.20mと、第5号土坑とともに小形である。主軸方位は、N—79°—Wである。斜面に位置するため、谷側と台地平坦部側の掘り込み面の比高差は約0.22mある。

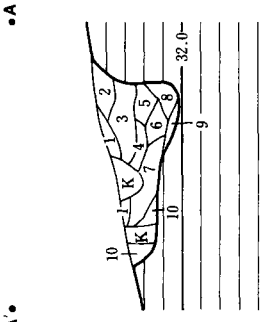
谷側掘り込み面からのテラスの深さは約0.12mで、テラスの幅は約0.5mである。奥部は、テラス面より約0.11m深い。奥部の平面形は不整形な長円形で、1.22m×0.28mである。袋状部は、奥行きが最大0.17m、高さ約0.2mである。

覆土は、暗褐色土が主体であるが、中位よりやや下方に黒色土が堆積していて、その他の土層でも、黒色土が混入するのが認められ、下位の土層ではローム土が混入するなど、自然の堆積とは異なるように思われる。

遺構内あるいは覆土中からの出土遺物は、なかった。

第7号土坑（016）（第64図、図版25）

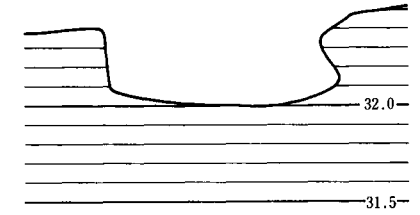


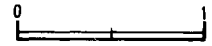


土層説明

1. 暗褐色土 淡暗褐色土若干混入
2. 暗褐色土 ローム粒若干、淡暗褐色土少混入
3. 暗褐色土 淡暗褐色土若干混入
4. 暗褐色土 黒色土若干混入
5. 暗褐色土 黒色土若干、淡暗褐色土若干混入
6. 黒色土 暗褐色土若干混入
7. 暗褐色土 ローム粒若干、淡暗褐色土若干混入
8. 暗褐色土 ローム少混入
9. 暗褐色土 ローム若干、黒色土若干混入
10. 暗褐色土 ローム若干、色調やや淡い

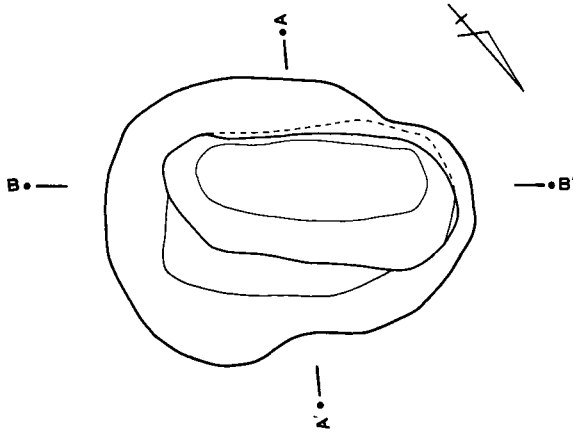
K. 撹乱

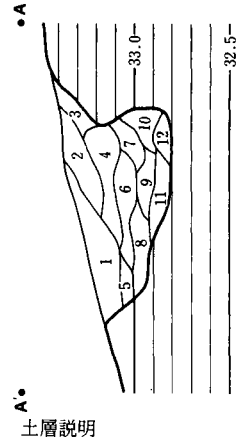


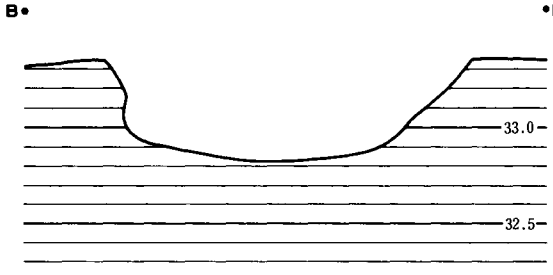


(1/40)

(上) 第6号土坑(013)
(下) 第7号土坑(016)

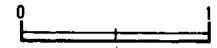






土層説明

1. 暗褐色土 暗褐色土若干、黒色土若干混入、砂質
2. 暗褐色土 淡暗褐色土若干、黒色土若干混入
3. 暗褐色土 淡暗褐色土若干混入
4. 暗褐色土 淡暗褐色土少混入
5. 暗褐色土 淡暗褐色土多混入
6. 黒褐色土 淡暗褐色土若干混入
7. 暗褐色土 淡暗褐色土少、ローム微粒若干混入天井部の崩落か
8. 暗褐色土 淡暗褐色土少混入
9. 暗褐色土 ローム粒若干混入
10. 暗褐色土 淡暗褐色土少混入天井部崩落か
11. 暗褐色土 ローム粒若干、ローム若干混入
12. 暗褐色土 淡暗褐色土多混入



(1/40)

第64図　第6・7号土坑実測図 (011II-013、016)

他の同種の土坑とは異なり、唯一つ台地北側の斜面に位置する。北側斜面の西寄りで、暗褐色土層面で、黒色土の堆積する落込みが検出されて、存在が明らかになった（第42図）。

検出面での平面形は、やや不整形な長円形で、長軸は等高線とほぼ平行する。掘り込みは比較的整い、谷側に、やや幅が狭いが、テラスを造り出し、台地平坦部側は、さらに一段深く掘り込み、一部袋状である。テラス面及び奥部底面は、若干の凹凸はあるものの、ほぼ平坦であり、軟質である。

検出面での規模は、1.94m×1.04～1.49mで、主軸方位はN—137°—Sである。斜面に位置するため、谷側と台地平坦部側の掘り込み面の比高差は約0.31mある。

谷側掘り込み面からのテラスの深さは0.22mで、テラスの幅は0.17m～0.30mである。奥部は、テラス面より約0.12m深い。奥部の平面形は長円形で、1.56m×0.74mである。袋状の部分は、奥行きが最大約0.10m、高さ約0.33mである。

覆土は、暗褐色土が主体であるが、最上部では黒色土が混入する。中位には、黒褐色土がほぼ水平に堆積し、中位から下位にかけて、淡暗褐色土の混入が目立ち、南西壁際には天井部の崩落かと思われる層も認められる。

遺構内あるいは覆土中からの出土遺物は、なかった。

溝（第42図、図版26・27）

調査区域全体で11条の溝がみつかったが、そのほとんどは、底面が踏み固められているか、覆土中に踏み固められた層がみられ、道の跡と思われるものである。

これらの溝は、その位置によって、いくつかの種類に分けられる。

台地の平坦部を走るタイプとして、M1～3がある。M1は、調査区域のやや西寄りにあって、南西から北へ向って走り、台地を縦断する。南西側はM4と交差するが、M4の新しい部分に切断されている。台地の中央近くで、古墳の周溝の西側角を切断している。東・西2条の並走する溝からなり、土層断面からは、西側の溝の方が新しい。断面は、東側の溝が「V」字形あるいは薬研状であるのに対して、西側の溝は、舟底形である。西側の溝の覆土中から磁器碗の破片が出土した。

M2・3は、あいだが切れているものの、本来は、1本の同じ溝と思われる。調査区域の西端から南東方向へ、そして東へと走り、M1に切断されておわっている。

台地の平坦部から斜面部へと下って走るタイプとして、M4・5・7～11がある。M4は、平坦部の部分しか調査できていないが、斜面部までのびていることは確実であろう。この溝は、他の溝と覆土が異なり、暗褐色土が主体であった。踏み固められてできた硬質層は、覆土中に、大きくみて5枚確認でき、左右に動いているのが認められた。覆土中から寛永通宝(第66図1)、磁器片が出土し、比較的新しい年代の溝と思われる。この溝の性格を考える上で注目されるのは、この溝に平行する道が、現在の佐倉市神門と岩富の字名の境界になっていることである。なお、このM4の溝は、第1・2号の方形周溝をともに切断していた。

同じように、M5・7～11も台地平坦部から斜面部へ走るタイプで、等高線に対して直交するものと、斜交するものに分かれる。直交するM7・9の底面にはピット状のくぼみがみられ、M7では、傾斜の緩やかな部分よりも傾斜のきつい部分に多くみられた。M7の覆土中から須恵甕片が少量だがまとまって出土し、M8の覆土中から磁器碗の破片が出土している。M5・7～11のうち、M5だけは離れて位置し、M7～11は互いに近接して位置している。M7～11は明代台遺跡から木戸場遺跡への道跡の一群であり、M7・8は斜面下方で交差するなど、溝のあいだに時間差があるものと思われるが、溝のあいだの前後関係については不明である。

台地の斜面部を等高線に平行するように走るタイプとしてM6がある。調査区域の北東の端近くを、北西から南東にかけて走る。北西側はM1と接近するが、ちょうど交点にあたりそうな付近は、台地が崩落していて、交差するか否か不明である。覆土の断面から、2条の溝が重複しているのが認められた。この溝の北西寄りと南東寄りで、それぞれ数点ずつ、まとまった状態で北宋銭が出土した（第66図2～9）。

炭焼穴（第42図、第14表、図版31）

調査区域全体にわたって、炭焼に用いられたと思われる土坑が散在してみつかった。仮に炭焼穴と称する。調査した総数は23であった。

平面形は長方形あるいは正方形であり、素掘りで何らの施設もない穴で、その底面及び壁面が赤色化したり熱を受けていて、覆土中に薄く焼土が堆積している場合もある。ほとんどに、使用後に埋め戻された様子が認められ、炭化材あるいは炭化粒が底面あるいは覆土中にみられる例が多い。掘り込みは、ほぼ垂直にされ、底面も平坦である。

分布には、特に傾向といったものは認められず、どのような立地を選んでつくられたものか不明であるが、調査区域の近くに人家がないことから、おそらく、畑地あるいは山林若しくは荒地の近辺に築かれたものと考えられる。

形態は、先述のように、長方形タイプと正方形タイプに分けられ、長方形タイプは、2.54m×1.75mが最大で、1.94m×1.26mが最小である。正方形タイプは、1.64m×1.61mが最大で、1.25m×1.09mが最小である。ただし、一部の炭焼穴の規模は不明確である。穴の深さは、0.19mから0.62mまで幅があるが、0.3～0.5mの間にある穴が大半を占める。

これらの炭焼穴の構築・使用の年代については、覆土中からの出土遺物がほとんどなく、不明であるが、わずかに、C－2号跡とした炭焼穴（第42図）の覆土中から図版31に示した磁器の茶碗の破片が出土していて、手がかりを与えてくれる。底面から約24cm浮いていたが、この炭焼穴も使用後に埋め戻されていることから、茶碗の年代とこの炭焼穴の使用の年代は近いものと思われる。

なお、現在でも、上述の炭焼穴のような形態の土坑によって自家用の炭焼をおこなっている地域があると聞く。

第14表　炭焼穴一覧表

長…長方形タイプ
正…正方形タイプ

番　号	長さ(m)×幅(m)	深さ(m)	タイプ	備　考
C － 1	(1.87+α)×1.51	0.54	長	
C － 2	1.64×1.54	0.41	正	磁器茶碗出土
C － 3	2.26×1.49	0.44	長	
C － 4	2.05×1.44	0.49	長	
C － 5	2.20×1.32	0.44	長	
C － 6	1.56×1.49	0.39	正	
C － 7	1.94×1.26	0.47	長	
C － 8	一辺1.5前後	0.42	正	
C － 9	2.35×1.35	0.52	長	
C － 10	2.54×1.75	0.64	長	
C － 11	1.34×1.33	0.54	正	
C － 12	1.17×1.22	0.31	正	
C － 13	1.61×1.64	0.43	正	
C － 14	2.18×1.40	0.45	長	
C － 15	2.20×1.28	0.49	長	
C － 16	2.35×1.25	0.35	長	
C － 17	2.34×1.55	0.51	長	
C － 18	1.30×1.29	0.33	正	
C － 19	(2.16+α)×1.35	0.45	長	
C － 20	1.35×(1.06+α)	(0.11+α)	正	
C － 21	1.43×1.30	0.62	正	
C － 22	1.25×1.01	0.19	正	
C － 23	(1.47+α)×1.87	0.54	正	

(2)遺　物

その他遺構・グリッド出土の土器（第65図）

1．磁気の碗あるいは皿の口唇。焼成は良好で堅緻、胎土は淡白色で密であり、内外面とも淡青緑色の釉がかかる。釉は、口唇部はやや褐色味を帯る。発色は良く、厚さは0.8㎜である。外面に、ヘラ状工具で半肉状に花弁が浮彫りされている。

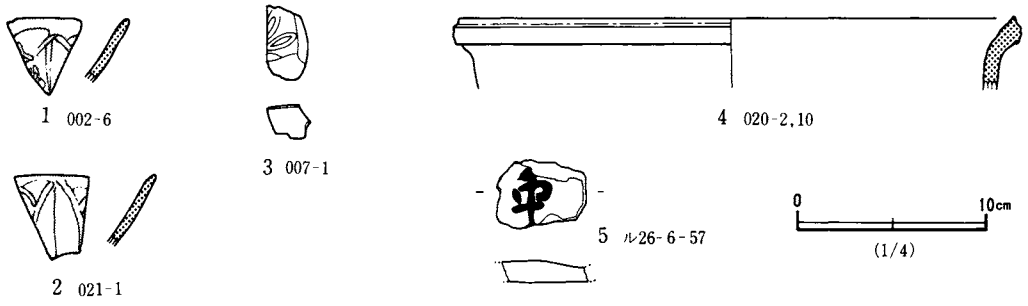
2．磁器の碗の口唇。焼成は良好で堅緻、胎土は淡灰色で密であり、内外面とも濁緑色の釉がか

かる。釉は細かいヒビが入り、外面にくらべて内面が著しい。釉厚はやや薄い。外面に、花弁が浮彫りされ、花弁の周囲は、浅い沈線で画されている。

3．磁器の碗の底部。焼成は良好で、胎土は淡灰白色で密であり、内底と高台の外面に淡緑色の釉がかかる。釉は、発色は良く、やや厚い。見込みに花弁（重弁）が沈線で陰刻されている。

4．須恵甕の口頸。焼成はやや不良で、胎土は、灰色で、褐色粒子がやや多く混じるが、密である。成形・調整は、外面は、口唇がヨコナデ、頸部はタタキであるが、上部では一部ナデ消されている。内面は、口唇から頸部までヨコナデである。

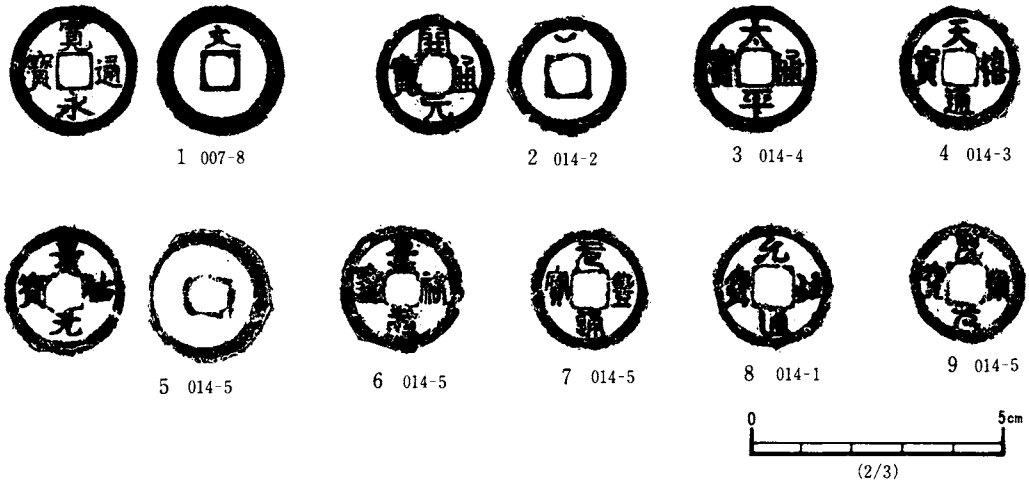
5．土師坏の底部。焼成は良で、胎土は淡褐色で密で、若干の砂粒が混じる。成形・調整は、外底はヘラナデで、内底はロクロ成形である。墨書のあるのは内底面で、何という字にあたるかは不明である。



第65図　その他遺構・グリッド出土の土器

古　銭（第66図、第15表）

本遺跡の溝の覆土中から、古銭9枚が出土した。それらの溝は、いずれも道の跡と思われる。古銭は、全て銅銭である。



第66図　古　銭

1は、溝M4から出土したもので、寛永通宝である。背面に「文」の字がみられ、いわゆる新寛永の文銭と称されている類である。

2～9は、溝M6から出土したものである。2～4と8は、M6の北西寄りで小範囲にまとまって出土した。これに対して、5～7と9は、南東寄りで一括して出土した。

2は、対読か廻読かによって分かれるが、「開通元宝」としておく。唐銭である。背面に「⌒」の記号がみられる。これに対して、3～9はいずれも北宋銭である。3は「太平通宝」、4は「天禧通宝」、5・6は「景祐元宝」、7は「元豊通宝」、8は「元祐通宝」、9は「聖宋元宝」である。

第15表　古銭観察表

外径・内郭内長・外縁厚は平均値である。

挿図番号	銭貨名	初鋳年	外径(mm)	内郭内長(mm)	外縁厚(mm)	重量(g)	遺物番号	備考
1	寛永通宝		25.45	5.90	1.46	3.6	007－8	
2	開元通宝	964	23.45	6.62	1.02	1.9	014－2	
3	太平通宝	976	24.55	6.50	1.32	3.2	014－4	
4	天禧通宝	1017	24.12	6.37	1.33	3.0	014－3	
5	景祐元宝	1034	24.07	6.95	1.05	2.0	014－5	2つにわれている。
6	景祐元宝	1034	24.72	6.00	1.11	2.1	014－5	
7	元豊通宝	1078	23.42	6.72	1.39	2.9	014－5	
8	元祐通宝	1086	24.00	7.35	1.25	2.5	014－1	
9	聖宋元宝	1101	23.30	6.87	0.97	2.4	014－5	

第6節　ま　と　め

第2節から第5節までで記したところをまとめると、明代台遺跡B地点の概要はつぎの通りである。

先土器時代

ナイフ形石器と思われるものが1点出土したにとどまる。

縄文時代

土坑3がみつかった。いずれも、構造からみて、落し穴と思われる。出土遺物がなかったために、詳細な時期はわからない。同じように落し穴と思われる縄文時代の土坑は、明代台遺跡A地点でも4つみつかっている(第3章第3節)。A地点の第1号土坑とB地点の第2号土坑、A地点の第4号土坑とB地点の第1・2号土坑が、形態・規模の面で似ている。A地点の第2・3号土坑のように底面に獲物を串刺しにするためと思われる杭をいけるための穴が掘られた形態のものは、B地点ではみつからなかった。なお、縄文時代の落し穴がみつかったのは、本書で報告する4遺跡のうち、この明代台遺跡のA地点とB地点だけである。

縄文時代の落し穴と思われる土坑は、同じ佐倉第三工業団地の中の星谷津遺跡とタルカ作遺跡でもみつかっている（第1章第2節に掲げた両遺跡の報告書参照）。

A地点の第1号土坑に似たものが星谷津遺跡の010の土坑であろう（報告書69・74・75頁）。010も、出土遺物はなく、時期不明である。

A地点の第4号土坑に似たものは、星谷津遺跡の023の土坑と（報告書69・78・80頁）、タルカ作遺跡の第1～4号落し穴（報告書63・75～78頁）がある。口の部分の長さの点で、明代台遺跡A・B地点のものに比べて、星谷津、タルカ作遺跡の第1～3号は50cm前後大きい。年代についての手がかりとなる出土遺物は、タルカ作遺跡の第3号落し穴で、夏島式の土器片がややまとまって出土している。

A地点の第2・3号土坑に似た落し穴は、佐倉第三工業団地内の既に報告書の刊行された遺跡では、みつかっていない。

遺物は、縄文土器片が、前期後半～晩期のものが少量と、礫を中心とする石器、そして土製品が3点出土した。

古墳時代

古墳（方墳）が1つみつかった。西角付近が溝で削り取られていた。墳丘はわずかのこっていたが、埋葬施設はなかった。第42図に明らかなように、2つの方形周溝と、近接している。似たところも多い。両者の区別は判然としない。古墳は、本書の4遺跡では、向山谷津遺跡でみつかっているが、円墳である（第2章第4節）。佐倉第三工業団地内の既に報告書の刊行された遺跡では、方墳はみつかっていない。

歴史時代

方形周溝2、円形周溝1、土坑7、溝11、炭焼穴23がみつかり、方形周溝に伴って土師器・須恵器が、溝に伴って古銭が、炭焼穴に伴って磁器茶碗が出土した。

方形周溝2は、上述の通り、古墳と近接している上、似たところが多い。周溝内の出土土器からみると、古墳と第1号方形周溝は、互いに相手の須恵長頸壺の破片が出土していて、構築年代が近いことをうかがわせる。この2遺構に比べて、第2号方形周溝は新しい。

方形周溝は、本書の4遺跡の中では、明代台遺跡A地点（第3章第4節）と、木戸場遺跡A地点でみつかっている（第6章第4節）。

円形周溝1は、古墳・方形周溝からやや離れている。東側が溝で壊されている。円形周溝の東側には、歴史時代の土坑が集まってみつかっている。

円形周溝は、本書の4遺跡の中では、木戸場遺跡B地点でみつかっている（第6章第4節）。

土坑7は、第1～6号が調査区域の東側に、第7号が北側に1つみつかった。

構造の上から、横への掘り込みを持たない第1号と掘り込みを持つ第2号～第7号に分けられる。横への掘り込みを持つタイプの土坑墓は、向山谷津遺跡で第2・3号土坑の2つがみつかっている。こうした形の土坑がみつかったのは、本書で報告する4遺跡のうち、向山谷津遺跡と明代

台遺跡B地点だけである。

ここB地点の第1号土坑と似た土坑は、佐倉第三工業団地の中では、立山遺跡で4つみつかっている(第1章第2節に掲げた同遺跡報告書の第2章第3節4、土坑を参照)。立山遺跡の10号土坑（066）でも、ここB地点の第1号土坑と似て、土坑覆土の上位で土師器片が出土しているのは、注目される。

同じくここB地点の第2～7号の土坑に似た土坑は、星谷津遺跡で5つ（同遺跡報告書69・81～87頁)、立山遺跡で7つ(同遺跡報告書の第2章第3節4、土坑）みつかっている。星谷津遺跡の7つの中からは、須恵長頸壺、須恵坏、須恵坏蓋、鉄製刀子が出土しているが、立山遺跡の5つからは、4号土坑（011）で土師甕の破片がまとまって出土したにとどまる。

溝11は、いずれも道の跡と思われ、中に、大字の境となると思われるものがあった。2条の溝が並走していたり、同じところへ何条もの溝がみられることから、道の跡とすれば、時期によって道が微妙に動いたことを示唆して興味深い。1条の溝では北宋銭がまとまって2個所から出土した。

この他に、炭焼穴が23みつかり、そのうちの1つから磁器茶碗片が出土した。

第５章　明代台遺跡Ｃ地点

第１節　立地と環境

明代台遺跡Ｃ地点は、佐倉市岩富字明代台2212、2217に所在した。東側に北へ向ってひらく大きな谷がある。その谷にはいる台地の肩口に位置する。佐倉第三工業団地へ県道から進入できるよう設けられた交差点の北側拡幅部分およびその東の変電所の部分にあたる。

発掘調査は２年度に分けておこなった。

昭和58年度　交差点拡幅部分540m²（第67図、図版32）

昭和60年度　変電所部分1,450m²（第68図、図版33）。

このうち、昭和60年度分（明代台2212）では、確認調査（上層10％、下層４％）の結果、ごく新しい時期の地境溝がみつかったのみであったため、本調査はおこなわなかった。

本調査をおこなった昭和58年度分（明代台2217）の原状は荒地であった。昭和60年に確認調査をおこなった部分は、本来は谷の中であったところで、佐倉第三工業団地の造成工事の一環としていったん埋めたものを、掘りかえした。

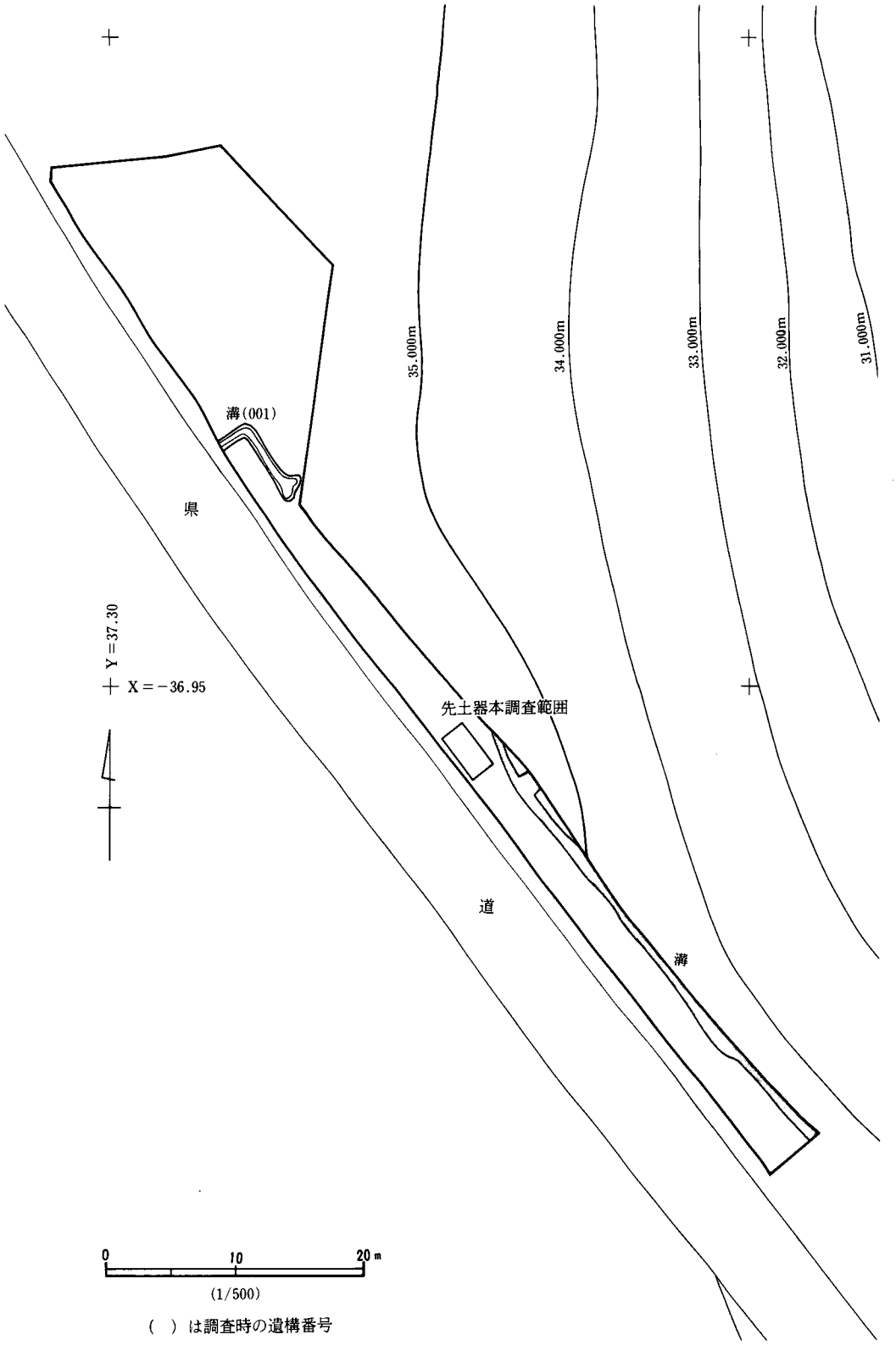
第２節　先土器時代

先土器時代の遺構としては、関東ロームのⅧ層中で、石器集中が１個所みつかった。３点の石器および剝片が得られた。しかし、検出した場所が県道の際であったことなどから、石器集中がこの３点でおわるか否かを確認するのに十分な拡張をしての調査は、おこなえなかった。道路からさらに南西側へと石器集中が広がっている可能性は十分にある。

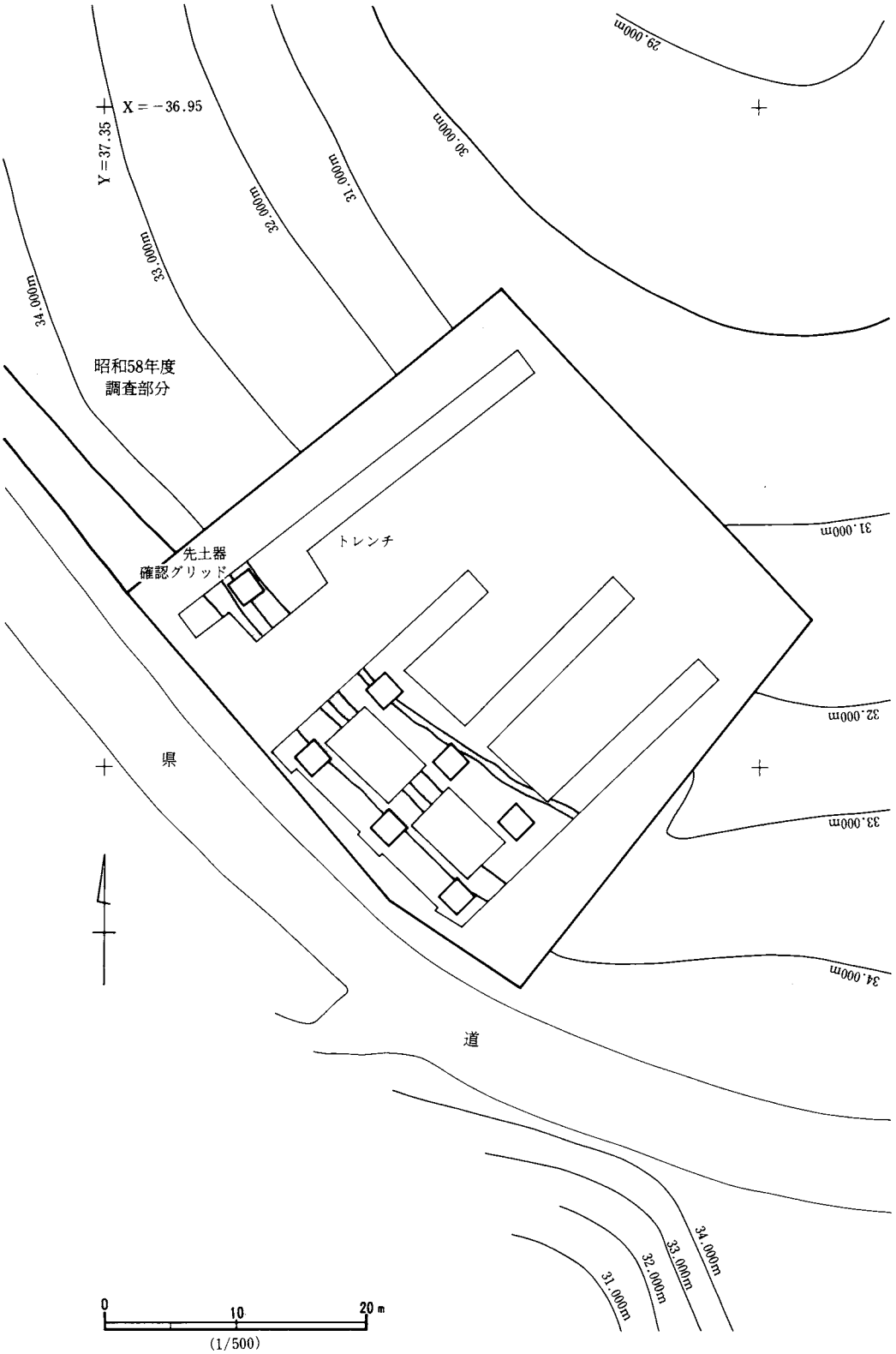
石器・剝片は、60cm前後の間隔を置いて、１列に並んで出土した。出土のレベルはほとんど同じで、層位にすると全てⅧｂ層である（第69図、図版32）。石器・剝片の内訳は、両面加工石器、鋸歯縁削器、剝片各１点の合計３点である（第70図、第16表、図版34）。

１は、玄武岩製の両面打製の石器の一種。素材は部厚な剝片であり、腹面の中央に素材段階の主要剝離面がのこる。背面には原礫面が大きくのこる。図の下方は欠けていると思われる。

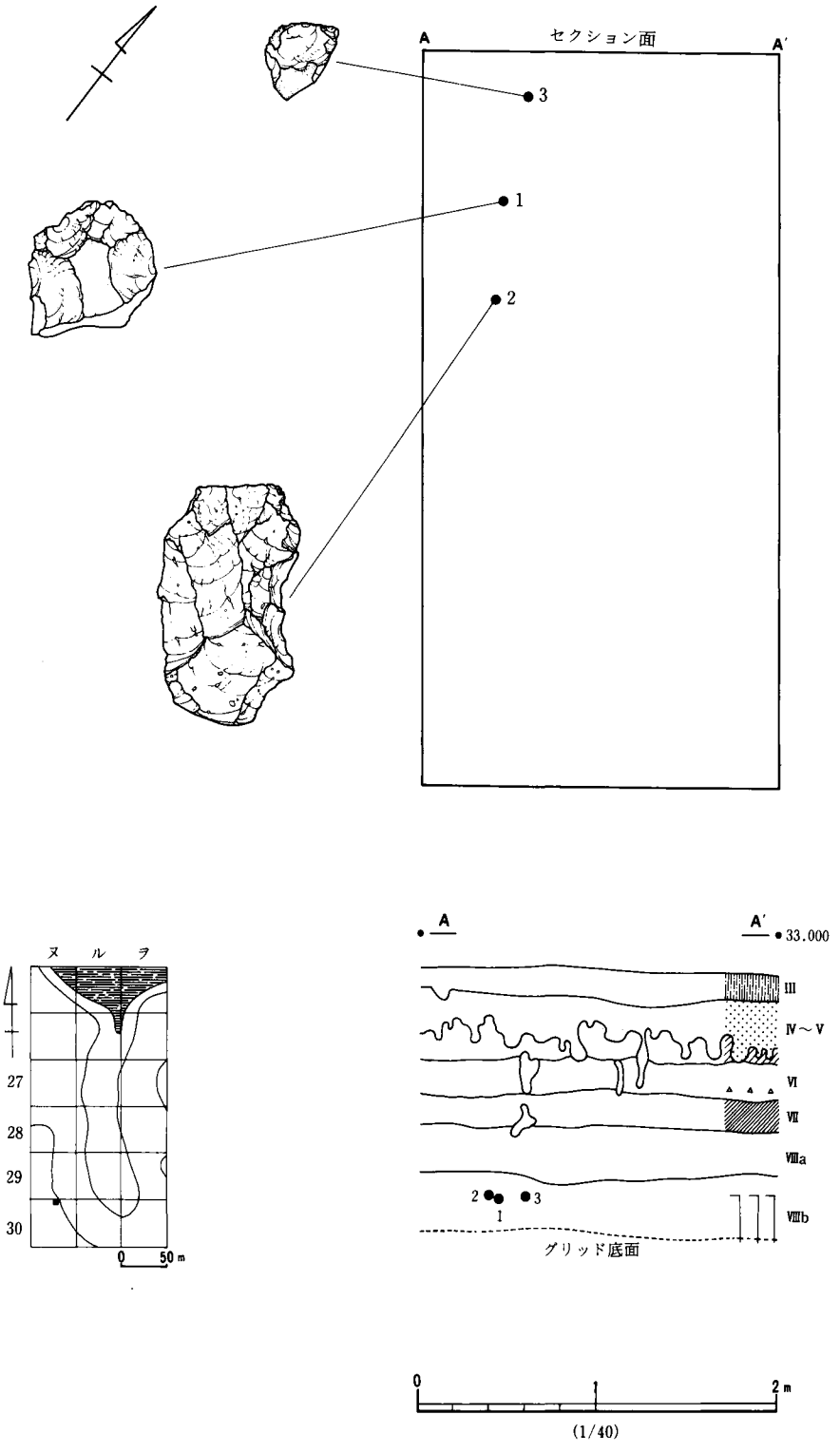
２は、石英や長石と思われる細粒石、黒色の粒子を多く含んだ白色の凝灰岩製の鋸歯縁削器。これも部厚な剝片を素材としている。図の下端では、幅１cm前後にわたり、腹面、背面の両面とも淡い褐色であり、褐色の付着物が斑点状に着く。図の下端にみられる細長い平滑の面も同様である。この平滑面は原礫面であるかもしれない。背面剝離面は大きく５枚が識別できるが、その相互の切り合い関係からは、加撃点が中央→左→右→中央と左右に振り分けられたことが推測できる。



第67図　明代台遺跡C地点昭和58年度本調査区域全測図（028）

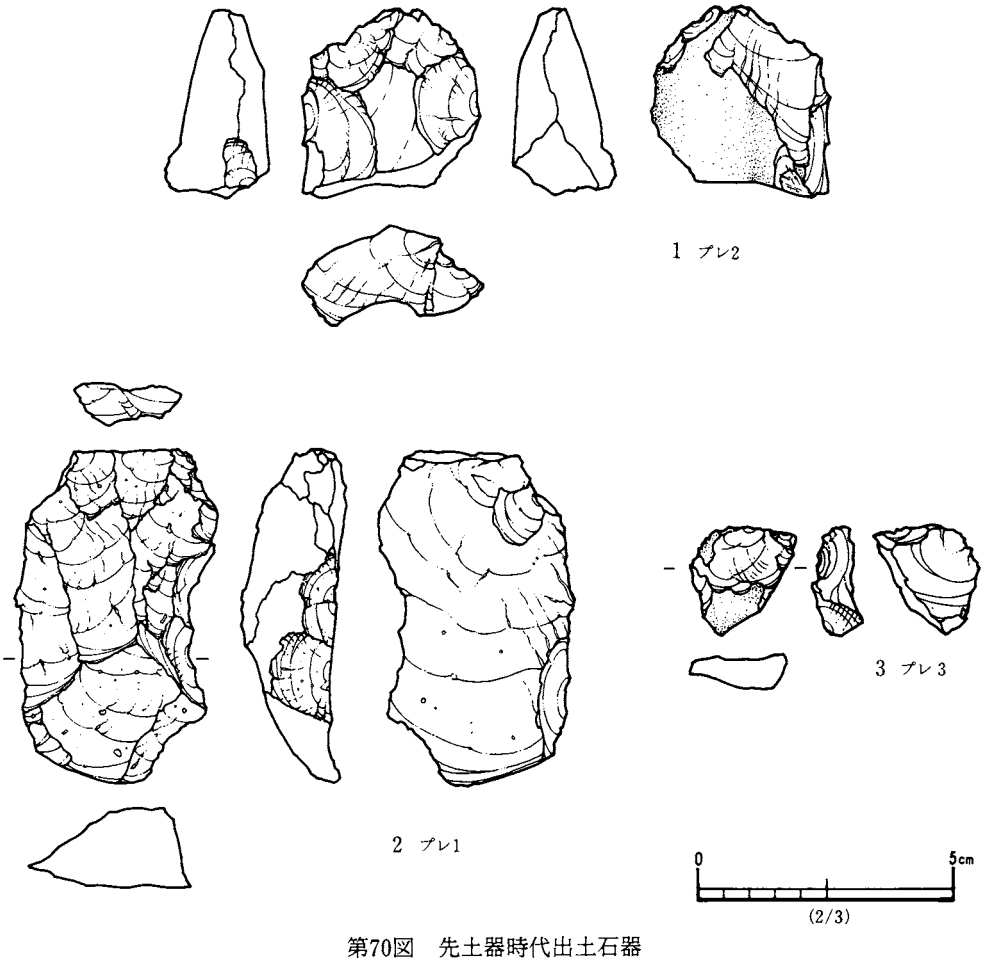


第68図　明代台遺跡C地点昭和60年度確認調査区域全測図（028）



第69図　先土器時代石器出土状況

3は、黄褐色ないし褐色のチャート製の剥片である。腹面に大きく褐色の部分がある。背面には、上・下ともに原礫面がのこる。



第70図　先土器時代出土石器

第16表　先土器時代石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
プレ 1	鋸歯縁削器	凝灰岩	64.0	40.7	15.8	37.0	2	完形
2	両面加工石器	玄武岩	35.6	39.3	16.1	23.2	1	頭部破片か。原礫面にマンガン附着
3	剥片	チャート	21.7	19.7	7.6	3.0	3	完形

第3節　縄文時代

縄文時代については、遺構はみつからなかった。土器片が少量と石器が1点得られた。

土器片はつぎの通りの内訳であった（第71図、第17表、図版34）。

早期条痕文系…… 3個体3点（1、2）

諸磯C式…… 1個体3点（3、3a、3b）

阿玉台Ⅰb式…… 2個体2点（4、5）

加曽利EⅢ式…… 1個体1点(6)

加曽利EⅣ式…… 1個体1点(7)

加曽利B式…… 2個体2点（8、9）

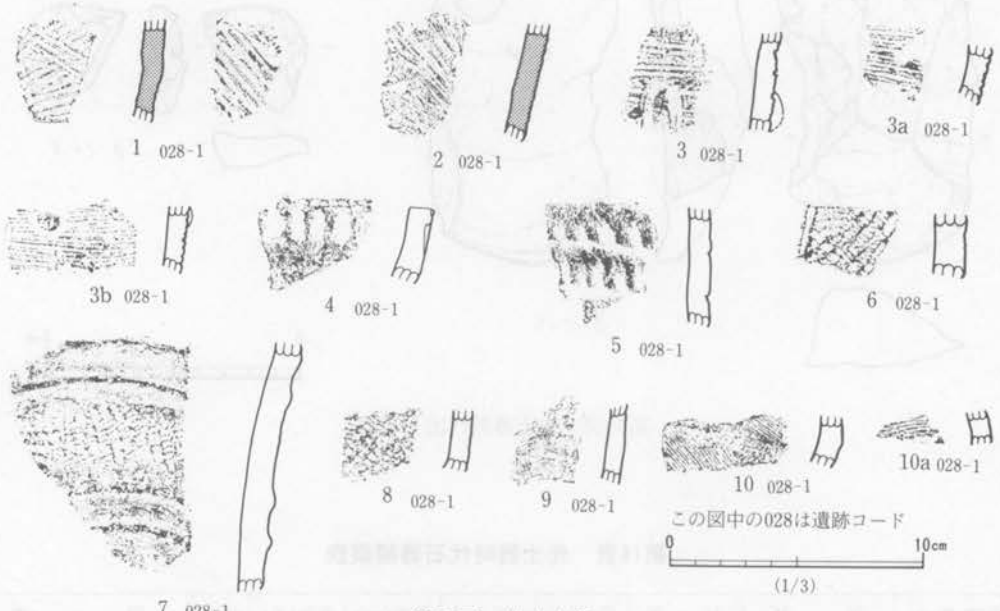
撚糸文粗製土器… 1個体2点（10、10a）

型式不詳……18点（無文16点、縄文1点、沈線文1点）

早期の土器については、正確な型式同定は不可能であるが、繊維混入量が少なく、堅緻な焼成であることから、条痕文を有する土器群の中でも比較的早い時期のものと思われる。

諸磯C式は、胎土、焼成ともに浮島系の土器とは全く異質であり、搬入されたものであろう。

撚糸文粗製土器は千網式の前後に位置づけて大過ないものであろう。



第71図　縄文土器

第17表　縄文土器観察表

胎土の0、+、−は普通、多、少を焼成の0、+、−は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
1	細砂粒0繊維−	+	明茶褐色	表・裏貝殻条痕	なし	
2	細砂粒0繊維−	+	赤褐色	表面・裏面下部貝殻条痕	なし	
3	細砂礫+	+	暗褐色	内面入念なヨコナデ	細沈線、貼付文	
4	細砂粒+	+	明茶褐色	内面ナデ	結節沈線、接合部刻目	
5	細砂粒+	+	明茶褐色	輪積痕	輪積部に刻目	

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
6	細砂粒0	＋	明～暗褐色	内面ナデ	R{L{r r r r r r（磨消）}, L{r r r r r}}	
7	細砂粒0	0	茶褐色	内面ヨコナデ	微隆帯、RL	
8	細砂粒0	0	黒褐色	内面ナデ	LR	
9	細砂粒0	＋	赤褐色	内・外面入念なナデ	なし	
10	細砂粒＋（スコリア）	＋	黒色	内面ナデ、外面スス付着	YR	

第72図　縄文時代出土石器

石器は、黒曜石製の縁辺に細かい剝離痕の認められる貝殻状剝片が1点、みつかった（第72図、図版34）。長さ7.7㎜、幅7.6㎜、厚さ4.5㎜、重量1.3ｇである。

第4節　ま　と　め

第2節と第3節で述べたところをまとめると、明代台遺跡C地点の概要はつぎの通りである。

先土器時代

関東ロームのⅧ層の下部中から、両面加工石器、鋸歯縁削器、剝片が集中した状態で出土した。一定の規模の石器集中の一部と思われる。第2章の向山谷津遺跡の石器集中と同時期の石器集中であることが注目される。

縄文時代

早期から後期までの各時期の土器片が出土した。遺構はみつからなかった。

なお、2年度の本調査、確認調査でみつかった溝は、全て新しい時期のもので、地境に掘られたものと思われる。こうした点から、歴史時代の1節を立てて溝について述べることはしなかった。

第6章　木戸場遺跡

第1節　立地と環境

木戸場遺跡の所在した台地は、北側を高崎川水系の支流によって、南側は鹿島川水系の支流により画されるが(第1図)、台地東側及び西側には、高崎川支流から派生する小支谷が入り込んでおり、北東へのびる地形を形成する。この付近は、高崎川支流の最奥部にあたる。台地は広い平坦面を有するが、北側から南側へ向って緩やかに高くなっており、その比高差は、0.4～0.9mを測る。台地平坦部は、北側で標高34.7～35.2m前後、南側で35.3～35.6m前後を測り、北側水田面との比高差は約14mを測る。谷へ落込む傾斜は、北側が急傾斜であり、南側は北側よりやや緩やかになっている（第2図、別図1・2)。

木戸場遺跡A地点は、このような台地の中央部より北側を指し(別図1、図版35)、B地点はこれより南側を指す(別図2)。本来は同一遺跡とすべきであったが、調査の着手年度が異なり、また小字名が違うなど（A地点は木戸場・B地点は古内）諸般の事情により異なる遺跡名称を旧称したことによって便宜上区別する。

A地点の北側対岸から東側対岸にかけては池向遺跡が所在し、北東側対岸には古内遺跡が所在する。また、西側対岸には明代台遺跡が所在し、明代台遺跡とは支谷によって切離されている。

B地点は、先述の通りA地点の南に位置し、南側は、県道に沿った佐倉第三工業団地の外周をめぐる緑地帯によって画されている。緑地帯には及んでいない。

なお、B地点は次章の古内遺跡と同じ小字「古内」に所在したが、第2図に明らかなように、B地点と古内遺跡とは、微視的にみると、間に小さな谷があって、台地を異にしている。本報告書では、明代台遺跡A地点についてもそうであったが、字区分よりも台地による区分を採って遺跡名をつける方針で編集しているので、B地点はA地点と一括し、古内遺跡とは別にして扱うこのような形になった。

木戸場遺跡は、再三述べてきたように、A地点（212－011）とB地点（212－012）の2個所に分けて調査を行った。しかし、第2図に明らかなように、明代台遺跡と異なり、A地点とB地点は、同じ地上にあって、隣り合っている。そこで、この報告書では、A地点とB地点をひとまとめにして、時代順に報告していく。ただし、A地点の遺構・遺物とB地点の遺構・遺物の区別は明示する。

第2節　先土器時代

A地点ではNo.1～No.7のユニット、B地点では第1・第2のユニットがみつかった。A地点、

B地点の順で述べる。

なお、A地点の先土器時代の調査では、試掘調査は、A地点の先土器時代の調査では、試掘調査は、A地点の全域にはおこなっておらず、指示により1,050m²の本調査範囲についておこなったにとどまる。留意されたい。

1．A地点

A地点ではIII層～IV層にかけて7ユニット（石器集中地点）が検出された。なお本稿では「ユニット」と言う名称は、単に石器集中地点の最小単位として捉えるために使用した。

各ユニットの分布状況をみると大きく3地点に分かれる。No.1・2ユニットは台地西端に位置し、No.3～5ユニットはNo.1・2ユニットから南東約50mの地点に位置している。No.6・7ユニットはNo.3～5ユニットから南東へ約130mの地点に位置している。

III層を主体とするユニットはNo.1～5ユニットで、IV層を主体とするユニットはNo.6・7ユニットである。No.1・2ユニットは舟底形細石刃核、荒屋型彫器など東北地方の細石器文化の様相を内包するユニット群である。No.3～5ユニットは明確な石器組成が認められないユニット群である。No.3ユニットは典型的な石器を持たない安山岩を主体としたユニットで、No.4ユニットはナイフ形石器2点を含む黒曜石製の極小剥片を主体としたユニットである。No.5ユニットは、No.3ユニットと同様に典型的な石器がみられず、石核3点を含む安山岩、頁岩を主体としたユニットである。No.6・7ユニットも明確は石器組成の認められないユニット群で、No.7ユニットでナイフ形石器1点が検出されたのみで、典型的な石器がみられず、黒曜石製の極小剥片を主体としたユニット群である。以上がA地点の先土器時代ユニットの概要である。

最後に本稿を進めるに当って、剥片類に関して若干の分類基準を述べておきたい。なお分類に際して、加藤晋平・鶴丸俊明共著『図録・石器の基礎知識Ⅰ－先土器（上）』（柏書房刊、1980年）の「IV、石器の種類」を一部参考にした。

○縦長剥片 ── 剥離方向（縦方向）に長い剥片を総称する。

石刃 ── 側縁がほぼ平行し、それに平行する稜をもち、長さが幅の2倍以上のもの。

石刃状剥片 ── 側縁や稜が平行してなくて、石刃に似るもの。

縦長整形剥片 ── 長さが幅の2倍以上なく、形状が整形な縦長剥片。

縦長不整形剥片 ── 縦長で不定形なもの。

なお、細石刃、剥片等明らかにそれと分かるものは各々の名称を用いる。

○横長剥片 ── 剥離方向（縦方向）に短い剥片を総称する。

横長不整形剥片 ── 本遺跡では典型的な素材剥片である翼状剥片はみられないので、すべて横長不整形剥片と総称する。

○極小剥片 ── 1cm以下の剥片類を総称する。但し、細石刃等明らかにそれと分かるものは除外する。

No.1ユニット（第73～78図、第18表、図版36・47）

遺物の出土層位・分布状況

III層を主体としているが、垂直分布は60cmの幅があり、一部II層とIV層にも及んでいる。またIII層自体の層厚が薄いこともあって本ユニットの主体がIII層中の上・下どの位置にあたるか明確な把握ができない。

平面分布はE－W9.5m、N－S 7mの範囲に分布し、とくにユニット内東寄りのE－W 4m、N－S 2mの範囲により多くの集中がみられる。

なお、石器組成上同様の内容をもつNo.2ユニットは、本ユニットの東側2mの地点に隣接して検出されている。

石器組成・石質

細石刃石核1点、細石刃2点、彫器6点、掻器5点、削器4点、敲石1点、台石1点、削片4点、剥片類27点、礫片2点、合計53点である。

石質別にみると、頁岩39点（細石刃石核1点、細石刃2点、彫器6点、掻器5点、削器4点、削片4点、剥片類16点）、安山岩12点(剥片類)、砂岩3点(敲石1点、礫片2点)、花崗岩1点(台石）である。

遺　物

1．細石刃石核（1）

頁岩製。石核の形状と素材の打面方向が一定しないことからみて、円盤状の両面加工石器を素材として、たち割って打面を作出し、細石刃剥離をおこなったものと考えられる。細石刃剥離面の残核高は約20mmで、剥離面は5面残されている。打面と細石刃剥離面とのなす角度は約60度を測る。打面からの側面調整はみられない。舟底形細石刃石核の範疇に入る残核と考えられる。なお細石刃石核作製時に剥離されるファースト・スポール、スキー状スポールあるいはそれに類する削片等は、本ユニットからは検出されていない。

2．細石刃（2・3）

2・3とも頁岩製。2は、器長13.6mmを測り、頭部に打面を残すが、先端部は欠損している。

3は、頭部・先端部とも残り、器長15.0mmを測る。本ユニットでは細石刃はこの2点以外には検出されていない。細石刃石核との直接の接合関係はみられない。

3．彫　器（4～9）

すべて頁岩製。縦長剥片を素材とし、腹面の調整加工はみられず、背面のほぼ全側面に調整加工を施している。4は、素材剥片の打面部側左肩に、2回の樋状剥離によって彫刻刀面を作出している。器長は45.9mmを測る。5～8は素材剥片の先端部側左肩に彫刻刀面を作出している。5は2回、6は1回、7は2回、8は1回の樋状剥離がおこなわれている。5の器長は49.5mm、6は65.1mm、7は39.8mm、8は36.1mmを測る。9は、素材剥片の打面部側左肩と先端部右肩に、各々1回の樋状剥離により彫刻刀面を作出している。器長は27.7mmを測る。これらの彫器は「荒屋型

彫器」の範疇に入るものと考えられる。

4．掻　器（10～14）

すべて頁岩製で、幅広の縦長剥片を素材としている。素材剥片の打面部側を基部とし、背面のほぼ全側縁に調整加工を施し、先端部側を刃部として作出している。10～12は、刃部が広がり、半月形状に張り出し、基部を細身に仕上げており、いわゆる「角二山型掻器」と呼ばれている掻器の範疇に入るものと考えられる。器長は10が31.0㎜、11は50.8㎜、12は48.7㎜、13は71.2㎜、14は66.9㎜を測る。

5．削　器（15～18）

すべて頁岩製。15・16は、尖頭状削器で、縦長剥片を素材としている。15は、下半部が欠損しているが、背面両側縁に入念な調整加工を施し、刃部を作出している。器長は、49.5㎜を測る。16も、下半部が欠損しており、背面右側縁に比べて左側縁に入念な調整加工を施し、刃部を作出している。器長は63.1㎜を測る。この2例については角二山遺跡で類例がみられる（宇野修平・上野秀一「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』雄山閣1975年）。17は、石刃状剥片を素材とし、両側縁に粗い調整加工を施し、両刃の削器としている。器長は90.3㎜を測る。18は、幅広の縦長剥片を素材として、背面右側縁に粗い調整加工を施した片刃の削器である。器長は52.7㎜を測る。

6．敲　石（20）

砂岩製。小形の楕円礫を利用したもので、両端から両側面にかけて敲打による磨滅痕がみられる。器長46.3㎜、器幅23.8㎜、器厚13.4㎜、重さ18.8ｇを測る。

7．台　石（21）

花崗岩製。断面が半月形様を呈する長楕円形の礫で、表裏全体に敲打痕・磨滅痕がみられる。石器製作時の台石と考えられる。長さ152.5㎜、幅67.0㎜、厚さ44.8㎜を測る。

8．削　片（22～25）

すべて頁岩製。彫器の彫刻刀面作出に際しての削片と考えられるが、本ユニット出土の彫器との直接の接合関係はみられなかった。また、後述するNo.2ユニット出土の彫器とも接合はしない。

9．剥片類（26）

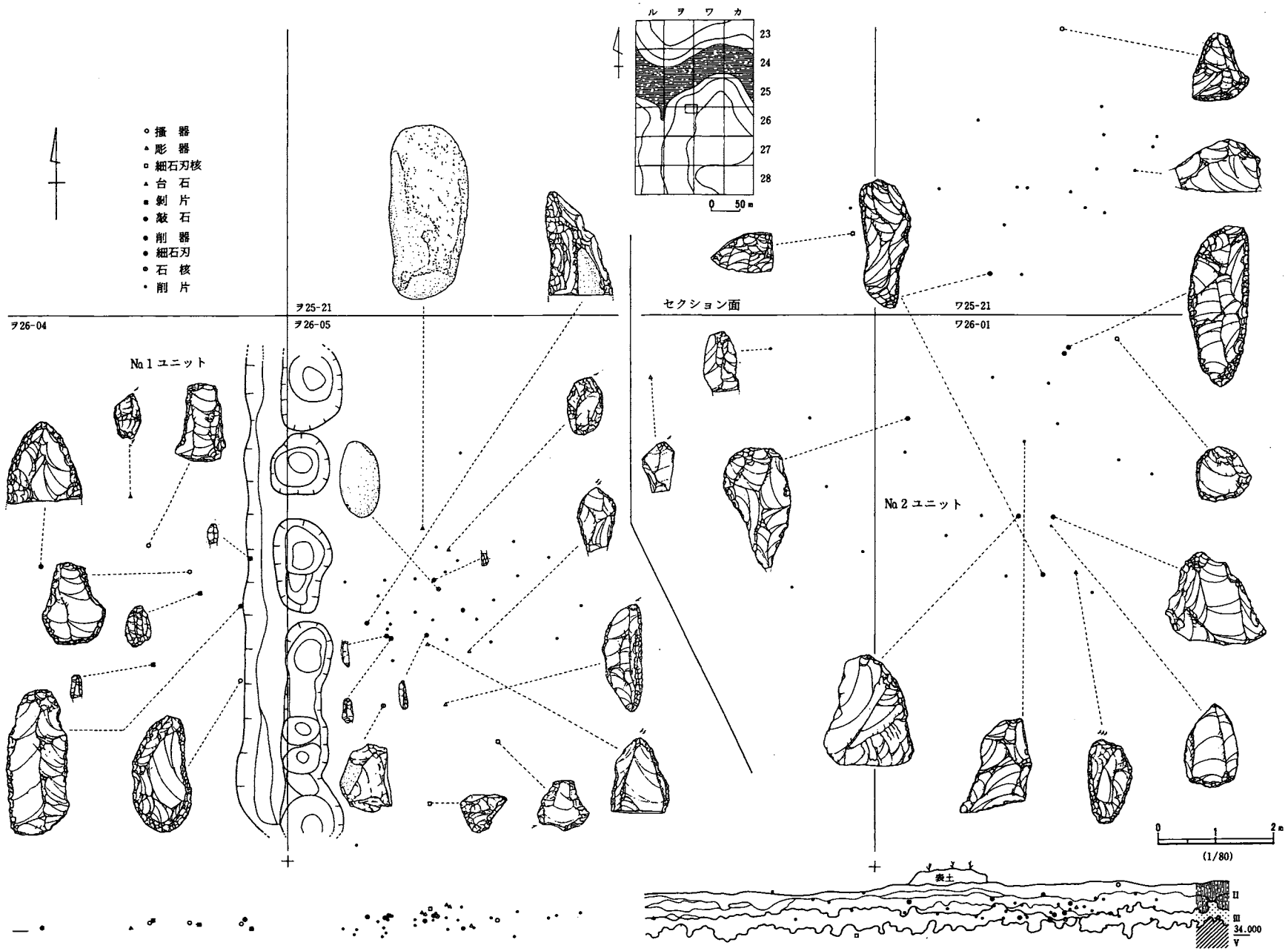
26は、頁岩製で、背面に細石刃剥離面を残す剥片である。細石刃石核の打面再生剥片か、あるいは細石刃剥離時に、加撃面のズレから誤って剥離された剥片のどちらかと考えられる。細石刃剥離面の残核高は26㎜を測り、剥離面も6面残されている。

この他に本ユニットから検出された剥片類は27点で、大形不整形剥片2点(接合)、不整形剥片2点、極小剥片23点である。極小剥片の中には、細石刃の可能性のあるもの1点、剥片の可能性のあるもの2点が含まれている。

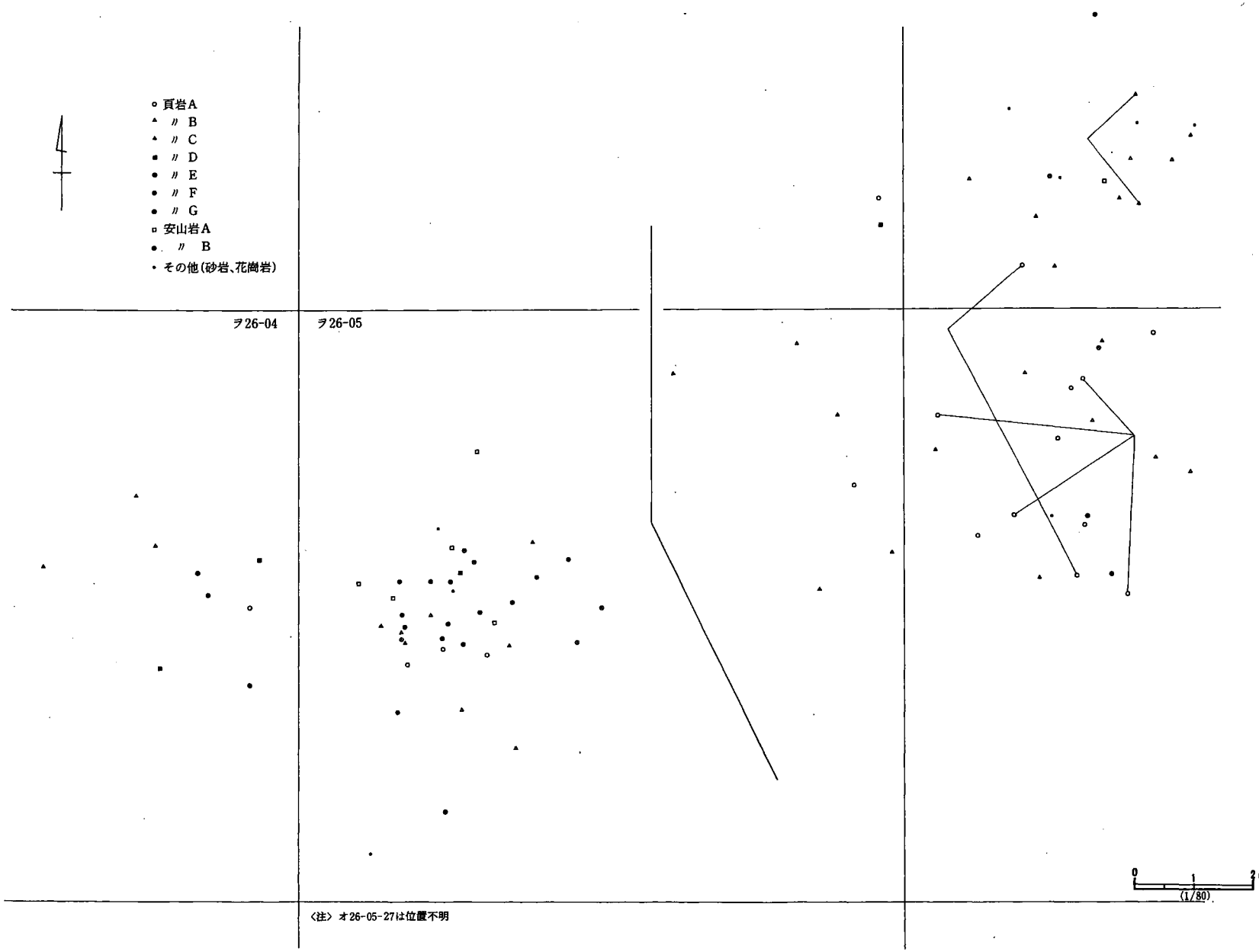
10．礫　片

2点出土。砂岩製で熱をうけている小礫片である。

11．その他（19）



第73図　A地点No.1・2ユニット石器出土状況



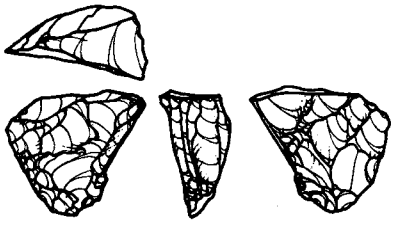
第74図　A地点№1・2ユニット石器石質別出土状況、接合状況

安山岩製。角礫状を呈し、１面に礫面を残し、横位、縦位の剝離面を残す。小形の石核様のものか。本ユニットは頁岩を主体とするもので、その中にあって当該遺物は異質である。同種の安山岩は、後述するNo.３・５ユニットに多量にみられる。

第18表　A地点No.１ユニット石器観察表

遺物への注記は表の通り「オ」であるが、正しくは「ヲ」である。

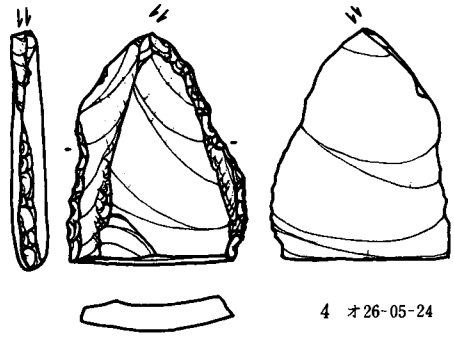
遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
オ26－04－３	掻器	頁岩	66.9	35.1	10.3	25.7	14	
4	削器	頁岩	52.7	43.3	9.4	21.8	18	
5	削片	頁岩	11.8	6.1	1.4	0.2	25	
6	削器	頁岩	90.3	36.4	12.7	44.6	17	
7	掻器	頁岩	71.2	36.1	11.2	27.9	13	
8	細石刃	頁岩	13.6	6.8	1.2	0.2	2	
9	剝片	頁岩	26.0	15.1	6.5	2.1	26	
10	掻器	頁岩	50.8	37.8	10.2	17.1	11	
11	掻器	頁岩	48.7	30.4	10.2	11.8	12	
12	彫器	頁岩	27.7	15.8	3.8	1.7	9	
13	削器	頁岩	49.5	45.1	10.3	26.5	15	
14	礫片	砂岩	36.9	42.2	13.4	21.0		
オ26－05－４	削片	頁岩	8.5	4.1	1.0	0.1未満		
5	削片	頁岩	5.9	4.2	0.9	0.1未満		
7	削片	頁岩	7.8	5.8	0.8	0.1未満		
8	削片	安山岩	12.9	7.6	2.4	0.2		
9	削片	安山岩	11.0	9.3	1.1	0.2		
10	削片	頁岩	5.1	3.7	0.9	0.1未満		
11	削片	安山岩	15.7	8.6	3.4	0.5		
12	剝片	安山岩	22.0	21.5	5.0	1.7		
15	削片	頁岩	6.0	5.1	0.8	0.1未満		
16	彫器	頁岩	36.1	22.0	7.1	6.6	8	
17	剝片	安山岩	62.8	43.5	13.1	45.8		オ26－05－27と接合
18	削片	頁岩	11.9	8.2	1.5	0.2		
19	削片	頁岩	8.0	3.9	1.3	0.1未満	24	
20	敲石	砂岩	46.3	23.8	13.4	18.8	20	
22	削片	頁岩	5.0	4.7	0.7	0.1未満		
23	削片	頁岩	17.1	4.9	1.9	0.2	22	
24	彫器	頁岩	45.9	35.2	6.0	12.8	4	
26	削片	頁岩	6.2	5.1	1.1	0.1未満		
27	剝片	安山岩	53.3	63.5	16.4	54.3		オ26－05－17と接合
28	削片	頁岩	5.5	5.5	0.9	0.1未満		



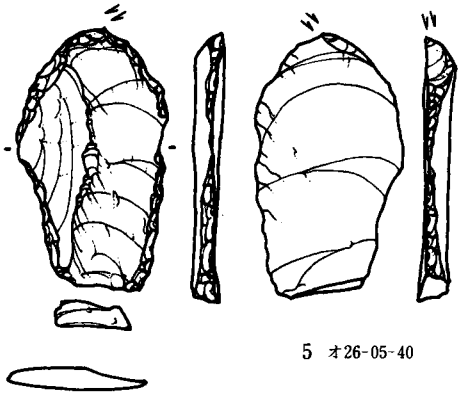
1 オ26-05-52

2 オ26-04-8

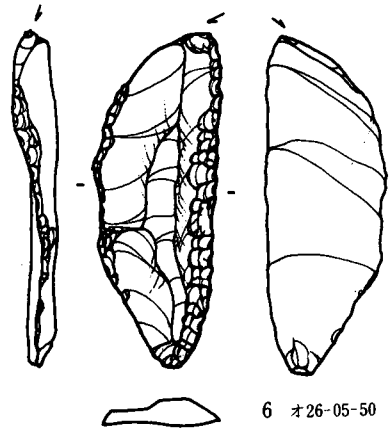
3 オ26-05-35



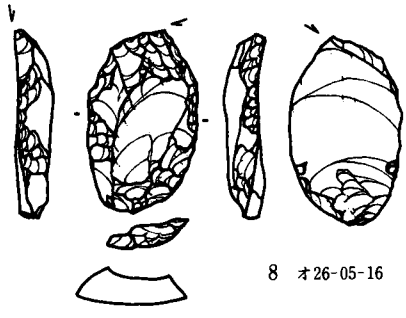
4 オ26-05-24



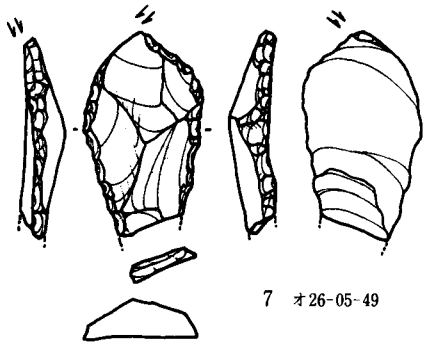
5 オ26-05-40



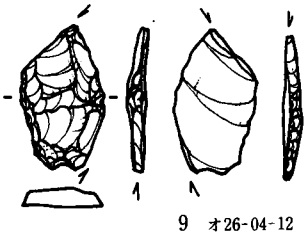
6 オ26-05-50



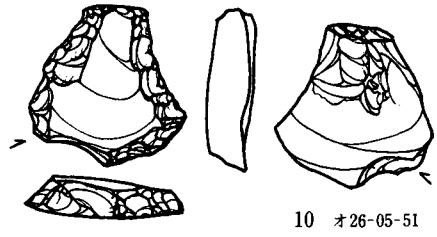
8 オ26-05-16



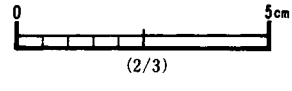
7 オ26-05-49



9 オ26-04-12

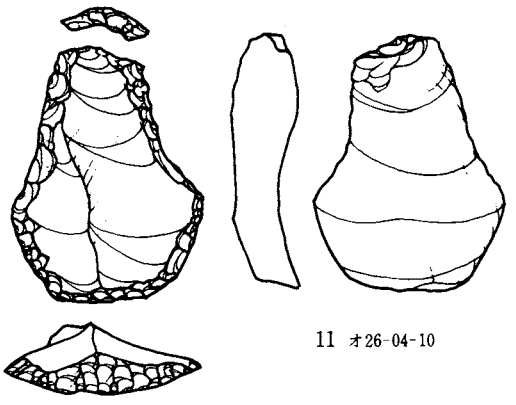


10 オ26-05-51

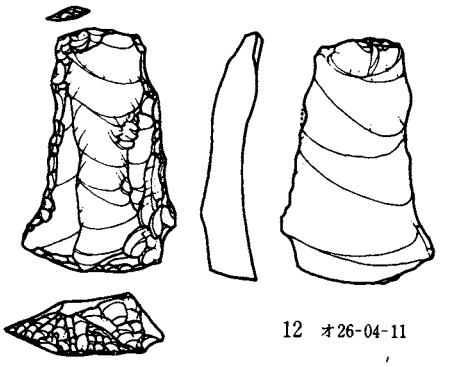


(2/3)

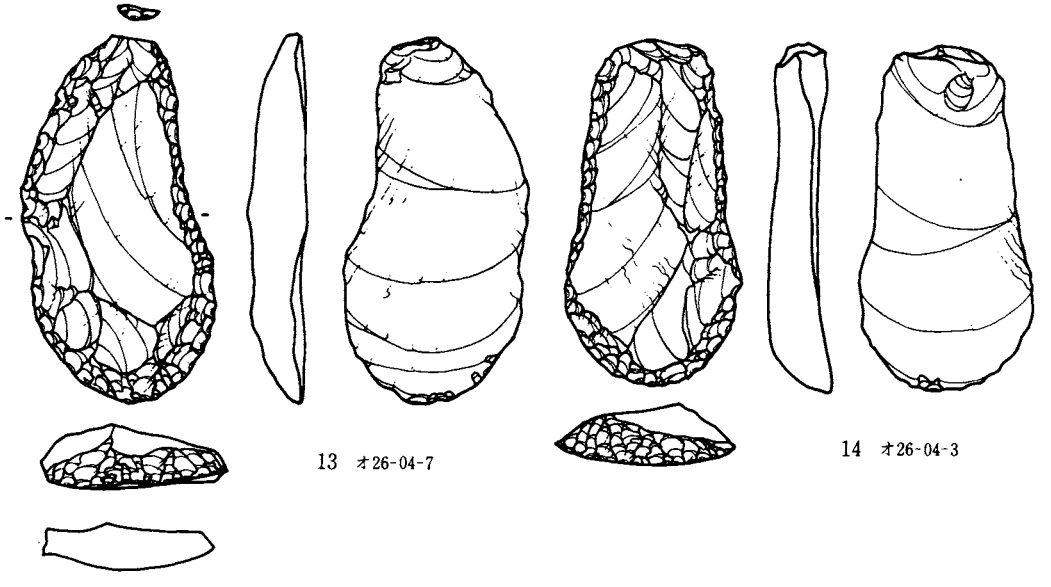
第75図　A地点№1ユニット出土石器 (1)



11 オ26-04-10

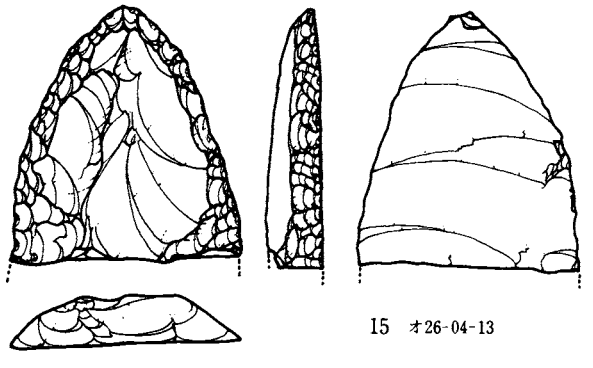


12 オ26-04-11

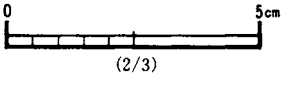


13 オ26-04-7

14 オ26-04-3

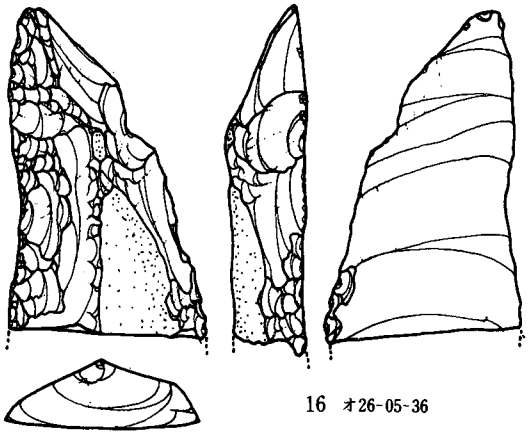


15 オ26-04-13

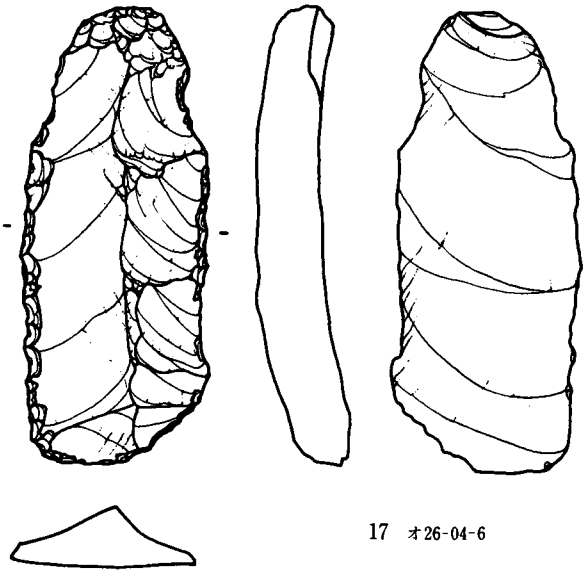


(2/3)

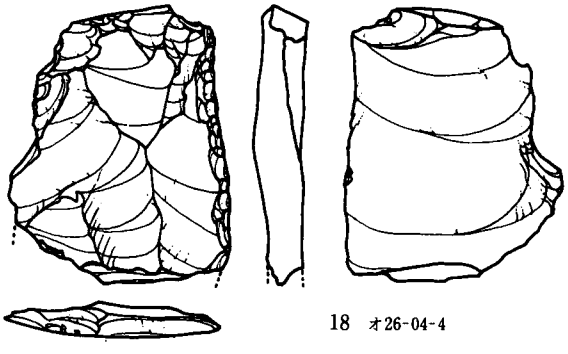
第76図　A地点No.1ユニット出土石器 (2)



16 オ26-05-36



17 オ26-04-6

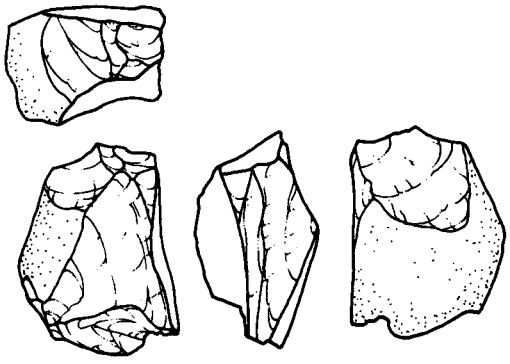


18 オ26-04-4

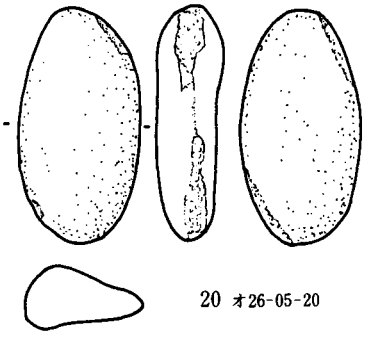
0 5cm

(2/3)

第77図　A地点№1ユニット出土石器 (3)



19 オ26-05-56



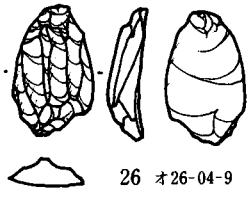
20 オ26-05-20

22 オ26-05-23

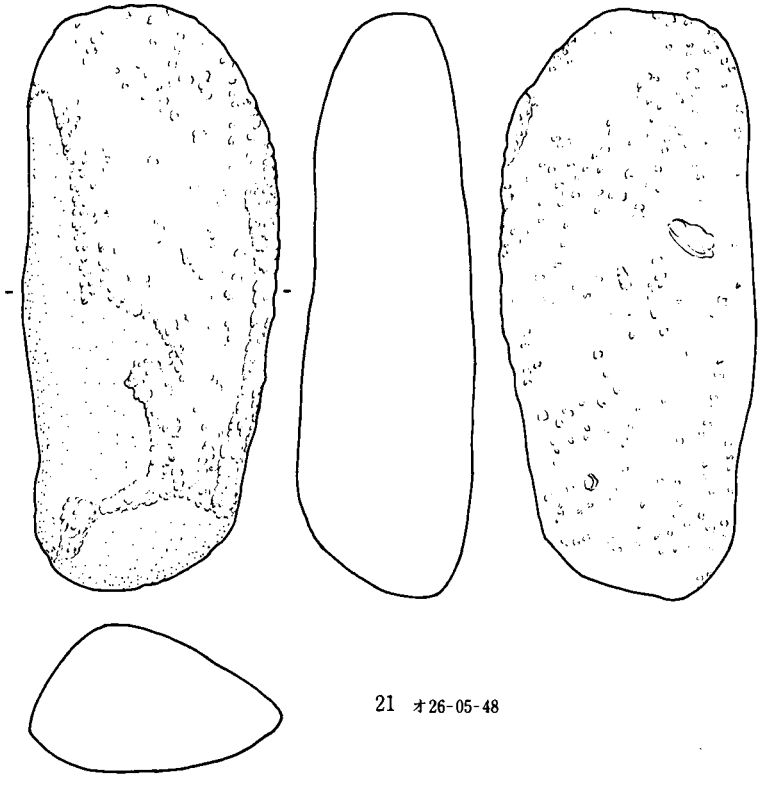
23 オ26-05-34

24 オ26-05-19

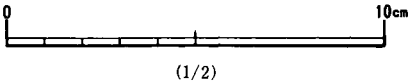
25 オ26-04-5



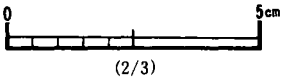
26 オ26-04-9



21 オ26-05-48



(1/2)



(2/3)

第78図　A地点№1ユニット出土石器 (4)

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
29	削片	安山岩	21.3	5.8	3.8	0.5		
30	削片	頁岩	6.3	12.1	4.4	0.3		
31	削片	安山岩	11.3	9.5	3.3	0.4		
33	削片	頁岩	9.3	6.8	1.1	0.1未満		
34	削片	頁岩	15.8	4.7	1.1	0,2	23	
35	細石刃	頁岩	15.0	5.7	1.7	0.3	3	
36	削器	頁岩	63.1	39.1	15.8	36.4	16	
37	剝片	安山岩	16.4	11.8	3.5	0.8		
38	削片	頁岩	7.7	9.5	2.2	0.1未満		
39	削片	頁岩	18.9	2.0	1.7	0.1未満		
40	彫器	頁岩	49.5	29.5	5.3	9.5	5	
47	剝片	安山岩	13.9	32.3	8.1	3.8		
48	台石	花コウ岩	152.5	67.0	44.8	640.0	21	
49	彫器	頁岩	39.8	22.8	7.5	6.9	7	
50	彫器	頁岩	65.1	24.0	6.2	15.4	6	
51	掻器	頁岩	31.0	31.5	7.0	8.1	10	
52	細石刃石核	頁岩	27.9	23.0	11.9	6.7	1	
53	削片	頁岩	6.5	3.1	0.5	0.1未満		
54	削片	安山岩	13.2	8.3	4.2	0.5		
56	剝片	安山岩	41.1	28.8	22.6	31.3	19	
57	礫片	砂岩	34.9	31.3	19.4	35.0		

No.2 ユニット（第73・74・79～83図、第19表、図版37・48）

遺物の出土層位・分布状況

No.1ユニットと同様にIII層を主体としており、垂直分布は70cmの幅があり、II層～IV層に及んでいる。III層の層厚が薄いことと遺物の集中に幅があることから、本ユニットの主体がIII層のどこに位置するのかは明確ではない。

平面分布はE－W9m、N－S10mの範囲に分布し、とくにユニット内東側半分により多くの集中がみられる。本ユニットの西側2mの地点には前述のNo.1ユニットが検出されている。

石器組成・石質

細石刃石核1点、彫器3点、掻器2点、削器6点、剝片類31点、礫片2点、合計45点である。

石質別にみると、頁岩40点（細石刃石核1点、彫器3点、掻器2点、削器6点、剝片類27点）、安山岩3点（剝片類）、黒曜石1点（剝片類）、砂岩1点（礫片）

遺　物

1．細石刃石核（1）

頁岩製。両面加工の石器を素材とし、素材を縦割りにして打面を作出し、細石刃剝離をおこな

ったものと考えられる。打面からの側面調整は1面にみられる。細石刃剝離面の残核高は20㎜を測り、剝離面は4面残されている。打面と細石刃剝離面とのなす角度は、ほぼ90度である。舟底形細石刃石核の範疇に入るものと考えられる。前述のNo.1ユニットと同様に、スポール等は検出されていない。また細石刃そのものも、本ユニットからは検出されていない。

2．彫　器（2・18A・18B）

すべて頁岩製である。3点出土しているが、ここでは2についてのみ述べ、18Aと18Bについては接合資料の項で後述する。2は、縦長剝片を素材とし、腹面に調整加工はみられず、背面の全側縁に調整加工を施している。素材剝片の先端部左肩に3回の樋状剝離をおこない、彫刻刀面を作出している。器長は51.5㎜を測る。「荒屋型彫器」の範疇に入ると考えられる。

3．掻　器（3・4）

ともに頁岩製である。3は、幅広の縦長剝片を素材とし、打面部側を基部として背面のほぼ全側縁に調整加工を施し、先端部を刃部として作出している。刃部は半月形状に張り出し、基部を細身に仕上げている。「角二山型掻器」と考えられる。器長は42.1㎜を測る。4は、幅広の剝片を素材とし、基部付近を除いた背面の側縁全体に調整加工を施して刃部を作出している円盤形掻器である。器長は34.5㎜、器幅は34.4㎜を測る。

4．削　器（5～9・17C）

5～9は頁岩製である。17Cについては接合資料の項で後述する。5は、幅広縦長剝片を素材とし、基部に入念な調整加工を施し、両側縁には部分的に細かい調整を施している。尖頭状削器の一種と考えられる。器長は50.5㎜を測る。6・7は両刃の削器である。縦長剝片を素材として、両側縁に調整加工を施し、刃部としている。なお、6は器長の⅓のところで2片が接合している。器長は6は79.5㎜、7は97.7㎜を測る。8・9は片刃の削器と考えられ、幅広の縦長剝片を素材としている。8は、背面右側縁と剝片打面部側を中心として、ほぼ全体に表裏からの剝離と調整加工がみられる。さらに言及すれば、舟底形細石核の母型の可能性も考えられるのではないか。9は背面右側縁に調整加工がみられる。8は器長は55.7㎜、9は69.1㎜を測る。

5．剝片類（10～16）

すべて頁岩製である。10・11・13は二次加工が認められる剝片である。10は縦長剝片背面の打面部左側縁と先端部右側縁に二次加工がみられる。11は、不整形剝片で、背面右側縁の一部に二次加工がみられる。13は、縦長剝片で、背面右側縁に二次加工がみられる。14は、縦長剝片で、背面先端部の左側縁から下端部にかけて二次加工がみられ、削器の可能性も考えられる。12・15・16は、刃こぼれの認められる剝片で、いずれも不整形剝片である。15は背面左側縁に刃こぼれがみられる。16は、剝片の½のところで2片が接合したもので、背面の左側縁と下端部にそれぞれ刃こぼれがみられる。

この他に本ユニットから検出されている剝片類は20点で、不整形剝片13点、極小剝片7点である。

6．礫　片

小形の礫片が2点出土。

7．接合資料（17・18）

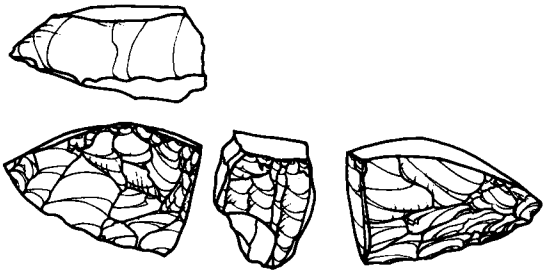
17は頁岩製。3点の資料が接合する(17A＋17B＋17C)。17Cは縦長剝片を素材とした両刃の削器で、背面の両側縁に調整加工を施し、刃部としている。器長は74.3㎜を測る。17Bは縦長剝片で½のところで2片が接合したもの。17Aは幅広の不整形剝片である。3片とも剝離時の打面調整痕がみられる。剝離の順序は17A→17B→17Cとなり、17Aと17Bは上方向からの剝離で、17Cは打面を転位した下方向からの剝離となっている。

18は頁岩製。2点の資料が接合する(18A＋18B)。18Aと18Bはともに彫器で、18Aは、幅広の不整形剝片を素材とし、背面両側縁に調整加工を施し、下縁の左端に彫刻刀面を作出している。1回の樋状剝離をおこなっている。器長は39.6㎜、器幅は55.1㎜を測る。18Bは、縦長剝片を素材とし、背面左側縁上部に調整加工を施し、左肩に1回の樋状剝離をおこなうことで、彫刻刀面を作出している。器長は29.9㎜を測る。「荒屋型彫器」の範疇に入るものと考えられる。剝離の順序は18B→18Aである。

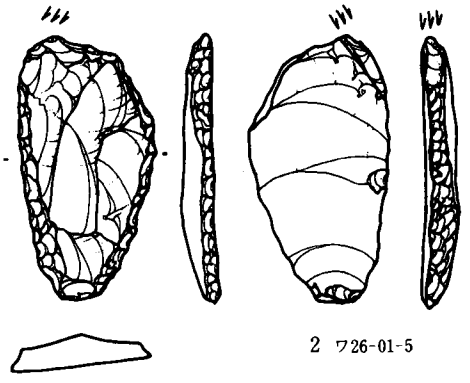
第19表　A地点No.2ユニット石器観察表

遺物への注記は表の通り「オ」であるが、正しくは「ヲ」である。

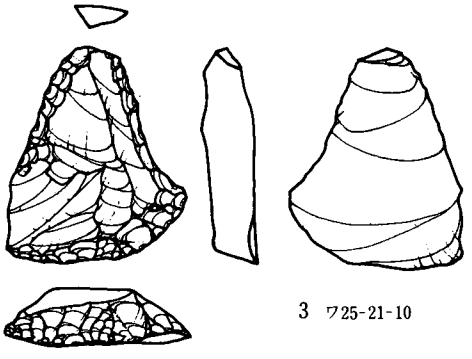
遺物番号	器種	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	挿図	備考
オ26－05－2	削片	頁岩	6.4	5.4	0.7	0.1未満		
42	剝片	頁岩	20.3	14.1	3.0	1.2		
43	剝片	頁岩	55.9	39.0	6.6	8.5	12	
44	剝片	頁岩	18.1	18.6	4.0	1.0		
45	剝片	頁岩	36.8	20.4	4.9	3.4	13	
46	彫器	頁岩	29.9	19.1	5.4	2.7	18B	ワ26－01－1と接合
ワ25－21－2	剝片	頁岩	34.0	31.5	4.1	4.5		
3	剝片	頁岩	32.2	52.4	8.3	9.9	15	
4	剝片	頁岩	40.5	61.9	9.2	12.6	16	ワ25－21－9と接合して計測
5	剝片	頁岩	33.9	20.8	4.1	2.7		
6	剝片	安山岩	35.5	21.8	8.2	5.9		
7	剝片	頁岩	30.1	30.8	5.4	5.2		
8	礫片	砂岩	54.7	26.8	20.5	48.5		
9	剝片	頁岩						ワ25－21－4と接合して計測
10	掻器	頁岩	42.1	36.8	8.4	12.8	3	
11	剝片	安山岩	30.0	19.8	3.7	2.0		
12	剝片	安山岩	27.4	21.8	10.7	6.0		
13	剝片	頁岩	16.9	14.2	4.8	1.1		
14	剝片	頁岩	57.8	43.5	5.8	13.7		



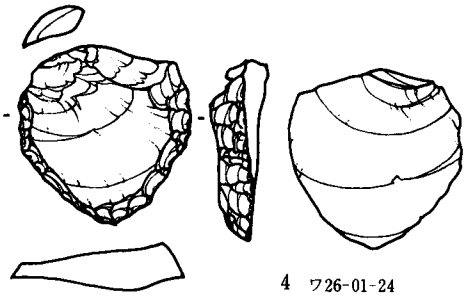
1 ワ25-21-19



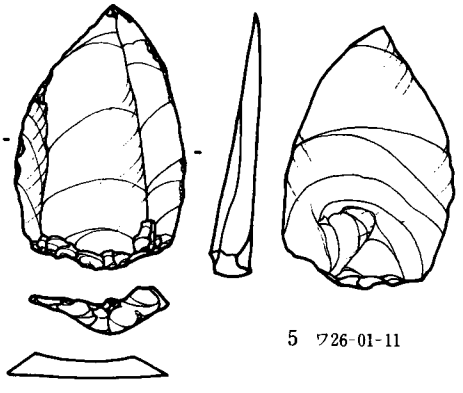
2 ワ26-01-5



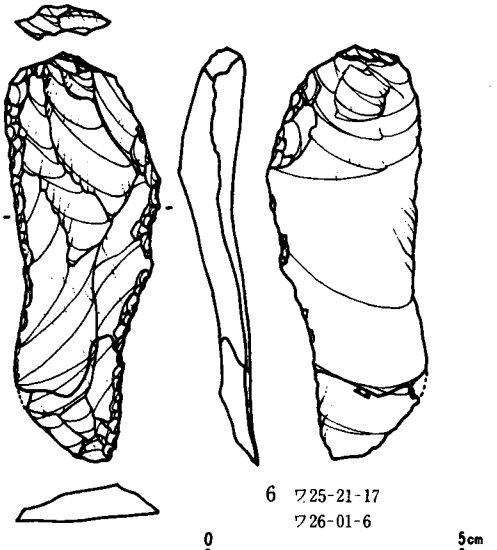
3 ワ25-21-10



4 ワ26-01-24



5 ワ26-01-11

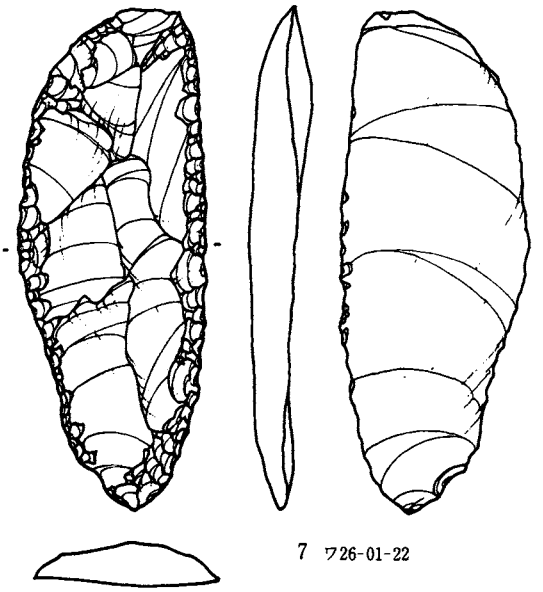


6 ワ25-21-17
ワ26-01-6

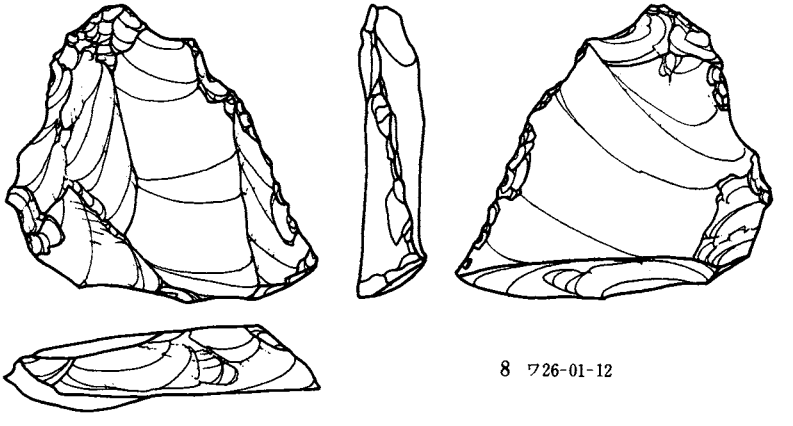
0 5cm

(2/3)

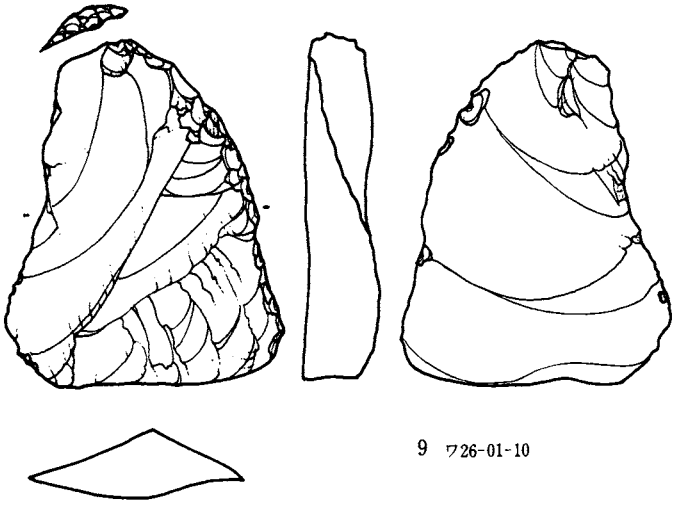
第79図　A地点No.2ユニット出土石器 (1)



7 ワ26-01-22



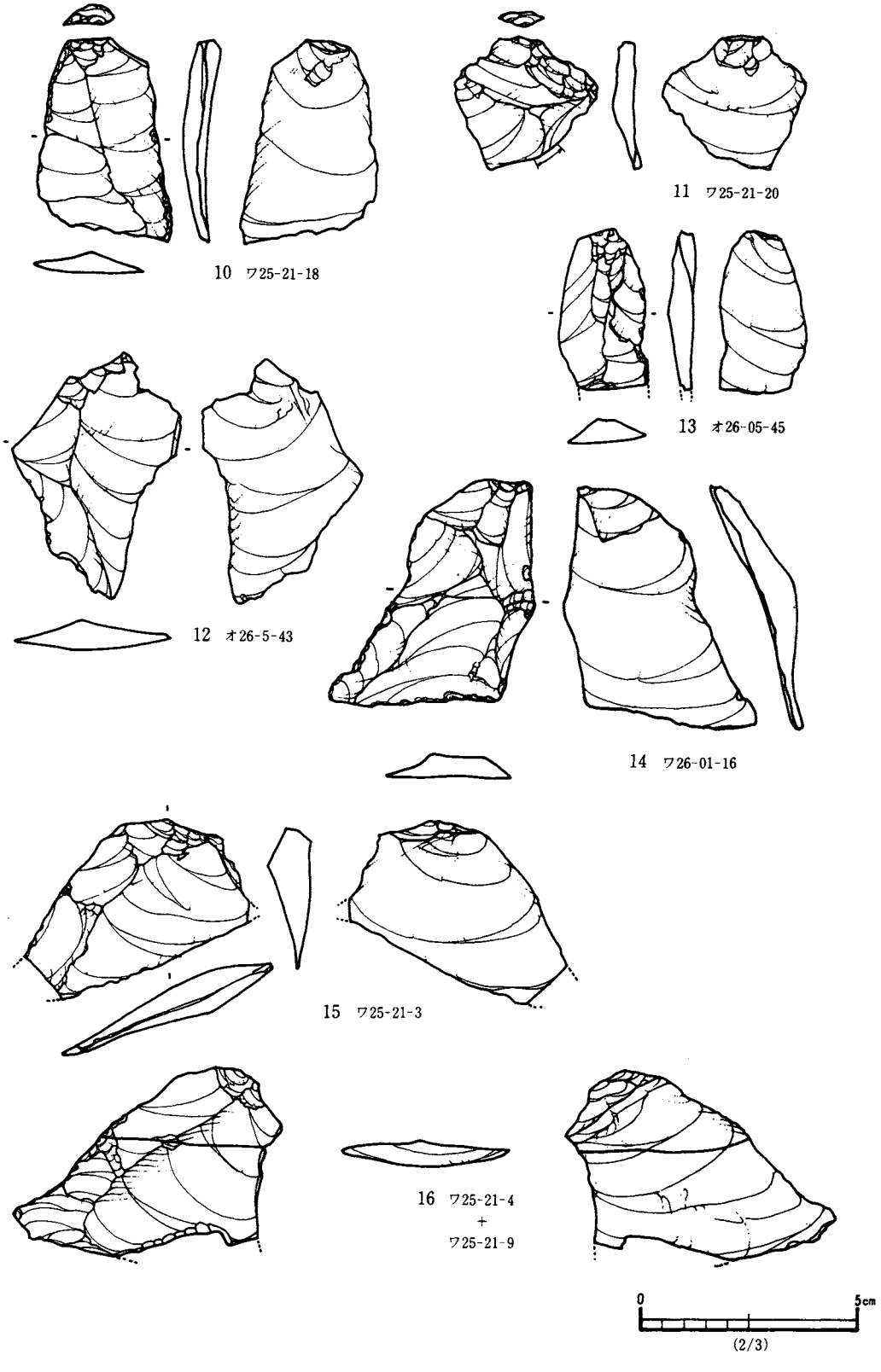
8 ワ26-01-12



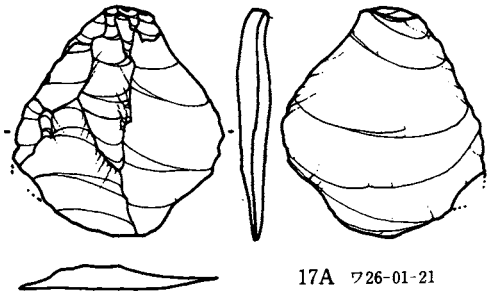
9 ワ26-01-10

0 5cm
(2/3)

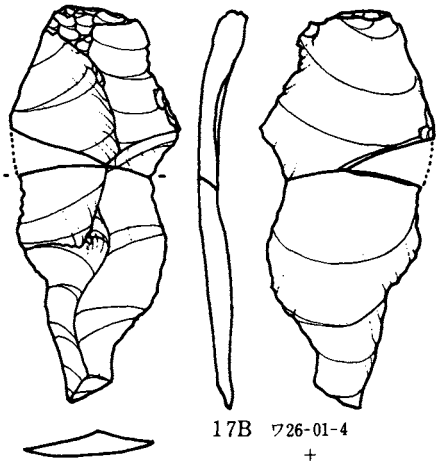
第80図　A地点No.2ユニット出土石器 (2)



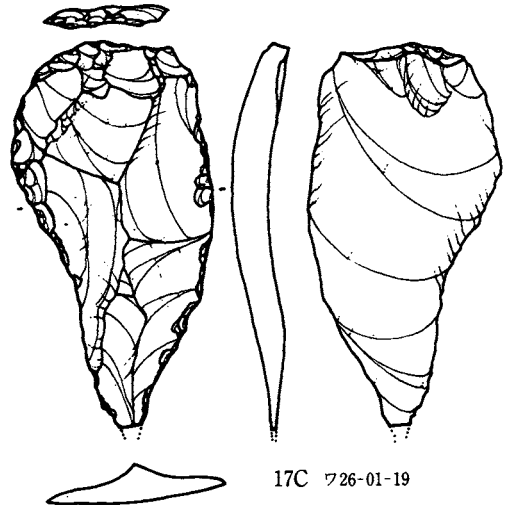
第81図　A地点No.2ユニット出土石器 (3)



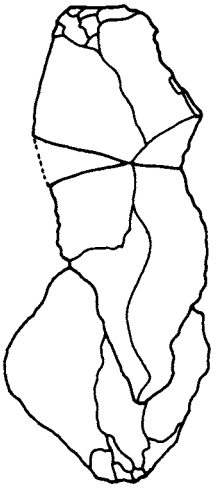
17A ワ26-01-21



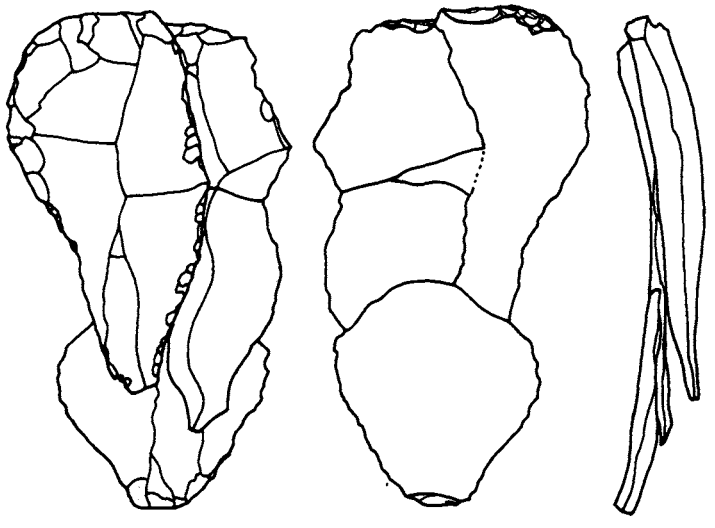
17B ワ26-01-4
+
ワ26-01-9



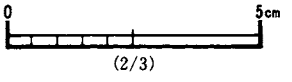
17C ワ26-01-19



17A+B

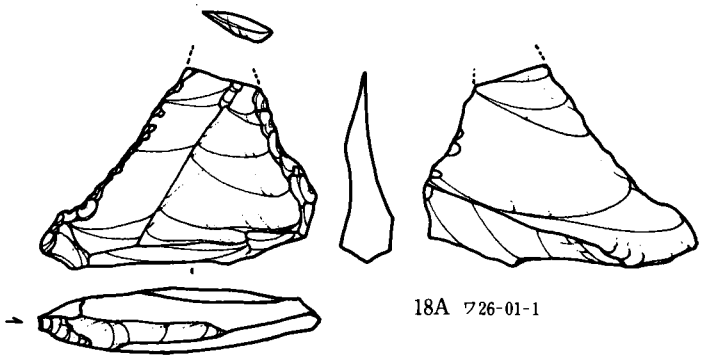


17(A+B+C)

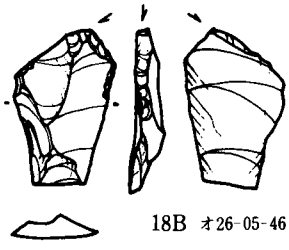


(2/3)

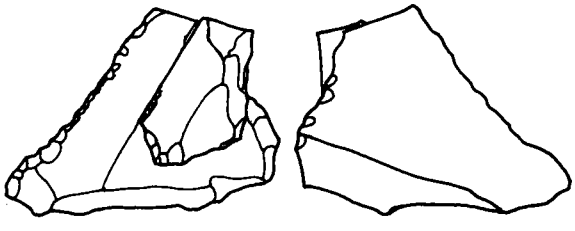
第82図　A地点No.2ユニット出土石器 (4)



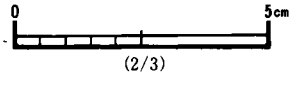
18A ワ26-01-1



18B オ26-05-46



18A＋B



(2/3)

第83図　A地点№2ユニット出土石器 (5)

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
15	剝片	頁岩	40.8	23.9	4.2	3.1		
16	剝片	頁岩	30.2	49.1	5.9	8.4	14	
17	削器	頁岩	79.5	28.9	8.5	19.5	6	ワ26－01－6と接合して計測
18	剝片	頁岩	51.0	29.4	4.5	6.8	10	
19	細石刃石核	頁岩	24.5	37.9	18.5	18.5	1	
20	剝片	頁岩	28.7	31.5	3.5	3.1	11	
ワ26－01－1	彫器	頁岩	39.6	55.1	10.8	15.1	18A	オ26－05－46と接合
4	剝片	頁岩	78.5	34.1	5.9	10.1	17B	ワ26－01－9と接合して計測
5	彫器	頁岩	51.5	27.1	5.7	10.4	2	
6	剝片	安山岩						ワ25－21－6と接合して計測
7	削片	頁岩	17.1	10.1	2.2	0.4		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
8	削片	頁岩	35.0	36.9	9.0	6.1		
9	剝片	頁岩						ワ26－01－4と接合して計測
10	削器	頁岩	69.1	54.4	13.2	40.4	9	
11	削器	頁岩	50.5	33.2	4.8	8.9	5	
12	削器	頁岩	55.7	62.7	11.5	42.8	8	
13	剝片	頁岩	16.3	33.1	5.0	2.9		
14	削片	頁岩	13.8	9.3	2.3	0.3		
15	削片	頁岩	15.2	10.9	2.6	0.4		
16	剝片	頁岩	53.2	38.9	6.8	11.7		
17	剝片	頁岩	17.9	18.5	3.6	0.9		
18	剝片	頁岩	26.6	23.1	3.4	1.7		
19	削器	頁岩	74.3	37.5	8.3	19.1	17C	ワ26－01－4、21と接合
20	剝片	頁岩	30.9	24.8	3.2	2.0		
21	剝片	頁岩	45.2	40.0	4.3	7.5	17A	ワ26－01－4、19と接合
22	削器	頁岩	97.7	37.0	10.1	37.3	7	
23	削器	頁岩	13.8	13.2	3.4	0.4		
24	掻器	頁岩	34.5	34.4	8.6	11.6	4	

No.3 ユニット（第84～86図、第20表、図版38・49）

遺物の出土層位・分布状況

III層を主体としているが、垂直分布は80cmの幅があり、一部II層とIV層にも及んでいる。

平面分布はE－W6.8m、N－S4.3mの範囲に分布し、ユニット内中央部にとくに集中がみられる。

石器組成・石質

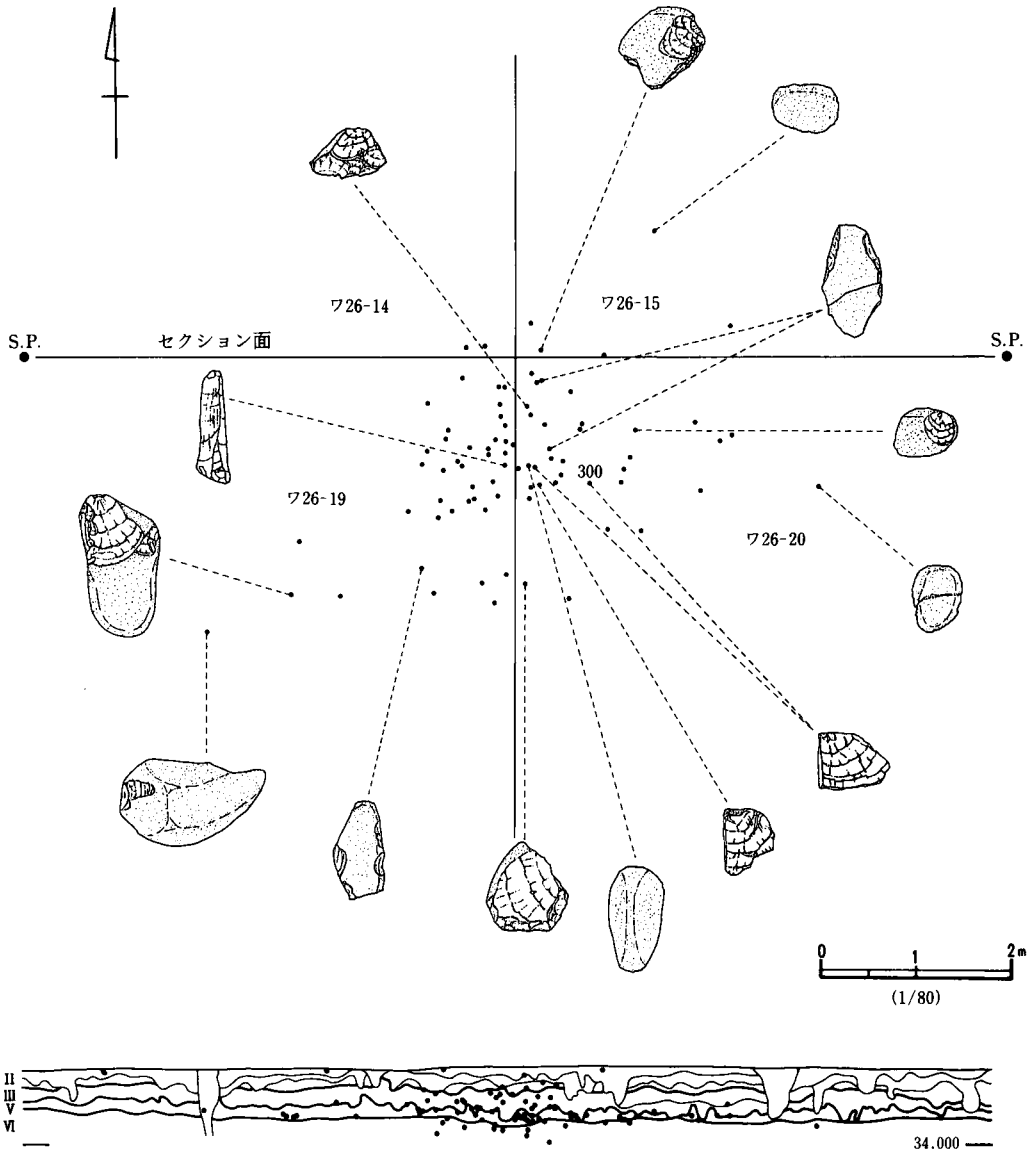
No.1・No.2ユニットのような明確な石器組成は認められず、剝片類79点が出土しているのみである。

石質別にみると安山岩78点、黒曜石1点で、圧倒的に安山岩が主体を占める。合計79点。

遺　物

剝片類（1～14）

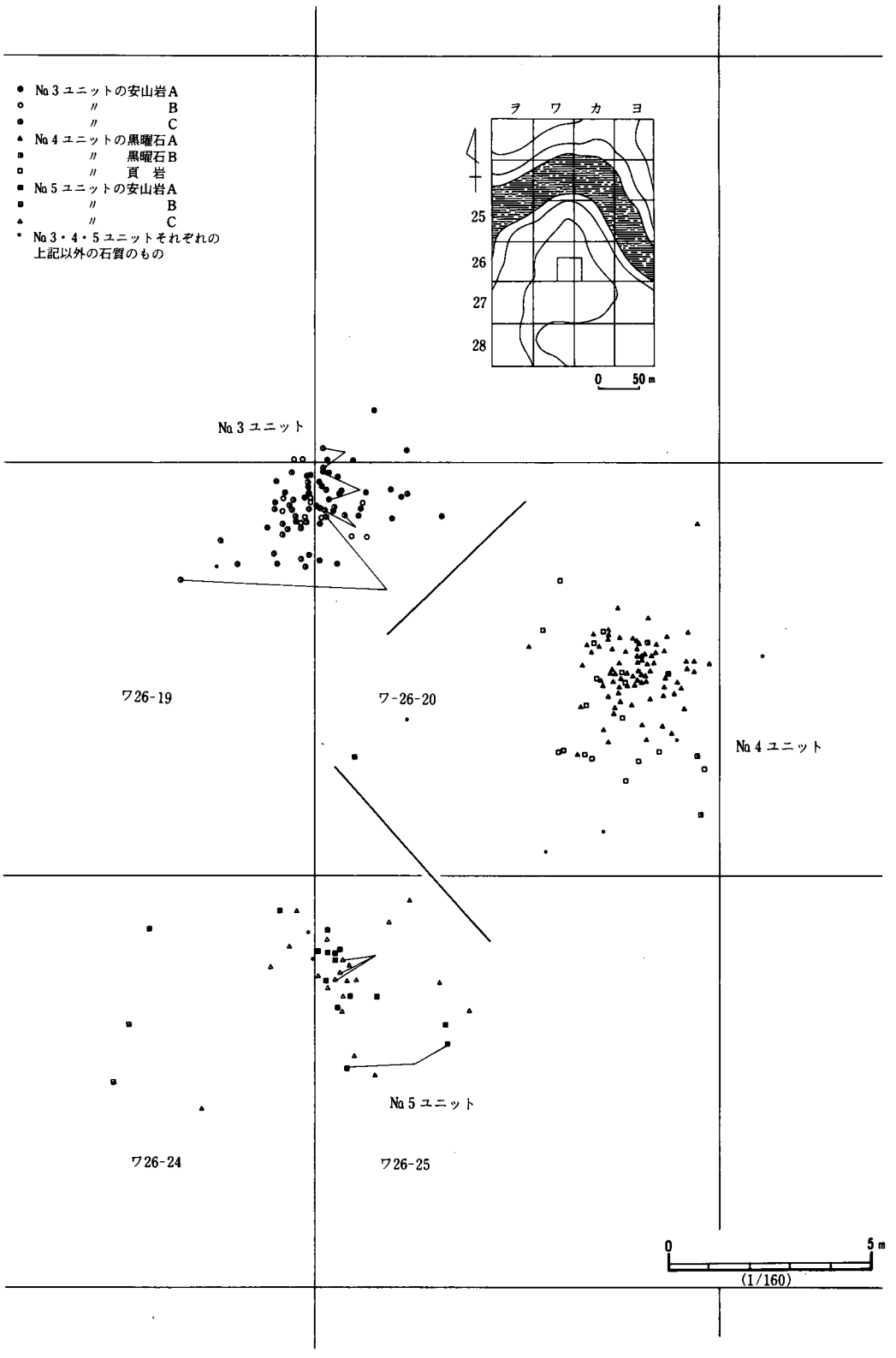
すべて安山岩製である。1は、縦長不整形剝片で、背面左側面に礫面を残し、下部から右側縁にかけてと腹面左側縁上部に二次加工がみられる。掻器様のものか。2は、縦長不整形剝片で、背面は礫面のままで、右側縁の一部に粗い二次加工がみられる。3は石刃状剝片で腹面の下端部に礫面を残す。二次加工はみられない。4・5・7・8・12・14は横長不整形剝片である。4は背面の左側の一部が欠損している。5は背面左側縁に礫面を残し、7・8は背面の大部分に礫面を残している。12は背面が礫面で、14は背面の大部分が礫面で、楕円形の礫を台石上で半割したものと思われ、その際の上端からの加撃による反撃痕が腹面の下端にみられる。6・9～11・13



第84図　A地点No.3ユニット石器出土状況

は縦長不整形剝片である。6は腹面左側縁に礫面を残し、剝片の右側の一部が欠損しており、元は横長不整形剝片であったと思われる。9・11は背面全体に礫面を残すもので、10は、背面の大部分が礫面で、両側縁の一部に剝離痕がみられるが、二次加工痕とは考えにくい。11は、楕円形礫に上端からの幅の広い剝離がみられる他は、礫面を残している。

以上述べてきたように、本ユニットを構成する遺物には定型的な石器はみられず、二次加工のある剝片2点、石刃状剝片1点、縦長整形剝片2点、縦長不整形剝片24点、横長不整形剝片9点、極小剝片40点である。石質も、極小剝片1点が黒曜石製である他は、すべて安山岩製である。しかも極小剝片を除く剝片類の中で礫面を残すものが26点（うち2点接合）ある。これは全体の約

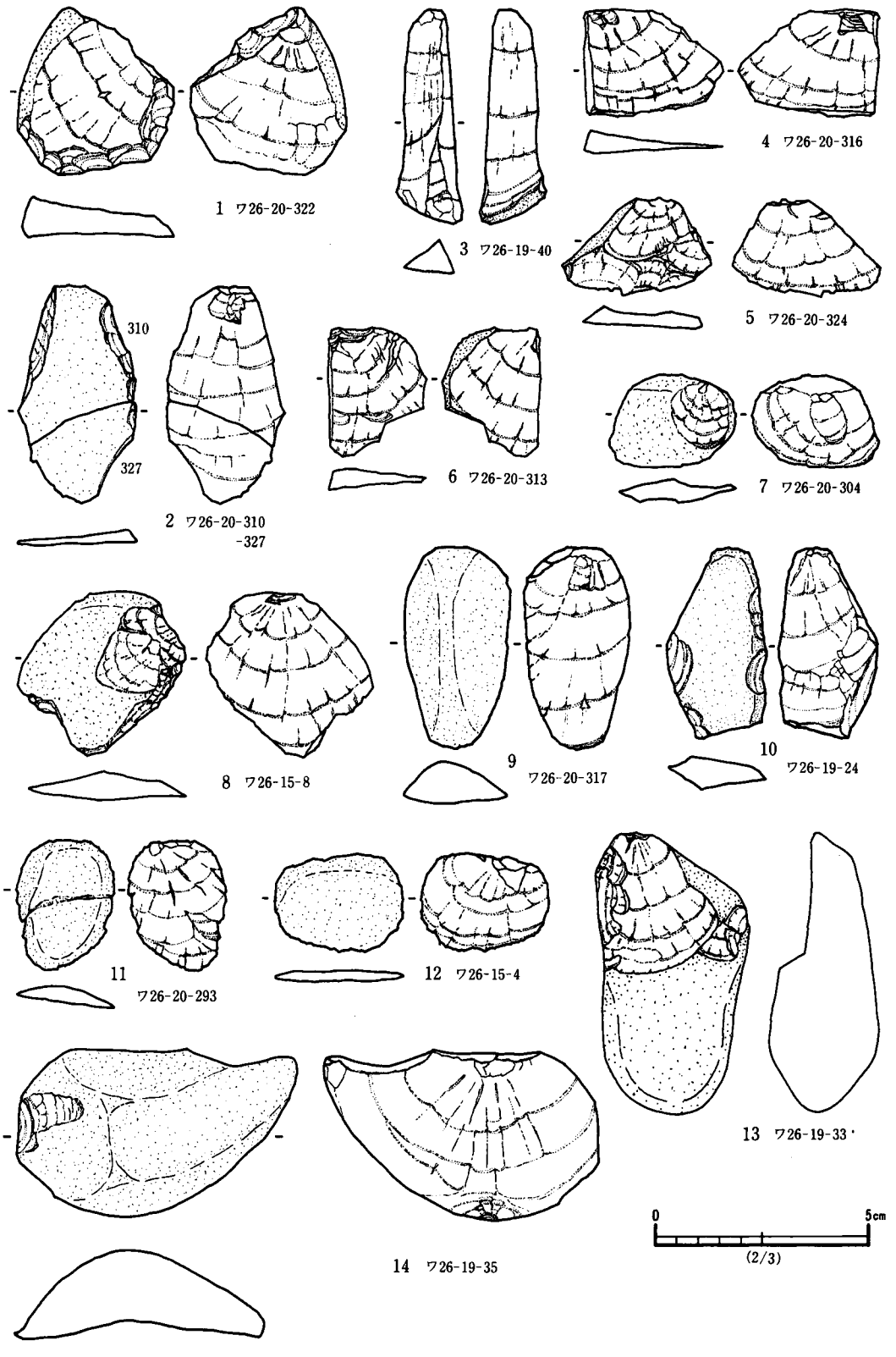


第85図　A地点No 3・4・5 ユニット石器石質別出土状況・接合状況

33%にあたり、極小剥片を除いた場合には約67%を占めている。

第20表　A地点No. 3 ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
ワ26－14－3	極小剥片	安山岩	12.0	7.1	1.4	0.1未満		
4	極小剥片	安山岩	6.3	6.0	1.5	0.1未満		
ワ26－15－3	縦長不整形剥片	安山岩	38.5	21.5	8.6	8.5		
4	横長不整形剥片	安山岩	22.7	30.2	3.6	2.9	12	
5	極小剥片	黒曜石	7.9	4.8	2.1	0.1未満		
6	縦長不整形剥片	安山岩	24.6	14.7	7.0	2.3		
8	横長不整形剥片	安山岩	30.1	37.0	8.7	13.0	8	
9	縦長不整形剥片	安山岩	55.4	27.9	4.9	7.5		ワ26－20－326と接合して計測
ワ26－19－1	極小剥片	安山岩	18.3	9.3	5.2	0.9		
2	縦長不整形剥片	安山岩	30.9	12.8	3.3	1.3		
3	極小剥片	安山岩	12.4	8.5	1.8	0.2		
4	極小剥片	安山岩	18.0	11.1	5.4	1.0		
6	極小剥片	安山岩	4.4	11.2	1.2	0.1未満		
8	極小剥片	安山岩	10.2	9.1	3.5	0.2		
9	縦長不整形剥片	安山岩	26.5	22.4	6.0	2.6		
10	極小剥片	安山岩	13.9	11.2	8.7	1.4		
11	縦長不整形剥片	安山岩	18.5	16.3	4.4	1.4		
12	極小剥片	安山岩	15.4	12.7	4.1	0.7		
13	横長不整形剥片	安山岩	17.3	25.4	3.1	1.4		
14	極小剥片	安山岩	5.1	10.0	2.3	0.1未満		
15	縦長不整形剥片	安山岩	24.6	14.2	8.3	2.8		
16	極小剥片	安山岩	11.8	15.2	3.0	0.5		
17	極小剥片	安山岩	8.0	6.8	1.3	0.1未満		
18	極小剥片	安山岩	13.8	6.0	1.6	0.1未満		
19	極小剥片	安山岩	30.0	9.6	4.6	0.9		
20	横長不整形剥片	安山岩	15.5	27.5	5.2	2.2		
21	極小剥片	安山岩	11.5	12.8	3.3	0.3		
22	縦長不整形剥片	安山岩	28.0	23.3	3.1	1.9		
23	極小剥片	安山岩	8.6	14.0	2.6	0.3		
24	縦長整形剥片	安山岩	41.2	23.4	7.8	9.8	10	
25	縦長不整形剥片	安山岩	21.7	14.8	1.5	0.5		
26	極小剥片	安山岩	8.8	20.7	7.1	1.2		
27	縦長不整形剥片	安山岩	21.5	16.3	5.9	1.3		
28	縦長不整形剥片	安山岩	39.9	21.2	4.7	4.3		



第86図　A地点No.3ユニット出土石器

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
30	極小剝片	安山岩	21.6	7.0	3.7	0.5		
31	極小剝片	安山岩	17.2	11.3	1.7	0.4		
33	縦長不整形剝片	安山岩	64.8	35.8	27.7	72.1	13	
35	横長不整形剝片	安山岩	38.5	67.8	19.2	58.0	14	ワ26－20－313と接合
37	縦長不整形剝片	安山岩	26.1	15.9	3.5	1.4		
38	極小剝片	安山岩	7.5	18.3	2.1	0.2		
39	極小剝片	安山岩	13.3	12.1	2.1	0.4		
40	石刃状剝片	安山岩	50.4	12.2	11.0	8.6	3	
41	縦長不整形剝片	安山岩	19.0	16.5	2.8	0.8		
42	縦長不整形剝片	安山岩	32.7	12.3	4.5	1.8		
43	極小剝片	安山岩	10.4	9.4	2.0	0.2		
44	極小剝片	安山岩	10.5	8.4	1.7	0.1未満		
45	縦長不整形剝片	安山岩	31.1	22.0	6.6	5.4		
ワ26－20－293	縦長不整形剝片	安山岩	29.7	22.9	5.1	4.3	11	
294	縦長不整形剝片	安山岩	24.5	18.2	7.0	3.1		
295	極小剝片	安山岩	18.5	12.5	15.4	1.2		
296	極小剝片	安山岩	9.7	11.6	1.3	0.2		
297	極小剝片	安山岩	23.3	11.5	5.9	1.2		
298	極小剝片	安山岩	8.5	5.9	4.3	0.2		
299	極小剝片	安山岩	8.6	4.5	3.0	0.1未満		
300	横長不整形剝片	安山岩						ワ26－20－316と接合して計測
301	横長不整形剝片	安山岩	28.5	17.5	7.9	4.0		
302	極小剝片	安山岩	17.8	6.7	2.1	0.3		
303	極小剝片	安山岩	8.8	7.0	3.8	0.7		
304	横長不整形剝片	安山岩	21.5	28.9	6.7	3.7	7	
305	極小剝片	安山岩	12.8	6.8	2.0	0.2		
306	極小剝片	安山岩	19.0	11.3	4.1	1.2		
307	極小剝片	安山岩	12.0	7.4	2.2	0.2		
308	縦長不整形剝片	安山岩	31.4	8.0	4.8	1.3		
309	極小剝片	安山岩	25.9	6.8	4.6	0.9		
310	二次加工	安山岩	49.8	28.1	4.6	6.8	2	ワ26－20－327と接合して計測
312	極小剝片	安山岩	16.8	8.0	2.0	0.3		
313	縦長不整形剝片	安山岩	29.5	23.0	5.1	4.2	6	ワ26－19－35と接合
314	縦長不整形剝片	安山岩	27.2	12.5	7.8	1.7		
316	横長不整形剝片	安山岩	4.9	8.5	5.7	7.9	4	ワ26－20－300と接合して計測
317	縦長不整形剝片	安山岩	46.3	25.2	10.5	14.3	9	
318	極小剝片	安山岩	5.7	3.7	1.0	0.1未満		
319	極小剝片	安山岩	17.8	8.9	2.5	0.4		
320	横長不整形剝片	安山岩	23.0	24.4	4.8	2.2		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
322	二次加工	安山岩	36.4	36.1	12.2	16.6	1	
323	極小剝片	安山岩	19.2	9.7	6.4	1.0		
324	横長不整形剝片	安山岩	22.7	32.2	4.4	3.2	5	
325	極小剝片	安山岩	10.9	7.8	2.1	0.2		
326	縦長不整形剝片	安山岩						ワ26－15－9と接合して計測
327	二次加工	安山岩						ワ26－20－310と接合して計測

No.4ユニット（第85・87・88図、第21表、図版38・49）

遺物の出土層位・分布状況

III層を主体としているが、垂直分布は60cmの幅があり、一部II層とIV層に及んでいる。

平面分布の範囲はE－W10m、N－S8mの広がりをもつが、特に集中するのはユニット内東寄りのE－W4m、N－S3mの範囲で、遺物の約70%が集中している。石器、剝片類の分布や石質別分布における偏在性は認められず、混在している。

石器組成・石質

ナイフ形石器2点、剝片類107点、円礫1点で、明確な石器組成は認められない。

石質別にみると黒曜石85点（剝片類）、頁岩20点（ナイフ形石器1点、剝片類19点）、安山岩4点（ナイフ形石器1点、剝片類3点）、流紋岩1点（円礫）で、量的には黒曜石が圧倒的に多いが、石器の素材は安山岩と頁岩に限られている。合計110点。

遺　物

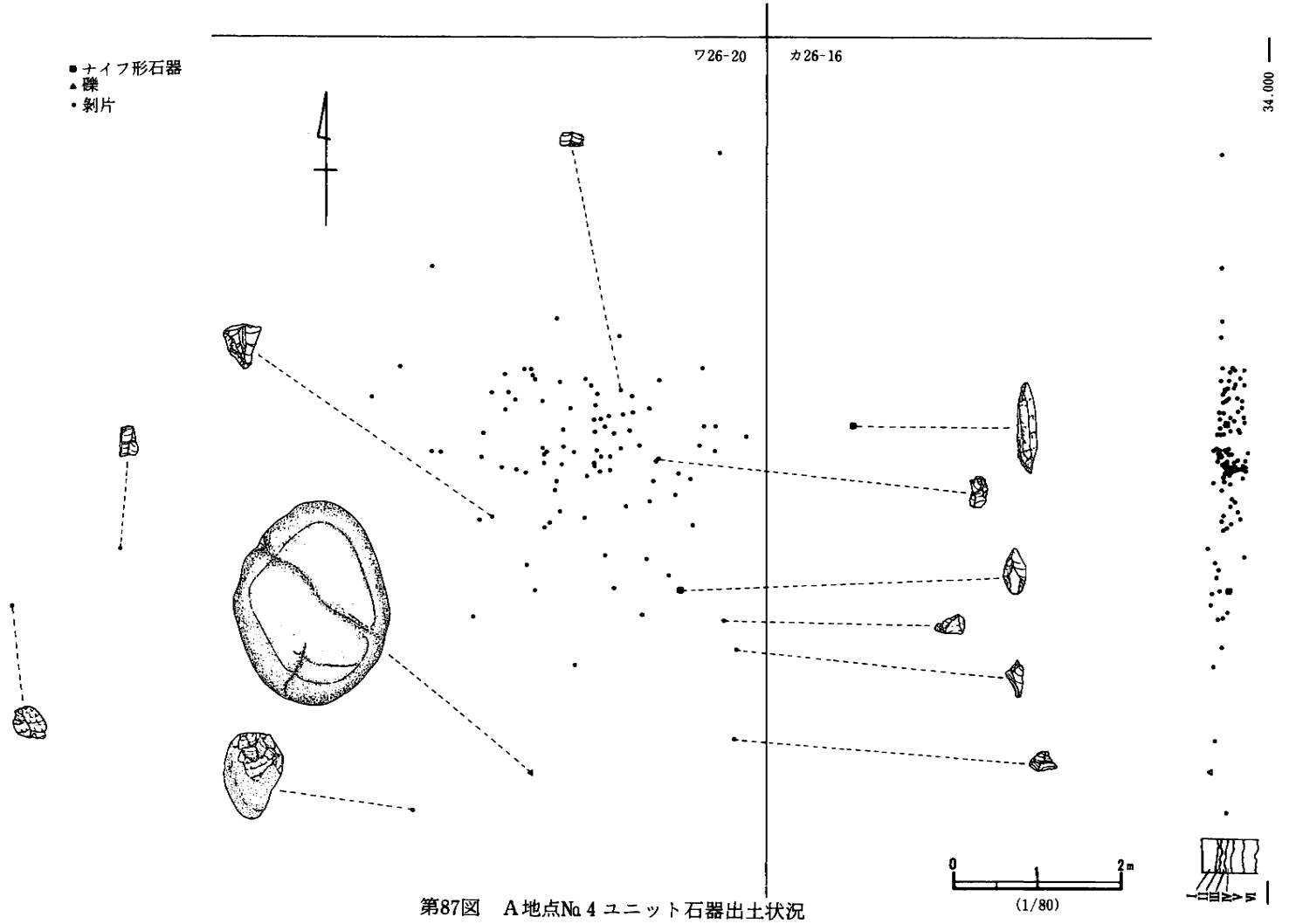
1．ナイフ形石器（1・2）

1は安山岩製である。石刃を素材とし、打面部側を基部としており、素材を大きく変形することなく、先端部左側面と基部周辺にのみブランティングを施している。器長は53.3mmを測る。いわゆる「杉久保型ナイフ形石器」の範疇に入るものかとも考えられる。2は砂質頁岩製で、縦長整形剝片を素材とし、打面部側を基部として、背面の左側縁と右側縁下部に急斜ではないが、ブランティングを施し、また腹面の基部周辺にも調整加工が施されている。背面の一部に礫面を残す。器長は27.3mmを測る。

2．剝片類（3～11）

3・5・8は頁岩製、4・11は安山岩製、6・7・9は黒曜石製である。3・8は縦長不整形剝片で、5は縦長整形剝片である。4は横長不整形剝片で、11は、楕円形礫を半割りしたもので、背面に礫面を残し、上半部に多方向からの剝離がみられる。

本ユニットを構成する遺物には、No.3ユニットと同様に、明確な石器組成を示すものは認められず、わずかにナイフ形石器2点があるのみである。他には、縦長整形剝片1点(頁岩)、縦長不整形剝片4点（頁岩2点、黒曜石、安山岩各1点)、横長不整形剝片4点（黒曜石3点、安山岩1点)、極小剝片98点（黒曜石81点、頁岩16点、安山岩1点）と後述する円礫1点（流紋岩）である。本ユニットを構成する遺物110点のうち98点が極小剝片で、全体の約89%を占めている。しか



第87図　A地点No.4ユニット石器出土状況

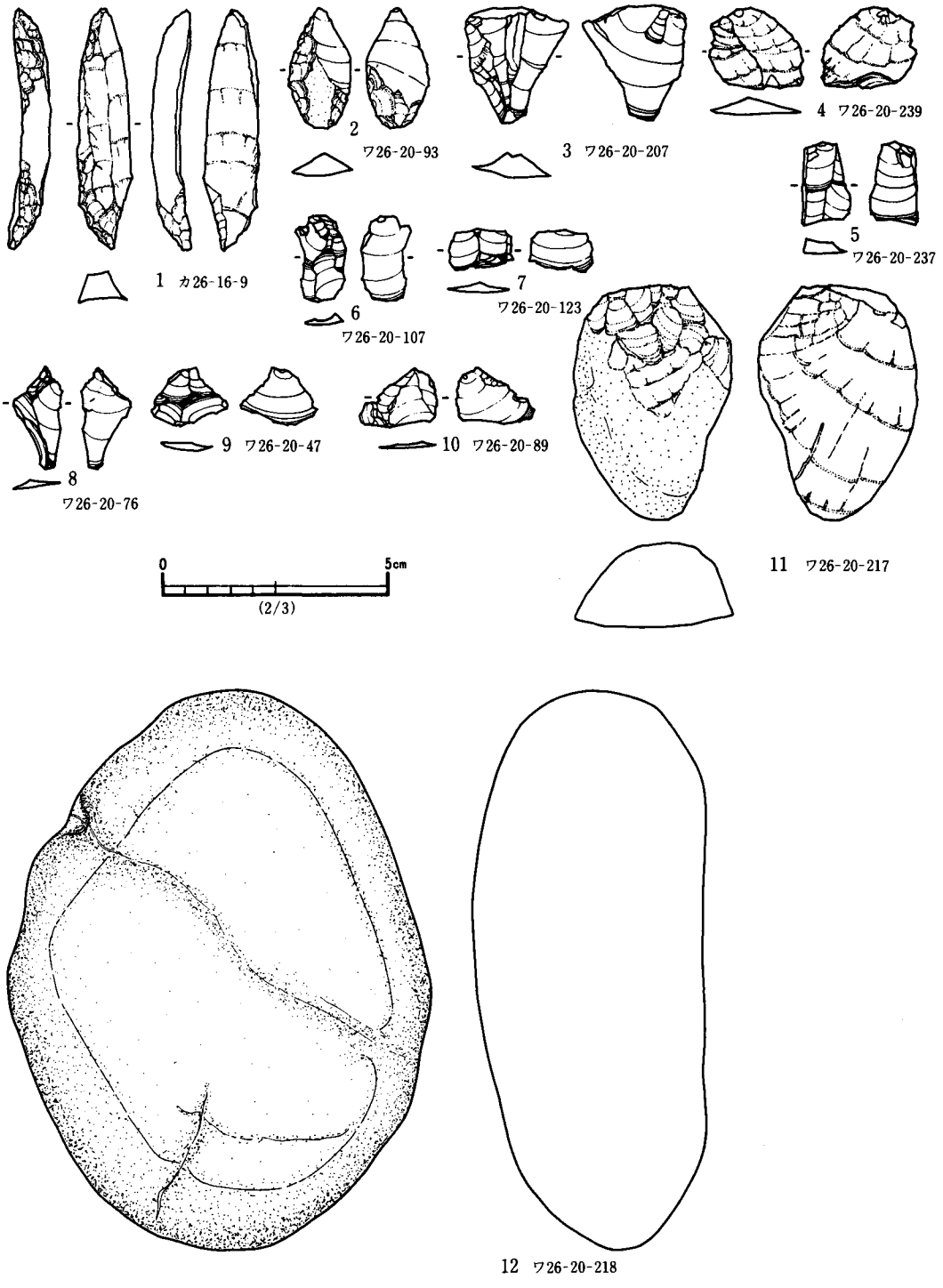
も石質でみると黒曜石が圧倒的に多いが、石器には黒曜石製のものは認められず、極小剥片を除く剥片類9点のうち4点に黒曜石がみられるのみである。

3．円　礫（12）

流紋岩製。長さ122.4㎜、幅94.0㎜、厚さ51.0㎜を測る扁平な円礫である。表裏及び側面とも敲打痕や磨滅痕は認められない。

第21表　A地点No.4ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	挿図	備考
ワ26−20−13	極小剥片	頁岩	13.1	7.4	1.5	0.1		
33	極小剥片	頁岩	7.0	5.1	0.7	0.1未満		
47	横長不整形剥片	黒曜石	12.0	16.9	2.0	0.3	9	
52	極小剥片	頁岩	7.3	8.4	1.3	0.1		
64	極小剥片	頁岩	8.2	4.2	2.2	0.1		
66	極小剥片	頁岩	2.6	2.1	0.4	0.1未満		
73	極小剥片	頁岩	7.3	6.4	2.2	0.1		
76	縦長不整形剥片	頁岩	22.3	11.5	2.5	0.4	8	
82	極小剥片	頁岩	6.8	5.0	0.9	0.1		
89	横長不整形剥片	黒曜石	15.8	16.5	3.1	0.1	10	
93	ナイフ形石器	(砂岩)頁岩	27.3	14.1	5.7	1.6	2	
94	極小剥片	黒曜石	4.6	7.0	1.5	0.1		
96	極小剥片	黒曜石	6.1	4.2	0.9	0.1未満		
98	極小剥片	黒曜石	3.8	9.1	1.2	0.1未満		
100	極小剥片	黒曜石	3.6	5.4	1.5	0.1未満		
103	極小剥片	黒曜石	7.1	6.0	0.8	0.1未満		
104	極小剥片	黒曜石	7.0	5.8	0.6	0.1未満		
105	極小剥片	黒曜石	4.6	1.8	0.8	0.1未満		
106	極小剥片	黒曜石	5.0	4.2	0.5	0.1未満		
107	縦長不整形剥片	黒曜石	18.9	11.5	2.2	0.5	6	
108	極小剥片	黒曜石	2.8	2.6	0.3	0.1未満		
109	極小剥片	黒曜石	6.9	5.7	0.6	0.1未満		
111	極小剥片	黒曜石	4.7	3.5	0.6	0.1未満		
112	極小剥片	黒曜石	4.1	4.7	0.7	0.1未満		
115	極小剥片	黒曜石	4.0	2.4	0.3	0.1未満		
116	極小剥片	黒曜石	4.4	2.5	0.7	0.1未満		
117	極小剥片	黒曜石	3.8	2.9	1.1	0.1未満		
118	極小剥片	黒曜石	7.2	6.3	4.3	0.2		
121	極小剥片	黒曜石	2.7	2.5	0.9	0.1未満		
123	横長不整形剥片	黒曜石	8.4	14.4	2.6	0.3	7	



第88図　A地点No.4ユニット出土石器

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
124	極小剝片	黒曜石	3.5 3.5	3.4 1.9	0.8 0.6	0.1未満		2点あり
129	極小剝片	黒曜石	6.5	4.5	0.9	0.1未満		
130	極小剝片	黒曜石	7.1	3.3	0.6	0.1未満		
132	極小剝片	黒曜石	2.8	4.2	0.7	0.1未満		
134	極小剝片	黒曜石	6.1	4.9	0.4	0.1未満		
135	極小剝片	黒曜石	6.5	2.1	1.8	0.1未満		
136	極小剝片	黒曜石	5.2	3.3	2.5	0.1未満		
140	極小剝片	黒曜石	2.2	1.3	0.5	0.1未満		
143	極小剝片	黒曜石	3.9	4.5	0.3	0.1未満		
145	極小剝片	頁岩	7.5	5.9	1.4	0.1未満		
146	極小剝片	黒曜石	4.2	7.4	1.4	0.1未満		
147	極小剝片	黒曜石	9.0	4.5	1.3	0.1未満		
148	極小剝片	黒曜石	5.8	5.2	0.4	0.1未満		
149	極小剝片	黒曜石	6.6	5.6	1.3	0.1未満		
150	極小剝片	黒曜石	−	−	−	−		微小のため計測不能
151	極小剝片	黒曜石	7.8	3.7	1.8	0.1未満		
156	極小剝片	黒曜石	7.2	7.4	3.0	0.1未満		
157	極小剝片	黒曜石	7.7	4.2	1.2	0.1未満		
160	極小剝片	頁岩	10.4	5.1	2.1	0.1		
162	極小剝片	黒曜石	4.7	4.4	0.6	0.1未満		
163	極小剝片	黒曜石	6.3	3.4	0.5	0.1未満		
164	極小剝片	黒曜石	8.9	6.6	1.2	0.1未満		
165	極小剝片	黒曜石	6.4	3.4	1.1	0.1未満		
166	極小剝片	黒曜石	7.8	6.4	1.7	0.1未満		
167	極小剝片	黒曜石	4.7	2.8	1.1	0.1未満		
169	極小剝片	黒曜石	8.8	5.0	1.5	0.1未満		
170	極小剝片	黒曜石	5.9	4.8	1.1	0.1未満		
171	極小剝片	黒曜石	4.6	10.5	1.1	0.1未満		
172	極小剝片	黒曜石	4.0	3.4	0.3	0.1未満		
174	極小剝片	黒曜石	5.2	4.6	0.2	0.1未満		
177	極小剝片	頁岩	5.9	4.0	0.5	0.1未満		
182	極小剝片	黒曜石	3.7	7.4	0.8	0.1未満		
184	極小剝片	黒曜石	5.9	4.3	0.6	0.1未満		
185	極小剝片	黒曜石	2.5	2.1	0.3	0.1未満		
186	極小剝片	黒曜石	5.2	4.6	0.8	0.1未満		
187	極小剝片	頁岩	6.0	4.8	1.2	0.1未満		
191	極小剝片	黒曜石	4.4	5.7	1.6	0.1未満		
192	極小剝片	黒曜石	4.7	2.4	1.0	0.1未満		
193	極小剝片	黒曜石	9.3	3.2	0.8	0.1未満		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
195	極小剥片	黒曜石	4.2	3.7	0.6	0.1未満		
196	極小剥片	黒曜石	5.4	6.0	0.6	0.1未満		
198	極小剥片	黒曜石	7.5	5.2	1.0	0.1未満		
199	極小剥片	頁岩	4.4	4.1	0.9	0.1未満		
201	極小剥片	頁岩	3.3	7.3	0.5	0.1未満		
203	極小剥片	黒曜石	4.7	3.0	0.7	0.1未満		
207	縦長不整形剥片	頁岩	25.9	23.1	9.4	3.5	3	
208	極小剥片	黒曜石	7.5	6.5	0.7	0.1未満		
213	極小剥片	黒曜石	4.0	3.2	1.2	0.1未満		
217	縦長不整形剥片	安山岩	51.7	34.7	20.5	40.0	11	
218	円礫	流紋岩	122.4	94.0	51.0	820.0	12	
237	縦長整形剥片	頁岩	18.2	10.6	3.3	0.8	5	
239	横長不整形剥片	安山岩	18.2	22.6	4.3	1.6	4	
248	極小剥片	黒曜石	6.8	3.1	1.1	0.1未満		
249	極小剥片	黒曜石	8.9	4.4	0.3	0.1未満		
250	極小剥片	黒曜石	3.8	5.3	1.1	0.1未満		
253	極小剥片	黒曜石	5.2	3.6	0.6	0.1未満		
254	極小剥片	黒曜石	6.2	3.1	1.9	0.1未満		
255	極小剥片	黒曜石	6.9	5.0	1.5	0.1未満		
256	極小剥片	黒曜石	3.6	3.5	0.3	0.1未満		
261	極小剥片	頁岩	7.9	4.9	2.3	0.1未満		
262	極小剥片	黒曜石	6.9	5.5	0.9	0.1未満		
263	極小剥片	黒曜石	3.7	5.4	0.7	0.1未満		
266	極小剥片	黒曜石	4.3	3.3	0.7	0.1未満		
267	極小剥片	黒曜石	6.4	9.4	1.5	0.1未満		
268	極小剥片	黒曜石	7.4	4.5	1.5	0.1未満		
269	極小剥片	黒曜石	7.8	6.5	1.2	0.1未満		
271	極小剥片	黒曜石	5.2	3.4	1.1	0.1未満		
277	極小剥片	黒曜石	−	−	−	−		微小のため計測不能
279	極小剥片	黒曜石	4.6	4.9	0.5	0.1未満		
280	極小剥片	黒曜石	5.8	6.7	0.9	0.1未満		
281	極小剥片	黒曜石	7.2	7.2	1.2	0.1未満		
282	極小剥片	頁岩	2.4	3.3	0.4	0.1未満		
283	極小剥片	頁岩	8.1	4.8	1.3	0.1未満		
284	極小剥片	黒曜石	6.2	5.9	1.0	0.1未満		
286	極小剥片	黒曜石	6.9	3.7	0.4	0.1未満		
287	極小剥片	黒曜石	6.2	3.6	1.2	0.1未満		
289	極小剥片	黒曜石	9.0	4.5	1.7	0.1未満		
291	極小剥片	黒曜石	6.9	5.3	0.4	0.1未満		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
328	極小剥片	安山岩	7.0	5.1	1.4	0.1未満		
カ26−16−9	ナイフ形石器	安山岩	53.3	12.1	6.0	5.4	1	

No.5ユニット（第85・89・90図、第22表、図版39・50）

遺物の出土層位・分布状況

III層を主体としているが、垂直分布は50cmの幅があり、一部II層とIV層に及んでいる。

平面分布の範囲はE−W9m、N−S5mの広がりをもつが、特に集中するのはユニット内中央部付近で、NW−SE2.7m、SW−NE1.2mの範囲に遺物の約60%が集中している。石器、剥片類の分布や石質別分布をみても、顕著な偏在性は認められず、混在している。

石器組成・石質

石核3点、剥片類38点で明確な石器組成は認められない。

石質別にみると安山岩27点（石核3点、剥片類24点）、頁岩12点（剥片類）、チャート、黒曜石各1点（剥片類）で、安山岩が全体の約66%を占めている。合計41点。

遺　物

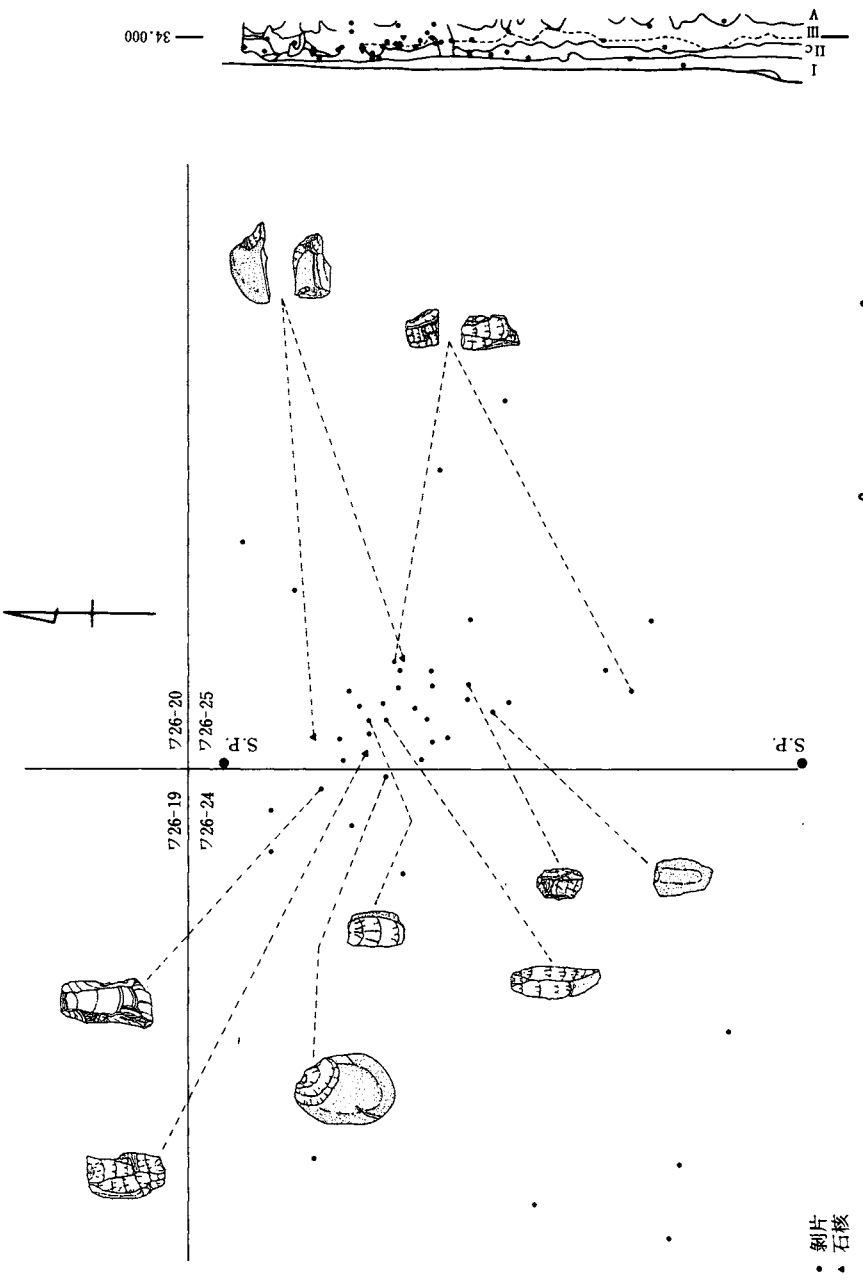
1．剥片類（1〜8）

1〜6・8は安山岩製で、7はチャート製である。1〜3は剥片の一部あるいは片面に礫面をもつ剥片で、1は石刃状剥片、2・3は縦長整形剥片である。4〜6は礫面を残さない剥片で、4・6は縦長整形剥片、5は横長不整形剥片である。7は、縦長整形剥片で、背面の左側縁に細かい剥離痕がみられるが、二次加工痕とは認めがたい。8は原礫の一部を剥がした段階のものである。

本ユニットを構成する遺物には、No.3ユニットと同様に、明確な石器組成を示すような石器はみられず、後述する石核3点があるのみである。他には石刃剥片1点(安山岩)、縦長整形剥片5点（安山岩4点、チャート1点)、縦長不整形剥片15点（安山岩9点、頁岩6点−うち3点が接合)、横長不整形剥片1点（安山岩)、極小剥片16点（安山岩9点、頁岩6点、黒曜石1点）である。なお、礫面を残すものが、安山岩製のもので9点、頁岩製のものでは3点含まれている。これは極小剥片を除く剥片、石核の中で48%を占めている。全体としては29%を占めている。さらに安山岩だけでみると約33%を占め、頁岩では25%を占めている（但し、頁岩は出土点数が少ない)。

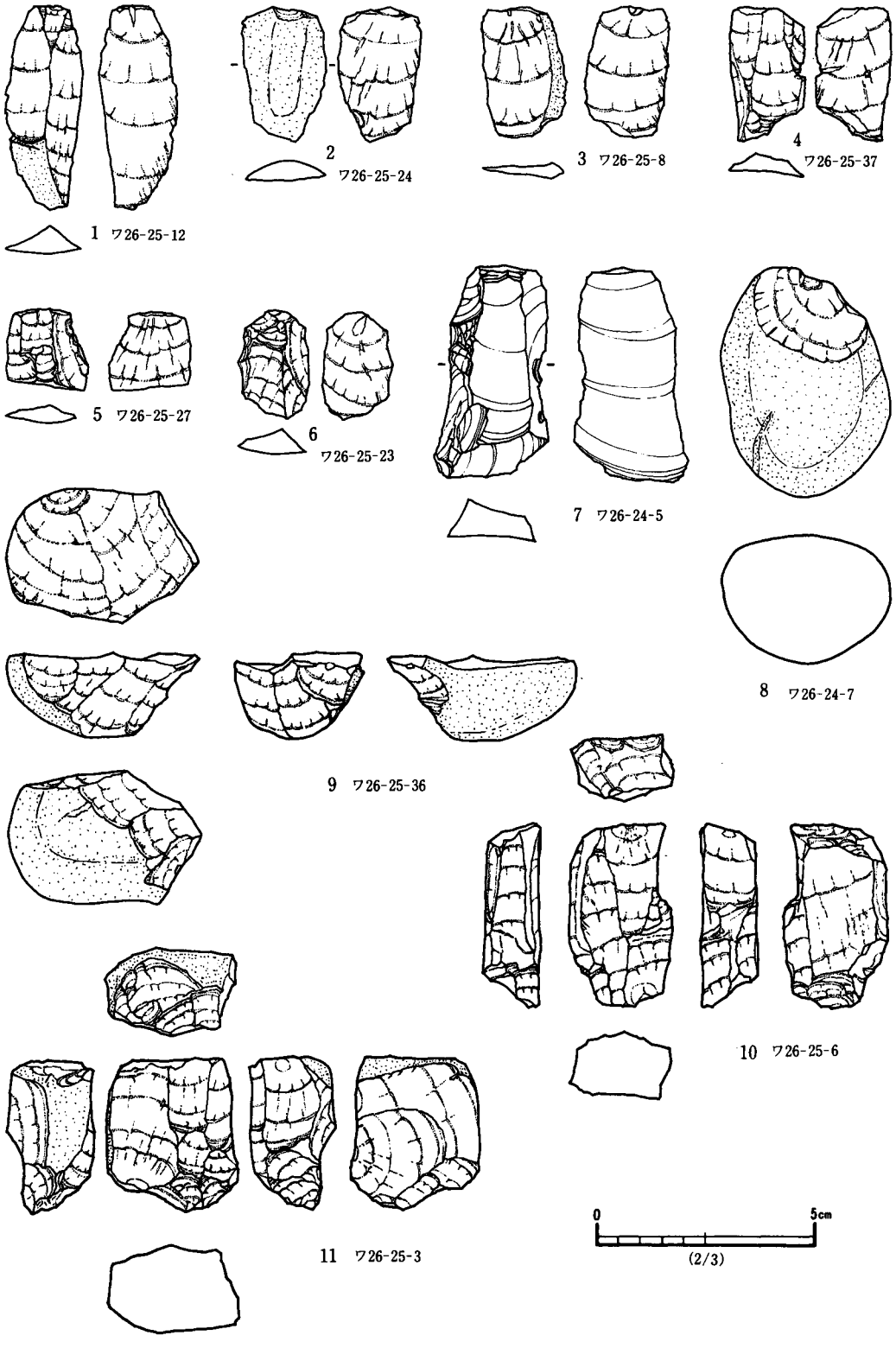
2．石　核（9〜11)

すべて安山岩製である。9は石核右側面から下面にかけて礫面を残し、明確な石核調整を施すことなく、剥片を剥離したものと思われる。左側面に上方向から4面の剥離をおこなった後、新しい打面を作出し、1面の剥離をおこなっている。打面と剥離面とのなす角度は50度である。10は上下両方向からの剥離がみられ、正面には上方向から1面、下方向から2面、左側面には下方向から1面、右側面には上方向から1面、下方向から2面の剥離面がみられる。上・下面に粗い



第89図　A地点No.5ユニット石器出土状況

打面調整がみられる。打面と剥離面とのなす角度は上面が約70度、下面が約55度である。11は上面から左側面にかけて礫面を残すもので、縦位、横位の剥離がみられる。正面には上方向から2面、下方向から1面、右側面には上方向から1面、裏面には横位の剥離面が2面みられる。上面には打面調整がみられる。打面と剥離面とのなす角度は上面が約90度を測り、残核と思われる。



第90図　A地点No.5ユニット出土石器

第22表　A地点No. 5 ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
ワ26－24－3	縦長不整形剝片	頁岩	22.2	11.2	3.1	0.3		
4	極小剝片	安山岩	10.7	13.1	2.2	0.3		
5	縦長整形剝片	チャート	47.9	24.0	9.0	12.3		
6	極小剝片	黒曜石	4.7	3.8	1.0	0.1未満		
7	縦長不整形剝片	安山岩	52.3	37.4	27.1	72.0		
8	縦長不整形剝片	頁岩	30.2	16.4	7.9	3.3		
9	縦長不整形剝片	安山岩	18.2	14.3	4.3	1.1		
10	縦長不整形剝片	安山岩	20.6	16.0	7.8	1.8		
11	縦長不整形剝片	安山岩	23.6	15.9	5.5	1.9		
12	縦長不整形剝片	安山岩	25.9	15.0	4.4	1.3		
13	極小剝片	安山岩	12.3	16.0	3.1	0.4		
ワ26－25－3	石核	安山岩	35.0	29.5	18.8	27.2		ワ26－25－36と接合
4	極小剝片	安山岩	10.7	4.6	1.8	0.1未満		
6	石核	安山岩	42.3	22.7	12.8	19.3		
7	縦長不整形剝片	安山岩	27.6	22.1	6.6	4.7		
8	縦長不整形剝片	安山岩	29.7	18.6	4.1	3.0	3	
9	縦長不整形剝片	安山岩	19.1	2.3	3.0	0.8		
11	縦長不整形剝片	頁岩	27.3	10.7	4.2	1.4		ワ26－25－11、18と接合
12	石刃状剝片	安山岩	47.1	17.0	8.1	5.7	1	
13	極小剝片	安山岩	5.0	3.6	0.9	0.1未満		
15	極小剝片	頁岩	9.5	7.2	1.5	0.1未満		
16	極小剝片	頁岩	11.1	9.5	2.7	0.3		
17	縦長不整形剝片	頁岩	32.8	17.6	5.1	2.5		ワ26－25－11、18と接合
18	縦長不整形剝片	頁岩	27.5	10.3	5.4	1.3		ワ26－25－11、17と接合
19	極小剝片	頁岩	4.5	2.3	1.2	0.1未満		
20	縦長不整形剝片	安山岩	20.5	15.9	3.5	1.0		
21	縦長不整形剝片	頁岩	22.9	11.7	2.0	0.5		
22	極小剝片	安山岩	22.0	8.8	2.7	0.6		
23	縦長不整形剝片	安山岩	23.6	16.1	6.0	2.3		
24	縦長不整形剝片	安山岩	31.0	18.2	5.7	4.3	2	
25	極小剝片	頁岩	10.8	12.6	1.9	0.2		
27	横長不整形剝片	安山岩	18.8	17.1	4.9	2.0	5	ワ26－25－37と接合（縦方向）
28	極小剝片	頁岩	8.1	13.2	1.4	0.1		
29	極小剝片	頁岩	8.9	5.3	3.1	0.1		
30	縦長不整形剝片	安山岩	19.9	10.2	3.6	0.6		
32	極小剝片	安山岩	10.0	5.7	1.5	0.1		
33	極小剝片	安山岩	15.8	6.5	2.6	0.3		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
34	極小剥片	安山岩	12.7	12.0	3.8	0.7		
35	極小剥片	安山岩	4.3	2.0	0.7	0.1未満		
36	石核	安山岩	40.3	31.2	18.2	27.1		ワ26－25－3と接合
37	縦長整形剥片	安山岩	30.7	17.1	6.7	3.4	4	ワ26－25－27と接合（縦方向）

No.6ユニット（第91～93図、第23表、図版39・50）

遺物の出土層位・分布状況

IV層上部を主体としているが、垂直分布は70cmの幅があり、一部III層にも及んでいる。

平面分布の範囲はE－W4m、N－S5mの広がりをもつが、特に集中するのはユニット内中央部のE－W1.5m、N－S1.2mの範囲である。

石器組成・石質

剥片類35点で、明確な石器組成は認められない。

石質はすべて黒曜石である。

遺物

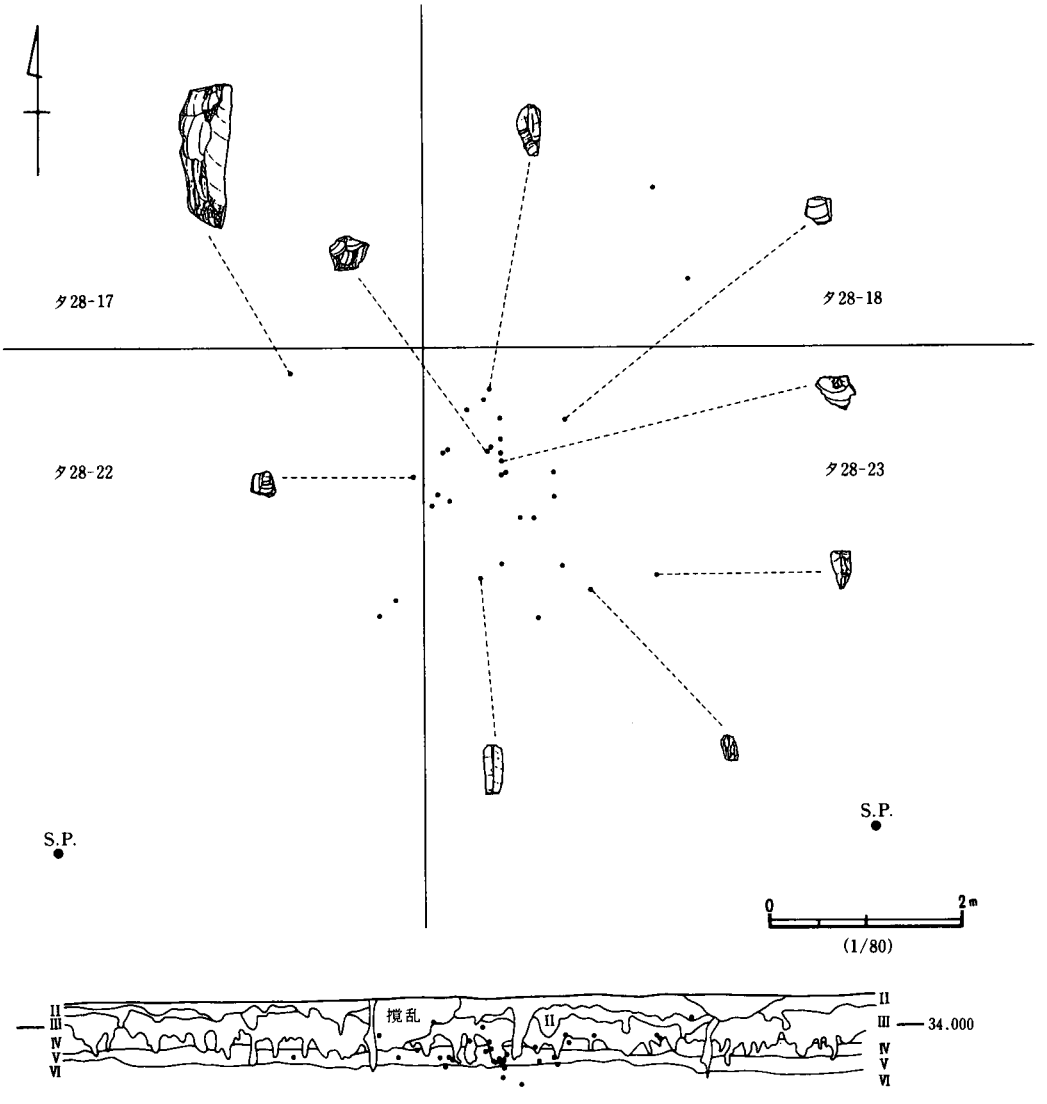
剥片類（1～9）

1は石刃状剥片で長さ73.3mm、幅26.9mm、厚さ11.7mmを測る大形のものである。2は打面部が欠損した石刃である。3・4は縦長整形剥片である。5～7は縦長不整形剥片である。8・9は横長不整形剥片である。

本ユニットを構成する遺物には定型的な石器はみられず、石刃1点、石刃状剥片1点、縦長整形剥片2点、縦長不整形剥片4点、横長不整形2点、極小剥片25点である。極小剥片が全体の71％を占めている。

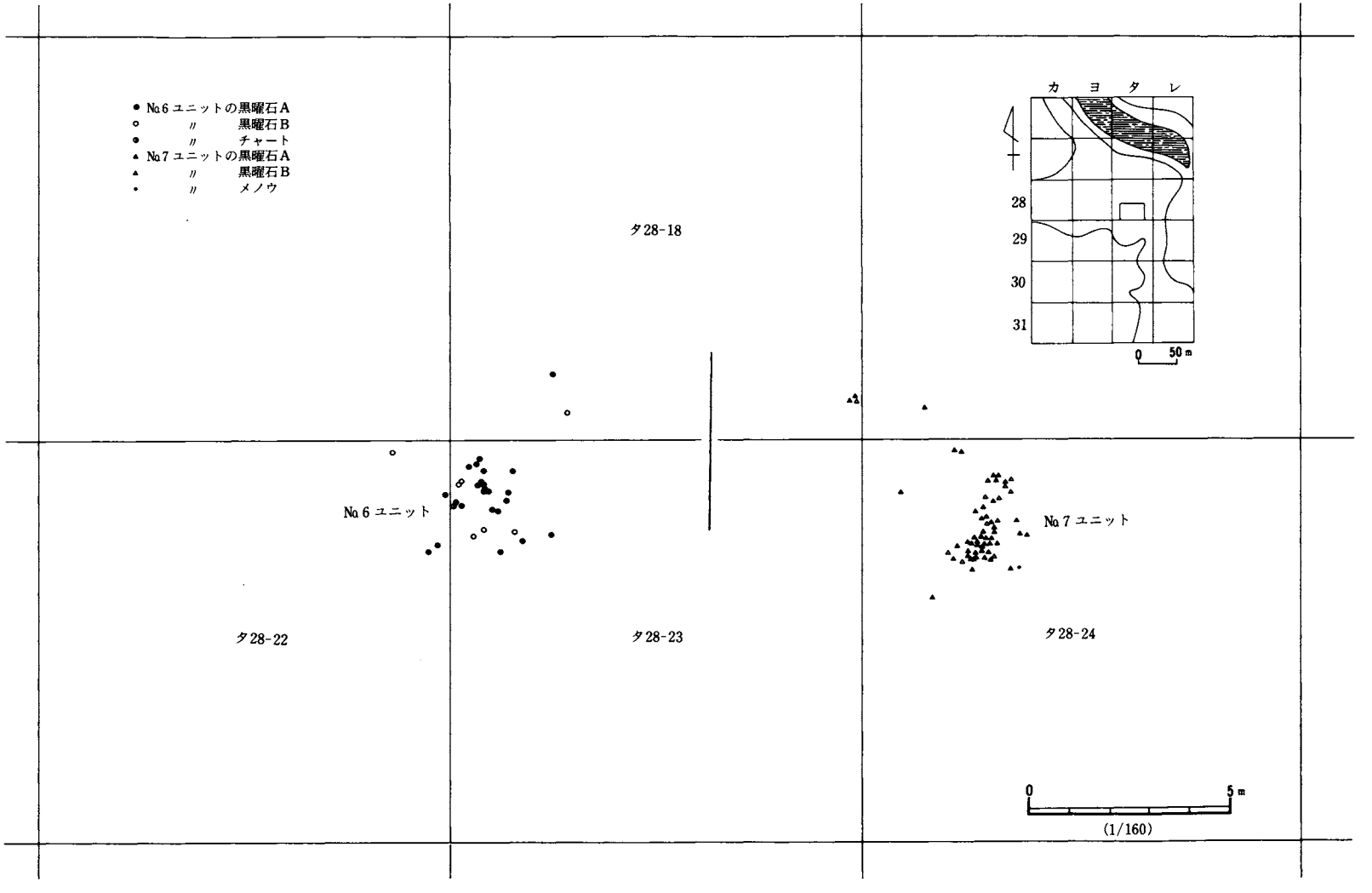
第23表　A地点No.6ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
タ28－18－9	極小剥片	黒曜石	12.0	8.0	3.5	0.3		
10	極小剥片	黒曜石	7.6	3.6	1.0	0.1未満		
タ28－22－4	極小剥片	黒曜石	14.8	5.2	1.8	0.1		
5	極小剥片	黒曜石	20.3	5.7	1.1	0.1		
6	縦長不整形剥片	黒曜石	13.2	12.7	4.1	0.6	7	
8	石刃状剥片	黒曜石	73.3	26.9	11.7	19.3	1	
タ28－23－3	縦長不整形剥片	黒曜石	12.7	7.7	2.4	0.2	5	
4	極小剥片	黒曜石	16.4	7.4	1.7	0.3		
7	極小剥片	黒曜石	8.5	5.0	0.7	0.1未満		
8	縦長整形剥片	黒曜石	19.2	10.4	4.7	0.8	4	
9	極小剥片	黒曜石	5.1	2.6	0.6	0.1未満		

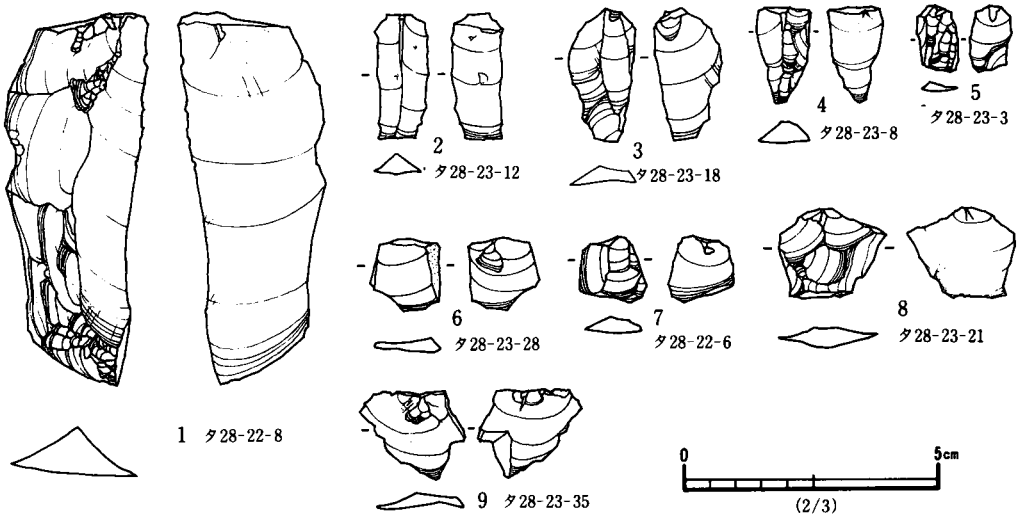


第91図　A地点№6ユニット石器出土状況

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
10	極小剥片	黒曜石	5.9	5.1	1.1	0.1未満		
11	極小剥片	黒曜石	10.1	8.0	2.6	0.2		
12	石刃	黒曜石	25.1	9.8	4.2	1.0	2	
14	極小剥片	チャート	9.3	5.5	2.4	0.1		
15	極小剥片	黒曜石	9.5	8.8	0.1	1.0		
16	極小剥片	黒曜石	12.8	10.8	4.7	0.3		
17	極小剥片	黒曜石	5.8	4.9	1.5	0.1		
18	縦長整形剥片	黒曜石	26.4	12.7	3.0	0.9	3	
19	極小剥片	黒曜石	6.0	4.4	0.9	0.1未満		
21	横長不整形剥片	黒曜石	21.4	17.6	5.1	1.3	8	



第92図　A地点№6・7ユニット石器石質別出土状況



第93図　A地点No.6ユニット出土石器

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
22	極小剥片	黒曜石	15.0	5.0	4.0	0.2		
23	極小剥片	黒曜石	14.0	9.2	2.7	0.3		
24	極小剥片	黒曜石	7.3	5.8	0.9	0.1未満		
25	極小剥片	黒曜石	13.2	6.6	0.1	0.1未満		
26	極小剥片	黒曜石	5.9	4.6	1.3	0.1未満		
27	極小剥片	黒曜石	9.5	5.0	0.9	0.1未満		
28	縦長不整形剥片	黒曜石	16.5	14.5	3.6	0.7	6	
29	極小剥片	黒曜石	2.8	5.9	0.8	0.1未満		
30	極小剥片	黒曜石	8.0	5.8	1.8	0.1未満		
31	極小剥片	黒曜石	11.0	4.8	0.9	0.1未満		
33	極小剥片	黒曜石	10.9	7.3	3.1	0.2		
34	極小剥片	黒曜石	11.0	5.1	3.8	0.2		
35	横長不整形剥片	黒曜石	16.3	21.1	2.4	0.6	9	
36	縦長不整形剥片	黒曜石	23.0	11.2	1.7	0.3		

No.7ユニット（第92・94・95図、第24表、図版40・50）

遺物の出土層位・分布状況

Ⅳ層を主体としているが、垂直分布は60cmの幅があり、一部Ⅲ層に及んでいる。

平面分布の範囲はE－W5m、N－S6.4mの広がりをもつが、特に集中するのはユニット内東側E－W2m、N－S2.5mの範囲である。

石器組成・石質

ナイフ形石器１点、削器１点、剝片類62点で、明確な石器組成は認められない。

石質別にみると黒曜石63点（削器１点、剝片類62点）、メノウ１点（ナイフ形石器）で、圧倒的に黒曜石の占める割合が高い。合計64点である。

遺　物

１．ナイフ形石器（１）

メノウ製。縦長剝片を素材とし、背面左側縁に表裏からのブランティングを施している。器長は35.0㎜を測る。

２．削　器（２）

黒曜石製。石刃状剝片を素材として、背面の左側縁と右側縁下部に細かい二次加工を施している。下端部にも粗い二次加工を施している。器長は33.1㎜を測る。

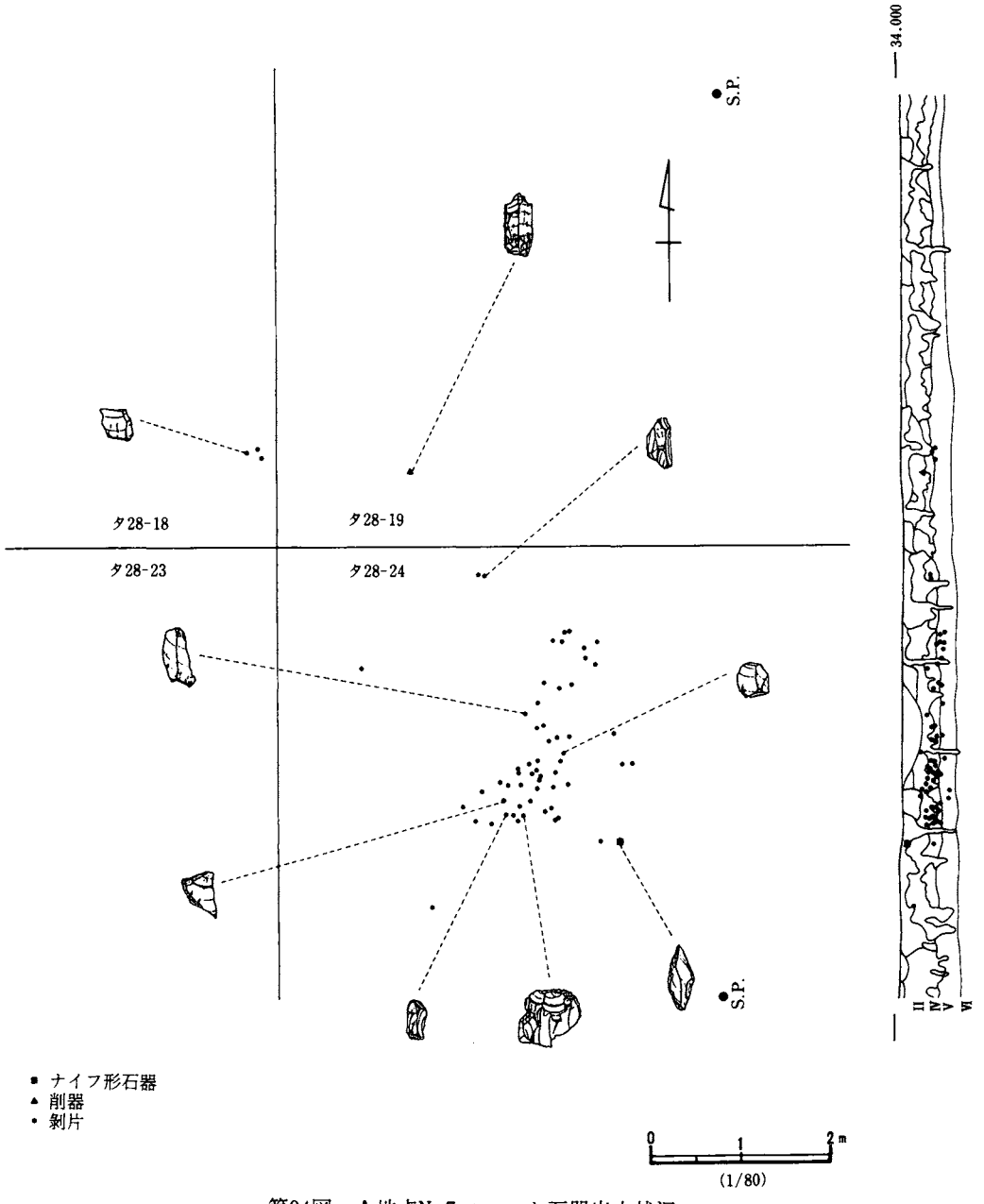
３．剝片類（３～９）

すべて黒曜石製である。３は石刃状剝片である。４は縦長整形剝片である。５・６・８・９は縦長不整形剝片で、４・８・９は一部に礫面を残している。７は横長不整形剝片で、一部礫面を残す。

本ユニットを構成する遺物はナイフ形石器、削器の各１点を除くと、石刃状剝片１点、縦長整形剝片１点、縦長不整形剝片８点、横長不整形剝片１点、極小剝片51点である。極小剝片が全体の約80％を占めている。

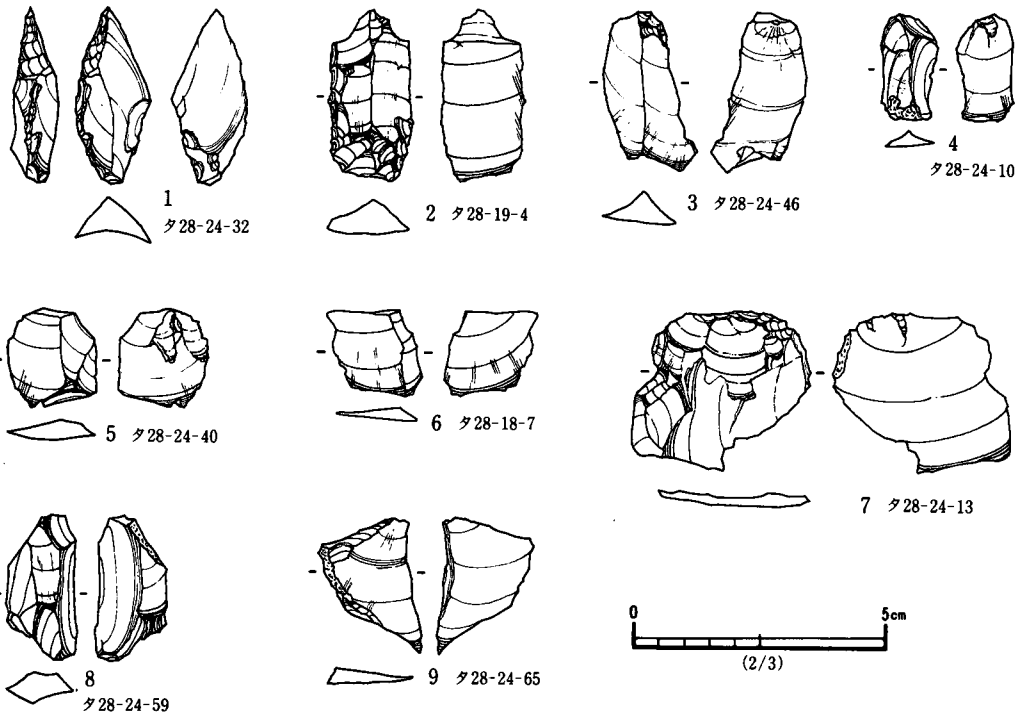
第24表　A地点No.7ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	挿図	備考
タ28－18－6	縦長不整形剝片	黒曜石	21.3	13.9	4.0	0.8		
7	縦長不整形剝片	黒曜石	15.7	15.7	3.8	1.0	6	
タ28－19－4	削器	黒曜石	33.1	16.5	7.6	3.9	2	
タ28－24－3	極小剝片	黒曜石	13.8	10.6	3.8	0.4		
4	極小剝片	黒曜石	3.5	2.9	0.5	0.1未満		
5	縦長不整形剝片	黒曜石	18.4	11.4	2.9	0.4		
6	極小剝片	黒曜石	4.9	4.3	1.1	0.1未満		
8	極小剝片	黒曜石	8.4	7.6	1.9	0.1		
9	極小剝片	黒曜石	16.8	6.2	3.0	0.3		
10	縦長整形剝片	黒曜石	20.8	11.4	4.8	1.0	4	
11	極小剝片	黒曜石	4.8	3.0	5.6	0.1未満		
12	極小剝片	黒曜石	7.0	4.5	1.5	0.1未満		
13	横長不整形剝片	黒曜石	31.3	34.4	3.5	3.3	7	
14	極小剝片	黒曜石	2.7	2.0	0.7	0.1未満		
15	極小剝片	黒曜石	3.6	3.4	1.1	0.1未満		



第94図　A地点No.7ユニット石器出土状況

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
16	縦長不整形剥片	黒曜石	22.0	12.5	3.5	1.0		
17	極小剥片	黒曜石	9.7	7.0	1.8	0.1		
18	極小剥片	黒曜石	8.5	6.8	1.4	0.1		
19	極小剥片	黒曜石	6.0	2.5	1.1	0.1未満		
20	極小剥片	黒曜石	4.0	3.0	1.0	0.1未満		
21	極小剥片	黒曜石	6.6	3.1	0.7	0.1未満		
22	極小剥片	黒曜石	8.4	7.1	1.2	0.1		
24	極小剥片	黒曜石	11.2	3.6	2.5	0.1未満		



第95図　A地点No.7ユニット出土石器

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
25	極小剝片	黒曜石	6.0	3.2	2.2	0.1未満		
26	極小剝片	黒曜石	15.0	10.2	1.5	0.2		
27	極小剝片	黒曜石	8.5	4.7	1.2	0.1未満		
28	極小剝片	黒曜石	7.0	4.3	0.5	0.1未満		
29	極小剝片	黒曜石	11.2	4.0	2.2	0.1未満		
30	極小剝片	黒曜石	6.7	6.8	0.8	0.1		
31	極小剝片	黒曜石	16.0	5.2	4.4	0.3		
32	ナイフ形石器	メノウ	35.0	15.1	7.8	3.5	1	
33	極小剝片	黒曜石	8.2	9.4	1.7	0.1		
34	極小剝片	黒曜石	16.9	10.2	2.6	0.3		
35	極小剝片	黒曜石	7.3	5.8	0.9	0.1未満		
37	極小剝片	黒曜石	6.7	2.9	0.7	0.1未満		
38	極小剝片	黒曜石	13.7	7.0	2.7	0.2		
39	極小剝片	黒曜石	8.1	10.2	1.9	0.2		
40	縦長不整形剝片	黒曜石	18.7	17.3	4.3	1.4	5	
41	極小剝片	黒曜石	5.4	4.9	1.5	0.1未満		
42	極小剝片	黒曜石	4.9	2.8	0.7	0.1未満		
43	極小剝片	黒曜石	2.8	1.6	0.6	0.1未満		

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
44	極小剝片	黒曜石	15.5	9.1	3.1	0.5		
45	極小剝片	黒曜石	5.7	3.8	1.0	0.1未満		
46	石刃状剝片	黒曜石	32.6	14.0	6.1	2.4	3	
47	極小剝片	黒曜石	12.7	10.0	2.3	0.3		
48	極小剝片	黒曜石	5.3	2.4	0.6	0.1未満		
49	極小剝片	黒曜石	12.4	11.8	1.8	0.3		
50	極小剝片	黒曜石	4.1	1.4	0.8	0.1未満		
51	極小剝片	黒曜石	5.9	3.2	0.9	0.1未満		
52	極小剝片	黒曜石	6.7	4.5	1.2	0.1未満		
53	極小剝片	黒曜石	7.4	6.5	0.9	0.1未満		
54	極小剝片	黒曜石	5.1	3.7	0.7	0.1未満		
55	極小剝片	黒曜石	6.3	3.9	0.8	0.1未満		
56	極小剝片	黒曜石	12.2	5.8	2.2	0.2		
57	極小剝片	黒曜石	7.9	3.5	0.8	0.1未満		
58	極小剝片	黒曜石	10.0	3.6	1.5	0.1未満		
59	縦長不整形剝片	黒曜石	28.0	14.0	6.6	2.6	8	
60	極小剝片	黒曜石	9.0	9.3	2.4	0.2		
61	縦長不整形剝片	黒曜石	22.7	5.9	2.1	0.3		
62	極小剝片	黒曜石	6.2	3.0	1.3	0.1未満		
64	極小剝片	黒曜石	8.2	4.1	2.2	0.1未満		
65	縦長不整形剝片	黒曜石	26.0	18.8	4.4	1.9	9	
66	極小剝片	黒曜石	8.3	6.2	2.1	0.1未満		
67	極小剝片	黒曜石	10.7	10.1	1.8	0.2		

2．B地点

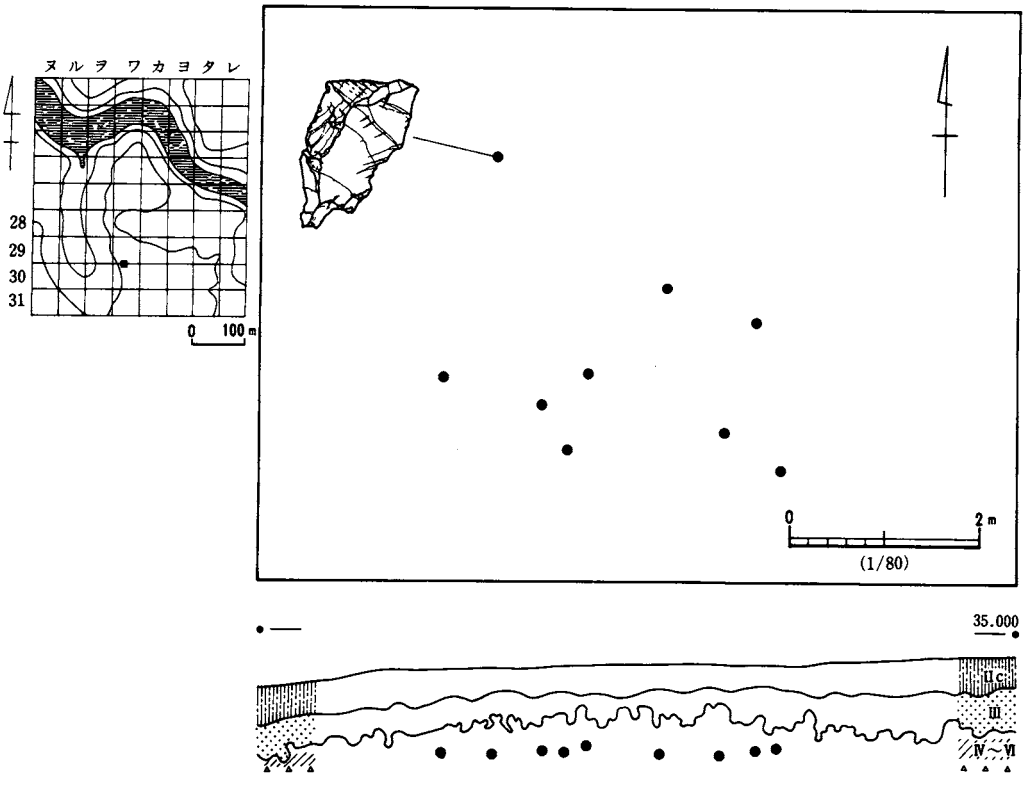
縄文時代以降の遺構及び先土器時代試掘調査によって、6つの地点で先土器時代の遺物が得られたが、本調査の結果ある程度の遺物の集中が認められたのは、そのうちの2地点であった。ただし、カ31－05グリッド周辺では、3点の頁岩製の剝片が近接して出土し、一帯にかつて先土器時代の包含層が存在したであろうことを予想させる。

検出された2個所の石器集中は、ワ29からワ30にまたがるものと、カ31のものとであり、便宜的に、前者を第1ユニット、後者を第2ユニットとして、以下、記述する。第1ユニットは発掘区域の西端にあり、北側から弯入する谷にのぞむ緩やかな台地の斜面部に位置し、第2ユニットは、第1ユニットよりも南側の同じ台地の平坦部に位置する（別図2）。

第1ユニット（Cブロック）（第96図・第98図2、第25表、図版42・51）

遺物の出土層位・分布状況

Ⅵ層の上面あるいはⅤ層の下位で出土している。垂直分布の上下の幅はせまい。



第96図　B地点第1ユニット石器出土状況（012-Cブロック）

約4.5m×2.5mの広がりの中に特に疎密の差もなく散在して出土している。

石器組成・石質

すべて剝片で、合計9点である。砕片に近いものが多い。

石質は、チャート7点、玄武岩・砂岩各1点である。チャートは1種類でなく、6種の異なった母岩が認められる。

遺　物

図示した第98図の2の剝片は、出土した剝片中で最大のものである。大きく打面を残し、背面と腹面とで剝離の方向が上・下逆になっている。また、打面は2面の剝離面から構成され、その2面も、打面調整というよりも、むしろ旧剝離面であった公算が強い。

第25表　B地点第1ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
ワ29−23−1	剝片	玄武岩	23.0	31.0	8.0	6.2		完形
2	剝片	砂岩	18.7	13.9	6.5	1.8		完形
4	剝片	チャートa	13.0	7.5	4.8	6.4	2	尾部、破砕片

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
5	剥片	チャートb	8.0	5.7	3.2	0.2		尾部、破砕片
6	剥片	チャートc	14.6	15.3	1.7	0.3		完形
ワ30－3－1	剥片	チャートa	12.2	6.5	2.2	0.3		完形
2	剥片	チャートd	21.6	11.6	7.8	1.5		完形
3	剥片	チャートe	20.7	20.8	6.3	1.5		完形
4	剥片	チャートf	39.4	25.0	9.0	0.5		完形

第2ユニット（Aブロック）（第97図・第98図3、第26表、図版42・51）

遺物の出土層位・分布状況

III層上部からV層下部のあいだで出土しているが、IV層と推定された波状帯のあたりに集中しているようにみえる。第1ユニットよりも出土層位は上である。

離れて出土した1点を除いて、残りはN－S2.5m、E－W3.5mの広がりの中に22点が集中して出土している。

石器組成・石質

ナイフ形石器尖頭部破片1点、剥片22点の合計23点である。

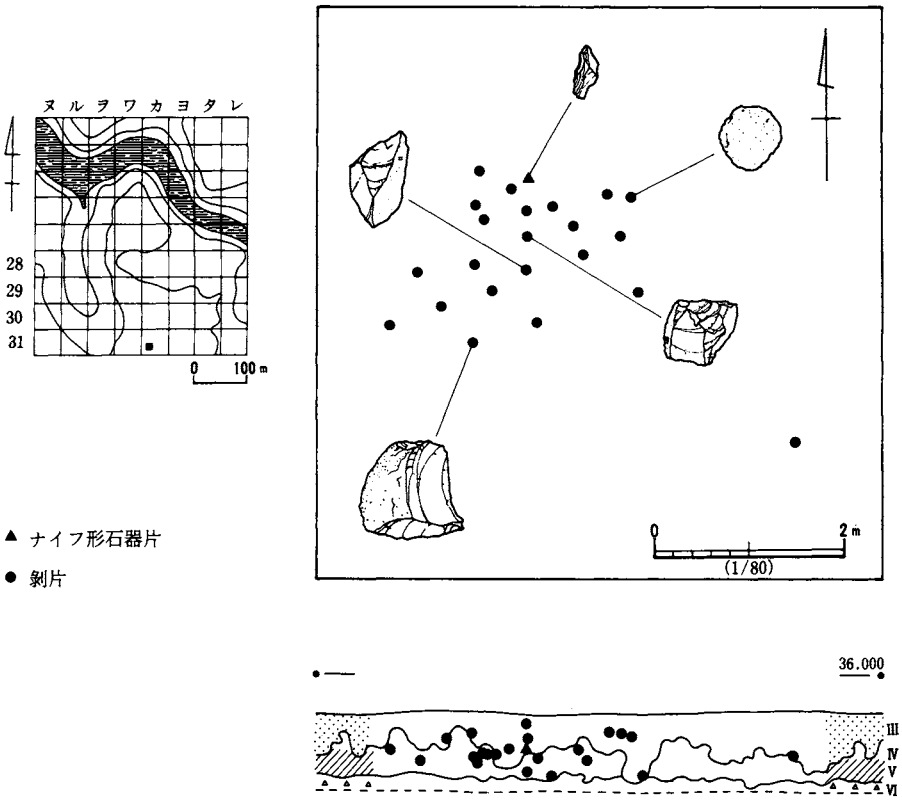
石質は全て玄武岩である。同一母岩か。

遺　物

3のナイフ形石器の尖頭部破片は、小破片である。剥片の大半は、幅広の不整形のもので、石核から目的的に剥離されたものとは認め難い。そんな中で、図示した6と7の2点は形状の最も整ったものである。ナイフ形石器と22点の剥片が全て玄武岩製であり、同一母岩からのものかと思われることから、このユニットは、石器製作址と考えられる。

第26表　B地点第2ユニット石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
カ31－11－1	剥片	玄武岩	25.7	27.9	9.8	5.8	4	完形
2	剥片	玄武岩	12.1	24.2	4.0	1.1		完形
3	剥片	玄武岩	9.2	12.2	4.8	0.5		完形
4	剥片	玄武岩	9.0	16.7	3.7	0.3		完形
5	剥片	玄武岩	6.6	11.6	2.1	0.1		完形
6	剥片	玄武岩	16.6	5.9	4.1	0.4		完形
7	剥片	玄武岩	10.9	14.1	3.4	0.7		完形
8	剥片	玄武岩	6.2	25.9	6.6	2.3		完形
9	剥片	玄武岩	6.2	10.3	3.0	0.1		尾部
カ31－12－1	剥片	玄武岩	9.0	9.6	3.3	0.3		完形
2	ナイフ形石器	玄武岩	16.1	8.3	6.8	0.5	3	尖頭部

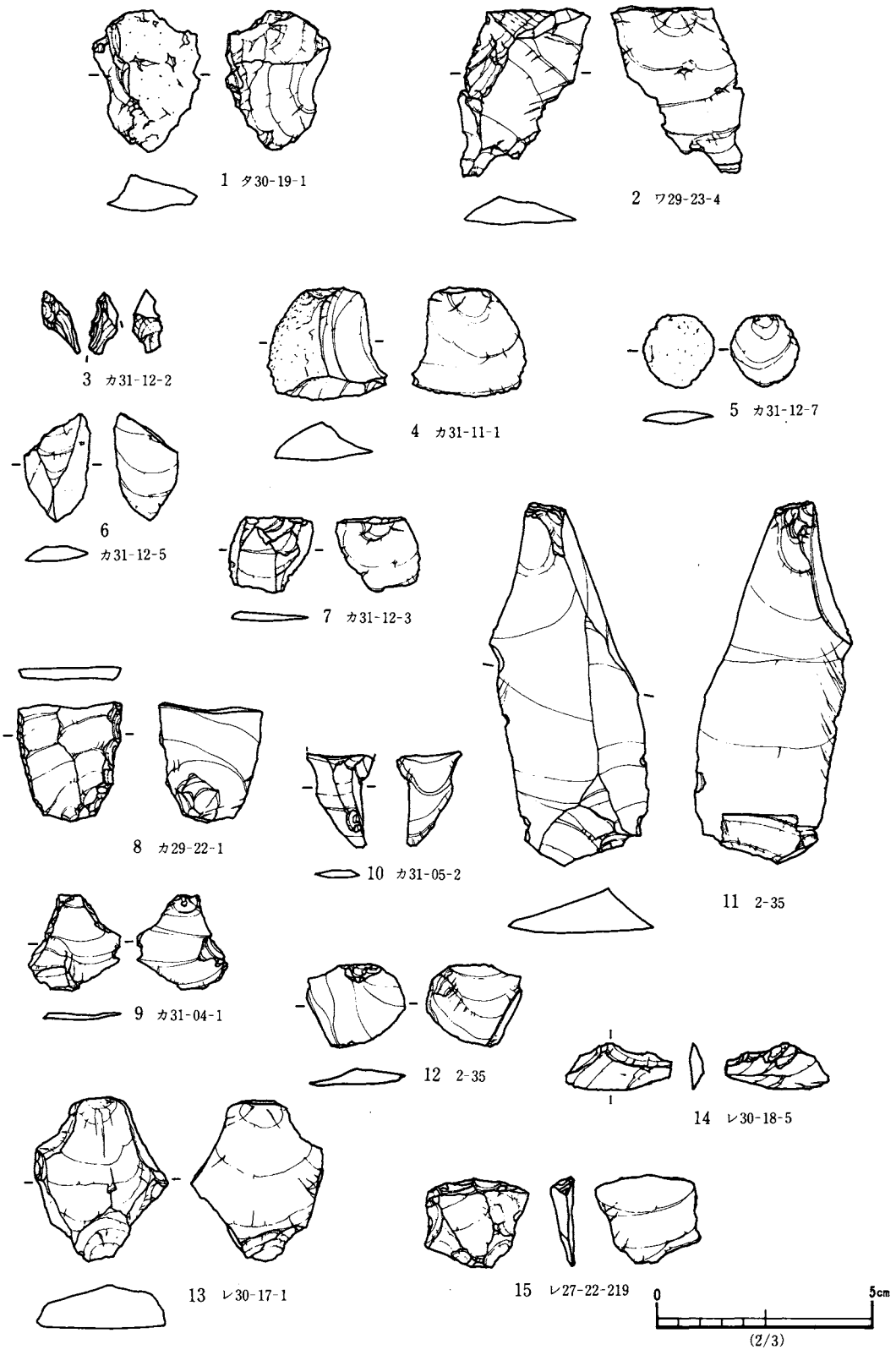


第97図　B地点第2ユニット石器出土状況（012-Aブロック）

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
3	剥片	玄武岩	18.0	18.9	3.0	1.0	7	完形
5	剥片	玄武岩	17.3	19.8	4.9	1.6	6	尾部
6	剥片	玄武岩	15.1	22.6	3.3	0.8		完形
7	剥片	玄武岩	16.7	16.6	3.4	1.0	5	完形
9	剥片	玄武岩	17.9	13.2	3.0	0.4		完形
11	剥片	玄武岩	10.3	5.6	2.1	0.1		完形
12	剥片	玄武岩	12.4	16.2	3.3	0.6		完形
13	剥片	玄武岩	9.6	8.1	2.7	0.1		完形
15	剥片	玄武岩	13.2	21.9	4.5	1.3		完形
16	剥片	玄武岩	10.4	10.6	5.6	0.4		完形
17	剥片	玄武岩	9.9	10.0	4.7	0.3		完形
18	剥片	玄武岩	5.3	5.9	1.2	0.1		完形

その他の先土器時代石器（第98図1・8～15、第27表、図版51）

上記の2つのユニット以外の地点で得られた石器類のうち、先土器時代のものと考えられるも



第98図　B地点先土器時代出土石器

のが17点ある。そのうちの代表的なもの9点を示す。

1はメノウ製の剝片、背面は原礫面がのこる。8はナイフ形石器の基部の破片。基部に打面がのこされ、両側縁にブランティングが施されている。頁岩製。9・10は母岩が同じと思われる頁岩製の剝片。9はおそらく石核調整段階の副産物。10はいわゆる折断剝片の尾部。11・12は、別の母岩からのものであるが、ともに頁岩製の剝片で、9・10の出土地点と近接した溝の覆土中から得られた。11の剝片の石核は両設型であり、12は9と同じ種類のものであろう。13・14は、別の母岩からのものであるが、ともに玄武岩製である。13は石核の打面再生に伴うものであろう。14はポイントフレークのようにもみえる。15はチャート製の側削器であるが、これは縄文時代のものかもしれない。

第27表　B地点ユニット外出土先土器時代石器観察表

遺物番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	挿図	備考
カ29−22−1	ナイフ形石器	頁岩	28.3	24.1	6.4	4.1	8	基部
カ31−04−1	剝片	頁岩	22.6	21.7	2.4	1.1	9	完形
カ31−05−2	剝片	頁岩	21.7	15.5	2.2	0.7	10	尾部
タ30−19−1	剝片	メノウ	33.6	25.8	9.7	6.9	1	完形
レ27−22−219	側削器	チャート	20.7	24.6	5.7	3.1	15	完形
レ30−17−1	剝片	玄武岩	37.7	31.0	10.2	11.7	13	完形
レ30−18−5	剝片	玄武岩	11.1	24.8	3.2	0.9	14	完形
2−35	剝片	頁岩	83.0	32.1	9.8	27.8	11	完形
2−35	剝片	頁岩	19.9	23.6	4.0	1.6	12	完形

第3節　縄文時代

縄文時代については、遺構は検出されなかった。しかし、土器・石器・土製品の遺物は少なからず出土した。

土　器（第99〜114図、第28表、図版40・52〜63）

A・B地点を分けていない。B地点のものは表の備考欄に記すので参照されたい。草創期から晩期まで、幅広い時期のものが出土している。以下のように大きく分類した上で、その中をさらに細かく分類して説明を加えたい。

第Ⅰ群……草創期後半の縄文、撚糸文の土器

第Ⅱ群……早期前葉の沈線文土器

第Ⅲ群……早期後葉の条痕文土器

第Ⅳ群……前期前葉の繊維土器

第Ⅴ群……前期後葉の諸磯式系土器

第Ⅵ群……前期後葉の浮島式系土器

第Ⅶ群……前期末葉の結節縄文土器

第Ⅷ群……中期初頭の土器

第Ⅸ群……中期前葉の阿玉台式土器

第Ⅹ群……中期中葉の土器

第ⅩⅠ群……中期後葉の加曽利Ｅ式土器

第ⅩⅡ群……後期中葉の加曽利Ｂ式土器

第ⅩⅢ群……後期後葉・晩期の安行式土器

第ⅩⅣ群……晩期の姥山式土器

第ⅩⅤ群……晩期後半の土器

第Ⅰ群（第99図１～14図、図版52）

文様のちがいによって４類に細別できる。

１類　口唇部と胴部の縄文帯の間に無文帯を設けるもの　(1)

２類　口唇部から胴部に無文帯を設けないで縄文を施文するもの　（２～５）

３類　撚糸文のもの　（10～13）

４類　縄文原体を横位に回転するもの　(14)

６～９は２類のものと思われる胴部破片である。

１類は井草２式と思われる。

２類は、口唇部に縄文のつくもの（２～４）と、口唇部に無文帯があるもの(5)に、さらに分かれる。３類は、密接絡条体の原体でないもの（10・11）と、そうであるもの（12・13）にさらに分かれる。

第Ⅱ群（第99図15～27、第100図28～39、図版52・53）

文様のちがいによって５類に細別できる。

１類　沈線だけのもの（17～23）

２類　沈線＋刺突のもの（15）

３類　沈線＋貝殻腹縁による刺突のもの（16・24～32）

４類　沈線＋刻目細隆起線のもの（33）

５類　貝殻条痕文のもの（34）

35～39が底部である。

１類は、細沈線のもの（17・20～24）と太沈線のもの（18～19）にさらに分かれる。22は、直線の沈線の間の波状の沈線と刻目の２つがあることから、４類の器体の一部が１類であるのかもしれない。22は、また、下から２本目の細沈線が、細かい鋸歯形の波状線であり、貝殻腹縁による刺突に大変似ている。

第Ⅲ群（第100図40、図版53）

茅山式と思われる破片である。

第Ⅳ群（第100図・第101図54～56、図版53・54）

文様のちがいによって5類に細別できる。

1類　縄文のもの　（41～50）

2類　沈線を縦横に走らせるもの　（51・52）

3類　櫛歯文のもの　（53）

4類　貝殻殻表圧痕文のもの　（54）

5類　押引文のもの　（55・56）

いずれも黒浜式のものと思われる。1類には、粗い縄文のも（41・43・45・46・48・50）と細かい縄文のもの（42・44・47・49）とがみられる。43は組紐、50は付加条の縄文である。2類の51は幅の広い半截竹管文によるものらしい。52は、ＲＬと思われる縄文の地の上に半截竹管文がつけられている。3類の53は、櫛歯の条数は5本前後であろう。横走する。4類の54は、文様の1単位が不明瞭である。5類の文様構成は、前期後半の土器につながるものである。56では、円形の刺突は、押引文、沈線文のひかれた上に、つけられている。

第Ⅴ群（第101図57～61・第102図・第103図70、図版54～55）

文様のちがいによって5類に細別できる。

1類　爪形文＋沈線のもの　（57～63）

2類　爪形文＋半截竹管刺突のもの　（64～67）

3類　半截竹管文のもの　（68）

4類　櫛歯文＋半截竹管刺突のもの　（69）

5類　縄文のもの　（70）

1類の57は、縄文の地文の上に、半截竹管による沈線と刺突をつける。58は、上部は櫛歯文のように半截竹管文を密集させ、下部は縄文にしている。59は、上から2・3段目の爪形文は、つけたあとナデられている。3段目の下に斜行の爪形文がついている。60の櫛歯文は、4条前後と思われる。61は2条の爪形文の間に半截竹管文と円形刺突をつけたものである。62は、縄文が全面につけられているが、口唇部の3条の爪形文と胴部中位の広がりがきつくなるあたりの3条の半截帯を画する沈線のところは、縄文がない。63も、62と同じように、上の爪形文と下の半截竹管による沈線で文様帯が画され、その中に櫛歯文がやや不規則な波状に曳かれているのであろう。

2類は爪形文の間のやや高まったところ半截竹管による刺突がついている。3類の68は、波状口縁である。左の破片の尖ったところは頭が欠けている。4類の69の櫛歯文は左上→右下のあと右上→左下に斜めにひかれている。5類の70の縄文は弱いものである。

58～63は諸磯ａ式、64～68は同ｂ式、69は同ｃ式にあたろう。

第Ⅵ群（第103図71～97、第104図、第105図122～135、図版55～57）

文様のちがいから７類に細別できる。

１類　撚糸文＋半截竹管文のもの　（71）

２類　爪形文のもの　（72・125）

３類　沈線文のもの　（73～91）

４類　櫛歯文のもの　（92～103）

５類　貝殻腹縁の揺り曳きのもの　（104～124）

６類　三角文のもの　（126～132）

７類　磨消貝殻文のもの　（133～135）

１類・２類については特に記すことはない。３類は、半截竹管による沈線のものが多いようで、確実なものが、76・77・79・84・85・91と８例ある。76の沈線は、半截竹管によらないものも少なくない。82は、上部の無文のところに赤彩がされている。４類の櫛歯文は、蛇行あるいはきつい斜行のものが目立つ。92・94・95の口唇下には輪積痕をのこす。98の下部の無文のところは、ケズリの痕が、ナデで消されているものの、かなりのこっている。また、98の口唇部の縦の短沈線の下端を切って、半截竹管によるものではない２条の沈線が走る。

５類の104は、上・下２列に揺り曳かれている。106は、上・下２列にやや不規則になされた半截竹管の刺突列に重なるように貝殻が揺り曳かれているらしい。両者の施文の前後関係は、はっきりしない。また、貝殻の揺り曳きは、左半分でおわっている。その下にさらに１列の貝殻腹縁の揺り曳きがある。107は、右半分では、はっきりと輪積痕がのこる。揺り曳きは上・下２列ある。110は、揺り曳きではなく、貝殻の腹縁の刺突によると思われる。122～124の口縁は、自身には貝殻腹縁による揺り曳きはみられないが、揺り曳きの文様のついた土器の口唇部としてみえる類であることから、５類に含めた。123は口径15cm前後と小形である。

６類・７類については特に記すことはない。

第Ⅶ群（第105図136～141、図版57）

文様のちがいによって２類に細別できる。

１類　結節縄文＋縄文原体の押捺のもの　（136）

２類　結節縄文のもの　（137～141）

１類の136は、結節縄文の圧痕を消すように、口唇部に３条の縄文原体の押捺痕をつける。２類の137は、結節縄文を縦横に転がしている。

第Ⅷ群（第105図142～145、図版57）

細片ばかりである。142は刻目隆帯と縄文である。143は、隆帯の上・下を太めの半截竹管による沈線が走り、下部は縄文である。143・144は胎土中に金雲母が混じる。145は、真ん中の三角形の隆帯の上・下・左右に結節沈線が走る。

第Ⅸ群（第105図146～157、第106図、図版57）

146～154・157・158は隆帯に沿って1列の角押文がつくものである。155は無文の波状口縁波頂部、156は鋸歯状に垂下する隆帯がつく。158には、ヒダ状文もみえる。146～158は阿玉台Ⅰb式であろう。

159・160は、複列結節沈線のもので、160は、隆帯に沿ってつく。159・160とも、沈線をつけたあとにナデていて、沈線が一部つぶされている。159・160とも阿玉台Ⅱ式であろう。

161は、角押文と同じく半截竹管の外側を押しあてた複列の押引文と思われる。押しの間隔がせまい。162は、太めの隆帯に幅広の角押文がつく。161・162は阿玉台Ⅲ式であろう。

第X群（第106図164、図版57）

164は、胴部の大きく外反する部分で、縄文の地に、上部に波状の太沈線が、胴の大きくひらくところに3条前後の太沈線がつく。

第XI群（第107図・第108図187～198、図版58・59）

加曽利E式の前半（Ⅱ式）のもの（165～178）と後半（Ⅲ・Ⅳ式）のもの（179～194）に細別できる。170は、あるいはⅠ式ではと思われるものである。のこる前半のものはⅡ式であろう。171は、ひどく口唇部の隆帯が剝がれている。本来は、隆帯の下に刺突列がつく。後半のものの口縁の破片は、いずれもⅣ式であろう。179～181はゆるい波状口縁の波頂部であり、182・183は、波頂部の裾である。179は、ハの字形に隆帯がある。183は、隆帯というより太沈線とすべきとも思われる。184は、無文帯との境の縄文が消されている

187・189～191の胴部破片はⅢ式のものであろう。195～198は、加曽利E式の中の異なった種類の縄文を集めた。

第XII群（第108図199～208、第109～111図、第112図267～283、図版59～62）

精製のもの（199～231）、粗製のもの（232～283）の順で示す。

精製のものは、文様のちがいによって3類に細別できる。

1類　平行沈線＋縄文のもの　（199～207）

2類　斜行沈線のもの　（208～214）

3類　弧状縄文のもの　（215～231）

1類の199は、上段の隆帯は刻目である。201は、沈線だけである。1類は加曽利BⅠ式であろう。2類の209は、浅鉢のものである。210の突起は、粘土紐を逆U字形にして口唇をまたぐように貼付けている。2類はBⅡ式であろう。3類の216は刻目と無文、228は半截竹管の外側による刺突列だけであるが、関連性から3類に含めた。230は右隅に縄文がつく。3類はBⅢ式であろう。

粗製のものも、文様のちがいによって6類に細別できる。

1類　無文で段のつくもの　（232）

2類　無文帯、刻目隆帯で、その下に縄文で、沈線が縄文の上に走るもの　（233）

3類　口唇から縄文がつくもの　（234～241）

4類　口唇に指頭による刻目隆帯、以下に縄文のもの　(242・243・245・246)

5類　口唇に指頭による刻目隆帯、以下に縄文をつけ、沈線をその上に走らせるもの　(244・247～254)

6類　口唇から斜格子状の沈線のつくもの　(253・254)

257～266は3・4類の、267～281は5類の、282・283は6類の胴部破片と思われる。

1類の232は浅鉢で、段から下のナデは、ヘラによるもので、ケズリに近い。2類は、4類の中に含めるべきかとも思われる。5類の248は、波状口縁と思われる。

第XIII群（第112図284～290・第113図・第114図314、図版62～63）

精製土器はわずかで、284～293である。284は、安行Ⅰ式であろう。285～290はII式であろう。289は縄文隆帯の下に斜行沈線291はⅠ式、292はIIIａ式、293はIIIｃ式と思われる。

粗製土器もわずかで、294～314である。口唇に紐線文のつくものが多いが、314のようにつかないものもある。斜行条線による文様帯を縦に画する沈線のあるものは、312・313である。いずれもII式ないしIIIａ式のものであろう。

第XIV群（第114図315～322、図版63）

精製土器ばかりである。315～319・320・322は枠状文で、318の口唇の縄文は隆帯上である。319には縄文がつかない。321は、内面の横位ナデの痕からすると、波状口縁の破片かとも思われる。322は内外面ナデ成形であるが、内面が入念であるのに対して、外面はヘラナデで、砂の動いた痕が目立つ。枠状文のものは、姥山II式であろう。

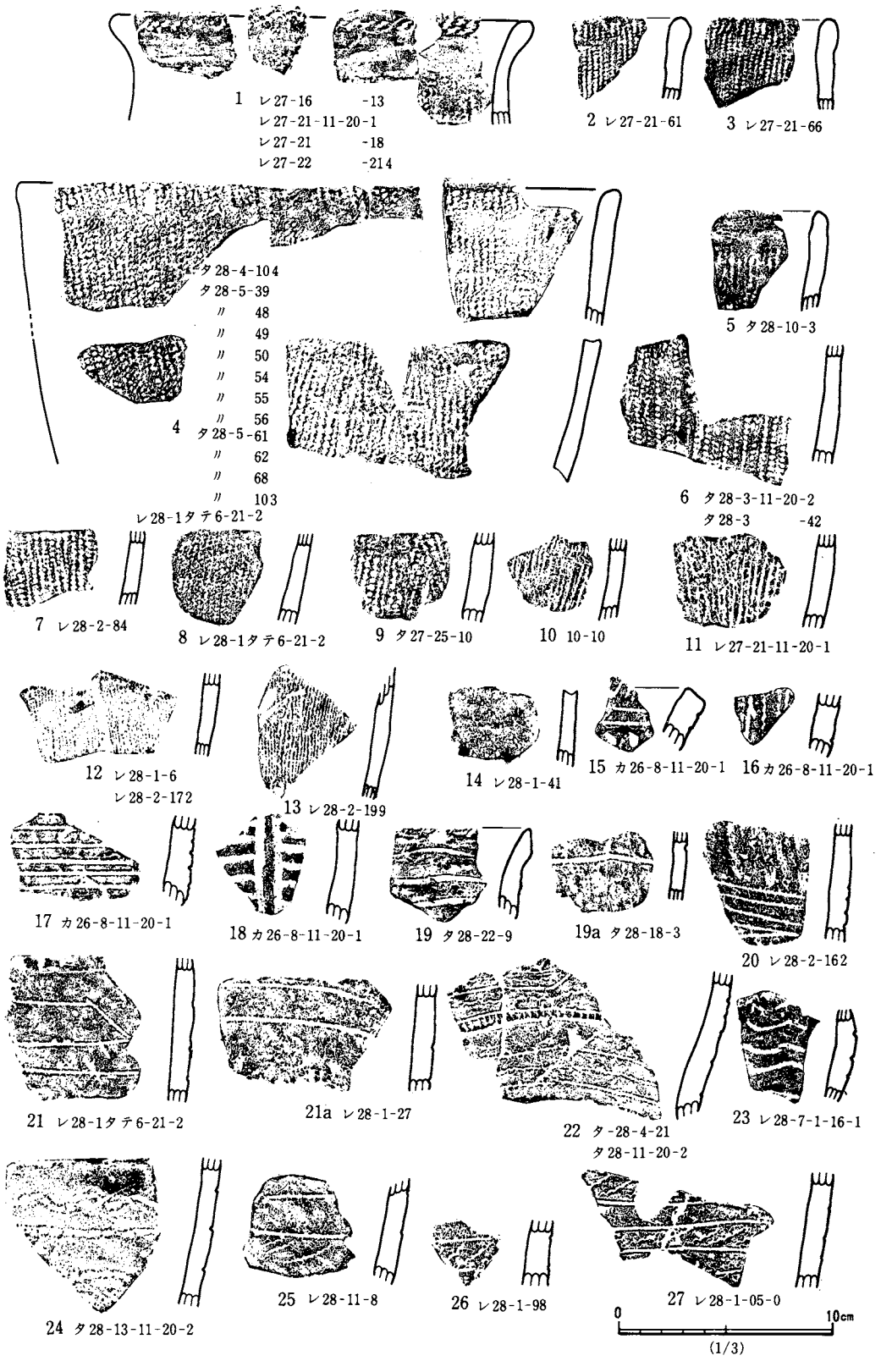
第XV群（第114図323～331、図版63）

粗製土器ばかりである。323～328は撚糸文、329・330は条痕文、331は縄文である。330は底部に近い。331は縄文をつけた後で磨消しているようである。左から右に2条の細沈線が走るが、文様といえないかもしれない。

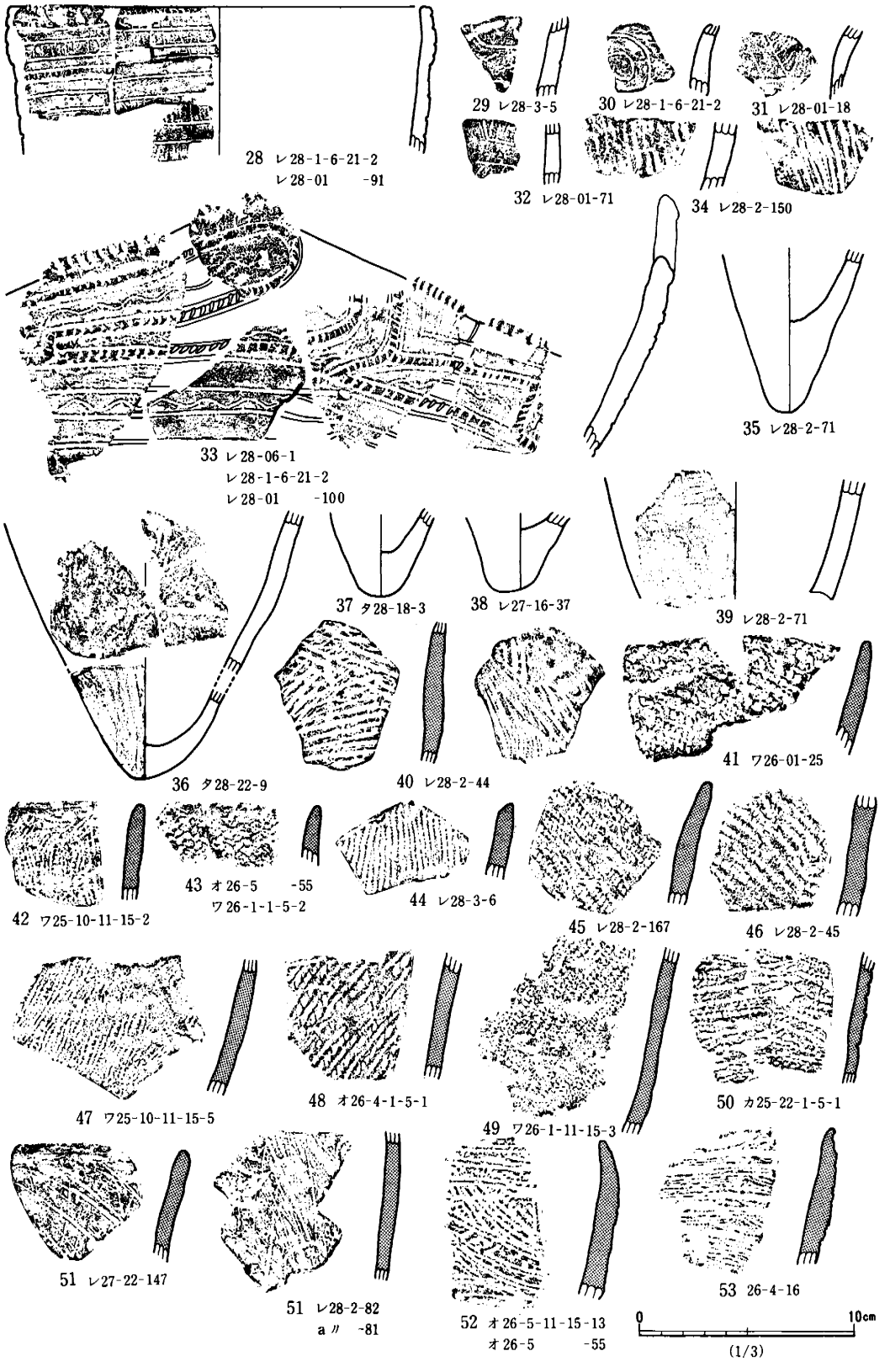
第28表　縄文土器観察表

備考欄に木戸場Ｂとあるもの以外は木戸場遺跡Ａ地点出土。
胎土の0、+、－は普通、多、少を焼成の0、+、－は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎　土	焼成	色　調	せいけい	施　文	備　考
1	細砂粒－	+	赤　褐　色	口縁部内・外面入念なヨコナデ、内面は荒いナデ	口唇部一胴部ＬＲ同一原体	
2	細砂粒0	+	暗　赤　色	口唇部ヨコナデ	ＲＬ	
3	細砂粒0	+	暗　赤　色	口唇部内面ヨコナデ	ＲＬ	
4	細砂粒－	0	暗　褐　色	口唇部～内面ナデ	ＲＬ反時計廻りに斜位に回転	
5	微細砂－	－	黄　褐　色	口唇部ヨコナデ	口唇部無文、ＲＬ	
6	細砂粒0	+	暗　赤　色	外面ナデ→縄文回転	ＬＲ	
7	細砂粒0	+	赤　褐　色	内面ナデ	ＲＬ	
8	細砂粒0	+	暗　赤　色	内面火バネ痕顕著のため不明	ＲＬ	
9	細砂粒0	0	明　褐　色	内面ナデ	ＲＬ	
10	細砂粒0	0	明　褐　色	？	Ｙ－Ｒ	
11	細砂粒＋	0	黄　褐　色	？	Ｙ－Ｒ	

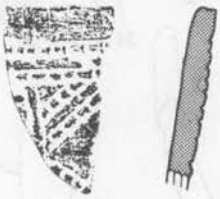

1 レ27-16 -13
レ27-21-11-20-1
レ27-21 -18
レ27-22 -214
2 レ27-21-61
3 レ27-21-66
タ28-4-104
タ28-5-39
〃 48
〃 49
〃 50
〃 54
〃 55
〃 56
4 タ28-5-61
〃 62
〃 68
〃 103
レ28-1タテ6-21-2
5 タ28-10-3
6 タ28-3-11-20-2
タ28-3 -42
7 レ28-2-84
8 レ28-1タテ6-21-2
9 タ27-25-10
10 10-10
11 レ27-21-11-20-1
12 レ28-1-6
レ28-2-172
13 レ28-2-199
14 レ28-1-41
15 カ26-8-11-20-1
16 カ26-8-11-20-1
17 カ26-8-11-20-1
18 カ26-8-11-20-1
19 タ28-22-9
19a タ28-18-3
20 レ28-2-162
21 レ28-1タテ6-21-2
21a レ28-1-27
22 タ-28-4-21
タ28-11-20-2
23 レ28-7-1-16-1
24 タ28-13-11-20-2
25 レ28-11-8
26 レ28-1-98
27 レ28-1-05-0
0
10cm
(1/3)

第99図　縄文土器 (1)

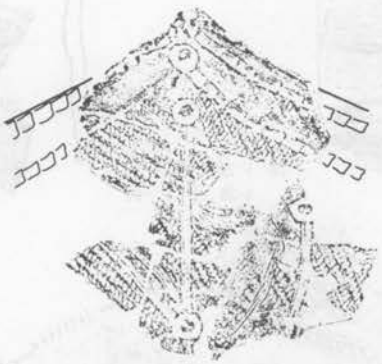

28 レ28-1-6-21-2
レ28-01 -91
29 レ28-3-5
30 レ28-1-6-21-2
31 レ28-01-18
32 レ28-01-71
34 レ28-2-150
33 レ28-06-1
レ28-1-6-21-2
レ28-01 -100
35 レ28-2-71
37 タ28-18-3
38 レ27-16-37
39 レ28-2-71
36 タ28-22-9
40 レ28-2-44
41 ワ26-01-25
42 ワ25-10-11-15-2
43 オ26-5 -55
ワ26-1-1-5-2
44 レ28-3-6
45 レ28-2-167
46 レ28-2-45
47 ワ25-10-11-15-5
48 オ26-4-1-5-1
49 ワ26-1-11-15-3
50 カ25-22-1-5-1
51 レ27-22-147
51 レ28-2-82
a〃 -81
52 オ26-5-11-15-13
オ26-5 -55
53 26-4-16
0
10cm
(1/3)

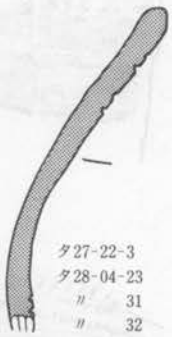
第100図　縄文土器 (2)

54 ヨ27-7-8
レ28-3-12

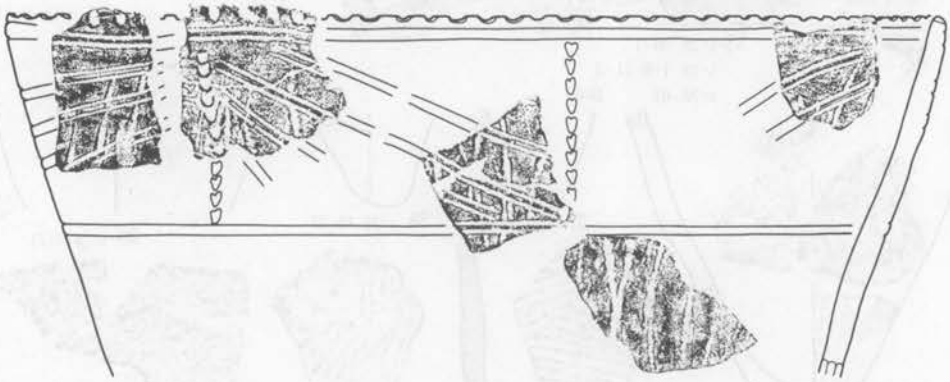


55 ワ28-19-1～5-1

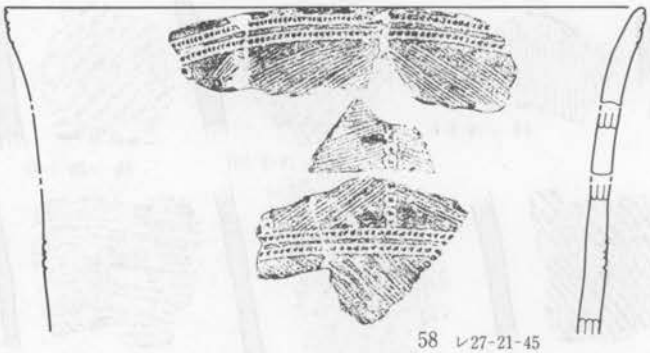




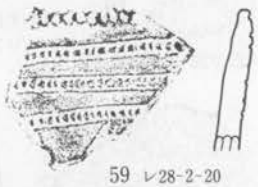
56 タ27-22-3
タ28-04-23
〃 31
〃 32
〃 33
〃 34
〃 40
〃 67
タ23-04-1～5-1



57 タ28-1 -64
タ28-4-1～20-3
タ28-5 -43
タ28-5-1～5 -2



58 レ27-21-45
レ27-22-84
〃 110
〃 125
〃 183
不明



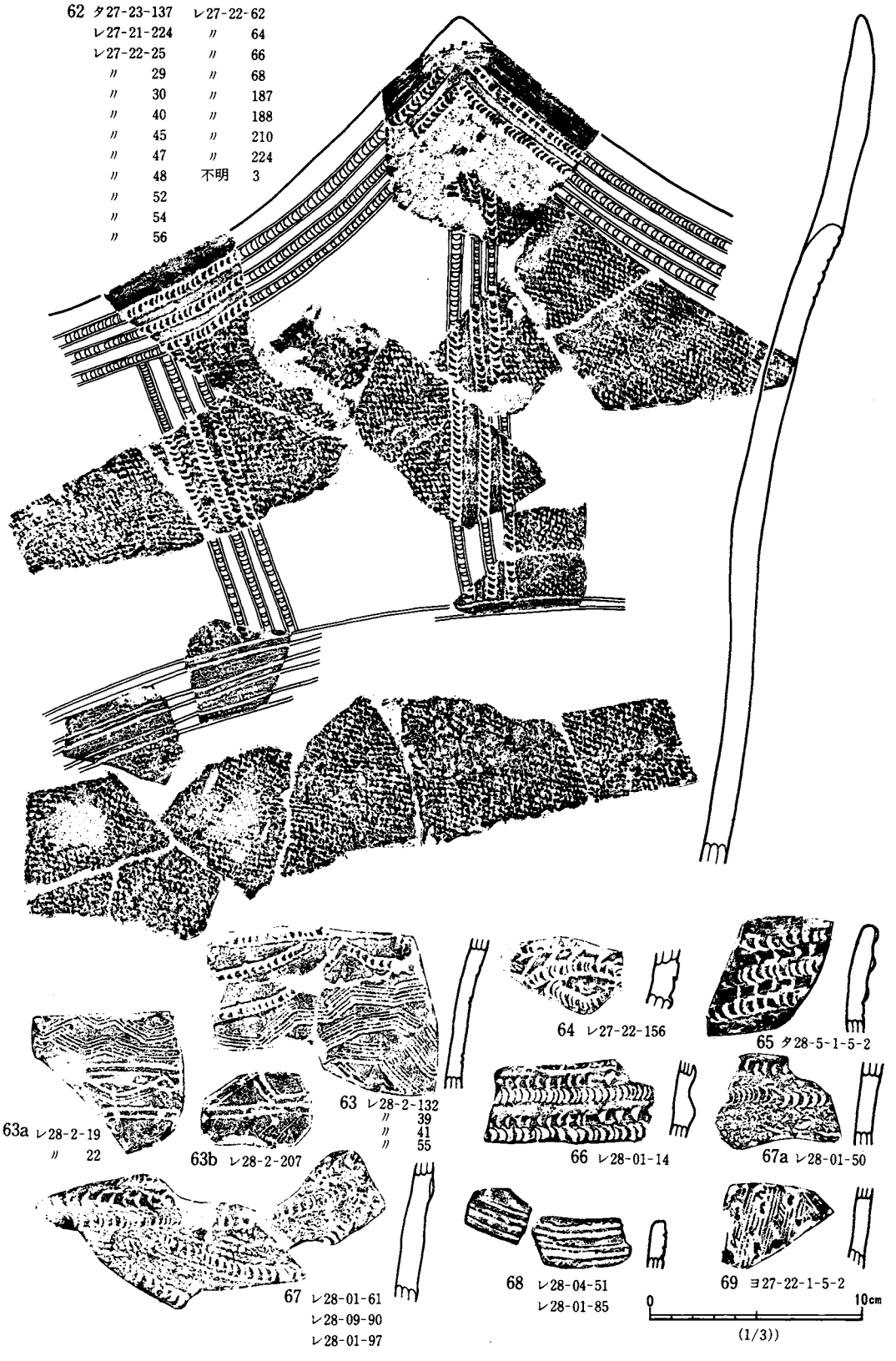
59 レ28-2-20

60 レ28-22-132
レ27-02-185

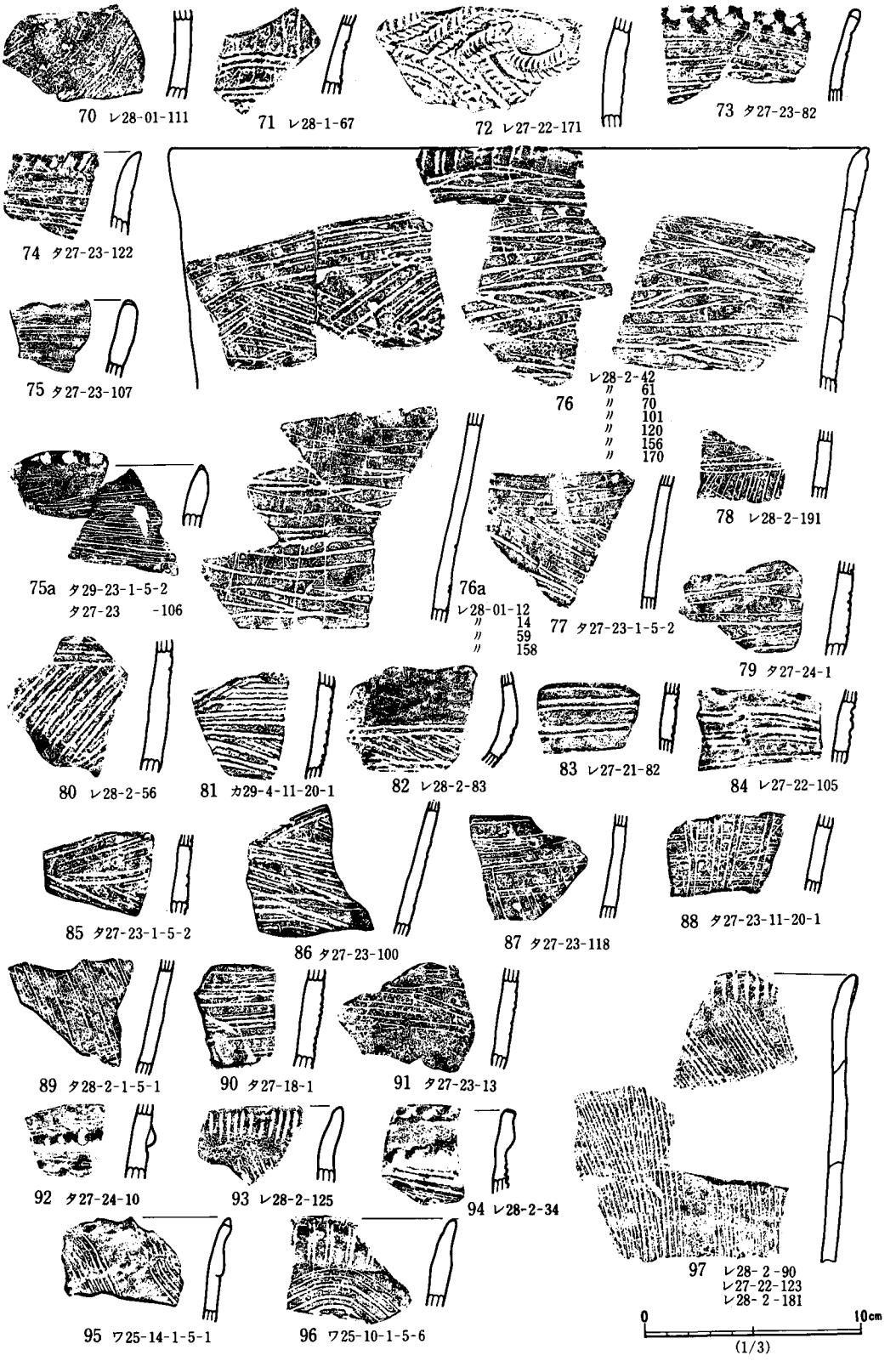
61 タ28-4-11～20-3
レ28-01 -90

(1/3)

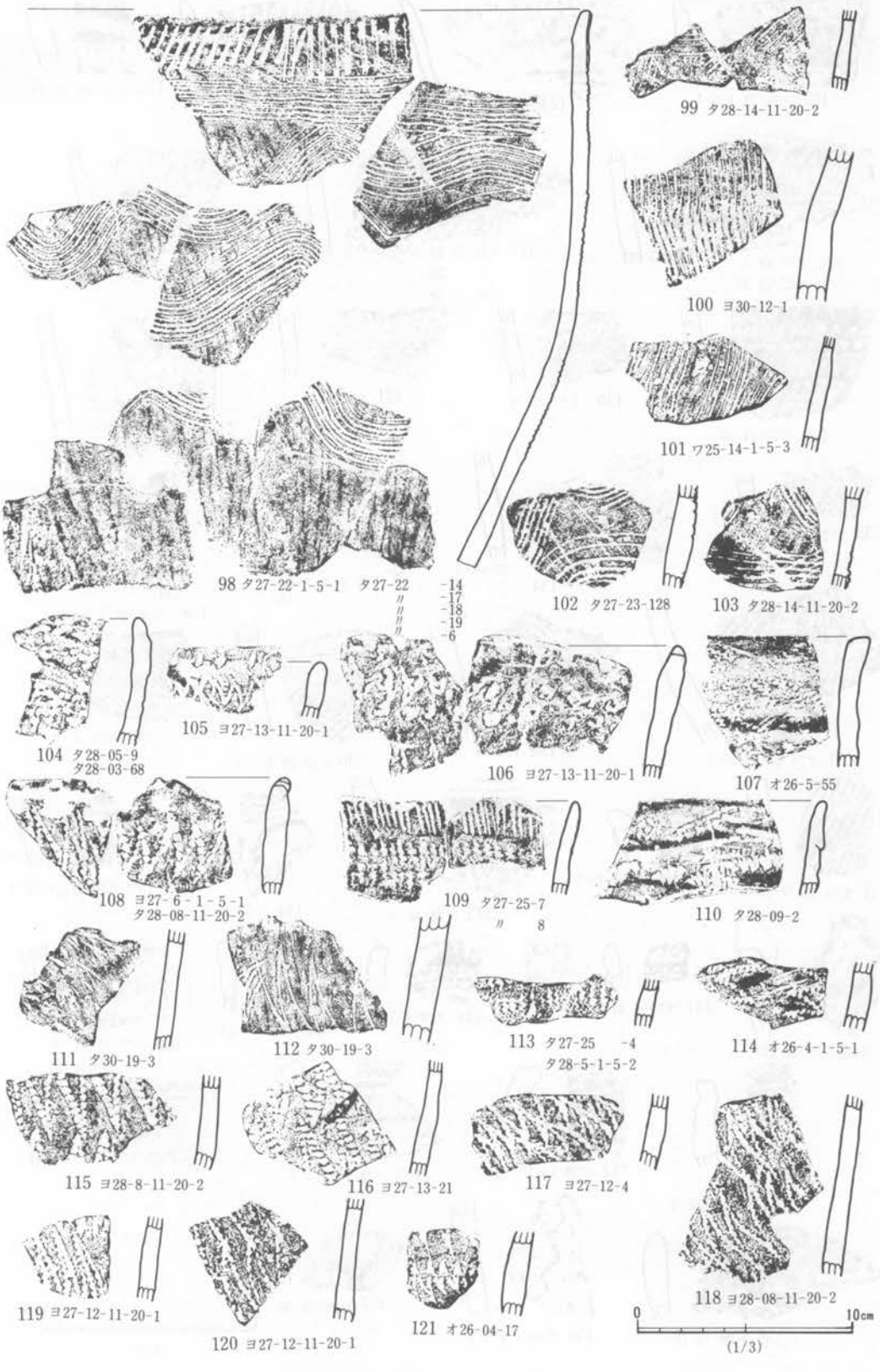
第101図　縄文土器 (3)


62 タ27-23-137
レ27-21-224
レ27-22-25
〃 29
〃 30
〃 40
〃 45
〃 47
〃 48
〃 52
〃 54
〃 56
レ27-22-62
〃 64
〃 66
〃 68
〃 187
〃 188
〃 210
〃 224
不明 3
63 レ28-2-132
〃 39
〃 41
〃 55
63a レ28-2-19
〃 22
63b レ28-2-207
64 レ27-22-156
65 タ28-5-1-5-2
66 レ28-01-14
67a レ28-01-50
67 レ28-01-61
レ28-09-90
レ28-01-97
68 レ28-04-51
レ28-01-85
69 ヨ27-22-1-5-2
0
10cm
(1/3))

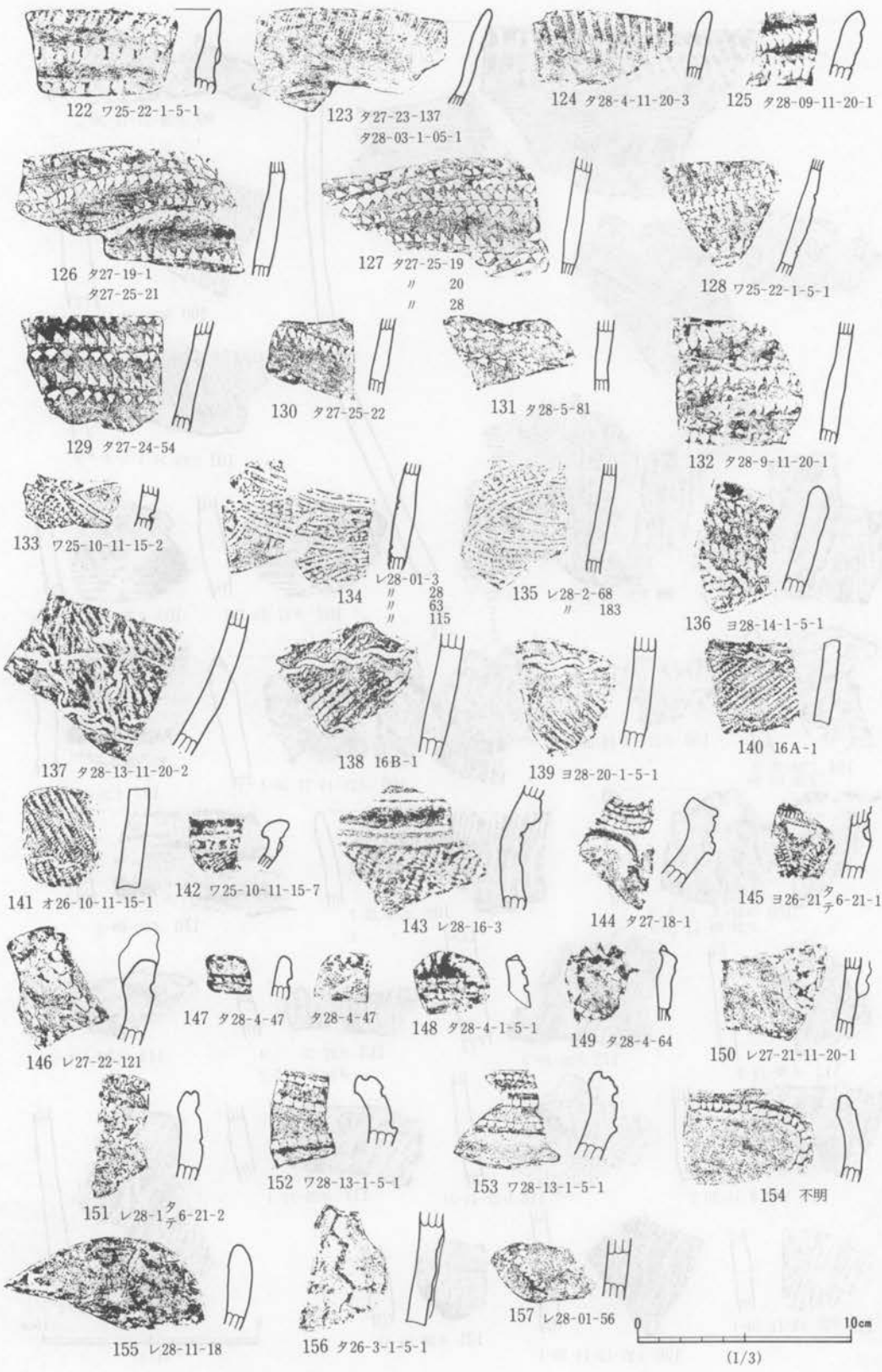
第102図　縄文土器 (4)


70 レ28-01-111
71 レ28-1-67
72 レ27-22-171
73 タ27-23-82
74 タ27-23-122
75 タ27-23-107
76 レ28-2-42
〃 61
〃 70
〃 101
〃 120
〃 156
〃 170
75a タ29-23-1-5-2
タ27-23 -106
76a レ28-01-12
〃 14
〃 59
〃 158
77 タ27-23-1-5-2
78 レ28-2-191
79 タ27-24-1
80 レ28-2-56
81 カ29-4-11-20-1
82 レ28-2-83
83 レ27-21-82
84 レ27-22-105
85 タ27-23-1-5-2
86 タ27-23-100
87 タ27-23-118
88 タ27-23-11-20-1
89 タ28-2-1-5-1
90 タ27-18-1
91 タ27-23-13
92 タ27-24-10
93 レ28-2-125
94 レ28-2-34
95 ワ25-14-1-5-1
96 ワ25-10-1-5-6
97 レ28-2-90
レ27-22-123
レ28-2-181
0
10cm
(1/3)

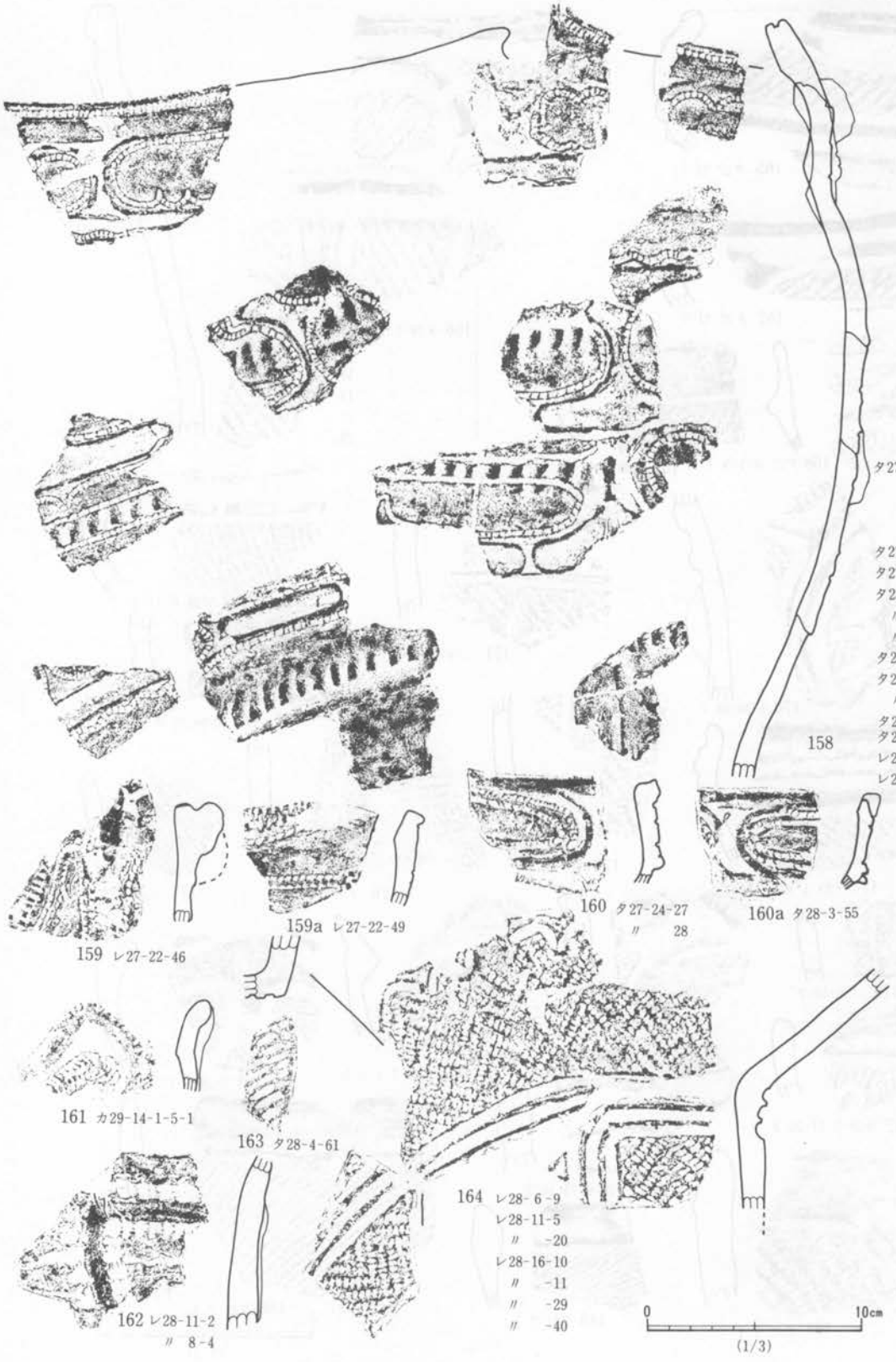
第103図　縄文土器 (5)


99 タ28-14-11-20-2
100 ヨ30-12-1
101 ワ25-14-1-5-3
98 タ27-22-1-5-1 タ27-22 -14 〃 -17 〃 -18 〃 -19 〃 -6
102 タ27-23-128
103 タ28-14-11-20-2
104 タ28-05-9 タ28-03-68
105 ヨ27-13-11-20-1
106 ヨ27-13-11-20-1
107 オ26-5-55
108 ヨ27-6-1-5-1 タ28-08-11-20-2
109 タ27-25-7 〃 8
110 タ28-09-2
111 タ30-19-3
112 タ30-19-3
113 タ27-25 -4 タ28-5-1-5-2
114 オ26-4-1-5-1
115 ヨ28-8-11-20-2
116 ヨ27-13-21
117 ヨ27-12-4
118 ヨ28-08-11-20-2
119 ヨ27-12-11-20-1
120 ヨ27-12-11-20-1
121 オ26-04-17
0 10cm
(1/3)

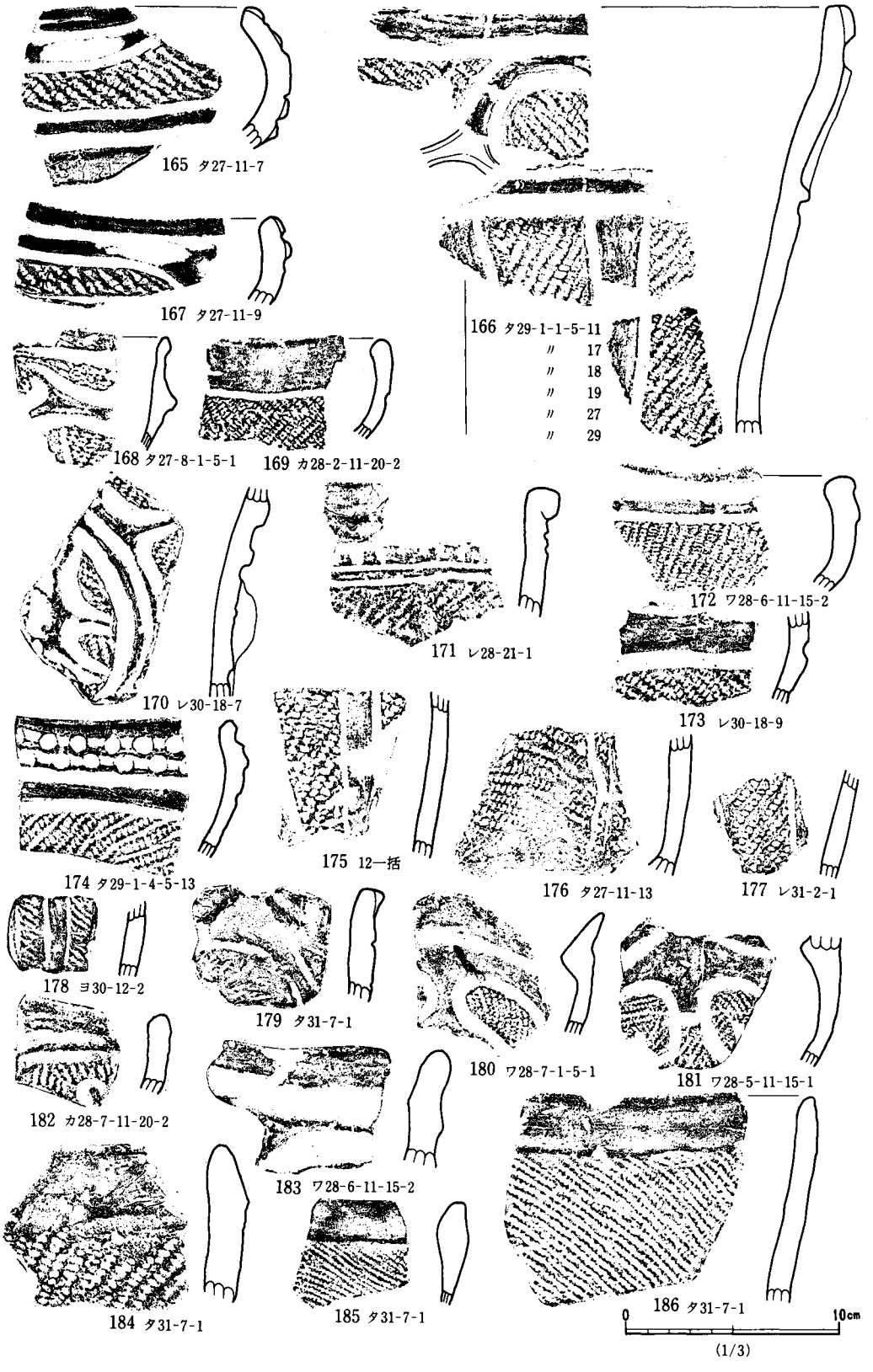
第104図　縄文土器 (6)


122 ワ25-22-1-5-1
123 タ27-23-137
タ28-03-1-05-1
124 タ28-4-11-20-3
125 タ28-09-11-20-1
126 タ27-19-1
タ27-25-21
127 タ27-25-19
〃 20
〃 28
128 ワ25-22-1-5-1
129 タ27-24-54
130 タ27-25-22
131 タ28-5-81
132 タ28-9-11-20-1
133 ワ25-10-11-15-2
134 レ28-01-3
〃 28
〃 63
〃 115
135 レ28-2-68
〃 183
136 ヨ28-14-1-5-1
137 タ28-13-11-20-2
138 16B-1
139 ヨ28-20-1-5-1
140 16A-1
141 オ26-10-11-15-1
142 ワ25-10-11-15-7
143 レ28-16-3
144 タ27-18-1
145 ヨ26-21タテ6-21-1
146 レ27-22-121
147 タ28-4-47
タ28-4-47
148 タ28-4-1-5-1
149 タ28-4-64
150 レ27-21-11-20-1
151 レ28-1タテ6-21-2
152 ワ28-13-1-5-1
153 ワ28-13-1-5-1
154 不明
155 レ28-11-18
156 タ26-3-1-5-1
157 レ28-01-56
0
10cm
(1/3)

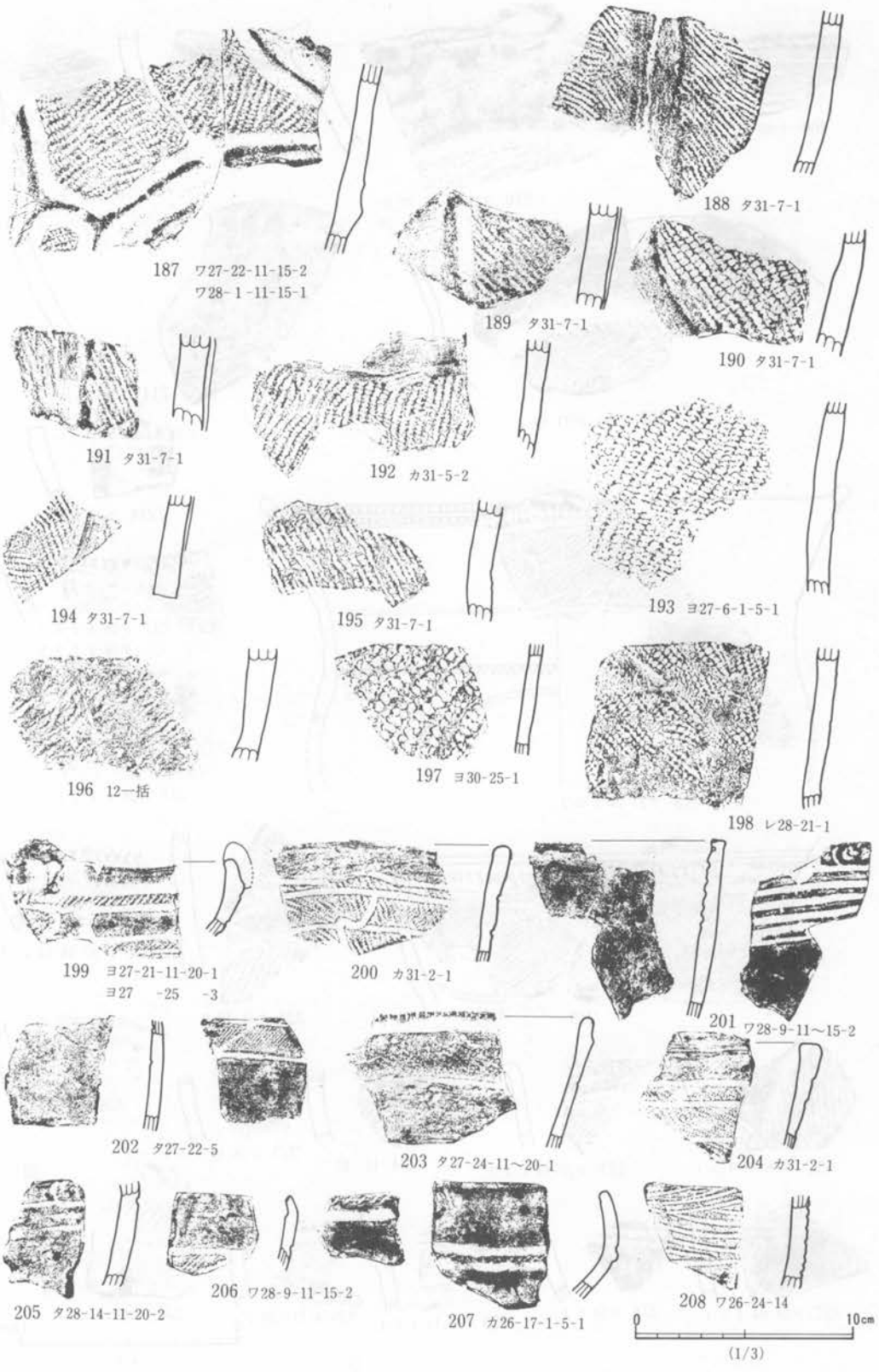
第105図　縄文土器 (7)


158
タ27 -24- 3
23
32
33
タ27-24-11～20-1
タ27 -25- 31
タ28 - 3 - 46
〃 50
〃 67
タ28- 3 - 1 ～ 5 -1
タ28 - 4 - 48
〃 52
タ28- 4 - 1 ～5 -1
タ28- 4 -11～20-2
レ27 -22- 33
レ28 -11- 9
159 レ27-22-46
159a レ27-22-49
160 タ27-24-27
〃 28
160a タ28-3-55
161 カ29-14-1-5-1
163 タ28-4-61
164 レ28- 6 -9
レ28-11-5
〃 -20
レ28-16-10
〃 -11
〃 -29
〃 -40
162 レ28-11-2
〃 8-4
0
10cm
(1/3)

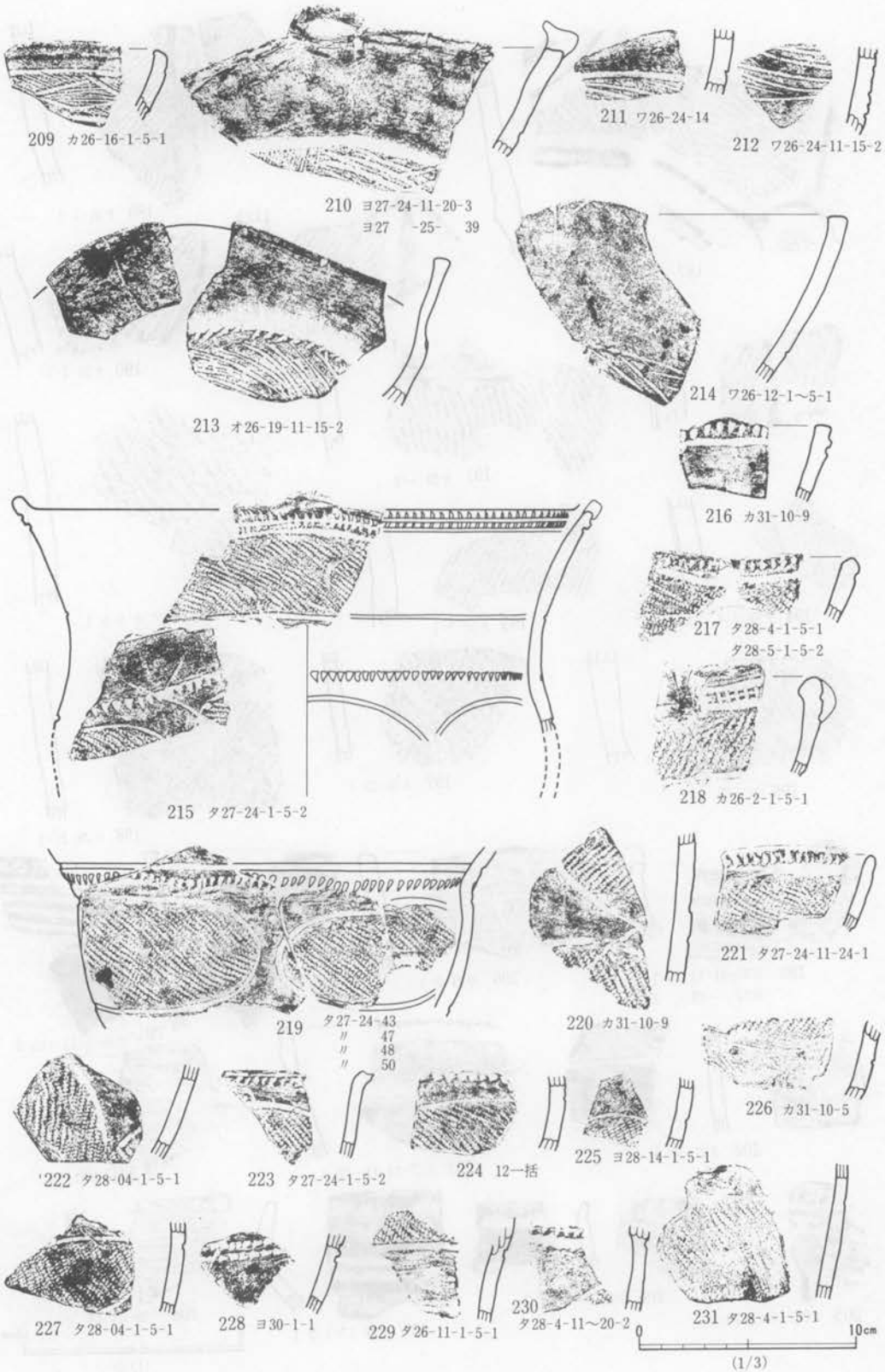
第106図　縄文土器 (8)


165 タ27-11-7
167 タ27-11-9
166 タ29-1-1-5-11
〃 17
〃 18
〃 19
〃 27
〃 29
168 タ27-8-1-5-1
169 カ28-2-11-20-2
170 レ30-18-7
171 レ28-21-1
172 ワ28-6-11-15-2
173 レ30-18-9
174 タ29-1-4-5-13
175 12一括
176 タ27-11-13
177 レ31-2-1
178 ヨ30-12-2
179 タ31-7-1
180 ワ28-7-1-5-1
181 ワ28-5-11-15-1
182 カ28-7-11-20-2
183 ワ28-6-11-15-2
184 タ31-7-1
185 タ31-7-1
186 タ31-7-1
0
10cm
(1/3)

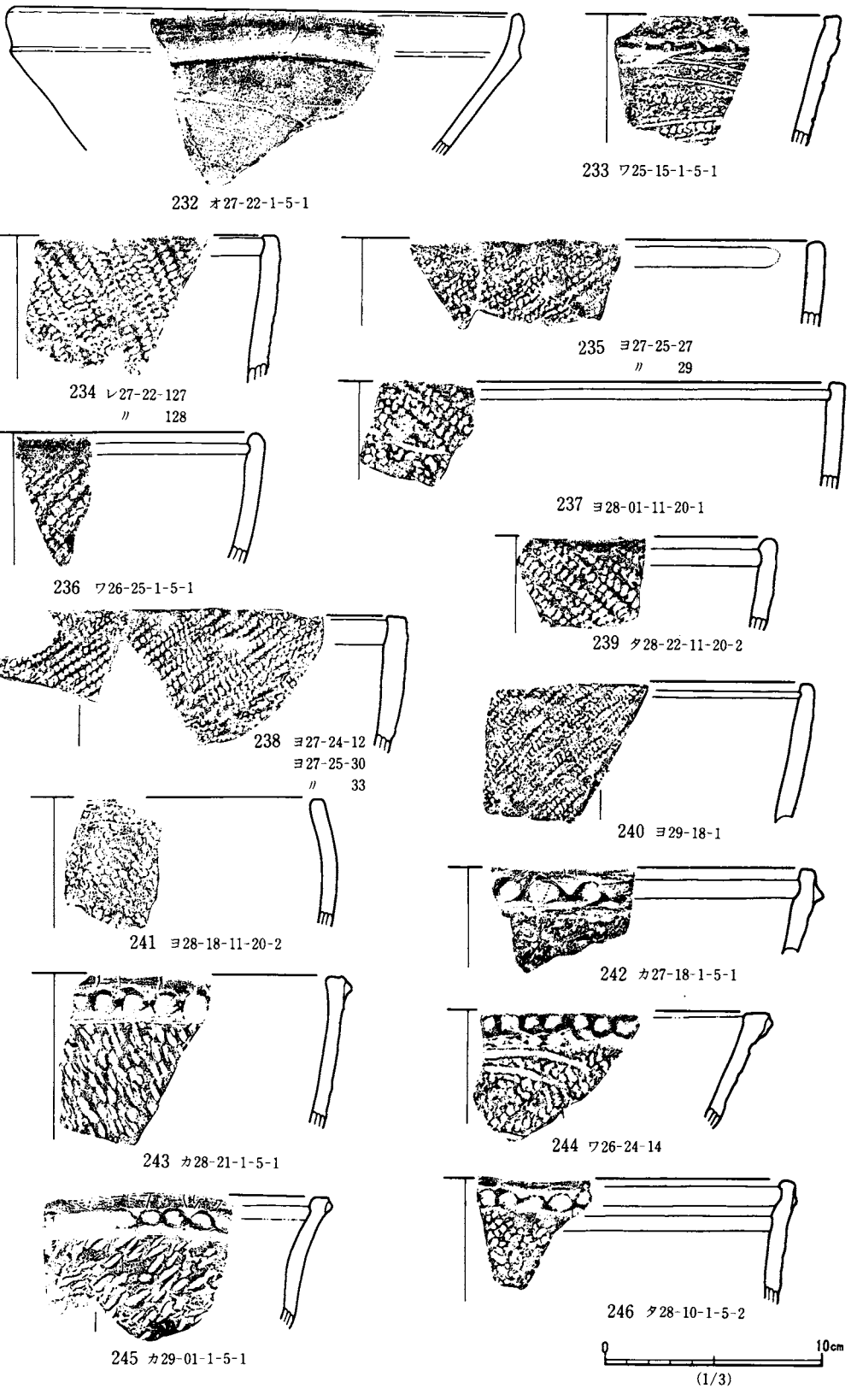
第107図　縄文土器 (9)



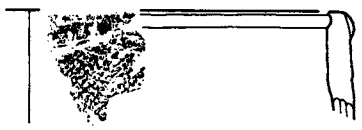
第108図　縄文土器（10）



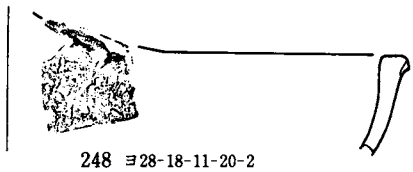
第109図　縄文土器（11）



第110図　縄文土器（11）



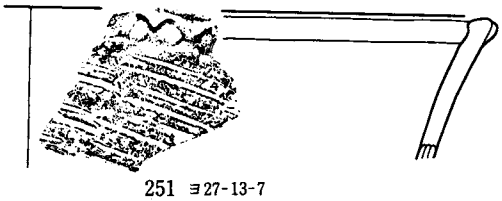
247 カ31-6-1



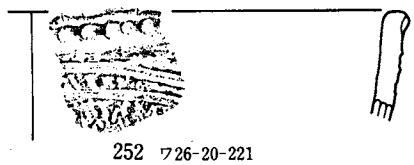
248 ヨ28-18-11-20-2

249 ヨ29-2-1-5-1

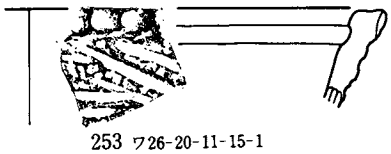
250 ヨ27-13-11-20-1



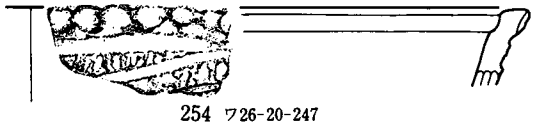
251 ヨ27-13-7



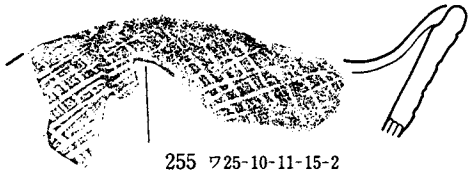
252 ワ26-20-221



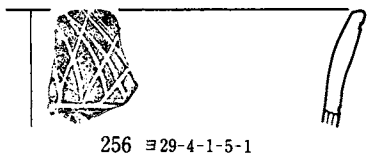
253 ワ26-20-11-15-1



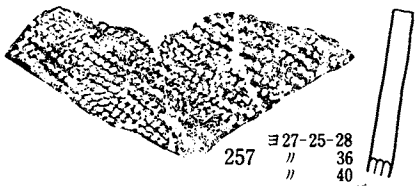
254 ワ26-20-247



255 ワ25-10-11-15-2

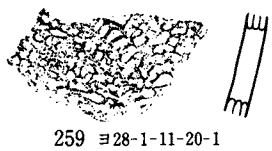


256 ヨ29-4-1-5-1

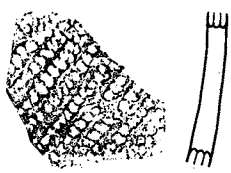


257 ヨ27-25-28
〃 36
〃 40

258 タ28-16-1-5-2



259 ヨ28-1-11-20-1

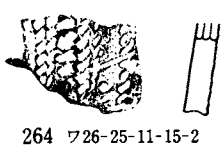


260 ワ26-25-1-5-1

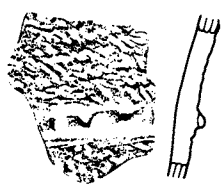
261 ワ28-14-1-5-1

262 ワ25-17-1-5-1

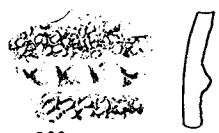
263 ワ28-25-1-5-不明



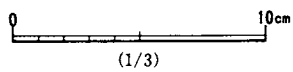
264 ワ26-25-11-15-2



265 0000

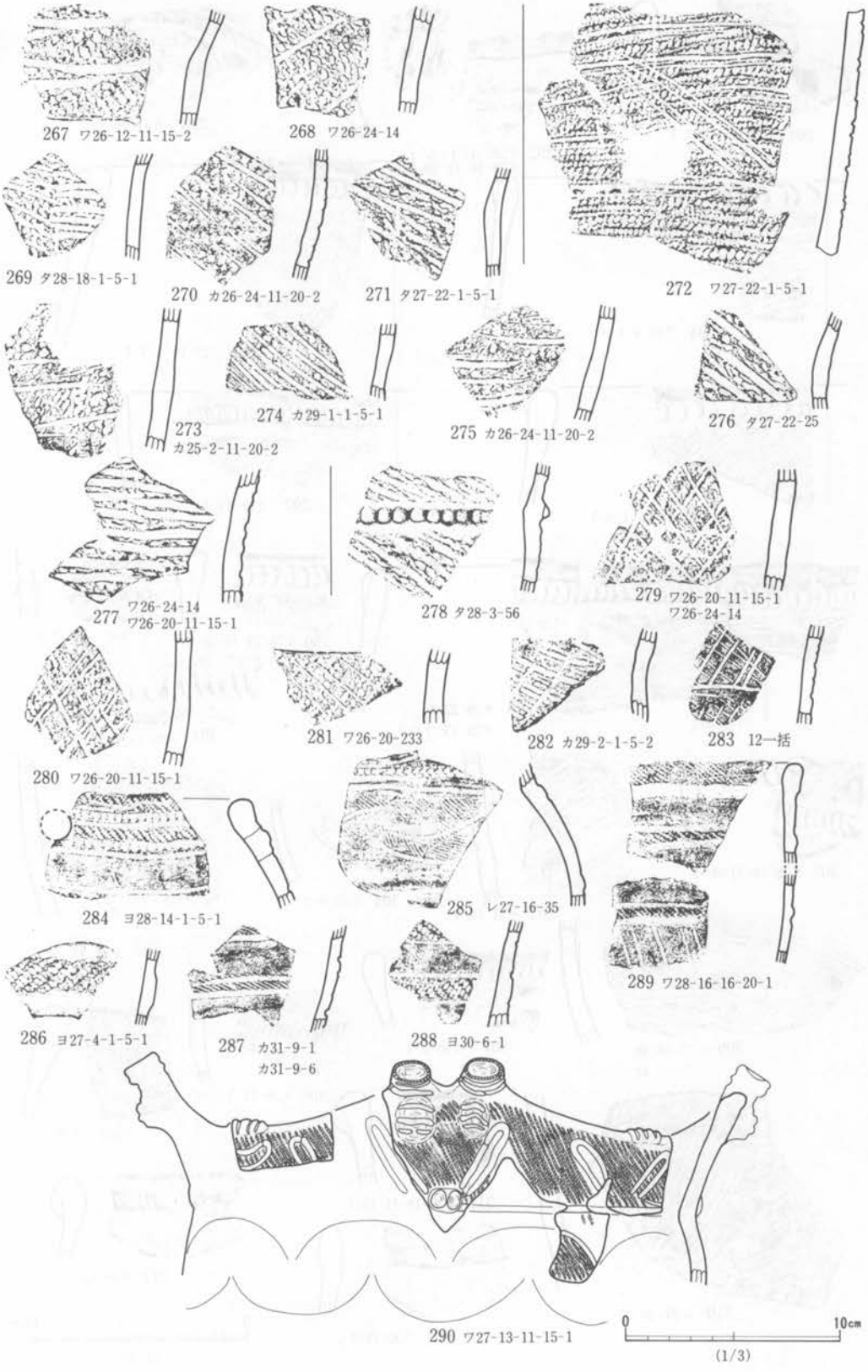


266 タ28-10-1-5-2

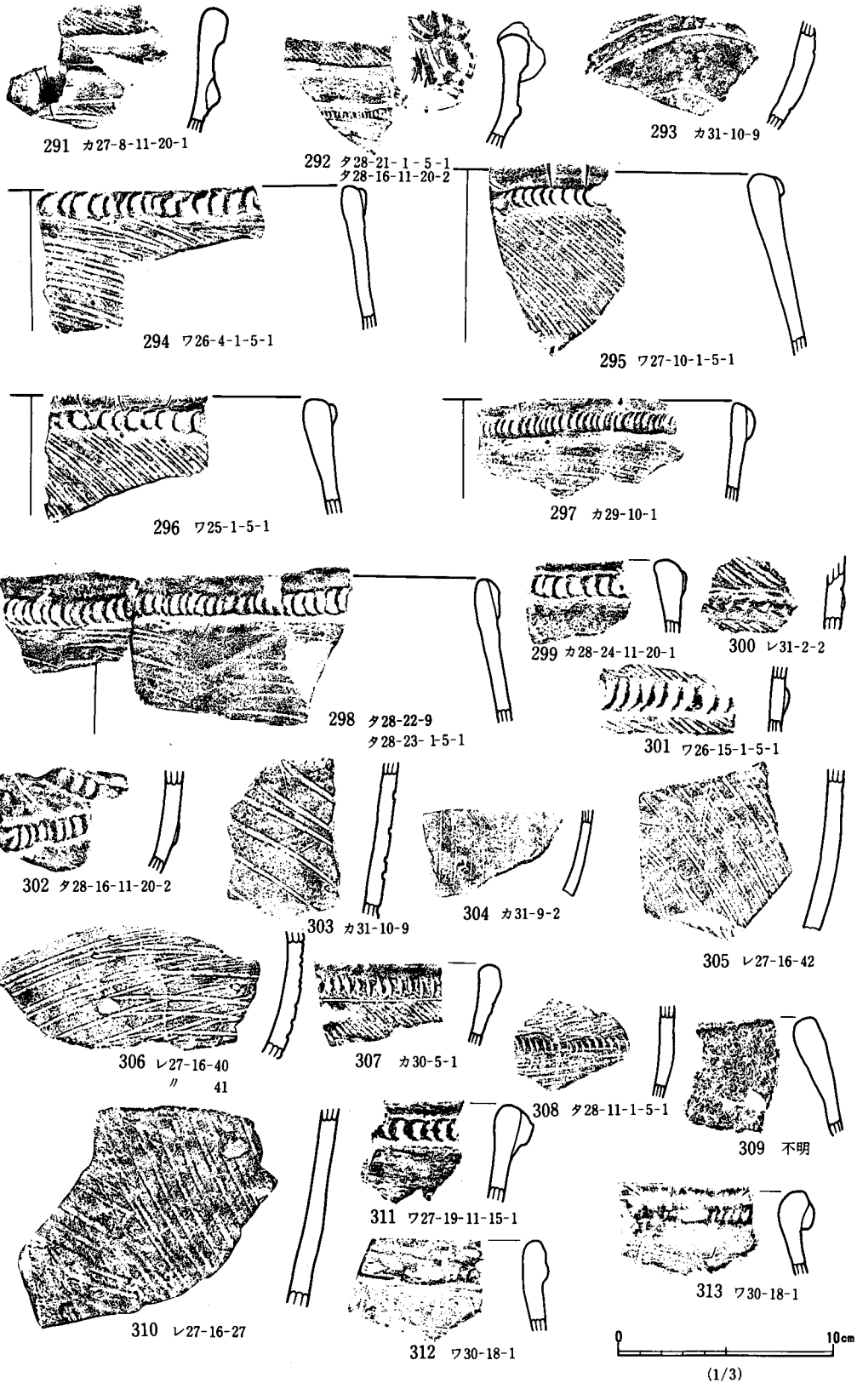


(1/3)

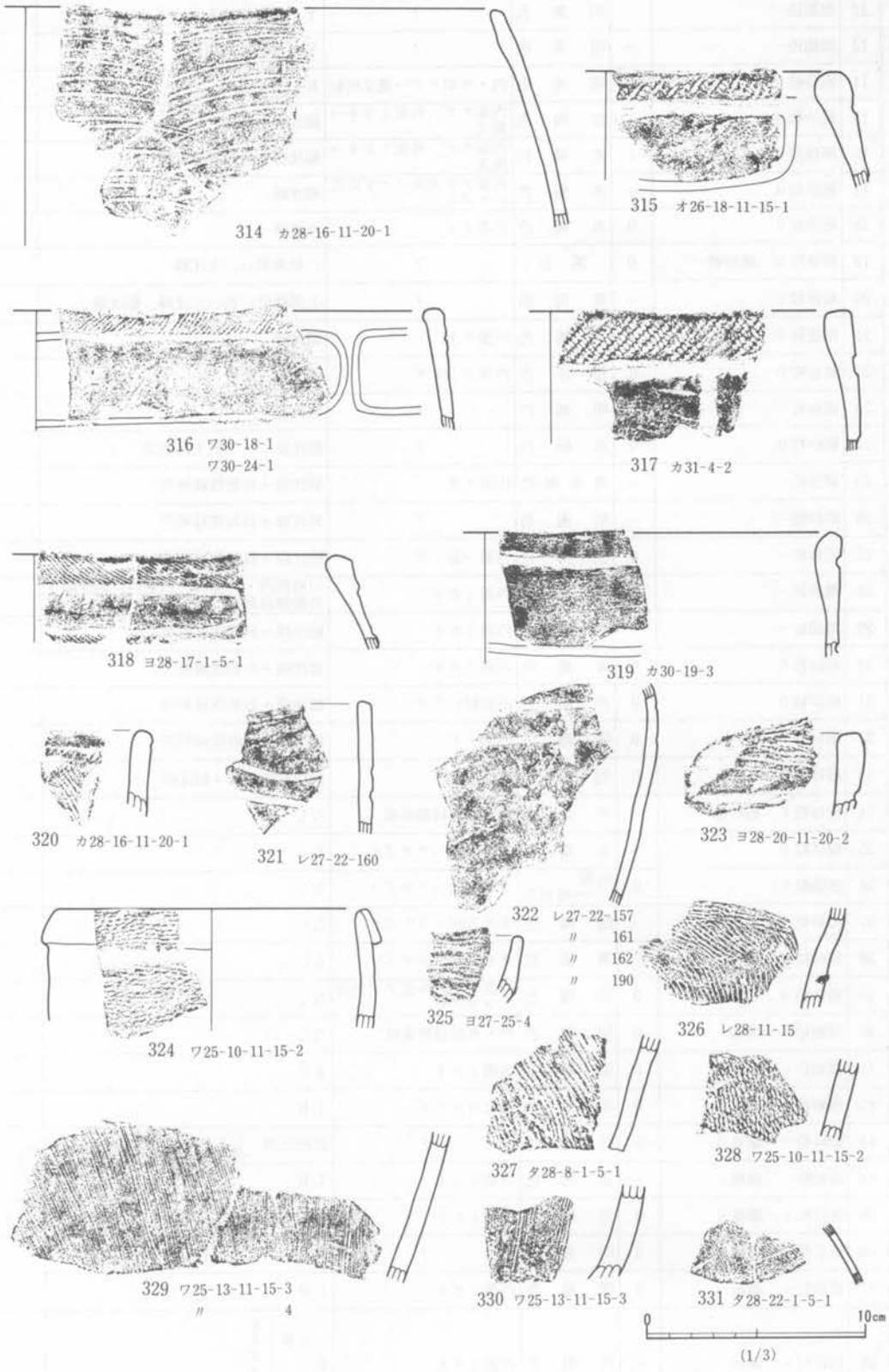
第111図　縄文土器（13）



第112図　縄文土器（14）



第113図　縄文土器（15）



第114図　縄文土器（16）

図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
12	微細砂－	－	明黄色	?	Y－R密接絡条	
13	微細砂－	－	明黄色	?	Y－R密接絡条	
14	細砂粒0	0	明黄色	内・外面ナデ→縄文回転	RL横位回転	
15	細砂粒0	＋	赤褐色	内面ナデ、外面ミガキ→施文	細沈線＋刺突	
16	細砂粒0	＋	赤褐色	内面ナデ、外面ミガキ→施文	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
17	細砂粒0	＋	赤褐色	内面タテ方向にナデに近いケズリ	細沈線	
18	細砂粒0	0	赤褐色	内面ナデ	太沈線	
19	細砂粒0　細砂礫－	0	黒色	?	口唇部刻目、太沈線	
20	細砂粒＋	－	黄褐色	?	上部縦位の弱い太沈線、細沈線	
21	微細砂0	－	赤褐色	内面ナデ	細沈線	
22	細砂粒0	0	暗赤色	内面ヨコナデ	細沈線、刻目	
23	細砂粒－	0	明褐色	?	細沈線	
24	細砂粒0	0	赤褐色	?	細沈線＋ヘラ状工具刺突	
25	細砂粒－	－	黄赤褐色	内面ナデ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
26	細砂粒－	－	明褐色	?	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
27	細砂粒－	0	明褐色	内面一部ナデ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
28	微細砂－	＋	赤褐色	内面ミガキ	口唇部内・外面同一の刻目、細沈線＋貝殻腹縁刺突	
29	微細砂－	＋	明褐色	内面ミガキ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
30	細砂粒0	0	黄褐色	内面ミガキ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
31	細砂粒0	0	赤褐色	内面軽いナデ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
32	細砂粒0	0	明褐色	内面ナデ	細沈線＋貝殻腹縁刺突	
33	細砂粒0	0	明褐色	内面ミガキ	刻目細隆起線＋細沈線	
34	細砂粒0　細砂礫－	－	明黄色	内・外面貝殻条痕	なし	
35	細砂粒0	＋	赤褐色	タテ方向ヘラケズリ	なし	
36	細砂粒0	0	暗赤～暗褐色	タテ方向ヘラケズリ	なし	
37	細砂粒－	－	暗褐色	タテ方向ヘラケズリ	なし	
38	細砂粒－	－	黄褐色	タテ方向ヘラケズリ	なし	
39	細砂粒0	0	明褐色	内面ナデ、外面タテ方向ヘラケズリ	なし	
40	微細砂－　繊維－	0	明褐色	内・外面貝殻条痕	なし	
41	微細砂－　繊維＋	0	暗褐色	内面ミガキ	RL	
42	微細砂0　繊維0	0	明褐色	内面ヨコナデ	LR	
43	細砂粒＋　繊維0	0	明褐色	?	組紐圧痕　右巻LL　左巻RR	
44	微細砂－　繊維＋	＋	赤褐色	内面ミガキ	LR	
45	細砂粒0　繊維0	0	黒褐色	内面ミガキ	RL	
46	細砂粒＋　繊維－	0	明褐色	?	RL	
47	細砂粒＋　繊維－	0	明褐色	内面ミガキ	LR	
48	細砂粒＋　繊維－	＋	明褐色	内面ミガキ	L{R{ℓℓℓ, R{ℓℓℓ}	
49	細砂粒0　繊維－	0	暗褐色	内面タテ方向ミガキ	LR	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　　調	せ　い　け　い	施　　文	備　考
50	微細砂－　繊維＋	＋	赤　褐　色	内面タテ方向ミガキ	附加条　0段多条のＬＲにＲＬを附加 L{L{L{R{ℓℓℓ, R{ℓℓℓ}}, R{L{r,r}, L{r,r}}}}, R{L{r,r}, L{r,r}}}	
51	細砂粒０　繊維０	０	暗～明褐色	？	沈線	
52	細砂粒０　繊維＋	０	黄　褐　色	内面ミガキ	ＲＬ→半截竹管文	
53	微細砂－　繊維＋	０	黄褐色、黒斑	？	櫛歯文	
54	微細砂０　繊維０	－	黄～黒褐色	内面ナデ	貝殻背圧痕	
55	細砂粒＋　繊維＋	０	黒　褐　色	内面ヨコ方向ミガキ	半截竹管文、爪形文	
56	細砂粒０　繊維－	－	明　黄　色	内面ナデ	ＲＬ地文→半截竹管文、円形刺突	
57	細砂粒＋	＋	明　褐　色	内・外面ミガキ	無節Ｌ地文→半截竹管文、同刺突	
58	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内面と外面の口縁部文様帯ミガキ	RL、半截竹管文、円形竹管刺突、爪形文	
59	細砂粒０	＋	赤　褐　色	内面軽いミガキ、外面ナデ	口唇部刻目、爪形文	
60	細砂粒０細砂礫－	０	明～黒褐色	内面ミガキ	櫛歯文、円形竹管刺突	
61	細砂粒０細砂礫－	＋	灰～黒褐色	内・外面ミガキ	半截竹管文、円形竹管刺突、爪形文	
62	細砂粒＋	０	明　黄　色	内面ミガキ	RL 地文、爪形文、半截竹管文	
63	細砂粒＋	＋	赤～暗褐色	内面ナデ	爪形文、半截竹管文、櫛歯文	
64	細砂礫０	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキ	爪形文、半截竹管刺突	
65	砂粒＋	０	黒　褐　色	内面軽いミガキ	爪形文、竹管刺突	
66	砂粒＋	＋	明～赤褐色	内面ミガキ	爪形文、竹管刺突	
67	細砂粒＋	＋	赤～暗褐色	内面ミガキ	RL 地文、爪形文、半截竹管刺突	
68	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキ	半截竹管文	
69	細砂粒＋　スコリアー	０	明　褐　色	内面ミガキ	櫛歯文、半截竹管刺突	
70	細砂粒＋	０	暗　赤　色	？	LL	
71	細砂粒＋	＋	明　褐　色	内面ミガキ	YL 地文→半截竹管文	
72	細砂粒＋	０	黄～黒褐色	内面ミガキ	変形爪形文	
73	細砂粒０	０	明　黄　色	内外面ミガキ	口唇部刻目、半截竹管文	
74	細砂粒０	０	明　黄　色	内面ミガキ	口唇部外面刺突、細沈線	
75	細砂粒－	＋	黄～暗褐色	内・外面ミガキ	口唇部刺突、半截竹管状工具による細沈線	
76	細砂粒０	０	黄　褐　色	内面ナデ	細沈線	
77	細砂粒０	＋	黒　褐　色	内・外面ナデ	細沈線、半截竹管内側の細沈線	
78	細砂粒＋　細砂礫－	０	赤　褐　色	外面ナデ	細沈線	
79	細砂粒０	＋	暗　褐　色	内外面ミガキ	細沈線	
80	細砂粒＋	０	明　褐　色	？	細沈線	
81	細砂粒０	０	明　褐　色	内面ミガキ	細沈線	
82	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	外面ヘラケズリ→ミガキ	細沈線、半截竹管による平行線	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　調	せ い け い	施　　文	備　考
83	細砂粒＋	0	黄　褐　色	？	半截竹管による平行線	
84	細砂粒＋	＋	明　褐　色	内・外面ナデ	半截竹管による平行線	
85	細砂粒０	＋	明　黄　色	内・外面ナデ	半截竹管による平行線	
86	細砂粒０	＋	黄 ～ 黒 色	内・外面ミガキ	半截竹管による平行線	
87	細砂粒０	０	暗～黒褐色	内面ミガキ	半截竹管による平行線	
88	細砂粒０	０	赤～暗褐色	内面ミガキ	半截竹管による平行線	
89	細砂粒０	＋	黄～暗褐色	内面ミガキ	半截竹管による平行線	
90	微細粒０	０	明　褐　色	内面軽いミガキ、外面ナデ	細沈線	
91	細砂粒０	０	黄～赤褐色	内面ミガキ	半截竹管による平行線	
92	微細砂－	＋	赤～暗褐色	輪積痕	竹管刺突、細沈線による疑似条線	
93	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内面ナデ	櫛歯条線	
94	細砂粒０	＋	明　褐　色	内面軽いミガキ、外面ナデ、輪積痕	櫛歯条線	
95	細砂粒０	＋	明　褐　色	内面軽いミガキ外面ナデ、輪積痕	７本櫛歯の蛇行条線	
96	細砂粒０	＋	明～暗褐色	内面ケズリ→ナデ、外面ヨコナデ	口唇部半截竹管文、櫛歯の蛇行条線	
97	細砂粒＋	＋	明～暗褐色	内面斜位のナデ	９本櫛歯の斜行条線	
98	微細砂－	０	黄褐色、黒斑	内外面ケズリ→ナデ	10本以上の櫛歯の蛇行条線	
99	細砂粒０　細砂礫＋	０	黒　色	内外面ナデ	７本櫛歯の斜行条線	
100	細砂粒－	０	明　褐　色	？	９本櫛歯の平行条線	木戸場Ｂ
101	細砂粒０	＋	赤　褐　色	内面ミガキ、外面ナデ	７本櫛歯の条線	
102	微細砂＋	０	明　黄　色	？	７本櫛歯の蛇行条線	
103	細砂粒０　細砂礫＋	＋	黄　褐　色	内面ナデ、外面ケズリ	５本以上の櫛歯条線	
104	細砂粒－	＋	明～黒褐色	内面ケズリ→ミガキ	貝殻腹縁揺り曳き	
105	細砂粒０	＋	暗　褐　色	内面ミガキ	口唇部刻目、貝殻腹縁揺り曳き	
106	細砂粒＋	０	明褐色、黒斑	内面ケズリ→ナデ	口唇部刻目、貝殻腹縁揺り曳き	
107	細砂粒０	０	赤　褐　色	内・外面ヨコナデ、輪積痕	口唇部刻目、貝殻腹縁揺り曳き	
108	細砂粒＋　細砂礫－	０	黄～赤褐色	内面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
109	細砂粒０	－	赤　褐　色	内面ナデ（剝落顕著）	貝殻腹縁揺り曳き	
110	細砂粒－	０	明～暗褐色	内面ケズリ、外面ナデ、輪積痕	貝殻腹縁刺突	
111	細砂粒０	－	明　褐　色	内面ナデ（剝落顕著）	貝殻腹縁揺り曳き	木戸場Ｂ
112	微細砂＋　細砂粒－	＋	赤　褐　色	外面ミガキ	貝殻腹縁揺り曳き	木戸場Ｂ
113	細砂粒＋	０	赤　褐　色	内面ミガキ	貝殻腹縁揺り曳き	
114	細砂粒＋	＋	明　褐　色	外面ミガキ	貝殻腹縁揺り曳き	
115	細砂粒＋　細砂礫－	＋	黄～黒褐色	外面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
116	細砂粒＋	＋	明赤褐色	内面ケズリ、外面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
117	細砂粒＋	０	明　褐　色	内外面ケズリ、一部ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
118	細砂粒＋	０	黄　褐　色	内外面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
119	細砂粒＋	－	明　褐　色	内面ケズリ→ナデ、外面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
120	細砂粒＋	－	明　褐　色	内面ケズリ→ナデ、外面ナデ	貝殻腹縁揺り曳き	
121	微細砂＋	０	明　褐　色	外面ケズリ	貝殻腹縁揺り曳きによる類爪形文	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　　調	せ　い　け　い	施　　文	備　考
122	細砂粒 0	0	明　褐　色	内・外面ナデ、輪積痕	輪積部おさえ	
123	細砂粒 0	＋	明　褐　色	内面ナデ、外面軽いミガキ	半截竹管による短沈線	
124	細砂粒 0	＋	暗 茶 褐 色	内面ナデ、外面軽いミガキ	半截竹管による短沈線	
125	微細砂＋	＋	明　褐　色	外面ナデ	連続爪形文	
126	微細砂＋	＋	暗　褐　色	外面ナデ	三角文	
127	微細砂＋	＋	暗　褐　色	内面ナデ、外面軽いミガキ	三角文	
128	微細砂 0	＋	明　褐　色	内・外面ミガキ（内面入念）	三角文	
129	微細砂＋	＋	明～暗褐色	外面ナデ	三角文	
130	微細砂＋	0	暗　褐　色	外面ナデ	三角文	
131	微細砂＋	＋	明～暗褐色	外面ナデ（擦痕を残す）	三角文	
132	微細砂＋	0	明　褐　色	内・外面に部分的なナデ	三角文	
133	細砂粒＋	＋	暗～茶褐色	内面ミガキ、外面ナデ	磨消貝殻文	
134	細砂粒＋	0	黄～暗褐色	内面ケズリ→ミガキ、外面ナデ	磨消貝殻文、半截竹管文	
135	細砂粒＋	0	明　黄　色	内面ケズリ→ミガキ、外面ナデ	磨消貝殻文、半截竹管文	
136	細砂粒＋	－	黄　褐　色	？	口縁部ＬＲ原体３条押捺 胴部ＬＲ開端自縄自縛結節回転	
137	細砂粒 0	0	黄～暗褐色	内面ナデ→ミガキ	Ｌ開端自縄自縛結節回転(縦位、横位)	
138	細砂粒 0	0	黄　灰　色	外面ナデ	Ｌ開端自縄自縛結節回転（横位）	
139	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面軽いミガキ、外面ナデ	Ｒ開端自縄自縛結節回転（横位）	
140	細砂粒＋	＋	黄～暗褐色	内面軽いミガキ	LR 末端自縄自縛結節回転（横位） １段２条は別原体	
141	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内面ミガキ	結束　2 { RL / RL }	
142	細砂粒＋	0	灰　褐　色	内面軽いミガキ	刻目隆帯、細沈線、RL	
143	細砂礫＋（金雲母）	＋	明　褐　色	内面ケズリ→ミガキ	隆帯、半截竹管文、LR	
144	細砂礫－（金雲母）	＋	明　褐　色	内面ミガキ、外面入念なナデ	隆帯、結節沈線	
145	細砂粒 0	0	明　褐　色	内面ミガキ	隆帯、結節沈線	
146	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内面ミガキ	角押文	
147	細砂粒－（金雲母）	＋	明　褐　色	内・外面ナデ	結節沈線	把手
148	細砂粒－（金雲母）	0	明　褐　色	？	結節沈線	把手
149	微細砂 0	－	明　褐　色	内・外面ヨコナデ	角押文	
150	細砂粒＋	－	黒　　色	内面ナデ	隆帯、角押文	
151	細砂礫＋（金雲母）	＋	茶　褐　色	？	結節沈線	
152	細砂礫＋	＋	明 茶 褐 色	内面ミガキ、外面ナデ	隆帯、単列角押文	
153	細砂礫＋	＋	茶～暗褐色	内面ミガキ、外面ナデ	隆帯、単列角押文	
154	細砂粒＋	0	赤　褐　色	内面ミガキ、外面ナデ	単列角押文	
155	細砂粒 0	0	明～黒褐色	内・外面ケズリ→軽いミガキ	なし	
156	細砂礫＋	＋	明　褐　色	内面ナデ、輪積痕	隆帯	
157	細砂粒 0	0	黄　褐　色	内面ミガキ	角押文	
158	細砂礫＋（長石粒）	＋	明 赤 褐 色	内・外面ナデ、輪積痕	隆帯、結節沈線、円形竹管連続刺突	
159	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面軽いミガキ	短沈線、短隆帯、複列結節沈線	
160	細砂粒 0（金雲母）	＋	赤～暗褐色	内・外面ナデ	隆帯、複列結節沈線	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　調	せ い け い	施　　文	備　考
161	細砂粒 0	＋	黄　褐　色	内面ナデ	口唇部刻目、隆帯、キャタピラ文	
162	細砂礫＋	＋	茶　褐　色	内・外面ナデ	隆帯、角押文	
163	細砂礫 0	＋	明 茶 褐 色	外面ヨコナデ、輪積痕	——	
164	細砂粒＋	0	黄　褐　色	内面ミガキ	RL、LR 2 条の羽状縄文、太沈線	
165	細砂粒 0	＋	暗～赤褐色	内・外面ミガキ	隆帯、太沈線、R L	
166	細砂粒 0	＋	黒　褐　色	内面ミガキ、外面ケズリ→ナデ	隆帯、太沈線、R { L { r r r r L { r r r } （磨消）	
167	細砂粒 0	＋	暗　褐　色	内・外面ミガキ	隆帯、太沈線、RL	
168	細砂粒 0	0	明 赤 褐 色	内面ミガキ、外面ケズリ→ナデ	隆帯、RL（磨消）	
169	細砂粒－	0	灰　黄　色	内・外面ミガキ	L { R { ℓ ℓ ℓ ℓ R { ℓ ℓ ℓ } （異方向回転羽状縄文）	
170	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内・外面ナデ	隆帯、RL	木戸場B
171	細砂粒－	－	黄褐色、黒斑	内面ナデ、口唇部軽いミガキ	隆帯、刺突、沈線、L	木戸場B
172	微細砂＋	0	明～赤褐色	内面ミガキ（剝落顕著）	隆帯、L { R { ℓ ℓ ℓ ℓ R { ℓ ℓ ℓ }	
173	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキ	太沈線、RL	木戸場B
174	細砂粒－	＋	明　褐　色	内面、口唇ミガキ、外面ナデ（内面スス付着）	刺突、太沈線、L { R { ℓ ℓ ℓ ℓ R { ℓ ℓ ℓ }	
175	細砂粒 0	＋	明　褐　色	内・外面ミガキ	沈線、RL（磨消）	
176	細砂粒＋	0	赤　褐　色	内面ミガキ、外面底部付近ナデ	沈線、LR（おそらく磨消）	
177	細砂粒＋	＋	明 赤 褐 色	磨消部ナデ	沈線、RL（磨消）	木戸場B
178	細砂粒 0	0	赤　褐　色	内面ナデ、磨消部軽いミガキ	沈線、LR（磨消）	木戸場B
179	細砂粒＋	0	明 黄 褐 色	内面ミガキ、磨消部ナデ	隆帯、沈線、LR	木戸場B
180	細砂粒＋	0	明 黄 褐 色	内面ナデ	沈線、RL（磨消）	
181	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキ	沈線、RL（磨消）	
182	細砂粒＋	0	黄　褐　色	内面軽いミガキ、器面の荒れ顕著	RL(磨消)	
183	細砂粒 0	＋	赤　　色	内・外面入念なミガキ	微隆帯	
184	細砂粒＋	0	赤～明褐色	外面口縁部ミガキ、内面ナデ	LR	木戸場B
185	細砂粒 0	0	明 黄 褐 色	内面、外面口縁部ミガキ	微隆帯、LR	
186	細砂粒 0	0	明　褐　色	内面、外面口縁部ミガキ	微隆帯、LR	木戸場B
187	微細砂＋	0	茶　褐　色	内面ミガキ	微隆帯、RL	木戸場B含む。
188	微細砂＋	－	明黄色、黒斑	内面ケズリ→ナデ	LR（磨消）	
189	微細砂＋	－	明～茶褐色	内面ミガキ	微隆帯、LR	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　　調	せ　い　け　い	施　　文	備　考
190	微細砂＋	－	明黄褐色土	内面ミガキ（火バネ痕顕著）	微隆帯、RL	木戸場B
191	細砂粒 0	0	明　褐　色	内面ナデ、磨消部軽いミガキ	微隆帯、L	木戸場B
192	細砂粒 0	＋	暗～黒褐色	内・外面ミガキ	LR	木戸場B
193	細砂粒－	0	明　褐　色	内面ミガキ	RL	
194	細砂礫－（きわめて密）	＋	茶　褐　色	内・外面ミガキ	微隆帯、LR	木戸場B
195	微細砂 0	0	黄～黒褐色	内面ケズリ→ミガキ	L{R{ℓℓℓ, R{ℓℓℓ	木戸場B
196	微細砂＋	－	黄～赤褐色	内面タテ方向ケズリ、内面荒れ顕著	L	木戸場B
197	細砂粒 0	0	灰　黄　色	内面ミガキ	LR	木戸場B
198	細砂粒 0	＋	赤～黒褐色	内面ミガキ	RL	木戸場B
199	細砂粒 0	＋	明褐色､黒斑	内・外面ミガキ	（刻目）隆線、沈線、LR	
200	細砂粒 0	＋	暗～黒褐色	内面、外面口縁下ミガキ	沈線、RL	
201	細砂粒 0	＋	赤～暗褐色	内・外面ミガキ	口唇内面刺突、内面沈線	
202	微細砂＋	＋	明赤褐色	内・外面軽いミガキ	内面沈線、LR（磨消）	
203	微細砂＋	＋	褐　　色	内・外面ミガキ	口唇部外面刻目、沈線	
204	微細砂 0	0	褐　　色	内・外面口縁部ミガキ、外面胴部ナデ	沈線、RL	木戸場B
205	微細砂＋	0	赤　褐　色	内・外面ミガキ	沈線、LR	
206	微細砂－	＋	暗　褐　色	内・外面ミガキ	口唇内面刻目、沈線、LR	
207	微細砂 0	＋	黄～黒褐色	内・外面ミガキ	隆帯上に LR、沈線	
208	細砂粒＋スコリア－	＋	黒　　色	内・外面ミガキ	斜行沈線	
209	細砂粒 0	＋	明　褐　色	内面・外面口縁部ミガキ	平行沈線、斜行細沈線	
210	細砂粒＋	＋	明赤褐色	内面ミガキ、外面口縁下ミガキ	平行沈線、斜行細沈線	
211	細砂粒＋	＋	赤～暗褐色	内・外面ミガキ	細沈線	
212	細砂粒 0	＋	灰　褐　色	内・外面軽いミガキ	細沈線	
213	細砂粒＋	＋	赤～黒褐色	内面～口縁下ミガキ	斜行沈線、刺突	
214	細砂粒＋	＋	黒　褐　色	内面軽いミガキ、外面ナデ	斜行沈線	
215	細砂粒 0	＋	灰　褐　色	内・外面ミガキ	RL（磨消）、刺突、沈線	
216	細砂粒 0	＋	赤～暗褐色	内・外面ミガキ	口縁部刻目、沈線	木戸場B
217	細砂粒 0	0	赤～暗褐色	内面ミガキ	口唇部刻目、RL、沈線	
218	細砂粒 0	＋	暗　褐　色	口唇部・内面ミガキ	貼瘤、沈線間刻目、LR	
219	細砂粒－	＋	明～黒褐色	内・外面ミガキ	沈線、刺突、RL（画線内充填）	
220	細砂粒 0	＋	灰黄褐色	内・外面ミガキ	RL（画線内充填）	木戸場B
221	細砂粒－	＋	黄　褐　色	内面入念なナデ	口唇部刻目、RL（画線内充填）	
222	細砂粒 0	＋	赤～暗褐色	内・外面ミガキ、外面ス付着	RL（磨消）	
223	細砂粒 0	＋	黄～黒褐色	内・外面ミガキ	刺突列、RL（画線内充填）	
224	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内・外面ナデ、部分的ミガキ	刺突列、RL（画線内充填）	
225	細砂粒 0	＋	赤～暗褐色	内・外面ミガキ	RL（磨消）	
226	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキに近いナデ	LR（磨消）	木戸場B

挿図番号	胎　　土	焼成	色　　調	せ　い　け　い	施　　文	備　考
227	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内・外面ミガキ、外面スス付着	RL（画線内充填）	
228	細砂粒 0	＋	灰　褐　色	内面ナデ、外面ミガキ	2列の半截竹管刺突帯	木戸場B
229	微細砂 0	＋	明赤褐色	内・外面ミガキ	RL（磨消）	
230	細砂粒 0	＋	明赤褐色	内・外面ミガキ	沈線間刻目、RL（画線内充填）	
231	細砂粒－	＋	黄　褐　色	内・外面ミガキ	RL（おそらく画線内充填）	
232	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面・外面口縁部ミガキ外面胴部粗いナデ（砂粒移動）	なし	
233	細砂粒＋	0	黄　褐　色	内面軽いミガキ	刻目隆帯、LR→斜条線	
234	細砂粒＋	＋	赤黄褐色	内面ナデ	RL、内面凹線	
235	細砂粒－	0	明　褐　色	内面ナデ	LR、内面凹線	
236	細砂粒 0	0	明　褐　色	内面・外面口縁下ナデ	LR、内面凹線	
237	細砂粒 0	＋	明赤褐色	内面ナデ	RL、内面凹線	
238	細砂粒 0	＋	明褐色、黒斑	内面ナデ→軽いミガキ	LR、内面凹線	
239	細砂粒 0	＋	明赤褐色	内面軽いミガキ	RL、内面凹線	
240	細砂粒 0（石英）	0	暗　褐　色	内面ヘラナデ、外面ススト付着	LR、内面沈線	
241	細砂粒－	0	赤　褐　色	内面ミガキ	LR	
242	細砂粒 0	0	黄　褐　色	内面ミガキ	刻目隆帯、RL内面凹線	
243	細砂粒＋	0	褐～暗褐色	内面ヘラナデ	刻目隆帯、RR	
244	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、RL、太沈線	
245	細砂粒－	＋	明赤褐色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、LL	
246	細砂粒 0	0	黄　褐　色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、RL、内面凹線2条	
247	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面・口唇部ナデ	刻目隆帯、LR、内面凹線	木戸場B
248	細砂粒 0	＋	明　褐　色	内面ナデ、口唇部ミガキ	刻目隆帯、LR	
249	細砂粒 0	0	黄　褐　色	口唇部ナデ	刻目隆帯、LR→斜行沈線、内面凹線	
250	細砂粒＋	＋	明赤褐色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、LR→平行沈線	
251	細砂粒 0	＋	赤～暗褐色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、LR→半截竹管内側の平行線文、内面凹線	
252	細砂粒 0	＋	赤　褐　色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、RL→半截竹管内側の平行線文	
253	細砂礫＋（石英）	＋	明～赤褐色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、LR→太沈線、内面凹線	
254	細砂礫＋	＋	赤　褐　色	内面・口唇部ミガキ	刻目隆帯、LR→太沈線（おそらく半截竹管外側による）、内面凹線	
255	細砂粒＋	－	黄　褐　色	内面ヨコナデ	格子状沈線	
256	細砂粒 0	0	赤　褐　色	内面ミガキ、口唇部ナデ	格子状沈線	
257	細砂粒－	＋	暗　褐　色	内面ミガキ	LR	
258	細砂粒－	＋	明褐色、黒斑	内面ナデ	RL	
259	細砂粒 0	＋	黒　褐　色	内面ミガキ	RL	
260	微細砂 0	0	明～黒褐色	内面ミガキ	LR	
261	細砂粒 0	0	黒　褐　色	内面ミガキ	RR	
262	微細細砂＋	＋	赤　褐　色	内面ミガキ	RR	
263	微細砂 0	＋	明　褐　色	内面ミガキ	RR	

挿図番号	胎　　土	焼成	色　調	せ い け い	施　　文	備　考
264	微細砂０	＋	明　褐　色	内・外面ミガキ	L{R{L L → L{R{L L L{L L ← L{L L （撚り戻し）（２条附加）	
265	細砂粒－	＋	明～暗褐色	内面ミガキ	刻目隆帯、RL	
266	細砂粒＋	0	黄～黒褐色	内面軽いミガキ	刻目隆帯、RL	
267	細砂粒＋（長石）	＋	赤　褐　色	内面ミガキ	RL→平行太沈線	
268	細砂粒０	＋	赤褐色、黒斑	内面ミガキ（器面の荒れ顕著）	RL→斜行沈線	
269	細砂粒＋	＋	黒　褐　色	内面下半ナデ、上半ミガキ	LR→羽状沈線	
270	細砂粒－	＋	黒　　色	内面ヨコ方向ミガキ	RL→斜行沈線	
271	細砂粒－	0	明　褐　色	内面ヨコ方向ナデ	RL→平行沈線	
272	細砂粒－	＋	赤～黒褐色	内面タテ方向ミガキ	LR→平行、斜行沈線	
273	細砂粒０	＋	赤～暗褐色	？	RL→斜行沈線	
274	細砂粒０	＋	暗　褐　色	内面ミガキ	RL→斜行沈線	
275	細砂粒＋	0	黄　褐　色	内面ミガキ	RL→斜行沈線	
276	細砂粒０	＋	明　褐　色	内面ナデ	RL→斜行沈線	
277	微細粒０	＋	茶　褐　色	内面ヨコ方向ミガキ	LR→平行沈線	
278	細砂粒＋	＋	赤　褐　色	内面ナデ	刻目隆帯、RL→斜行沈線	
279	細砂粒－	－	黄　褐　色	内面ナデ	LR→格子状沈線	
280	細砂粒０	0	灰　黒　色	内面ナデ、外面スス付着	LR→格子状沈線	
281	細砂粒－	0	黄～暗褐色	内面ヨコ方向ミガキ	LR→格子状沈線	
282	細砂粒－	＋	赤　褐　色	内面ミガキ	斜縄文（原体不明）→格子状沈線	
283	細砂粒０	＋	茶　褐　色	内面ナデ（部分的にミガキに近い）	格子状沈線	木戸場Ｂ
284	微細砂０	＋	明褐色、黒斑	内面・外面無文部ミガキ	RL 帯縄文、刻目列、RL(画線内充填)	
285	微細砂＋	＋	赤　褐　色	内面ナデ、二次焼成痕あり	RL 帯縄文、刻目列、RL(画線内充填)	
286	微細砂０	＋	黒　褐　色	内面ミガキ、外面に厚くスス付着	LR 帯縄文	
287	微細砂０	＋	明　褐　色	内面ナデ、二次焼成痕あり	RL 帯縄文	木戸場Ｂ
288	細砂粒０	＋	明～赤褐色	内・外面ナデ	RL 帯縄文	木戸場Ｂ
289	微細砂－	＋	明褐色～黒色	内・外面ヨコ方向ナデ	ＲＬ帯縄文、斜行沈線	
290	細砂粒０	＋	暗　褐　色	内面ナデ	貼付文、沈線、RL	
291	細砂粒＋	－	明　黄　色	内・外面ナデ	RL 帯縄文、貼付文	
292	細砂粒０	0	明 赤 褐 色	内・外面ナデ→軽いミガキ	RL 帯縄文、刻目帯、貼付文	
293	微細砂＋（長石）	0	暗褐色、黒斑	内・外面ナデ	沈線、刺突列	木戸場Ｂ
294	細砂粒０	＋	明～黒褐色	内面ナデ	紐線文、斜条線	
295	細砂粒０（長石）	＋	黒　　色	内面ナデ	紐線文、斜条線	
296	微細砂－	＋	黄褐色、黒斑	内面ミガキに近いナデ	紐線文、斜条線	
297	細砂粒０（長石）	＋	茶　褐　色	内面ヨコ方向ナデ	紐線文、斜条線	
298	細砂粒＋	0	黄～赤褐色	内面ヨコ方向ナデ	紐線文、斜～平行条線	
299	細砂礫＋	＋	明 赤 褐 色	内面ヨコ方向ナデ	紐線文	
300	細砂粒０	＋	明　褐　色	内面ナデ	紐線文、斜条線	木戸場Ｂ

挿図番号	胎　　土	焼成	色　　調	せ い け い	施　　文	備　考
301	細砂粒０	＋	暗　褐　色	内面ナデ	紐線文、斜条線	
302	細砂粒０	－	褐～暗褐色	内面ナデ	紐線文、斜条線	
303	細砂粒＋	＋	黄～茶褐色	内面ヨコ方向ナデ	斜条線	木戸場Ｂ
304	細砂粒０	＋	暗～黒褐色	内面入念なナデ	細条線	木戸場Ｂ
305	微細砂０（長石）	＋	黒　　色	内面ナデ	斜行条線	
306	細砂粒０	＋	暗褐色、黒斑	内面入念なナデ	斜行条線	
307	細砂粒－	０	明　褐　色	口唇部ケズリ、内面ナデ	刻目列、斜行条線	木戸場Ｂ
308	細砂粒０	０	赤～暗褐色	内面ナデ	刻目列、平行条線	
309	細砂礫＋	＋	明赤褐色	口唇部～内面ヨコ方向のナデ、胴部は軽いナデ	無文	木戸場Ｂ
310	微細砂＋	＋	黄　褐　色	内面入念なナデ	斜行条線	
311	細砂粒－	０	明　褐　色	内面ナデ、口唇部ケズリ→ナデ	紐線文	
312	細砂粒０	－	黄～黒色	内面ナデ	紐線文、沈線	木戸場Ｂ
313	細砂粒０	－	黄～黒色	内面ケズリ→ナデ	斜行沈線、同細沈線	木戸場Ｂ
314	微細砂＋	－	明　黄　色	器面の荒れ顕著	条線	
315	細砂粒＋	＋	明赤褐色	口唇部ミガキ、内外面ヨコナデ	LR、太沈線	
316	細砂粒＋	＋	明赤褐色	口唇部～外面ミガキ内面ミガキに近いナデ	LR、太沈線	木戸場Ｂ
317	細砂粒＋	０	明　黄　色	口唇部ミガキ、内外面ナデ	LR、太沈線	木戸場Ｂ
318	細砂粒０	０	赤　褐　色	口唇部ケズリ、内外面ナデ	RL、太沈線	
319	細砂粒０	＋	黄　褐　色	口唇部軽いミガキ内・外面入念なナデ	太沈線	木戸場Ｂ
320	微細砂０	－	明　黄　色	？	RL、太沈線	
321	細砂粒０	＋	赤　褐　色	内・外面ナデ、外面スス付着	太沈線	
322	微細砂０	＋	暗　褐　色	内・外面ナデ、内面スス付着	平行沈線	
323	微細砂＋	－	黄　褐　色	内面ケズリ	ＹＲ、太沈線	
324	細砂粒＋	＋	暗　褐　色	内面ナデ	ＹＲ	
325	微細砂＋	－	明　黄　色	？	ＹＲ	
326	細砂粒＋	＋	明　褐　色	内面ナデ	ＹＬ	
327	細砂粒０	０	茶～暗褐色	内面ケズリ	ＹＲ	
328	細砂粒＋	＋	茶　褐　色	内面ケズリ→ナデ	ＹＲ	
329	細砂粒０	＋	明黄色、黒斑	内面入念なナデ	条痕文	
330	細砂粒０	＋	明赤褐色	内面ナデ	条痕文	
331	微細砂０	０	明赤褐色	内面ナデ	LR→細沈線	

石　器（第115～118図、第29表、図版63・64）

出土した石器の総数は137点である。Ａ地点とＢ地点の総面積からすると少ない印象をうけるが、本調査の面積が総面積にくらべて少ないことに留意する必要がある。

137点のうち、道具である石器は44点、石核が２点で、のこりは礫が53点、剝片が40点である。道具である石器だけを示す。

道具である石器44点の内訳は、削器３点（１・２・４）、尖頭器２点（３）、石鏃21点（５

～25)、楔状石器8点（26～31)、石斧3点（32・33)、磨石1点（34)、類スタンプ形石器1点（35)、スタンプ形石器1点（36)、敲石1点、石皿破片3点（37～39）である。

削器は、1は黒曜石の大形剝片の側縁に刃をつけた側削器である。2はやや尖り気味の刃部をもつ端削器である。4は1と同じ母岩の縦長剝片の腹面部の側縁に調整剝離がされていて、これも1と同じく側削器と思われる。

3の尖頭器は、玄武岩製の剝片の腹・背両面に剝離痕がある。

1～4の削器と尖頭器は、縄文時代のものと断定できない。先土器時代のものである可能性がある。

石鏃は、3分の2近くが凹基無茎鏃（I類）で、4点が有茎鏃（II類）である。それぞれの類は、つぎのようにさらに細かく分けることができる。

I類a　基部のえぐりの浅いもの　（5～12、14・15・20・25)

I類b　基部のえぐりが深く、脚端が直線状のもの　(13)

I類c　基部のえぐりが深く、脚端が尖鋭であるもの　(16)

II類a　凸基有茎鏃（21・23・24)

II類b　平基有茎鏃（25)

I類については、その帰属する時期を決めることはむずかしいが、II類の有茎鏃は、縄文後期・晩期に数多く出土することが確かめられつつあり、木戸場遺跡でも、少数ながら晩期前葉の土器が出土していることから、晩期のものと思われる。

楔状石器は、8点のうち、破砕したもの2点をのぞく6点を図示した。扁平な剝片を用いて、上・下に潰痕があるものが多いが、いわゆる截断面をもつもの（29）や角柱状のものなどもある。石質はチャートのものがほとんどである。31は、凝灰岩製の大形品で、半分欠けている。

石斧は、図示した2点は打製であるが、ほかに1点、定角式の磨製石斧の刃部細片が出土している。32は、扁平な礫を素材としたもので、粗雑な周縁の加工がなされている。33も、同じく粗く周縁を加工したものであるが、器体の中ほどにえぐりがあり、分銅形と思われる。注目されるのは、断面図からうかがえるように、図の表面の側が上から下まで断面弧状にくぼんでいることである。ただ、ゆるい細かな凹凸があり、自然面である。このくぼみのカーブに沿って、刃部もまっすぐではなく曲っている。図の表面の左側の側縁は、破損して原形をとどめていないと思われる。

磨石は、表・裏の両面ともに磨痕が著しい。

類スタンプ形石器は、半分に割った礫の、割ってできた裂面に弱い磨耗痕がみられ、裂面の縁辺には細かい剝離痕がみられる。

スタンプ形石器は、同じく半分に割った礫を素材としているが、裂面上には使用痕、加工痕ともにみられないものの、裂面から石器の側面に対して小さな剝離が加えられている。

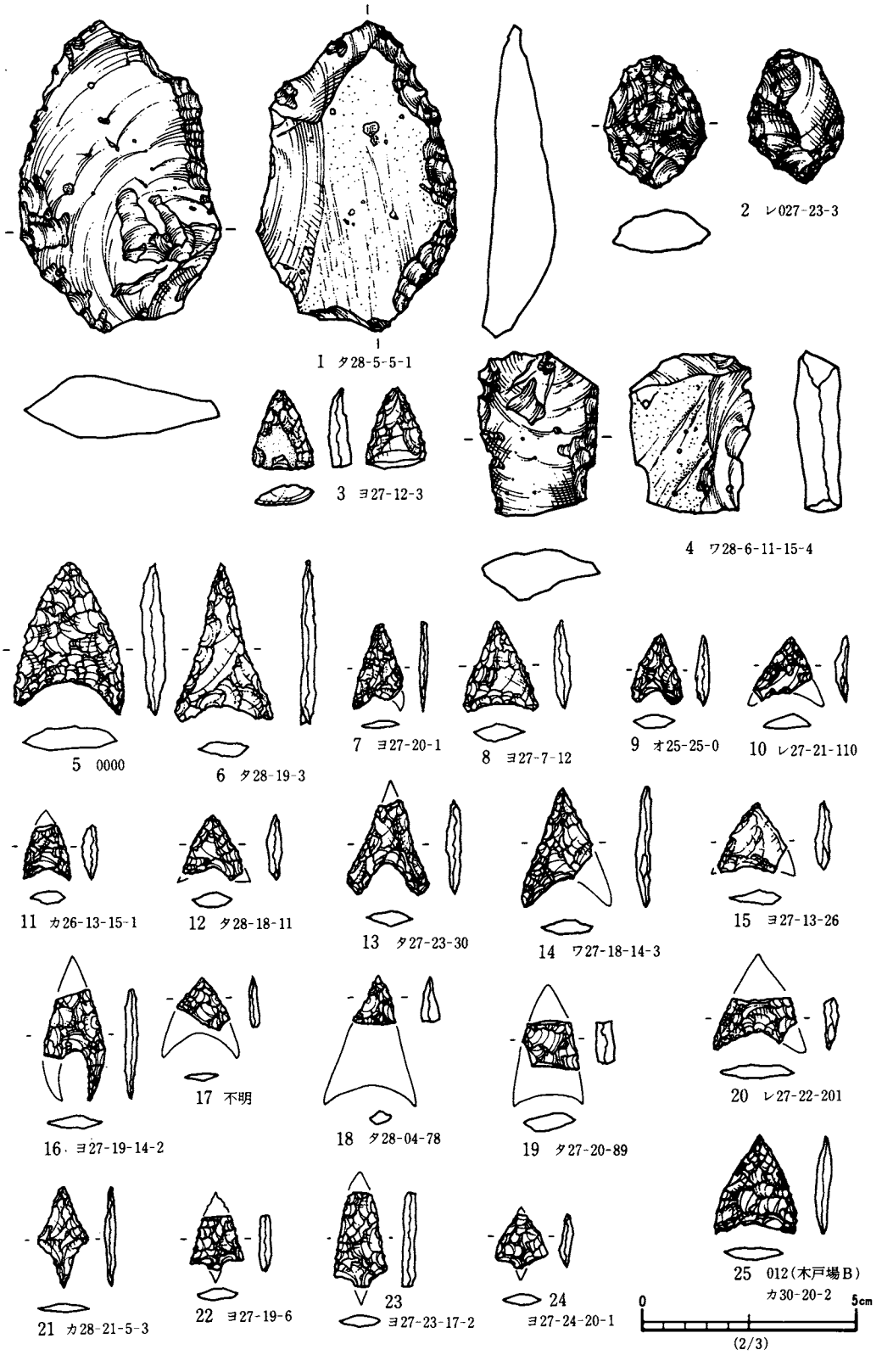
以上2点の石器は、下総台地では類例があまり見つかっていないことから、注目される資料と

いえよう。

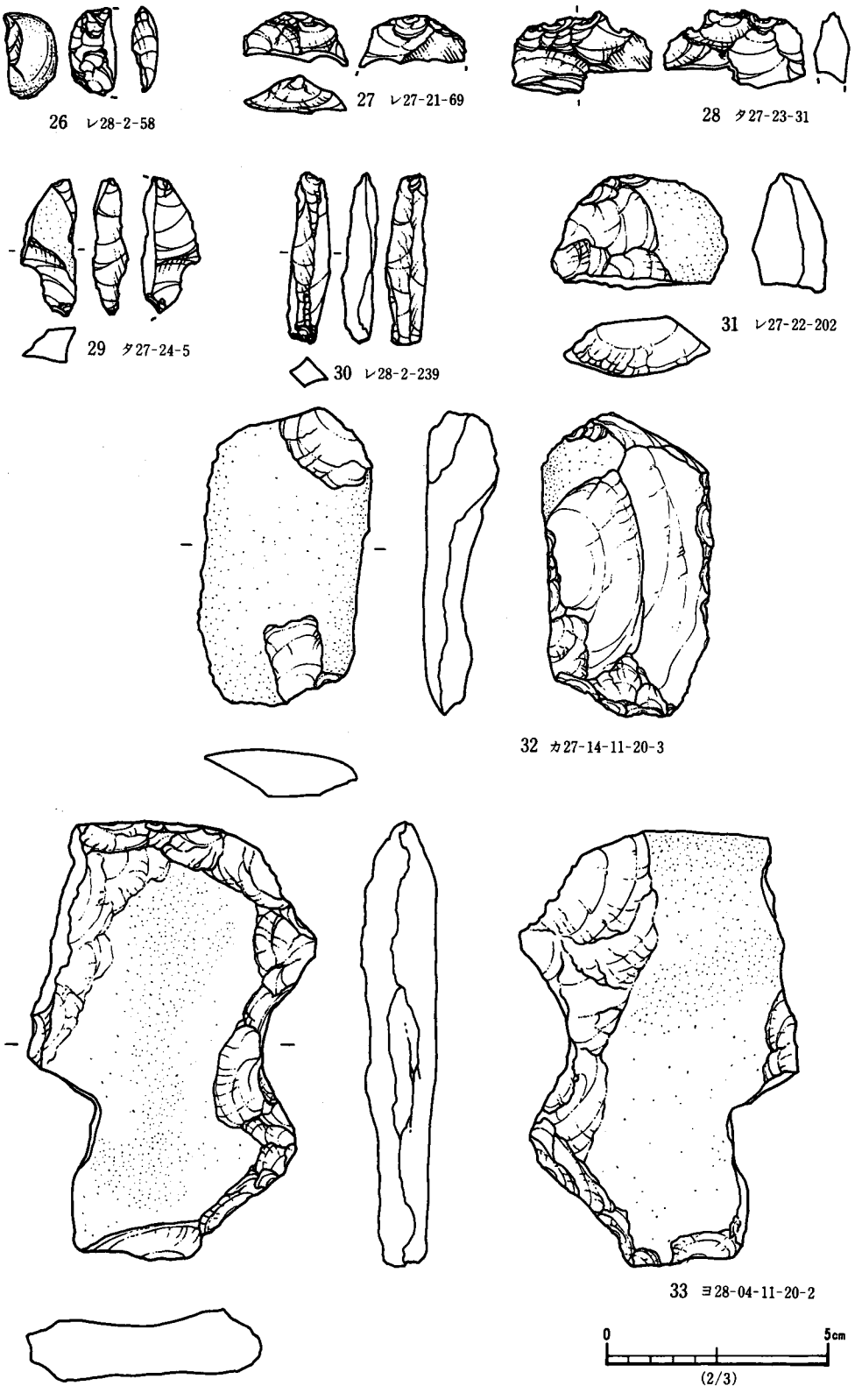
石皿の破片は、それぞれ別の個体の石皿のものである。37は、片面に凹部のある小形のもので、裏面には小さな孔が4つあいている。孔は、直径10㎜前後、深さ5㎜前後で、口から奥へ向って、すぼまっている。配置には規則性はみられない。器体の縁辺部は敲打によって丸く整えられているが、裏面は原礫面をのこす。石質は多孔質である。38は、これも37と同様に、凹面は片面のみで、他面には小孔の穿たれた原礫面がのこされている。また、縁辺の加工も、同じく敲打によっている。図で示した割れ口のところは、実際には、磨耗が進んで、縁辺は丸くなっている。小孔は、凹面に2つ、裏面に2つあり、直径5㎜～20㎜、深さ3㎜～約13㎜と、大きさに幅がある。これも37と同様に、口から奥に向って円錐形にすぼまる。39は、以上の2点に対して、表裏両面ともに凹面であるタイプのもので、破損しているものとみなしたが、割れ口の縁辺が丸くまっているので、これで完形かもしれない。やはり縁辺の原礫面には、敲打による粗い調整痕がみてとれる。この石皿破片には、小孔はない。

第29表　縄文時代石器観察表

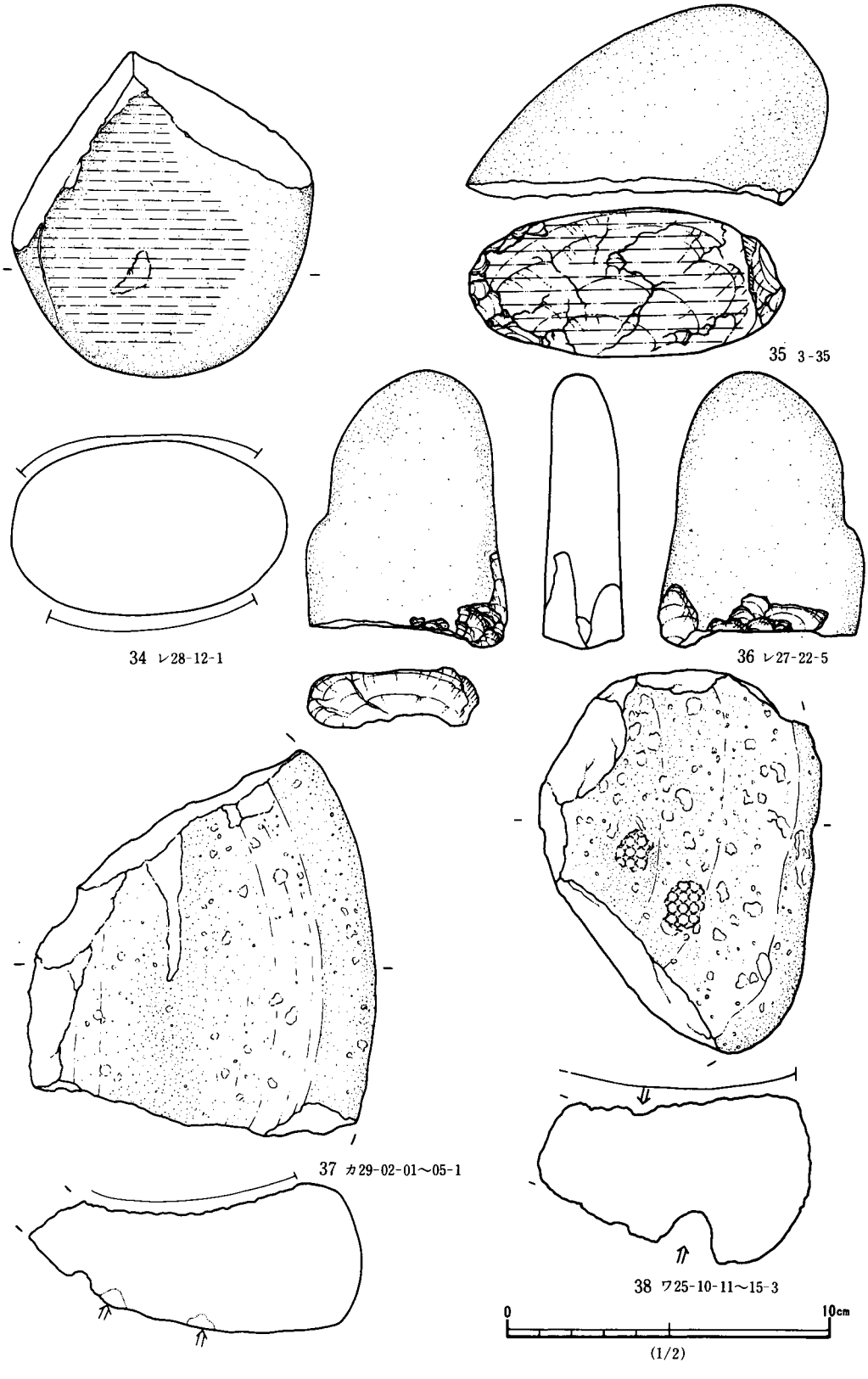
挿図番号	器種	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	遺存状況	備考
1	側削器	黒曜石	70.5	45.0	14.6	42.0	完形	4と同一母岩。
2	端削器	黒曜石	30.2	24.1	8.7	5.4	完形	
3	石槍	玄武岩	19.0	14.6	4.4	1.3	先端部	先土器時代の石器の可能性大。
4	側削器	黒曜石	36.2	28.4	10.2	12.5	完形	1と同一母岩。
5	石鏃	黒曜石	35.7	25.6	4.4	3.1	完形	Ⅰ類a
6	〃	玄武岩	35.7	22.9	3.4	2.0	完形	〃
7	〃	チャート	20.5	11.1	2.3	0.3	脚部欠	〃
8	〃	チャート	19.7	17.7	3.6	1.0	完形	〃
9	〃	チャート	16.2	11.8	3.4	0.5	完形	〃
10	〃	黒曜石	15	14	4	0.3	脚部欠	〃
11	〃	チャート	12.5	11.8	2.6	0.3	先端欠	〃
12	〃	チャート	14.8	13.8	3.6	0.5	脚部欠	〃
13	〃	チャート	21.1	19.4	3.8	1.0	先端欠	Ⅰ類b
14	〃	チャート	28.4	12.6	4.2	1.2	脚部欠	
15	〃	玄武岩	16.7	15.9	4.1	0.9	脚部欠	
16	〃	珪質頁岩	25.3	14.1	2.7	0.6	先端・脚部欠	Ⅰ類c
17	〃	黒曜石	11.4	12.3	1.9	0.2	先端部	
18	〃	黒曜石	11.7	10.0	4.6	0.3	先端部	
19	〃	黒曜石	11.1	14.1	4.0	0.7	身部	
20	〃	黒曜石	11.5	20.5	3.6	0.6	先端・脚部欠	17と酷似した母岩、Ⅰ類a。
21	〃	玄武岩	22.7	12.5	2.9	0.5	完形	有茎鏃Ⅱ類a
22	〃	チャート	12.4	12.8	2.8	0.4	先端・茎部欠	有茎鏃Ⅱ類b



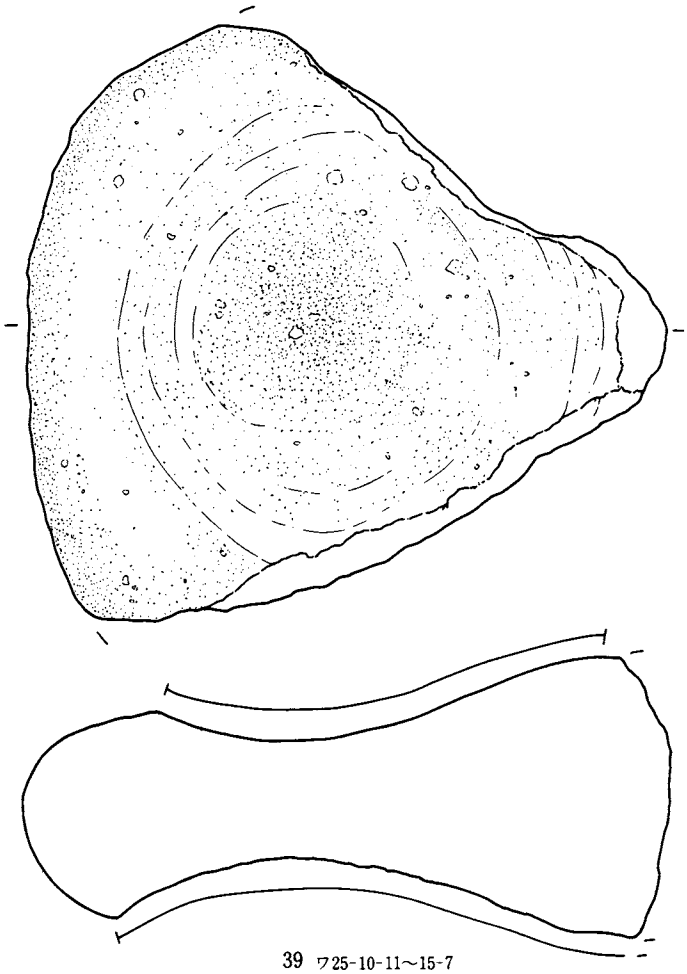
第115図　縄文時代出土石器 (1)



第116図　縄文時代出土石器 (2)



第117図　縄文時代出土石器 (3)



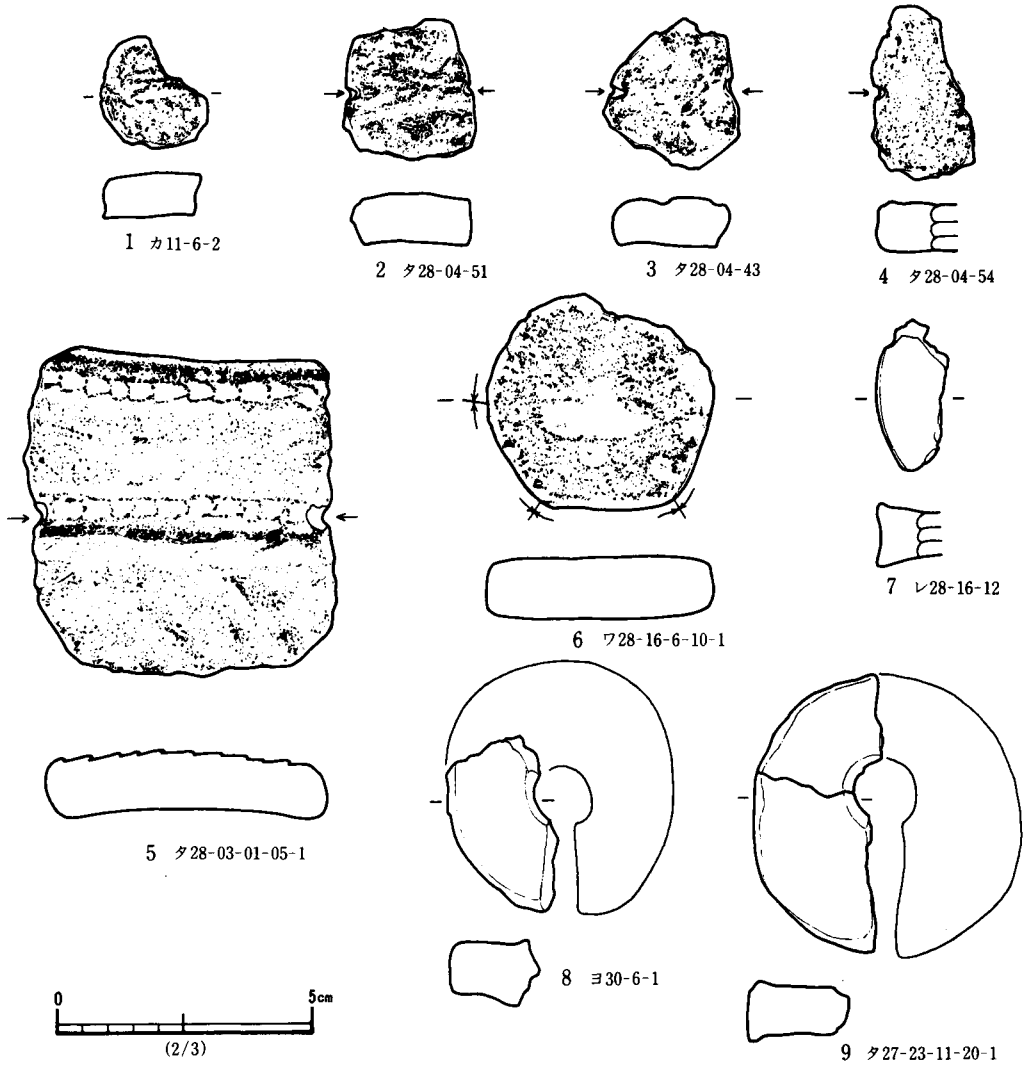
第118図　縄文時代出土石器 (4)

挿図番号	器種	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	遺存状況	備考
23	〃	チャート	21.5	12.4	3.3	1.0	先端・茎部欠	有茎鏃II類a
24	石鏃	チャート	12.5	12.6	3.0	0.4	〃	II a類
25	〃	チャート	22.6	19.5	3.5	1.2	完形	I類a、B地点出土。
26	楔状石器	チャート	19.3	11.6	6.0	1.4	半欠	截断面あり。
27	〃	チャート	10.1	22.9	7.7	1.6	半欠	
28	〃	チャート	19.0	31.2	9.4	4.1	半欠	
29	〃	チャート	30.7	12.3	7.0	2.2	半欠	截断面あり。
30	〃	玄武岩	37.9	8.9	6.8	2.6	完形	
31	〃	凝灰岩	24.4	39.4	15.1	15.5	半欠	
32	打製石斧	硬砂岩	65.8	39.5	17.9	46.9	完形	
33	〃	花崗岩	97.1	62.7	14.1	100.5	一部欠	

挿図番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺存状況	備考
34	磨石	細粒閃緑岩	101.2	95.5	53.1	625.0	半欠	
35	類スタンプ形石器	閃緑岩	64.1	115.2	44.3	360.0	完形	
36	スタンプ形石器	石英閃緑岩	78.6	62.4	22.3	180.0	完形	
37	石皿	多孔質安山岩	116.8	107.1	50.0	730.0	破片	穿孔あり。
38	〃	〃	118.1	86.8	56.2	760.0	〃	〃
39	〃	〃	158.0	167.0	74.2	1860.0	半欠	穿孔あり、完形の可能性あり。

土製品（第119図）

土器片錘（1～5）、土器片利用円板(6)、玦状耳飾（7～9）が得られた。



第119図　縄文時代出土土製品

第4節　歴史時代

歴史時代の遺構は、A地点では、方形周溝1、溝9と炭焼穴で、B地点では、住居跡2、円形周溝2、塚1、溝15である。A地点、B地点の順で述べる。

1．A地点

(1)遺　構

方形周溝（201）（第120・121図、図版41）

北東にのびる台地の南東側に位置し、A・B2地点の境近くにある。昭和56年度の上層確認調査で周溝の一部がみつかり、昭和57年度に調査をおこなった。

所在する一帯は調査前は牧草畑として耕作されており、調査前の観察では高まり等は認められなかった。遺構の検出面は、表土層下の暗褐色土層面であった。

平面形は、北西辺が他辺より短いため、やや台形に近い形である。

周溝は、北東辺から南東辺中央付近までやや幅が狭い。断面形は、幅広いU字形ないし逆台形である。底面は、比較的平坦であるが、北東辺及び南西辺南コーナー近くではやや深い。しかし、埋葬施設ではない。

規模は、NW－SE8.88m、NE－SW8.74mであるが、各辺はNW8.01m、NE8.53m、SE8.54m、SW9.08mであり、NW辺が他辺より短い。NW－SEの長軸方位は、N－32°－Wである。4辺は、おおむね直線に掘り込まれているが、周溝内側の各コーナー部分の上部は、崩れて丸味を帯び、それは特に西・南側で著しい。

周溝は、北西辺中央付近から北東辺、そして南東辺中央付近にかけてやや狭く、1.02～1.36mであるが、これより西側は広く、1.43～1.50mである。深さは、0.25～0.45mであり、東側へ向ってやや浅くなる。

周溝覆土は、黒色～黒褐色土が目立ち、下部までみられる。ローム土、ローム粒子が混入するが、顕著ではない。

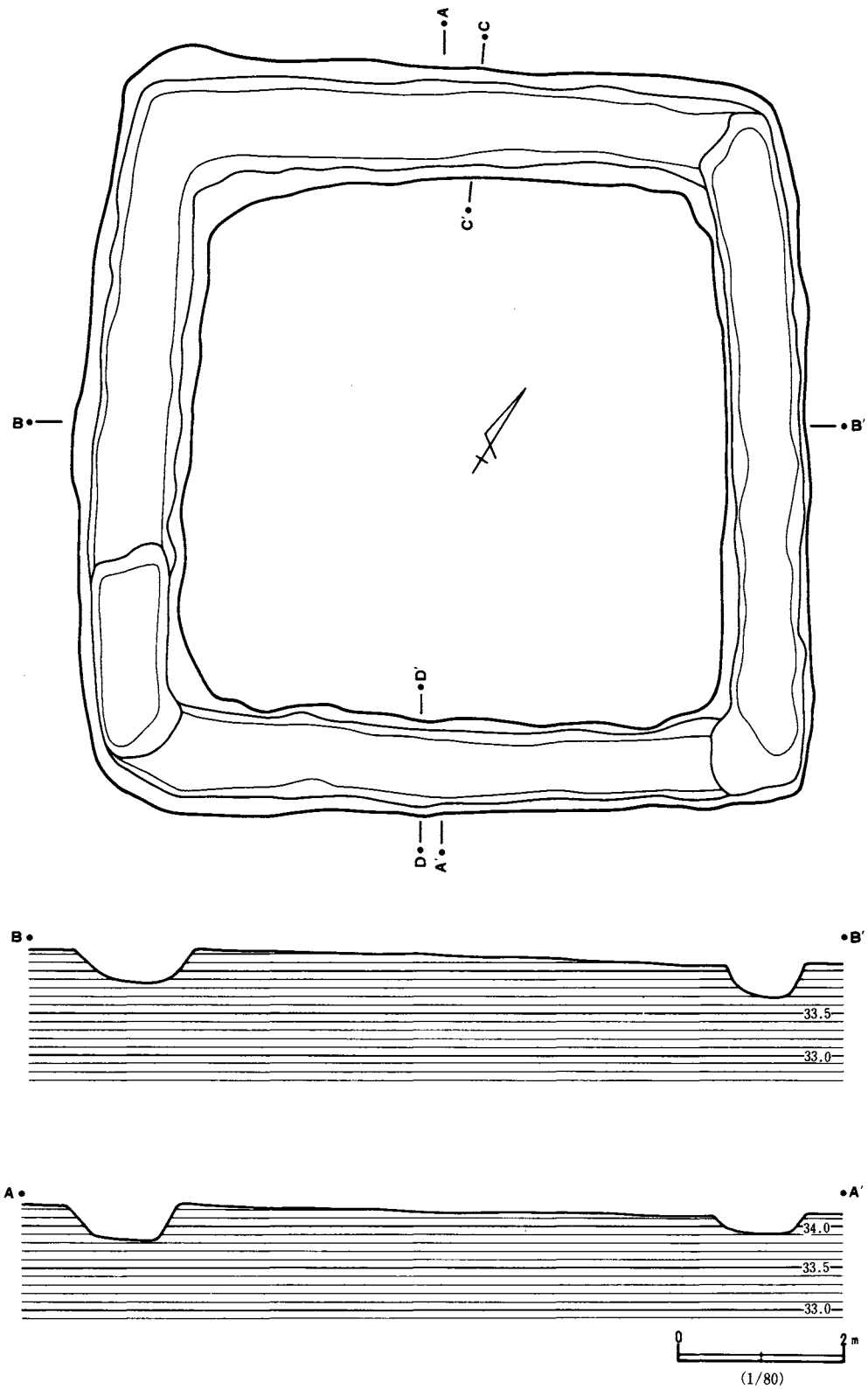
出土遺物は、南西周溝覆土上部の須恵杯の小破片だけである。

周溝に囲まれた方台部内には、いわゆる旧表土層はなく、埋葬施設もなかった。

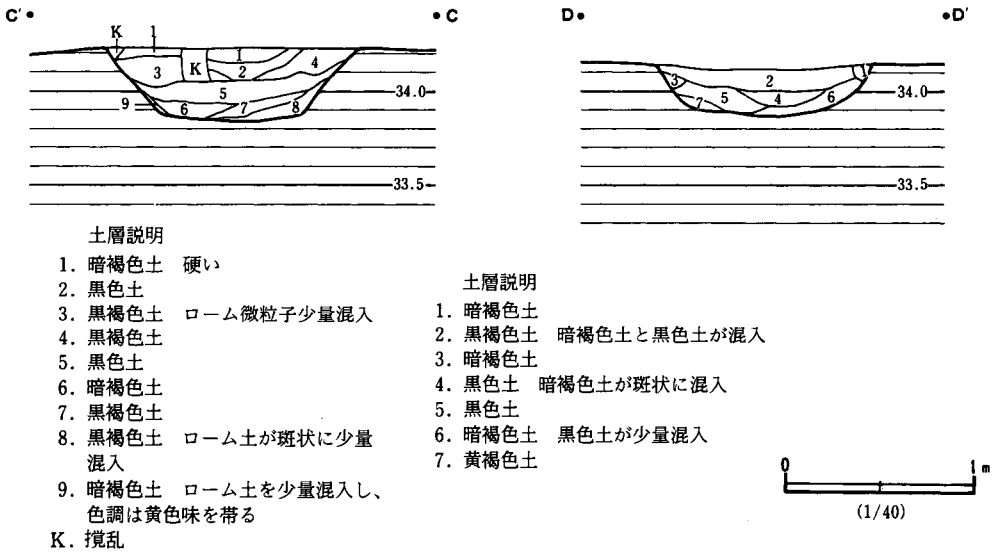
溝（別図1、図版41）

A地点では、確認調査あるいは本調査によって9条の溝がみつかった。しかし、その全てについて本調査を実施するには至らず、M1～5については、その一部分を調査し、M6～9については、確認調査段階での平面プランの確認、記録にとどまった。

9条の中には、M1・3のように道の跡と考えられるもの、M2・4のように台地の縁辺を谷に沿って走るもの、M5のように、台地の縁辺を走るものの、底面にピット状のくぼみがあり、谷側に低平な盛土があるものなど、性格の異なるものがみられる。



第120図　方形周溝実測図（011-201）



土層説明

1. 暗褐色土　硬い
2. 黒色土
3. 黒褐色土　ローム微粒子少量混入
4. 黒褐色土
5. 黒色土
6. 暗褐色土
7. 黒褐色土
8. 黒褐色土　ローム土が斑状に少量混入
9. 暗褐色土　ローム土を少量混入し、色調は黄色味を帯る

K. 撹乱

土層説明

1. 暗褐色土
2. 黒褐色土　暗褐色土と黒色土が混入
3. 暗褐色土
4. 黒色土　暗褐色土が斑状に混入
5. 黒色土
6. 暗褐色土　黒色土が少量混入
7. 黄褐色土

第121図　方形周溝周溝覆土断面図（011-201）

道の跡と考えられるＭ１は、台地の東側斜面から、台地を斜めに横断するように、ほぼ東西にのびている。東はさらにのびて、谷津へ下り、谷津の対岸の池向遺跡の台地へとつづいているのであろう。西もさらにのびて、浅い谷をわたって、その谷の対岸にある明代台遺跡Ｂ地点の台地へとつづいているものと思われる。

Ｍ３は、台地の東側斜面にあり、Ｍ１と交差している。また、台地の中央部で、Ｍ１から分かれて、Ｍ６・７の２条の溝が南西方向にのびる。この２条の溝は、道跡か否か不明であるが、互いにほぼ平行して走っていることからして、農作業用等の小径である可能性がある。Ｍ８・９については、よくわからないが、谷から台地平坦部へ向ってのびるようであり、地境の溝あるいは道の跡であろう。

Ｍ２・４・５のような台地の縁辺を走る溝は、地境・防禦用的な意味があるものと思われ、特にＭ５のような形態のものは、その可能性が強いと思われる。Ｍ２は、規模からみて、地境の溝である可能性の方が強い。Ｍ４は、どちらとも考えられる。

炭焼穴

Ａ地点には、数多くの炭焼穴が存在しているようであったが、昭和57年度の第２次の本調査において、その一部を調査した。

調査した総数は、７基であるが、散在していて、集中している様子はみられない。ただ、調査区域の中ほどに北から浅い谷が入り込んでいるが、その谷の中からはみつからず、谷は避けてつくっているようである。

平面形は、崩れたものも存在したが、おおむね、正方形であり、底面の形はいずれも正方形であった。覆土中からは炭化物、生焼けの木材、鉄片等が出土したが、その年代を知り得るものは

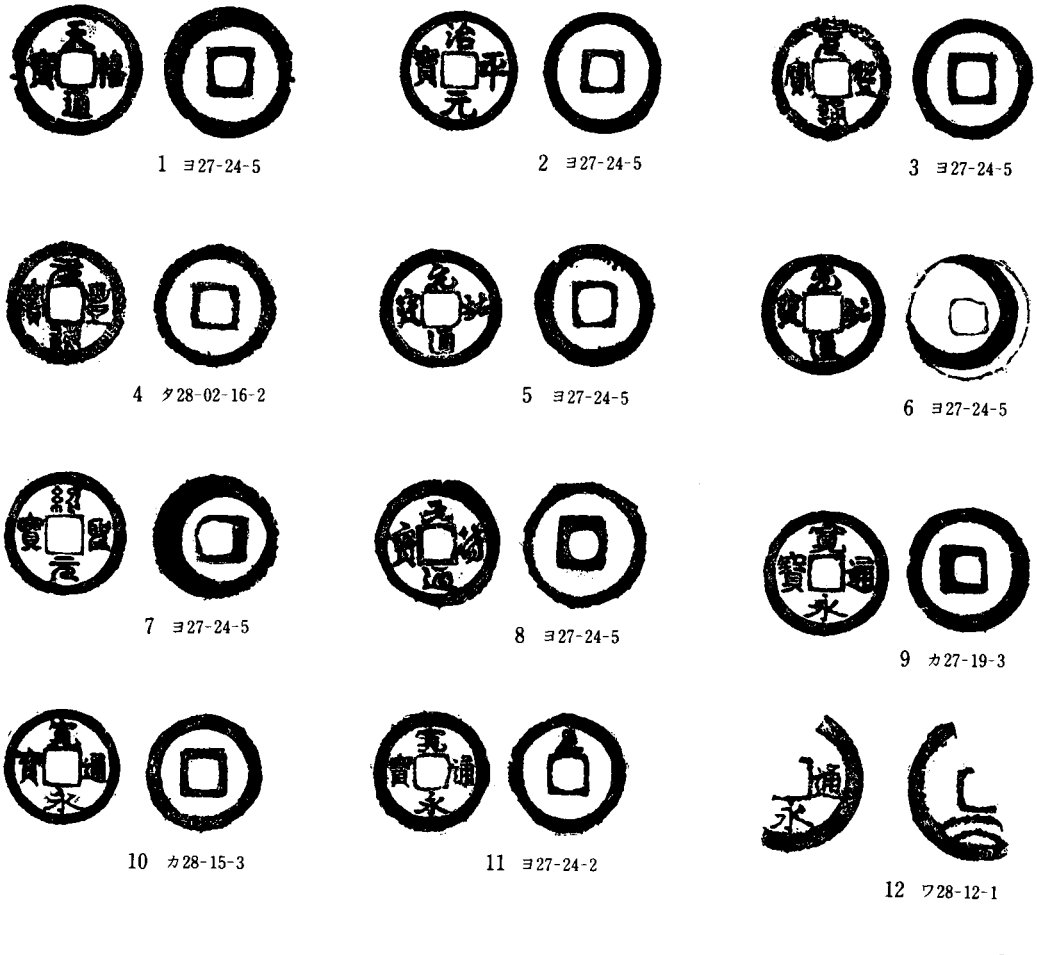
なかった。しかし、生焼けの木材などは、この種の炭焼穴がかなり新しい時期まで使用されていたことを示していよう。

古　銭（第122図、第30表）

A地点からは、銅銭12枚（1～12）と鉄銭の破片1が出土したが、全てグリッドからの出土であり、遺構出土のものはない。

1～3・5～8は、同じグリッドで出土したもので、この7枚が重なった状態でみつかった。いずれも北宋銭であり、1は「天禧通宝」、2は「治平元宝」、3は「元豊通宝」、5・6は「元祐通宝」である。5と6は書体が異なり、6の背面の外縁は、ずれて鋳出されている。7は「紹聖元宝」で、背面の外縁と内郭の幅は、不均等な鋳出しである。8は「元符通宝」である。

のこる5枚のうち、4は「元宝通宝」であり、9～12は寛永通宝である。9はいわゆる古寛永に属するもので、10～12は新寛永に属するものである。11の背面には、「足」の字がみられる。12は、その半分を欠くが、ほかの銭貨に比べて大形である。背面には2条の波形文がみられる。



第122図　A地点出土古銭

第30表　A地点出土古銭観察表

外径・内郭内長・外縁厚は平均値である。

挿図番号	銭貨名	初鋳年	外径(mm)	内郭内長(mm)	外縁厚(mm)	重量(g)	遺物番号	備考
1	天禧通宝	1017	25.70	6.25	1.18	3.7	ヨ27—24—5	
2	治元平宝	1064	23.60	5.92	1.54	4.1	ヨ27—24—5	
3	元豊通宝	1078	23.92	6.55	1.34	3.0	ヨ27—24—5	
4	元豊通宝	1078	24.05	6.07	1.19	2.5	タ28—02—16—2	
5	元祐通宝	1086	24.00	6.55	1.36	3.6	ヨ27—24—5	
6	元祐通宝	1086	24.25	7.00	1.16	3.3	ヨ27—24—5	
7	紹聖元宝	1094	24.30	6.60	1.36	3.8	ヨ27—24—5	
8	元符通宝	1098	24.87	5.85	1.26	4.0	ヨ27—24—5	
9	寛永通宝		24.97	5.40	1.50	4.5	カ27—19—3	
10	寛永通宝		23.25	6.20	1.15	2.7	カ28—15—3	
11	寛永通宝		23.20	6.30	0.90	1.9	ヨ27—24—2	
12	寛永通宝		—	—	1.11	2.1	ワ28—12—1	半欠

2．B地点

B地点で発掘調査をおこなった住居跡は2つである。別図のB地点全測図には、太線で囲んだ調査区域の外に、6つの住居跡が入っているが、この6つは、当該の畑の表土が偶然除去された際に、位置だけを記録したものである。その後、この場所は、工業団地外周の緑地帯になっている。

(1)遺　構

第1号住居跡（002）（第123～125図、第31表、図版43・65）

調査区域の南端に位置する。台地の平坦面上であるが、100m足らず南へいくと斜面に変わる。溝を切ってつくられた可能性が極めて強い。

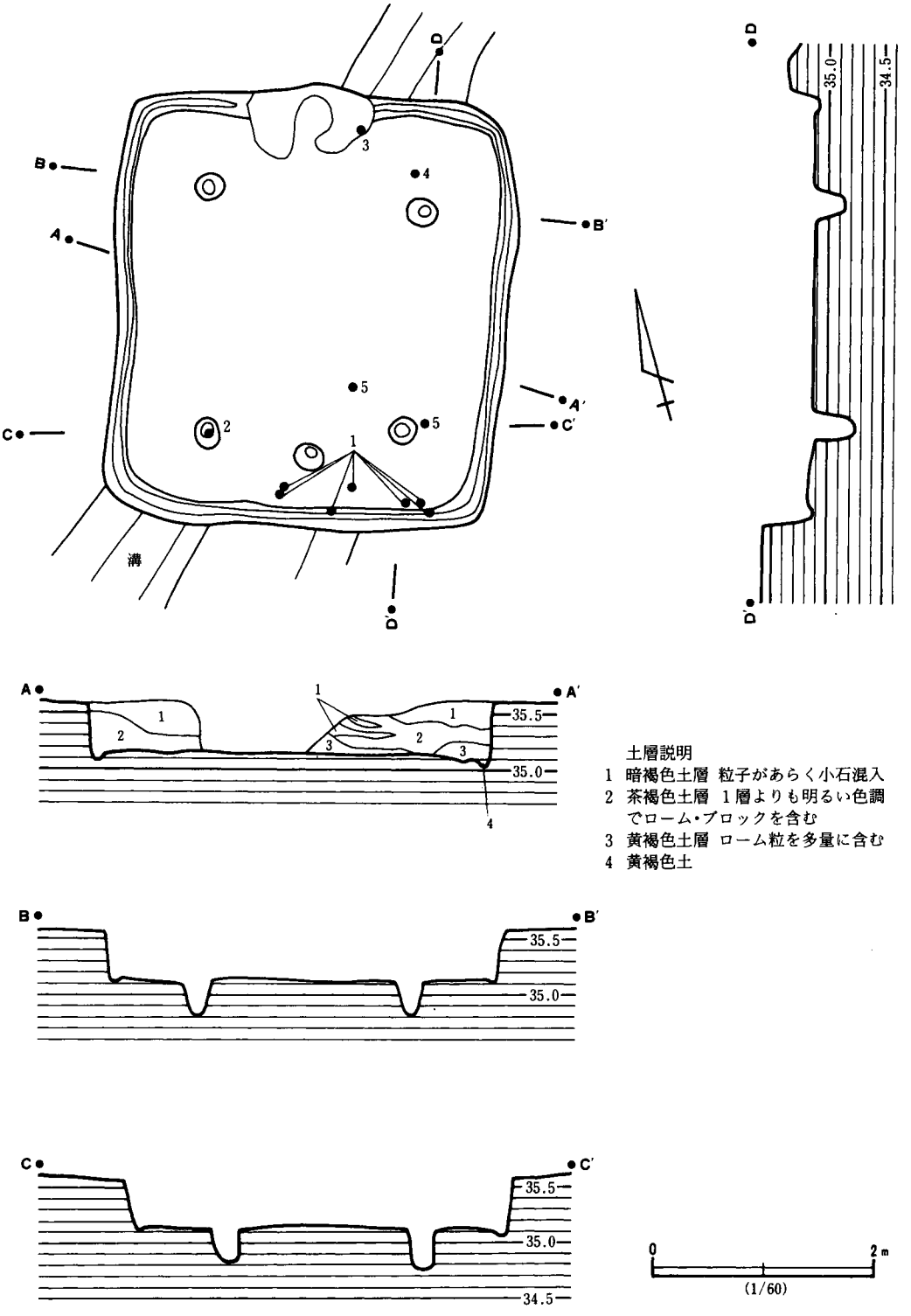
平面形態は、ほぼ正方形である。南北方向が東西方向にくらべてやや長い。南北5.7m、東西5.1mである。主軸の方向は、N－20°－Eである。

壁は、高さ約50cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って、カマドの煙道を除いて、壁溝がめぐる。

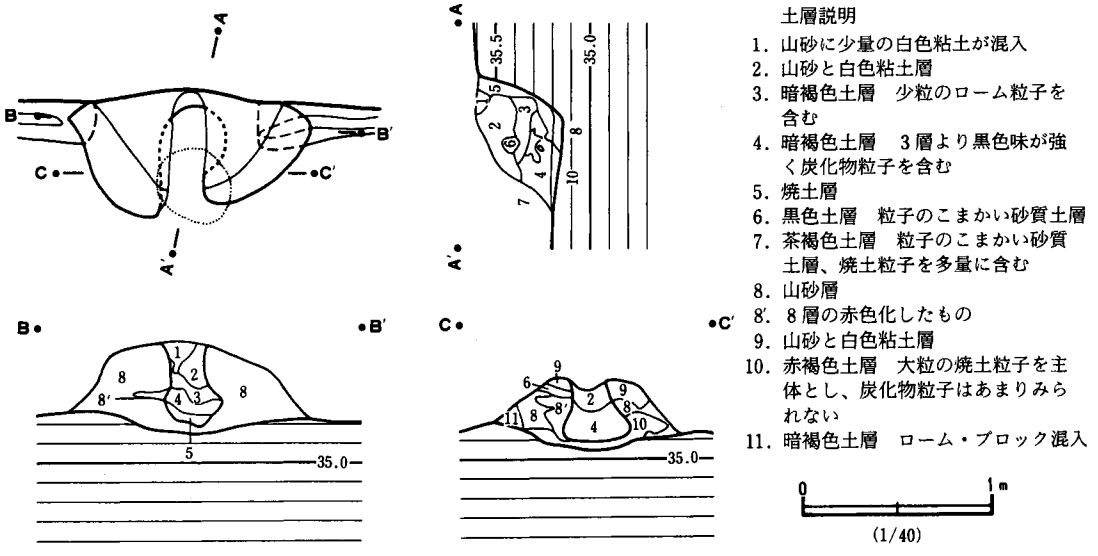
床面は、硬質のハードロームをほぼ水平に固めている。

柱穴は、5つみつかったが、カマドの対面に位置するものは、他のものよりも浅くて狭いもので、補助的ないしは柱状の他の構築物の支柱と考えられる。

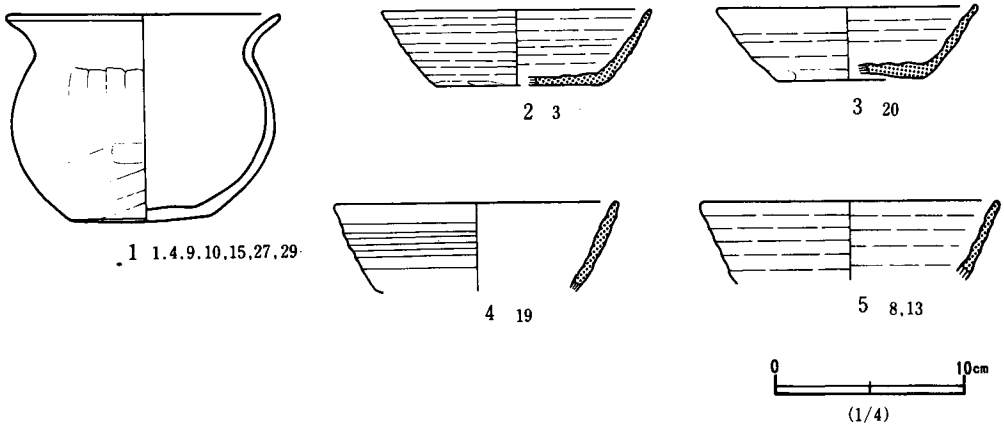
カマドは、北側の壁のほぼ中央に位置し、袖部が溝にかかっているものの、溝で破壊され流出した様子はみられない。この溝の底は、住居跡の床面に達しておらず、住居跡の両側では、溝の底は、ソフトローム層中にある。カマドは山砂で築かれていた。壁への煙道の掘り込みは、あまりない。



第123図　第1号住居跡実測図（012-002）



第124図　第1号住居跡カマド実測図（122-002）



第125図　第1号住居跡出土土器（012-002）

完形あるいはそれに近い土器は、出土しなかった。破片は、住居跡全体に一様に散らばって出土した。出土土器は第125図に示す。

覆土は、土層断面図の真ん中の空白部分は溝のところで、レンズ状堆積のようである。

第31表　第1号住居跡出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	小型甕	108	140	72	136	¼	良	暗褐色	密 砂粒含	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ ヘラナデ	底	ヘラナデ		+1 ～+23	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	ナデ			

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
2	須恵坏	39	143	88	—	¼	良	灰色	密 長石粒多	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		+1	手ヘラは手持ヘラ削。以下同じ。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ 後ナデ	底	ロクロ 後ナデ			
3	須恵坏	38	140	78	—	¼	良	灰色	密 石英・長石多	外	口	ロクロ 後ナデ	胴	ロクロ後ナデ 下部手ヘラ	底	手ヘラ		+31	
										内	口	ロクロ 後ナデ	胴	ロクロ 後ナデ	底	ロクロ 後ナデ			
4	須恵坏	—	152	—	—	底部欠 ⅙	良	黒褐色 淡褐色	やや粗 長石・雲母含	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	—		+3	土師質
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	—			
5	須恵坏	—	160	—	—	小片	良	淡赤褐色	やや粗 長石・雲母含	外	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	—		+20 ～+26	土師質
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	—			

第2号住居跡（003）（第126～128図、第32表、図版43・65）

調査区域の南端、第1号住居跡の北西約25mに位置する。溝に切られているものと思われる。溝の調査中に、土器片の集中とカマドの山砂からその存在がわかった。

平面形態は、正方形で、1辺4.8mである。主軸の方向は、N－5°－Wである。

壁は、高さ約50cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って、カマドの煙道を除いて、壁溝がめぐる。

床面は、ハードローム層中である。

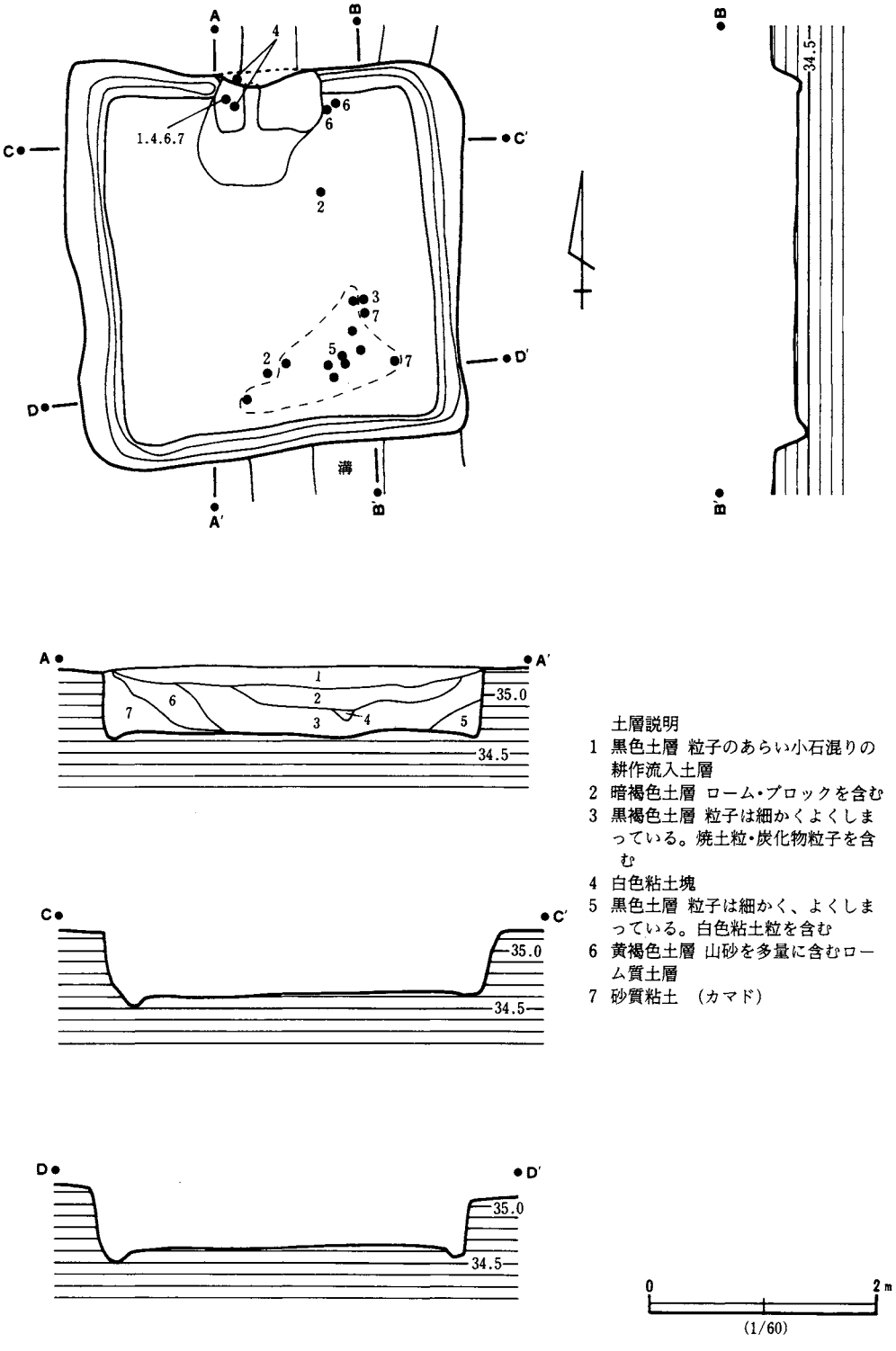
柱穴その他のピットはみつからなかった。

カマドは、煙道の立ち上がり部分で壁が外側へ掘り込まれているものの、煙道のために山形に壁を掘るというようなことは、みられなかった。山砂と白色粘土で築かれていた。完形あるいはそれに近い土器は、出土しなかった。遺物は、住居跡を切る溝の断面に沿って集中する状況がうかがえた。出土土器は第128図に示す。覆土は、レンズ状の自然堆積を思わせる堆積状況である。

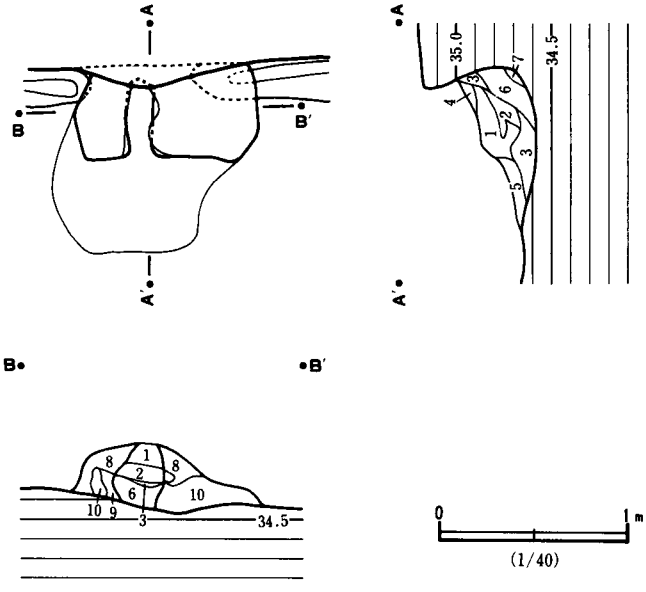
第32表　第2号住居跡出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	甕	—	200	—	—	口縁部	良	茶褐色	密 砂粒含	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ 後ナデ	底	—		+50	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	—			
2	小型甕	—	—	—	—	小片	良	暗赤褐色	密 砂粒含	外	口	ヨコナデ	胴	ヘラケズリ	底	—		+8 ～+18	
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	—			
3	埦	—	—	—	—	⅙	良	暗褐色	密	外	口	—	胴	ナデ	底	—		+15	外面に輪積痕をのこす。
										内	口	—	胴	ナデ	底	—			
4	埦	—	110	—	—	⅓	良	赤褐色	密	外	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	—		0～+14	外面に輪積痕をのこす。
										内	口	ヨコナデ	胴	ナデ	底	—			
5	坏	47	135	85	—	⅓	良	外淡褐色 内赤褐色	密	外	口	ヨコナデ後 ヘラケズリ	胴	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ後 ナデ		+1 ～+18	胴部内面のナデはミガキに近い。底部に達しない。
										内	口	ヨコナデ 後ナデ	胴	丁寧なナデ	底	ナデ			

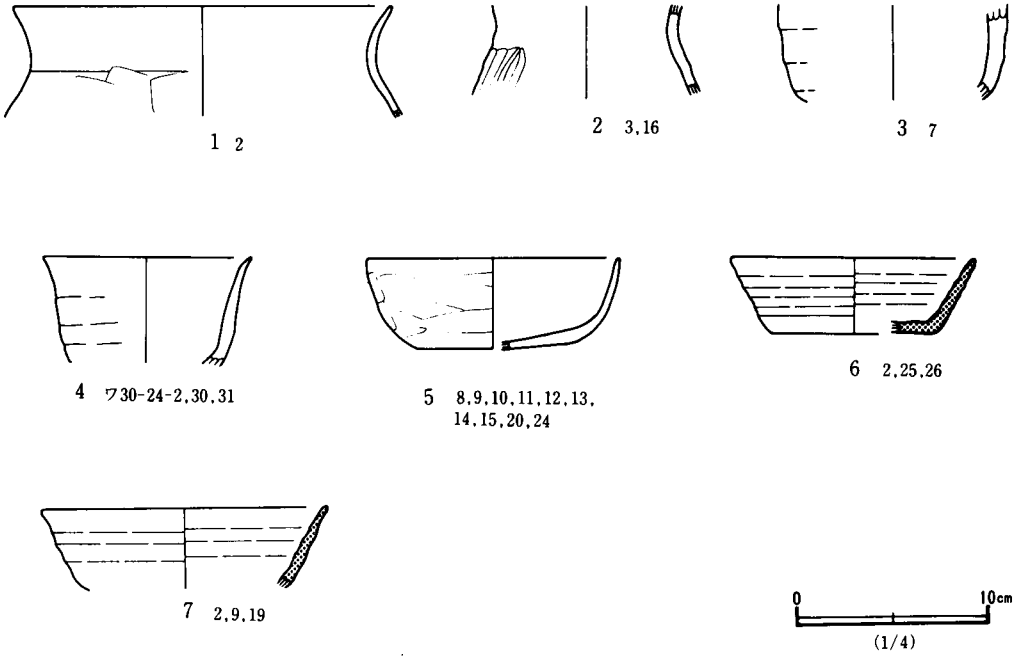


第126図　第2号住居跡実測図 (012-003)



土層説明
1. 山砂と白色粘土層　炭化物粒子を含む
2. 焼土層
3. 赤褐色土層　焼土粒及び炭化物粒子を多量に含む
4. 暗褐色土層　粒子のこまかい砂質土層、炭化物粒子を多量に含む
5. 山砂と白色粘土層　焼土粒を含む
6. 暗褐色土層　粒子のあらいボソボソの土層、焼土粒、炭化物粒子を含む
7. 黄褐色土層　ソフトロームの流入層
8. 山砂と白色粘土
9. 8層が赤色化したもの
10. 赤褐色土層

第127図　第2号住居跡カマド実測図（012-003）



第128図　第2号住居跡出土土器（012-003）

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整									出土状況(床面からcm)	備考
6	須恵坏	39	128	86	—	⅙	良	淡灰色	密 雲母含	外	口	ロクロ後ナデ	胴	ロクロ後ナデ	底	回ヘラ			+8～+50	回ヘラは回転ヘラ削。土師質。
										内	口	ロクロ後ナデ	胴	ロクロ後ナデ	底	ロクロ後ナデ				
7	須恵坏	—	152	—	—	⅙	良	灰色	密 長石・雲母多	外	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	—			+30～+50	
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	—				

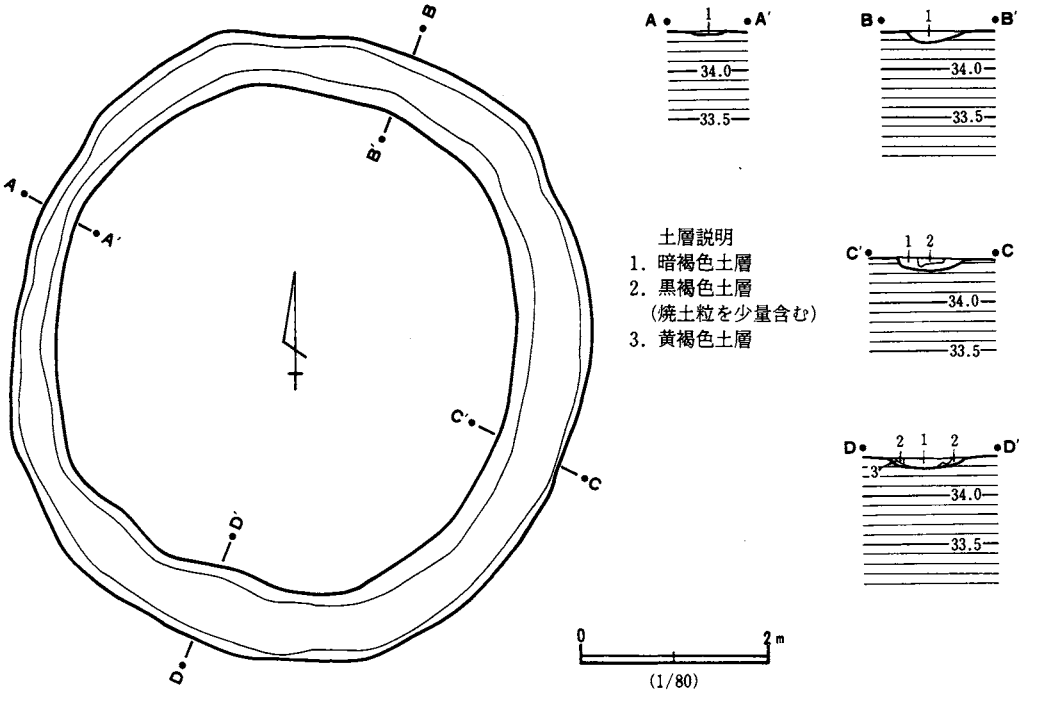
第１号円形周溝（001）（第129図・図版44）

Ｂ地点の北端で、Ａ地点との境界近くに位置する。木戸場遺跡の所在する台地の平坦部の東側の縁に近い。調査前、一帯は牧草畑であって、高まり等は認められなかった。

平面形は、ほぼきれいな円形である。周溝の幅は、北西側で狭くなっている。

規模は、直径は、南北方向が6.5m（周溝内側計測値5.2m、以下同じ）と長く、東西方向は6.0m（4.8m）と短い。周溝の幅は、0.32～0.8mであり、既述の通り、北西側が狭い。深さは、4～12cmときわめて浅く、耕作による削平で浅くなっとしても、本来それほど深くなかったと思われる。

周溝覆土は、上部に黒褐色土、下部に暗褐色土が堆積していたが、覆土からは、盛土があったか否かを推測することはできない。周溝内あるいは周溝内側からの出土遺物はなかった。



第129図　第１号円形周溝実測図（012-001）

第２号円形周溝（004）（第130図・図版44）

Ｂ地点の東側、第１号円形周溝のほぼ真南約80mのところに位置する。台地の平坦部である。調査前、一帯は畑であって、高まり等は認められなかった。

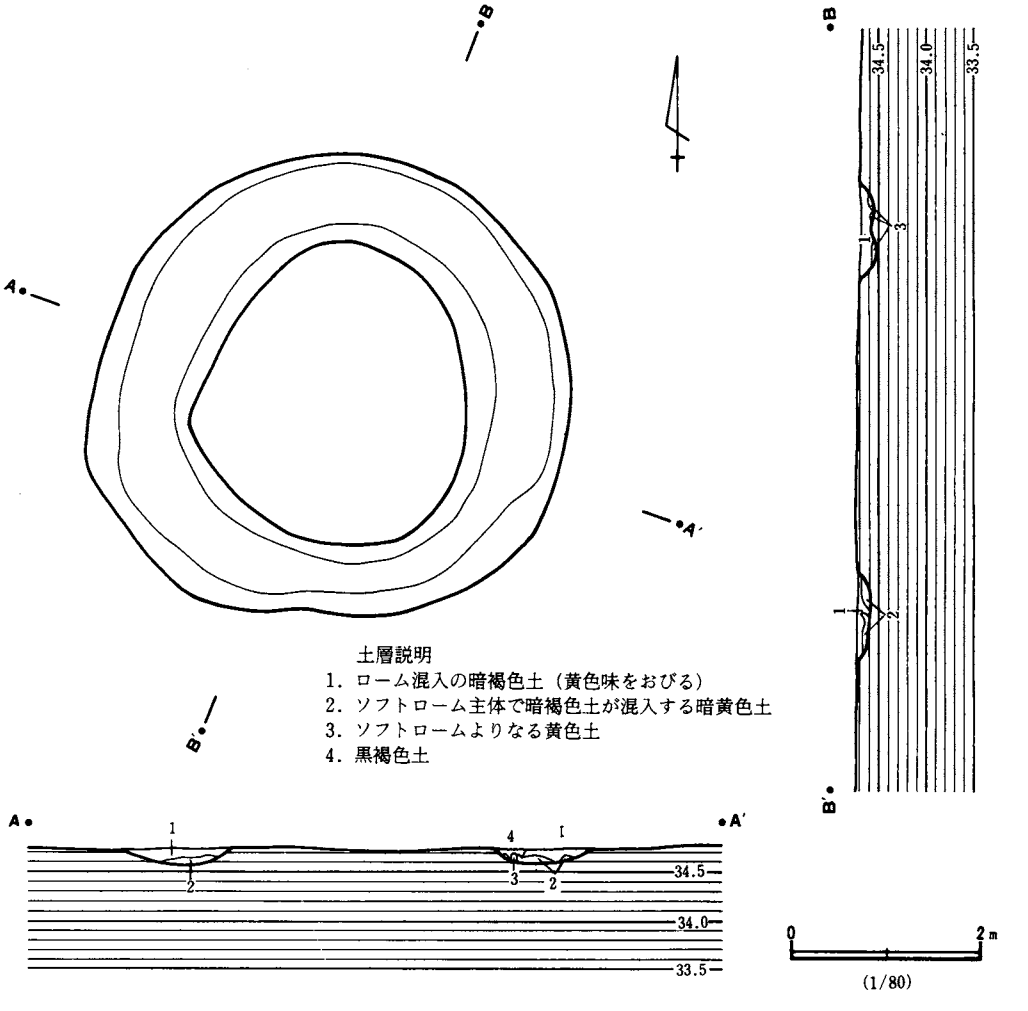
平面形は、外周は、南西側がやや突き出たものの、ほぼきれいな円形である。周溝内側は、北側がとがった卵形である。周溝は、南側が狭くなっている。

規模は、直径は4.8m前後で、ＮＥ－ＳＷ方向がやや長く5.0mである。内周の直径は2.8～2.9mであるが、Ｎ－Ｓ方向がやや長く3.1mである。周溝の幅は、0.8～1.1mで、既述の通り、南側が狭い。深さは、14～16cmで、きわめて浅く、耕作による削平で浅くなったとしても、本来それほど深くなかったと思われる。

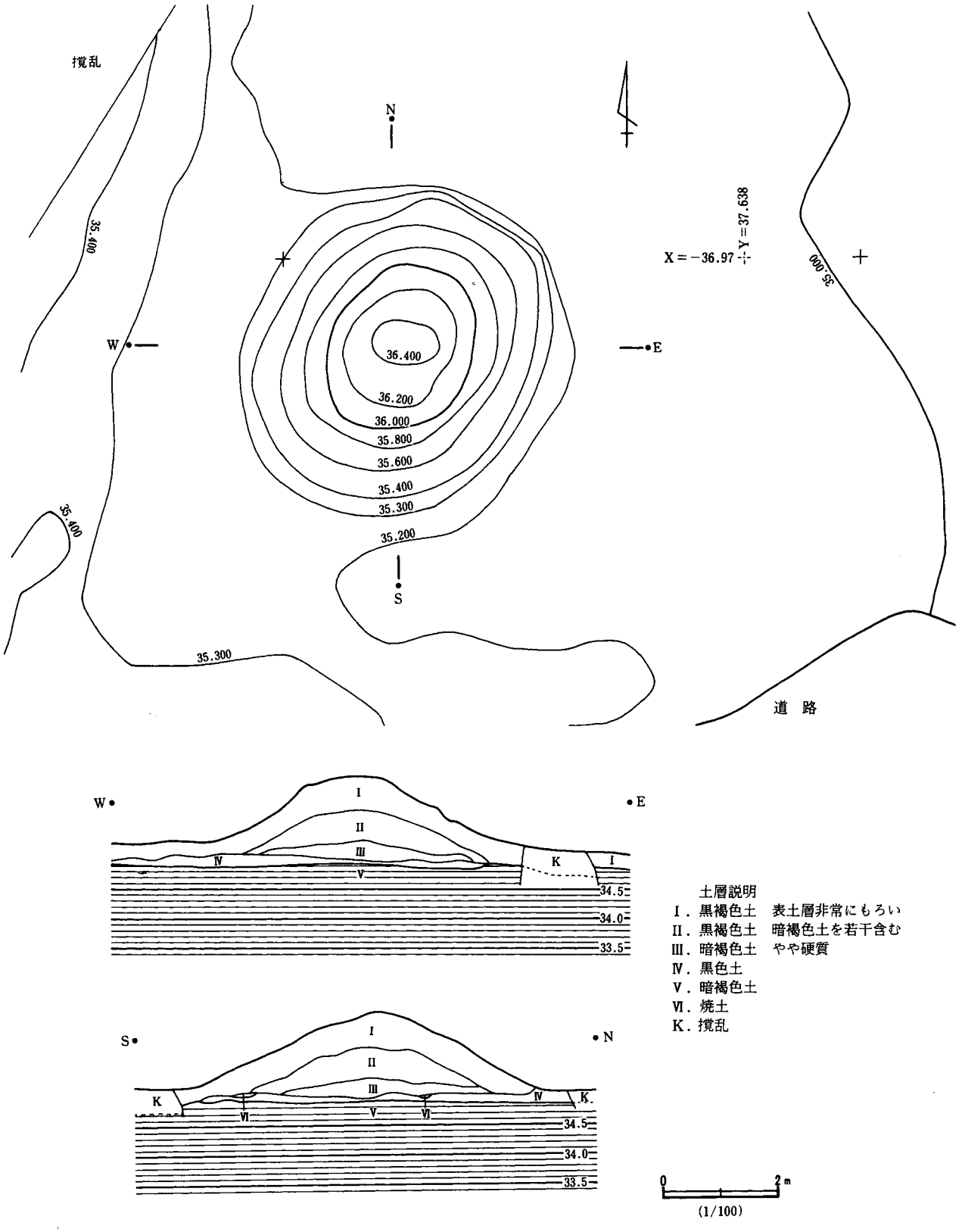
周溝覆土は、上部に暗褐色土が、下部に暗黄褐色土が堆積していたが、覆土からは、盛土があったか否かを推測することはできない。

周溝覆土中から若干の土器片、砥石片が出土したが、新しい陶器片が混じっていることから、この円形周溝は、塚であった可能性がある。

ただ、一帯が畑であったこと、北約50mでみつかった後述する塚には周溝がないこと、木戸場遺跡の北側に谷をはさんである台地上の向原遺跡の塚（未報告）にも周溝がないことからすると、塚でない可能性も十分にある。



第130図　第２号円形周溝実測図（012-004）



第131図 塚実測図 (212-005)

塚（005）（第131図、図版45）

昭和57年度の発掘調査時には、所在する小字の名称の野中が共通することから、005IIの１つの塚として登録した。このために、遺構番号を調査時には「005II野中８号墳」とした。図面・写真類及び出土遺物への注記の一部には005II野中８号墳となったままのものが残る。012－005は調査後つけ直したものである。

木戸場遺跡の所在する台地の平坦部の東縁の南北のほぼ中程に位置する。西側10m足らずのところに道があり、この道が、小字の野中と木戸場の境であって、大字の岩富と神門の境でもあることが、公図からうかがえる。この塚の性格を考える上で、注意すべき事実と言えよう。

規模は、高さ1.2m前後、直径５～６mであり、なだらかな碗をふせた形である。

築造法は、ローム層より上の黒色土の層を浅く皿状に掘りくぼめ、そのくぼみの中心が最も高くなるように、暗褐色土、黒褐色土を山形に盛り上げていることが、断面図からわかる。浅く掘りくぼめた黒色土の表面に焼土がみられるところがあったことから、築造にあたっての黒褐色土層の整地に際して、雑草などを焼いて退治したことが考えられる。

遺物の出土は若干あったが、塚の年代・性格を探る手がかりとなるようなものはなかった。

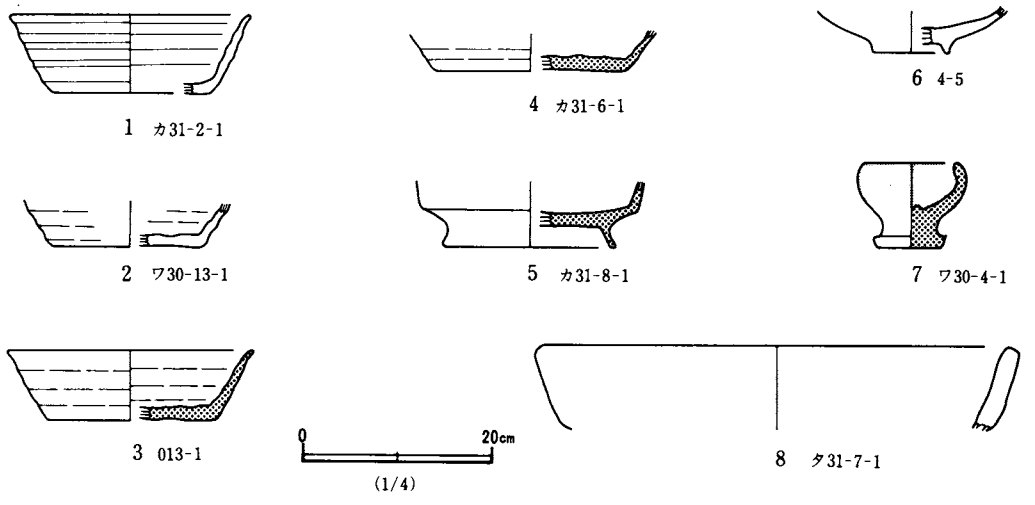
溝（別図２、図版46）

図で明らかなように、B地点では、15条の溝がみつかった。破線は、推定である。溝のうち、色をつけてあるのは道の跡であることが判明してものである。のこる溝については、性格が不明である。

(2)遺　物

グリッド出土土器及びその他の土器（第132図、第33表、図版65）

グリッドなどから出土した注目される土器をまとめて示す。



第132図　グリッド出土土器及びその他の土器（012）

第33表　表グリッド出土土器及びその他の出土土器観察表

須恵と断わっていないものは土師器

挿図番号	器種	法量(mm) 器高	口縁径	底部径	胴部径	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整								出土状況(床面からcm)	備考
1	須恵坏	41	127	80	—	1/6	良	淡褐色ないし淡黄褐色	密 砂粒含	外	口	ロクロ	胴	ロクロ 下部手ヘラ	底	手ヘラナデ			手ヘラは手持ヘラ削り。土師質。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ナデ			
2	須恵坏	—	—	77	—	1/6	良	灰褐色	密 雲母含 砂粒多	外	口	—	胴	ロクロ	底	ヘラナデ			
										内	口	—	胴	ロクロ	底	ロクロ			
3	須恵坏	36	130	89	—	1/4	良	灰色	密 石英含	外	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	静止糸切りヘラナデ			
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			
4	須恵坏	—	—	100	—	1/4	良	外淡褐色内淡灰色	密	外	口	—	胴	ロクロ 下部ヘラ削?	底	回ヘラ			外面荒れる。
										内	口	—	胴	ロクロ	底	ロクロ			
5	須恵甕	—	—	115	—	底部 3/8	良	青灰色	密 長石粒多	外	口	—	胴	ロクロ	底	回転ヘラナデ			高台はナデ付ケ。
										内	口	—	胴	ロクロ	底	ロクロ			
6	皿状陶器	—	—	46	—	底部完	良	生地白色 茶色釉	密	外	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			口縁下の一部と内底の中心近くは釉かからず。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			
7	燈明台	44	50	28	58	完形	良	生地白色 暗褐色釉	やや粗 長石・石英粒多	外	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	回ヘラ			釉は、内面全体と、外面の上部にかかる。
										内	口	ロクロ	胴	ロクロ	底	ロクロ			
8	盤?	—	257	—	—	小片	良	褐色 黒斑	密	外	口	ヨコナデ	胴	ヨコナデ	底	—			
										内	口	ヨコナデ	胴	ヨコナデ	底	—			

古　銭（第133図、第34表）

B地点からは、銅銭4枚が出土したが、いずれも表面採集によるものである。

1は、北宋銭で、「政和通宝」である。2・3は寛永通宝で、いわゆる新寛永に属するものである。2はやや大形であり、背面には全面に波形文が鋳出してある。3は、背面が無文で、内郭の一部を破損している。4は文久通宝である。背面の波形文のうち、拓で黒くなっている右と下の2個所は、波形文を表す凸線よりも本来は低くなっているはずのところが凸線とほぼ同じ高さに鋳上っている。

第34表　B地点出土古銭観察表

外径・内郭内長・外縁厚は平均値である。

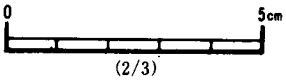
挿図番号	銭貨名	初鋳年	外径(mm)	内郭内長(mm)	外縁厚(mm)	重量(g)	遺物番号	備考
1	政和通宝	1111	25.25	6.49	1.05	1.7	表採	3つにわれている。
2	寛永通宝		27.48	6.25	1.09	3.9	表採	
3	寛永通宝		23.52	6.22	1.12	2.3	表採	
4	文久永宝		26.62	7.01	1.05	3.3	表採	

1　表採

2　表採

3　表採

4　表採



第133図　B地点出土古銭

第5節　ま　と　め

第2節から第4節までで記したところをまとめると、今回調査した木戸場遺跡の概要はつぎの通りである。

先土器時代

関東ロームのIII層のA地点No.1～5ユニット、同IV層のA地点No.6・7ユニット、同III～IV層のB地点第2ユニット、同V～VI層のB地点第1ユニットの計9ユニットがみつかった。本書で報告する4遺跡の中で、先土器時代の石器集中は、他に、向山谷津遺跡、明代台遺跡A地点、明代台遺跡C地点でみつかっているが、木戸場遺跡のものが最も豊富な内容と量を持つ。出土の層位からみると、向山谷津遺跡・明代台遺跡C地点のものがVIII層中のものと思われ、最も古く、ついで木戸場遺跡B地点の第1ユニット、同遺跡A地点のNo.6・7ユニット、最も新しいのが、III層の明代台遺跡A地点のユニットと木戸場遺跡A地点のNo.1～No.5ユニットということになる。

木戸場遺跡の9つのユニットのうち、注目されるのは、No.1・2のユニットである。この2つのユニットでは明確な石器組成が認められるのに対して、のこる7つのユニットでは、石器が含まれていたものはあるものの、明確な石器組成が認められない。しかも、No.1・2ユニットの石器群の内容は豊富である。敲石1点が砂岩製であるのを除き、その他の細石核・細石刃・彫器・掻器・削器の石器類は全て頁岩製であり、この4種の石器類が合計で30点にのぼる。さらに、細石刃核は札滑型、彫器は荒屋型、掻器・削器は山形県角二山遺跡出土のものに似るという具合で、東北地方とのつながりを強く示唆することから、大変注目される貴重な資料である。

佐倉第三工業団地の中では、星谷津遺跡でIII層～VIII層にかけて（第1章第2節に掲げた同遺跡報告書III章第1節）、立山遺跡でIII層～VIII層にかけて（同じく同遺跡報告書第2章第1節）、タル

カ作遺跡でIII層～IV層にかけて先土器時代の石器が検出されている（同じく同遺跡報告書第2章）。

このうち、星谷津遺跡のIII層中検出の第1ユニットには、チャートであるが、細石刃核と細石刃がみつかっている。

縄文時代

遺構はみつからなかったが、土器・石器・土製品が少なからず得られた。特に土器は質・量とも豊富で、草創期後半から晩期に及ぶ。出土の量は、図示したものの中の点数にあらわれているように、台地の北側にあたるA地点に多く、B地点に少ない傾向が、はっきり認められた。

石器は、石鏃が中心であるが、スタンプ形石器が、この地域での出土例が少ないことから、注目される。

歴史時代

溝の発見数が多く、その他は、A地点とB地点合せて、方形周溝1、円形周溝2、住居跡2、塚1と炭焼穴であった。

方形周溝・円形周溝・住居跡の時期は近いものと思われるが、立地をみると、方形周溝・円形周溝は木戸場遺跡の大きく平坦な台地の平坦部の東端の縁近くにあり、住居跡は、台地の南端に集まっている。そして、台地の平坦部の大部分が特に遺構もなく空白である。このことは、歴史時代における木戸場遺跡の性格を考える上で、注目される。

B地点の住居跡2から南へと、住居跡群が展開していることは注意しておく必要がある。

B地点の2つの住居跡と同じ国分期の住居跡は、向山谷津遺跡と明代台遺跡A地点で1つずつみつかっている。住居跡の規模を比べてみると、向山谷津遺跡と明代台遺跡A地点のものが、1辺3m～4mであるのに対して、ここ木戸場遺跡B地点の住居跡は、ともに1辺が5m～6m近く、ひとまわり大きい。

同じ国分期の住居跡は、佐倉第三工業団地内では、立山遺跡で6つ（第1節第2章に掲げた同遺跡報告書の第3章第3節1、　竪穴住居跡）、タルカ作遺跡で2つ(同じく同遺跡報告書の第5章2、　住居跡）みつかっている。

A地点の方形周溝と同じものは、明代台遺跡A地点で1つ(第3章第4節)、明代台遺跡B地点で2つ（第4章第5節）みつかっている。規模は、明代台遺跡A地点のものが最も小さくて、1辺7m前後、ついで明代台遺跡B地点第2号とここ木戸場遺跡A地点のものが8m～9mであり、明代台遺跡B地点第1号が最も大きく、1辺11m弱である。周溝の幅、深さは、明代台遺跡A地点のもの、木戸場遺跡A地点のもの、明代台遺跡B地点第2号、同第1号といったほぼ順で、広く、深い。以上の4つとも埋葬施設がみつからなかった。向きをみてみると、明代台遺跡A地点のものは4辺がほぼ東西南北の軸と合っているのに対して、のこる3つは、東西南北の軸から20°～30°前後ふれている。

以上の4つのうち、年代の手がかりとなるのは、明代台遺跡A地点のものから出土した国分期

の土師器片、明代台遺跡B地点の2つから出土した国分期の土師器・須恵器である。このことからすると、上述の4つの方形周溝の年代は国分期の可能性が高い。

同様の方形周溝は、佐倉第三工業団地内の立山遺跡で、大小さまざま18（第1章第2節に掲げた同報告の第3章第3節3、方形・円形周溝）、タルカ作遺跡で1つ（同じく同遺跡報告書第4章4、方形周溝状遺構）みつかっている。この中には、国分期の他、鬼高期の土器が周溝中から出土しているものがある。

B地点でみつかった2つの円形周溝と同じものは、明代台遺跡B地点で1つみつかっている（第4章第5節）。規模を比べてみると、明代台遺跡B地点のものが最も小さくて外径4m弱、ついでここ木戸場遺跡B地点の第2号が外径5m弱、同第1号が外径6～6.5mと最も大きい。周溝は、深さは3つともに十数cmを超えない浅さで揃っているが、幅は明代台遺跡B地点のものと木戸場遺跡B地点第1号が0.3～0.8m程度に対して、同第2号は0.8～1.1mと広い。3つの円形周溝ともに埋葬施設はみつからず、年代の手がかりとなる遺物の出土はなかった。

同じような円形周溝は、佐倉第三工業団地内では、星谷津遺跡で1つ（第1節第2章に掲げた同遺跡報告書の87頁）、立山遺跡で7つ（同じく同遺跡報告書の第3章第3節3、方形・円形周溝）みつかっている。立山遺跡の第3号円形周溝からは、鬼高期の土師杯片がまとまって出土している。

この他には、塚1、溝24と炭焼穴がみつかり、古銭が出土した。

第7章　古　内　遺　跡

第1節　立地と環境

古内遺跡は、佐倉市岩富字古内2029－5他に所在した。佐倉第三工業団地の南東の端にあたる。

遺跡の立地する台地は、北側に比較的深い谷津があり、東側と西側に北へ向ってひらく浅い谷があり、北へ向って突き出した舌状の形をしている。

今回の調査区域は、上記の台地の北端の先端部分の斜面部である（第135図）。台地の肩口から谷津の底塚くまでの間である。広さは1,800㎡である。調査範囲の南側の縁が、佐倉第三工業団地の外縁にあたる。

調査区域の標高は、最高所が34.00m前後、最低所が28.00m前後で、比高差6m前後である。

調査区域の原状は山林であった。

第2節　先土器時代

先土器時代の遺構は検出されなかったが、先土器時代最終末期のものと思われる削器（第135図・図版67）と、先土器時代のものかと疑われる剝片が何点か出土した。

図示した削器は、玄武岩製で、原礫面を背面全体に残した扁平な貝殻状剝片を素材として、打面部から下縁にかけて、連続的に成形し、打面部を除去するとともに、剝片背面の右側縁に尖頭部を作出している。長さ52.0㎜、幅41.3㎜、厚さ6.4㎜、重量20.1gである。

第3節　縄文時代

縄文時代については、遺構は検出されなかったが、土器・石器の遺物がみつかった。

土　器（第136図、第35表、図版67）

土器は41点出土した。ほとんどが細片であり、型式の同定がむずかしい。内訳はつぎの通りである。

早　期　田戸上層式1点（1）、無文土器（2）

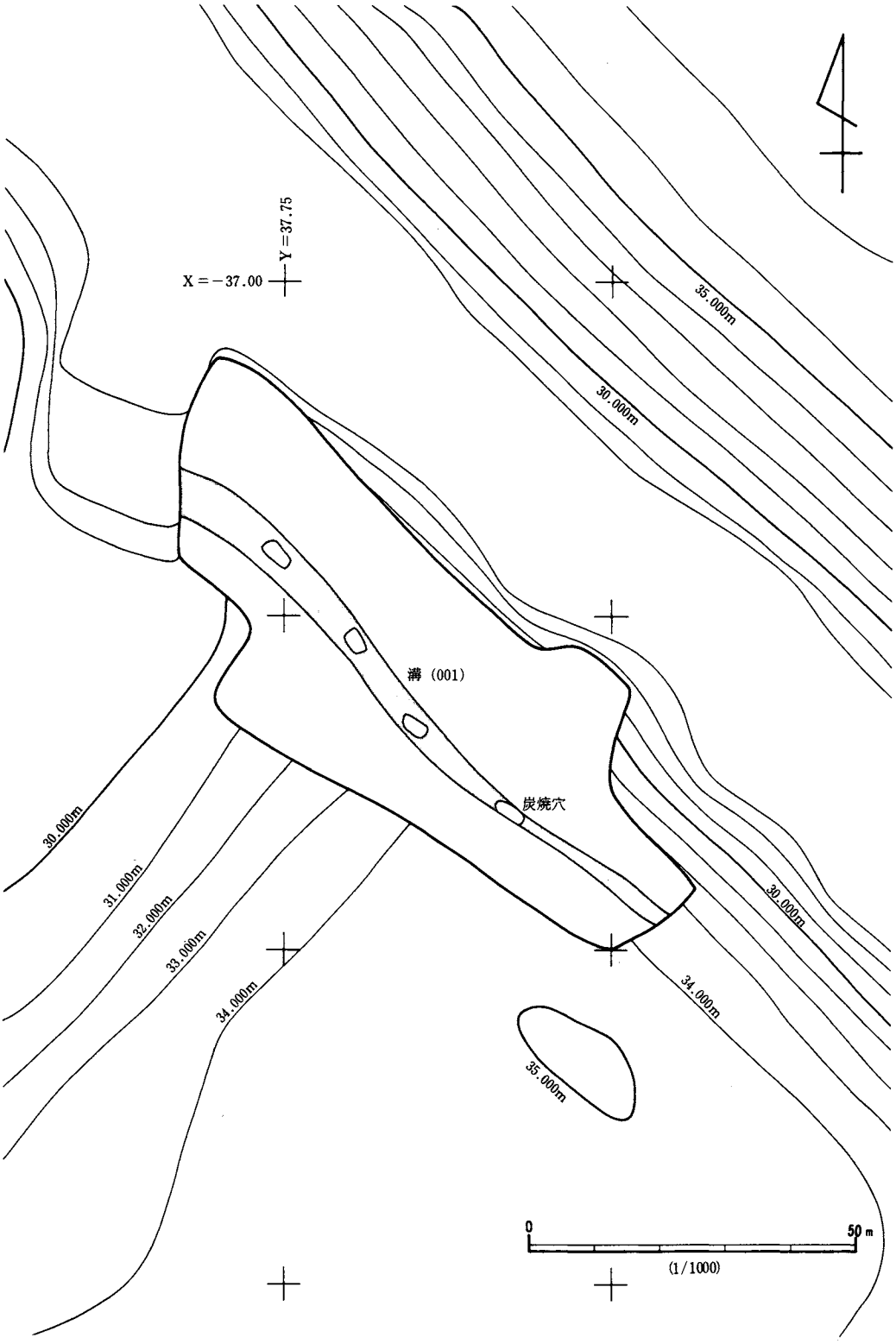
前　期　植房式2点（3）、浮島Ⅲ式2点（4）

中　期　縄文のもの4点（5・6）、阿玉台Ⅳ式1点（7）

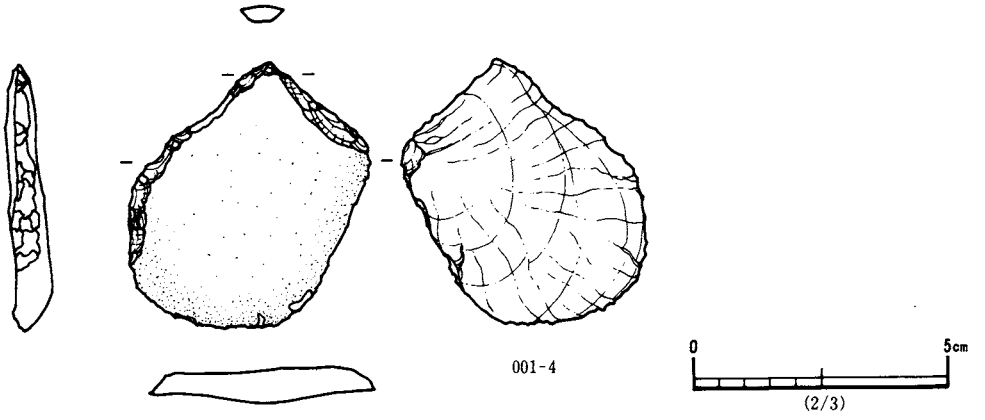
後　期　加曽利B式3点（8）

不　明　底部・無文・縄文のみ27点

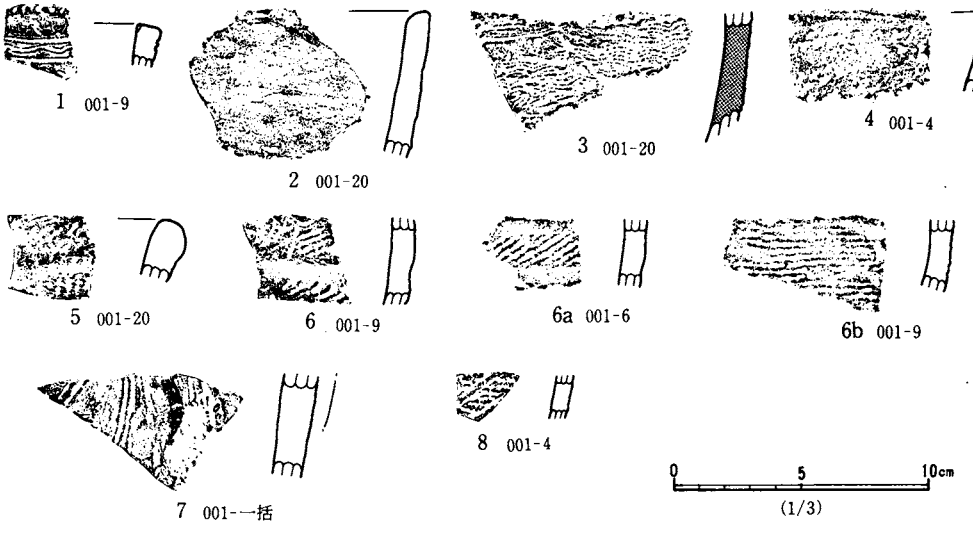
石　器（第137図、図版67）



第134図　古内遺跡全測図（212-029）



第135図　先土器時代出土石器

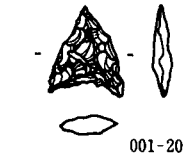


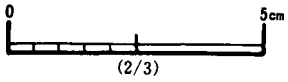
第136図　縄文土器

第35表　縄文土器観察表

胎土の0、+、−は普通、多、少を焼成の0、+、−は普通、良、不良を表す。

挿図番号	胎土	焼成	色調	せいけい	施文	備考
1	微細砂0	+	茶～暗褐色	内・外面ナデ	細沈線	
2	細砂粒0	+	茶褐色	内面ナデ、外面ヨコケズリ→ナデ	なし	
3	微細砂－繊維＋	0	暗褐色	内面ナデ	3本櫛歯の波状条痕	
4	細砂粒0	+	黒～茶褐色	内面入念なヨコナデ	類三角文	
5	細砂礫0（金雲母）	+	茶褐色	？	LR	
6	細砂粒＋	0	黄褐色	内面弱いヨコナデ	L	
7	細砂粒＋	+	黒褐色	内面ナデ	隆帯、沈線	
8	細砂粒＋	+	暗褐色	内面ナデ	RL→斜行沈線	





第137図　縄文時代出土石器

石鏃２点の他、剝片、破砕礫がみつかった。

石鏃は２点のうち完形の方だけを示した。黒曜石製で、凹基三角鏃である。長さ7.5㎜、幅14.3㎜、厚さ4.3㎜、重量0.8ｇである。もう１点は、黒曜石製の破片である。

第４節　歴史時代

歴史時代については、溝が１条と、炭焼穴が４つみつかった。第134図の遺跡全測図に示したように、等高線に平行するように、北西から南東に向って溝が走り、その中にやや不整形の隅丸長方形の炭焼穴が４つ、ほぼ等間隔に離れて、掘られていた（図版66)。

この溝の覆土中からは、寛永通宝をはじめとする古銭が出土した。このことからみて、溝と炭焼穴の年代は、近世と思われる。

古　銭（第138図、第36表）

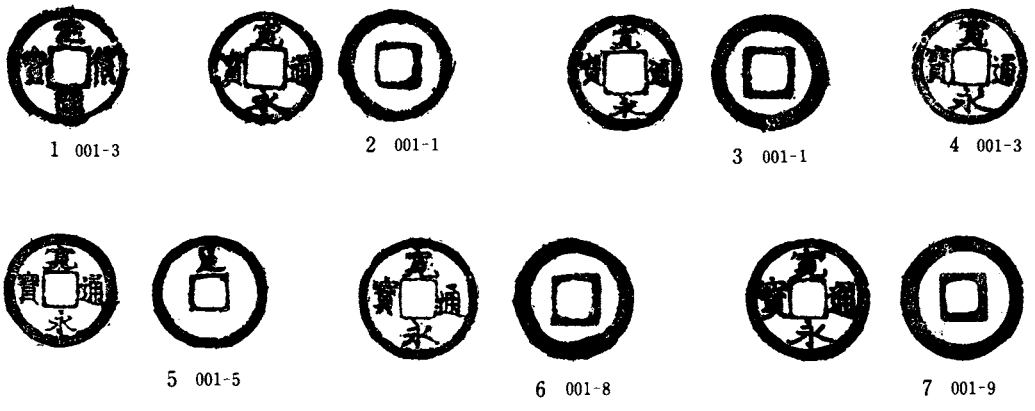
本遺跡の溝の覆土中から、銅銭７枚、鉄銭３枚が出土した。散らばっての出土である。１～７は、このうちの銅銭である。

１はいわゆる北宋銭で、腐蝕により文字は明瞭ではないが、「元符通宝」と思われる。２～７は寛永通宝であるが、このうち２～６が新寛永に属するものであり、５の背面には「足」の字がみられる。最後の７は古寛永に属するものである。

第36表　古銭観察表

外径・内郭内長・外縁厚は平均値である。

挿図番号	銭貨名	初鋳年	外径(㎜)	内郭内長(㎜)	外縁厚(㎜)	重量(ｇ)	遺物番号	備考
1	元符通宝	1098	23.51	5.91	1.30	2.4	001－3	
2	寛永通宝		22.31	6.72	1.15	2.2	001－1	
3	寛永通宝		22.89	7.28	1.02	2.3	001－1	
4	寛永通宝		22.55	6.51	1.03	2.0	001－3	
5	寛永通宝		22.31	6.05	1.03	2.1	001－5	
6	寛永通宝		23.59	7.12	0.92	2.2	001－8	
7	寛永通宝		24.25	6.28	1.12	2.6	001－9	



第138図　古　銭

第5節　ま　と　め

第2節～第4節で記したところをまとめると、今回調査した古内遺跡の概要はつぎの通りである。

先土器時代

遺構はみつからなかったが、この時代の削器と剝片かと思われるものが出土した。

縄文時代

遺構はみつからなかったが、早期から後期の土器片と、石鏃などの石器が出土した。

歴史時代

近世のものと思われる溝1とその中に炭焼穴4がみつかった。溝の中からは、古銭が出土した。この他、土師器片も出土している。

第37表　4遺跡遺構番号対照表

新は本書でのもの。旧は調査時につけたもの。

向山谷津遺跡（212—021）

新	旧
古　　墳	015
住　居　跡	002
第 1 号 土 坑	001
第 2 号 土 坑	007
第 3 号 土 坑	011
第 4 号 土 坑	012
溝	014

明代台遺跡A地点（212—027）

新	旧
第 1 号 土 坑	003
第 2 号 土 坑	004
第 3 号 土 坑	005
第 4 号 土 坑	008
住　居　跡	007
方 形 周 溝	006
溝	001
溝	002

明代台遺跡B地点（212—011II）

新	旧
縄 文 時 代 第 1 号 土 坑	017
縄 文 時 代 第 2 号 土 坑	018
縄 文 時 代 第 3 号 土 坑	025
古　　墳	1号墳
第1号方形周溝	001
第2号方形周溝	003

新	旧
円 形 周 溝	015
歴 史 時 代 第 1 号 土 坑	004
歴 史 時 代 第 2 号 土 坑	008
歴 史 時 代 第 3 号 土 坑	009
歴 史 時 代 第 4 号 土 坑	010
歴 史 時 代 第 5 号 土 坑	011
歴 史 時 代 第 6 号 土 坑	013
歴 史 時 代 第 7 号 土 坑	016
溝　M　1	002
溝　M　2	005
溝　M　3	006
溝　M　4	007
溝　M　5	012
溝　M　6	014
溝　M　7	020
溝　M　8	021
溝　M　9	022
溝　M　10	023
溝　M　11	024

木戸場遺跡A地点（212—011）

新	旧
方 形 周 溝	201
溝　M　1	001

明代台遺跡C地点（212—028）

新	旧
溝	001

新	旧
溝　M　2	002
溝　M　3	007
溝　M　4	008
溝　M　5	202

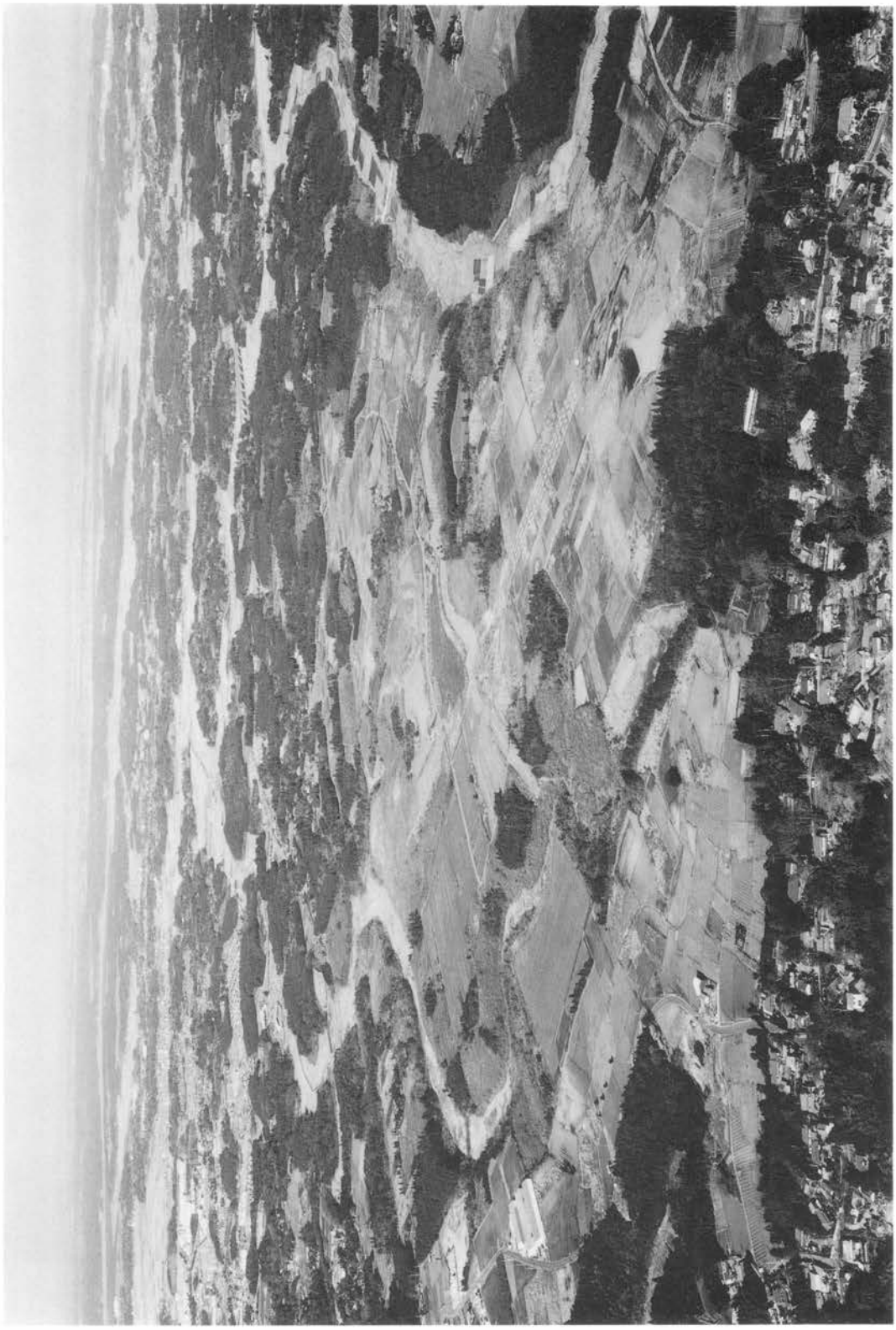
木戸場遺跡B地点（212—012）

新	旧
第1ユニット	Cブロック
第2ユニット	Aブロック
第1号住居跡	002
第2号住居跡	003
第1号円形周溝	001
第2号円形周溝	004
塚	005

古内遺跡（212—029）

新	旧
溝	001

写　真　図　版



遺跡遠景（南から）

向山谷津遺跡

全景（上層調査後）

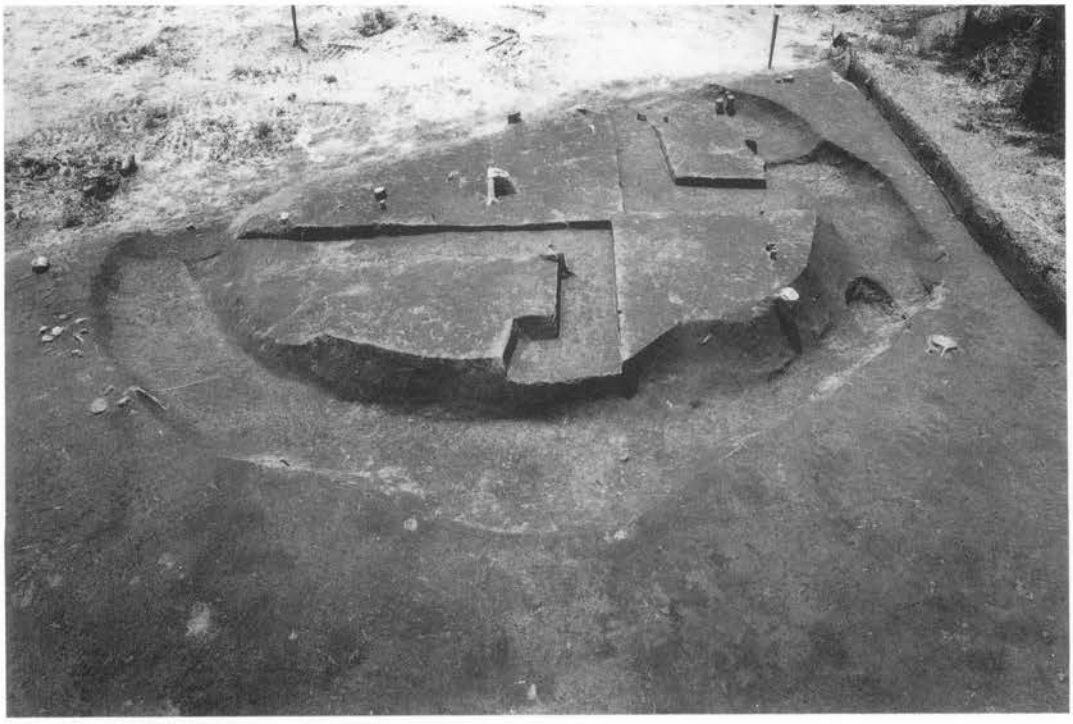
近景（手前は古墳）

先土器時代　石器出土状況

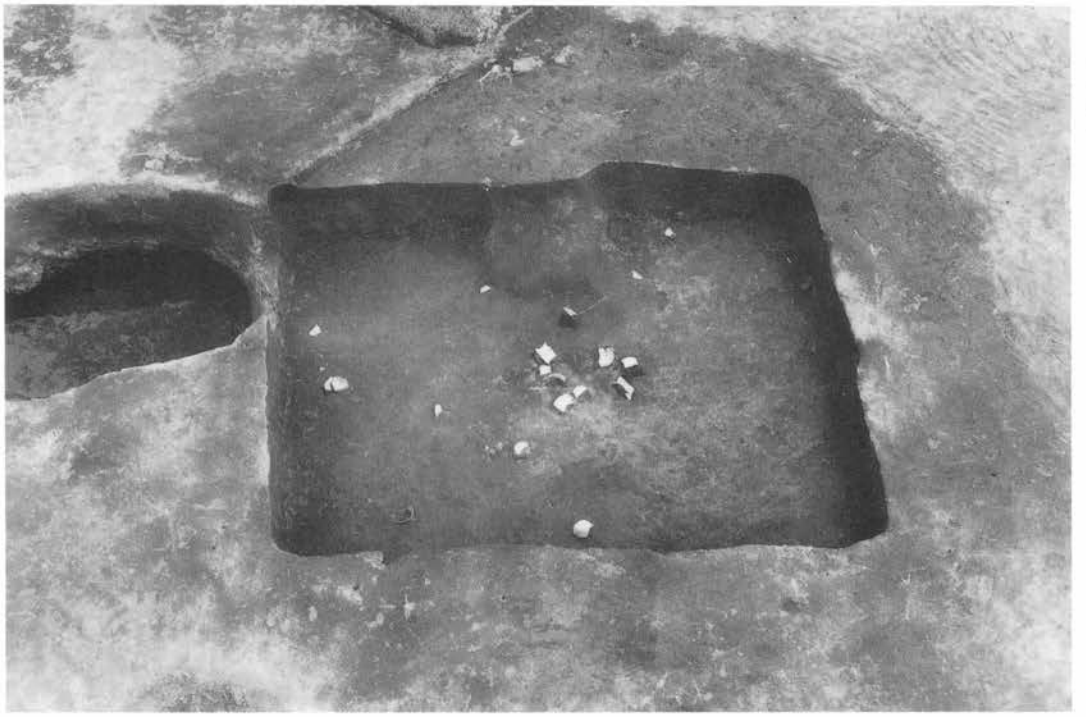
先土器時代　炉跡断面

向山谷津遺跡

古墳　（墳丘・周溝）



古墳　（完掘後）



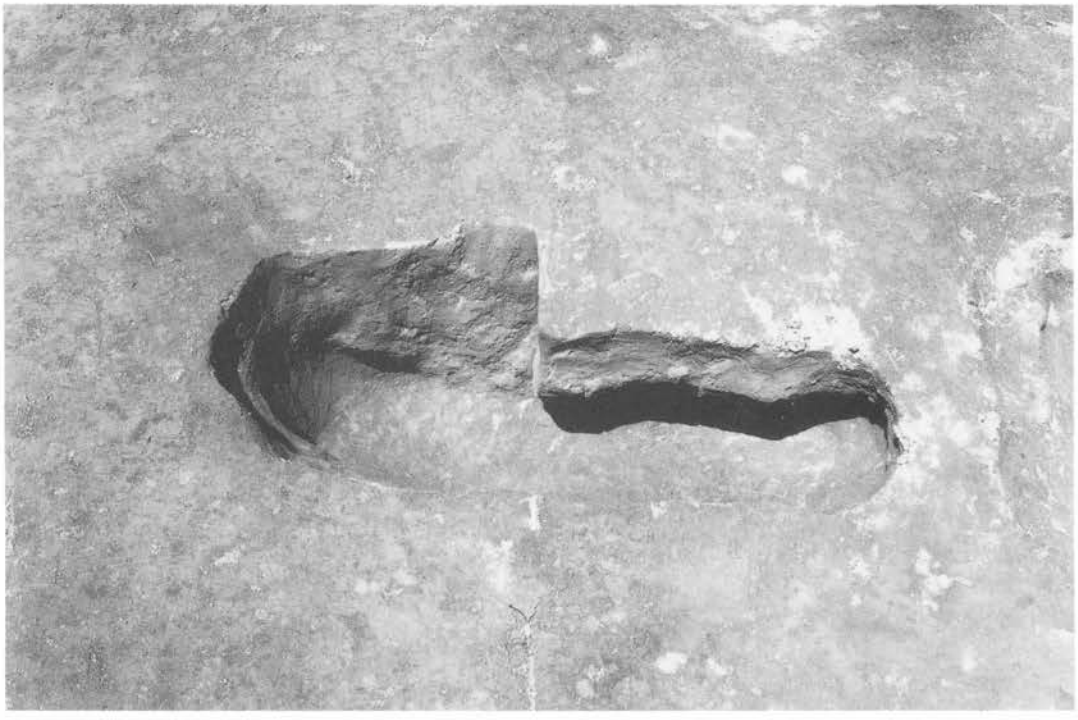
住居跡遺物出土状況

住居跡全景

向山谷津遺跡

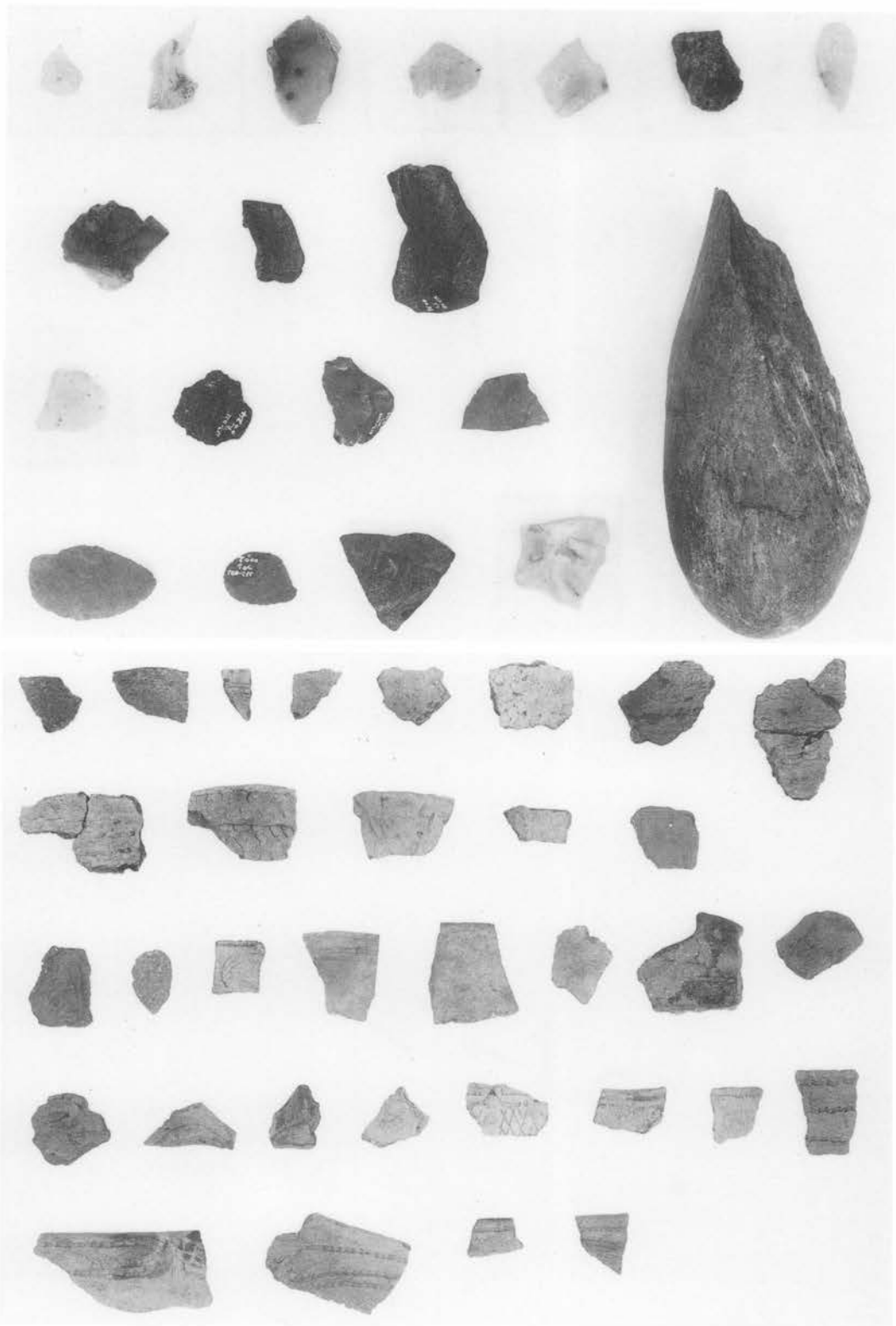
第 1 号土坑

第 2 号土坑

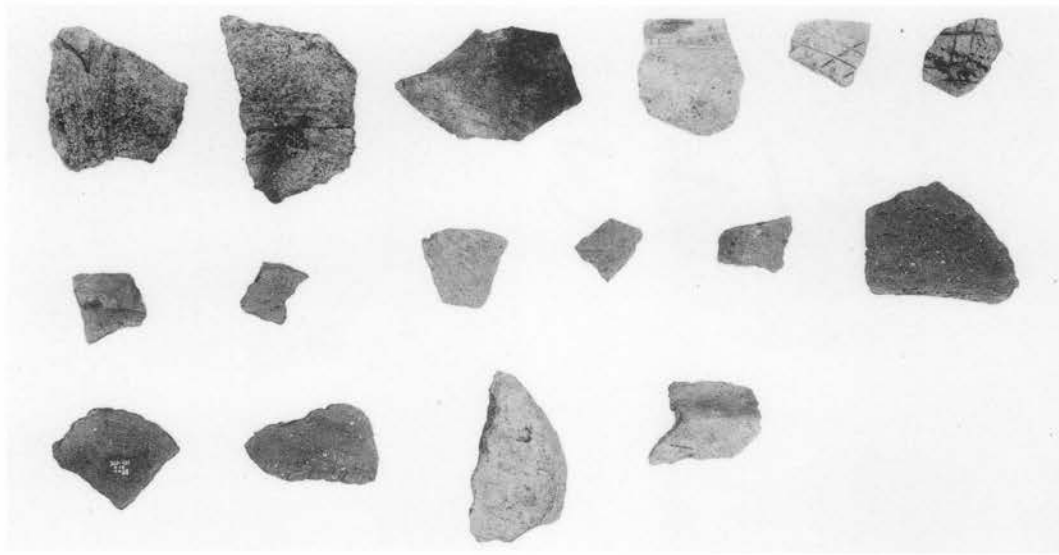


第 3 号土坑

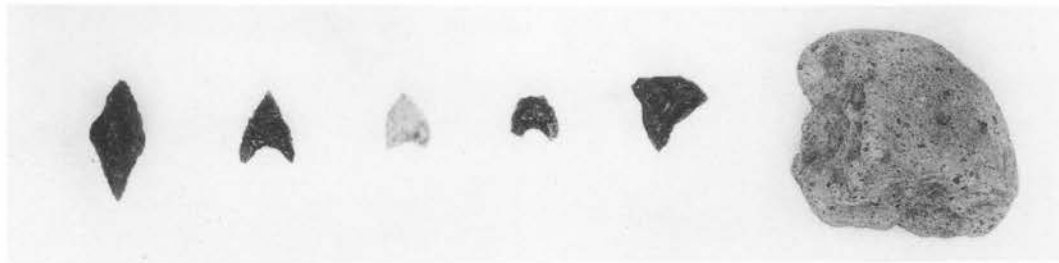
第 4 号土坑



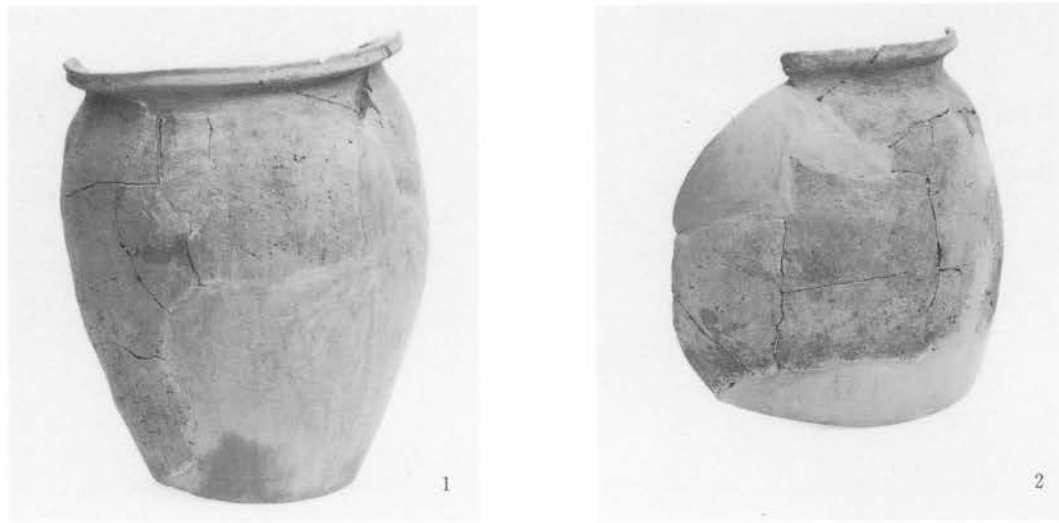
（上）先土器時代石器　　（下）縄文土器



縄文土器



縄文時代石器



住居跡出土土器

向山谷津遺跡

3

9

4

10

7

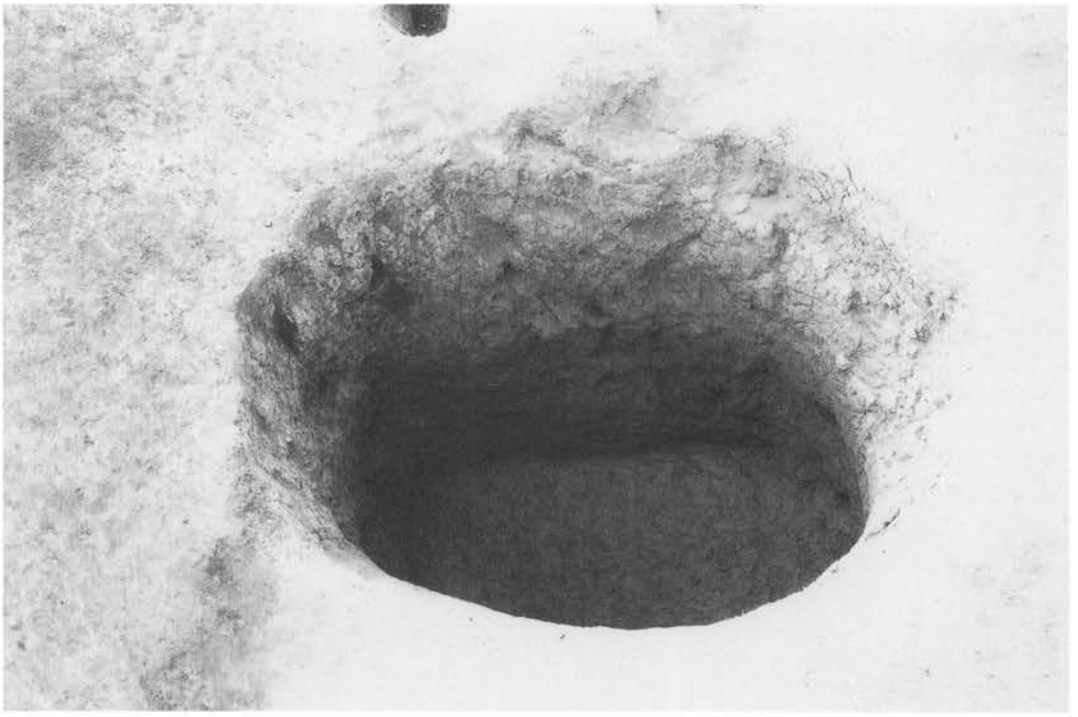
12

住居跡出土土器

全景（北側）

全景（南側）

明代台遺跡A地点



縄文時代土坑（第1号）

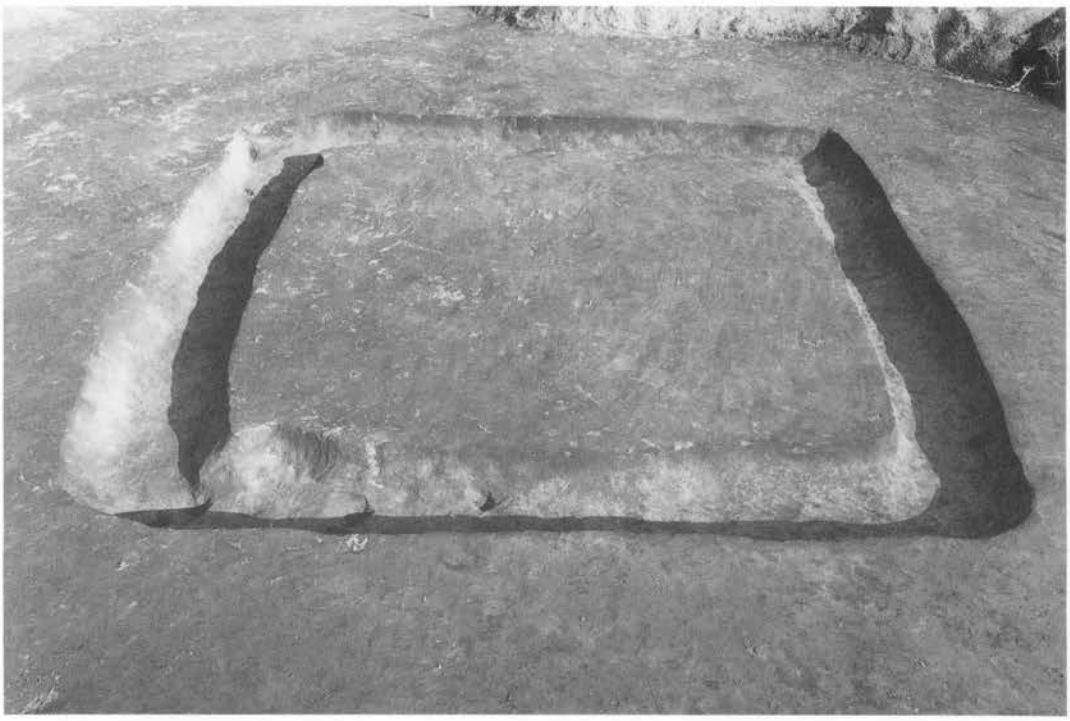
縄文時代土坑（第2号）

縄文時代土坑（第3号）

縄文時代土坑（第4号）

明代台遺跡A地点

住居跡（新）

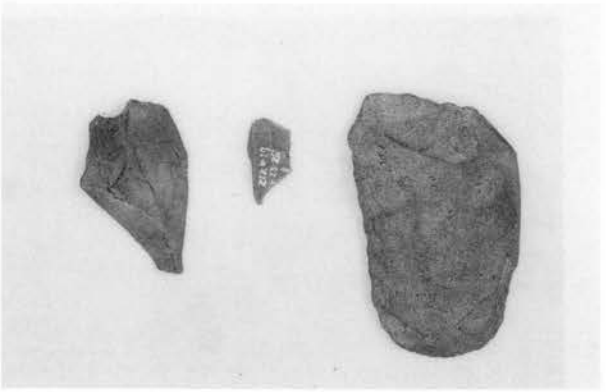


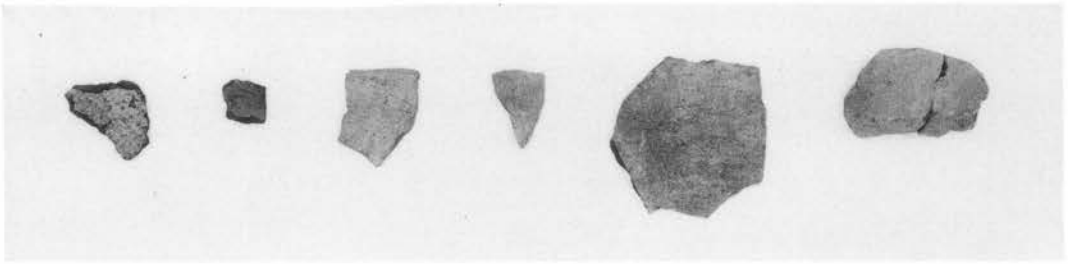
方形周溝

明代台遺跡A地点

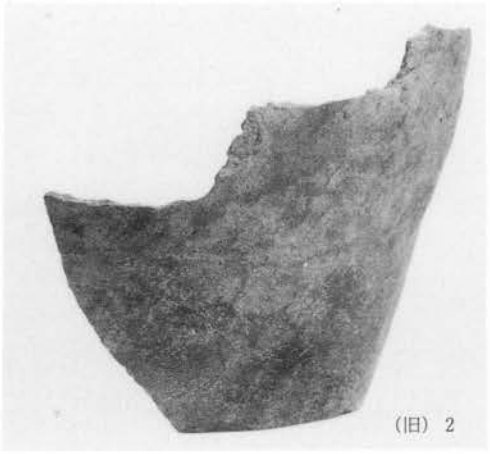
→縄文時代石器

←先土器時代石器





縄文土器



(旧) 2

(旧) 3

(旧) 4

(旧) 5

(新) 1

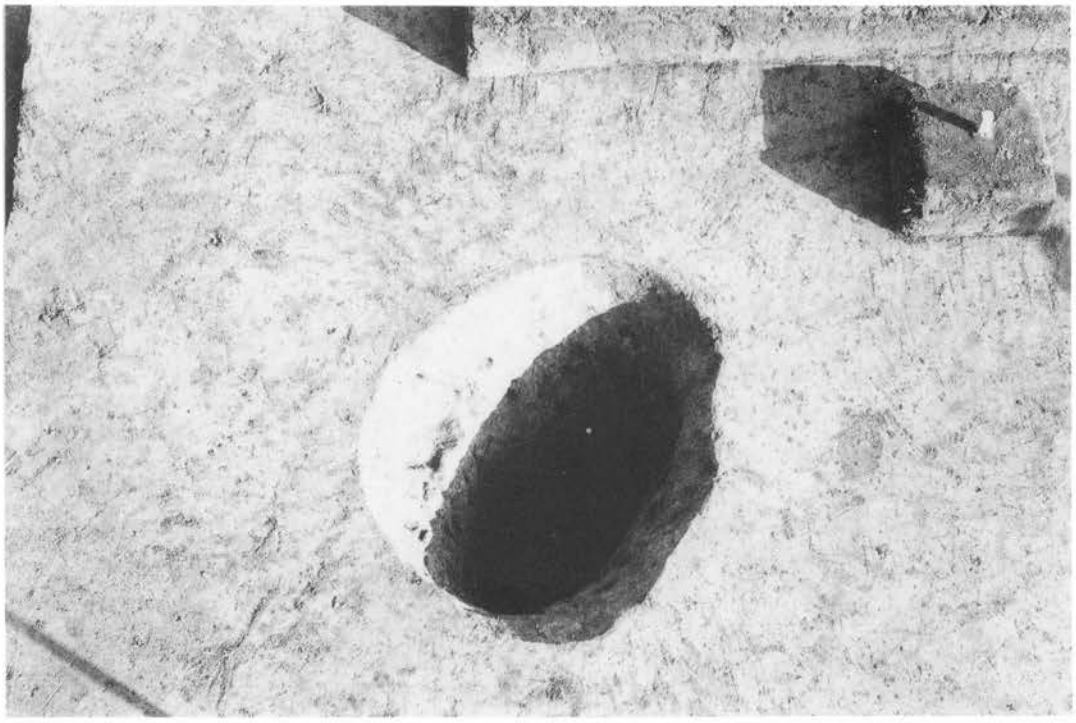
住居跡出土土器

明代台遺跡B地点

遠　景

近景（中央の高まりは古墳）

縄文時代土坑（第１号）

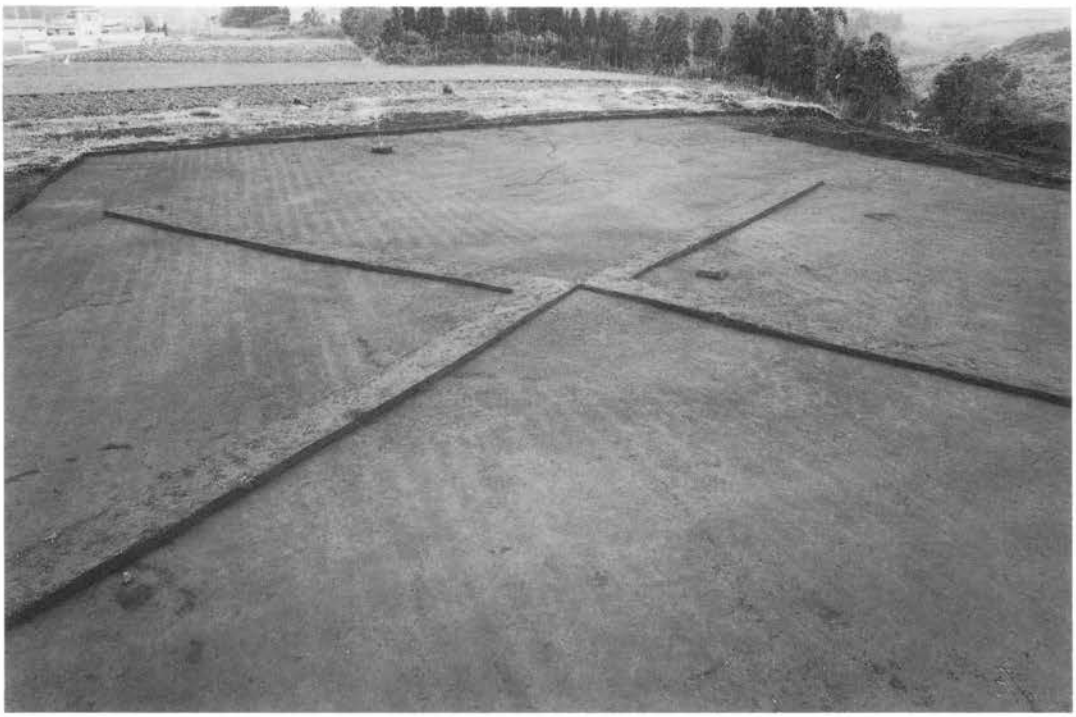


縄文時代土坑（第２号）

明代台遺跡B地点

縄文時代土坑（第3号）

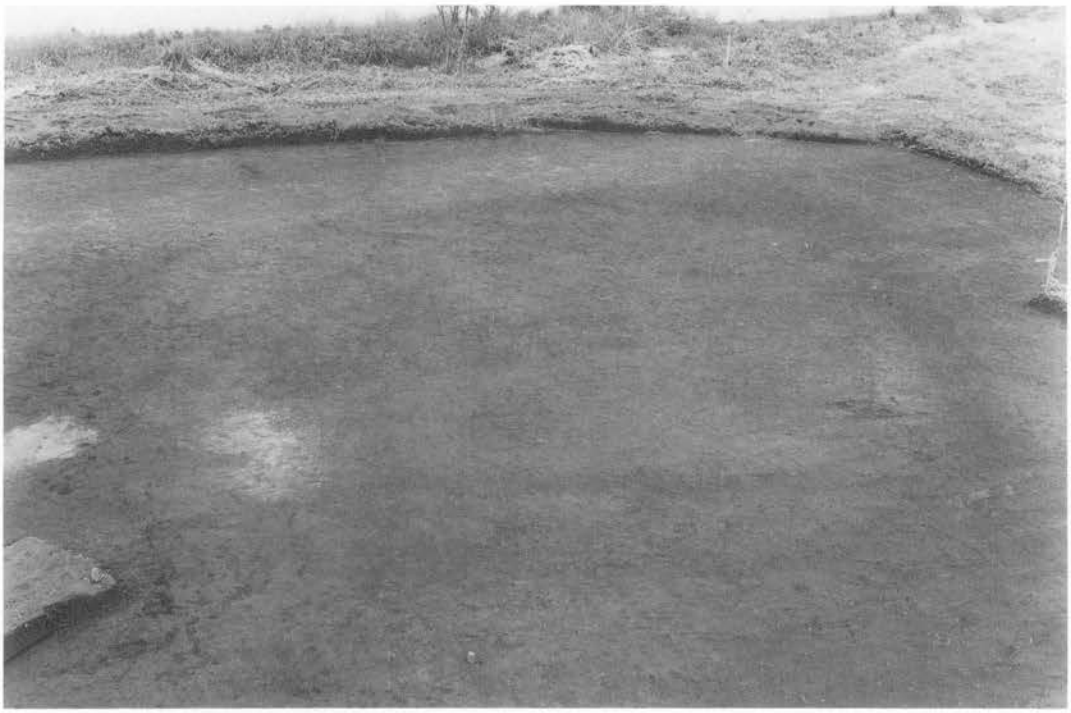
縄文時代包含層（遺物出土状況）



古墳周溝検出状況（南東より）

古墳完掘後（南東より）

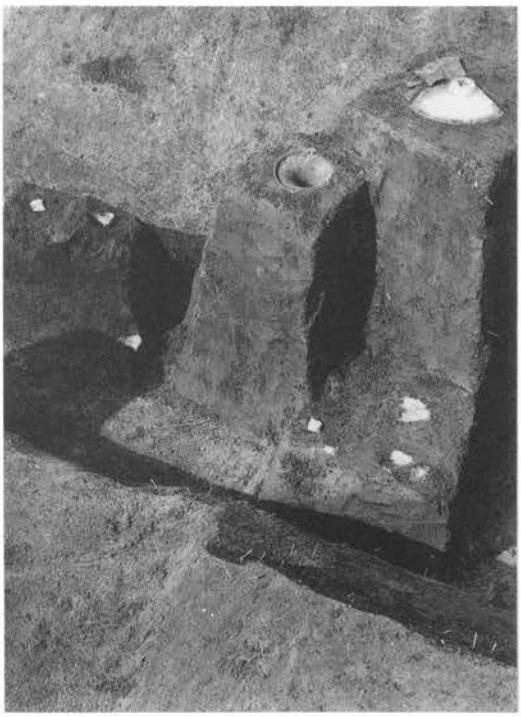
明代台遺跡B地点



方形周溝（第1号）検出状況

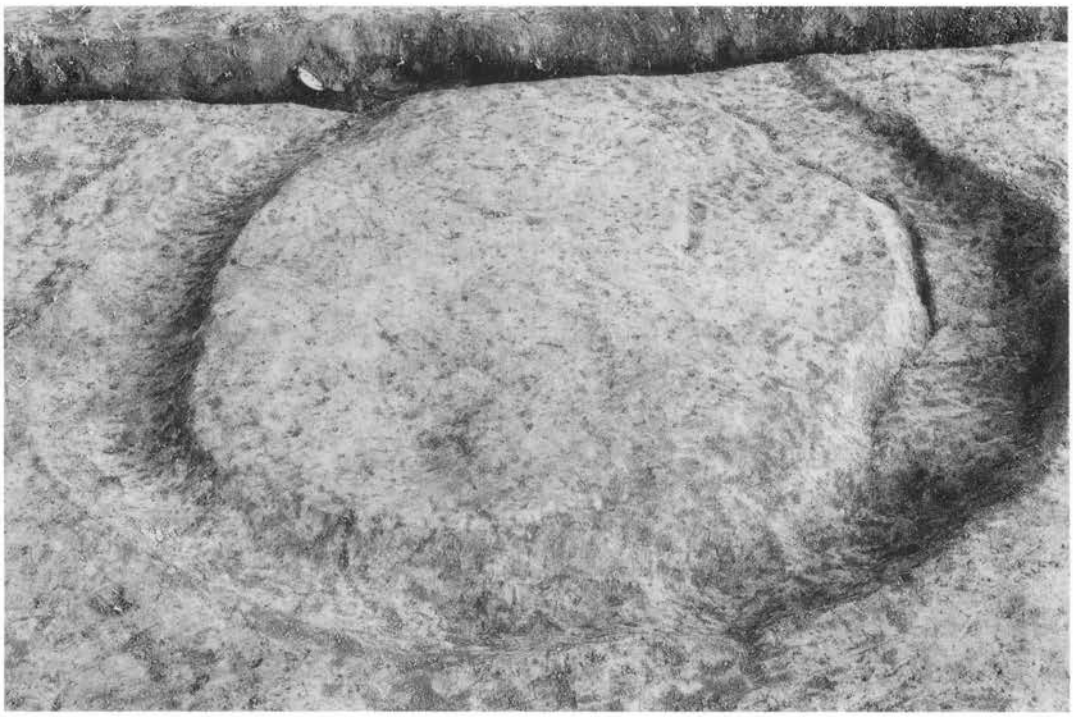
方形周溝（第1号）完掘後

方形周溝（第２号)完掘後

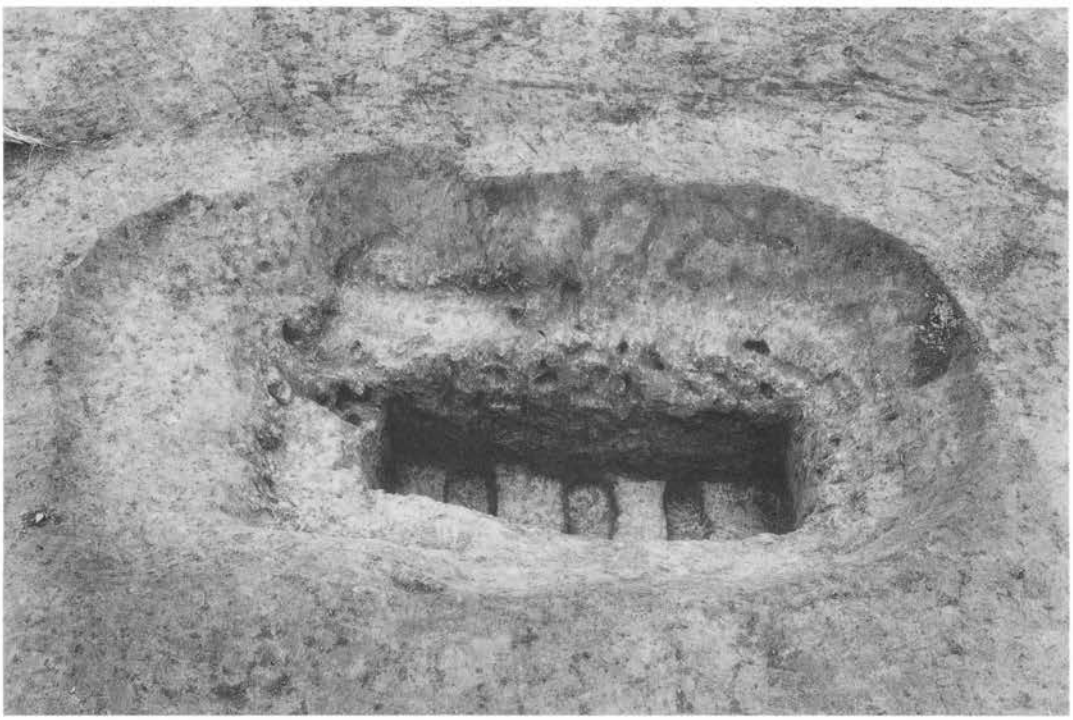


方形周溝（第２号）遺物出土状況

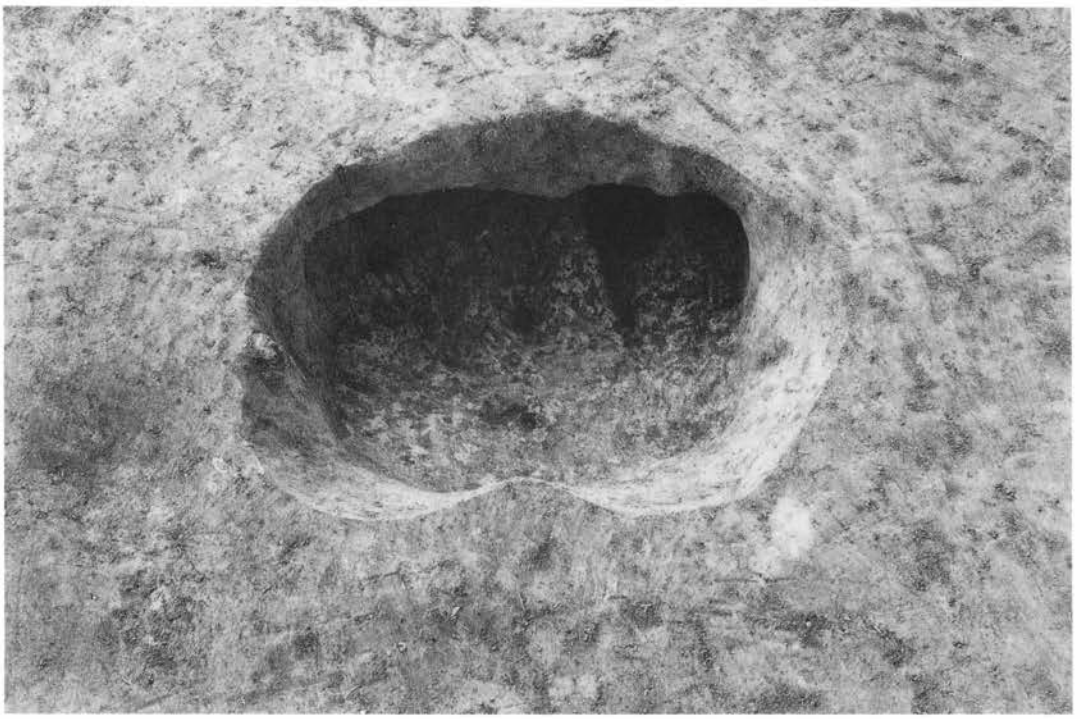
明代台遺跡B地点



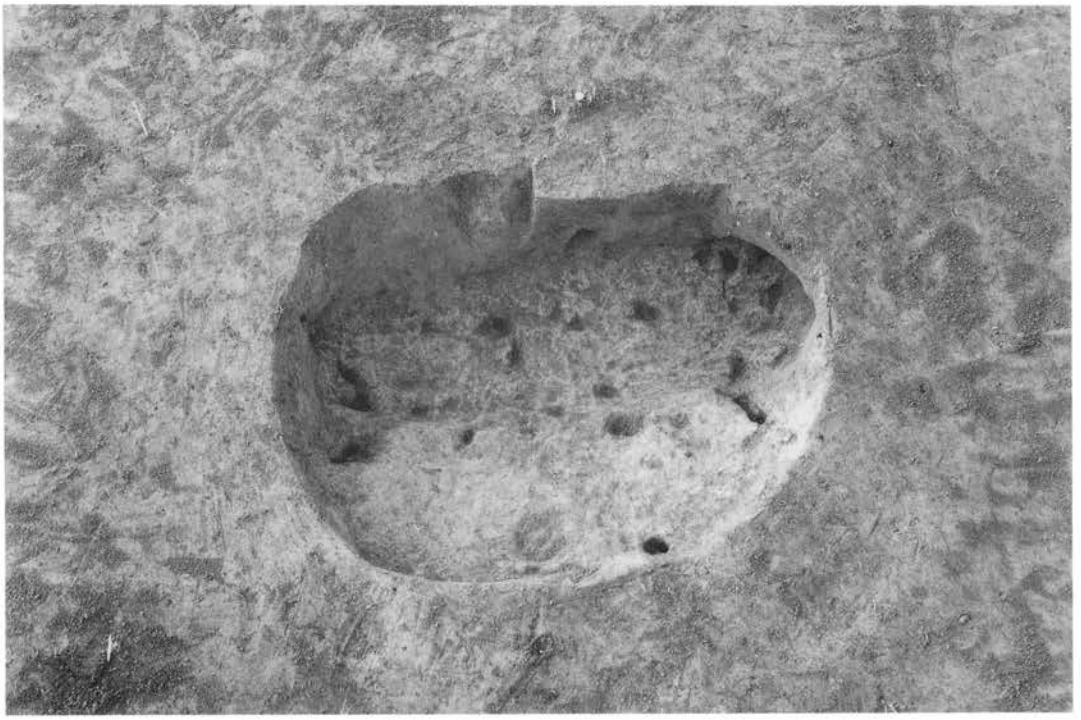
円形周溝



土坑（第1号）



土坑（第2号）



土坑（第3号）

明代台遺跡B地点

土坑（第4号）

土坑（第5号）

土坑（第6号）

土坑（第7号）

溝Ｍ１（北から）

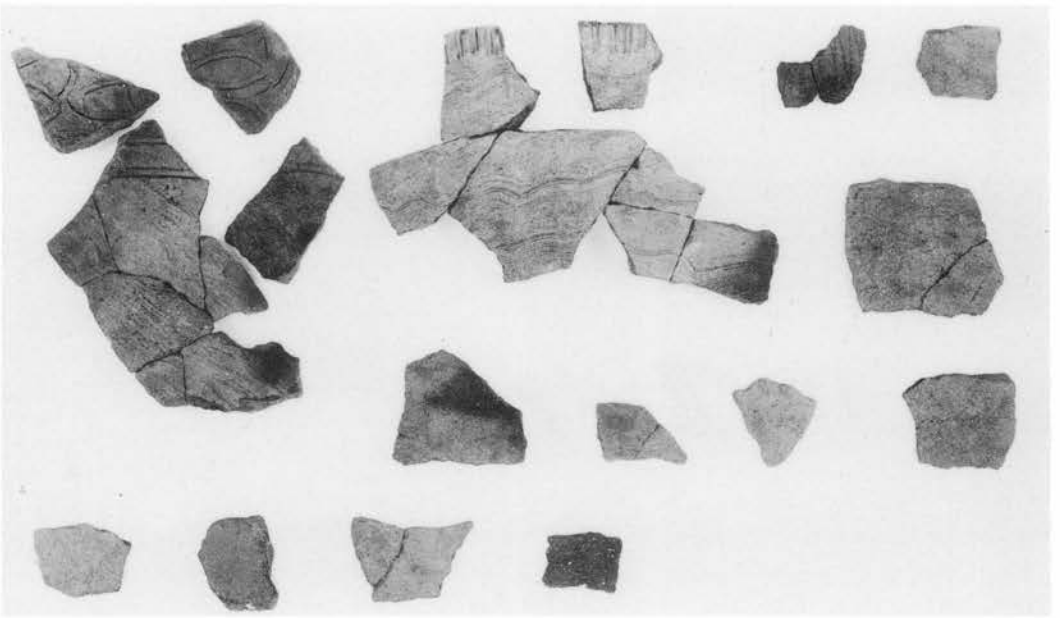
溝Ｍ４（北東から）

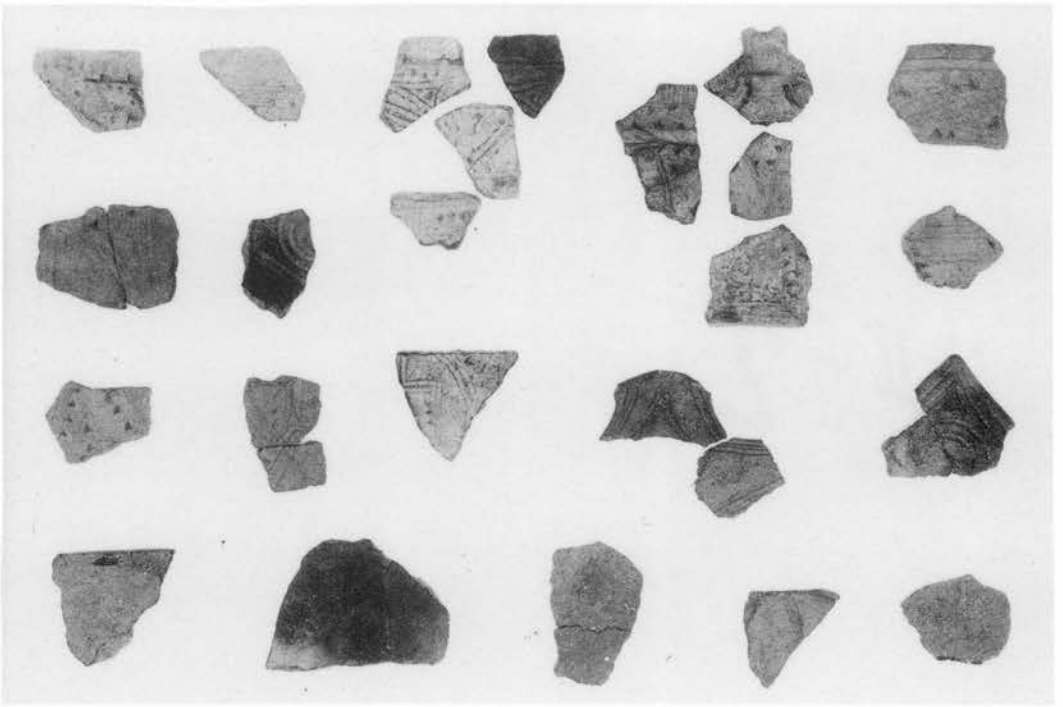
溝Ｍ６（北西から）

溝Ｍ７・８・９（北西から）

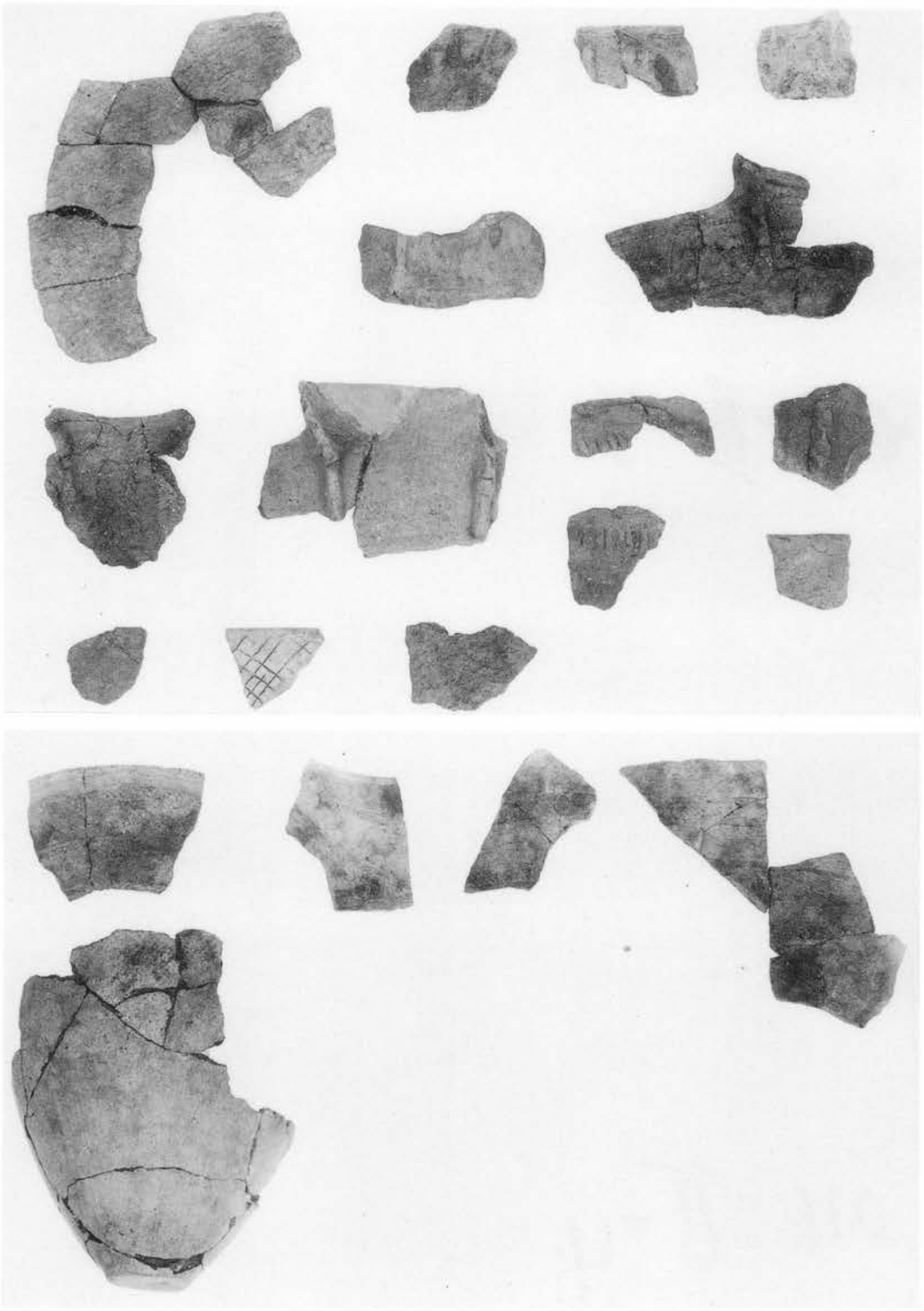
明代台遺跡B地点

先土器時代石器一



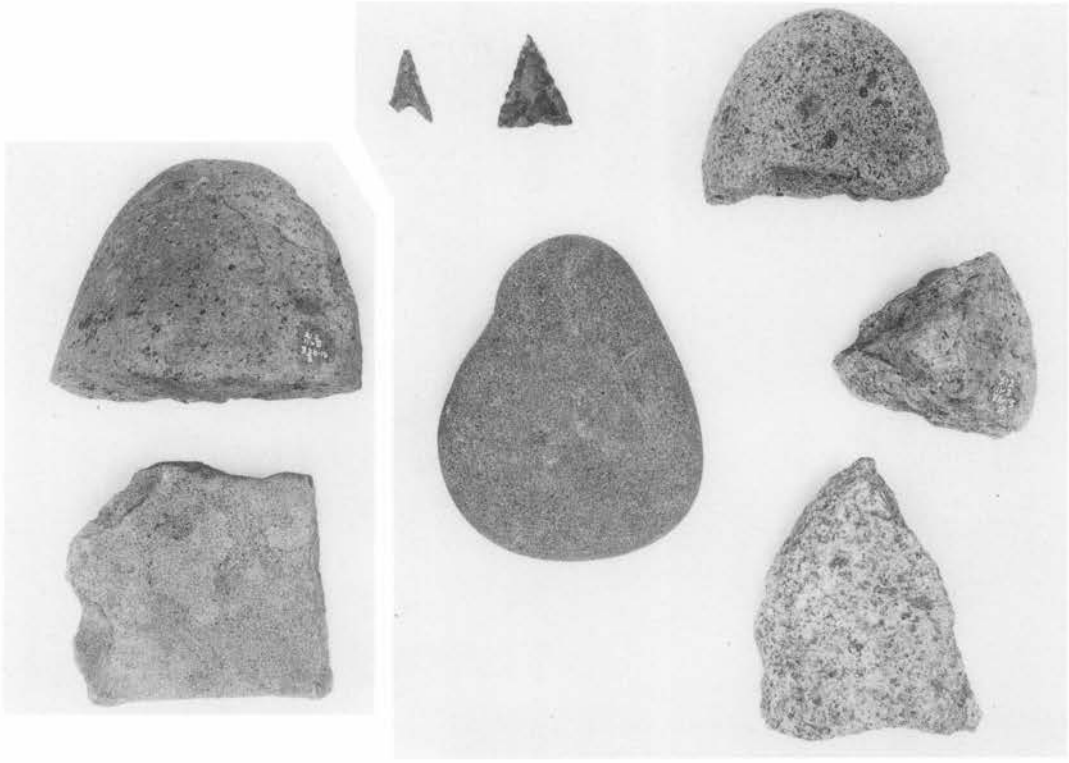


縄文土器（上・下）



縄文土器（上・下）

明代台遺跡B地点



縄文時代石器

古墳出土土器

方形周溝出土土器（左第1号・右第2号）

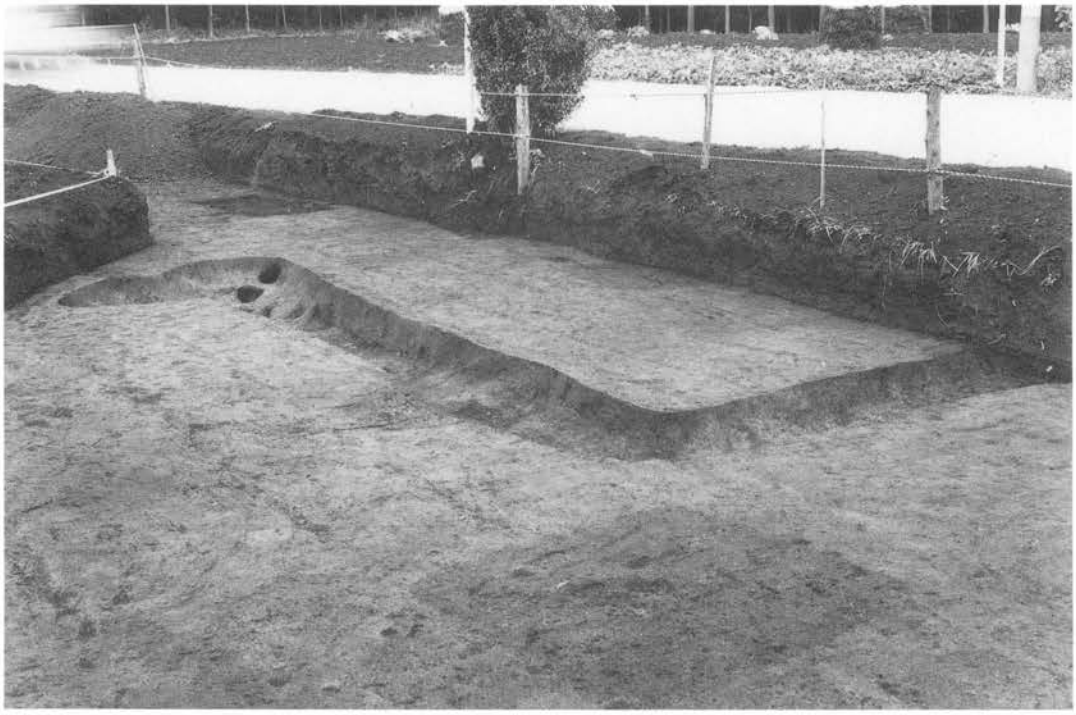
方形周溝出土土器（第2号）

炭焼穴出土磁器

明代台遺跡C地点

昭和58年度分全景

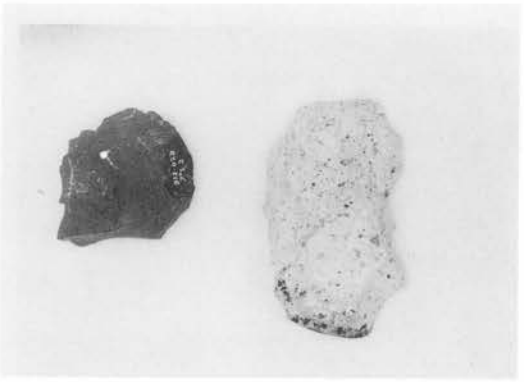
先土器時代遺物出土状況



溝

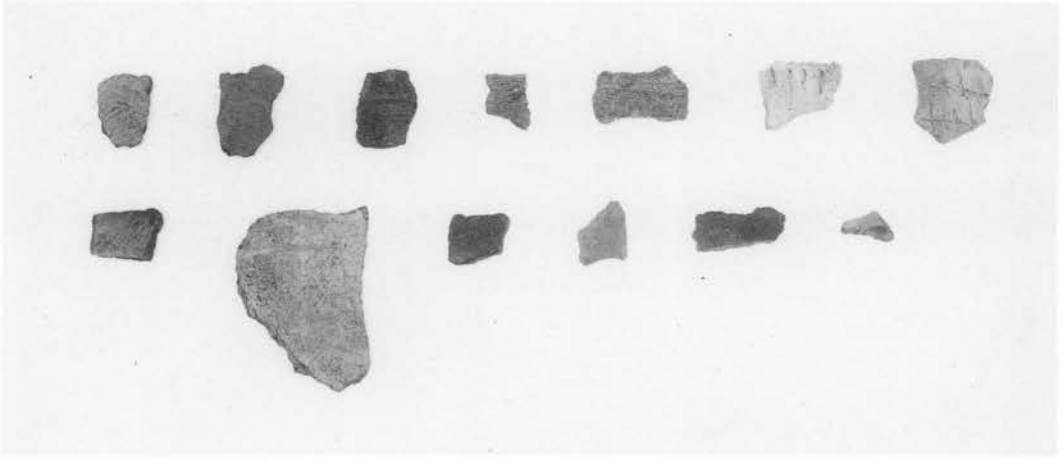
昭和60年度分全景（南側）

明代台遺跡C地点



先土器時代石器

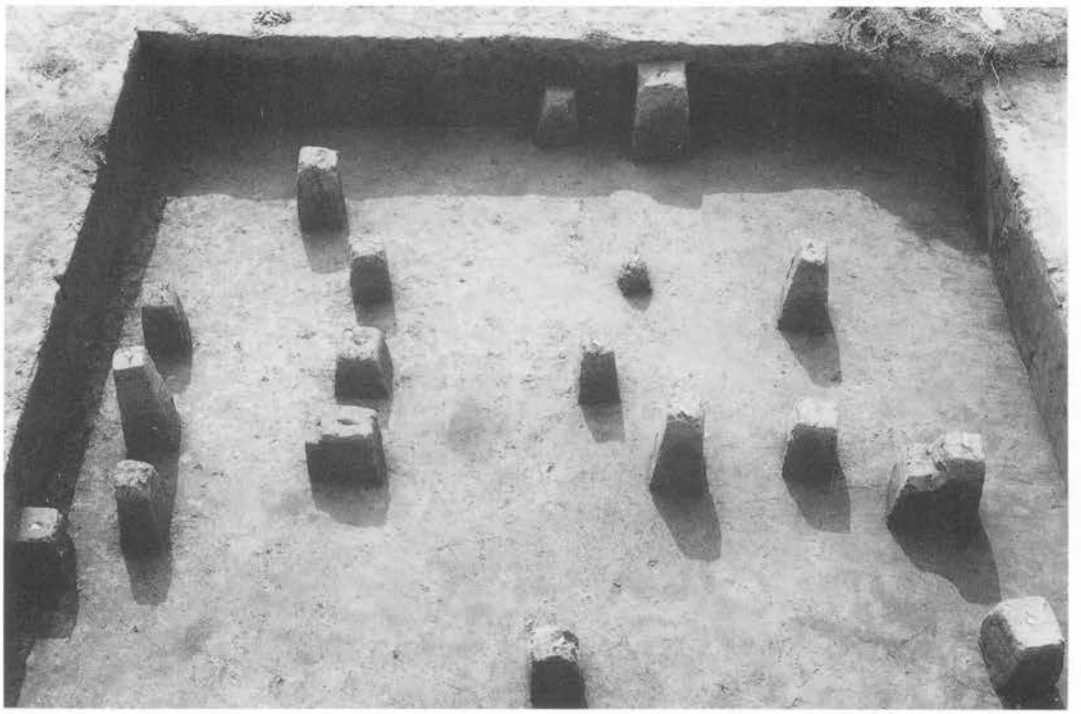
縄文時代石器



縄文土器

全景（北から）

全景（北東から）



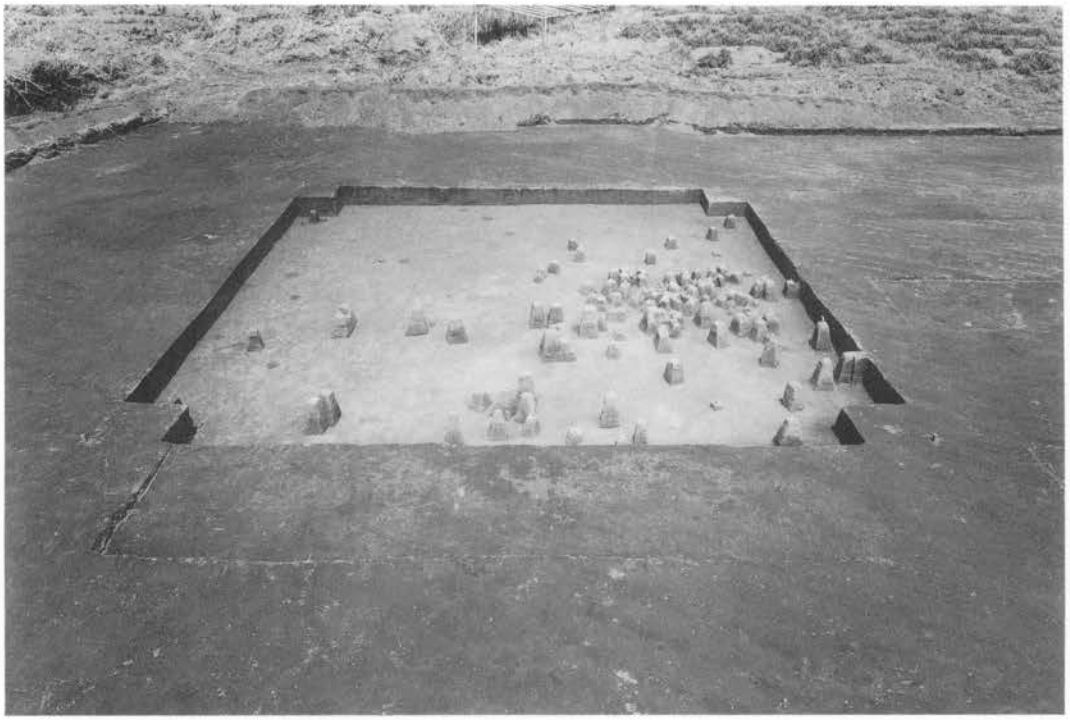
先土器時代 No.1 ユニット石器出土状況 （近景東から）

先土器時代No.1 ユニット石器出土状況 （西から）

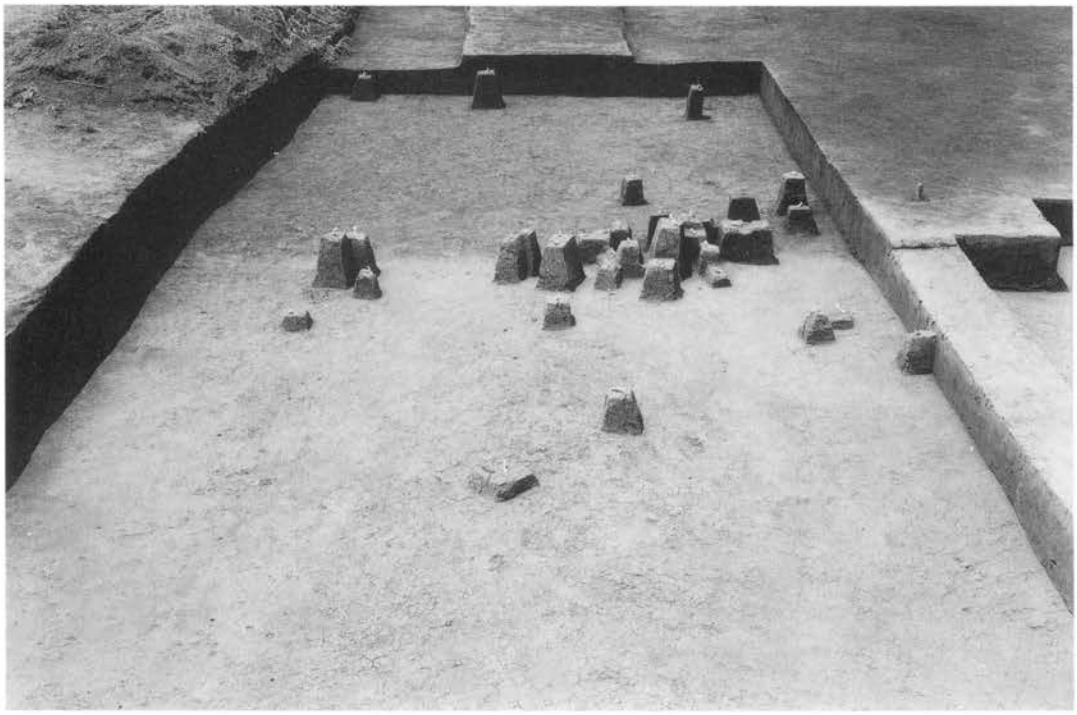
先土器時代No.2ユニット石器出土状況（近　景）

先土器時代No.2ユニット石器出土状況（北から）

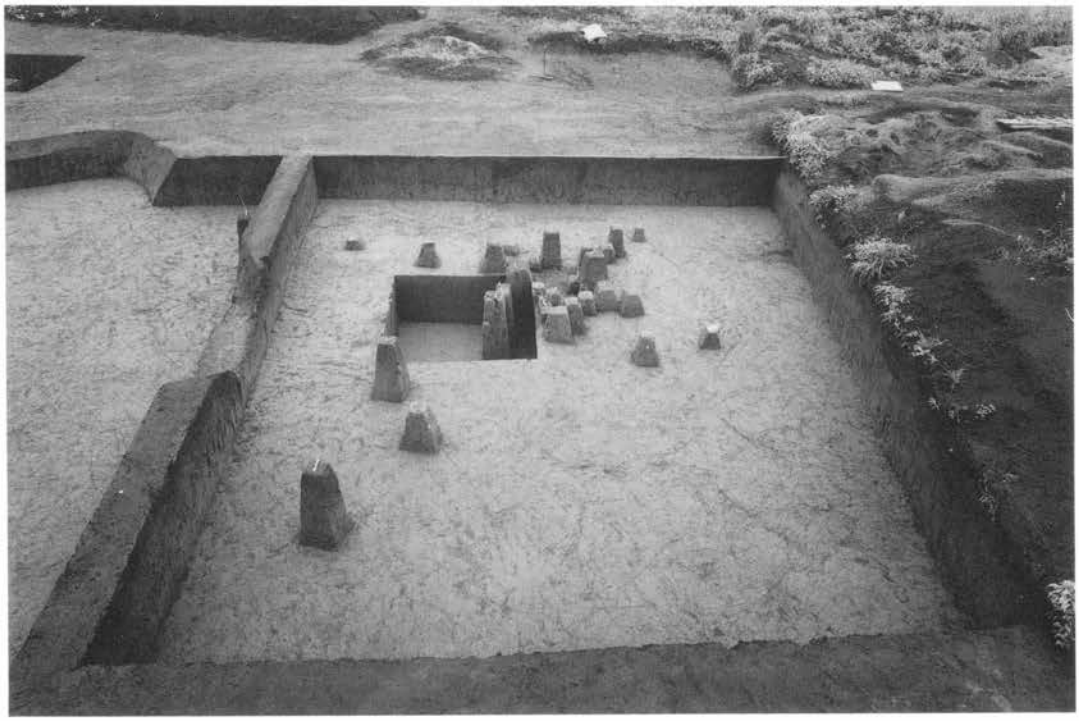
先土器時代 No.3 ユニット石器出土状況（南から）



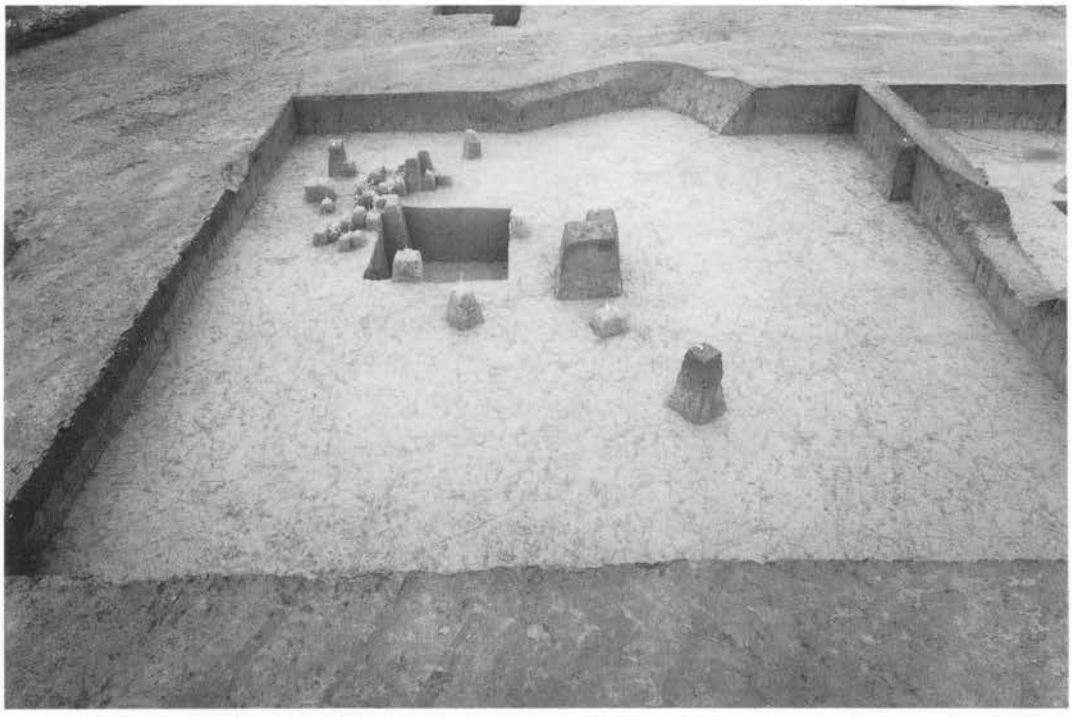
先土器時代 No.4 ユニット石器出土状況（南から）



先土器時代 No. 5 ユニット石器出土状況（東から）



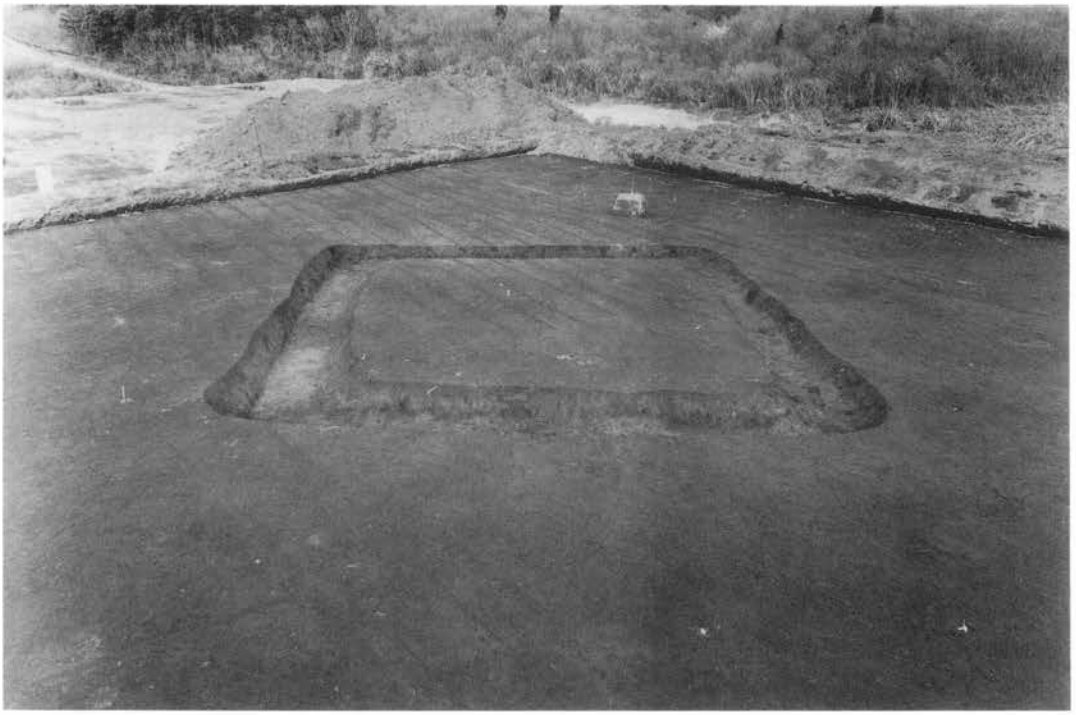
先土器時代 No. 6 ユニット石器出土状況（北から）



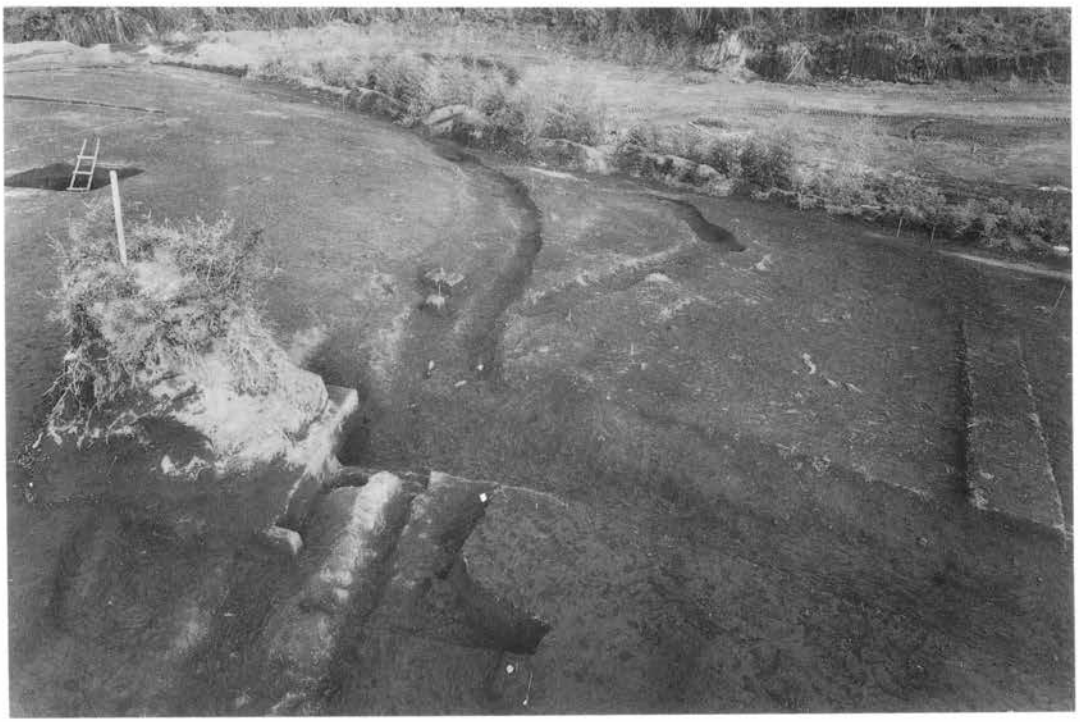
先土器時代No.7ユニット石器出土状況（北から）

縄文時代包含層遺物出土状況

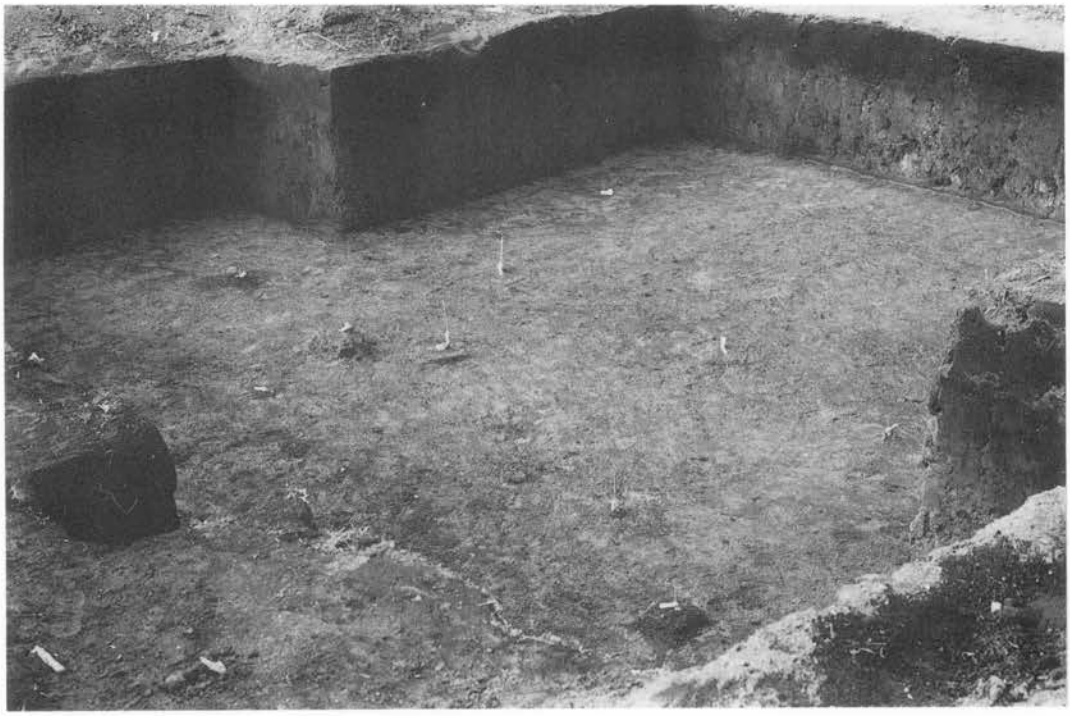
木戸場遺跡A地点



方形周溝



溝（M1・3・4）



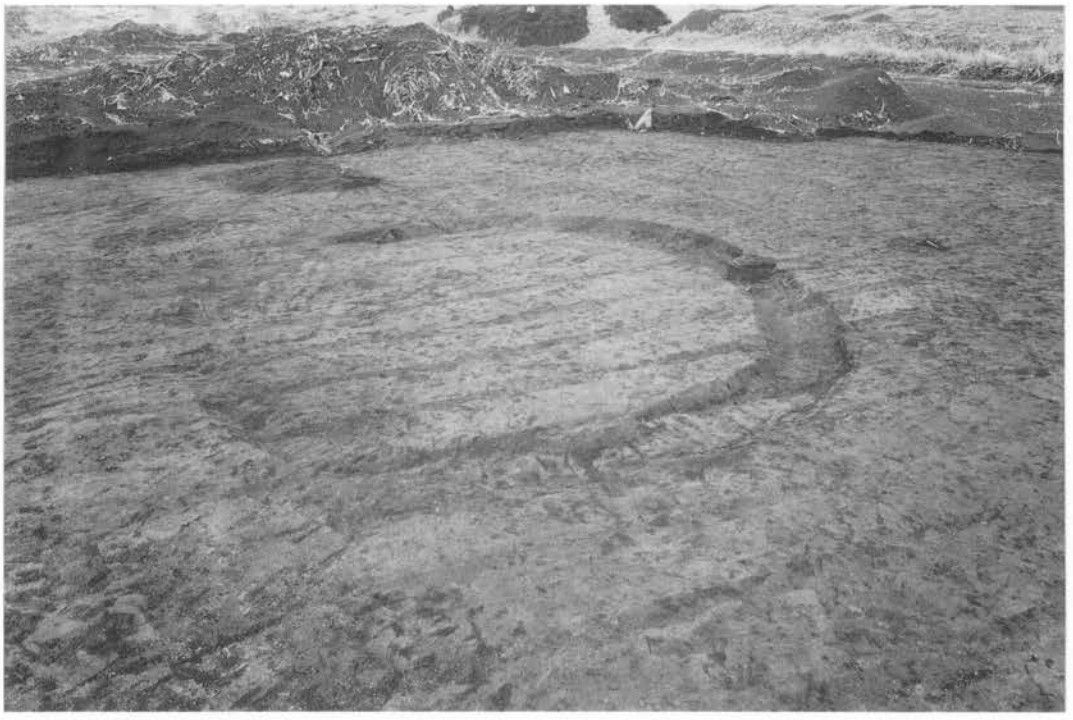
先土器時代第1ユニット石器出土状況（南東から）

先土器時代第2ユニット石器出土状況（西から）

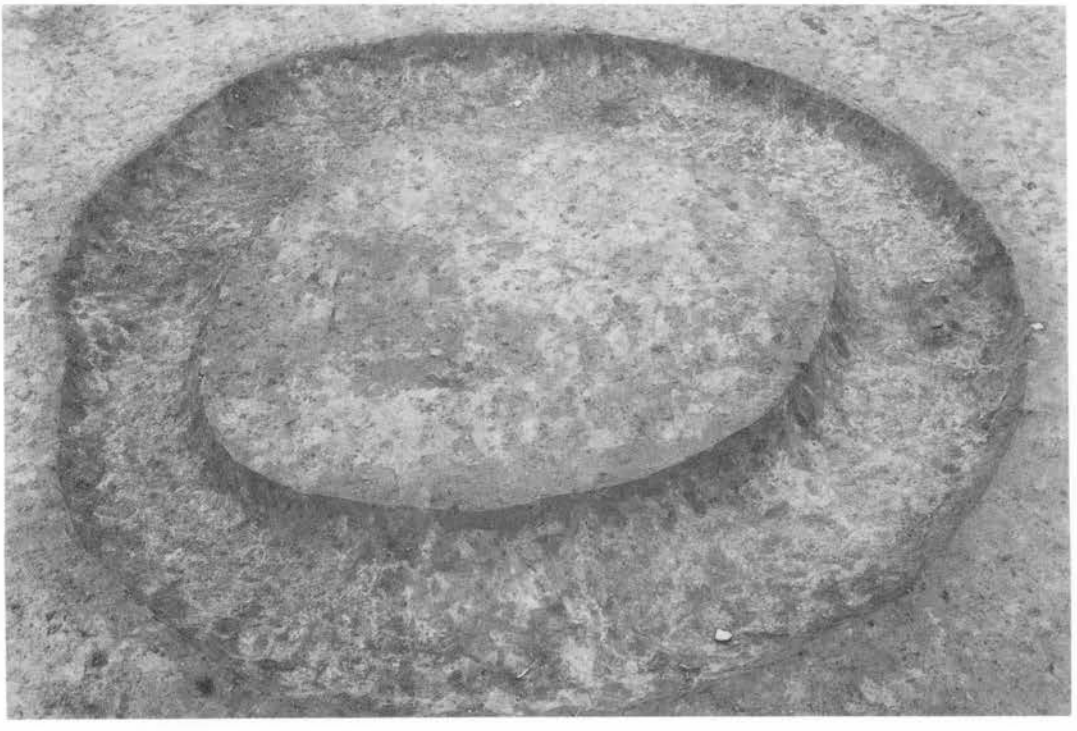
住居跡第1号

住居跡第2号

木戸場遺跡B地点



円形周溝（第1号）



円形周溝（第2号）

木戸場遺跡B地点

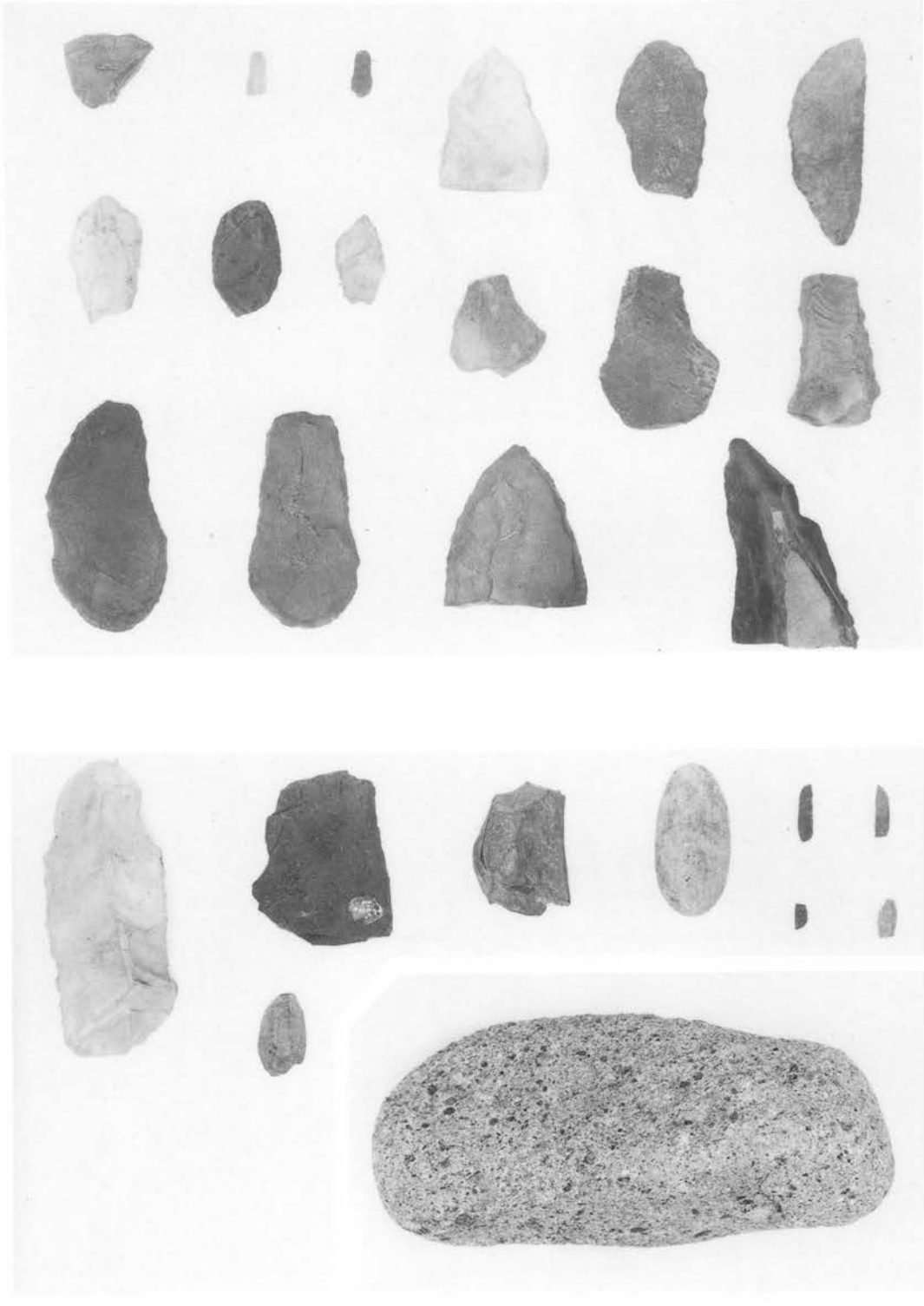
塚調査前

塚盛土状態

木戸場遺跡B地点

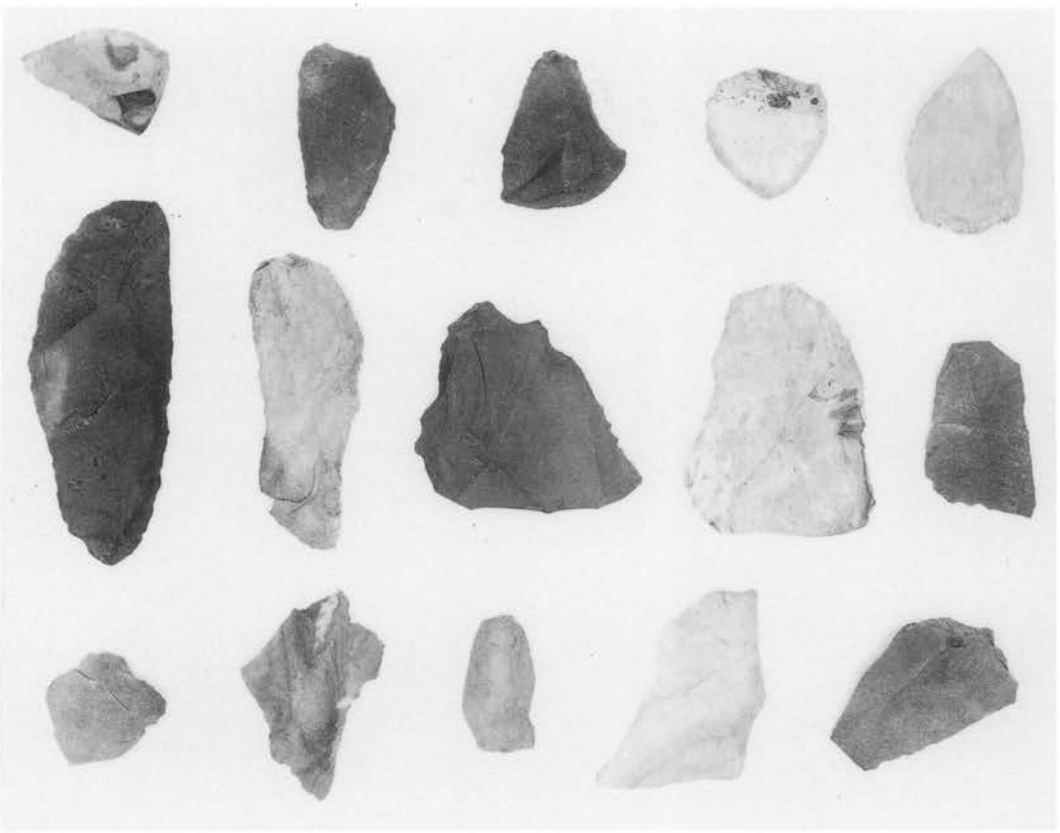
溝

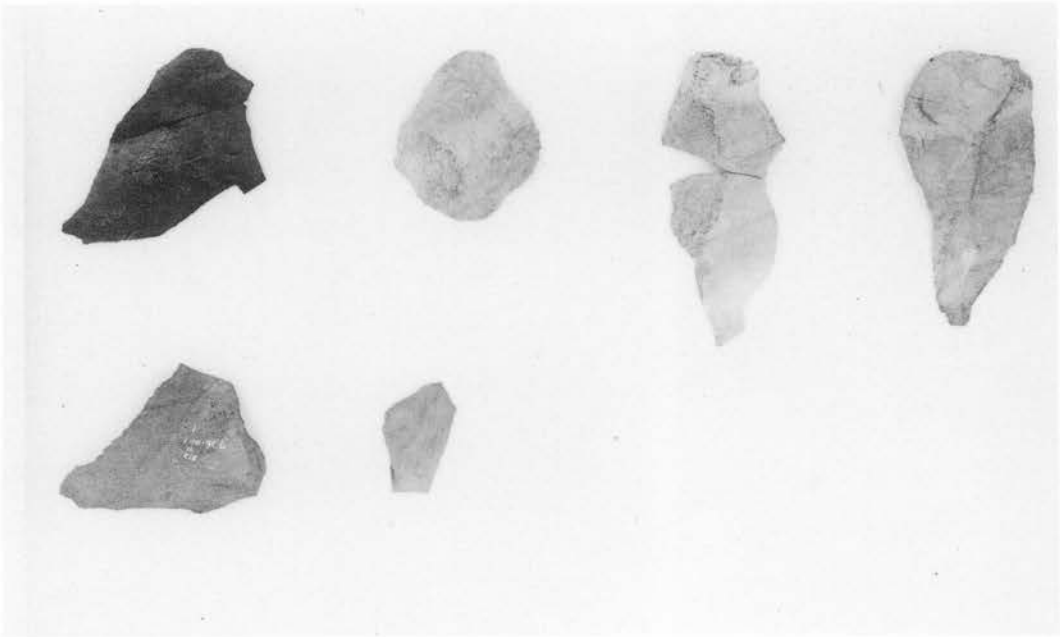
溝



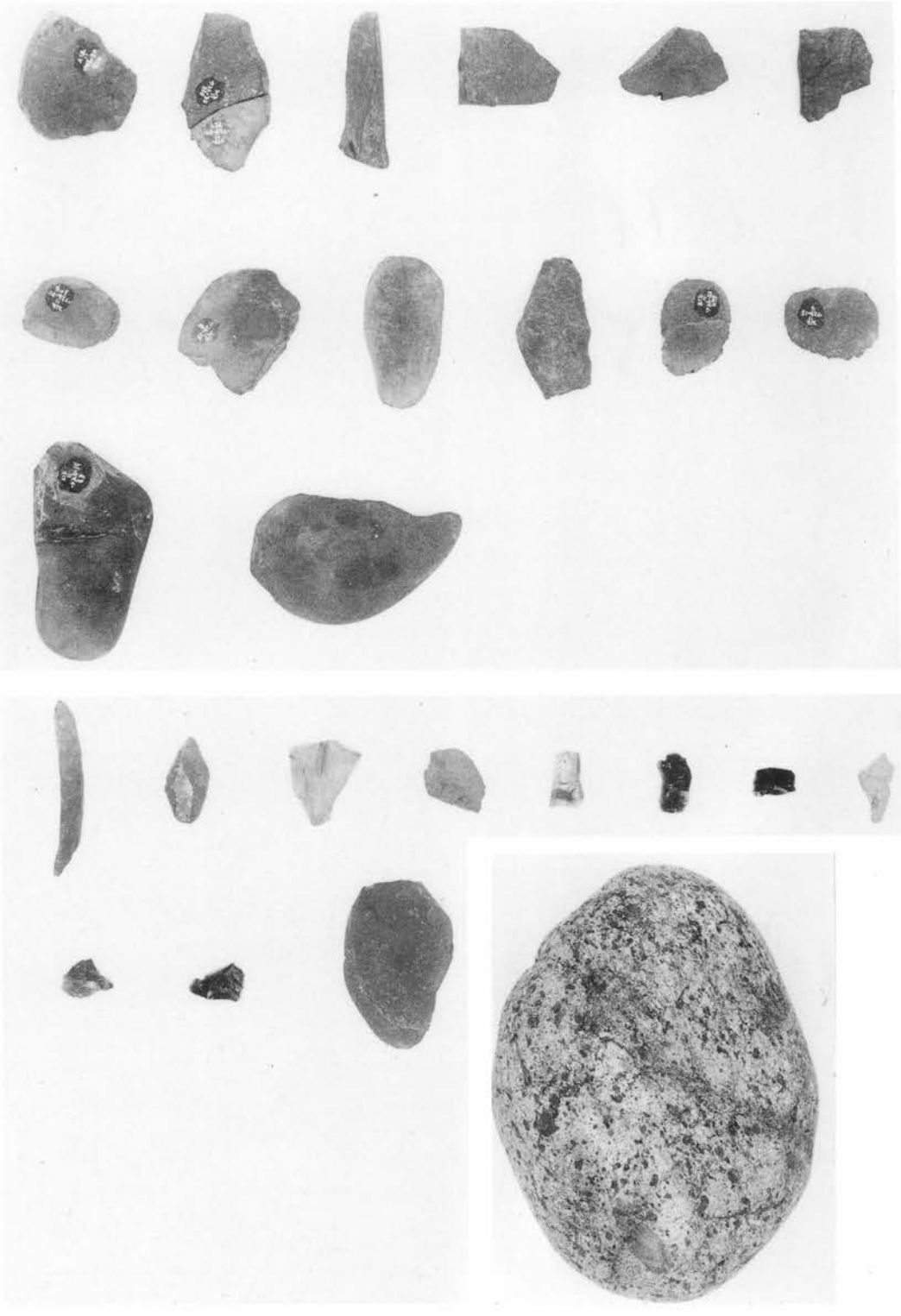
先土器時代石器（№1ユニット）

木戸場遺跡A地点

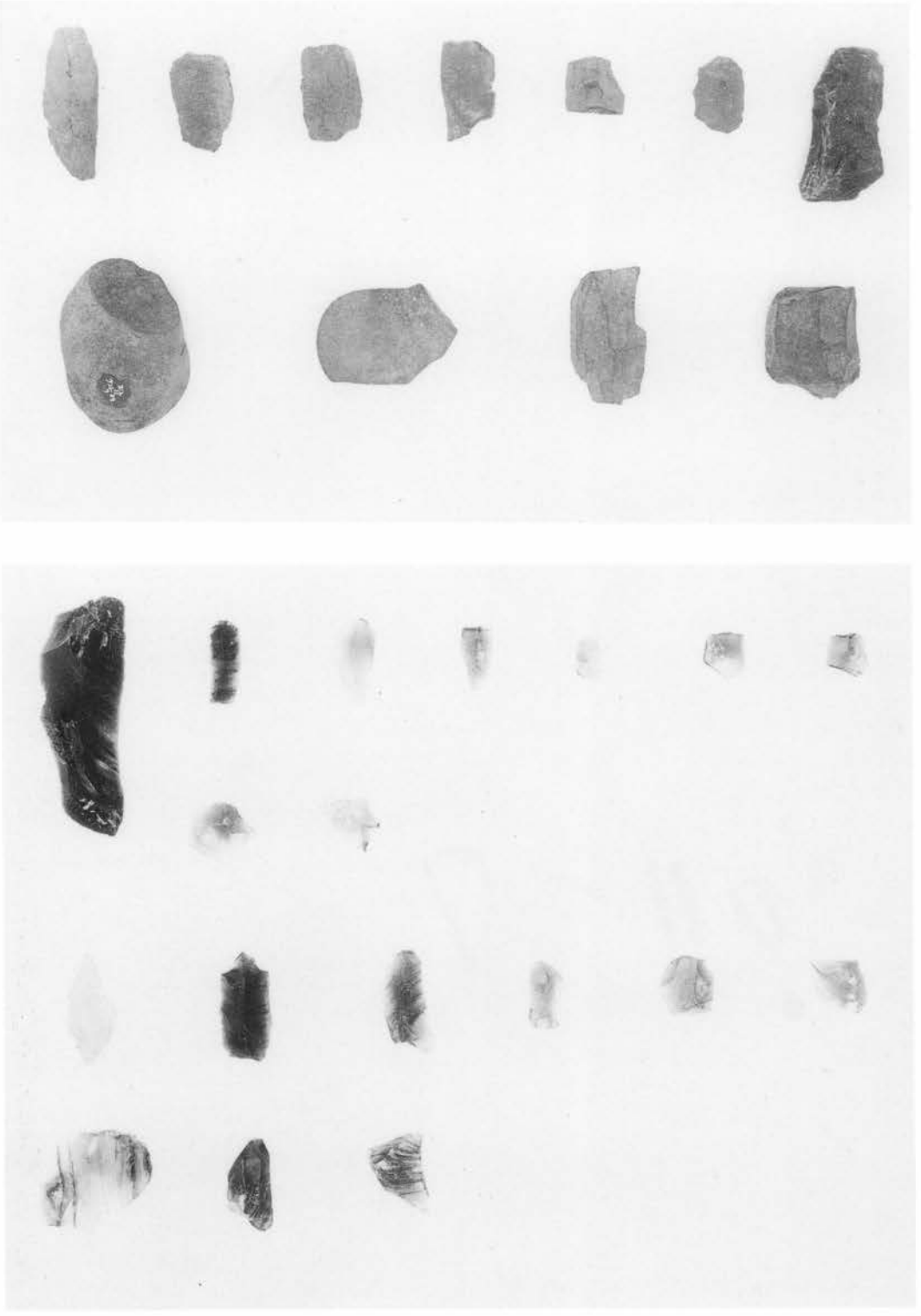




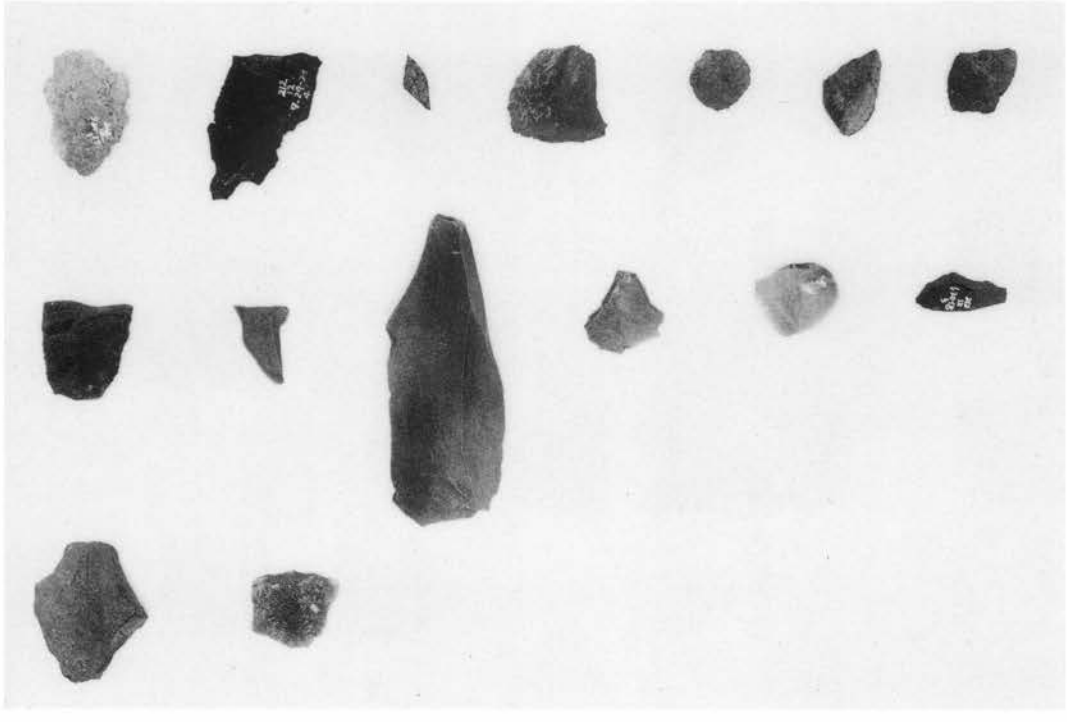
先土器時代石器（No.2ユニット）



先土器時代石器（上№3ユニット・下№4ユニット）

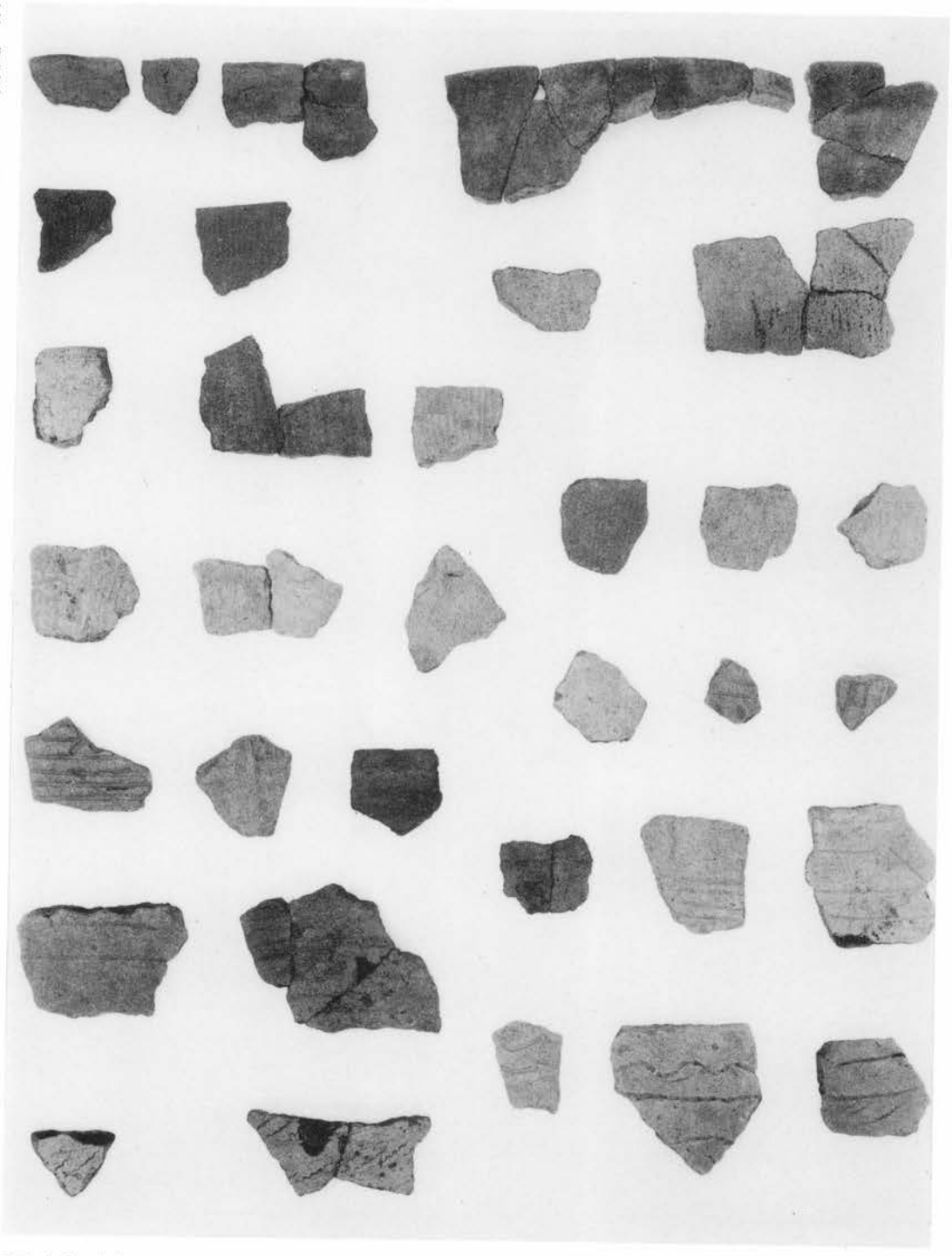


先土器時代石器（上№5ユニット・下－上№6ユニット・下－下№7ユニット）

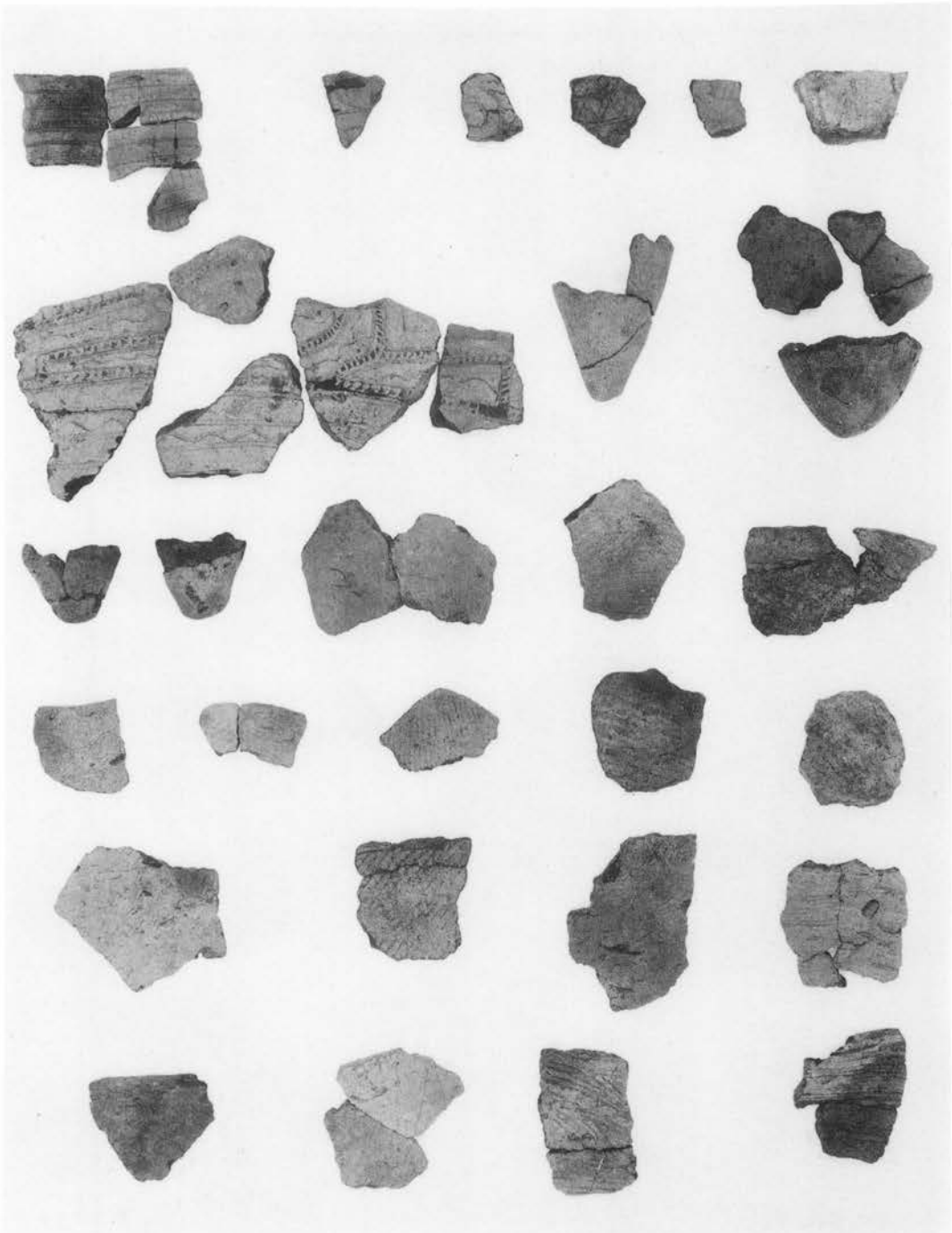


先土器時代石器

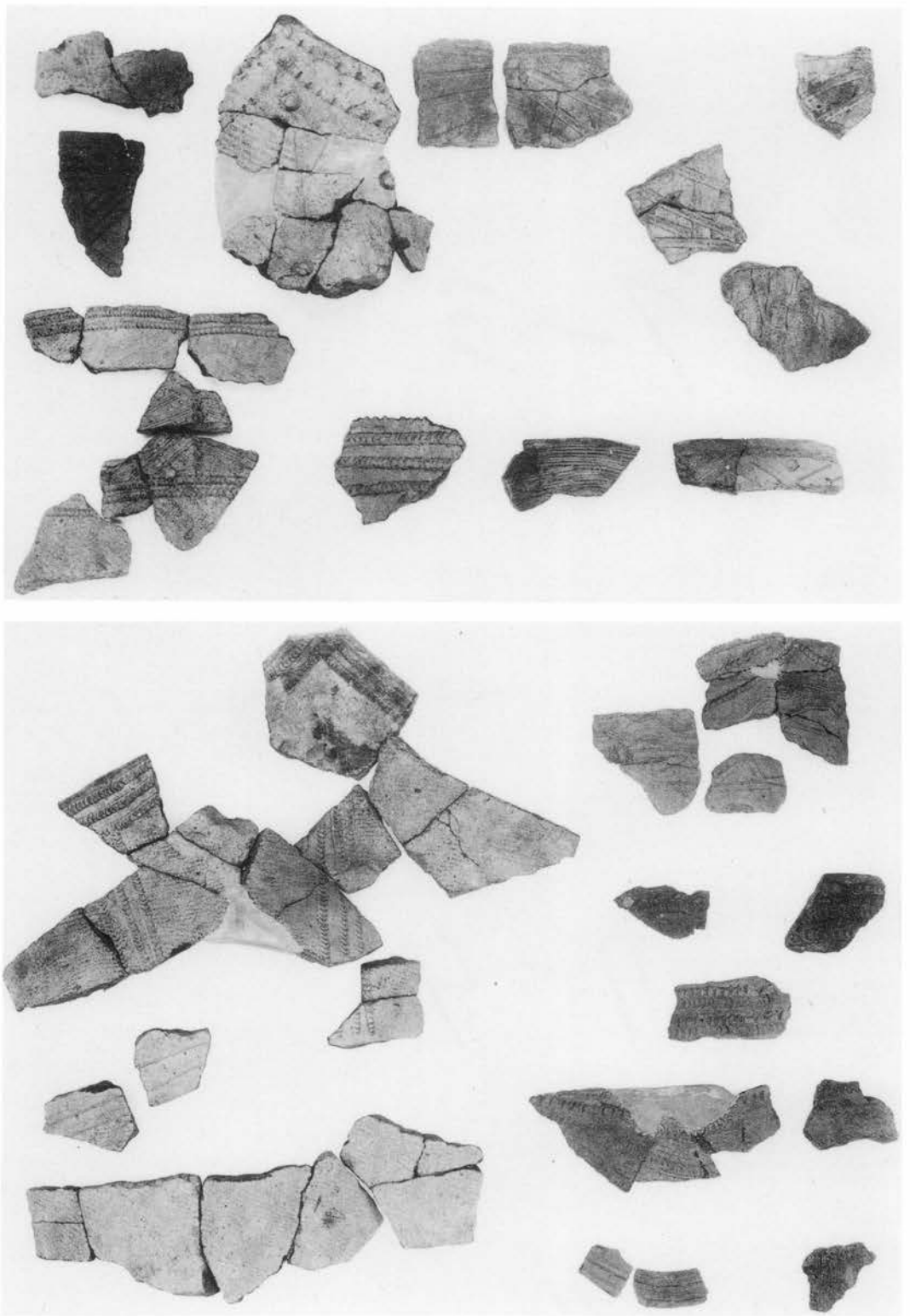
木戸場遺跡A・B地点



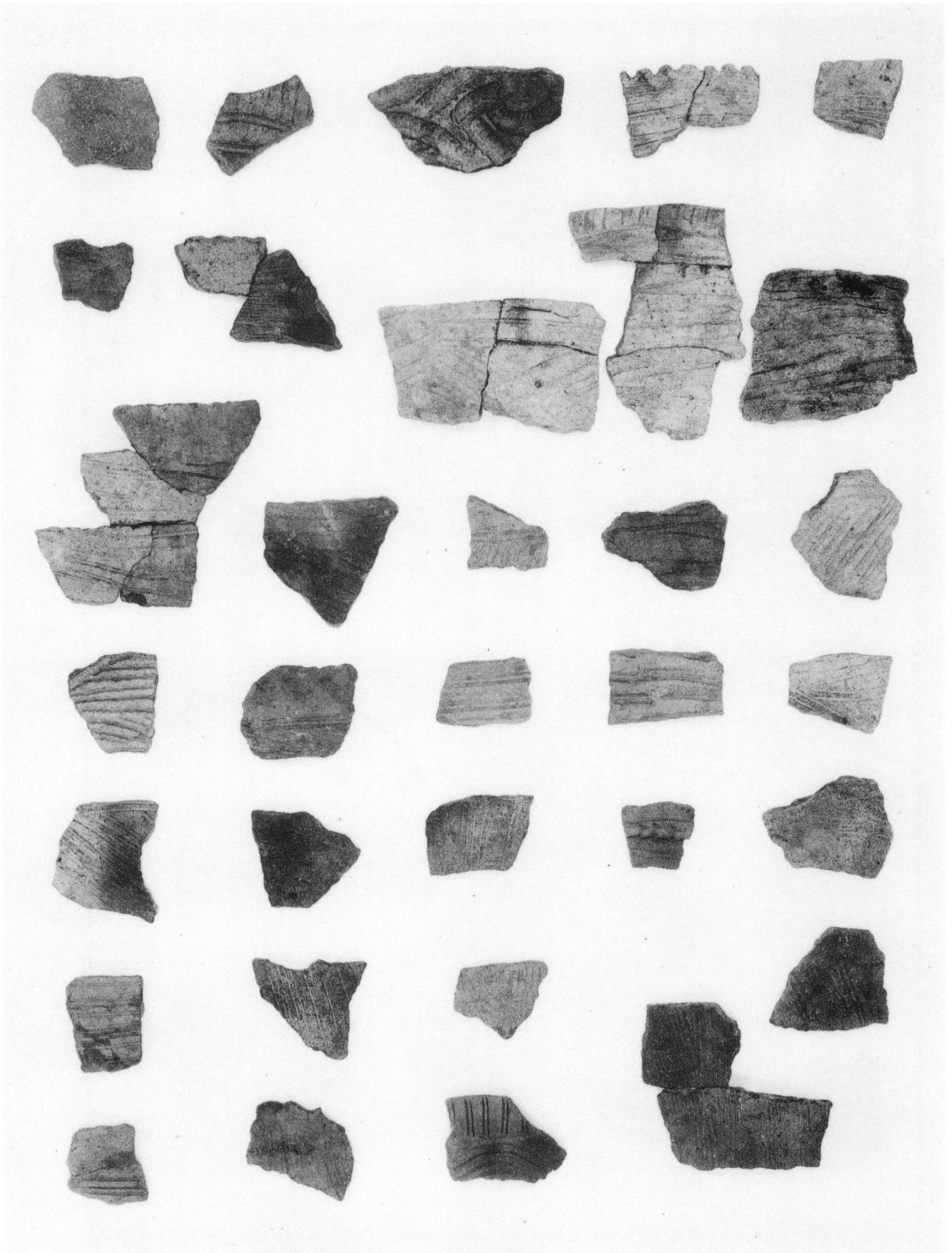
縄文土器 (1)



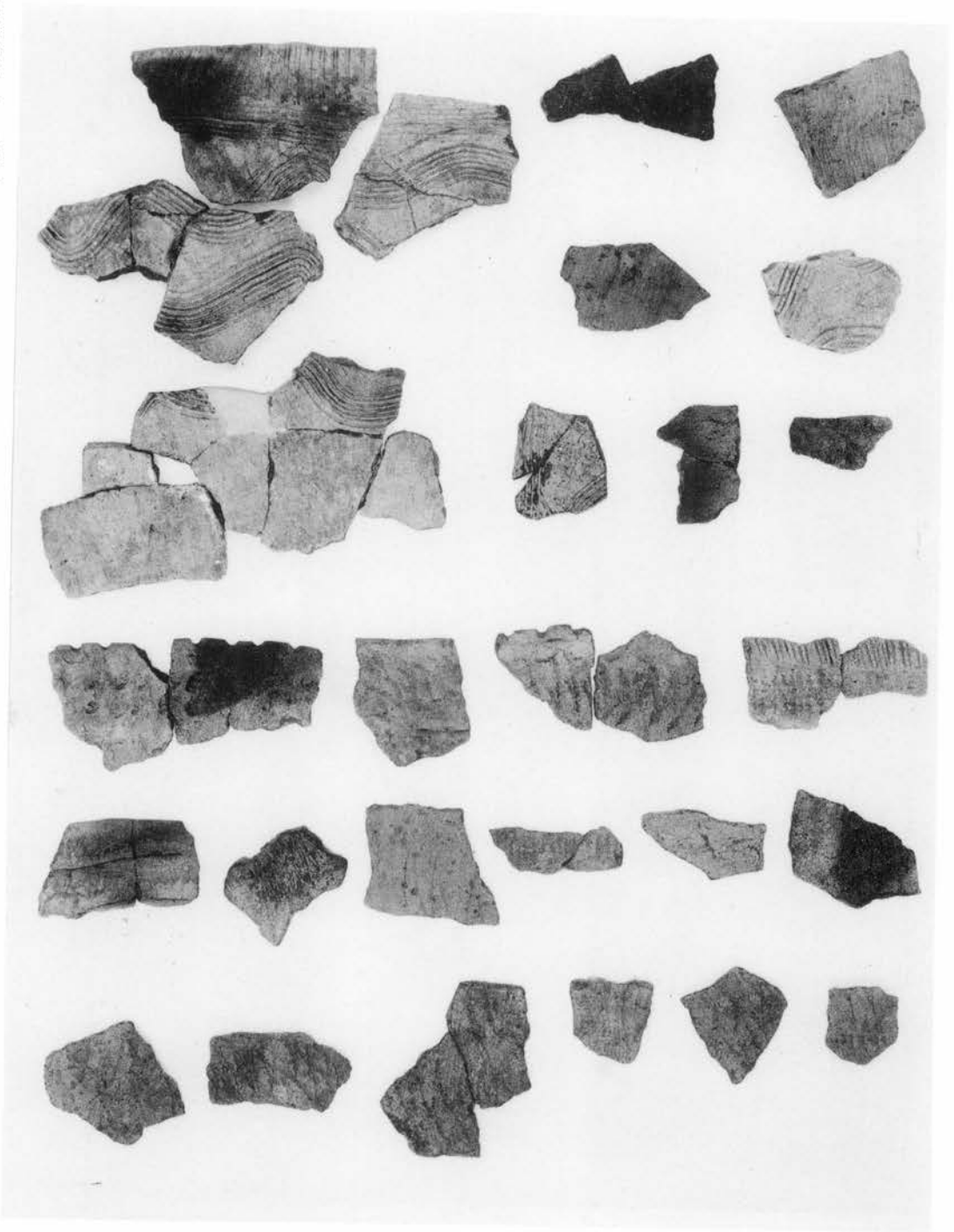
縄文土器　(2)



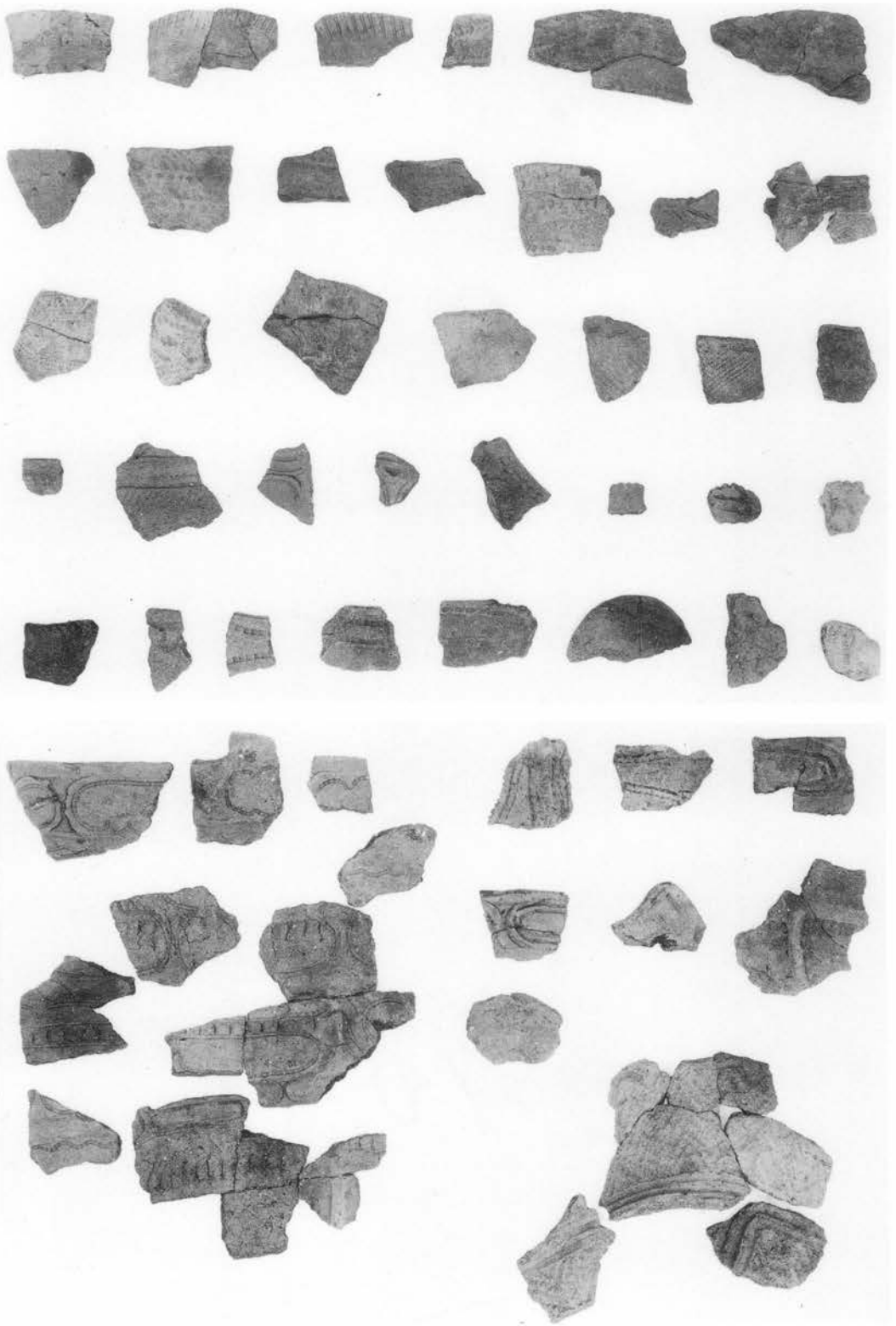
縄文土器 (3)



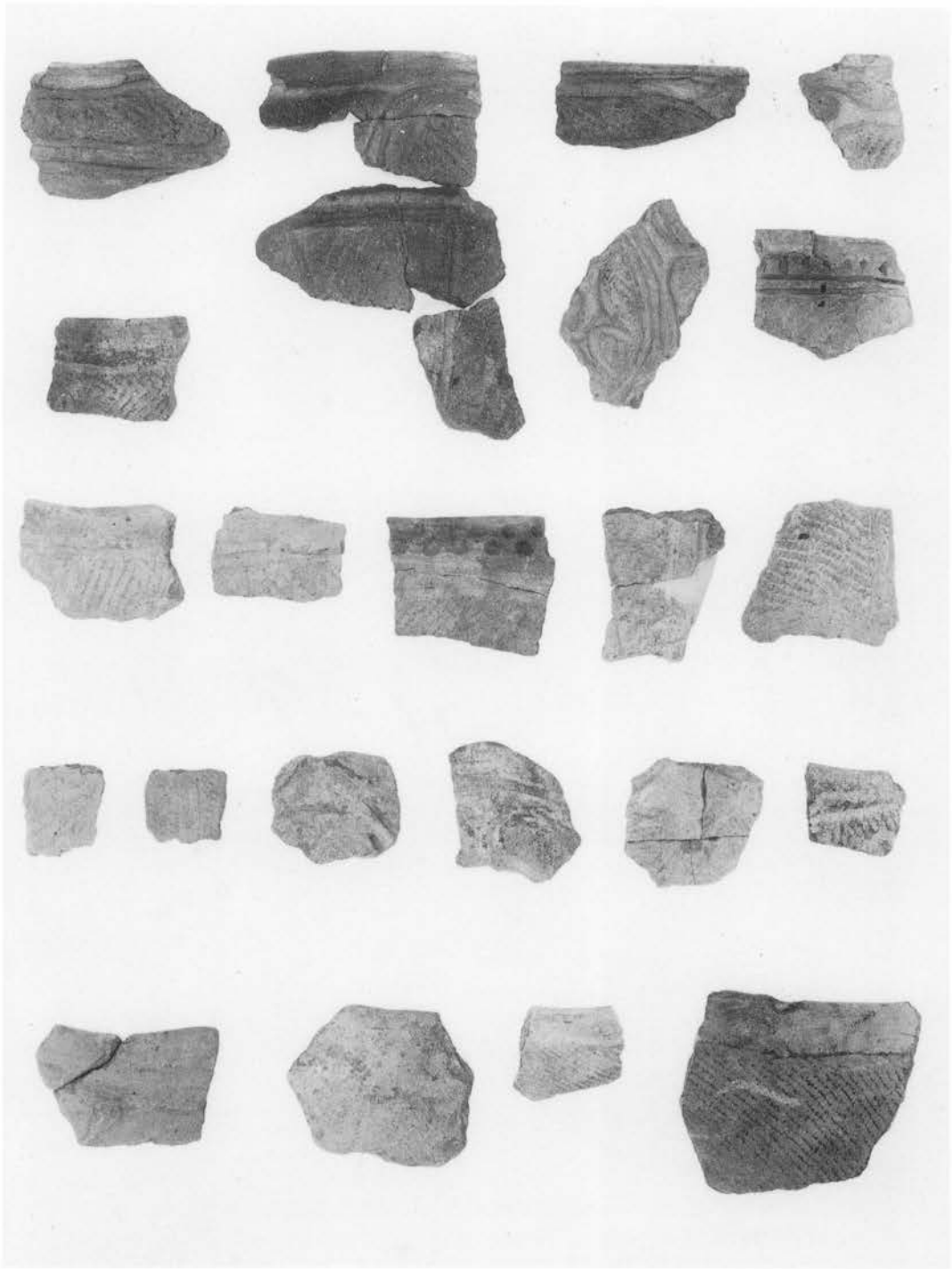
縄文土器 (4)



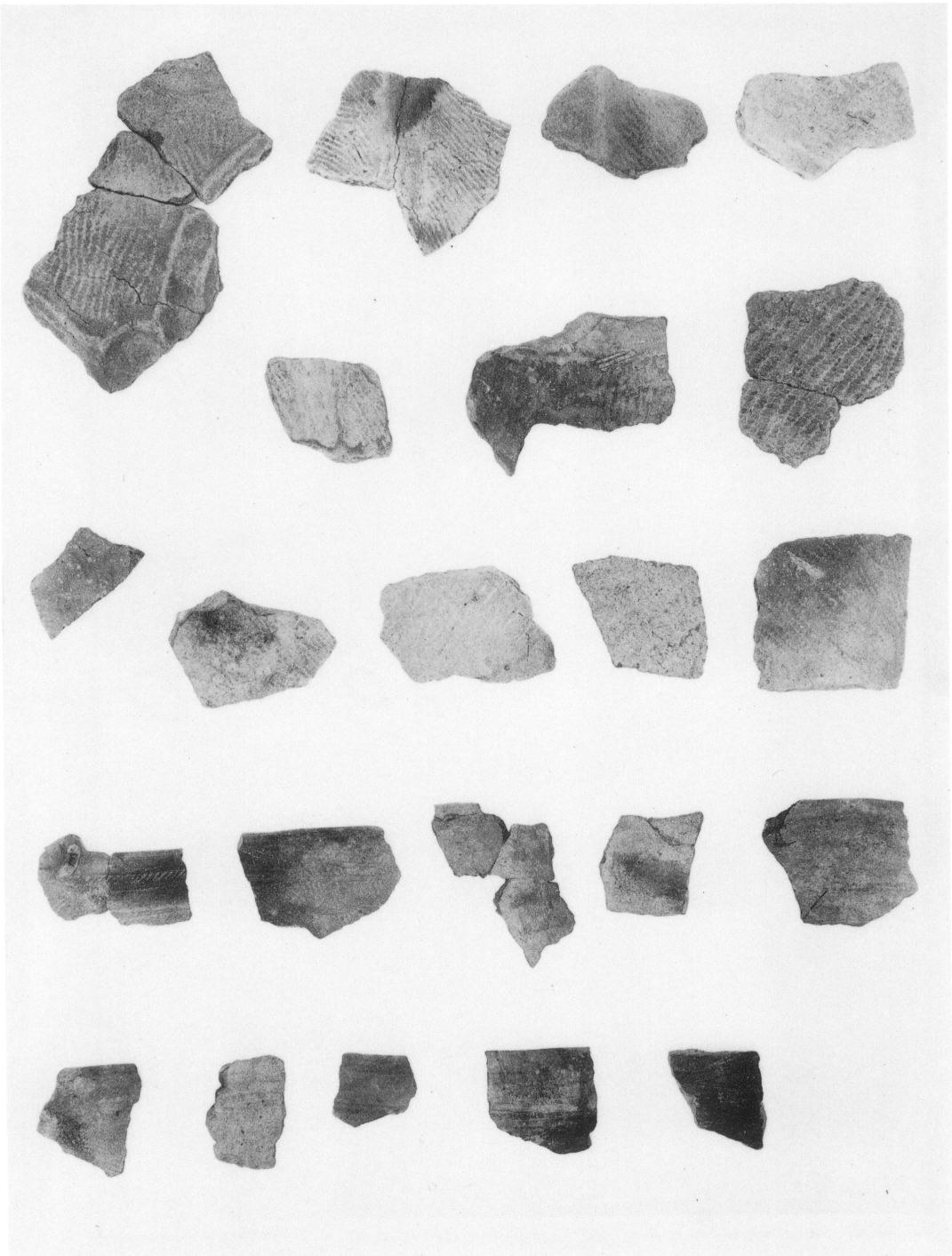
縄文土器　(5)



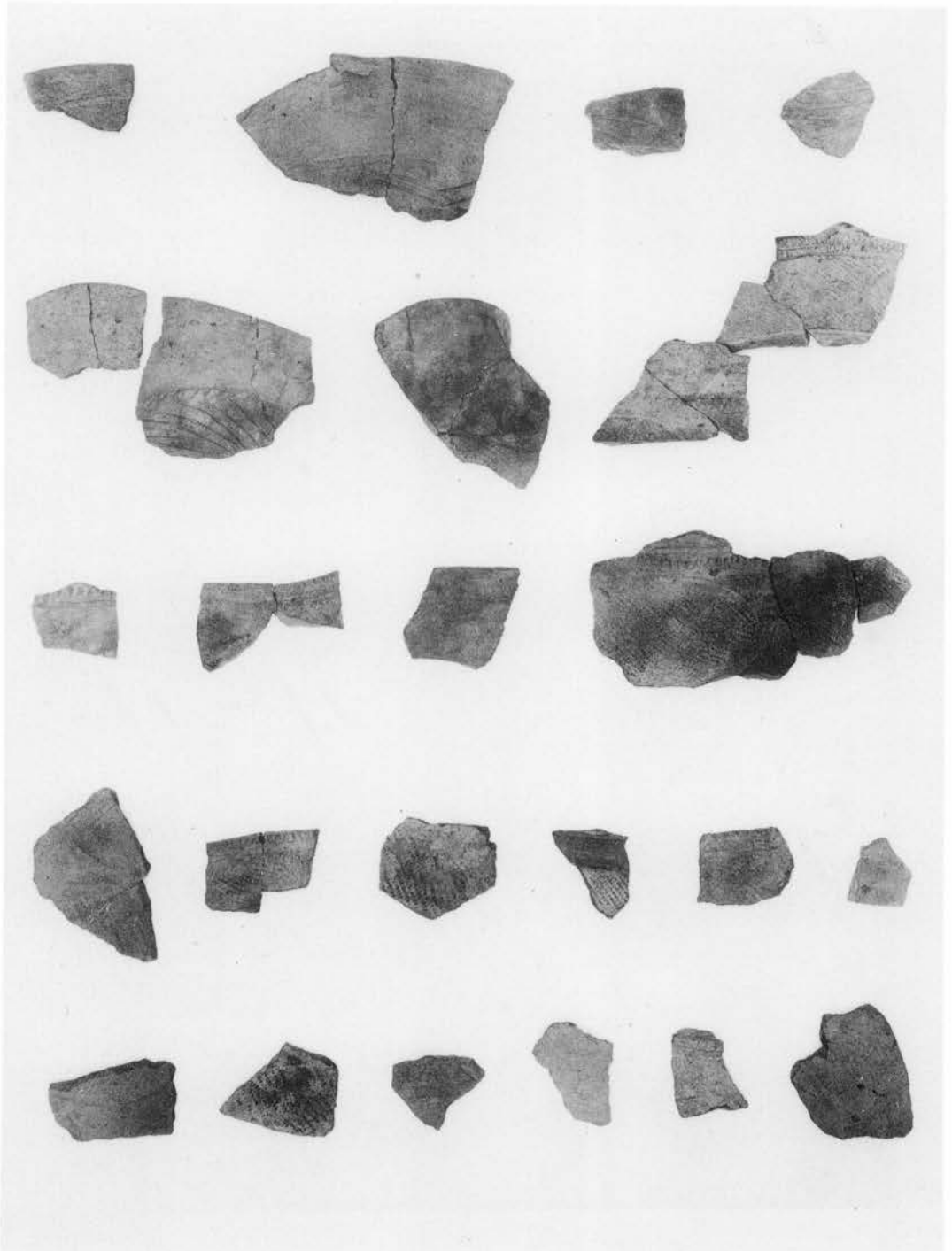
縄文土器 (6)



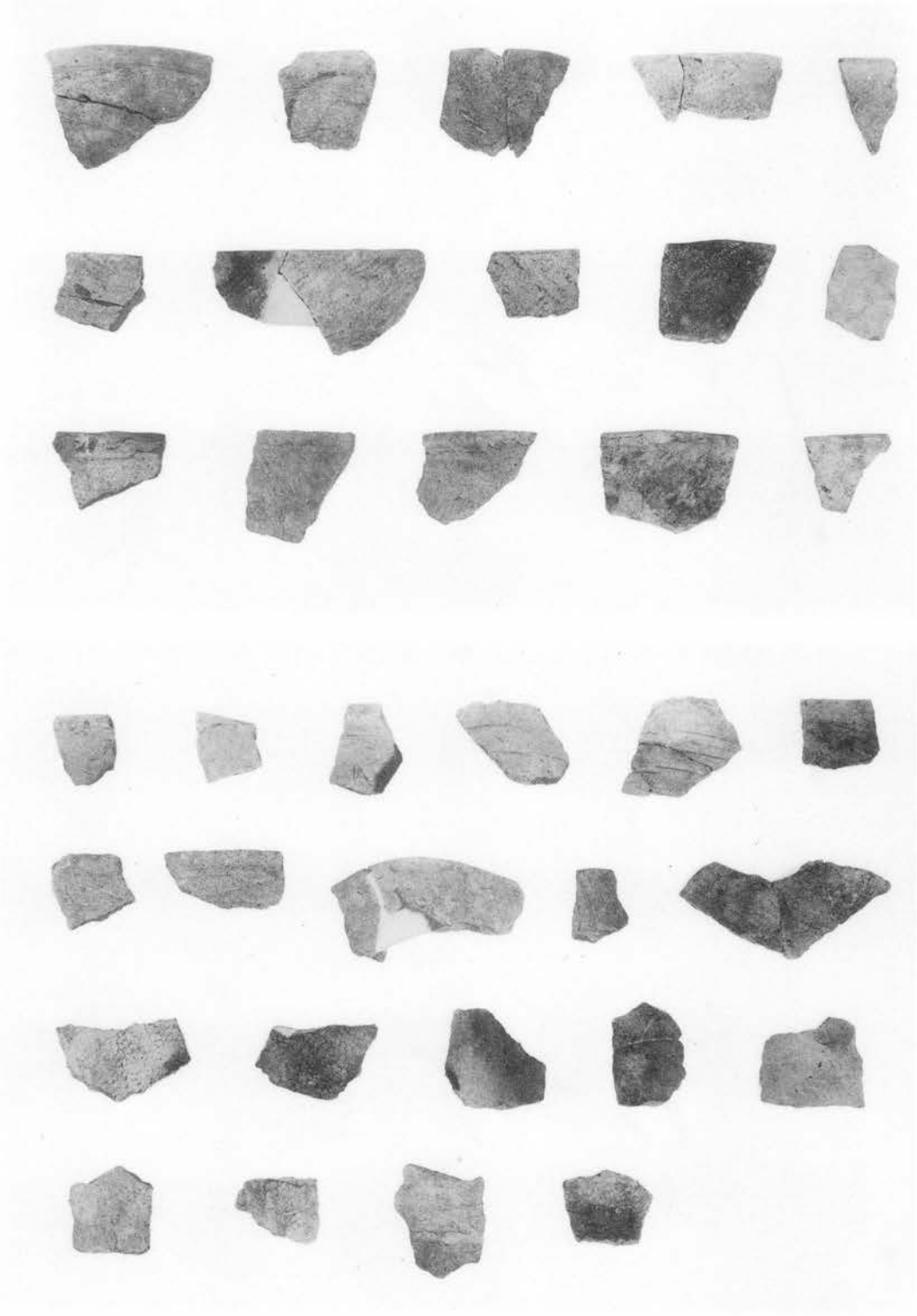
縄文土器 (7)



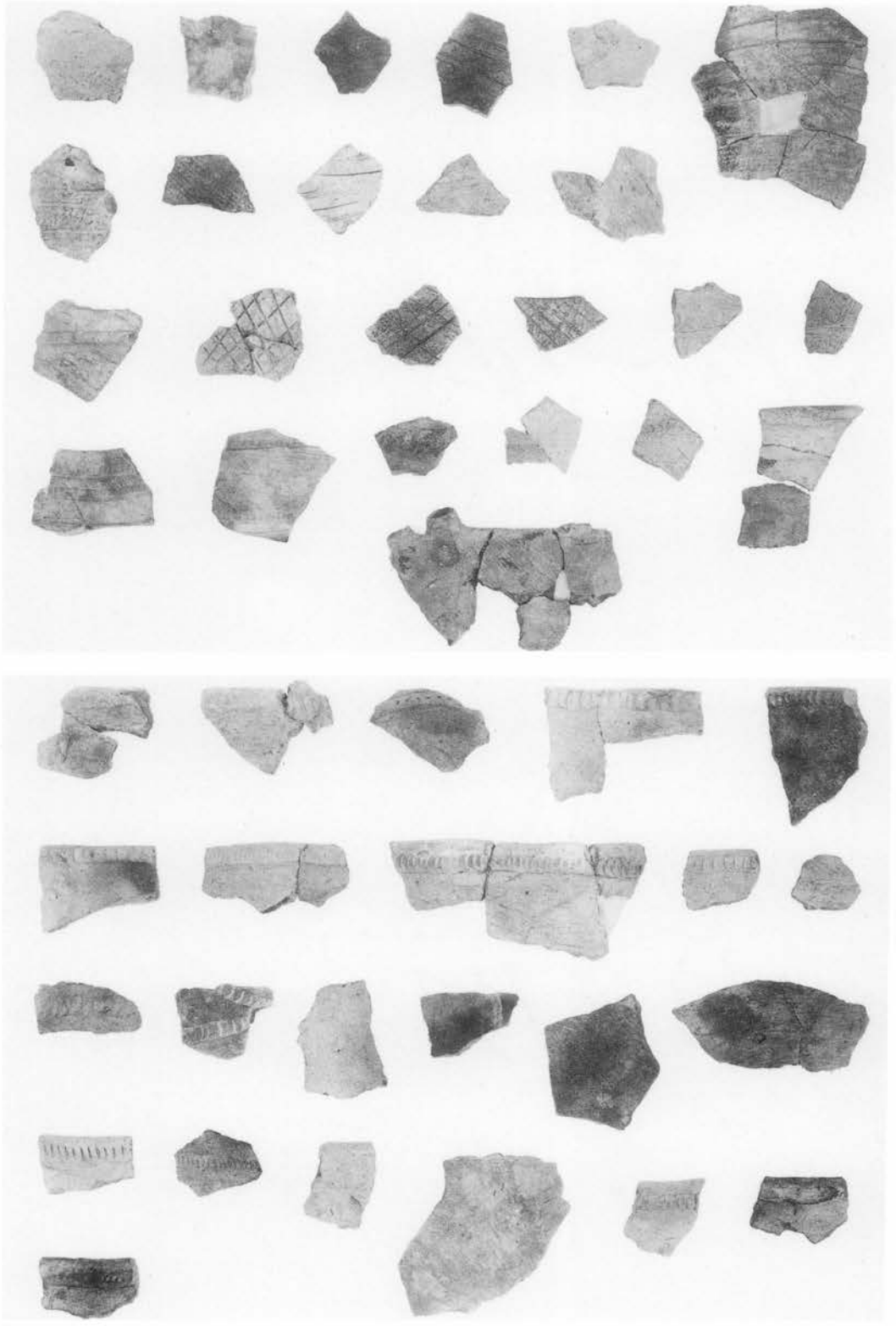
縄文土器　(8)



縄文土器　(9)

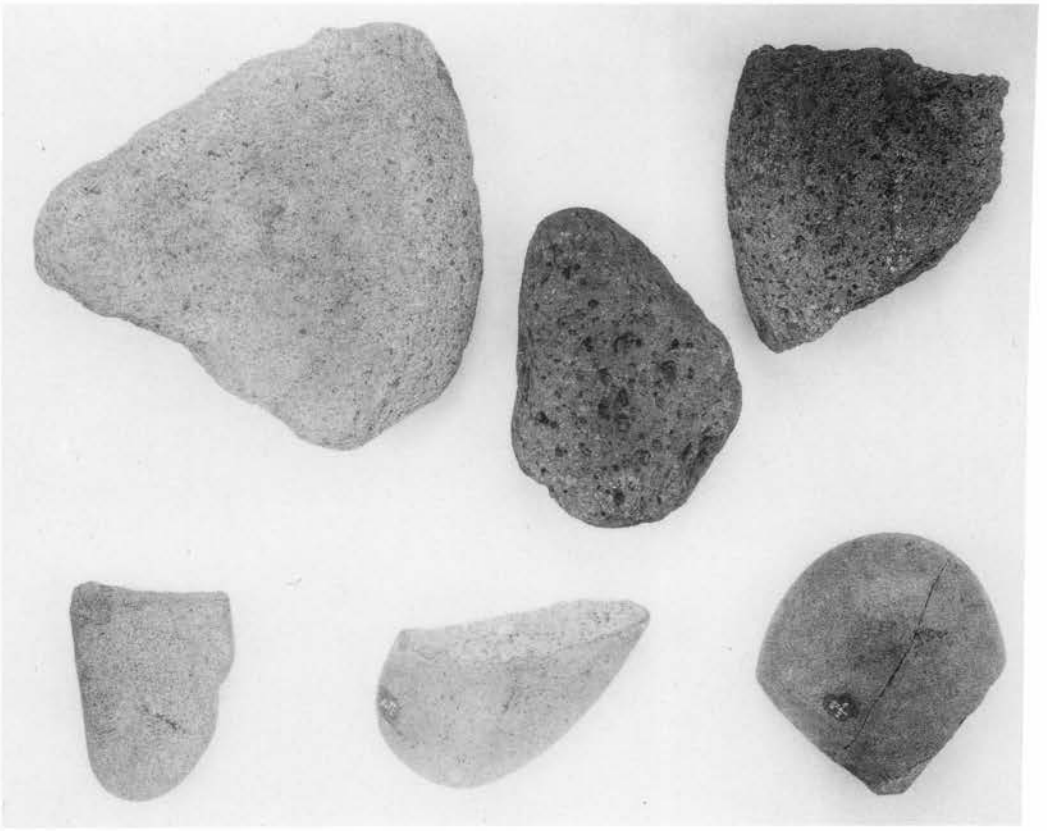


縄文土器 (10)



縄文土器 (11)

上　縄文土器　(12)　　下　縄文時代石器　(1)

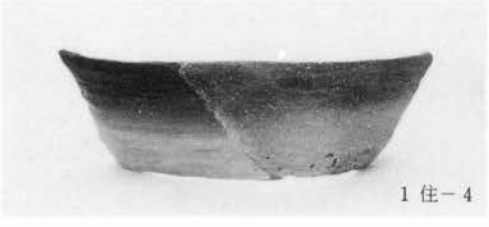


縄文時代石器　(2)

1住－1

1住－2

1住－3

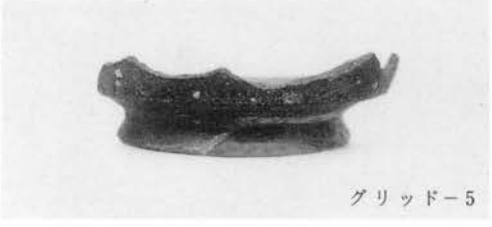

1住－4

2住－4

2住－5

2住－6

グリッド－1


グリッド－5

グリッド－7

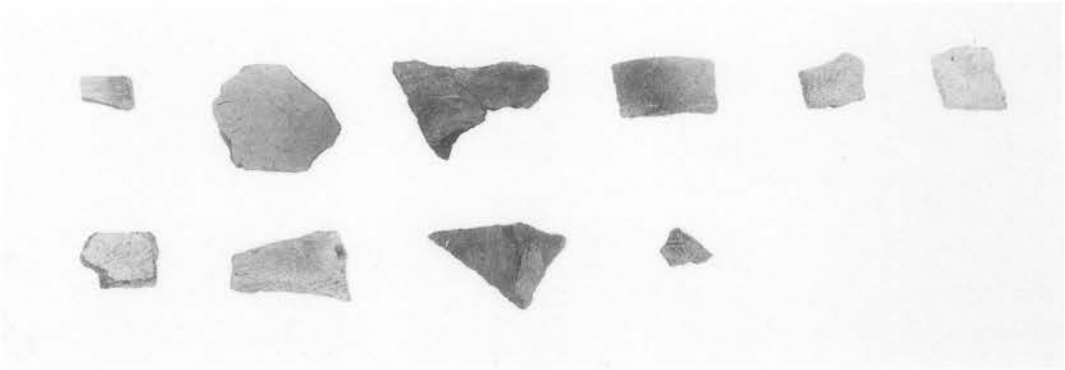
住居跡出土土器・グリッド出土遺物（土器・陶器）

古内遺跡

溝北東から

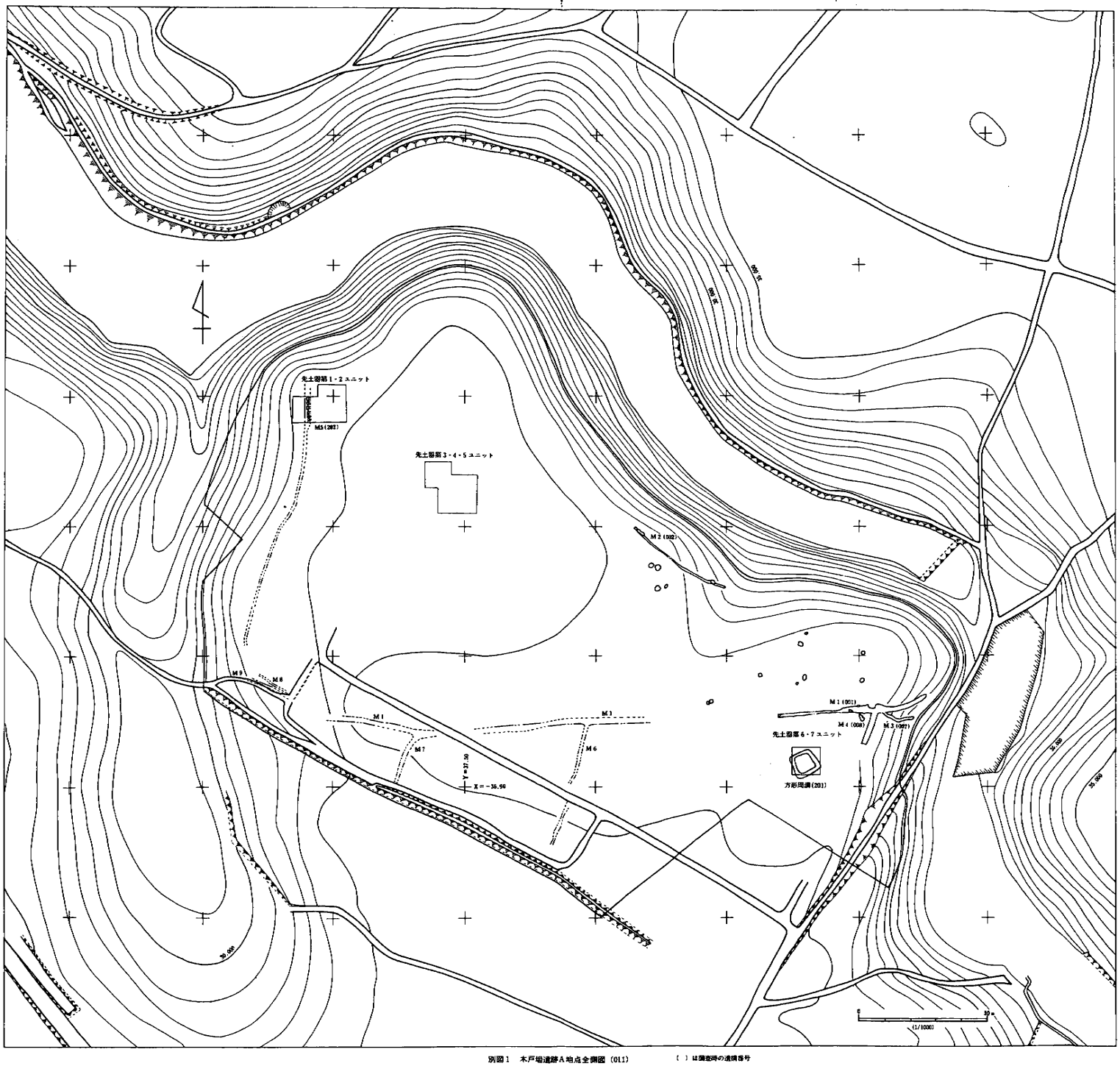
溝南西から

先土器時代石器

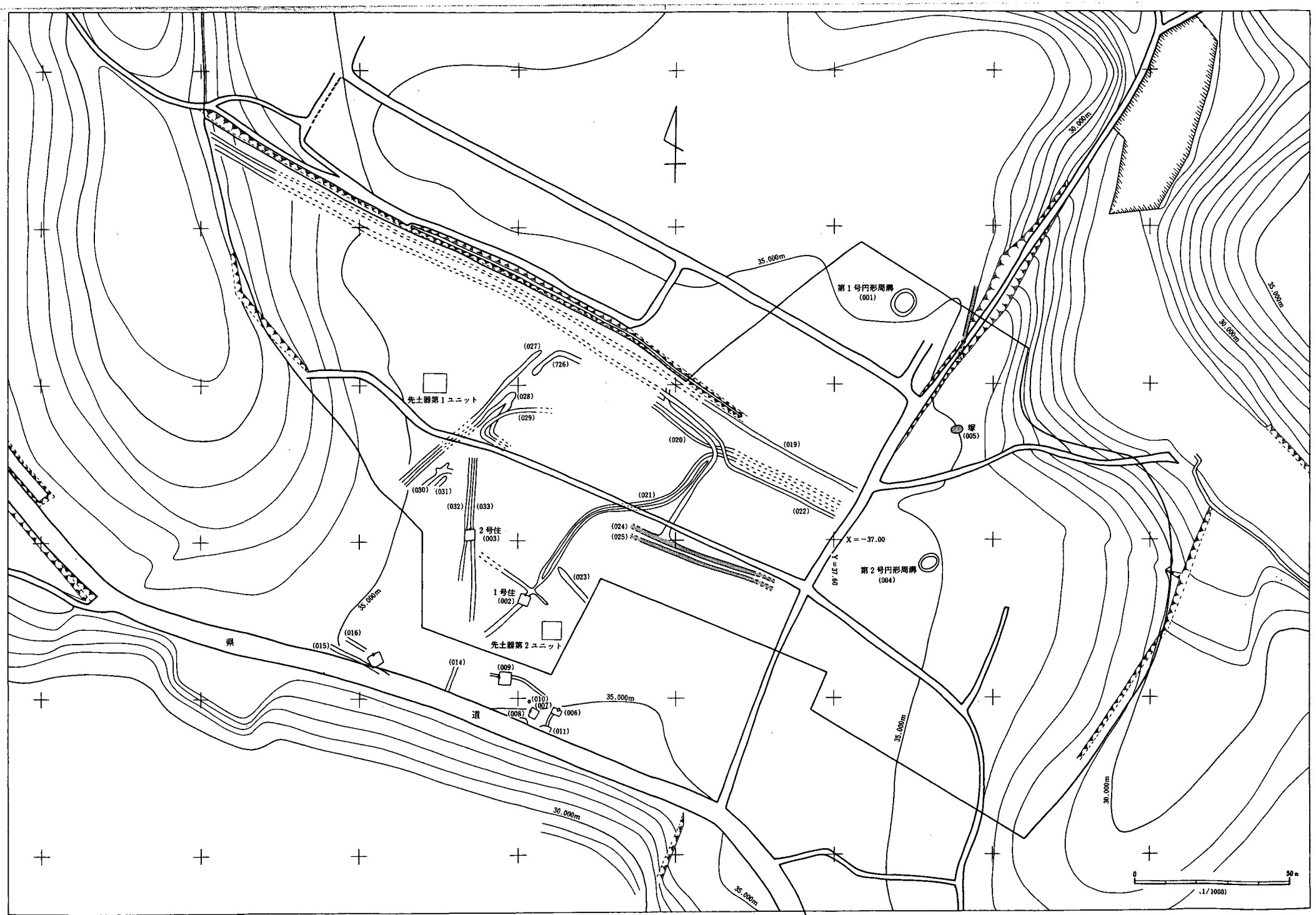


縄文土器

縄文時代石器



別図1　木戸垣遺跡A地点全測図（011）　　〔 〕は調査時の遺構番号



別図2　本戸場遺跡B地点全測図（012）　（　）は調査時の遺構番号

昭和62年 3 月20日　印 刷
昭和62年 3 月31日　発 行

佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡

発 行　千 葉 県 土 地 開 発 公 社
〒280 千葉市市場町 7 番 9 号
財団法人 千葉県文化財センター
〒280 千葉市葛城 2 丁目10番 1 号
TEL　0472 (25) 6 4 7 8(代)
印 刷　㈲ み つ わ 軽 印 刷 社